大正六年九月廿一日印刷
大正六年九月廿六日發行

第二輯奥付

非賣品

編輯者　東京市神田區通新石町十六番地　堀成之
發行者　東京市神田區通新石町十六番地　矢野惣次郎
印刷者　東京市神田區三崎町三丁目一番地　加藤保
印刷所　東京市神田區三崎町三丁目一番地　文明社

發行所　東京市神田區通新石町世界新聞社内　大日本風教叢書刊行會

經』に法藏比丘の四十八願の第三十五に云く。(一)「設し我佛を得んに、十方無量不可思議の諸佛の世界に、其女人ありて我名字を聞きて歡喜信樂して菩提心を發し女身を厭惡せんに、壽終るの後復女の像と爲らば正覺を取らじ」文。善導和尚の『觀念法門』に云く。「乃ち彌陀の本願力に由るが故に、女人佛の名號を稱へば正く命終の時即ち女身を轉じて男子と成ることを得。彌陀は手を接し菩薩は身を扶け、寶華の上に坐して佛に隨つて往生し佛の大會に入りて無生を證悟せん」文。又云く「一切の女人若し彌陀の(二)名願力に因らずんば、千劫萬劫恒河沙等の劫にも終に女身を轉じ得べからず等」文。此經文は彌陀の本願に依りて女身男子と成りて往生すべしと見えたり。又善導和尚の「彌陀の名願力に因らずんば」等の釋は、彌陀の本願によらずは女人の往生あるべからずと見えたり如何。答へて云く『雙觀經』には女人往生の文は有りといへども、『法華經』に說かるゝ所の川流江河の內或は衆星の光なり。末代後五百歲の女人彌陀の願力に依りて往生せん事は、大石を小船に載せ、大胄を弱兵に着せたらんが如し。

女人往生鈔 終

(一)設し。彌陀四十八願の中第三十五の願也。

(二)名願力。前の第三十五の願をいふ。

遠實成等をこまやかに說きて、男子善人菩薩等の成佛をば委細にあげず。人此を疑はざる故歟。然るに在世には佛の威德の故に成佛易し。佛の滅後には成佛は難く、往生は易かるべし。然りと雖も滅後には二乘少く善人少し、惡人のみ多かるべし。惡人よりも女人の生死を離れん事難し。然りと雖も正法一千年の女人は像法末法の女人よりも少しなをざりなるべし。諸經の機たる事も有りなん。像法の末末法の始めよりの女人は、殊に法器にあらず諸經の力及ぶべからず。但『法華經』許り助け給ふべし。故に(一)次上の文に十喩を擧ぐるに、川流江河の中には大海第一。一切の山の中には須彌山第一。一切の星の中には月天子第一。衆星と月との中には日輪第一等と述べて、千萬億の(二)已今當の諸經を擧げて江河諸山衆星等に譬へて、『法華經』をば大海須彌日月に譬へ。此の如く讃め已つて殊に後五百歲の女人に此經を授け給ひぬるは、五濁に入り正像二千年過ぎて末法の始めの女人は殊に諂曲なるべき故に、諸經の力及ぶべからず、諸佛の力も及ぶべからず。但『法華經』の力のみ及び給ふべき故に後五百歲の女人とは說かれたる也。されば當世の女人は『法華經』を離れては往生協ふべからざる也。問ふて云く(三)『雙觀

に能女作佛す。

(九)惡人。提婆品に提婆達多の作佛を說く。

(一〇)久遠實成。本門壽量品に釋尊久遠の昔に成佛せることを明す。

(一)次上。藥王品の文を指す。

(二)已今當。爾前經を已說、無量義經を今說、涅槃經を當說とす、法師品に法華經を已今當說最爲第一といへり。

(三)雙觀經。無量壽經のこと、上下二卷あれば名く。

人の文は佛說なれども心未だ顯れず。其故は正法千年は(一)四衆倶に持戒也。故に女人は(二)五戒を持ち比丘尼は五百戒を持ちて、破戒無戒の女人は市の中の虎の如し。(三)像法一千年には破戒の女人比丘尼是多く持戒の女人は是希れ也。末法に入りては無戒の女人是多し。されば末法の女人いかに賢しと申せども正法像法の女人には過ぐべからず。又(四)減劫になれば日日に貪瞋痴增長すべし。貪瞋痴强盛なる女人を『法華經』の機とすべくは末法萬年等の女人をも取るべし。貪瞋痴微薄なる女人を取らば正像の女人をも取るべし。今取り分けて後五百歳二千餘年の女人を佛の記させ給ふ事は第一の不審也。答へて云く此事第一の不審也。然りと雖も試みに一義を顯すべし。夫佛と申すは大丈夫の相を具せるを佛と名く。故に女人には大丈夫の相無し。されば諸の小乘經には一向に女人成佛を許さず。女人も男子と生れて後に成佛あるべしと說かる。諸の大乘經には多分は女人成佛を許るさず。少分成佛徃生を許せども又有名無實也。然りと雖も『法華經』は(五)九界の一切衆生、善惡、賢愚、有心無心(六)有性無性、男子女人一人も漏れなく成佛徃生を許さる。然りと雖も經文略を存する故に、(七)二乘作佛(八)女人(九)惡人の成佛、(一〇)久

(一)四衆。比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷也。即ち出家の男女と在家の男女をいふ。
(二)五戒。不殺生、不偸盜、不邪淫、不妄語、不飮酒の五戒。
(三)像法。佛滅後を正法、像法、末法の三時に分つ。正像各一千年末法萬年也。
(四)減劫。成住壞空の四劫の中住劫に二十小劫あり、一小劫に一增一減あり、人壽八萬歳より減して十歳に至る間を減劫といふ。
(五)九界。地獄、餓鬼、畜生、脩羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩をいふ。十界の中佛界を除く也。
(六)有性。有佛性、無佛性也。
(七)二乘作佛。法華迹門に舍利弗等の二乘に作佛の記を授く。
(八)女人。提婆品

界、無量世界、過去未來現在を掌の中に照知照見せさせ給ふが、後五百歳の南閻浮提の一切の女人『法華經』を一字一點も信じ行ぜば、(一)本時同居の安樂世界に往生すべしと、知見し給ひける事の貴く憑敷き事云ふ計りなし。女人の御身として漢の李夫人、楊貴妃、王昭君、小野小町、和泉式部と生れさせ給ひたらんよりも、當世の女人は喜ばしかるべき事也。彼等は寵愛の時にはめづらしかりしかども一期は夢の如し。當時は何れの惡道にか侍らん。彼の時は世は(二)あがりたりしかども、或は佛法已前の女人、或は佛法の最中なれども後五百歳の已前也。佛の指し給はざる時なれば覺束なし。當世の一切の女人は佛の記し置き給ふ後五百歳二千餘年に當りて是實に女人往生の時也。例せば冬は氷乏しからず、春は花珍しからず、夏は草多く、秋は菓多し、時節此の如し。當世の女人往生も亦此の如く、貪多く瞋多く愚多く慢多く嫉多きを嫌はず、何に況や此等の過なからん女人をや。問うて云く內外典の詮を承るに道理には過ぎず。されば天台釋して云く「明者は其理を貴び、暗者は其文を守る」文。釋の心はあきらかなる者は道理をたつとび、くらき者は文をまもると會せられて侍り。さればこそ此の(三)後五百歳若有女

(一)本時同居。本時久遠常住の娑婆同居の穢土即寂光の安樂世界也。

(二)あがり。上代の意。

(三)後五百歳。藥王品の文。

生の師と成らせ給ひぬれば我一人の財にあらず一切衆生の眼目也。而るを外道に云ひ甲斐なくあやまたせ奉る程ならば悔ゆるとも甲斐なけん。されば我を我と思はん一門の人人は出家して佛に付き奉れと仰せありしかば、千人の(一)釋子出家して佛に付き奉る。千人の釋子一一に淨飯王宮にまゐり案内を申して御門を出で給ひしに、九百九十八人は事故なく御門の橋を打ち渡りき。提婆達多と瞿伽利とは橋にして馬倒れ冠脱けたりき。相人これを見て此二人は佛の釋教の中に利益あるべからず。還つて佛教によつて重罪を造りて阿鼻地獄に墮つべしと相したりき。又(二)震旦國には周の第十三平王の御宇に髮を被り身赤裸なる者出で來れり。相人相して云く、百年に及ばざるに世將に亡びなんと。此等の先相に寸分も違はず、(三)此遂に瞿伽利現身に阿鼻地獄に提婆と倶に墮ち、周の世も百年の内に亡びぬ。(三)此等は皆佛教の智慧を得たる人は一人もなし。但(四)二天(五)三仙(六)六師と申す外典、三皇五帝の儒家共也。(七)三惑一分も斷ぜず、(八)五眼の四眼既に缺けて但肉眼計り也。一紙の外をも見ず一の法も推し當てん事難かるべし。然りと雖も此等の事一分も違はず。而るに佛は(九)五重の煩惱の雲晴れ、五眼の眼曇りなく、三千大千世

王は南閻浮提の一洲を領す、輪寶を持じて一切を威服すれば名く。
(一)釋子。佛は釋迦を姓とすれば、佛弟子を釋子といふ。
(二)震旦。支那のこと。
(三)此等。相人を指す。
(四)二天。外道の神、摩醯首羅天、と毘紐天、と也。
(五)三仙。外道の學、迦毘羅、漚樓僧伽、勒娑婆也。
(六)六派。波羅門の六派。
(七)三惑。見思、塵沙、無明、次の如く空、假、中の理を障ふ。
(八)五眼。肉眼、天眼、法眼、慧眼、佛眼。
(九)五重。五住地の惑のこと、見一切處假地、欲愛佐地、色愛住地、毛色愛住地、毛明住地の五惑也。

二處に有り。一處には後五百歲に『法華經』の(一)南閻浮提に流布す可き由を說かれて候。一處には後五百歲の女人の『法華經』を持ちて、(二)大通智勝佛の第九の王子阿彌陀如來の淨土、(三)久遠實成の釋迦如來の分身い阿彌陀の本門(四)同居の淨土に往生すべき樣を說かれたり。抑佛には偏頗御坐すまじき事とこそ思ひ侍るに、後五百歲の男女ならば男女にてこそ御坐す可きに、餘處に後五百歲の男女『法華經』を持ちて、往生成佛す可き由の委細なるに、重ねて後五百歲の女人の事を說かせ給へば、女人の御爲めには秀逸く聞ゆれども、男子の疑ひは尙ある歟と覺ゆる故に、佛には偏頗の御坐すかと、賴もしく無き邊もあり旁疑はしき事也。然りと雖も力及ばず。後五百歲二千餘年已後の女人は『法華經』を行じて、阿彌陀佛の國に往生すべしとこそ御覽じ侍りけめ。佛は悉達太子として御坐しゝが、十九の御出家也。三十の御年佛に成らせ給ひたりしかば、迦葉等の大德(五)通力の人人千餘人付きまゐらせたりしかども、猶(六)五天竺の外道怨み奉りて危ふかりしかば、淨飯大王仰せありしやうは、悉達太子をば位を讓り奉りて(七)轉輪聖王と仰ぎ奉らんと思召しゝかども、其甲斐もなく出家して佛となり給ひぬ。今は又人天一切衆

(一)南閻浮提。須彌の四洲の一、即ち吾等所居の土也。

(二)大通。法華迹門に大通佛の第九の王子として阿彌佛を說けり。

(三)久遠。法華本門より見れば阿彌陀佛も亦久遠實成の釋尊の分身散體の中の一佛となる也。この二は法華經の彌陀と爾前經の彌陀とを簡ぶ也。

(四)同居。四土の一。この娑婆世界これ也。本門にては娑婆即寂光と說けは同居土の外に往生すべき淨土は無き也。

(五)通力。神通力なり。六神通等あり。

(六)五天竺。印度のこと、東、西、南、北、中の五に分つ也。

(七)轉輪聖王。須彌の四洲を領する王。金輪王は四洲、銀輪王は三洲、銅輪王は二洲、鐵輪

有るにあらず。是の故に名けて(一)信不具足と爲す等云云」。此の文の心は、一切衆生に多分佛性有りと說けども、一類に無しと說けば所化の衆生は闡提の人と成るべしと云ふ文也。四十餘年の衆生は(二)三乘(三)五乘倶に闡提の人と申す文也。されば佛『無量義經』に四十餘年の諸經を結して云く、「(四)四十餘年未だ眞實を顯さず」。されば智者は且く置く、愚者に於ては且く四十餘年の御經をば仰ぎて信を爲して置く可し。『法華經』こそ(五)「正直に方便を捨てゝ但だ無上道を說く」。(六)「妙法華經』は皆是れ眞實なり、」と釋迦多寶の二佛定めさせ給ふ上、諸佛も座に列り給ふて(七)舌を出させ給ひぬ。一字一文一句一偈なりとも信心を堅固に發して疑ひを成す可からず。其の上疑ひを成すならば、(八)「疑ひを生じて信ぜざる者は即ち當さに惡道に墮すべし」(九)「若し人信ぜずんば乃至其の人命終して(一〇)阿鼻獄に入らん」と、無虛妄の御舌をもて定め給ひぬれば、疑ひを爲して惡道に墮ちては何の詮か有る可きと覺ゆ。されば二十八品何れも疑ひ無き其の中にも、『藥王品』の後五百歲の文と、『勸發品』の後五百歲の文とこそ殊に珍らしけれ。『勸發品』には此の文三處に有り三處倶に後五百歲二千餘年已後の男女等に亙る。『藥王品』には此の文

(一)信不具足。一闡提の譯語也。
(二)三乘。聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘也。
(三)五乘、三乘に人乘、天乘を加ふ。
(四)四十。無量義經說法品の文。
(五)正直。法華經方便品。
(六)妙法。法華經寶搭品多寶佛證明の文。
(七)舌を。長廣舌を出すをば無虛妄を表す。
(八)疑ひ。法華經。
(九)法華經譬喩品の文。
(一〇)阿鼻。無間地獄のこと間斷なく苦痛を受くる最下の地獄也。

女人往生鈔

日蓮上人

(一)第七の卷に(二)後五百歳二千餘年の女人の往生を明す事を云はゞ、釋迦如來は十九にして淨飯王宮を出で給ひて、三十の御年成佛し、八十にして御入滅ならせ給ひき。何れも皆衆生得度の御爲め無虚妄の說、一字一點も疎かなる可からず。又凡夫の身として是れを疑ふ可きにあらず。但し佛說より事起りて小乘、大乘、權大乘、實大乘、顯教、密教と申す名目新たに出來せり。一切衆生には皆成佛すべき種備はれり。然りと雖も小乘教には此の義を說き顯さず。されば佛我れと說かせ給ふ經なれども、諸大乘經には多く小乘經を嫌へり。又諸大乘經にも法華已前の(三)四十餘年の諸大乘經には、一切衆生に多分佛性の義をば許せども、又(四)一類の衆生には無佛性の義を說き給へり。一切衆生多分佛性の義は巧みなれども、一類無佛性の義が拙き故に、多分佛性の巧みなる言も又拙き言と成りぬ可し。されば『涅槃經』に云く、「衆生に是れ佛性有りと信ずと雖も、必しも一切皆悉く之れ

(一)第七。法華經第七藥王品に女人往生を說けるを指す。

(二)後五百歳。佛の滅後を五の五百歳に分つ中第五の五百歳をいふ、即ち鬪諍堅固白法隱沒の時、今の末法これ也。二千餘年とは末法は佛の滅度を去る二千餘年に當る也。

(三)四十餘年。佛一代五十年の說法の中最後八年は法華の時なれば其已前の經々を四十餘年の教といふ。

(四)一類。一闡提佛性なきものは成佛せずと說くが如きをいふ。

めば、還つて必ず汝等を導かん。(一)普賢の行願を行じて同く(二)無上道を證せん。

(一)普賢の行願。普賢菩薩の德行念願、利他大慈悲の願行なり。
(二)無上道。佛果。

一期大要祕密集 終

(一)自恣の僧。一夏の安居を終りたる僧。

(二)阿鼻。阿鼻至(Avici)の略、無間と譯す。八熱地獄の最下なり。五逆罪の人の墮する處。

れを念じ奉り、廻向すべし。又(一)自恣の僧に供養すべし。已上の三寶は、殊に餓鬼の苦患の忍び難きを濟ふ。本誓悲願の功力、餘に勝るゝなり。又畜生道に墮在するに、五種の相あり。經に云く、「一には妻子を愛戀し、貪視して捨てず。二には手足の指を跪む。三には遍體汗を流す。四には麤澀の聲を出す。五には口中に沫を噍む。已上五相の中、隨つて一も現前せば、應に七類の畜生に墮在すと知るべし。既に生處を知る。精いで彼の苦を濟へ。謂ゆる阿彌陀如來、般若波羅蜜菩薩、文殊師利菩薩、金剛燈菩薩、馬頭觀音、これを修行すべし。又五十三佛名等、光明眞言、理趣般若、般若心經、光讃般若經等、これを念じ奉り、廻向すべし。已上の三寶は、殊に畜生を濟ふ。本誓悲願の功力、餘に勝るなり。若し三惡道の相、同時に相雜り、或は都べて何れの相と知らずんば、謂ゆる滅惡趣尊の護摩秘法、急急に之を行じ、早早に之を濟へ。我れ閉眼の刻み、若し惡相を見ば、且は忠孝の心に入り、且は慈悲の門に出でゝ、速に追修の善根を植ゑ、疾く菩提の果實を授けよ。娑婆の病惱、猶堪へがたし。(二)阿鼻の罪苦、何ぞ忍び易からん。努力めて遺言に違ふことなかれ。我れを濟うて、道を成ぜし

著けて臥す。以上十五の相、隨つて一も(一)現在前して死を取り畢らば、應に一百四十四の地獄等の中に墮在すと知るべし。既に生處を知る。精いで彼の苦を濟へ。謂ゆる佛眼、金輪、正觀音、地藏等の法、これを修行すべし。若しは繪き、若しは造つて供養を致すべし。又理趣經五十三佛名、寶篋、尊勝、光明眞言、破地獄、寶樓閣、華嚴經の菩薩說偈品、法華經等を誦するなり。已上の三寶は、殊に地獄の衆生の苦患を濟ふ。本誓悲願の功力、餘に勝るゝなり。復人命終の時に臨んで、八種の相あれば、必ず(二)琰魔羅界の餓鬼趣の中に墮す。經に云く、「一には好んで其の脣を舐る。二には身熱すること火のごとし。三には常に飢渴を患へて、好んで飲食を說く。四には口を張つて合せず。五には兩目乾き枯れて、鵰孔雀のごとし。六には小便大便遺漏あることなし。七には左の膝、先づ冷ゆ。八には右の手、常に拳る。何を以ての故に、心慳悋を懷けばなり。已上八相の中、隨つて一も現前せば、應に三十六種の餓鬼界の中に墮在すと知るべし。既に生處を知る。精いで彼の苦を濟へ。謂ゆる寶生如來、虛空藏、地藏、千手、檀波羅蜜菩薩、施餓鬼等の法、これを修し奉るべし。又五十三佛名等、十甘露の呪、雨寶陀羅尼等、こ

(一)現在前。表はれ出ること。

(二)琰魔羅。具には琰魔羅闍(Yamarāja)即ち琰魔王。

者の口に入つて、皆日輪の相を現じて、各(一)六根の處に出で、紅頗梨の光を放つて、六根罪障の闇を破す。この時に、病者無始以來の生死長夜の闇晴れて、日相を見、(日相觀の文、深義更に問へ。)即ち往生を得ん。經に「五逆の罪人も、若し知識に遇へば、將に往生することを得」と說きたまふ。斯れこの謂ひ歟。若し我れ正念に住せば、知識必ずしも何の用ぞ。邪念と、無記とを現ぜば、當に彼の時の苦を助くべし。

九に沒後追修の用心。

守護國界陀羅尼經の意。若し人、命終して、當に地獄の中に墮すべきは、十五の相あり。經に云く、「一には自の夫妻男女眷屬に於いて、惡眼を以て瞻視す。二には其の兩手を擧げて、虛空を捫摹す。三には善知識の教に相隨順せず。四には悲號啼泣し、嗚咽して涙を流す。五には大小便利、覺せず知せず。六には目を閉ぢて開かず。七には常に頭面を覆ふ。八には側ち臥して飮噉す。九には身口臭穢なり。十には脚膝(二)戰掉す。十一には鼻梁(三)欹側す。十二には右眼瞤動す。十三には兩目赤に變ず。十四には面を仆して臥す。十五には身を踡め、左の脇を地に

(一)六根。眼、耳、鼻、舌、身、意。

(二)戰掉。振ひ動く意。

(三)欹側。片寄る意。

便に隨つて居止して、要事を待つべし。若し時に(一)合殺せば、四人同音せよ。此れ則ち、五智の菩提を求むる臨終の軌儀なり。若し病苦身に逼つて、東西を知らずんば、當に頭北面西に臥さしむべし。摩水、心を破つて、善惡を辨へずんば、手を合掌せしめて、面を佛に向はしむべし。又(二)無記、既に現じて、分別の心なく、陰魄一、殘つて猶し熟眠するが如く、餘氣纔に通じて、宛も死人に似たり。若し此の時に當らば、出入の息を見て、目を暫くも捨てず、病者の息の(三)延促を以て、智識の息の延促に合せて、病者と智識と、息を同時に出入して、必ず出づる息ごとに、念佛を唱へ合せて、我に代つて、我が徃生の深き憑みを助けよ。一日、二日、乃至七日、斷息を期とす。捨てゝ去ることを得ざれ。人死する作法は、必ず出息に終る。終る度の息を待つて、當に唱へ合さんと欲ふべし。若し唱へ合すことを得れば、四重五逆等の罪を消滅して、必ず極樂世界に徃生することを得。所以何となれば、病者餘氣を斷ちて、虛しく命を捨つる時、知識、彌陀を呼んで、實に利生を請へば、本願、緣に趣いて、必ず(四)引接を垂れたまふ。又當に觀念すべし。口より南無阿彌陀佛の六字を唱へ出せば、病者の引く息に從つて、即ち病

(一)合殺。名號を唱ふる曲調。二音并べ合せて發し、而も互に相殺し絕やすこと。又は入聲にて高く稱揚すること。
(二)無記。非善非惡の中性。
(三)延促。呼吸の緩急。
(四)引接。前を見よ。

（一）面門。顏。
（二）能引の心。引導者の氣持。
（三）止住。坐すること。
（四）留難。取付く意。

知識の人人鳴らずして靜に居せよ。（智識や用人の外は、同室に入るべからず。中に就いて酒肉五辛を食ひしものは、早く之を出すべし。）我れ若しは念佛、若しは本尊の眞言を唱へば、聲を細うして、付け誦じ、思ひ忘れん所を勸めしむべし。禪定に入るが如くして、往生を遂げんことを願ふ。一人の智識は（この一人は、必ず有智の道心を用ゆべし。病者この一人に於いて、能引接の觀音の想を作すべし。）病者の面、少し南に依つて、（臍に當る）近く坐して眼を病者の(一)面門印相に懸け、慈悲の心に住して、以て將護すべし。(二)能引の心を發して、同音に念佛せよ。（若し病者音へ乙ならば、智識甲にせよ。念誦經論等、兼日儲け置いて、知識、時に臨んで示せ。）一人の智識は、（久修練行の人を用ゆべし）病者の東少し北に依つて、（頭に當る）三尺許りを去つて、(三)住止すべし。眼を病者の跡枕の左右に懸けて、不動尊を祈念して、慈救の呪を滿つべし。天魔外道の障礙を避けて、臨終正念にして、其の心に安住し、惡鬼邪神の(四)留難を除いて、極樂に往生せん、彼の願を成ぜしめよ。一人の智識は、病者の北方にありて、（若し依る所なくんば、便宜の所にあり。）金を鳴らすの時、微音高聲、病者の心に隨へ、二人の智識は、

極樂世界は、彌陀の心地なり。彌陀は、大日の智用、大日は、彌陀の理體なり。密嚴とは極樂の總體、極樂とは、密嚴の別德なり。最上の妙樂は、密嚴に之を集む。極樂の稱、彌陀の號これより起る。然るに、彼の極樂は何れの處ぞ。十方に遍ぜり。觀念坐禪の房、豈に異處にあらんや。此くの如く觀ずる時、娑婆を起たずして忽に極樂に生じ、我が身彌陀に入り、彌陀を替へずして即ち大日と成る。吾が身、大日より出づ、是れ即ち(一)即身成佛の妙觀なり。

八に、決定往生の用心、(この用心尤も大要なり、極惡の人も、往生を得)是れ則ち、最後臨終の用心なり。知識五人を召して、猶能く事を約束すべし。若し別願あつて、好んで端坐せば、(二)意樂に任ずべし。唯し(三)如來、既に頭北面西にして、涅槃に入りたまふ。釋種の軌儀、良に之を仰ぐべし。我れも頭北面西に臥さん。(獅子の屆して臥すが如く、左の膝を少し促めよ。)眼を本尊に懸けて、合掌して五色を取れ。若しは本尊の印を結び、眞言念佛の三密懈らざれば、是れ則ち決定往生の相狀なり。若し此の(四)威儀に住せば、一切呵責することなかれ。中間に杜哥(杜哥恐らくは社哥、一本には拉哥に作る)を示せば心散亂あらんか、

娑婆は前を見よ。(一三)彌陀。具には阿彌陀(Amitābha)譯して無量光と云ふ。

(一)即身成佛。父母所生の肉身を捨てずして、直に佛と成るの意。

(二)意樂。心願。(三)如來。釋尊を指す。

(四)威儀に住せば。作法に依らばの意。

問ふ。若し爾れば、唯この觀を修して成就することを得るや。

答ふ。唯この觀に依つて、全く餘修なし。懈怠小(一)機のものは、順次往生の大願を遂げ、精進大機のものは、現身成佛の(二)悉地を得ん。何を以ての故に、一心に萬行を攝し、行として行ぜざること無く、一觀に諸觀を含じて、觀として觀ぜざること無し。故に『大日經』に云く「若し勢力の廣く饒益すること無くんば(三)法に住して、但(四)菩提心を觀ぜよ。佛この中に萬行を具して、淨白純淨の法を滿足す」と說きたまへり。(五)論に云く「若し人佛慧を求めて、菩提心に通達すれば、父母所生の身に、速に(六)大覺の位を證す」といへり。

七に、極樂を觀念する用心。

(七)師子三藏の意の云く、「(八)顯敎に云ふ極樂とは、これより西方十萬億を過ぎて、佛土あるなり。佛はこれ彌陀にして、寶藏比丘の證果なり。(九)密敎に云ふ十方極樂は、皆これ一佛の土、(一〇)一切如來は皆これ(一一)一佛の身なり。(一二)娑婆に殊んじては、更に極樂を觀ずることなし。何ぞ必ずしも十萬億土を隔てん。大日を離れて別に(一三)彌陀あらず。又何ぞ寶藏唱覺の彌陀ならんや。密嚴淨土は、大日の宮位、

(一)機　具には機根、機は可發、根は能長を義となす。謂ゆる能力の意。今は此能力を有する人を指す。
(二)悉地(Siddhi)成就と翻す。
(三)法に住して　密敎の經軌に說く所の法則に順じての意。
(四)菩薩心　覺悟の心即ち自我の實相なり。
(五)論　菩提心論の文。
(六)大覺　佛陀如來。
(七)獅子三藏。善無畏三藏。
(八)顯敎。顯敎に
(九)解し易き露。して密敎。敎意隱密にして解し難き敎。
(一〇)一切如來。約すれば五佛。廣すれば十方三世の諸佛諸菩薩並に外道の諸天部。
(一一)一佛。大日一尊。
(一二)娑婆に殊んじては。此娑婆世界の外にはの意。

て圓現し、（一）刹塵海滴の佛は忽然として湧出す。此の（一）三昧に住するを、秘密三摩地と名づく」といへり問ふ。何んか觀じて、能く此の菩提心を發すや。

答ふ。文に云く、「夫れ無上菩提の心を發さんと欲はば、先づ深心を以て、佛の法身を觀ぜよ。（二）性海湛寂として、無生無滅なり。衆生癡闇にして、自ら覺るに由なし。諸佛如來、この輩を愍念し、大悲の浪を起して、生死の海に流し、大教の網を張つて、顯密の（三）機を濟ふ。然るに我等、今教網に遇うて、既に羅れり。應に（四）彼岸の近きことを知るべし。今度脫漏せば、永く生死に留らん。當に深廣の大菩提心を發すべし。誓願して一切の惡法を斷除し、誓願して最上の法門を修習し、誓願して一切の（五）有情を（六）度脫し、誓求して速に無上菩提を證せん。謂ゆる菩提とは、即ちこれ諸佛法身の（七）六大、亦これ衆生本覺の四曼なり。

問ふ。若し爾れば、此の三摩地を修するものは、幾くの時分を歷て成就することを得るや。

答ふ。若し相續修に據らば、十二年を過ぎずして、（八）有相即ち成就し、（九）無相も亦漸く現ぜん。

（一）三昧　三摩地の訛、舊譯は此訛音に依る。
（二）性海　眞如法性の海。
（三）機。具には機根即ち顯密の法教を受く可き人を指す。
（四）彼岸　迷界の此方の岸に對して覺悟の境界を彼岸と云ふ。
（五）有情。衆生と同都ての生類を指す。
（六）度脫　生死の苦海を度り越えて三界の苦惱を脫する意。
（七）六大　地、水、火、風、空、識。
（八）有相　壽命長遠、福利圓滿等の世俗の願望を指す。
（九）無相　生佛一如の理に躰達するを云ふ。

二には所求の菩提心なり。能求の道心とは『大日經』に云く「自心に、菩提と及び一切智とを尋求す。何を以ての故に、本性清淨なるが故に」といへり。『菩提心論』に云く。我れ今阿耨多羅三藐三菩提を志求して、餘果を求めず」といへり。(一)大師の文に云く、「能求の心とは、譬へば人あつて、善と惡とを爲さんと欲するには必ず先づ其の心を標して而して後に其の行を行ずるが如く、菩提を求むる心も、亦復かくの如し。既に狂醉して(二)三界の獄にあり。熟眠して(三)六道の藪に臥すことを知んぬ。何ぞ神通の車を驅つて、速に本覺莊嚴の床に歸らざらん」といへり。早く無明の眠を覺して、(四)五佛の眼を開き、速に煩惱の醉を治して、(五)四曼の都に遊ばん。所求の道心とは大師の云はく「所求の心とは、謂ゆる。無盡莊嚴金剛界の身これなり。大毘盧遮那(六)四種法身、四種曼荼羅、皆これ一切衆生本來平等に共に有せり。然りと雖も。五障の覆蔽を被り、(七)三妄の雲翳に依つて覺悟することを得ず。若し能く日月の輪光を觀じ、聲字の眞言を誦じ、三密の加持を發し、(八)四印の妙用を揮へば、則ち大日の明光廓法界に周く、無明の障者は忽に心海に歸し、無明忽に明を爲り、毒藥乍ら藥と爲る。(九)五部(一〇)三部の尊、森羅とし

(一)大師の文　弘法大師の三摩耶戒序の文。
(二)三界　慾界、色界、無色界。
(三)六道　地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天。
(四)五佛　大日、阿閦、寶生、彌陀、釋迦。
(五)四曼　具には四種曼荼羅、大曼荼羅、三摩耶曼荼羅、羯磨曼荼羅、法曼荼羅。
(六)四種法身　自性、受用、變化、等流。
(七)三妄　又三惑見惑、思惑、修惑。又麤妄執、細妄執、極細妄執。
(八)四印　金剛拳印、三昧耶印、法印、羯磨印。
(九)五部　佛部、金剛部、寶部、蓮華部、羯磨部。
(一〇)三部　佛部、蓮華部、金剛部。
(一一)刹塵　無數の意。

ら絶え、八萬四千の煩惱は對治を待たずして忽に消す。（一）三祇の長劫は之を半念に縮め、六度の廣行は、之を一觀に攝す。煩惱生死の睡暗、今永くたえ、菩提涅槃の覺月は、斯に始めて彰はる。淺觀小行の人は、此の身を捨てずして轉じて極樂の上品上生を得、深修大勤の類は、かの心を改めずして、變じて密嚴の大明大日と成る。易修易證の道、既に斯の行に超ゆるものなし。難値難聞の法、豈に此門に過るものあらんや」と、文に云く「此の觀を修するものは所起の五逆、四重十惡、及び一闡提、是くの如くの罪障、悉く皆消滅して、即ち五種の三摩地門を獲。云何が五と爲す。一には刹那三昧、二には微塵三昧、三には白縷三昧、四には起伏三昧、五には安住三昧と云云。」（深義更に問へ）（二）論に云く、「若し纔に見るものをば則ち（三）眞勝義諦を見ると名け、若し常に見るものをば、菩薩の（四）初地に入る云云。」と云へり。

問ふ。已に阿字と、心月と、即ち菩提心の體性なることを知んぬ。未だ知らず此の心に幾くの差別ありや。

答ふ。廣うすれば則ち無邊なり。略すれば二に過ぎず。一には能求の菩提心、

場。

（一四）四重　具には四重罪、殺生、偸盗、邪婬、妄語。

（一五）五逆　父を殺し母を害し、和合僧を破り、佛身より血を出し、阿羅漢を殺し、羯磨僧を破る。

（一）三祇　具には三阿僧祇劫（Asankhyakalpa）三無數劫と翻す。

（二）論　菩提心論の文。

（三）眞勝義諦　眞如の異名。

（四）初地　十地の中の初位即ち歡喜地。

明を離る。是を大日と名く。(一)生死の(二)長夜、この時に永く曉けぬ。

問ふ。阿字と心月と同なりや異なりや。答ふ。同にして即ち異、異にして即ち同なり。同にあらず、異にあらず。亦は同、亦は異なり。(十六重の義、今は且く之を略す。)(三)是れ則ち菩提心の躰性なり。問ふ。正しく(四)之を觀ずる方云何ん。答ふ。若しは阿、若しは月、之を圖造せよ。その形を白珂の色に染めて、微妙嚴麗にして、世に比類なからしめて、持して淨處に懸け、四尺許りを去つて、向つて端坐して、眼を開くには下より上へ、目を閉づるには上より下へ。出入の息に隨つて、之を觀じ、之を見よ。此の如くして、日を積むときは、(五)初心には見難けれども、(六)後心には見易し。眼を閉ぢて向はざるに、漸く(七)顯れ見え去る。若し顯はるれば、圖造の(八)月阿に向ふこと勿れ。唯眼見を緣ぜよ。文に云く「この觀は萬行の尊主、諸定の帝王、出凡の正門、(九)入聖の直道なり。疑謗の逆緣も、猶ほ、(一〇)權敎の戒行に優れり。信皈の順因、誰か(一一)顯乘の智觀に比せん。何に況んや信修をや、何に況んや深行をや、三毒(一二)十惡は、變じて(一三)曼荼の功德と爲り。(一四)四重(一五)五逆は轉じて瑜伽の密行に皈し、一百六十の妄執は、斷道を假らずして自

(一)生死　世相の流轉變化限りなきを云ふ。
(二)長夜　自心の本佛大日の光を見ざる間を指す。
(三)是れ　阿字を指す。
(四)之を　阿字即ち自心本具の淨菩提心を示す。
(五)初心　初めて修行する人。
(六)後心　長く修行を積みたる人。
(七)顯れ　月輪の相の見えるを云ふ。
(八)月阿　月輪の形の中に、阿字を書きたるものを指す。
(九)入聖　聖者の域に進み入ること
(一〇)權敎　眞實の敎にあらざる權りの敎。密敎外の敎を總じて指す。
(一一)顯乘　顯敎一乘。
(一二)十惡　殺生、偸盜、邪婬、兩舌、惡口、綺語、妄語、貪欲、瞋恚、邪見。
(一三)曼荼　具には曼荼羅(Manda 諸尊集會の壇

阿字は諸法無住處の義なり。生死にも住せず、(一)涅槃にも留ることなし。心躰も不住なれば、染淨不定なり。法界に遍じて至らざる所なし。

阿字は無量の義。

阿字は諸法に限量あることなし。(二)萬法唯阿なれば、阿字も無量なり。我が心、法に遍すれば、心即ち諸法なり。諸法無量なれば、心も也無量なり。

阿字は(三)無我の義。

阿字は諸法無二我の義なり。人我不生なれば、法我即ち(四)空なり。我が心は即ち阿なれば、(五)衆生も即ち阿なり。阿は阿にして無我なれば、一阿にし(六)眞我なり。

阿字は無爲の義。

阿字は諸法に(七)無爲常住なり。(八)有爲の萬法は、皆な阿字に皈す。一阿を離れて妄の有爲を表することなし。(九)三毒に即して眞の無爲を顯すことあり。

阿字は無闇の義。

阿字は諸法無闇冥の義なり。躰は無明を離れて、常に明了なるが故に、心は無

(一)涅槃（ニルバーナ Nirvan）無爲寂靜の境界。
(二)萬法　諸法と同、即ち萬有。
(三)無我　常一主宰の義。
(四)空　確實性なき意。
(五)衆生　人類並に動物。廣くは九界の生類を指す。
(六)眞我　眞實常住の主躰。
(七)無爲　不變の義。
(八)有爲　生滅變化の義。
(九)三毒　貪、瞋、痴。

本より等うして、凡聖の異なし、(一)佛性も(二)闡提も、一如平等なり。

阿字無別の義。

阿字は諸法無分別の義なり。自體清淨にして、垢染なきが故に、心體も本より離れて、煩惱の染なし。本來清淨にして、一味一色なり。

阿字無生死の義。

阿字は諸法無生死の義なり。有分別と無分別とを離るゝが故に、心體も本生なれば、(三)分段の分別と、(四)變易の無分と、(五)相寂常住なり。

阿字は本不生の義。

阿字は(六)諸法(七)本不生の義なり。妄念不生なれば、(八)淨法も不生なり。心躰無爲にして、永く起滅せず、心海常住にして、都て波浪なし。

阿字は無始の義。

阿字は諸法に、終盡あることなし。本來(九)本有にして、初起なきが故に、心躰も本有にして、無始無終なり。(一〇)法界に周遍して、常住(一一)一際なり。

阿字は(一二)無住の義。

(一)佛性。佛と成る可き成分を云ふ。今は此成分を有する人を指す。
(二)闡提。具には一闡提(Icchantika)『斷善根、又は信不具足と譯す。佛と成る可き成分なきものを云ふ。
(三)分段の分別。分段生死を受くる凡夫の分別心。
(四)變易の無分。變易生死を受くる地上の菩薩の無分別智。
(五)相寂。差別を絕して一相平等なるを云ふ。
(六)諸法　萬有。
(七)本不生　本來不生不死絕待平等の義。
(八)淨法　善淨の法教。
(九)本有　天然自然に具在せる意。
(一〇)法界　宇宙。
(一一)一際　一味一相無差別の義。
(一二)無住　住滞することなき意。

(八)輪。法輪。輪は武器の一、法教は無明の敵を破るが故に、法輪と云ふ。

(一)二利。自ら利し、又他を利するの稱。

(二)化緣の水。化度せらるゝ凡夫を化緣と云ひ、その心を水に喩ふ。

(三)九界。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天、聲聞、緣覺、菩薩。

(四)一肘。凡そ八寸。

(五)禪智。左右兩手の母指。此一段の文に、甚深の意味あり。親しく阿闍梨に就いて、眞意を傳ふ可きなり。

心を淨土に懸くれば、十方遠からず。神通の事に乘じて、須臾に成佛す。

心月巡轉の觀。

月の巡轉するが如く、自心も無窮なり。心水に還り入て、利他の波を起す。正法の輪を轉じて、邪迷の闇を破し、萬德無窮にして、(一)二利斷ゆることなし。

心月普現の觀。

月の普く現ずるが如く、自心も遍く靜かなり。(二)化緣の水靜かなれば、普く萬機に浮ぶ。一體を分たずして、(三)九界の前に現じ、多身を假らずして、十方の土に臨む。

已上月輪、已下は阿字。

八葉の白蓮は(四)一肘の間に、阿字素光の色を炳現す。(五)禪智俱に金剛縛に入れて、如來の寂靜智を召入す。

阿字の字義は、亦無量なりと雖も、且く十義を擧げて、以て無盡を顯はす。

阿字平等の義。

阿字は諸法に高下あることなし。體本より平等にして差別なきが故に。心體も

せよ。月の凉光に觸れて、心の慈水を澄せば、無量の恚焰、一時に消滅す。

心月明照の觀。

月の明照なるが如く、自心も照朗なり。本より(一)無明を離れて、常に是れ遮那なり。心月、臆に澄めば、(二)五障何んぞ闇からん。圓鏡、意を瑩いて、光明遍照す。

心月獨尊の觀。

月の獨一なるが如く、自心も獨尊なり。諸佛の尊ふ所、萬法の歸する所なり。

心月中道の觀。

(三)心殿は比ひなき(四)心王の如來、識都に竝び居するは、(五)心數の眷屬なり。

月の中に處するが如く、自心も邊を離れたり、恒に中道を極めて、永く邊執を越えたり。顯教の邊を離れて、眞言の中に住す。(六)應佛の國を過ぎて、(七)法身の宮に入る。

心月速疾の觀。

月の遲からざるが如く、自心も速疾なり。秘密の(八)輪を轉じて、刹那に斷惑し、

(一)無明。人類本然の覺性を遮蔽する迷妄。

(二)五障。惡道、貧窮、女身、形殘、喜忘。又女人が輪王、梵王、帝釋、魔王、佛身と作ることを得ざるを云ふ。

(三)心殿。自心を指す。自心は心王大日如來の居住する處、故に此稱あり。

(四)心王の如來。大日を指す。大日は心の主宰なるが故に、心王と名く。

(五)心數の眷屬。大日を除きたる餘の諸尊を指す。心數は心王に對する語。心王を心躰とすれば心數は心作用。諸尊は行者心相の行現。大日寶生等は、行者自心の徳相の顯現也。

(六)應佛。應化佛身、即ち釋尊。

(七)法身。自性、受用等の四種あれど、今は大日尊、即ち自性法身を指す。

觀を爲すに由て、本心を照見するに、湛然として清淨なり。乃至、我れ自心を見るに、形は月輪の如し」と。謂く心月の如きは、義無量なりと雖ども、且つ十種を擧げて、觀心の要と爲さん。

心月圓滿の觀。

月の圓滿なるが如く、自心も闕ることなし、萬德を具足し、(一)種智を圓滿せり。月の圓形を見て、心の滿體を觀ぜよ。福智を圓滿せる(二)雙圓の性佛なり。

心月潔白の觀。

月の潔白なるが如く、自心も(三)白法なり。永く(四)黑法を離れて、常に白善を興す。月の白色を見て、心の(五)白質を觀ぜよ。自性淨白にして、性德の本源なり。

心月清淨の觀。

月の清淨なるが如く、自心も無垢なり。自性清淨にして、無貪無染なり。月の淨徹を見て、心の淨性を觀ぜよ。本より貪染なし、もと是れ淨佛なり。

心月清涼の觀。

月の清涼なるが如く、自心も熱を離れたり、慈悲の水を灑いで、瞋恚の火を消

(七)法爾。生れながら自然にの意。
(八)普賢・菩提心。凡夫の心の實相、即ち自性清淨心を指す。普は普遍、賢は賢善、普遍賢善の大覺心の意。
(九)本有の薩埵。本來金剛薩埵の德を有する者。
(一〇)瑜伽。(ヨガ)心境一致、即ち密教の禪定を指す。
(一一)種智。具には道種智。菩薩の有する智。諸佛の道法を用て、吾人凡夫の善種を發さしむる智。
(一二)雙圓。福智の雙德を圓滿せるを云ふ。
(一三)白法。善法即ち善事。
(一四)黑法。惡法即ち惡事。
(一五)白質。自性清淨の本質。

を利する者の稱。
(一〇)佛陀(Buddha)覺者。
(一一)大師の云く秘藏寶鑰の文。
(一二)初の一。異生心羊心。
(一三)次の一。愚童持齋心。
(一四)次の一。嬰童無畏心。
(一)唯蘊。唯蘊無我心。
(二)唯蘊。色受想行識の五蘊のみ確實性にして、五蘊和合の肉躰等は、實は無きものとする敎。
(三)拔業。具には拔業因種心。十二因緣を觀じて、無明の種を除く敎。
(四)他緣。具には他緣大乘心。大慈悲心を發して、有緣無緣の衆を救はんとする敎。
(五)不住。不止住、即ち至極にあらざる意。
(六)無間の人。無間地獄に墮する人。

は生天を欣つて、解脫を願樂すれども、遂に地獄に墮す。已上の三心は、皆な是れ世間の心なり。未だ出世と名づけず。第四の(一)唯蘊已後は、聖果を得と名く。出世の心の中にて。(二)唯蘊と(三)拔業とは、是れ小乘の敎、(四)他緣以後は、大乘の心なり。大乘に於て前の二は、菩薩乘、後の二は、佛乘なり。此の如くの乘々、自乘には、佛の名を得れども、後に望むれば戲論と作る。前々は皆な(五)不住なり、故に「無自性」と名づく。後々は悉く果にあらざるが故に、「皆是因」と云ふなり。三に、三摩地の菩提心とは、それ應化の如來は、秘して而も談ぜず。傳法の菩薩は、置いて而も論せず、自性法身大日如來は、自眷屬と與に、各々三密を說いて、自受法樂し玉ふ甘露醍醐あり、是を秘密莊嚴心と名づくるなり。小機の者の爲めには、一字をも說くこと勿れ。若し疑心を作せば、(六)無間の人と爲らん。信男信女、當に此法を學ぶ可し。論に云く、「何んが能く、無上菩提を證する、當に知る可し。(七)法爾に(八)普賢大菩提心に住せり。一切衆生は(九)本有の薩埵なれども、貪瞋痴の煩惱の爲に縛せらるるが故に、諸佛の大悲は、善巧智を以て、この甚深秘密の(一〇)瑜伽を說て、修行者をして、內心の中に於て、日月輪を觀ぜしむ、この

るや、轉じて百八智と成る。(九)論。菩提心論の文。(一〇)如來藏の性佛性。(一一)二乘。聲聞、緣覺。(二)遮那。毘盧遮那(Vai-rocana)の略稱。大日と翻す。(三)如來。佛十號の一。如は眞如、眞如より來至せるを云ふ。(四)衆生。生命を有するもの丶都てを指す。衆多の生死を經るが故に、此稱あり。(五)論。同前。(六)九種の心法。十住心の中の前九心。(七)異生。畜生。(八)極無自性心萬有の確實性なきを證悟せしむる教。(九)菩薩。具には菩提薩埵(Bodhi-sattva)、翻して覺有情。上は佛智を求め、下は群生

を含じて、皆な無上菩提に安住するに堪任せり。是の故に、(一)二乘の法を以つて、得度せしめず」と。二に、安樂の菩提心とは、一切有情は、皆な成佛の器なり。有識有情は、當成の諸佛、(二)遮那、釋迦は、已成の(三)如來なり。有情を惱すものは、即ち如來を惱すなり。衆生を輕する者は、諸佛を輕するに擬す。有情を逼めて、苦心を生ぜしむること勿れ。故に論に云はく「既に一切(四)衆生は、畢竟じて成佛すと知るが故に、敢て輕慢せず、乃至、衆生の願に隨つて、之を給付せよ。乃至身命をも悋惜せず」と。二に、勝義の菩提心、(五)論に云く、「一切の法は、自性なしと觀ず」と。謂ふ所の一切の法とは、此れに(六)九種の心法あり、(七)異生羝羊心、乃至、(八)極無自性心なり。謂く凡夫を聖者に望め、(九)菩薩を(一〇)佛陀に比するに、轉々相望して、各々無自性なり。故に(一一)大師の云く、「九種の住心は、自性なし、轉深轉妙にして、皆是れ因なり」とは、此の二句は、前の所説の九種の心は、皆な至極の佛果に非ずと遮す。九種と言ふは、異生羝羊心、乃至、極無自性心是れなり。中に就いて(一二)初の一は、凡夫の一向行惡行不修微少善を擧げ、(一三)次の一は人乘を顯し、(一四)次の一は天乘を表す。即ち是れ外道なり。下は下界を厭ひ、上

(是れに總別の二あり。)『菩提心論』に云く、「我れ今(一)阿耨多羅三藐三菩提を志求して、餘果を求めずと誓心決定するが故に、(二)魔宮震動し、十方の諸佛皆悉く證知し玉ふ云云。その行相とは三門を以て分別すべし。諸佛菩薩、昔し(三)因地に在まして、この心を發し已つて、勝義、行願、(四)三摩地を戒と爲し、乃し成佛に至るまで、時として暫くも忘るることなし。唯眞言法の中にのみ、即身成佛するが故に、是れ三摩地の法を說く、諸教の中に於て闕して而も書せず」と。心を此文に懸け、發菩提心の眞言を誦すること、日別に三百遍せよ。(已上總略の發菩提心なり。)一に、行願の菩提心、(五)論に云く「我れ當に無餘の有情界を利益し安樂し、十方の(六)含識を觀ること、猶ほし己身の如くす可し」と。この文の中に二あり、一に、利益の菩提心、二には安樂の菩提心なり、一に、利益の菩提心とは、凡そ心あるものは、本覺の大日如來、阿閦如來、寶生如來、彌陀如來、不空如來等の五智、(七)三十七智、(八)一百八智、乃至十佛刹、微塵數等の無邊の智佛、無數の理佛を具して、一衆生として成佛せざるものなし。悉く勸めて當に菩提心を發さしむべし。故に(九)論に云く「應に知るべし、一切有情は、皆な(一〇)如來藏の性

(一)阿耨多羅三藐三菩提(Anuttara-Samyak-Sambodhi)。譯して無上正等正覺と云ふ。即ち佛陀の智慧を指す。

(二)魔宮。魔王の宮殿。魔は具なる梵音には魔羅(Māra)と云ひ、障碍を爲するものを指す。

(三)因地。佛菩薩が凡夫たりし時代に、修行せんと發心したる當初を指す。

(四)三摩地(Samādhi)。定、今は眞言宗にて修する禪定。

(五)論。菩提心論の文。

(六)含識。心識を含有するもの、即ち有情又は衆生と同生命を有するもの、都てを指す。

(七)三十七智。五佛、四波羅蜜、十六大菩薩、四攝、八供養の各尊格が有する智。

(八)百八智。百八煩惱は、佛智を得

衣物の類を捨て、神咒等を誦せしめよ。謂ゆる轉法輪、召罪、摧罪、佛眼、金輪、寶篋、尊勝、光明、彌陀、滅罪、淨三業等の眞言、禮懺經、五十三佛名、懺法等なり。病者は當に彼の眞言の體の阿字の義を念ずべし。滅罪の說、深く信じて疑ふこと勿れ。或は密教に依て但(一)實相を思へ。當に惑業は、衆緣より生ずと想ふべし。(二)衆緣生の故に、有始有本なり。此の能生の緣も、亦緣より生ず、(三)展轉して緣に從ふ。誰をか其の本とせん。是の如く觀察する時、則ち(四)本不生際は、是れ惑業の本なりと知る。惑業既に本不生際に歸すれば、惑業は即ち是れ本不生際なり。本不生際は即ち是れ(五)法界、即ち是れ(六)中道、即ち是れ實相なり。不實不妄にして定相あることなし。是の故に惑業實相の中には、憂惱可毀の定相あることなし。若し爾らば豈に障道の用あらんや。妄有を堅執し、眞空を猶預すること勿れ云云。重て(七)轉法輪に住して、その眞言を念誦せよ。(八)阿賴耶識の中に、菩提に違背する種あり。(往生を障ふる源なり。唯この種を斷ぜよ。)次に法輪の印を結んで、彼の厭離の輪を摧け」といへり。

六に、菩提心を發す用心。

(一)實相。自心の眞實相。
(二)衆緣生。衆多の因緣より生成する意。
(三)展轉。うつり變る義。
(四)本不生際。萬有最深の原理。此は本來變化生滅を超越せるが故に、此名あり。
(五)法界。宇宙萬有。
(六)中道。不偏不倚の眞實道。
(七)轉法輪に住して。轉法輪菩薩の觀念本誓に、心を安住せしなるを云ふ。
(八)阿賴耶識。藏識と翻す。能藏所藏執藏の三義あり。人類自我の本質なり。

(一)奉請。奉迎所請。

(二)已灌頂の人　灌頂を受け已つた人を指す。灌頂(Abhiseka)は、眞言宗にて、香水を頂上に灌ぐ式を云ふ。

(三)五色。青黃赤白黑。

(四)引接。佛が我等凡夫を引導し玉ふを云ふ。

此の時にあらずんば、何くぞや。一切停止して、諸事寂靜にせよ。

四に、本尊を(一)奉請する用心。

(幡若しくは五色の絲を、兼日に之を辨ぜよ、絲の長一丈二尺に經て、合せて九尺を得、作法別にあり、(二)已灌頂の人の所作なり。)

『探玄記』に云く、「西國の法に依らば、命を捨てんと欲ふものあれば、面を西に向けて臥せしめ、前に於て一の立佛の像を安じ、亦面を西に向はしめ、一の幡の頭を以て、像の手の指に掛け、病人をして手に幡の脚を捉らしむ云云。」といへり。今は東に向いて、手に(三)五色を掛けよ。西に向ふは、(四)引接にして、東に向ふは、來迎なり。向東向西は、又人の意に任せよ。年來の本尊、何れの諸佛菩薩なりとも、若しは幡、若しは絲、像の手の指に掛け、燒香斷ぜずして、(香煙の上りには諸佛影向す。)その命期を待つべし。

五に、業障を懺悔する用心。

範師の意の云く、(實範の病中修行記に出づ。)「惑業は是れ大菩提の障なり。」久しく起造する所、必ず懺悔すべし。懺悔の方多し、宜きに隨つて要を取れ。或は

ふことなく、若君老母、等しく同じく追ひ行く。昨日の死は、人の家の中、今日の災は、我が身の上なり。拙い哉。身命を抛つて、早く佛道に入れ。(一)經に云、「一切(二)有爲の法は、夢幻泡影の如く、露の如く、亦電の如し。應に是の如くの觀を作すべし。」といへり。

三に、本住處を移す用心。

若し未だ出家せざれば、早く鬢髮を除け。若し本住處にあらば、心恐くは、生死に留まらん。重病身に逼り、(三)段食飡し難く、醫藥驗し無くんば、命終近きにあらん。本住の室を起つて、無常の坊に居せよ。(若し無常の房無くんば右の如く用心すべし。)(四)娑婆の穢處を捨てて、極樂淨土を得ることを表する故なり。又品品の親屬を捨てて、(種々の遺言、兼日に之を畢れ。)唯三五の(五)智識を(六)具せよ。(知識の所作後段にあるべし。)財寶は甘毒なり。醉うて正路を失ひ、名利は柔鏁なり。縛して邪道に置く。宮室は妄獄なり、覺て早く此を出でよ。父母は諜魔なり、知つて疾く彼を放てよ。(七)太子は城を出でて、(八)五智の嶺峯に登り、大師は定に入りて、(九)三密の醍醐に著き玉ふ。移住の用心、意は只此にあり。身心の出家、

(一)經。金剛般若經偈の文。
(二)有爲。變化し行きて、常ならざる事象。
(三)段食。米菜等の食物を指す。段は分段の義。米菜等が胃に入つて、分々段々に消化さるるを云ふ。
(四)娑婆(Sahā)此世界を指す。娑婆は梵語、譯して忍土、又は忍界と云ふ。寒暑風雨等を堪へ忍ぶ處の意。
(五)知識。知識を有する人、即ち名僧高德。
(六)具。具備。
(七)太子。悉達太子。
(八)五智。大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成就作智、法界體性智にして、阿閦、寶生、彌陀、釋迦、大日の五佛の有する智。
(九)三密。身密、口密、意密にして、法身の身口意の三は、作用隱密なるが故に、此名あり。

若し冥路の相を現ぜば、早く追善の光を放てよ。

一に、身命を惜む可き用心。

壽限未だ決定せざる間は、一向に身命を棄捨す可らず。且は佛法に祈り、且は醫療を加へ、以て安身延壽の方術を爲せ。是れ徒に軀命を愛するにはあらず。唯(一)眞乘を守るの(二)結緣を厚ふせんと欲するなり。

二に、身命を惜まざる用心。

宿曜祿命を卜ひ、算道(三)達摩に明にして、命期を量り知らば、一向に(四)菩提の行を修すべし。若し病患旬に亘り、氣力日に衰へ、死の爲めに呑まれんこと、必ず脱れ難きを知らば、當に(五)緣務を息て、專ら正念に住す可し。(六)經に云く、「一切の諸世間にて、生ずる者は、皆な死に歸す。壽命無量なりと雖ども、要必ず終盡することあらん。」といへり。若き形、日々に衰へ、老いたる體、夜々に弊る。鮮なる花の色も、程なくして即ち耗る。惜い哉。留らずして木の本に散ずるの色。盛んなる人の命、乍に滅し、亦去る。戀い哉。還らずして焰の路に入るの體、無常の虎は、貴賤を簡はず。先帝後民、皆悉く食ひ去る。(七)焰魔の使は、老少を斥

(一)眞乘。佛道を指す。
(二)結緣。因緣を結ぶ意。
(三)達摩(Dharma)法の梵音。
(四)菩提の行。菩提(Bodhi)譯して智又は覺と云ふ。即ち佛智を獲んとする修行を指す。
(五)緣務。作業事務等。
(六)經。涅槃經の文。
(七)焔摩(Yama)死の神。

命期既に近付かば、身を捨てゝ更に(一)精進せよ。

三に、本住處を移す用心。

(二)三界の火宅を出でゝ、九品の(三)淨刹に入らん。

四に、(四)本尊を奉請する用心。

諸佛の前に在つて、轉法輪を請ぜよ。

五に、業障を(五)懺悔する用心。

罪業の雲厚くも、懺悔の風に散ぜん。

六に(六)菩提心を發す用心。

(七)本覺本有の吾なれば、發心すれば即ち成佛す。

七に、極樂を觀念する用心。

極樂は實に外になし、(八)我性常に内に樂む。

八に、決定往生の用心。

(九)來迎の佛、何にか出づ、最後の念の中に來る。

九に、沒後追修の用心。

(一)精進。努力奮勵。

(二)三界。欲界、色界、無色界。

(三)淨刹。漢梵雜糅の名にして、淨土の意。

(四)本尊。行者の尊信する佛菩薩。

(五)懺悔。自己が爲したる罪過を、本尊に白狀し、罪障消滅を祈ること。

(六)菩提心。菩提(Bodhi)即ち覺悟を求むる心。

(七)本覺。本來覺悟せる身。

(八)我性。我等凡夫が生れながらに有する覺性。

(九)來迎。命終の時、佛菩薩が來現して、淨土へ迎ふる意。

一期大要秘密集

（多く密藏に依る、師に就て受くべし。）

覺鑁上人

夫れ一期の大要は、最後の用心にあり。(一)九品の(二)往生は、臨終の正念に任せたり。佛道を求むる者は、當に此の心を習ふ可し。出離生死は、只此の(三)刹那にあり。密藏の要義を集めて、九種の用心と爲し、(四)三惡の罪霧を拂うて、九品の蓮月を望まん。若し最後臨終の軌儀に依らば、破戒の僧尼も必ず往生を得ん。造惡の男女も、定んで極樂に生ぜん。何に況んや有智(五)有戒をや。何に況んや善男善女をや。是れ即ち眞言祕觀の致す所なり。深く信じて狐疑すること勿れ。

一に、身命を惜む可き用心。

病を療し安穩を致し、往生の業を積んと欲す。

二に、身命を惜まざる用心。

(一)九品、九等の品位。上々品、上中品、上下品、中上品、中々品、中下品、下上品、下中品、下下品。

(二)往生。死後に地獄極樂に往き生まるゝを云ふ。

(三)刹那(Ksana)最短時間

(四)三惡。具には三惡道。地獄、餓鬼、畜生。

(五)有戒。持戒清淨の人。

の四摂法行と云ひて、菩薩の諸位に遍して、初後の位に通る行にてあるなりと〇云云

只心を一にし、志を全うして、徒に過す時節なく、佛道修行を勵むより外には、法師の役はなきことなり。其物ぐさくば、軈て衣服を脱ぎ替へ俗になるべき。法師にては、中々大に罪深かるべし。凡そ佛道修行には、何の具足もいらぬ也。松風に睡を覺し、朗月を友として、究め來り究め去るより外の事なし。又獨り場内床下に心を澄さば、いかなる友かいらん。喩へば猶ほ其上は、罪あるによりて地獄に墮ちなば、退位の菩薩の地獄にあるにてこそめらめ、本より地獄には、諸の菩薩ありと云へば畏しからず。須らく佛法に志有らん人は、急ぎ罪なき事を知りきはめて、少分の過をも息めんとかせぐべきなり。

嘉禎四年戊戌六月二日、高山寺關伽井小坊に於いてこれを書す。猶ほ隨つて求め出してこれを書き加ふべし。

遺弟非人沙門高信

栂尾明慧上人遺訓 終

布施にて、佛の禁め給ふ五戒(一)十重を破る種に遣ひ失ふこそ、末代と云へども悲けれ。餘りに深く迷へる者は、迷へるとだにも知ざるが如く、餘りに不當になりて、かやうにて身過ぎにするを、大罪とだにも思ひとがめぬまでになれり。此れ程に大に理に背きぬる上は、必定して地獄に墮すべし。さればせめて法師になりたる思ひ出に、法を悟るまでこそ叶はずとも、人身を失はぬまでの、振舞ひ心使ひをだにもせよかしと。云云

只樣もなく三寶を信ずる心を發すべきなり。設ひ三寶を信ずるに、罪を得ることを聞くとも、力なくこれを信仰したからんをば如何せん。惡事をも罪うることと聞けども、したきことなれば、其をも行じこそすれ。是は先世に正法を聞くべき善業に感じて、其故にこれを信ずれば、功德を得る事を、何れの人もなしに信ぜしと云事はあらじと。云云

聊の流にすこしきの木を一をも打渡して、人の寒苦を資くる行をもなし、又聊なれども、人の爲に情け情けしくあたるが、聽て無上菩提までも貫きて至る也。かやうの事は、誰々もいと何ど無き樣に思へり。是が則ち菩薩の(二)布施愛語利行同事

(一)十重　十重禁戒のこと。

(二)布施愛語等、法施財施を以て衆生を攝招するを布施攝、親愛の語を以て攝招するを愛語攝三業の善行を以て衆生を利益し攝招するを利行攝、形を變して衆生に同して攝招するを同事攝と云ひ、共に菩薩の衆生を度脫せしむるに就き衆生を攝招するの方便なり。

禮と名けたり。されば心に入りて、只今生身の御前に參りたる心地して、南無大恩教主釋迦牟尼如來と禮すればこそ、諸佛如來も、是が爲に教主となりて、彼に應じ給へば、能禮所禮相順して、功德をも得、罪業をも滅すれ、加樣に眞信とも無くて、過ぐる法師程に畏しき大盜大誑惑の者は、よも俗家にはあらじと、覺え侍べり。佛の番々に出世して、衆生を佛になさんとし給ふ法を盜みて、我身過ぎにすることこそ淺猿けれ。在家の人は、上一人より始めて、下萬民に至るまで、其品々の役に依りて、うけ繼ぎて身命を繼ぐ恩を蒙れり。法師は出家してより、かゝる恩をば蒙るまじき者なり。されば衣食共に父母親類のくるゝも、皆檀那の信施物に當るなり。然るに心地の開きたることもなく、持戒清淨なることもなく、不信懈怠のありさまにて、自身を養ふのみならず、剩へ眷屬をさへ扶持しはぐくむこと、大きに理に背けり。大に理に背くが故に、罪業免るべからず。罪業免れぬ故に、地獄に入らんこと疑ひあるべからず。此佛法を盜みて、天下の祈りするとて、寺領を知行し、檀那の祈禱をするとて、供析を取り、(一)三業も靜まらぬ勤め行法、破戒無慙の立振舞のみにて、明けぬ暮れぬと過ぎ行きて、結句此の供析

(一)三業　身と口と意との三所に行ふ行業のこと。

ぬる程の者は、稽古の力を積まば、さすがなるやうなれども、何も利勘へがましき有所得にかゝりて、拙き風情を帯するなり。少きよりやさしく數寄て、實しき心立したらん者に、佛法をも敎へ立てて見るべきなり。

末代は曲事月に隨ひ年に添ひて、假令げになりて、誠しき心立てしたるは少なし。されば何事をすれども、成就する事難し。

當初本寺に有し時、大衆群りて、勤めせし躰をつく〴〵と見て、不覺の涙を拭ふ事のみありき。十二時中、多分徒らに紛れ過して、適佛前に望みて、片時の勤めする程だにも、眞信にもなし。目の見様、顏もち、手の持ち様、居すまひ、又行道の作法、疎略極まりもなし。かやうにては、讀經も陀羅尼も何の功德も無ければ、只人目計りに役拂ひがてら、出たる煩ひ計りにて、天下の護持にもならず、檀那の信施をも消さず、さるに付ては、驢胎馬腹に生ぜんこと、何の疑ひかあるべき。されば耻ある佛法者は、十二時中に徒らに過す時節少し。せめて其までこそ無からめ。適人中にさし出でたる時計りだにも、人目を耻づる氣色だにもなし。禮拜なんどするも。心に誠なくして何となく禮するをば、古人碓の上下する

益かあらん。かたがた無益なり。ヲロ能もあり、品も定まる程より、はや皆憍慢は起るなり。

當時は酒取り入りて飲まず、殺盗婬等の重禁の相あらはならざれば、随分に持ちたるは量りなきことなれども、未だ聖教の説に任せて振舞ふこともなし。昇進の習ひは、既に得たらんことをば是を琢き、未だ得ざらん所をば取懸るべし。聖教を以て定木として、我身に引き當て謬を直すべし。是『曼荼羅』釋に悉しくこれを載せらる。別にこれを尋ね見らるべし。

昔より人を見るに、心のすきもせず、耻なげに二心なる程の者の、佛法者になりたるこそつやつやなけれ。此趣き、契經のうちに佛も演べ給へり。論にも見えたり。少しも違はぬことなり。我は相人と云ふ者の持つなる相書を見ねども、大概佛祖の御詞の末を以て、推して人をも相するに、十が八九は違はず侍べり。心の數寄たる人の中に、目出度き佛法者は昔も今も出來るなり。頌詞を作り、歌連歌に携ふることは、強ち佛法にては無けれども、加樣のことにも心數寄たる人が、軈て佛法にもすきて智慧もあり、やさしき心使ひもけだかきなり。心の俗になり

らせて有んと思ひき。釋尊の御在世ならましかば、御後にして付きてまゐらせてありなまし。又衆を領して、先德の德にも及ばぬさまにて、和尚がましきありさま心うきことなり。如何なりともさはあらじ。佛の御前に向ひ參らせて、一分の德もなくば、生きて何かせんと思ひき。我は武士の家に生を受けたれば、武士にばしなりたらましかば、纔の此の世の一旦の耻見しとて、とくに死すべきぞかし、佛法に入りたらんからに、けきたなき心あらじ。佛法の中にて、又大强の者にならざらんやと思ひき。

適佛法に入りて習ふ所の法も、出離の要道とはしなさで、官位ならんとする程の纔に淺猿しきことに、しなさんと勵む程に、結句それまでも勵み出さて、病み付て何とも無げになりて死する也。嗟呼末代邊土の作法、何と成り行きたることどもやらん。こせ〳〵となりける者哉と、利口事とも有るまじきなりと。云云

憍慢と云ふ物は鼠の如し。瑜伽壇の砌りの諸家の學窓にも、くゞり入る物なり。我常に是を兩樣に申す。自ら知らずして佗の能く知られらんに熳して、問はず學ばず、大なる損なり。又我より劣りたらん者に向ひて、憍慢して詰伏せて又何の

修行を勸めたるは增るべし。佛も四人より少くて居するをば制し給へり。閑に片隅にとてあるは、物くさき者の心の引く方とて、好んで道心ある躰に云ひ作らんとするは、誑惑の心なるべし。身の安きまゝに眠り居て、世會してあるなり。或は坊造り、或は部屋がこひへだて、晝夜眠り居たるは、生きながら棺をさして入り籠りたる定なり。かくては何の世にか、佛にもなるべき。口惜き哉や。適人身を受けて幸に袈裟を纒ひ、佛法に入りて行道すると名づけて、何ともなきことにしなして、空しく三途に歸らんことよ。されば是れを歎きて、(一)建仁寺の僧正御房は連坊を造りて、一所にて人間世を打捨てゝ、一筋に道を願はん人を集めて、法友として萬事を打ち捨てゝ行道せんとすると語り給ひし、最もげにあらまほしき躰なり。自恣の僧とて功德深きも、同じ所に衆を結びて、互に共磨きにする故なり。いつか佛の片隅にて居睡りせよと敎へ給へる事のある哉。八萬の聖敎ひろければ、さる事もあらん。予は未だ見及ばざるところなり。

昔し、我小法師原の時より、(二)愛染王(三)五秘密等の秘法も次に覺えき。よき學生能付かんとも思はず、只紙に書き奉りたる釋迦如來なりとも、つかみ付きまゐ

(一)建仁寺等。京都建仁寺開山千光國師榮西のこと、日本禪宗の開祖にして、明慧上人の禪の師なり。建保三年寂。

(二)愛染王。愛欲を司る明王。赤色にして、三目忿怒視し、六臂に杵、鈴、弓、箭、蓮華を持し、獅子冠を頂き、赤蓮華に坐せり。

(三)五秘密。金剛薩埵を中心とし欲觸、愛、慢の四菩薩を四親近の眷屬として、同一の大蓮華に住する五尊のこと。

師なき時は、所の上首に依止すべし。互に皆此の如く下にならんとしたることなり。此の如くならずして、不和合にて集まり居るは、虎狼毒蛇に何ぞ異ならん。(一)阿難尊者の妹の尼御前、(二)迦葉尊者に對し奉りて、腹を立て地獄に墮つと見えたり。分々に隨へば、今の世にも、僧に對して腹立したらば、地獄の業なり。然るを此等の程のことをば、罪造りたりとも思はずして、我も人も過行くは淺猿しきことなり。

菩提と云ふことは、始め只内心少し、法理に順じて、無下に甲斐なげなるまでも、内に自ら人法二空に順じたれば、人に勝れたりと思ふことなし。ますぐにし居たらん者は、即ち此の生にも佛の加護あらん。其加護と云ふは、即ち理に契ひて信力ありて心やさしからんずる也と。云云

道場に入る毎に生身の佛の御坐すと思ひて、正しく生身の如來の御前に望む思をなすべし。木に刻み繪に書きたるを生身と思へば、軈て生身にてあるなりと。云云、寂靜を欣びて、空閑にあることは、如何樣にも勇猛精進にて、(三)頭陀門の行者等に取りての上のことなり。尋常の行者は、衆を結んで居て、互に過を守りて、

(一)阿難尊者 釋尊十大弟子の一。佛の從弟。二十餘年間佛の左右に侍して多聞第一の稱あり。

(二)迦葉尊者 佛十大弟子の一。成道第三年に歸佛し、弟子中の上座なり。頭陀第一の稱あり。

(三)頭陀門 修治陶汰等と譯す、煩惱の塵垢を拂ひ去りて、佛道を求むること、即ち修行のこと。

成ぜんや。我いふ所の徒者といふは、先身心を道の中に入れて、恣に睡眠せず、引くまゝに任せて雜念をも起さず、自由なるに隨って坐相をも亂らず。終日終夜志此の如くにして、能をも嗜まず、藝をも求めず、佛に成らんとも思はず、道を成ぜんとも願はず、人中の昇進更に投げ捨て、一切求むる心なくして、徒者になりかへりて、一生はてんと大願を立て給へとなり。佛に成らんと思ひてこそ、出家學道をもするに、佛に成らんとも思ふなと云ふ、畏しなんと疑ふべからず。左樣にては、道を成ずることは更にあるまじきなり。我は人を佛になさんとこそ思へ人を邪路に導かんとすることはなし。たゞ我を憑みて信ずるとならば、此の方便を信ずべし。生涯此の如くの徒者になりかへらば、豈徒なることあらんや。

師資の樣、極めて佛法に重きことなり。直饒百歲なりとも、法を知らずんば、十歲の比丘に隨ひて法を聞けと。云云禮佛讀經大小便等を除きて、餘は一々に師に申せと。云云

此の比は如法の佛法の外は、よも過にもならじと覺えたり。狼の尾の端を切りて、集まり居たるやうなりと。云云

（一）沙彌　勸策果と譯し、惡を息めて慈悲の行を修する出家の男子のこと。出家後未だ修行熟せざる初心の僧を云ふ。

人の過を云ふ程の者は、我身に德のなきをりのことなり。德と云ふは得なりとて、德を好む人にあるなり。人の過をのみ求むれば、過のみこそあれ。更に德の住處にては無きなりと。云云

若し佛の在世にあらば、何れの（一）沙彌法師にだにも及ぶまじき身にて、師の氣色する淺猿しきことなり。

我常に志ある人に對して云ふ、佛になりても何かせん、道を成しても何かせん一切求め心を捨てはてゝ、徒者になりかへりて、兎も角も私にあてがふことなくして、飢來れば食し、寒來れば被るばかりにて、一生はて給はゞ、大地をば打ちはづすとも、道をうちはづすことは有るまじきと申すを、傍にて人聞きて、さては徒ら者になりたるがよきことござんなれと、我も左樣にならんと思ひて、飽まで食し、飽まで眠り、或は雜念に引かれて時を移し、或は雜談を述べて日を暮し、衆の爲に益無き益をもなさず、寺の爲めに假にも扶けにならず、明けぬ暮れぬと過ぎ行きて、我こそ何もせずして、徒者になりぬれと思はゞ是れは畜生の徒者になりかへりたり。是の如くならば、必定して地獄の數となるべし、何ぞ佛果を

るはあじきなきことなり。假令千年萬年生くべくとも、よからんことをのみ好むべきに、電光朝露の身に、一度も惡しき態をせんは、淺猿しくおこがましきことなり。

佛に代りて法を說きて、供養を受くる時、そゞろごとゞも云ひて施を受くる、淺猿しきこと也。說法とは、物を取ると知りて佛意を忘れたり。此等の禁め『寶積經』にあり。說法の篇より法師共云ふなり。眞實の法を說く師の邊にあるは、實に佛の在世に異ならずと。云云

近來の人は、何としたるやらん、尋常なる定、生死を出づると云ふ計りを以て佛教と知りたり。偏に(一)二乘の涅槃を執するに似たり、是の體のことを人の惡しく申すと申せば、還りて我慢に似たり。是れ佛法の滅することを歎くなり。法滅と云ふは、佛法の缺け失するを法滅と云ふに非ず。是れ體のことの興するを法滅と云ふなり。此趣委しく『出現問記』に載せられたり。引見すべし。凡夫は有性をだにも知らず、而るを佛道は無性より入るなり。我等がやうなる者の、かゝる我執にて入る所やあると求むるに、如何にもさる佛教はあるまじきなりと。云云

(一)二乘の涅槃　佛の聲教を聞きて悟るを聲聞、十二因緣を觀じて悟るを緣覺と云ふ。涅槃は滅度と譯し、煩惱生死を滅して、寂滅の彼岸に至るの意なり。二乘は菩薩に異なり、唯生死を出づるに急にして衆生濟度の心なし。

見えわかず、是れ末代の故なり。年に添ひ日に隨ひて、なほ末には、此の比程のことも少くなりなんと。云云

末代の淺猿しさは、如說修行は次になりて、よき定一部の文字を讀み終りては、又異文をのみ讀みたがりて、只讀みつもる計りをことゝして、物の用に立て、如說修行の心なし。戯論妄想の方には心引かれて、實しきことは物ぐさげなり。是を以て佛になるまじき我心をも相すべきなりと。云云

相構へて〳〵師をば能く〳〵計ひて設くべきなり。或は親の命、或は友に引かれ、又便宜に依りて、等閑に有るべからず。(一)『圓覺經』には、(二)作止任滅の四病を除くを師とせよと云云。委くは(三)『注圓覺經』第四の卷にこれ有りと。云云

我身のやう法の如くにも非ず、剩へ破戒無慚なることのみあれども、人の甚だ信仰して威德あることあり。其をいしき事と思ふべからず。(四)『寶積經』に云はく、「末法には魔力を與へてかゝること有るべし、正見の者は傍にあり」と見えたりと。云云

世に久しく在りぬべくもなき身に、はかなき事をするまでも、名聞に心のかゝ

(一)『圓覺經』『大方廣圓覺修多羅了義經』と云ひ、一卷あり。佛陀多羅譯。
(二)作止任滅 作は心造心作の意。止は止妄即眞の意。任は隨緣任情の意。滅は寂滅の義。
(三)『注圓覺經』『圓覺經鈔』六卷。宗密禪師の作。
(四)『寶積經』『大寶積經』一百二十卷。唐の菩提流支の譯。

（一）滅後無福の身　釋尊入滅の後生れたる不幸福の身なりとの意。

施をすれば、功徳なくして只勞して功なし。法師も又戒力缺けて、三業收らぬやうにて、よき物食ひ、布施とらむとすること、大切なるやうに覺えて、眞信ならぬ心に『經』を讀み、陀羅尼を滿てたれば、亡者の資とはならぬのみに非ず、此の信施の罪に依て、面々惡道に隨つべし。共に無益に淺猿き末世の作法なり。能々眞俗實に損取らぬやうにあてがふべきなり。我等が果報を一度は悲み、一度は悅ぶべし。悲むべきは（一）滅後無福の身、悅ぶべきは佛法結緣の心也。

左右なく法を授くれば、身語したゝまらず、身語したゝまらざれば、かへりて毒となるなり。法は無相なれば、いで臥せらんなんと云ふ人出來るなりと。云云

高僧等の神異は、不可思議にてさて置きつ。なか〳〵志しわりなきは、神通もなき人々の命を捨て、生を輕くして天竺にわたり、さま〳〵佛法を修行したる、殊に哀れに羨しく覺ゆるなり。

上古は智者の邊の愚者は、皆益を蒙りき、近來はゆゝしけなる人のあたりなる愚者は、還りて學生智慧の爲に迷はかされて、いよ〳〵法理に背けり。

今は勝れて善き人もなく、勝れて惡き人もなし。何れも同じやうにて、善惡も

る程のことなり。げに手にも持たず、口にも取らずと云ふ詞は正直なれども、頭に被りたることの外よりあらはに見ゆるを知らずして、取らざる由陳ずるが如し哀なることなり。

昔は我(一)實相の理を證しては、弟子をして又此理を授く。末代は證理の智無ければ、世間の面をかざりて、俗境に近づくを先として、剰へ寺の興隆佛法とては田樂猿樂の裝束に心を費して、一生を暮すのみなりと。云云或寺より田樂の頭に當りたるとて、さる學生奔走する由、人の語り申しける次でに仰せらるゝなり。

佛法に入ると云ふは、實に別の事なり。佛法に能く達したりと覺しき人は、彌よ佛法うとくのみなるなり。

人は常に(二)淨頗離鏡に、日夜の振舞のうつる事を思べし、是は陰れたる所なれば、是は心中に竊に思へば、人知らじと思ふべからず。曇り陰れなく彼の鏡にうつる。耻かましきことなり。

亡者の爲に、懇なる作善をなせども、或は名聞利養有所得に心移りて、不信の

(一)實相　如實の相狀、即ち柳は綠花は紅のありのまゝのすかたのこと。

(二)淨頗離鏡　地獄の閻魔の廳にありと云ふ鏡。これに照せば亡者生前の善惡の行業悉くその儘に映すと云ふ。

我幼稚の昔より、聖教を見るも、佛の思食し企てたる法の趣を知らんと思ふ計にて、別に學生に成らんとも、人に譽められんとも、思ひしことは無かりしなり。

我は師をば儲けたし、弟子はほしからず、尋常は聊の事あれば、師にはなりたがれども、人に隨て一生弟子とはなりたがらぬにや。弟子持て仕立てたからんよりは、佛果に至るまでは、我心をぞ仕立つべき。又佛は、一切有德の人を崇重し給ふが故に、一切衆生の上に居して、天人の師たりと。云云

此草菴に來臨して、法門問ふ人に、いかに文々句々諳に覺えあつめて、學生立てする人も、近代は曾て心(一)眞諦をば見ざるなりと云へば、何かは云はず、聽て腹立つ程に力なき事なり。(二)『涅槃經』に云はく「我今汝等のために說く、心眞諦を見ず。是の故に久しく生死の苦海に流轉す」と。此の心眞諦と云ふは、如何なる事なれば、知とも不知とも、見とも不見とも、底を盡して尋ね明らめてこそげに知りたるを見ずと云ふ、腹立もあらめ。腹立するにて、聽て知らざることは顯るゝなり。世俗にいふ、盜人の鍋を偸みて、頭に被りけるをば、つや〳〵思ひ忘れて、鍋失せたりとて主の尋ぬる時、兩手を開き出して、我は鍋とらぬと陳ず

(一)眞諦　眞實の深き道理

(二)『涅槃經』佛の入滅の時說き玉へる經。南本北本の別あり。

(一)學生　學者のこと。

(二)有所得　有と云へば有を捕へ、無と云へば無を捕へて、心を一物に存して執着すること。

(三)波斯匿王　月光、勝軍等と譯す。舍衛國の王にて、祇陀太子の父なり。釋尊の說法に依りて、深く佛教に歸せり。

佛法者と云ふは、まづ心が無染無著にして、其上に物知りたるは(一)學生、驗あれば驗者、眞言師とも云ふ也。能もなく、驗もなきは、無爲の僧なるべし。若纔に(二)有所得ならば、更に佛法者と云ふに足らずと。云云

(三)波斯匿王、佛に白して言く、我母既に逝去しぬ、若人あつて是を生けしむる者あらば、國城妻子をも捨て、我身命をも施して報ずべしと。云云 今の世の人、少しうれしかることはありとも、これ程の憂愁は更にあるべからず。上古末代大國邊夷懸に隔たることは皆心得られたり。悲しき哉と。云云

末代の習は、適學ぶ所の法を以ては、名利をかざりて、法の本意を得ず。故に法印たる二空の道理をば捨て目を見せず。若し近代の學生の云ふ樣なるが實の佛法ならば、諸道の中に、惡き者は佛法にてぞあらん、只思ふに心得ざる人を友としては、何の所詮かあらん。愁歎するに堪へたり。

我學道するやうは、諸佛菩薩はいかゞ佛道をば修行し給ひけんとのみ守り居たれば、近代の學生の爲には其益もなし。されども、佛の糸惜く思食しけるやらん形の如く佛道修行の用になる程は、心中ばかりは明かにして滯りなしと。云云

(一)諸天善神　佛法守護の天部及び神祇
(二)羅漢僧　阿羅漢の證果を得たる僧侶

も、心身正しくして、有べき様にだに振舞はゞ、一切の(一)諸天善神も、是を護り給へり。願も自ら叶ひ、望もたやすく遂ぐるなり。むつかしくこせめかんよりも、何もせずして、只正くしてぞ在るべき、心つかひは、物に觸れて誑惑がましく、欲深く、身の振舞は、いづくとなく物荒く、不當に放逸にては、證果の(二)羅漢僧に誂へて、百萬の經卷を讀ましめ、千億の佛像を造つて祈るとも、口穢くて經讀者の罰あたるが如し。心穢くて祈する者は、彌ゝ惡き方にはなり行くとも、所願の成就する事は、ふつと有るまじきなり。其を愚なる者、心をば直さずして、己れが恣まゝの欲心ばかりに纏されて、祈らば何にか叶はざらんと、猥りに憑をかけて、愚痴なる欲心深き法師請取りて、心神を惱まし、骨髓を摧きて、祈り叶へぬ物故に、地獄の業を作り出すこそ、げに哀れに覺ゆれと。云云

人常に云く、物をよく知れば、憍慢起ると云ふ事心得ず、物をよく知れば、憍慢こそ起らね。憍慢の起らんはよく知らぬにこそと。云云

東寺の塔を、一條口にて見たる程に佛性を見たらん者は、終に九條へ至らんが如し。此のこと極めて有りがたしと。云云

(一)經陀羅尼 佛の說きたまへる教法を經とよび、陀羅尼は總持と翻して、文簡なれども種々の善法を集め持ちて散失せしめざるを云ふ。眞言と云へる是れなり。

かいなめくりてけきたなき心有るべからず。左樣にては頭を丸めたりと云ふ計にて、人身を失はぬまでも有りがたし。すゝき法師など云ふ田樂法師に、何ぞ異ならんと。云云

上古、佛法を愛樂しけん人の心は、此の比名利に貪する人の如くこそありけめと覺ゆると云ふ事、予多年云ふ事にて有るに、是に少しも違はぬ文、『阿含經』に有りけり後日にこれを見る。云云

吾は人に追從するなんど申されんは今は苦しからず、心に全く名聞利養の望なし。又佛像經卷を勸進してとらせんなど申す事だにもなし。其より下は、衆生界に向ひては、隨分の慈心を以てせざらん外は、別の事有るべからず。乞食癩病なりとも、我を侮るなんど思はれん事は、心うき恥なり。

人の施は、內に叶ふ德ありて受くるは福なり、破戒の比丘、若し後世の報なくば、衣は炎網となりて身を焦し。食は熱輪となりて腹を穿たん事、必定して疑ひなかるべし。

人は我祈のためとて、(二)經陀羅尼の一卷をもよまず、燒香禮拜の一度をもせずと

栂尾明慧上人遺訓

（一）文暦二年乙未夏の比より始めて、人の聞き持てるを集めて之を記す、定て誤あらん歟。

人は阿留邊幾夜宇和と云ふ、七文字を持つべきなり。僧は僧のあるべき様、俗は俗のあるべき様なり。乃至帝王は帝王のあるべき様、臣下は臣下のあるべき様なり。此あるべき様を背く故に、一切惡しきなり。

我は後世たすからんと云ふ者に非ず、たゞ現世に先あるべきやうにて、あらんと云ふ者なり。

佛法修行は、けきたなき心あるまじきなり。武士なんどは、けきたなき振舞しては、生きても何かせん。佛法もかくなめくりて、人に隨ふて、尋常の義ともにて、足りなんと思ふべからず。叶はぬまでも、佛智の如く、底を究めて知らんと勵むべし。多く知らずは、非學生とこそ、云はれんずれども、其は苦しからず。

（一）文暦二年等。貞永元年正月明慧上人寂後三年の集なり。第三周忌に際してなるべし。

鸞上人は『唯信鈔文意』に「來はかへるといふ。きたるといふ。法性のみやこへむかへてかへらしむとなり。法性のみやこより衆生利益のために娑婆界にきたりたまふゆゑに來をきたるといふなり」と釋す。

（一）方便　衆生を攝化し給ふ善巧方便。

（二）慶西　下野眞岡の人なり。

たるとまをす。（一）方便なり。さとりをひらきては、かへるとまをす。ときにしたがひて、きたるとも、かへるとも、まをすとみえてさふらふ。なにごとも〳〵、また〳〵まをすべくさふらふ。

二月九日　親鸞

（二）慶西御坊御返事

御消息集　終

をすゝめんためときこえたり。また十方衆生の疑心をとゞめんれうときこえてさふらふ。『彌陀經』の十方諸佛の(一)證誠のやうにてきこえたり。詮ずるところは、(二)方便の御誓願と信じまゐらせさふらふ。(三)念佛往生の願は如來の(四)往相迴向の正業正因なりとみえてさふらふ。まことの信心あるひとは、(五)等正覺の彌勒とひとしければ「如來とひとし」とも、諸佛のほめさせたまひたりとこそ、きこえてさふらふ。また彌陀の本願を信じさふらひぬるうへには、「(六)義なきを義とす」とこそ(七)大師聖人の仰せにてさふらへ、かやうに義のさふらふらんかぎりは、他力にはあらず自力なりときこえてさふらふ。また、他力とまをすは、無智不思議にてさふらふなるときに、煩惱具足の凡夫の無上覺のさとりをえさふらふなることをば(八)佛と佛のみ御はからひなり。さらに行者のはからひにあらずさふらふ。しかれば、「義なきを義とす」とさふらふなり。義とまをすことは、自力のひとのはからひをまをすなり。他力には、しかれば「義なきを義とす」とさふらふなり。このひと〳〵のおほせのやうは、これには、つや〳〵としらぬことにてさふらへば、とかくまをすべきにあらずさふらふ。また(九)來の字は、衆生利益のためには、きう

中の第十七の願には、我名を諸佛に咨嗟稱揚せられんと誓ひ給へるが故に、此の願名あり。咨嗟とは讃嘆することなり。
(一)證誠 「阿彌陀經」には、諸佛が念佛の大利の眞實なるを證明し給ふことを說けり。
(二)方便 勸信誠疑のため、名號流布のための善巧方便なり。
(三)念佛往生の願 第十八の願、此の願に誓ふ所は、衆生往生の正業正因なり。
(四)往相迴向 淨土に往生する因果を如來より衆生に迴施し給ふをいふ。
(五)等正覺の彌勒 『末燈鈔』の第二章第三章第七章を見よ。
(六)義 はからひ
(七)大師聖人 法然上人。
(八)佛と佛 『末燈鈔』第七章を見よ。
(九)來 來迎の來の字を答釋す。親

をつたへたまふべくさふらふ。あなかしこ〳〵。

親鸞

性信御坊へ

一〇

親鸞ひと〴〵のおほせられてさふらふ(一)十二光佛の御ことのやう、かきしるしてくだしまゐらせさふらふ。くはしくかきまゐらせさふらふべきやうもさふらはず、をろ〳〵かきしるしてさふらふ、詮ずるところは、(二)無礙光佛とまをしまゐらせさふらふことを本とせさせたまふべくさふらふ。無礙光佛はよろづのものゝあさましきわろきことにはさはりなく、たすけたまはんれうに、無礙光佛とまをすと、しらせたまふべくさふらふ。あなかしこ〳〵。

十月廿一日　親鸞

(三)唯信御坊御返事

一一

(四)諸佛稱名の願とまをし、諸佛咨嗟の願とまをしさふらふなるは、十方衆生

(一)十二光佛　『無量壽經』に、阿彌陀佛の光明に就て十二の德を擧げて名となす。經に言く「是故に無量壽佛をば、無量光佛、無邊光佛、無礙光佛、無對光佛、燄王光佛、清淨光佛、歡喜光佛、智慧光佛、不斷光佛、難思光佛、無稱光佛、超日月光佛、と號す」

(二)無礙光佛　『阿彌陀經』に言く「彼の佛の光明無量にして、十方の國を照すに、障礙する所なし。是故に號して、阿彌陀と爲す」天親菩薩の『淨土論』に曰く「世尊我一心に盡十方無礙光如來に歸命す」。

(三)唯信　常陸に唯信といふ親鸞の門弟三人あり。飯田の唯信、戶守の唯信、畠谷の唯信今その何れなるかを知らず。

(四)諸佛稱名　阿彌陀佛の四十八願

にごとかさふらふ、念佛のうたへのこと、しづまりてさふらふよし。かた〳〵よりうけたまはりさふらへば、うれしふこそさふらへ、いまは、よく〳〵念佛もひろまりさふらはんずらんと、よろこびいりてさふらふ。これにつけても、御身のれうは、いまさだまらせたまひたり。念佛を御こゝろにいれてつねにまをして、念佛そしらんひと〳〵、この世、のちの世までのことを、いのりあはせたまふべくさふらふ。御身どものれうは御念佛は、いまは、なにかは、せさせたまふべき。たゞ、ひがふたる世のひと〳〵をいのり、彌陀の御ちかひにいれとおぼしめしあはゞ佛の御恩を報じまゐらせたまふになりさふらふべし。よく〳〵御こゝろにいれてまをしあはせたまふべくさふらふ。(一)聖人の廿五の御念佛も詮ずるところは、かやうの邪見のものをたすけんれうにこそ、まをしあはせたまへと、まをすことにてさふらふへば、よく〳〵念佛そしらんひとを、たすかれとおぼしめして、念佛しあはせたまふべくさふらふ。またなにごとも、たび〳〵便にはまふしさふらひき。源藤四郎殿の便にうれしうまをしさふらふ。あなかしこ〳〵。

(二)入西御坊のかたへも、まをしたうさふらへども、おなじことなれば、このや

(一)聖人。法然上人。建暦二年正月二十五日に寂す。されば親鸞上人は歸洛の後、毎月二十五日に、念佛勤行して師恩に謝し給へり。

(二)入西。常陸の人なり。初、叡山に登りて、台教を學習し、後本國に歸り山林に居して修道せしが、親鸞上人に謁して其の弟子と爲り、建長四年に寂す。

へ。日ごろ、やう〳〵の御ふみどもを、かきもちておはしましあふてさふらふかひもなくおぼえさふらふ『唯信鈔』やう〳〵の御文どもは、いまは詮なくなりてさふらふ、とおぼえさふらふ。よく〳〵かきもたせたまひてさふらふ法門は、みな詮なくなりてさふらふなり。慈信坊にみなしたがひて、めでたき御文どもは、すてさせたまひあふてさふらふと、きこえさふらふこそ、詮なく、あはれにおぼえさふらへ。よく〳〵『唯信鈔』『後世物語』なんどを御覧あるべくさふらふ。年ごろ信ありとおほせられあふてさふらひけるひと〳〵は、みなそらごとにてさふらひけりと、きこえさふらふ。あさましくさふらふ、〳〵。なにごとも〳〵、また〳〵まをしさふらふべし。

正月九日　　親鸞

（一）眞淨御坊

九

くだらせたまひてのち、なにごとかさふらふらん、この（二）源藤四郎殿に、おもはざるにあひまゐらせてさふらふ。便のうれしさにまをしさふらふ。そのゝち、な

（一）眞淨　常陸鹿島の人なり。

（二）源藤四郎　何人なるか詳ならず。

うに慈信坊がまをすことを、(一)これよりまふしさらふと御こゝろえさふらふ、ゆめ〳〵あるべからずさふらふ。法門のやうもあらぬさまにまふしなしてさふらふなり。御耳にきゝいれらるべからずさふらふ。きはまれるひとがごとどもきこえさふらふ。あさましくさふらふ。入信坊なんども不便におぼえさふらふ。鎌倉にながゐしてさふらふらん。不便にさふらふ。當時それ(二)もわづらふべくてぞ、さてもさふらふらん。ちからをよばずさふらふ。(三)奥郡のひと〳〵の慈信坊にすかされて、信心みなうかれあふておはしましさふらふなること、かへす〳〵あはれにかなしふおぼえさふらふ。これも、ひと〳〵をすかしまふしたるやうに、きこえさふらふこと、かへす〳〵あさましくおぼえさふらふ。それも日ごろ、ひと〳〵の信のさだまらずさふらひけることの、あらはれて、きこえさふらふ。かへす〳〵不便にさふらひけり。慈信坊がまをすことによりて、ひと〳〵の日ごろの信のたぢろぎあふておはしましさふらふも、詮ずるところは、ひと〳〵の信心のまことならぬことのあらはれてさふらふ。よきことにてさふらふ。それを、ひと〳〵はこれよりまをしたるやうに、おぼしめしあふてさふらふこそ、あさましくさふら

(一)これ　親鸞上人、自を指して言ふ。

(二)わづらふ　煩累。

(三)奥郡　久慈郡那珂郡は常陸の最北邊なれば、彼の地方をいへるか。

（一）佛天　佛のことをいふ。佛は五天の中の最上の天なり。五天とは世天（人王）、生天（三界の諸天）、淨天（聲聞、緣覺）、義天（菩薩）、第一義天（佛）をいふ。即ち佛は第一義天なるが故に佛天といふ。

させたまひさふらふらん。念佛をさへらるなんどまをさんことに、ともかくもなげきおぼしめすべからずさふらふ。念佛とゞめんひとこそ、いかにもなりさふらはめ、まをしたまふひとは、なにかくるしくさふらふべき。餘のひと〳〵を緣として念佛をひろめんと、はからひあはせたまふこと、ゆめ〳〵あるべからずさふらふ。そのところに念佛のひろまりさふらはんことも、（一）佛天の御はからひにてさふらふべし。慈信坊がやう〳〵にまをしさふらふなるによりて、ひと〳〵も、御こゝろどものやう〳〵にならせたまひさふらふよし、うけたまはりさふらふ。かへす〳〵不便のことにさふらふ。ともかくも佛天の御はからひにまかせまゐらせたまふべし。そのところの緣つきておはしましさふらはゞ、いづれのところにても、うつらせたまひさふらふておはしますやうに、御はからひさふらふべし。慈信坊がまをしさふらふことをたのみおぼしめして、これよりは餘の人を強緣として念佛ひろめよとまをすこと、ゆめ〳〵まをしたることさふらはず。きはまれるひがごとにてさふらふ。この世のならひにて、念佛をさまたげんことは、かねて佛のときをかせたまひてさふらへば、をどろきおぼしめすべからず。やうや

きかせたまふべし。あなかしこ〳〵。

十一月九日　親鸞

信慈御坊

七

(一)眞佛坊、性信坊、入信坊、このひと〳〵のことうけたまはりさふらふ。かへす〳〵なげきおぼえさふらへども。ちからをよばずさふらふ。また餘のひと〳〵の、おなじこゝろならずさふらふらんも、ちからをよばずさふらふ。ひと〳〵のおなじこゝろならずさふらへば、とかくまをすにをよばず。いまは、ひとのうへも、まをすべきにあらずさふらふ。よく〳〵こゝろえたまふべし。

親鸞

慈信御坊

八

さては念佛のあひだのことによりて、ところせきやうに、うけたまはりさふらふ。かへす〳〵こゝろぐるしくさふらふ。詮ずるところ、そのところの縁ぞつき

(一)眞佛、俗名は椎尾彌三郎春時、上野眞壁の人なり十七歳にして親鸞の門に歸し、貞永元年、二十四歳師命によりて下野高田の專修寺を繼ぎ、正嘉二年三月八日、年五十にして寂す。

いたづらごとにてありけりとて、かた〳〵ひと〳〵、やう〳〵にまをすなることこそ、かへす〳〵不便のことにきこえさふらへ。やう〳〵のふみどもをかきてもてるを、いかにみなしてさふらふやらん。かへす〳〵おぼつかなくさふらふ。慈信坊のくだりて「わがきゝたる法文こそまことにてはあれ。ひごろの念佛はみないたづらごとなり」とさふらへばとて、(一)おほぶの(二)中太郎のかたのひとは、九十なん人とかや、みな慈信坊のかたへとて、中太郎入道をすてたるとかや、きゝさふらふ。いかなるやうにてさやうにはさふらふぞ。詮ずるところ信心のさだまらざりけりときゝさふらふ。いかやうなることにて、さほどにおほくのひと〳〵のたぢろぎさふらふらん、不便のやうときゝさふらふ。またかやうのきこへなんどさふらふへば、そらごともおほくさふらふべし。また親鸞も偏頗あるものときゝさふらへば、ちからをつくして『唯信鈔』『後世物語』『自力他力』の文のこゝろども、(三)二河の譬喩なんどがきて、かた〳〵へ、ひと〳〵に、くだしてさふらふも、みなそらごとになりてさふらふと、きこえさふらふは、いかやうにすゝめられたるやらん。不可思議のことゝきゝさふらふこそ不便にさふらへ。よく〳〵

(一)おほぶ　常陸國那荷西郡、大部の郷。

(二)中太郎　何人なるか詳ならず。大部の郷に住し入道して念佛を勧持したる人と見ゆ。但し大部には平太郎入道あり。三州如意寺の繪傳には平太郎を忠太郎と記傳せり。さればこの忠太郎はかの平太郎と同人にてはなきか。

(三)二河の譬喩　善導の『散善義』に説かれたる信心守護の喩なり。貪瞋を水火の二河に喩へ、信心を中間の白道に喩へ、釋迦の發遣と彌陀の招喚に順ひ直に進んで西方の彼岸に到ることを釋顯す。

(一)慈信坊御返事

(二)入信坊、(三)眞淨坊、(四)法信坊にも、このふみをよみきかせたまふべし、かへす〳〵不便のことにてさふらふ。性信坊には、春のぼりてさふらひしに、よく〳〵まをしてさふらふ。くげどのにも、よく〳〵よろこびまふしたまをべし、このひと〳〵の、ひがごとをまふしあふてさふらへばとて、道理をばうしなはれさふらはじとこそおぼえさふらへ、世間のことにもさることのさふらふぞかし、領家地頭名主のひがごとすればとて、百姓をまどはすことはさふらはぬぞかし。佛法をばやぶるひとなし。佛法者のやぶるにたとへたるには、(五)「師子の身中のむしのしゝをくらがごとし」とさふらふへば、念佛者をば佛法者のやぶりさまたげさふらふなり。よく〳〵こゝろえたまふべし。なを〳〵御ふみにはまをしつくすべくもさふらはず。

六

九月廿七日の御文くわしくみさふらひぬ。さては御こゝろざしの錢伍貫文、十一月九日にたまはりてさふらふ。さてはゐなかのひと〳〵、みな年來念佛せしは

(一)慈信。善鸞。親鸞の第三子。父命を奉じて關東に弘化し、一宗の教義に反する所ありしを以て法を嗣ぐことを得ず。弘安九年三月六日七十歳にして奥州大網に寂す。

(二)入信。佐竹義秀の長子。深く世を厭ひ、穴澤に隱居し、一夜雲夢を感じて、親鸞を稻田に訪ひ、其の弟子と爲りて入信と號し、常陸大畠の壽命寺を創す。又八田知朝、親鸞上人の弟子と爲り入信と號し、常陸大曾根の常福寺を創す。彼此別人なり。今この御文に出づる入信は、其の何れなるかを知る能はず。

(三)眞淨。常陸鹿島の人なり。

(四)法信。常陸小島の人なり。

(五)獅子の身中のむし。「蓮華面經」に說かれたる喩。

(一)瞋毒。瞋恚怒り腹立つ心。三毒の一なり。

(二)方便破壞。種々の手段を加へて正法を破滅せんとするをいふ。

(三)善導。善導の『法事讃』の説。

(四)釋迦如來『目連所問經』の説

口にもいふまじきことをまをすべきやうに、まをされさふらふこそ、信願坊がまをしやうとはこゝろえずさふらふ。往生にさはりなければとて、ひがごとをこのむべしとは、まをしたることさふらはず。かへす〳〵こゝろえずおぼえさふらふ。詮ずるところ、ひがごとをまをさんひとは、その身ひとりこそ、ともかくもなりさふらはめ。すべてよろづの念佛者のさまたげとなるべしとはおぼえずさふらふ。また、念佛をとゞめんひとは、そのひとばかりこそ、いかにもなりさふらはめ。よろづの念佛するひとのとがとなるべしとはおぼえずさふらふ。「五濁増の時、疑謗多し、道俗相嫌ひて聞くことを用ひず。修行すること有るを見ては(一)瞋毒を起し、(二)方便破壞して競ふて怨を生ず」と、まのあたり、(三)善導の御をしへさふらふぞかし。(四)釋迦如來は、無眼人に名く、「無耳人と名く」と、とかせたまひてさふらふぞかし。かやうなるひとにて念佛をもとゞめ念佛者をもにくみなんどすることにてもさふらふらん。それは、かのひとをにくまずして、念佛をひと〳〵まをして、たすけんとおもひあはせたまへとこそ、おぼえさふらへ。あなかしこ〳〵。

九月二日　　親鸞

(一)遠江の尼御前　何人なるか詳ならず、遠江の念佛を信ずる名家の尼公なり。

(二)信願。傳、未詳。藤井八郎信親承久元年、常陸稲田に於て親鸞聖人の弟子と爲り、信願と號す。今この御文に出づる信願と同人なりや否や詳ならず、恐らくは別人ならん。

(三)病。『涅槃經』に「病に二種あり、一には身病、二には心病」と說けり。

五

文かきてまゐらせさふらふ。このふみをひと〳〵にもよみてきかせたまふべし。(一)遠江の尼御前の、御こゝろにいれて御沙汰さふらふらん。かへす〳〵めでたくあはれにおぼえさふらふ。よく〳〵京よりよろこびまをすよしをまをしたまふべし、(二)信願坊がまをすやう、かへす〳〵、不便のことなり。わるき身なればとてことさらにひがごとをこのみて、師のため善知識のためにあしきことを沙汰し、念佛のひと〳〵のためにとがとなるべきことをしらずば、佛恩をしらず、よく〳〵はからひたまふべし。また、ものにくるふて死にけんひと〳〵のことをもちて、信願坊がことをよしあしとまをすべきにはあらず。念佛するひとの死にやうも、身より(三)病をするひとは、往生のやうをまをすべからず。こゝろより病をするひとは、天魔ともなり地獄にもおつることにてさふらふべし。こゝろよりおこる病と身よりおこる病とはかはるべければ、こゝろよりおこりて死ぬるひとのことをよく〳〵御はからひさふらふべし。信願坊がまをすやうは、凡夫のならひなれば、わるきことこそ本なればとておもうまじきことをこのみ、身にゐすまじきことをし、

念佛のひと〴〵のさはりとなり、師のためにも、善知識のためにも、とがとなさせたまふべしとまをすことは、ゆめ〳〵なきことなり。彌陀の御ちかひに、まうあひがたくしてあひまゐらせて、佛恩を報じまゐらせんとこそ、おぼしめすべきに、念佛をとゞめらるゝことに、沙汰しなされてさふらふらんこそ、かへす〴〵こゝろえずさふらふ。あさましきことにさふらふ。ひと〴〵のひがざまに御こゝろえどものさふらふゆゑ、あるべくもなきことども、きこえさふらふ。まをすばかりなくさふらふ。たゞし念佛のひと、ひがごとをまをしさふらはゞ、その身ひとりこそ、地獄にもおち、天魔ともなりさふらはめ、よろづの念佛者のとがになるべしとはおぼえずさふらふ。よく〳〵御はからひどもさふらふべし。なを〳〵念佛せさせたまふひと〴〵、よく〳〵この文を御覽じとかせたまふべし。あなかしこ〳〵。

九月二日　　　　親鸞

念佛之人々御中へ

ふらふ。(一)善導和尚は「(二)五濁増の時、疑謗多し。(三)道俗相嫌ひて聞くことを用ひず。修行すること有るを見ては瞋毒を起し、方便破壊して競ふて怨を生ず」とたしかに釋しをかせたまひたり。この世のならひにて、念佛をさまたげん人は、そのところの領家地頭名主の、やうあることにてこそさふらはめ。とかくまをすべきにあらず。念佛せんひと〴〵は、かのさまたげをなさんひとをば、あはれみをなし、不便におもふて、念佛をもねんごろにまをして、さまたげなさんを、たすけさせたまふべしとこそ、ふるきひとは、まをされさふらひしか。よく〳〵御たづねあるべきことなり。つぎに、念佛せさせたまふひと〴〵の、彌陀の御ちかひは(四)煩惱具足のひとのためなりと信ぜられさふらふは、めでたきやうなり。たゞし、わるきものゝためなりとて、ことさらに、ひがことをこゝろにもおもひ、身にも口にもまふすべしとは、浄土宗にまふすことならねば、ひと〴〵にもかたることさふらはず。おほかたは煩惱具足の身にて、こゝろをもとゞめがたくさふらひながら往生をうたがはずせんとおぼしめすべしとこそ、師も(五)善知識もまをすことにてさふらふに、かゝるわるき身なれば、ひがごとを、ことさらにこのみて、

(一)善導和尚。唐の善導の「法事讃」の說。

(二)五濁増の時 劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁の増長したる時節をいふ。

(三)道俗。出家の道人、在家の俗人

(四)煩惱具足。八萬四千の煩惱を悉く具へたる劣機をいふ。

(五)善知識。正道を說きて善く人を教へ導く人をいふ

の諸佛菩薩の利益によりて、よろづの善を修行せしかども、自力にては生死をいでずありしゆゑに、曠劫多生のあひだ、諸佛菩薩の御すゝめによりて、いま、まうあひがたき彌陀の御ちかひに、あひまゐらせてさふらふ御恩をしらずして、よろづの佛菩薩をあだにまをさんは、ふかき御恩をしらずさふらふべし。佛法をふかく信ずるひとをば、天地におはしますよろづの神は、かげのかたちにそへるごとくして、まもらせたまふことにてさふらへば、念佛を信じたる身にて、天地の神をすてまをさんとおもふこと、ゆめ〳〵なきことなり。神祇等だにもすてられたまはず。いかにいはんや、よろづの佛菩薩をあだにもまをし、をろかにおもひまゐらせさふらふべしや、よろづの佛をゝろかにまをさば、念佛信ぜず、彌陀の御名をとなへぬ、身にてこそさふらはんずれ。詮ずるところは、そらごとをまをし、ひがごとを、ことにふれて念佛のひと〳〵におほせられつけて、念佛をとゞめんとするところの(一)領家地頭名主の、御はからひどものさふらふらんことよく〳〵(二)やうあるべきことなり。そのゆゑは、(三)釋迦如來のみことには、念佛するひとをそしるものをば「無眼人」とゝき「無耳人」と名くとおほせをかれたることにさ

(一)領家地頭名主　國を領する者を領家、少分の地を主る者を地頭、一郷に長たる者を名主といふ。

(二)やうある　様子ある事。

(三)釋迦如來のみこと。『目連所問經』の說。『安樂集』に引用せり。

あらず無念にあらずとまをすことを、あしうきゝなして、有念無念なんどまをしさふらひけるとおぼえさふらふ。彌陀の選擇本願は行者のはからひのさふらはねばこそ、ひとへに他力とはまをすことにてさふらへ。一念こそよけれ、多念こそよけれ、なんどまをすこともゆめ〳〵あるべからずさふらふ。なを〳〵一念のほかにあまるところの御念佛を、(一)法界衆生に廻向すとさふらふは、釋迦彌陀如來の御恩を報じまゐらせんとて、十方衆生に廻向せられさふらふらんは、さあるべくさふらへども、二念三念まをして往生せんひとを、ひがごととは、さふらふべからず、よく〳〵『唯信鈔』を御覧さふらふべし。念佛往生の御ちかひなれば、一念十念も往生はひがごとにあらずとおぼしめすべきなり。あなかしこ〳〵。

十二月廿六日　親鸞

教忍御坊御返事

三

まづ、よろづの佛菩薩をかろしめまゐらせ、よろづの(二)神祇冥道をあなづり、すてたてまつるとまをす。このことゆめ〳〵なきことなり。世々生々に無量無邊

(一)法界衆生。一切世界の衆生。

(二)神祇冥道　神は天上の神、祇は地上の神、冥道は冥府の閻魔王などをいふ。

ゝおぼしめされさふらはゞ、ひがごとにてさふらふべし。(一)念佛往生の本願とこそ、おほせられてさふらへば、おほくまをさんも、一念一稱も往生すべしとこそうけたまはりてさふらへ。かならず一念ばかりにて往生すといひて、多念をせんは往生すまじきとまをすことは、ゆめ〳〵あるまじきことなり『唯信鈔』をよく〳〵御覽さふらふべし。また(二)有念無念とまをすことは他力の法門にはあらぬことにてさふらふ。(三)聖道門にまふすことにてさふらふなり。みな自力聖道の法文なり。阿彌陀如來の(四)選擇本願念佛は有念の義にもあらず、無念の義にもあらずと、まをしさふらふなり。いかなる人まをしさふらふとも、ゆめ〳〵もちひさせたまふべからずさふらふ。聖道にまをすことをあしざまにきゝなして、淨土宗にまをすにてぞさふらふらん。さら〳〵ゆめ〳〵、もちひさせたまふまじくさふらふ。また慶喜とまをしさふらふことは、他力の信心をえて、往生を一定して、むずとよろこぶこゝろをまをすなり。常陸國中の念佛者のなかに、有念無念の念佛沙汰のきこえさふらふは、ひがごとにさふらをと、まふしさふらひにき。たゞ詮ずるところは、他力のやうは行者のはからひにてはあらずさふらへば、有念に

(一)念佛往生。彌陀の四十八願中の第十八を念佛往生の願と稱す。一念往生とも多念往生とも名けず。

(二)有念無念 『末燈鈔』一の第一章に説示せり。

(三)聖道門 淨土門に對す、諸善萬行を修して、此土に於て聖果に悟入する自力門の道をいふ。

(四)選擇本願念佛 彌陀因位の本誓に、諸善萬行を簡び捨てゝたゞ稱名念佛の一行を選び取れり、されば本願の念佛は有念の事觀にも非ず。無念の理觀にも非ず。

事はさふらふべからず。御念佛を、こゝろにいれてまをさせたまふべしと、おぼえさふらふ。あなかしこ〳〵。

七月九日　　　　親鸞

性信御坊

(一)護念坊のたよりに(二)教忍御坊より、錢二百文、御こゝろざしのもの、たまはりてさふらふ。さきに念佛のすゝめのもの、かた〳〵の御なかよりとて、たしかにたまはりてさふらひき。人々に、よろこびまふさせたまふべくさふらふ。この御返事にておなじ御こゝろにまをさせたまふべくさふらふ。さては、この御たづねさふらふことは、まことによき御うたがひどもにてさふらふべし。まづ一念にて往生の業因はたれりとまをしさふらふは、まことにさるべきことにてさふらふべし。さればとて、一念のほかに、念佛をまをすまじきことにはさふらはず。そのやうは(三)『唯信鈔』にくはしくさふらふ。よく〳〵御覽さふらふべし。一念のほかにあまるところの念佛は、十方の衆生に廻向すべしとさふらふも。さあるべきことにてさふらふべし。十方の衆生に廻向すればとて、二念三念せんは往生にあしきこと

(一)護念　下總猿島の人なり。
(二)教忍　常陸田中の人なり。
(三)『唯信鈔』。聖覺法印の撰、その終には一念義の所執を委しく評誡せり。

りあはせたまふべけれ。母姉妹なんど、やうやうにまをさるゝことは、ふるごとにてさふらふ。さればとて念佛をとゞめられさふらひしが、よにくせごとのをこりさふらひしかば、それにつけても念佛をふかくたのみて、世のいのりに、こゝろにいれてまをしあはせたまふべしとぞ、おぼえさふらふ。御文のやう、おほかたの陳状、よく御はからひどもさふらひけり。うれしくさふらふ。詮じさふらふところは、御身にかぎらず、念佛まをさん人々は、わが御身の(一)料はおぼしめさずとも、朝家の御ため國民のために念佛をまをしあはせたまひさふらはゞ、めでたふさふらふべし。往生を不定におぼしめさん人はまづわが身の往生をおぼしめして御念佛さふらふべし。わが御身の(二)往生一定とおぼしめさん人は、佛の御恩をおぼしめさんに、御報恩のために、御念佛こゝろにいれてまをして、世のなか安穩なれ、佛法ひろまれと、おぼしめすべしとぞ、おぼえさふらふ。よく〱御案さふらふべし。このほかは別の御はからひあるべしとはおぼえずさふらふ。なを〱とく御くだりのさふらふこそ、うれしふさふらへ。よく〱御こゝろにいれて往生一定とおもひさだめられさふらひなば、佛の御恩をおぼしめさんには、こと

(一)料。量なり。度なり今は我身のためにはかることといふ。

(二)往生一定。彌陀の淨土に往生するこすとの間違なく定まりたるをいふ。

かやうのことを、こゝろえぬ人々は、そのことゝなきことをまをしあはれてさふらふ。よく／＼つゝしみたまふべし。かへす／＼。

二月三日　　親鸞

二

六月一日の御文、くわしくみさふらひぬ。さては鎌倉にての御(一)うたへのやうはをろ／＼うけたまはりてさふらふ、この御文にたがはずうけたまはりてさふらひしに、別のことはよもさふらはじとおもひさふらひしに、御くだりうれしくさふらふ。おほかたはこのうたへのやうは、御身ひとりのことにはあらずさふらふ。すべて淨土の念佛者のことなり。このやうは、(二)故聖人の御とき、この身どものやう／＼にまをされさふらひしことなり。こともあたらしきうたへにてさふらふなり。(三)性信坊ひとりの沙汰のあるべきことにはあらず。念佛まをさんひとは、みなおなじこゝろに御沙汰あるべきことなり。御身をわらひまをすべきにはあらずさふらふべし。念佛者のものにこゝろえぬは、性信坊のとがにまをしなさんは、さはまれるひがごとにさふらふべし。念佛まをさん人は、性信坊のかたうどにこそな

(一)うたへ。訴訟。關東念佛者中に不了の徒ありて、或は恣に造悪を許し、或は神拂を輕しんずる等の事ありしかば、世人深く察せず、過を性信房に歸して鎌倉に訟へ、念佛を停止せられんことを請ふ。

(二)故聖人　法然上人。

(三)性信　俗名は與四郎、姓は大中臣氏、常陸鹿島の人なり。十八歳の時、法然上人に道を問ひ、遂に親鸞の弟子爲り、後師命により關東に留まり、下總横曾根に在りて弘教し、飯沼を墳めて報恩寺を創す。建治元年七月十七日、八十九歳にして寂す。

親鸞聖人御消息集

一

なにごとよりは、如來の御本願のひろまらせたまひてさふらふこと、かへす〴〵めでたくうれしくさふらふ。そのことにをの〳〵ところ〴〵に、われはといふことをおもふて、あらそふことゆめ〳〵あるべからずさふらふ。京にも(一)一念多念なんどまをす、あらさふことの、おほくさふらふやうにあること、さら〳〵さふらふべからず。たゞ詮ずるところは『唯信鈔』(二)『後世物語』『自方他力』、この御文どもをよく〳〵つねにみて、その御こゝろにたがへずおはしますべし。いづかたの人々にもこのこゝろをおほせられさふらふべし。なをおぼつかなきことあらば、今日までいきてさふらへば、わざともこれへたづねたまふべし。(三)鹿島、行方、そのならびの人々にも、このこゝろをよく〳〵おほせらるべし。一念多念のあらそひなんどのやうた、詮なきこと、論じごとをのみ、まをしあはれてさふらふぞかし。よく〳〵つゝしむべきことなり。あなかしこ〳〵。

(一)一念多念　法然上人の門下の中に信の一念に往生決定したる上は強ちに稱念を要せずと執する者と、多念の稱名の功積もりて臨終に往生の業事を成ずるなれば一念にてはおぼつかなしと執する者との諍ありしをいふ。

(二)『後世物語』『後世物語聞書』撰者、詳ならず。信空上人の作ならんとも隆寛律師の撰ならんともいふ。いづれも法然上人の高弟なり。『唯信鈔』『自力他力』は『末燈鈔』の第十九章にも出づ。彼の章を見よ。

(三)鹿島行方　常陸の東邊の二郡。親鸞上人嘗て行化せられし地なり。

(一)『寶號經』。『寶號王經』。藏中に無し。『彌陀經義集』に引用せり。
(二)たもつ。佛名を衆生に執持せしめんとの御約束。
(三)善。如來廻向の善。
(四)名號。名號を父に譬へて因と爲し、光明を母に喩へて緣となし、父母より子の生るゝが如く光明名號の因緣により眞實信心を獲て報土の眞身を得證すと釋顯するなり。

信心のおこることは、釋迦彌陀の二尊の御はからひよりおこりたりと、しらせたまふべし。穴賢々々。

二

(一)『寶號經』にのたまはく、「彌陀の本願は、行にあらず、善にあらず、たゞ佛名を(二)たもつなり」名號はこれ(三)善なり、行なり。行といふは、善をするについていふことばなり。本願はもとより佛の御約束とこゝろえぬるには、善にあらず、行にあらざるなり。かるがゆゑに他力とまをすなり。本願の(四)名號は、能生する因なり。能生の因といふは、すなはちこれ父なり。大悲の光明は、これ所生の緣なり。所生の緣といふは、すなはちこれ母なり。

末燈鈔 終

凡斯御消息者、念佛成佛之咽喉、愚癡愚迷之眼目也。可レ祕々々而已。

慈俊 春秋四十四

くさふらふ。往生の金剛心のおこることは、佛の御はからひよりおこりて候へば、金剛心をとりて候はん人は、よも師をそしり、善知識をあなづりなんどすることは候はじとこそおぼえ候へ。この文をもて、かしま、なめかたの南の莊、いづかたもこれにこゝろざしおはしまさん人には、おなじ御こゝろによみきかせたまふべく候。穴賢々々

建長四年二月廿四日

二〇

安樂淨土にいりはつれば、すなはち大涅槃をさとるとも、また無上覺をさとるとも、滅度にいたるともまをせば、御名こそかはりたるやうなれども、これみな(一)法身と申す佛のさとりをひらくべき(二)正因に、彌陀佛の御ちかひを、(三)法藏菩薩われらに(四)廻向したまへるを、(五)往相の廻向とまをすなり。この廻向せさせたまへる願を(六)念佛往生の願とは申すなり。この念佛往生の願を一向に信じて、ふたごゝろなきを、一向專修とは申すなり。如來(七)二種の廻向とまをすことは、この二種の廻向の願を信じ、ふたごゝろなきを、眞實の信心とまをす。この眞實の

(一)法身。法性に隨順して一切の功德法を以て成ずる覺體をいふ。
(二)正因。淨土に往生して滅度をさとる正因、即ち大行大信を、本願に誓はせ給ひ、其の正因を衆生に廻向し給ふ。是を往相廻向といふ。
(三)法藏。梵名は曇摩迦留(Dharmākara)。阿彌陀佛の因位。四十八願を建て給ふ。
(四)廻向。廻轉趣衆。願行の功德を向生に廻施するをいふ。
(五)往相。還相に對す。極樂に往生する因果を佛より廻施し給ふをいふ。
(六)念佛往生。第十八願。
(七)二種の廻向。往相廻向。還相廻向。

ゞこそ、世をいとふしるしにても候はめ、また往生の信心は釋迦、彌陀の御すゝめによりておこるとこそみえて候へば、さりとも、(一)まことのこゝろおこらせたまひなんには、いかゞ(二)むかしの御こゝろのまゝにては候べき。この御中の(三)人々も、少々はあしきさまなることのきこえ候めり。師をそしり、善知識をかろしめ、同行をもあなづりなんどしあはせたまふよしきゝ候こそ、あさましく候へ。すでに謗法のひとなり。五逆のひとなり。なれむつぶべからず(四)『淨土論』と申す文には、「かやうの人は、佛法信ずるこゝろのなきより、このこゝろはおこるなり」と候めり。また(五)至誠心のなかには、「かやうに惡をこのまんひとには、つゝしみてとをざかれ、ちかづくべからず」とこそ、とかれて候へ。(六)「善知識同行には、したしみちかづけ」とこそ、ときをかれて候へ。惡をこのむ人にもちかづきなんど・することは、淨土にまゐりてのち、衆生利益にかへりてこそ。さやうの罪人にもしたじみちかづくことは候へ。それもわがはからひにはあらず。彌陀の(七)ちかひによりて、御たすけにてこそ、おもふさまのふるまひも候はんずれ。當時は、この身どものやうにては、いかゞ候べからんとおぼえ候。よく／＼案ぜさせたまふべ

(一)まことのこゝろ。眞實の信心。
(二)むかし。無信仰の昔。
(三)人々。鹿島、行方、奧郡の念佛する人々。
(四)『淨土論』。後魏の曇鸞の『淨土論註』。「五逆罪は正法なきより生ず」と云へり。
(五)至誠心。唐の善導の『觀經散善義』の至誠心の釋。其の疏文は上に註出せり。
(六)善知識。善導の『往生禮讃』に雜修の十三失を明す中に、同行善知識に親近せざるが故に」と説けるを反顯す。
(七)ちかひ。第二十二の還相廻向の誓願。

とて、こゝろにまかせて、みにもすまじきことをもゆるし、くちにもいふまじきことをもゆるし、こゝろにもおもふまじきことをもゆるして、いかにもこゝろのまゝにてあるべしと、まをしあふて候らんこそ、返々不便におぼえ候へ、ゑひもさめぬさきになほ酒をすゝめ、毒もきえやらぬにいよ〳〵毒をすゝめんがごとし。くすりあり毒をこのめと候らんことは、あるべくもさふらはずとこそおぼえ候、佛の御名をきゝ、念佛を申して、ひさしくなりておはしまさん人々は、後世のあしきことをいとふしるし、この身のあしきことをば、いとひすてんとおぼしめすしるしも候べしとこそおぼえ候へ、はじめて佛のちかひをきゝはじむる人々の、わが身のわろく、こゝろのわろきを、おもひしりて、この身のやうにてはなんぞ往生せんずるといふ人にこそ、煩惱具足したる身なれば、わがこゝろの善惡をばさたせず、むかへたまふぞ、とは申候へ。かくきゝてのち、佛を信ぜんとおもふこゝろふかくなりぬるには、まことにこの身をもいとひ、(一)流轉せんことをもかなしみて、ふかく(二)ちかひを信じ、阿彌陀佛をもこのみまをしなんどする人は、もともこゝろのまゝにて惡事をもふるまひなんどせじと、おぼしめしあはせたまは

(一)流轉。六趣四生の迷界を流れまはるをいふ。
(二)ちかひ。佛の誓願。

御弟子のなかにも、われはゆゝしき學生などとおもひあひたる人々も、この世にはみなやう／＼に法文をいひかへて、身もまどひ、人をもまどはして、わづらひあふて候めり。聖教のおしへをもみずしらぬをの／＼のやうにおはしますひと／＼は、往生にさはりなしとばかりいふをきゝて、あしざまに御こゝろえあることおほく候ひき。いまもさこそ候らめとおぼえ候。淨土の敎もしらぬ(一)信見房などが申すことによりて、ひがさまにいよ／＼なりあはせたまひ候らんをきゝ候こそ、あさましく候へ。まづをの／＼の昔は、彌陀のちかひをもしらず、阿彌陀佛をもまをさずおはしまし候ひしが、釋迦彌陀の御方便にもよほされて、いま彌陀のちかひをきゝはじめておはします身にて候なり。もとは無明の酒にゑひて、(二)貪欲、(三)瞋恚、(四)愚癡の三毒をのみ、このみめしあふて候ひつるに、佛のちかひをきゝはじめしより、無明の醉もやう／＼すこしづゝさめ、三毒をもすこしづゝこのまずして、阿彌陀佛のくすりを、つねにこのみめす身となりて、おはしましあふて候ぞかし。しかるに、なをゑひもさめやらぬに、かさねて醉をすゝめ、毒もきえやらぬに、なほ毒をすゝめられ候らんこそ、あさましく候へ。(五)煩惱具足の身なれば

(一)信見。初ば親鸞の敎を受けしが後には善乘房にくみして立川の邪流に入る。

(二)貪欲。わが情にかなひし物に愛着して貪るをいふ。

(三)瞋恚。わが情にさからふ者に對して怒るをいふ。

(四)愚癡。事に惑ひ理を辨へずしておろかなるをいふ。

(五)煩惱具足。三毒五欲等の煩惱を悉く具へたるをいふ。

すめ、(一)三毒をひさしくこのみくらふ人に、いよ〳〵毒をゆるして、このめと申しあふて候らん、不便のことに候。無明の酒に醉たるかなしみ、三毒をこのみくふて、いまだ毒もうせはてず、無明のゑひもいまださめやらぬ身にておはしましあふて候ぞかし。よく〳〵御こゝろえ候べし。

方々よりの御こゝざしの物ども、かずのまゝに、たしかにたまはり候。明教房ののぼられて候こと、ありがたきことに候。かた〳〵の御こゝろざし申しつくしがたく候。明法御房の往生のこと、おどろきまをすべきにはあらねども、返々うれしく候。鹿島(二)なめかたの奥郡、かやうの往生ねがはせたまふ人々の、みなの御よろこびにて候。又(三)ひらつかの入道殿の御往生のことき〻候こそ、返々申にかぎりなくおぼへ候へ。めでたさ申つくすべくも候はず。をの〳〵みな往生は一定とおぼしめすべし。さりながらも、往生をねがはせたまふ人々の御中にも、(四)御こゝろえぬことも候ひき。いまも、さこそ候らめとおぼえ候。京にも、こゝろえずして、やう〳〵にまどひあふて候めり。國々にもおほくきこえ候。法然聖人の

(一)三毒。貪欲、瞋恚、愚癡。

(二)なめかた。行方。

(三)ひらつかの入道。常陸の平塚入道信之。親鸞の教化を受けし人なり。

(四)御こゝろえぬこと。不心得のこと。

候。又々申候べし。この(一)明教房ののぼられて候こと、まことにありがたきことゝおぼえ候。明法御房の御往生のことを、まのあたりきゝ候も、うれしく候。人々の御こゝろざしも、ありがたくおぼえ候。かた〴〵この人々ののぼり不思議のことに候。この文をたれ〴〵にも、おなじこゝろによみきかせたまふべく候。このふみは奥郡におはします同朋の御中にみなおなじく御覧候べし。穴賢々々。

年比念佛して往生をねがふしるしには、もとあしかりしわがこゝろをもおもひかへして、とも同朋にも、ねんごろにこゝろのおはしましあはばこそ世をいとふしるしにても候はめとこそおぼえ候へ。よく〳〵御こゝろえ候べし。善知識を(二)をろかにおもひ、師をそしるものをば、(三)謗法のものと申なり。親をそしるものをば(四)五逆のものと申なり(五)「同座せざれ」と候なり。されば北の郡に候し善乘房は親を(六)のり、善信をやう〳〵にそしり候ひしかば、ちかづきむつまじくおもひ候はで、ちかづけず候ひき。明法御房の往生のことをきゝながら、あとををろかにせん人々は、その同朋にあらず候べし。無明の酒に醉たる人に、いよ〳〵ゑひをす

(一)明教。常陸富田の人なり。明法房の子なりともいふ。
(二)をろか。疎略。
(三)謗法。『決定總持經』には「法師を誹謗するは則ち法を謗るなり」と説けり。
(四)五逆。殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血を五逆罪といふ。親を誹るは殺父母の類逆なれば五逆の者と謂はるゝなり。
(五)同座せざれ。『地藏十輪經』には「若し誹謗すれば、共に住すべからず亦親近せざれ」と説けり。

て、わざとすまじきことどもをもし、おもふまじきことどもをもおもひなんどせんは、よく／＼この世のいとはしからず、身のわろきことをもおもひしらぬにて候へば、念佛にこゝろざしもなく、佛の御ちかひにもこゝろざしのおはしまさぬにて候へば、念佛せさせたまふとも、その御こゝろざしにては(一)順次の往生もかたくや候べからん。よく／＼、このよしを人々にきかせまゐらせさせたまふべく候かやうにも申すべくも候はねども、なにとなくこの邊のことを御こゝろにかけあはせたまふ人々にておはしましあひて候へば、かくも申し候なり。この世の念佛の義は、やう／＼にかはりあふて候ひぬれは、とかく申すにおよばず候へども、(二)故聖人の御をしへを、よく／＼うけたまはりておはします人々は、いまももとのやうにかはらせたまふこと候はず。世かくれなきことなれば、きかせたまひあふて候らん。淨土宗の義みなかはりておはしましあふて候人々も、聖人の御弟子にて候へども、やう／＼に義をもいひかへなどして、身もまどひ人をもまどかはしあふて候めり。あさましきことにて候なり。京にもおほくまどひあふて候めり。田舍はさこそ候らめと、(三)こゝろにくゝも候はず。なにごとも申しつくしがたく

(一)順次の往生。この次の生に淨土往生を遂ぐること。

(二)故聖人。亡き法然上人。

(三)こゝろにくゝも候はず。一本には「こゝろうく候」とあり。

果報にては候なれ。とかくはからはせたまふこと、ゆめ〳〵候べからず。さきに下しまゐらせ候ひし(一)『唯信鈔』『自力他力』なんどの文にて御覧候べし。それこそこの世にとりては、よき人々にておはします。すでに(二)往生をもしておはします人々にて候へば、その文どもにかゝれて候には、なにごとも〳〵すぐべくも候はず。法然聖人の御をしへを、よく〳〵御こゝろえたる人々にてはおはしまし候ひき。さればこそ往生もめでたくしておはし候へ。おほかたは、年比念佛まをしあひたまふ人々のなかにも、ひとへにわがおもふさまなることをのみ申しあはれて候人々もさふらひき。いまもさぞ候らんとおぼえ候。明法房などの往生しておはしますも、もとは不可思議のひがごとをおもひなんどしたるこゝろをもひるがへしなんどしてこそ候ひしか。われ往生すべければとて、すまじきことをもし、おもふまじきことをもおもひ、いふまじきことをもいひなどすることはあるべくも候はず。貪欲の煩惱にくるはされて、欲もおこり、瞋恚の煩惱にくるはされて、ねたむべくもなき因果をやぶるこゝろもおこり、愚癡の煩惱にまどはされて、おもふまじきことなどもおこることにてこそ候へ。めでたき佛の御ちかひあればと

(一)『唯信鈔』『自力他力』聖覺法印の『唯信鈔』、隆寬律師の『自力他力事』など、親鸞上人は幾度も書寫す。聖覺、隆寬は、いづれも法然上人の高足なり。

(二)往生。聖覺は文暦二年三月五日に往生す。隆寬は嘉祿三年十二月十三日に往生す。

(一)御名。改名を請はれたるに答ふるなり。
(二)隨信。下總信田の人なり。

(三)明法。楢原上宮寺の開基。もと播磨公辨圓といふ修驗者なりしが、親鸞を害せんと欲して稻田の草庵に至り、一見その德に服して弟子となり、明法房證信と號し。建長三年十月十三日寂す。
(四)大小。大乘の聖人(地上)、小乘の聖人(四果)。
(五)願力。如來の本願力。

臨終をも期し、來迎をもまたせたまふべし、この御文主の(一)御名は、(二)隨信房とおほせられ候はゞ、めでたくさふらふべし。この御ふみのかきやう、めでたく候。御同行のおほせられやうは、こゝろえず候。それをば、ちからおよばず候、あなかしこ〳〵。

十一月廿六日　親鸞

隨信御房

一九

御文度々まゐらせ候ひき。御覽ぜずや候ひけん。何事よりも、(三)明法の御房の往生の本意とげておはしまし候こそ、常陸國うちの、これにこゝろざしおはします人々の御ために、めでたきことにて候へ。往生はともかくも凡夫のはからひにてすべきことにても候はず。めでたき智者もはからふべきことにも候はず。(四)大小の聖人だにも、ともかくもはからはで、たゞ(五)願力にまかせてこそおはしますことにて候へ。ましておの〳〵のやうにおはします人々は、たゞこのちかひありときゝ、南無阿彌彌佛にあひまゐらせたまふこそ、ありがたくめでたくさふらふ。御

御たづね候ことは、彌陀他力の(一)廻向の誓願にあひたてまつりて、眞實の信心をたまはりて、よろこぶ心のさだまるとき、攝取してすてられまゐらせざるゆゑに、金剛心になるときを、正定聚のくらゐに住すとまをす。彌勒菩薩とおなじくらゐになるともとかれて候めり。彌勒とひとつくらゐになるゆゑに、信心まことなる人をば、佛とひとしとまをす。また諸佛の、眞實信心をえてよろこぶをば、まことによろこびて「われとひとしきものなり」ととかせたまひて候なり(二)『大經』には、釋尊のみことばに、「見て敬ひ、得て大に慶べば、則ち我が善き親友なり」とよろこばせたまひ候へば、「信心をえたる人は、(三)諸佛とひとし」ととかれて候めり。また彌勒をば、すでに佛にならせたまはんことあるべきにならせたまひて候へばとて、彌勒佛とまをすなり。しかれば、すでに他力の信をえたるひとをも佛とひとしとまをすべしとみえたり。御うたがひあるべからず候。御同行の(四)「臨終を期して」とおほせられ候らんは、ちからおよばぬことなり。信心まことにならせたまひて候人は、誓願の利益にて候うへに、攝取してすてずと候へば、來迎臨終を期させたまふべからずとこそ、おぼえ候へ。いまだ信心さだまらぬ人は、

(一)廻向。彌陀大悲の本願力を以て萬善萬德を名號に收め、之を衆生に施し與ふるをいふ。念佛も信心もその他力廻向の法なり。

(二)『大經』。『無量壽經』。

(三)諸佛とひとし『華嚴經』に「諸の如來と等し」と說けり。

(四)臨終。自力疑心の行者は、命終らんとする時に佛の來り迎ふることを期待す。

せば、世をいとふしるしもなし。されば(一)善導の御をしへには、「悪をこのむ人をばつゝしんでとをざかれ」とこそ、至誠心のなかには、をしへおかせおはしまして候へ。いつか「わがこゝろのわろさにまかせてふるまへ」とは候。おほかた經釋をもしらず、如來の御ことをもしらぬ身に、ゆめ〳〵その沙汰あるべくも候はず、あなかしこ〳〵。

十一月廿四日　　親鸞

一七

他力のなかには自力とまをすことさふらふと、きゝ候ひき。他力のなかにまた他力とまをすことは、きゝ候はず。他力のなかに自力とまをすことは、雜行雜修定心念佛をこゝろがけられて候人々は、他力のなかの自力のひと〳〵なり。他力のなかにはまた他力とまをすことは、うけたまはり候はず。なにごとも(二)專信房のしばらくもゐたらん」と候へば、そのとき申候べし穴賢々々。

錢貳拾貫文、慥給候。穴賢々々

十一月二十五日　　親鸞

(一)善導。唐の善導の『觀經散善義』の至誠心の釋に、「若し善業に非ずば、敬て之を遠ざかれ、また隨喜せざれ」と訓ふ。

(二)專信。遠江桑畑の人。初眞佛上人に師事し、安貞二年五月二日、高田に於て親鸞の弟子となる。

りけるにや、凡夫なればとて、なにごとも、おもふさまならば、ぬすみをもし、人をもころしなんどすべきかは、もとぬすみごゝろあらん人も、極樂をねがひ念佛をまをすほどのことになりなば、もとひがうたるこゝろをも、おもひなをしてこそあるべきに、そのしるしもなからん人々に、「惡くるしからず」といふこと、ゆめゆめあるべからず候。煩惱にくるはされて、おもはざるほかに、すまじきことをもふるまひ、いふまじきことをもいひ、おもふまじきことをもおもふにてこそあれ。さはらぬことなればとて、ひとのためにも、はらわろく、すまじきことをもし、いふまじきことをもいはゞ、煩惱にくるはされたる儀にはあらで、わざとすまじきこともせば、返々あるまじきことなり。(一)鹿島なめかたの人々のあしからんことをもいひとゞめ、その邊の人々のことにひがみたることをば制したまはゞこそ、(二)この邊より出來るしるしにては候はめ。「ふるまひは、なにとも、こゝろにまかせよ」といひつると候らん。あさましきことに候。この世のわろきをもすて、あさましきことをもせざらんこそ、世をいとひ念佛まをすことにては候へ。としごろ念佛する人なんどの、人のためにあしきことをもし、またいひも

(一)鹿島なめかた、常陸の國の鹿島行方。

(二)この邊。この親鸞の門より出でたるとなり。

ひまゐらせたまふべくさふらふ。穴賢々々。

十月廿七日　　　　親鸞

「南無阿彌陀佛」をとなへてのうへに「無礙光如來」をまをすは、あしきことなりと候なること、きはまれるひがごとときこえ候へ。(一)歸命は南無なり。無礙光佛は光明なり、智慧なり。この智慧はすなはち阿彌陀佛なり。阿彌陀佛の御かたちをしらせたまはねば、その御かたちを、たしかに〱しらせまゐらせんとて(二)世親菩薩、御ちからをつくして、あらはしたまへるなり。このほかのことは、少々文字をなをしてまゐらせさふらふなり。

慶信御房　御返事　　　親鸞

一六

なによりも、(三)聖教のをしへをもしらず、また淨土宗のまことのそこをもしらずして、(四)不可思議の放逸無慚のものどものなかに、「惡はおもふさまにふるまふべし」と、おほせられ候なること、かへす〱あるべくも候はず。北の郡にありし(五)善乘房といひしものに、つひにあひむつるゝことなくてやみにしをば、みざ

(一)歸命。南無(Namas)の譯語。如來の勅命に歸順するをいふ。

(二)世親。梵名は婆藪盤豆(vasubandhu)。舊譯には天親、新譯には世親といふ。

(三)聖教。佛祖の言教。經論釋。

(四)不可思議。言語道斷といふに同じ。

(五)善乘。初眞言宗を學び、後に淨土門に歸入し、立川流の邪義を唱ふ

せ候ことは、おそれあることにてこそあれ、いまめかはしく」と申しさふらふなる。このやう、いかゞさふらふべき。

一五

たづねおほせられて候事、かへすく\めでたく候。まことの信心をえたるひとは、すでに佛になりたまふべき御身となりておはしますゆゑに、如來とひとしき人と經にとかれて候なり。彌勒にいまだ佛になりたまはねども、このたびかならず佛になりたまふべきによりて、彌勒をばすでに彌勒佛と申候なり。その定眞に實信心をえたるひとをば、如來とひとしとおほせられて候なり。又(一)乘信房の彌勒とひとしと候も、ひがごとにては候はねども、他力によりて信をえてよろこぶ心は如來とひとしと候を、自力なりと候らんは、いますこし(二)乘信房の御こゝろのそこの、ゆきつかぬやうにきゝ候こそ、よく御案あるべくや候らん、自力のこゝろにて、我が身は如來とひとしと候はんは、まことにあしく候べし。他力の信心のゆゑに、淨信房のよろこばせたまひ候らんは、なにかは自力にて候べき、よくく\御はからひ候べし。このやうは、この人々にくはしく申候乘信御房にと

(一)乘信。乘信は「信心の人の正定聚に住したるを彌勒に等しと云はんは、さもあるべきことなれど、如來に等しと云はんは、肉身即成佛の眞言宗の所談に似て、自力ならんか」と云ひしなり。

(二)乘信。一本に承信と作せり。承信は常陸小栗の人なり。

業力ばかりにて、行住坐臥に時處の不淨をもきらはず、一向に金剛の信心ばかりにて、佛恩のふかさ、師主の恩德のうれしさ、報謝のためにたゞ御名をとなふるばかりにて、日の所作とす。このやう、ひがさまにや候らん。一期の大事たゞこれにすぎたるはなし。しかるべくは、よく〳〵こまかにおほせをかうふり候はんとて、わづかにおもふばかりを記して申上候。さては京にひさしく候ひしに、そう〳〵にのみ候ひて、こゝろしづかにおぼえず候ひしことの、なげかれ候ひて、わざといかにしてもまかりのぼりて、こゝろしづかに、せめては五日、御所にさふらはゞやとねがひ候なり、噫かうまで申候も御恩のちからなり。

進上、聖人の御所へ、(一)蓮位の御房申せ給へ。

十月十日　(二)慶信　上（在判）

追申上候。

念佛申候人々のなかに、「南無阿彌陀佛」ととなへ候ひまには「無礙光如來」ととなへまゐらせさふらふ人も候。これをきゝて、あるひとの申し候ふなる、「南無阿彌陀佛」ととなへてのうへに(三)「歸命盡十方無礙光如來」ととなへまゐら

(一〇)『彌陀經義集』法然上人の撰ともいへど疑はしく、或は親鸞上人の撰なりともいふ。今此の消息にては、親鸞上人の御作なるが如くに見ゆ。

(一)蓮位。源三位賴政の孫。俗名は宗重。承久元年刑せられんとするを親鸞上人に救はれて其の弟子となり常陸小島の三月寺に住す。弘安元年に示寂せり。

(二)慶信。下野高田の人なり。

(三)歸命盡十方無礙光如來。天親の『淨土論』の初に出づ。世に十字の名號といふ。

とおほせられて候やらん。これは(一)十一二三の御ちかひとこゝろえられ候。罪惡のわれらがためにおこしたまへる大悲の御ちかひのめでたくあはれみましますうれしさ、こゝろもおよばれず、ことばもたえて申しつくしがたきこと、かぎりなく候。(二)無始曠劫よりこのかた、過去遠々に、恒沙の諸佛の出世のみもとにて、大菩提心をおこすといへども、自力かなはで、(三)二尊の御方便にもよほされまゐらせて、(四)雜行(五)雜修自力疑心のおもひなし。無礙光如來の攝取不捨の御あはれみのゆゑに、疑心なくよろこびまゐらせて、一念にて往生さだまりて、誓願不思議とこゝろえ候ひなんには、きゝみ候にあかぬ淨土の聖教も、(六)知識にあひまゐらせんとおもはんことも、攝取不捨も、信も、念佛も、人のためとおぼえられず候。いま師主の御をしへのゆゑ、こゝろをぬきて御こゝろむきをうかがひ候によりて、(七)願意をさとり、(八)直道をもとめえて、まさしき眞實報土にいたり候はんこと、このたび(九)一念聞名にいたるまで、うれしき御恩のいたりに候。そのうへ(一〇)『彌陀經義集』におろ〳〵あきらかにおほせられ候。しかるに世間の悤々にまぎれて一時もしは二時三時おこたるといへども、晝夜にわすれず御あはれみをよろこぶ

(一)十一二三。四十八願中の第十一は必至滅度、第十二は光明無量、第十三は壽命無量を誓ふ。

(二)無始曠劫。いつを始といふこと無き遠き昔。曠は遠なり劫(Kalpa)は長時と譯す。

(三)二尊。彌陀と釋迦。

(四)雜行。淨土の正行に非ざる餘の善を修して往生せんとするをいふ。

(五)雜修。正業助業の分別なく念佛と餘の讀誦觀察等とを混修して共に往生の因と爲し、又は念佛しながら現世の福利を祈るをいふ。

(六)知識。善知識善く教ふる導師。

(七)願意。如來の本願の正意。

(八)直道。凡夫が直ちに報土に入る横超の大道。

(九)一念聞名。彌陀の名號を聞いて信ずる一念。

かりもあるべからず候へばこそ、他力とまをす事にて候へ。あなかしこ〳〵。

十月六日　　親鸞 御判

眞佛御房御返事

畏申候。

『大無量壽經』に「信心歡喜」と候。『華嚴經』をひきて（一）『淨土和讃』にも、「信心よろこぶそのひとを、（二）如來とひとしとときたまふ、（三）大信心は佛性なり、佛性すなはち如來なり」と、おほせられて候に、（四）專修の人のなかに、（五）あるひとのこゝろえちがへて候やらん「信心よろこぶ人を如來とひとしと（六）同行達ののたまふは自力なり、（七）眞言にかたよりたり」と申候なるは、人のうへをしるべきに候はねども申候。（八）また「眞實信心うるひとは、すなはち定聚のかずにいる、不退のくらゐにいりぬれば、かならず（九）滅度をさとらしむ」と候。滅度をさとらしむと候は、このたびこの身のをはり候はんとき、眞實信心の行者の心、報土にいたり候ひなば、壽命無量を體として、光明無量の德用はなれたまはざれば、如來の心光に一味なり、このゆゑに「大信心は佛性なり、佛性すなはち如來なり」

（一）『淨土和讃』親鸞聖人の撰。

（二）如來とひとし『華嚴經』に「諸の如來と等し」と說けり。

（三）大信心。『涅槃經』に「大信心は即ち是れ佛性なり、佛性は即ち是れ如來なり」と說けり。

（四）專修の人。專ら念佛の一行を修する人。

（五）あるひと。乘信房。

（六）同行達。同じ道を信じ行ずる人々。今は淨信房などを指す。

（七）眞言。眞言宗にては「父母所生身、速證大覺位」と談ず。

（八）また。『淨土和讃』に。

（九）滅度。涅槃（Nirvāṇa）の譯語。永く大苦を滅して迷妄を超度したる證果。

(一)有阿彌陀佛御返事

一三

攝取不捨の事

たづねおほせられて候。攝取不捨のことは、(二)『般舟三昧行道往生讃』と申すに、おほせられてさふらふを、みまゐらせ候へば、「釋迦如來、彌陀佛、われらが慈悲の父母にて、さま〴〵の方便にて、われらが無上の信心をばひらきおこさせたまふ」と候へば、まことの信心のさだまることは、釋迦彌陀の御はからひとみえて候。攝取のうへには、ともかくも行者のはからひあるべからず候。淨土へ往生するまでは、不退のくらゐにておはしまし候へば、正定聚のくらゐとなづけておはしますことにて候なり。まことの信心をば、釋迦如來、彌陀如來、二尊の御はからひにて發起せしめたまひ候とみえて候へば、信心のさだまるとまをすに、攝取のあづかるときにて候なり。そののちは、(三)正定聚のくらゐにて、まことの淨土へまゐるまでは候べしとみえ候なり。ともかくも、行者のはからひ、ちりば

(一)有阿彌陀佛。常陸笠間の城主、長門守時朝。入道して上人の敎化に浴す。

(二)『般舟三昧行道往生讃』、唐の善導の撰。「釋迦如來は實に是れ慈悲の父母なり。種々に方便して我等が無上の信心を發起せしむ」と言へり。親鸞上人は、善導の「玄義分」散善義、等に顯されたる彌陀釋迦二尊一致の旨趣より此の文を眺めて、恒に慈父と悲母とを釋迦と彌陀とに分けて其意を取る。

(三)正定聚。信心決定して攝取の光益にあづかれば、其の一念より正定聚に入り、淨土に往生して滅度を證るまでは、現生に於て正定聚の位に住すとなり。

(一)邊地。自力疑心の行者の止まる極樂の邊地。三寶を見聞し得ざる化土なり。信心爲本の宗義を誤解して「念佛して往生すと信ずる者は邊地に往生すべし」とて嫁ひし者ありき

五月廿六日　親鸞

一二

尋仰られ候念佛の不審の事、念佛往生と信ずる人は、(一)邊地の往生とてきらはれ候らんこと、おほかたこゝろえがたく候。そのゆゑは、彌陀の本願とまをすは、名號をとなへんものをば極樂へむかへんとちかはせたまひたるを、ふかく信じてとなふるが、めでたきことにて候なり。信心ありとも、名號をとなへざらんは詮なく候又一向名號をとなふとも、信心あさくば往生しがたく候。されば念佛往生とふかく信じて、しかも名號をとなへんずるは、うたがひなき報土の往生にてあるべく候なり。詮ずるところ、名號をとなふといふとも、他力本願を信ぜざらんは、邊地にむまるべし。本願他力をふかく信ぜんともがらは、なにごとにかは邊地の往生にて候べき。このやうをよく〳〵御こゝろえ候て、御念佛候べし。この身は、いまはとしきはまりて候へば、さだめてさきだちて往生し候はんずれば、淨土にて、かならず〳〵まちまゐらせ候べし。あなかしこ〳〵。

七月十三日　親鸞

たまふべく候。とかくの御はからひあるべからずさふらふなり。あなかしこく

五月五日　　　親鸞　御判

浄信御房へ

他力と申しさふらふは、とかくのはからひなきをまをしさふらふなり。

一一

四月七日の(一)御ふみ、五月廿六日たしかに見さふらひぬ。さてはおほせられたること(二)信の一念(三)行の一念ふたつなれども、信をはなれたる行もなし。行の一念をはなれたる信の一念もなし。そのゆゑは、行と申すは本願の名號を一聲となへて往生すと申すことをきゝて、ひとこゑをもとなへ、もしは(四)十念をもせんは、行なり。この御ちかひをきゝて、うたがふこゝろのすこしもなきを、信の一念とまをすなり、信と行と二ときけども、行をひとこゑするぞときゝてうたがはねば、行をはなれたる信はなしときゝて候。また信をはなれたる行なしとおぼしめすべしこれみな彌陀の(五)御ちかひと申すことをこゝろうべし。行と信とは御ちかひを申すなり。穴賢々々。いのち候はば、かならずのぼらせたまふべし。

(一)御ふみ。高田の覺信房の書狀。此の御書は「御消息集」にも載せられ、其の奥書に「覺信御房御返事」とあり。

(二)信の一念。彌陀の本願を聞信する一念。

(三)行の一念。一聲ハ稱名念佛。

(四)十念。十聲ハ念佛。經に「乃至十念」と說けり。

(五)御ちかひ。念佛も信心も彌陀の願力より廻向する所にして其の體佛智なり。それを其の願力廻向の義を釋顯するには、行は第十七願、信は第十八願に誓ひしと、分けて明せども、行者の受け心は別々には非ず一體不離の行信を獲得するなり。

このふみをもて、ひと〳〵にも、みせまゐらせさせたまふべく候。他力には義なきを義とはまをしさふらふなり。

一〇

佛智不思議と信ずべき事

御ふみ、くはしくうけたまはり候ひぬ。さては御法門の御不審に、(一)一念發起信心のとき、無礙の心光に攝護せられまゐらせ候ゆゑに、つねに淨土の業因(二)決定すとおほせられ候。これめでたく候。かくめでたくはおほせ候へども、これみなわたくしの御はからひになりぬとおぼえ候。たゞ不思議と信ぜさせたまひ候ひぬるうへは、わづらはしきはからいあるべからず候。

またある人の候なること(三)出世のこゝろおほく、淨土の業因すくなし」と候なるは、こゝろえがたく候、出世と候も、(四)淨土の業因と候も、みなひとつにて候なり。すべてこれなまじゐなる御はからひと存じ候。佛智不思議と信ぜさせたまひ候ひなば、別にわづらはしくとかくの御はからひあるべからず候。たゞ人のとかく申し候はんことをば御不審あるべからず候。たゞ如來の誓願にまかせまゐらせ

(一)一念。極めて短き時刻をいふ。信心を發得するの初の一念なり。
(二)決定。業因が成就して證果を得ることの決定せられたるをいふ。
(三)出世のこゝろ。苦界を出離して淨土に往生せんと願ふ心。
(四)淨土の業因。念佛。

閏三月二日

九

誓願名號同一の事

御ふみ、くはしくうけたまはりさふらひぬ。さては、この御不審、しかるべしともおぼえず候。そのゆゑは(一)誓願名號と申して、かはりたること候はず。誓願をはなれたる名號も候はず、名號をはなれたる誓願も候はず候。かく申候もはからひにて候なり。たゞ誓願を不思議と信じ、また名號を不思議と一念信じとなへつるうへは、何條わがはからひをいたすべき。きゝわけ、しりわくるなど、わづらはしくは、おほせられさふらふやらん。これみな、ひがごとにて候なり。たゞ不思議と信じつるうへは、とかく御はからひあるべからず候。往生の業には、わたくしのはからひはあるまじく候なり。あなかしこ〳〵。たゞ如來にまかせまゐらせおはしますべくさふらふ。あなかしこ〳〵。

五月五日　親鸞

(二)教名御房

(一)誓願名號。因位の誓願と果上の名號とは其の法體同一なり。名號を稱へん者を迎へんと誓ひし本願なり。其の本願成就の名號を以て衆生を攝化するなり。

(二)教名。越後長岡の西願寺に傳ふる眞翰には「けうやう御房」とあり。西願寺の開基なり。建保六年、親鸞上人の弟子と爲り、教養と名のりしが、延應元年、師より教名の名を拜す。常陸笠間の光照寺は其の後裔なり。

乘と名く。淨土眞宗は誓願一佛乘なり。されど今は、因(菩薩)果(佛)不二の義趣より、菩薩乘に佛乘を攝して、此の簡取の文言あり。

(一)頓教。速に證果を得る教。

(二)菩薩藏。大乘教。

(三)易行道。行じ易き法。

(四)正行。彌陀の淨土に往生する正しき行業。五種あり。

(五)横超。淨土眞宗は他力淨土門(横)の中の頓教(超)なり。

(六)有緣。阿彌陀佛の教は此界の衆生に緣深し。

(七)法滅百歲。當來に教道の滅盡して後、特に百歲この經を留むと、『無量壽經』に說けり。

薩乘なり。二教といふは、一には頓教、二には漸教なり。いまこの教は(一)頓教なり。二藏といふは、一には菩薩藏、二には聲聞藏なり。いまこの教は(二)菩薩藏なり。二道といふは、一には難行道、二には易行道なり。いまこの淨土宗は(三)易行道なり。二行といふは、一には正行、二には雜行なり。いまこの淨土宗は(四)正行を本とするなり。二超といふは、一には竪超、二には横超なり。いまこの淨土宗は(五)横超なり。竪超は聖道自力なり。二緣といふは、一には無緣、二には有緣なり。いまこの淨土は(六)有緣の教なり。二住といふは一には止住、二には不住なり。いまこの淨土の教は、(七)法滅百歲まで住したまひて有情を利益したまふとなり。不住は聖道諸善なり。諸善はみな龍宮へかくれいりたまひぬるなり。思不思といふは、思議の法は聖道八萬四千の諸善なり。不思といふは淨土の教は不可思議の教法なり。これらは加樣にしるしまをしたり。よくしらん人にたづね申したまふべし。また、くはしくは、この文にてまをすべくも候はず。目もみえず候。なにごとゝみなわすれて候うへに、人などにあきらかに申すべき身にてもあらずさふらふ。よく／＼淨土の學生にとひ申給ふべし。穴賢／＼。

はずとこゝろえて、まかりすぎ候へば、人のおほせごとには、いらぬものにてさふらふなり。

二月廿五日　　　　親鸞

(一)淨信御房御返事　　私云淨信は高田門人云々

八

また(二)五説といふは、よろづの經をとかれ候に、五種にはすぎず候なり。一には佛説、二には聖弟子の説、三には天仙の説、四には鬼神の説、五には變化の説といへり。この五のなかに、佛説をもちひて、かみの四種をたのむべからず候。この(三)三部の經は、釋迦如來の自説にてましますとしるべしとなり。四土といふは一には法身の土、二には報身の土、三には應身の土、四には化土なり。いまこの安樂淨土は(四)報土なり。三身といふは、一には法身、二には報身、三には應身なり。いまこの彌陀如來は(五)報身如來なり。三寶といふは、一には佛寶、二には法寶、三には僧寶なり。いまこの淨土宗は(六)佛寶なり。四乘といふは、一には佛乘、二には菩薩乘、三には緣覺乘、四には聲聞乘なり。いまこの淨土宗は(七)菩

(一)淨信。常陸行方の人なり。
(二)五説。『大智度論』二に、「佛法には、佛自口説、佛弟子説、仙人説、諸天説、化人説の五種人説あり」と説けり。今は善導の『玄義分』に據る。
(三)三部。『無量壽經』『觀無量壽經』『阿彌陀經』。
(四)報土。安樂國は、阿彌陀佛の因位の願行に酬報して成就したる二十九種莊嚴の淨土なれば、報土なり。
(五)報身。阿彌陀佛は、超世の大願、永劫の修行に、酬報して得たる萬德圓滿の果體なるが故に、報身なり。
(六)佛寶。聖道門には圓頓の法を宗とし護持の僧を宗とするあり。淨土眞宗は彌陀一佛を宗とし偏に佛力を談ずるを旨とす。
(七)菩薩乘。三乘中の六度法を菩薩乘と名け、其の外に一乘を立てゝ佛

(一)無上覺。佛果の覺り。

(二)恒沙。恒河(Gangā)の沙ほどに數多きをいふ。(三)娑婆。梵音サハ(Saha)。忍と譯す。此の世界の名なり。苦を忍ぶべきが故に此の名あり。

と佛。測り知り給ふは、たゞ佛と佛とのみ。等覺の彌勒と雖も測る能はず。

(五)大師聖人。法然上人。

されぱこそ、(一)無上覺にいたるべき心のおこるとまをすなり。これを不退の位ともまをし、正定聚の位にいるともまをし、等正覺にいたるともまをすなり。このこゝろのさだまるを、十方諸佛のよろこびて、諸佛の御こゝろにひとしとほめたまふなり。このゆゑに、まことの信心の人をば、諸佛とひとしとまをすなり。また補處の彌勒とおなじともまをすなり。この世にて眞實信心の人をまもらせたまへばこそ、『阿彌陀經』には、十方(二)恒沙の諸佛護念すとはまをすことにては候へ、安樂淨土へ往生してのちに、まもりたまをとまをすことにては候はず。(三)娑婆世界にゐたるほど護念すとはまをすことなり。信心まことなる人のこゝろを、十方恒沙の如來のほめたまへば、佛とひとしとまをすことなり。また他力と申すことは、義なきを義とすとまをすなり。義とまをすことは、行者のをの〳〵のはからふことを義とは申すなり。如來の誓願は不可思議にましますゆゑに、(四)佛と佛との御はからひなり。凡夫のはからひにあらず。補處の彌勒菩薩をはじめとして、佛智の不思議をはからふべき人は候はず。しかれば如來の誓願には義なきを義とすとは、(五)大師聖人のおほせに候き。このこゝろのほかに、往生にいるべきこと候

きなり。たゞしひとにすかされさせたまひ候はずとも、信心のさだまらぬ人は、正定聚に住したまはずして、うかれたまひたる人なり。乘信房にかやうに申し候やうを、人々にもまをされ候べし。あなかしこ〳〵。

文應元年十一月十三日　　善信 八十八歳

(一)乘信御房

この御消息の正本は阪東下野國おほうちの御莊高田にこれあるなりと云云

七

諸佛等同と云事。

往生は、なにごとも〳〵凡夫のはからひならず。(二)如來の御ちかひにまかせまゐらせたればこそ、他力にては候らへ。様々にはからひあふて候らん、おかしく候。如來の誓願を信ずる心のさだまるとまふすは、攝取不捨の利益にあづかるゆゑに、(三)不退の位にさだまると、御こゝろえさふらふべし。眞實信心のさだまると申すも、(四)金剛の信心のさだまるとまをすも、攝取不捨のゆゑにまをすなり。

(一)乘信。傳、未詳。

(二)如來。絶對の眞如より來生し圓現したる覺者、即ち佛のこと。今は阿彌陀佛をいふ。

(三)不退。必ず成佛すべき位に定まりて更て退轉することなきをいふ。

(四)金剛。善導の「散善義」に「此の心深く信ずること、由し金剛し若し」と云へり。

なによりも、(一)こぞことし、老少男女おほくの人々の、死にあひて候らんことこそ、あはれに候へ。たゞし、生死無常のことはり、くはしく如來のときをかせおはしまして候へば、おどろきおぼしめすべからず候なり。まづ(二)善信が身には、臨終の善惡をばまをさず。信心決定の人は、うたがひなければ、正定聚に住することにて候なり。さればこそ、愚癡無智の人もをはりもめでたく候へ。如來の御はからひにて往生するよし、ひと〲に申され候ける、すこしもたがはず候なり。としごろ、をのをのに申しさふらひしこと、たがはずこそ候へ。かまへて(三)學匠沙汰せさせたまひさふらはで往生をとげさせたまひ候べし。故(四)法然聖人は「淨土宗の人は愚者になりて往生す」と候ひしことを、たしかにうけたまはり候ひしうへに、ものもおぼへぬあさましき人々のまゐりたるを御覽じては、往生必定すべしとて、ゑませたまひしを、みまゐらせさふらひき。(五)文沙汰してさか〲しきひとのまゐりたるをば、往生いかゞあらんずらんと、たしかにうけたまはりき。いまにいたるまで、おもひあはせられ候なり。ひと〲にすかされさせたまはで、御信心たぢろがせたまはずして、をの〲御往生候べ

(一)こぞことし。去年今年。去年は正元元年なり。今年四月、文應と改元す。疫疾流行して人多く死す。
(二)善信。善信房親鸞。善信は假名、親鸞は實名なり。
(三)學匠沙汰。學者らしき文義沙汰をいふ。
(四)法然聖人。『淨土門は愚癡にかへりて往生す』とのたまひしこと『本願成就聞書』にも出づ。
(五)文沙汰。文字を論じ義理を沙汰すること。

を義とすとしるべしとなり。自然といふは、もとよりしからしむといふことばなり。彌陀佛の御ちかひの、もとより行者のはからひにあらずして、南無阿彌陀佛と(一)たのませたまひて、むかへんとはからはせたまひたるによりて、行者のよからんともあしからんともおもはぬを、自然とは申すぞと、きゝてさふらふ。ちかひのやうは、(二)無上佛にならしめんとちかひたまへるなり。無上佛とまをすは、かたちもなくまします。かたちもましまさぬゆゑに(三)自然とはまうすなり。かたちましますとしめすときは無上涅槃とは申さず。かたちもましまさぬやうをしらせんとて、はじめて(四)彌陀佛とまをすと、きゝならひてさふらふ。彌陀佛は自然のやうをしらせんれうなり。この道理をこゝろえつるのちには、この自然のことは、つねにさたすべきにあらざるなり。つねに自然をさたせば、義なきを義とすといふことは、なを義のあるになるべし。これは(五)佛智の不思議にてあるなり。

正嘉貳年十二月十四日　　愚禿親鸞 八十六歳

(一)たのませ。稱ふる念佛が即ち彌陀をはのむなり。

(二)無上佛。無上涅槃の佛果。理智冥合の法身。有爲如幻の形色を離れて靈存す。

(三)自然。無爲自然。

(四)彌陀佛。無爲自然の涅槃を證得したる智慧の光明の覺體を阿彌陀と號す。

(五)佛智。たゞ佛智の不思議と仰ぐべきことなり。

六

十七の願には、「十方世界の無量の諸佛、悉く(一)咨嗟して我名を(二)稱せずんば、正覺を取らじ」とちかひたまへり。願成就の文には、よろづの佛にほめられよろこびたまふとみえたり。すこしもうたがふべきにあらず。これは如來とひとしといふ文どもを、あらはししるすなり。

正嘉元年丁巳十月十日　　親鸞

(三)眞佛御房

五

自然法爾事

(四)自然といふは、自はをのづからといふ、行者のはからひにあらず。然といふは、しからしむといふことばなり。しからしむといふは、行者のはからひにあらず、如來のちかひにてあるがゆゑに(五)法爾といふ。法爾といふは、この如來の御ちかひなるがゆゑに、しからしむるを法爾といふなり。法爾は、この御ちかひなりけるゆゑに、おほよそ行者のはからひのなきをもて、この法の德のゆゑにしからしむといふなり。すべて人のはじめてはからはざるなり。このゆゑに(六)義なき

(一)咨嗟。讃嘆すること。

(二)彌。阿彌陀佛の名號を讃め稱へること。諸佛みな亦念佛の大利を讃め、信心の人を「我が親友なり」「我と等しき者なり」と稱ふ。

(三)眞佛。俗名は椎尾春時、親鸞上人の高弟にして、聖人歸洛の後、高田專修寺を總理し正嘉二年に示寂す。

(四)自然。聖道門に談ずる無爲法性の自然法爾の外に淨土眞宗の願力他力を以て談ずる自然法爾の義趣あることを顯す。

(五)法爾。法の德にて爾らしむるをいふ。法とは如來の本願なり。自然と同義なり。

(六)義なきを義とす。はからはぬがよきはからひなりといふこと。法然上人の訓言。

せたまへ。彌勒すでに無上覺にその心さだまりてあるべきにならせたまふによりて、(一)三會のあかつきとまをすなり。淨土眞實のひとも、このこゝろをこゝろうべきなり。光明寺の和尚の(二)『般舟讃』には「信心のひとは、その心すでにつねに淨土に居す」と釋したまへり。居すといふは淨土に信心のひとのこゝろつねにゐたりといふこゝろなり。これは彌勒とおなじといふことをまをすなり。これは等正覺を彌勒とおなじとまをすによりて、信心のひとは如來とひとしとまをすこゝろなり。

正嘉元年丁巳十月十日　　親鸞

性信御房

四

(三)これは經の文なり。(四)『華嚴經』に言「信心歡喜者、與諸如來等」といふは、信心をよろこぶひとは、もろ〱の如來とひとしといふなり。もろ〱の如來とひとしといふは、信心をえてことによろこぶひとを、(五)釋尊のみことには、「見て敬ひ、得て大に慶べば、則ち我が善き親友なり」とときたまへり。また彌陀の第

(一)三會。彌勒の成佛を龍華三會の曉といふ。龍華樹の下に成佛し三會の說法に多くの衆生を度す。

(二)『般舟讃』。善導の『般舟三昧行道往生讃』に「忻へば則ち淨土に常に居せり」と云へり。

(三)これは「如來と等し」といふ事は何れに說かれてありやと、問はれたるに、答へて。

(四)『華嚴經』。入法界品の偈に、「此の法を聞きて歡喜し、信心疑ひ無き者は、速に無上道を成じ、諸の如來と等し」と說けり。

(五)釋尊のみことの、『無量壽經』の敎說。

建長七歳乙卯十月三日　　愚禿親鸞八十三歳書之

此の御書は、性信聖の遺跡より、聖人得自筆の本を以て、彼の門弟中に寫し與ふ。云々

三

信心をえたる人は、かならず正定聚のくらゐに住するが故に、(一)等正覺の位と申すなり。『大無量壽經』には、攝取不捨の利益にさだまるを正定聚となづけ、(二)『無量壽如來會』には等正覺とときたまへり。その名こそかはりたれども、正定聚、等正覺は、ひとつこゝろ、ひとつくらゐなり。等正覺とまうすくらゐは、(三)補處の彌勒とおなじくらゐなり。彌勒とおなじく、このたび無上覺にいたるべきゆゑに、彌勒とおなじとときたまへり。さて『大經』には「(四)次如彌勒」とはまをすなり。彌勒はすでに佛にちかくましませば、彌勒佛と、諸宗のならひは、まをすなり。しかれば彌勒におなじくらゐなれば、正定聚の人は、如來とひとしとも申すなり。淨土の眞實信心の人は、この身こそあさましき不淨造惡の身なれども、心はすでに如來とひとしければ、如來とひとしとまうすこともあるべしと、しら

(一)等正覺。佛の正覺に等しきほどの位といふ義意にて等覺の位をいふ。今は等覺の彌勒に比して、此たび必ず成佛すべき正定聚の位に名く。

(二)『無量壽如來會』『大寶積經』の第五會。唐の菩提流支の譯。『無量壽經』の異譯なり。其の第十一願の文に正定聚のことを等正覺と說けり。

(三)補處。一生を過ぎて佛處を補ふ等覺の位。

(四)次如彌勒。「次で彌勒の如し。」次は佛果に近きこと。

金剛心をえたる人といふなり。この人を、(一)上々人とも、好人とも、妙好人とも、最勝人とも、希有人とも、まをすなり。この人は正定聚のくらゐにさだまれるなりとしるべし。しかれば、(二)彌勒佛とひとしき人とのたまへり。これは眞實信心をえたるゆゑに、かならず眞實の報土に往生するなりと、しるべし。この信心をうることは、釋迦、彌陀、十方諸佛の御方便よりたまはりたると、しるべし。しかれば諸佛の御をしへをそしることなし。餘の善根を行ずる人をそしることなし。この念佛する人をにくみそしる人をも、にくみそしることあるべからず。あはれみをなし、かなしむこゝろをもつべしとこそ、(三)聖人はおほせごとありしか。あなかしこ〳〵。佛恩のふかきことは、懈慢邊地に往生し、疑城胎宮に往生するだにも、彌陀の御ちかひのなかに、(四)第十九(五)第二十の願の御あはれみにてこそ、不可思議のたのしみにあふことにてさふらへ。佛恩のふかきこと、そのきはもなし。いかにいはんや眞實の報土へ往生して大涅槃のさとりをひらかんこと、佛恩よく〳〵御案どもさふらふべし。これさらに、(六)性信房、親鸞がはからひまをすにはあらず候。ゆめ〳〵

(九)眞の佛弟子。善導の『觀經散善義』の説。

(一)上々人。同『散善義』の釋。

(二)彌勒。梵語マイトレーヤ(Maitreya)。等覺の菩薩なり。一生を過ぐれば必ず佛果を成ず。『無量壽經』には「次で彌勒の如し」と説き、王日休の『淨土文』に添へられたる周葵の跋には「一念往生、便ち彌勒に同じ」と云へり。

(三)聖人。法然聖人。津戸三郎へ遣されし返事にも此の訓誨あり。

(四)第十九。修諸功德の願。諸行往生を誓ふ。

(五)第二十。植諸德本の願。自力念佛往生を誓ふ。

(六)性信。坂東報恩寺の開基。初め法然上人の弟子となり、後に親鸞上人の高足たり。建治元年に寂す。今この御書は、性信の門下の人々へ與へ給ふと見ゆ。

せたまひて、不可思議の利益きはまりましまさぬ御かたちを、(一)天親菩薩は「盡十方無礙光如來」とあらはしたまへり。このゆゑに、よきあしき人をきらはず、煩惱のこゝろをえらばずへだてずして、往生はかならずするなりと、しるべしとなり。しかれば(二)惠心院の和尙の『往生要集』には、本願の念佛を信樂するありさまをあらはせるには、「行住坐臥をえらばず時處諸緣をきらはず」とおほせられたり。眞實の信心をえたるひとは、(三)攝取のひかりにおさめとられまゐらせたりと、たしかにあらはせり。しからば無明煩惱を具して、(四)安養淨土に往生すればすなはち無上佛果にいたると、釋迦如來ときたまへり。しかるに五濁惡世のわれら、(五)釋迦一佛のみことを信受せんこと、ありがたかるべしとて、十方恒沙の諸佛、證人とならせたまふと、(六)善導和尙は釋したまへり。(七)釋迦、彌陀、十方の諸佛、みなおなじ御こゝろにて、本願念佛の衆生には、かげのかたちにそへるがごとくして、はなれたまはずと、あかせり、しかればこの信心の人を(八)釋迦如來は「わがしたしきともなり」とよろこびまします。この信心の人を(九)眞の佛弟子といへり。この人を正念に住する人とす。この人は、攝取してすてたまはざれば、

(一)天親。眞宗七祖の第二。婆藪盤豆(Vasubandhu)。世親とも譯す。北天竺の人、佛滅後九百年に出世す。今は其の著『淨土論』の說を出す。

(二)惠心院の和尙。眞宗七祖の第六、源信和尙。叡山橫川の惠心院に住す。花山院の寬和元年『往生要集』三卷を著す。

(三)攝取。『往生要集』に釋顯せり。

(四)安養。極樂のこと。『無量壽經』の說。

(五)釋迦一佛。善導の『觀經散善義』の釋。

(六)善導和尙。眞宗七祖の第五。長安の光明寺に在りて念佛を弘通し、唐の永隆二年に示寂す。

(七)釋迦彌陀。善導の『觀念法門』の護念增上緣の釋。

(八)釋迦如來。『無量壽經』に「則ち我が善き親友なり」と說けり。

おほせられたることなり。まづ自力とまをすことは、行者のをの〳〵の縁にしたがひて、餘の佛號を稱念し、餘の善根を修行して、わが身をたのみ、わがはからひのこゝろをもて、身口意のみだれごゝろをつくろひ、めでたうしなして淨土へ往生せんとおもふを、自力とまをすなり。また他力とまをすことは、彌陀如來の御ちかひのなかに(一)選擇攝取したまへる(二)第十八の念佛往生の本願を信樂するを他力とまをすなり。如來の御ちかひなれば、他力に義なきを義とすと、聖人のおほせごとにてありき。義といふことは、はからふことばなり。行者のはからひは自力なれば義といふなり。他力は本願を信樂して、往生必定なるゆゑに、さらに義なしとなり。しかれば、わがみのわるければ、いかでか如來むかへたまはんとおもふべからず。凡夫は、もとより煩惱具足したるゆゑに、わるきものとおもふべし。またわがこゝろよければ往生すべしとおもふべからず。自力の御はからひにては(三)眞實の報土へむまるべからざるなり。行者のをの〳〵の自力のはからひにては、懈慢邊地の往生、胎生(四)疑城の淨土までぞ、往生せらるゝことにてあるべきとぞ、うけたまはりたりし。第十八の本願成就のゆゑに、阿彌陀如來となら

(八)淨土の祖師。曇鸞、道綽等。

(一)選擇攝取。麁惡を選び捨てゝ善妙を選び取るをいふ。

(二)第十八。四十八願中の第十八。

(三)眞實の報土。方便の化土に對す。本願に酬報して成就せる眞實の淨土をいふ。

(四)疑城。自力疑心の行者が極樂に往生して止まる所の城。即ち方便化土をいふ。

これみな聖道門なり。權教といふは、すなはち、すでに佛になりたまへる佛菩薩の、かりにさまざまの形をあらはして、すゝめたまふがゆゑに、權といふなり。淨土宗にまた有念あり無念あり。有念は(一)散善の義、無念は(二)定善の義なり。淨土の無念は、聖道の無念にはにず、またこの聖道の無念のなかに、また有念あり。よくよくとふべし。淨土宗のなかに眞あり(三)假あり。眞といふは選擇本願なり。假といふは定散二善なり。選擇本願は淨土眞宗なり。定散二善は方便假門なり。淨土眞宗は(四)大乘の中の至極なり。方便假門の中にまた大小權實の教あり。釋迦如來の御(五)善知識は一百一十人なり。『華嚴經』にみえたり。

南無阿彌陀佛

建長三歲辛亥閏九月二十日

愚禿親鸞七十九歲

二

(六)かさまの念佛者の、うかゞひとはれたること。

それ淨土眞宗のこゝろは、往生の根機に他力あり自力あり。このこと、すでに(七)天竺の論家、(八)淨土の祖師の

どいふ自力の機の計ひを離るゝものなり。

(八)聖道。他力の淨土門に對する自力の聖道門。

(一)散善。散心の修善。

(二)定善。定心の觀想。

(三)假。假設の方便門。

(四)大乘。佛果の大涅槃を得る法門。小人が小益を得るを小乘と稱するに對す。

(五)善知識。善法を說き人を正道に入らしむる導師をいふ。『華嚴經』入法界品には善財童子が一百一十人の善知識を歷訪したることを說けり。是やがて釋尊の修行を示すべきものと見るを得。此の事を書き添へらるゝは、門弟の問に隨ひて答へられたる也。

(六)かさま。常陸の笠間。

(七)天竺の論家。龍樹、天親。

ふ。この一心を金剛心といふ。この金剛心を大菩提心といふなり。これすなはち他力のなかの他力なり。又(一)正念といふにつきて二あり。一には(二)定心の行人の正念、二には(三)散心の行人の正念あるべし。この二の正念は他力のなかの自力の正念なり。定散の善は諸行往生のことばにおさまるなり。この善は他力のなかの自力の善なり。この自力の行人は來迎をまたずしては(四)邊地(五)胎生(六)懈慢界までもむまるべからず。このゆへに第十九の誓願に「もろ〳〵の善をして淨土に廻向して往生せんとねがふ人の臨終には、われ現じてむかへん」とちかひたまへり。臨終をまつことゝ、來迎往生をたのむといふことは、この定心散心の行者のいふことなり。(七)選擇本願は有念にあらず無念にあらず。有念はすなはち色形をおもふにつきていふことなり。無念といふは形をこゝろにかけず色をこゝろにおもはずして念もなきをいふなり。これみな聖道のをしへなり。(八)聖道といふは、すでに佛になりたまへる人の、われらがこゝろをすゝめんがために、佛心宗、眞言宗、法華宗、華嚴宗、三論宗等の大乘至極の敎なり。佛心宗といふは、この世にひろまる禪宗これなり。また法相宗、成實宗、倶舍宗等の權敎小乘等の敎なり。

(一)正念。自力の正念。

(二)定心。妄想を止め思念を凝し得る心。

(三)散心。散亂して靜まらざる心。

(四)邊地。極樂の邊界。佛法僧の三寶を見聞する能はず。佛所に遠ざかれる邊境なり。極樂の中の化土をいふ。

(五)胎生。自力疑心の行者が極樂に生れて邊地の宮殿に入るをいふ。三寶を見聞せず智慧の開けざるを眞實報土の化生に對して胎生と稱す。

(六)懈慢界。阿彌陀佛國に生れんとする者の中に懈慢國に貪著して進む能はざる者多しと『菩薩處胎經』に說けり。

(七)選擇本願。諸善を捨てゝ他力の一行を選び取りし如來の本願。即ち第十八願の念佛往生は、有念無念な

(一)來迎。臨終に佛菩薩の來り迎へ給はんことを期待するは、自力の諸善を廻向して淨土に往生せんとする者の心なり。
(二)はじめて。臨終に初めて『觀經』に說ける下三品の罪人に就て云ふ。
(三)攝取不捨。眞實信心の人は平生に攝取の光益にあづかる。佛の心光攝め取りて捨てず。
(四)正定聚。必ず佛果に到るべき者と正しく定められたる人をいふ。
(五)正念。他力の正念。如來の本願を二心なく信ずるをいふ。
(六)無上涅槃。法性の利を證り究めし佛果をいふ。

末燈鈔

本願寺親鸞大師御己證并邊州所々御消息等類聚鈔

親鸞上人

一

有念無念事。

(一)來迎は諸行往生にあり。自力の行者なるがゆへに。臨終といふことは、諸行往生のひとにいふべし。いまだ眞實の信心をえざるがゆへなり。また十惡五逆の罪人の(二)はじめて善知識にあふてすゝめらるゝにとりていふことなり。眞實信心の行人は、(三)攝取不捨のゆへに、(四)正定聚のくらゐに住す。このゆへに臨終をまつことなし、來迎をたのむことなし。信心のさだまるとき往生またさだまるなり。來迎の儀式をまたず。(五)正念といふは、本弘誓願の信樂さだまるをいふなり。この信心をうるゆへに、かならず(六)無上涅槃にいたるなり。この信心を一心とい

と。
(六)西天東地。西天は印度諸邦。東地は支那日本等のこと。
(七)兀地等。非思量底の境界に安住すること。
(八)保任。保護擔任の意。
(九)石火。人間須臾の生命にたとへしもの。
(一〇)模象。『六度集經』に出づる鏡面王の故事に依る。聖道淨土。念佛題目。坐禪觀法と一部分に執着して我見を生じ爭ひをなすこと。
(一一)直指端的。直指人心の端的に融通自在の大道を悟ること。
(一二)絕學無爲。是非善惡。大乘小乘等凡夫有相の學を絕して無爲眞寂の妙境界にある人。
(一)合沓。隙間なく折合のつくこと。

し、佛佛の菩提に(一)合沓し、祖祖の三昧に嫡嗣せよ。久しく恁麼なることを爲さば、須らく是れ恁麼なるべし。寶藏自ら開けて、受用如意ならん。

普勸坐禪儀 終

想の繫縛のこと。
（一）超凡越聖。地獄餓鬼等の六凡を超越し。聲聞緣覺菩薩佛等の四聖の境界を超脱すること。王三昧たる坐禪の上には迷悟善惡一切總べて超越せることを云ふ。
（二）坐脱立亡。達磨等の坐禪なからにして圓寂し。三祖大師等の大木下に合掌したまゝ即ち立往生し給ひしが如きこと。
（三）指竿針槌。俱胝和尚の天龍一指頭の禪。南泉和尚の百尺竿頭更に一歩を進めよと云ひ。船子和尚の竿頭の絲線君か弄するに任すと云へる。俗密把針の話の如き。文殊白槌の話の如きを云ふ。
（四）拂拳棒喝。青原の竪拂。黄檗の拳。德山の棒。臨濟の喝の如きを云ふ。
（五）聲色。色聲香味觸法の六塵のこ

ことを。若し坐より起たば、徐徐として身を動かし、安詳として起つべし。卒暴なるべからず。嘗て觀る（一）超凡越聖、（二）坐脱立亡も、此の力に一任することを。況んや復た（三）指竿針槌を拈ずるの轉機、（四）拂拳棒喝を擧するの證契も、未だ是れ思量分別の能く解する所にあらず。豈に神通修證の能く知る所と爲んや。（五）聲色の外の威儀たるべし。那んぞ知見の前きの規則に非ざる者ならんや。然れば則ち上智下愚を論ぜず、利人鈍者を簡ぶことなし。專一に功夫せば、正に是れ辨道なり。修證自ら染汚せず、趣向更に是れ平常なる者なり。凡そ夫れ自界他方、（六）西天東地、等しく佛印を持し、もつぱら宗風を擅にするも、唯打坐を務めて、（七）兀地に礙へらる。萬別千差と謂ふと雖も、祗管に參禪辨道すべし。何ぞ自家の坐牀を拋却して、謾りに他國の塵境に去來せん。若し一歩を錯れば、當面に蹉過す。既に人身の機要を得たり。虛しく光陰を度ること莫れ。佛道の要機を（八）保任す。誰れか浪りに（九）石火を樂まん。加以、形質は草露の如く、運命は電光に似たり。倏忽として便ち空し、須臾に即ち失す。冀くば其れ參學の高流、久しく（一〇）模象に習つて眞龍を怪むこと勿れ。（一一）直指端的の道に精進し、（一二）絶學無爲の人を尊貴

す、即ち己か本體本性を明むること。
(一一)脱落。智解妄想の束縛をはなれ、奇麗サツパリとなること。
(一二)恁麽の事。是の如きの事。
(一)心意識の等。心の作用即ち思慮分別の妄想のこと。迷の姿を云ふ。
(二)念想觀。迷ひを對治する心の用い方、悟らんと欲する心のこと。
(三)欠氣一息。口を開きて息を吐き出すこと。
(四)兀兀。不動の貌。
(五)習禪。散亂心を止める爲めにする禪。即ち息慮凝心の枯木死灰の禪のこと。
(六)公案。公府の案牘の意。佛法の所在通塞のかゝはる道の所在のこと。
(七)羅籠。羅は鳥を捕ふるの網。籠は鳥を入れて飼くもの。即ち煩惱妄

是非を管すること莫れ。(一)心意識の運轉を停め、(二)念想觀の測量を止めて、作佛を圖ること莫れ。豈に坐臥に拘らんや。尋常坐處には厚く坐物を敷き、上に蒲團を用ふ。或は結跏趺坐、或は半跏趺坐、謂く結跏趺坐は、先づ右の足を以て左の脛の上に安し、左の足を右の脛の上に安ず。半跏趺坐は、但左の足を以て右の脛を壓すなり。寛く衣帶を繋けて齊整ならしむべし。次ぎに右の手を左の足の上に安じ、左の掌を右の掌の上に安ず。兩の大拇指面へて相拄ふ、乃ち正身端坐して左に側ち右に傾き、前に躬まり後へに仰ぐことを得ざれ。耳と肩と對し、鼻と臍と對せしめんことを要す。舌上の腭に掛け、唇齒相著け、目は須らく常に開くべし。鼻息微かに通じ、身相既に調へて、(三)欠氣一息し、左右搖振して(四)兀兀として坐定し、箇の不思量底を思量せよ。不思量底如何んが思量せん、非思量此れ乃ち坐禪の要術なり。

謂はゆる坐禪は(五)習禪にはあらず、唯是れ安樂の法門なり。菩提を究盡するの修證なり。(六)公案現成(七)羅籠到ること未し。若し此意を得ば、龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり。當に知るべし、正法自ら現前して昏散先づ撲落する

普勸坐禪儀

道元禪師撰

原るに、夫れ(一)道本圓通、爭でか(二)修證を假らん。(三)宗乘自在、何ぞ功夫を費さん。況んや(四)全體遙かに塵埃を出づ、孰か拂拭の手段を信ぜん。(五)大都當處を離れず、豈に修行の脚頭を用ふる者ならんや。然れども毫釐も差あれば、天地懸かに隔たる。(六)違順纔かに起れば、紛然として心を失す。直饒(七)會に誇り悟に豐かにして、瞥地の知通を獲、道を得心を明らめて、衝天の志氣を擧し、(八)入頭の邊量に逍遙すと雖も、幾んど出身の活路を虧闕す。矧んや彼の(九)祇園の生知たる端坐六年の蹤跡見つべし。(一〇)少林の心印を傳ふる面壁九歲の聲名尚ほ聞こゆ。古聖既に然り、今人盍んぞ辨ぜざる。所以に須らく言を尋ね、語を逐ふの解行を休すべし。須らく(一一)回光返照の退步を學すべし。身心自然に(一二)脫落して、本來の面目現前せん。(一三)恁麼の事を得んと欲せば、急に恁麼の事を務めよ。夫れ參禪は、靜室宜しく、飲食節あり。諸緣を放捨し、萬事を休息して、善惡を思はず、

(一)道本。無上菩提の道は宇宙萬有の本體なるが故に道本と云ふ。
(二)修證。修行の力に依りて證すること。
(三)宗乘。達磨門下嫡流の教法のこと。
(四)全體遙かに等。神秀上座及び六祖慧能の傳法の故事に依る。
(五)大都等。大都は菩提、涅槃、淨土等の意。
(六)違順。心に違すると、順ずるとの意。
(七)會。會解の義。合點すること。
(八)入頭の等。やつと悟の仲間入りをすること。
(九)祇園の生地たる。釋尊のこと。二十五に出家して六年間唯坐禪三昧に入る。
(一〇)少林の心印等。少林山の達磨大師の佛心印のこと。
(一一)回光返照。光を回らし返し照

思ひ、或は佛法の義理をわきまへしめん爲めに、其あとを殘す。是れも見聞の世間のことによせて、出離解脱の道をしらしむ。古今ことなれども、其志同じき者なり。況んや、此の事みな慥に見聞き侍ることを記せり。作り事にあらず。心あらん人此の志をたすけてあやまりをたゞし、なおし給ひて、愚かなる人を導く媒として、見聞隨喜のともがら、當來の互の知識として、共に(一)讃佛乘の因(二)轉法輪の緣とし、發菩提心の種とし、如說修行の糧とせんと也。弟子が本意是にあり。南無佛陀三寶、南無和光善神。擁護をたれ、冥助をくはへて佛子の心願を助け、遐代に流通し、群迷を導く、因緣とし給へ。ときに、弘安六年中秋草し畢んぬ。林下の貧士、無住。

此の物語書き始むることは、弘安二年、其の後打ち置きて空しく年月を經たり。今年續いてこれを草す。仍て前後その語不同あるか。後見不審のたいに聊かこれを記す。又同じことを重ねて之を書す。老後の忘却なり。心あらん人必ず添削を加へしめ給ふべき耳。

沙石集 終

(一)讃佛乘。佛の教をほめること。
(二)轉法輪。法の輪を轉ずること說法すること。

き付けはんべり。賢き人の前に勸めがたしと雖も。やむ事なくして書き集め侍り固より田舍の山里に生長て文章にもくらく、歌道にもうとく、佛法は又一宗をもまことしく學せず、一向の山賤にて侍れば片腹いたく、かたくなゝる事多くこそ侍れ。たゞ(一)渡世のわづらひをのがれむ爲めに、人まねに遁世の門に入りて、實なしといへども、さすがに出離の要法をのみ問ひ訪らひ、隱遁の人にのみ近付はんべるまゝに、道心なく志うすしといへども望む所は、菩提の道、學ぶ法は解脱の門なり。此の故に諸宗の肝心の法門、經論の至要の文義久しく聞き置き侍るを世間のこと、雜談の中に思ひ出づるに隨ひて、書き交へ侍るなり。是れ在家の男女の佛法、値遇の緣とせんとばかり侍る也。田舍の山里の柴の庵にして、書籍も身にそへ侍らず。きにまかせてその意ばかりやはらげて、書き列ね侍れば、僻事も侍らめども、其の趣佛法の大意にたがはずば、利益空しからじと思ひ侍るばかりなり。大綱を信じ給ふ人おはせば願ふ所なり。昔の物語やさしく面白けれども法門は見え侍らぬにや。誠に益すくなし。漢家には荊溪の『金錍論』本朝には吏部が『源氏物語』皆物によそへたる作り事なれども、或は世の人の情あらん事を

(一)度世。世わたり。

(一)慧心僧都　前出。

(二)和光。前出。

重ねて其志を書き置き侍るなり。世間に見るところある古集物語多しといへども、近代の事は、書き置く人も侍らざるにや。代の末に聞えざらん事も、なごりなく覺え侍るまゝに、愚かなる人の心を勸むるたよりにやとて、拙き詞をはゞからず是れを集む。(一)慧心の僧都の『往生要集』の中にいへることあり麁强の煩惱は人をして覺せしむ。たゞ無義の談話のみ覺えずして、常に道を障ふとなん云へり。誠に讀誦、念佛、坐禪、觀法には、時刻も久しく覺え、無益の物語には、日のくれ夜のふくるも覺えぬは、人の常の心なり。其の物語多くは、よしなき人の上、跡なきそゞろ事なり。口のとが多く、意のおもばかり愚かなり。さるにつけては、流轉生死の緣たる事は多く、後生菩提のたよりとなる事は希なり。此故にかの暇にかへて、此の物語を見給はゞ、楔を以て楔をぬき、毒を以て毒をせむる心なるべし又おのづから(二)和光のふかき意をもしり、佛陀のひろき惠みをも仰ぎ、僧寶の妙なる德をもうやまひ、在家のすなをなる跡をもまなび、因果の理を信じ、賢愚の器をわきまへ、敎門のかすかなる趣きをもさとり、隱遁のかしこき道に入りて、終に絃みだれぬ人やおはするとて、思ひ出づるに隨ひて、そこはかとなき事を書

（一）四大和合。地水火風の四要素の和合せるをいふ。

本來の面目えたらば水母殿、蝦の眼は用事なかりけりやな。

是を世間の人をかしく思ひて、開山は讃られける。心地あ歌なり。經に水母の食を求むるに、海蝦をかりて目とすといへり。水母目なきままに海蝦とつれて、かの目をかりて食を求る事なり。本來の面目あらば、此（一）四大和合の假のまなこ何かせん。借物なりとよめるにや、誠に心ある和歌なり。また或時の歌には『楞嚴經』の心にもかなへり。

足なくて雲の走るもあやしきに、何をふまへて霞たつらん。

是もいみじき歌なり。萬法の其のまことなくして運爲する心なるをや。佛法の意をえて、自ら斯の如く詠じけるにこそ、また近年以來の諸寺の長老の入滅、何れも目出たく聞え侍りき。具に注すにあたはず、皆しりあへり。此れをのこしつ。近代諸寺長老のこと、當代なれば人みな知れり。仍て記さず。大覺禪師、聖一和尚、佛光禪師、佛眼禪師、無關禪師、辭世の頌等これあり追つて之を記すべき歟

七、述懷の事

抑も此の物語の旨趣、序に書き付け侍りといへども、なほ意をきがたき故に、

ず」と云へり(一)當處湛然の心地を得て、本來無事の理を達すべし。永嘉云はく「當處を離れず常に湛然、見ざるときは則ち知んぬ、君見るべからざるを。これ修行の肝要、親切の指示なり」。西天の祖師いはく、「心は萬境に遁れて轉ず、轉ずる處實に能く幽なり。流に隨つて性を認得すれば、喜もなく亦憂もなし」。云云。永嘉の詞誠に相ひ叶へり。當處は則ち萬境虛妄の流注する處なり。湛然は即ち萬境のまことの性なり。水動いて流となる。流のところ則ち水なり。誰か此所を信ぜざらん。爰になほ疑はゞ我れ全たからじ。大惠禪師いはく、「世間の法を學するは口議心思を用ゐざれは能はず。出世の法を學するは口議心思をもちゐるは遠し。口にいひ、心に思ふ、みな世間の虛妄なり。佛法(二)は言語道斷し(三)心行所滅す。是れ出世の道なり」。『智論』にいはく「有念は則ち魔網、無念は則ち涅槃なり」。道人たらん人よく〳〵思ひわくべき道理なるをや。法心房の上人、佛法の心地を得し、文字にかゝらず。偏に志の深きにあり。彼れ尤もしたふべきをや。愚鈍の身なりとかへりみて、大乘の修行を退すべからず。(四)東福寺の開山、一眼勞によりて盲ておはしける時、松島より法心房上人一首を送り進ず。

(一)當處湛然。次に說明あり。

(二)言語道斷。前出。

(三)心行所滅。心の行爲が滅する思ひはかる能はざること。

(四)東福寺の開山聖一國師圓示辨圓和尙をいふ。前出。

て入滅す。されば眞實の悟入の處は、文字を知らぬにもよらざるべし。末代なりともたのみあるは、大乘の修行なり。只道に志ありて、名聞利養の心なく、多聞廣學の暇をせめて、眞の善知識の邊にて、信心誠ありて身命をすて寢食を忘れて行往坐臥におこたらずは、大事を發明せんこと疑ひあるべからず。經には「たゞ其の意を正しくして餘事を學せざれ」と云へり(一)されば調達が六萬藏の經を誦せしも(二)奈落をまぬかれず。慈童が一念の悲願をおこしゝも(三)都卒に生れき、眞實に道に入る事、攝意の二字を行ずるにあり。身口ひとり過をなさず、意内にうごいて外に顯る。意もしおさまらば、身口自からおさまるべし。一心不生ならば、萬事みな止みなん。老子の家なほ絕學無爲といへり。學をたち、爲をいましむ。此の故に學をなすものは日々に益す。道をなすものは日々に損す」と云ひて、禮儀等の才覺を習ふは、妄念日々にまし、虛無の大道を守れば、妄念日々に損ずといへり。虛無に相應するなほ妄心をたつ。佛法を修行せん、其意しりぬべし。然ればば大乘の行人文字を執じ、學解をたのみて、心地修行にうとくは、菩提とをかるべし。南山いはく「解藏、苦をすくはずとて法義を心得たる計は苦みてまぬかれ

(一)調達。提婆達多のこと。
(二)奈落。前出。
(三)都率。前出。

を惜なんや。淸夜月閑なり松風琴でんとす。自ら我が客にあらず、誰かまた知音ならん」。建長寺の先は長老兀庵和尙の申されけるは、日本國には過分の智者なりと智慧も道心も有難き上人と見え侍りき。そのかみ眞言に付いて、心地を開くる人とぞ聞えし。畠山にて千日の(一)護摩の行法のとき、佛法の心地を得給へりと語りし人侍りき。

六、松島法心上人の事

奥州松島の長老、法心房は(二)晩出家の人にて、一文不通なりけれども、渡宋して徑山の無準和尙の下にて圓相の中の丁の字の(三)公案を得て坐禪すること多年、尻に瘡出で、うみくさり、虫なんどの出づる程なりけれども、九年まで常坐しけり公案の丁字よろづの物の中に見えけるを、もちやぶりて、心地はありといひける。其の後朝して松島の寺にて行ひけり。臨終の事七日ありてをはるべしと、侍者につぐるにことなる勞なき故に信ぜず。其の日になりて齋了に倚座に坐して、侍者に辭世の頌をかゝす。「來りし時も明々たり、去る時も明々たり。此れ則ち何物ぞ」と書けといふに、侍者今一句足り候はず、といへば喝する事一喝して、やが

(一)護摩。焚燒、火災と譯する梵語、密數にて不淨をはらふために焚く火

(二)晩出家。晩年になりて出家せるもの。

(三)公案。禪家にて求道者に示して研究せしむる問題のこと。これ訴訟の事の目安たる公文の如く、一人の私法にあらで古人祖師の定むる所なれば公案といふ。

(一)朗譽。榮朝に師事し長樂寺壽福寺等に住す、建治二年八十四にて寂す。

(二)塔頭。本寺に屬してその寺域内にある末寺をいふ。

願僧正の弟子なり。慈悲ふかく、徳たけて、智行ならびなき上人と聞えき。去る寶治元年九月廿六日入滅、彼の寺の僧の語りしは、戌の時の終りに臨終。其のとき寺中光明ありて燈なき寮中あきらかなりければ、僧ども後の物語にもとて、彼光にて日記なんどしけり。其時の僧に遇ひて承りしこと也。寺の近邊の在家人は寺に、燒亡のあるにやとて走り集りけり。端坐して印結び、北方に向ひて安然として化せらる。葬の時の作法、坐儀平生の如くして有り難く目出かりけり。

五、壽福寺朗譽上人の事

壽福寺の長老、悲願房の阿闍梨(一)朗譽上人、かの跡をつぎて長老せらる。後には壽福寺の長老にてまし〳〵き。此れも智行とも並びなき上人にて、末代はありがたき智者と申しあひき。建治二年六月四日寅時入滅。さきの日(二)塔頭の邊、人のたやすくいらぬ樣に、材木のありけるを以て、我と下知して結ひわたさせなんどしたゝめて、大衆に對面し、いとまこひて、寅の時觀音の像の前にて、燒香禮拜して頌をかきて、倚座に坐し、手に印を結びて入滅す。頌に曰はく、「八十四年轉機を動ず。門々閉塞今時にあり。元來主なし誰れかまた去らん。空室頽危、豈にこれ

(一)戒壇　戒律を授ける壇。

(二)榮朝。初め顯密教に志し、後榮西に法を受く。長樂寺を開き宗風を關東に揚ぐ、寶治元年寂。年臘未詳。

申しあへりき。佛法の興廢、時による事なれば、時節の因縁をまたれけるにや、上宮太子は觀音の垂跡ながら、戒律はなほ興したまはで、鑒眞和尚、始めて(一)戒壇を立つ。如法受戒の作法、我朝にはじまる。是れも時機をかゞみ給ひけるにやさて彼僧正、鎌倉の大臣殿に暇申して、京に上りて臨終仕らんと申し給ひければ御年たけて御上洛わづらはしく侍り。いづくにても御臨終あれかしと仰せられけれ共、「遁世聖を世間にいやしく思あひて候ときに往生して、京童部に見せ候はん」とて上洛して　號は覺悟し侍らず。六月晦日、説戒に最後の説戒の由ありけり。七月四日、明日終るべきよし披露し、説法目出たくし給ひけり。人々最後の遺戒と哀に思へり。次日勅使たちたりけるに、今日入滅すべき由申さる。門徒の僧共はよしなき披露かなと、あやぶみ思ひける程に。其日の日中倚座に坐して、安然として、化し給ひけり。勅使道にて紫雲の立つを見けり。委細の事これあれども、略して記す。ありがたく目出たかりけり。

四、長樂寺榮朝上人の事

上野國、世良田の長樂寺の長老、釋圓房の律師(二)榮朝上人は、彼の建仁寺の本

の中に云はく「風は是れ天の氣なり。人のなす所に非ず。榮西風神にあらず。何ぞ風をふかしめん。若し風神に非ずして風をふかしむる德あらば、明王何ぞすて給はむ」と云云。是れによりて「此僧は仔細あるものなりけり。申す旨あらば聞食し入らるべき」よし重ねて宣下ありければ、寺建立の志を申されけるによりて建仁寺を立てられけり。鎌倉に壽福寺、鎭西に聖福寺なんど創草す。禪院の始めなり。然れども國の風儀にそむかずして教門をひかへて戒律、天台、眞言なんどあひ兼ねて、一向の唐樣を行ぜられず。時を待つゆゑにや、また西天も昔は經論あひ兼ねたり。漢土も上代は三學へだてなかりければ、深き心あるべし。殊に眞言を面として禪門は內行なりけり。長の無下にひきく御座しければ、出仕に憚りありとて、遙に年たけて後をこなひて、長四寸高くなりておはしけり。我が滅後五十年に禪法興すへきよし、記し置き給へり。『興禪護國論』といふ文を作り給へり其の中にあり。はたして相州禪門、建長寺を立て、大覺禪師(一)叢林の軌則、宋朝をうつし行ひはじめらる。滅後五十年にあたる。建仁、建長、文字相似たり。年號を以て寺號とする風情も、昔にたがはず。相州禪門をば、彼の僧正の後身の如く

(一)叢林。前出。

（一）三衣一鉢。前出。
（二）頭陀。前出。

のためと思ひ給ひて、名聞にはあらず。遁世の光を消さじとなり。おほかたは、（一）三衣一鉢を持し、（二）乞食頭陀を行ずるこそ、佛弟子の本にて侍れ。釋尊すでに其跡をのこす。釋子として、本師の風にそむかんや。さるまゝに、名僧の振舞かへて在家の行儀をたとへす。大に佛弟子の儀にそむけり。然れども末代の人の心乞食法師とて、いふかひなく思ひ、佛法を輕しむる事をかなしみて、僧になり出仕ありければ、世もつて輕くせず。菩薩の行時にしたがふ。定まれる方なし。これすなはち、格にかゝはらぬ振舞なり、いまだ葉上房の阿闍梨と申しける時、宋朝に渡りて、如法の衣鉢を受け、佛法を傳へ、歸朝の後、寺を建立の志しまし〱けるに天下に大風吹ひて、損亡の事ありけり。世間の人の申しけるは、此風は異國の様とて大袈裟、大衣きたる僧ども、世間に見え候。彼の衣の袖のひろく、袈裟の大きなるが、風はふかするなり。此の如きの異體の仁、都の中を排はるべき也と申しけるにつきて、はては公卿詮議にをよびて、京中を罷り出づべきよし、宣旨ありければ、弟子の僧ども、淺猿く思ひける處に、「今日は吉日なり。吾が願成就すべし」とて堀川にて材木買べき事なんど下知して、宣旨の御請申されたる詞

寺、延壽禪師の影なり。人死して必ず(一)中有を經、炎王これをしり、生所を判ず。しかるに、中有をへず、炎王にしられずして、直に上品上生の往生をとげ給へり是れによりて、王ふかく是れをうやまふ」といへり、よつて蘇生して來りて影を禮すと語りき。壽福寺のある老僧名も承りし、忘れ侍り。年來は(二)阿字觀をしけるが、觀心成就したりけり。後には大覺禪師の下にして。多年坐禪しけるが、或時長老に對面して、暇申してまかり候とて出でけり。此僧少し風氣ありとて、延壽堂にありときくに、いかにいたはりの中に、何くへゆくやらんと不審に思はれけり。さて歸りて倚座に坐して、(三)定印むすびて、眠るが如くして終りぬ。生死は二十年より以來、既に不審はれて侍るとぞ、隔なき同法に語りける目出たかりける事にこそ。

三、建仁寺本願僧正の事

故(四)建仁寺の本願僧正、戒律を學し、威儀を守り、天台、眞言、禪門いづれも學し行じ給ひ、念佛をも人にすゝめられけり。遁世の身ながら、僧正になり給ひける事は、遁世の人をば非人とて、いふかひなく名僧の思ひあひたる故に、佛法

(一)中有。前出。

(二)阿字觀。眞言宗にて阿字本不生の理をみきはのること。

(三)定印。寂然不動三昧に任する相をいふ。

(四)建仁寺の本願僧正、榮西禪師のこと、榮西は初め比叡山に學び再度入宋して歸朝後建仁寺を建つ、建保三年七十五にて寂す。

(一)體用不二。本體と能用とが離れざること

(二)炎王。閻魔王のこと。

義是れ大乘修行の大體、眞言密教の通行なり。是等の觀門はみな彌陀の法身、惣ては一切佛菩薩の法身を念ずる念佛なり。又衆生の心地なり。實には凡聖不二の一實境界なり。名號を念じ、相好を觀ずるは、妙用に付て先づ有相を以て方便として應身の益を蒙る。應身の念佛なり。一念不生は法身の體にしたしき念佛なり。能念所念なき、不二の念佛なり。まづ彌陀の法身を得て、用の往生する人もある先づ相用につきて往生して、後無生を得て法身を悟るもあり。(一)體用不二なれば隔つべからず。諸佛の法身、自心の實體、靈覺不二なり。始より此の理を信ぜば、用の往生も安くこそ。されば念佛門の人も、心地の修行をうとくすべからず。禪門眞言の人も念佛の行をかろむべからず。法身の體、應身の用互にかろめ疎くすべからず。其の機縁意樂に隨ひて、修行を懇ろにし、生死を離れ、解脫を得べきなり。智覺禪師坐禪の外の行『法華』を誦じ、念佛を行じ、上品上生の往生せる人なりし『往生傳』に是れあり。或る僧、智覺禪師の沒後に永明寺に來りて、かの禪師の眞影を禮す。そのゆゑを語りけるは、病によりて死して閻魔王宮へゆく(二)炎王僧の影を圖して禮拜し給ふ。冥官に問ふに答へていはく「かれは唐の永明

にさしながら、說法しなんどす。布施はひけば制しもせず、取りもせず、たゞほしきもの、思ふさまにとり用ひける、世良田の明寅、長老と得意にて、常には佛法物語なんどして禪門の風情も心にかけたる人と見えたり。或る人念佛申すに、妄念の起るをば、いかゞ對治すべきと問ひける返事には、(出)

あともなき雲にあらそふ心こそ、なか〳〵月のさはりなりけれ。

一返房の歌にもあり、臨終の體、端坐し禪定に入るがごとくにて、紫雲庵の前の竹にかゝる紫の絹をうちおほへるがごとし、音樂空にきこえ、異香室に薰ず、見聞の道俗市をなす。葬送の後、灰紫の色にて、かほりなつかし、灰の中に舍利を得佛舍利の如し、彼の弟子親りかたりき。かつは灰も舍利も見侍りき。世間の風聞是れ同じかりき。末代には誠に目出度こそ。多かる念佛門の人は、心地の法門をうとく思ひあへり。此は智慧あさき故にや、『彌陀思惟經』には「平等の心をもつて、一禪指の間坐禪して、一切衆生のために、阿彌陀佛を念ぜよ」といへり。凡そ一切の行、禪とみればみな禪なり。一心のきはまる所に、その分々の證ある故に、また一切念佛とみればみな念佛なり。一念不生の心地、阿字本不生の字

興行せり、上古より人ことにも、ならび行ぜず。これ宗の愚かなるにあらず、機縁時いたらず、既に時いたれるにや、律儀も禪門も、當世流布せり。この時縁をむすび、戒行を守り、坐禪を修すべし。法相、天台の學者は多けれども、末代は坐禪修練して、唯識の觀念、圓頓の妙行する人も稀なるにや、たゞ論談決擇をことゝし、宗の權實を諍ひ、敎の淺深を論ず。一期の學は今生のためなれば、臨終には何事をかすべきとて、或は念佛、或は眞言、時にのぞみて思ひわづらふ。誠に渴にのぞみて井をほるが如し。さしも一大事の生死を出づべき計を、平生に能く〳〵思ひしたゝめ。功をくむべきに、名利の爲にのみ學しては最後に臨んで忙然たる事悲しむべし〳〵。上野國、山上といふ所に行仙房とてもとは淨道僧都の弟子、眞言師なりけり。近比は念佛の行者にて、たつとき上人と聞えき。去ぬる弘安元年秋の比、入滅前の年より、明年臨終すべき月日、病の事ども記して箱の中に置き、弟子是れをしらず。歿後に開いて知る。常の念佛のごとく、數返なんどはなくして、觀念を宗として、萬事世間の事執心なき上人なりけり。說法の作法も人の强いて請ずれば、時にのぞみて不可思議の小衣、はぎたかにきて、木切刀腰

教のあらんほどは、餘の佛法もあるべしといへり。(一)此國金剛一乘有緣の國なり。地力自然と云ひて相應の地あるべし。日本は獨古の形の故に、一乘にかたどる。(三)五方の鈴を立つとき、獨古は西方なり、是れ一乘彌陀觀音に官る、上宮太子觀音の垂跡として始めて佛法を弘め、最初に老身の所持の經『法華』をとりより給へるも由あるべし。天竺の摩竭陀國の主出家して沙門となり、善無畏三藏これなり。龍智菩薩の弟子として、密教を唐土にわたし給へり。唐の儀わづかに三代さかりなりといへども、惡王佛法をほろぼしける時、皆うせぬ。その眞言書あまりに秘藏して、内裏におさめて流布せざる故にうせにき。餘の聖教は國におほく流布のゆゑに、うせはてず。眞言教をば傳教、弘法、慈覺、智證等の大師、我國へ渡し給へり。是も有緣のゆゑなるべし。唐の青龍寺の、惠果大師の弘法大師に讓り給へる詞にも、人の貴は國王法の貴は密教、冒地の得がたきにはあらず。此法に遇ふこと難きなりと。されば善無畏も國王として此法をわたし給へるにや。彼の詞思ひ合せられ侍り、此國は眞言、天台、念佛有緣の國なり。法相、三論、華嚴等は、南都東大寺、興福寺のみ學して、諸國に流通せず。(四)律儀、禪門は近比

(一)金剛一乘。眞言の教をいふ。
(二)獨鈷。金剛杵の兩端一穗なるものをいふ。
(三)五方　中、東、西、南、北、
(四)律儀　戒律の教。

二、臨終目出度き僧の事

中古の諸宗の先德の事は、和漢みな傳に載せたり。面々に智行德たけて、臨終みな禪定に入るが如く、別の奇特なく、安然として化すといへり。其間に奇異の事も侍り。凡ては佛道に身を入れ、解脱に心をかけて、いづれの宗をも學し行ぜん人に、一筋に臨終の行儀なるべきに、修學の道儀すたれて、纔に敎門を學すれども、菩提を期する志はあさく、世間をいとなむ思ひは深し。さるまゝには、顯密の學人の佛法をもつて世を渡る橋とし、聖教をもつて身を養ふ媒とす。是の故に平生の稽古、しかしながら名利の計事なり。慧心僧都發心の後名利の二字を拜まれけるは、名利の心にて、學問するほどに、敎門を見あきらめて、道心を發したる故なり。『維摩經』に欲の鈎を以て引いて佛道に入るといへり。かつて出離の心あらざる名利のためのは、學問の智慧もなく、道心なからんは悲しかるべし佛教の本意はたゞ菩提心を宗とす。(二)三密の敎法は、自證あきらかにして、利他の德用をほどこすべし。菩薩の行願利益を宗とす。國を祈り、民を安くして、災をはらひ、福をまねく事、上代より密宗すぐれたりとす。先德の口傳には、眞言

(一)慧心僧都。前出。

(二)三密。前出。

れは小乘の涅槃なり。第四の無住涅槃これ大乘の菩薩のすがたなり、煩惱所知の障をたちて、衆生を利するすがたなり。論にいはく、「大悲般若常に輔翼するところ斯れによりて生死と涅槃とに住せず、有情を利益して、未來際をきはめ用いて常に寂なり。故に涅槃と名づく」云云。涅槃の飜語にあまた是れあり、不生不滅寂靜、圓寂、安樂等なり。これは寂靜の心なるべし『法華』の(一)四要品には『觀音品』涅槃にあたる、種々利益これこの無住涅槃なり。有相無相不二なるゆゑ、性相空有全く同じ。これまことの大行なり、偏へに一法に住するは、大衆の行にあらず。此の法門心をうべし『法華』に(二)三十二相具す、乃ちこれ眞實の滅」といへるこの心なり。滅はすなはち寂滅涅槃なり。『肇論』に此の法門おほく見えたり。「彌寂彌動し、彌動彌寂」といへり。凡夫は生死に著す、智慧なき故に、二乘は涅槃に著す、慈悲なき故に。たゞ菩薩の意、深廣無礙にして妙なり。仰いで學ぶべし、大衆の修行これらを辨へて、信心を堅固にし偏少邪路に入るべからず、能く〱思ひとくべき道理なり。この物語は秘事なり。然れども心の中に朽ちさじと書きつけ侍り心あらん人は定て感じ給ふべし。

(一)四要品。方便品、安樂品、壽量品、普門品。

(二)三十二相前出。こゝは三十二相の形、そのまゝが無色無形の涅槃なりといふこと。

舍大衆かな、折にこそよれ、只めされ候へ」と申しければ、ぬき給はず、げにも法式はさる事なれども、いとけなき禪師の君の雪の上を、はだしにてをはせん事いたはしく思ひて格にかゝはらずぞ申しける心わりなしと、供奉の人々も思ひあひけり。さて後に尋ねられければ、中道房の未だ太輔房とて、大衆の中にてさかしく申されける。そのゆゑにや、當時まで御室の御氣色しかるべき樣にて、眞言の秘事なんど、御許しありけりと聞こゆ。人は情もあり、心もあるへきものなり。凡そ格を知らざるは云ふかひなし、格を堅くふるまふは、普通の人なり格をこえて、其意をうるこれ達人なり。凡夫の佛法をしらず、因果を信ぜざるは格をしらざるが如し。二乘の生死涅槃の執かたくして、生死の有をすてゝ、涅槃の空を證するは、格をかたく執ずる人の如し。たゞ大乘の菩薩のみ、大乘の意を得て、生死即涅槃の旨を達して大智の故に生死の泥に染せず、萬法の空寂を達し大悲の故に涅槃の空に住せず、(一)四生の迷徒を救ふ。是れ格を越えて格にあたるすがたなり。是れ第四の無住涅槃なり。『唯識論』に四種の涅槃を釋す。第一は本來自性清淨涅槃、これ凡聖無有の眞如の體なり。第二は有餘、第三は無餘。無餘こ

(一)四生。前出

和泉式部、保政にすさめられて、或る巫をかたらひて、貴布禰にて敬愛のまつりをせさせける。保政、粗聞きて、かの社の木かげに立ちかくれて見ければ、年たけたる神子、赤幣たてならべたる周圍を、樣々に作法して、鼓を打ちまへをかきあげてたゝきて三返めぐりて「是れ體にせさせ給へ」と云ふに、面打ちあかめて返事もせず、何に是れほどの御大事に、今は是ればかりになりて、かくはせさせ給はぬ。さらばなじに思食たちける」と攻むれば、保政くせ事見てんずと、をかしく思ふ程にかくぞ詠じける。

〽ちはやぶる神のみる目もはづかしや、身を思ふとて身をやすつべき。

彼の心のうち、わりなく優に覺えければ、「保政これに候ぞ」と云ひて具して歸りて志あさからずなんありけり。これこそ格にかゝはりて、振舞たちましかば、やがてぞ疎まれなほし。格を越えて却りて格にあたりて祈念も叶ひけるなるべし。開白の御室、東大寺にて受戒し給ひけるに、雪をひたゝしくふり、風ふきて、戒壇院の石壇の上にも雪つもりたり。石壇の上には足駄はゝかぬ事なれば「あの御足駄ぬがれ候へ〳〵」と大衆共申しければ、既にぬがんとし給ひるを或大衆「凶の田

ざる者なり、禮をしりて時、折節もわきまへず、たゞ堅く禮を守るはかたくなる事あるべし。是れ格を出でざる者なり。折を知り時に隨ひて、格をこえ禮にかゝはらずして、物の意得て振舞ふ。是れ實の達人なり。諸道の達者、その道の意を得る者、必ずしも師說にかゝはらずといへり。是れ道々の不傳の妙なり。南都の或寺に、(一)如法經を行なひける道場の幡に火付きて燃ゆるを或る(二)沙彌、こと美しき體にて老僧に申しけるは「道場の幡に火の付きて候は(三)行水して入れて、消し候べきか」と云ふ。是れ格を出でざる姿なり。折にこそよれ、急ぎ入れて消すべし、武州の或寺の長老、宋朝に渡りて、彼寺の行儀を移し行ふ故に、十三人の僧を、十二人は寺官にさして(四)點心營みける時、一人の僧をば堂僧とて點心を食はせず、大なる寺に堂僧多かる故に、官人ばかりに點心するを、守る格式おこかましくこそ。此事は宋朝まで聞きたる勝事なり。又或る寺には、三人してからをりの道行し、或る寺には四人して二行の列をひく。是れみな格を守るゆゑなり。僧おほかる時の行なり。すくなき時の行儀にあらず。在家出家をいはず、格式をしらず。禮儀を存ぜざるは多し、格をしれる人の格を越えて、還て格にあたる人實に希なり。

(一)如法經。前出
(二)沙彌。前出。
(三)行水。修行のとき水に入り潔齋すること。
(四)點心。食を空心に點ずるといふことにて食事することをいふ。

いへり。是れも境理といへる相なし。二諦教門は至理にあづからずと云ふばかりなり。諸宗みな機を引く方便の教門異なれども、實證のところ替るべからず。(一)法相にも言説を立つるをば(二)依詮といふ。有爲有相なり。(三)安立諦ともいふ。實證の處をば廢詮といふ。無爲無相なり。是れを非安立諦といふ。されば言を立て心を起すは幻化虛妄の境界なり。一切の教門は頭を失へる狂人に向ひて頭は失せずとぞ教ふるが如し、これやむ事なき詞なり。頭を失はぬ者に向ひて云は、いたづら事なり。此の故に眞實に本心を得なば、何か外に佛法を求め、うとく言説を用ゐん。彼の山中の老僧、既に此境に入りて、諸宗の先達をも、宗を失ふ人といへり。是れは實に失ふには非ず。やむ事なくして一門の方便を立つるなり。然れども法體にうとく、教門の旨を得ざる學者を失といへり。故に書にいはく「智師にあうて師の意を知る」といへり。此の老僧の智、既に師に超えて、師の意敬の旨を得たり。超佛越祖といへるも、誠には爭か佛祖に越えん。此の意なるべきをや。凡そ世間出世格をこえて、格に當るは當らずといふ事なし。格の中にして格を出でざるは或はあたり、或はあたらず。禮儀を知らざる無禮なるは、云かひなし。格をしら

(一)法相。相法宗。
(二)依詮廢詮。詮は言ひあらはすこと、言葉によるを依詮といふ、言葉を廢するを廢詮といふ。
(三)安立諦。前出。

明の靈覺を失へりと思ふに、種々に欣求し修行して、菩提を得たりと思ふ。頭を失ひたりと思ひ、又得たりと思ふが如し、然れば(一)本覺を失へりと思ふ流轉生死も夢なり。佛果を得たりと思ふ始覺の涅槃も夢なり。『圓覺』にいはく「始めて知る衆生、本來成佛なり。生死涅槃はなほ昨夢の如し」と云ひて、生死の迷妄のみならず、始覺の菩提も夢なりと云へり。本來の知見、天然の靈覺、萬物にさへられず、六塵にけがれざる處、無我の大我、自己の寶藏なり。此所は凡にあらず聖にあらず、迷もなく、悟もなく強いて本地の風光、本來の面目といへり。是の故に『思益經』にいはく、「諸佛の出世は衆生をして生死を出で涅槃に入らしめんがために非ず。たゞ生死と涅槃との二見を斷たしめんとなり。」二見は即ち同じく夢なる故なり。夢さむるをかりに現といふ。現の相も誠にはなし。されば一代敎門は愚癡の衆生をこしらふる方便なれば、權の言說なり。故に天臺の師も、敎權理實といひて、凡そ敎門はみな權なりといへり。理實といへるも、理と云ふ相をとらば、是れまた夢の心なり。敎の權に對して暫く實證の處を理といへり。理處を執せば、また權なるべし。(二)三論師も(三)二諦はたゞこれ、敎門不開の境理」と

(一)本覺。始覺前出。

(二)三論師。三論宗の師。

(三)二諦。眞諦、俗諦。

本如來藏」といへり。まことに佛法にすき、菩提をねがふ心あらば、文字の上にもあれ、境界の處にもあれ、自然に意を得べし。然れば言說に對しては、言說を忘れ、分別のところには分別をあきらむる、力あらば、言說の趣むくところ、分別のおち入るさかひ、自から知りぬべし。若し言說に著し、分別に滯らば、爭か妙なる佛意をしるべき。言說念慮はこれ幻化虛僞の夢中の妄想なり。故に『法華』にいはく、「是の法は思量分別の能く解する所に非ず」と誠なるかな、法即心々即法ならば、眼みづから眼を見ざるが如し。されば心を以て心を知らんとせんは、我れ目を以て自れが目を見んとせんが如し。豈に遠からざらんや。此の故に心を忘れて心をしり、言を忘れて言をもちゐる。是れ道人の姿、達人の儀なり。『楞嚴經』に一の譬を說けり。演若達多と云ふもの、朝鏡を見る。あしく鏡をもちて、面の見えざるとき、鬼魅の所爲にて、我が頭うせぬと思ひて、おほきに愁へ歎き狂心にして走り求む。人ありて敎へて、よく鏡を見せしむる時、さきに失なへる頭を今得たりと思ひて、是を悅ぶ。是を迷の衆生の意にたとふ、我本覺の實體は、靈性天然なり。うすべきに非ず。然るに知見に知を立て、覺にそむき、塵をとめて妙

(一)和光同塵　前出。
(二)大權　佛菩薩がかりに姿をかへてあらはれたふへる方。
(三)泥洹　涅槃と同じ梵語、滅度と譯す。
(四)三科　五蘊、十二處、十八界の稱。
(七大)地大、水大、火大、風大、空大、見大、識大、

丘のために說く」はやむ事なくして假なる名字をもつて、引導し給ふ事なり。祖師の失なふ事は、實にはあるべからず。たゞ凡夫の拙き故に(一)和光同塵の心なるべし。方便なくしては眞實のところ顯れ難き故に、慈悲をもつて、(二)大權、迹を垂る。一向に祖師を輕めば、又大なる謬りならん。和光の方便、三國の風みな同じき也。維摩居士の示長者の身方便を肇公の讃むる詞にいはく、「本にあらざれば次で迹を垂るゝことなし。迹にあらざれば次で本を顯はすことなし。本迹異なりと雖も、不思議は一つなり」云云。上宮の『維摩御疏』にも多く肇公の詞を用ひ給へり。祖師みな和光の方便なり。其の意大に相似たり。『楞伽』に云はく、「我れ得道の夜より(三)泥洹の枚まで、一字をも說かず」と。されば眞實の處には言說なし。また悟道の緣をいはゞ、たゞ文字に限らず、山河大地なにものか實相にあらざらん。色香中道なり、森羅萬像悉く佛身也と云へり。故に東坡居士、谷川に聲を聞きて道を悟りて頌していはく「溪聲すなはち是れ廣長舌、山色豈に清淨身に非ざらんや。夜來八萬四千の偈、他日如何が人に擧示せん」佛意をあきらめば何ものか佛法にあらざらん、六塵の說法たふることなし。『佛頂』には(四)三科(五)七大

仁義あらはれず、大道すたれて用ひられず、悪逆生れて則ち仁義の傳ふべき道あり智慧出でゝ、大僞ありと云ふは、智慧の君、徳を賤しみ、言を貴び、質をいやしみ、文をたとび給ふ故に、人これをもつて文を學びて、僞をなす、されば五帝の象をたれ、蒼頡が書をつくる、三皇の繩をむすび木をきざみしに如かずと云へり。人の心すなをなりし時は、木をきざみ繩を結びしゝるし違へず、文字をならふる代には、僞りありといへり。これが如く、佛教も凡夫の感なくは、顯はるべからす。たゞ寂靜凝然なり。凡聖あとなし。迷の衆生、種々の見をおこし、處々に著を生ずるゆゑに、やむ事なくして、文字をあらはし、言說を起してこれを引導するなり。故に『法華』にいはく「但以て名字を假りて衆生を引導す」といひ、「衆生處々に著す、これを引きて出づることを得しむ」とも說けり。『肇論』にいはく「稱謂を存せば名に封ぜられ、器象を志せば形に耽る。名は題目に極まり、形は方圓を畵す。方圓は所あり寫さず、題目は所あり傳へず」云云。これ誠に諸宗の自ら言象の外にあること疑ひなかるべし。『法華』にも諸法寂滅の相は言を以て宣ぶべからず、」といへるは、まことの所なり。「方便の力を以ての故に(一)五比

(一)五比丘、釋尊出家のとき、父命によりて釋尊に隨侍し、後釋尊をすゝて走りしも、釋尊成道の後先づ化せられて弟子となれる五人の比丘をいふ、阿若憍陳如、阿濕婆恃、跋提、摩訶男、婆沙波。

（一）三種止觀　前出。

（二）冷煖自知　冷と煖とは自ら飲みて知ること。

心を以て心をつたふ、文字はこれ瓦礫、文字は是れ糟粕なりとのたまへり『性靈集』に見えたり。天臺智者大師、南岳に（一）三種の止觀をつたへ給へるも、文字をば傳へ給へりといへども證は他によらずと云ひて、誠の自證は我れと得給へり。教門の言語義理は習ひ傳ふといへども、言をはなれ義を忘れて、知るところは不傳の妙なり。我れとみづから知るべし。是れを佛祖不傳の妙といふ也。一行禪師の疏にも、人の疵を蒙れる痛みあること疑ひなしといへども、まさしく痛みを知ることは我が疵をかふりて知るが如しといへり。祖師のいはく、水を飲んで、（二）冷煖自知するといへる此の心なり。水は冷く湯は溫なりと習ひ知ると雖も。まさしく飲み觸れずは爭かしらん。眞實の意を得ること是れに准ふべし。老子なほいはく、「大道廢れて仁義あり、智慧出でゝ大僞あり」と大道の代には人ごとに孝道を行ふ故に、自然に孝行其の身にふるまひ、其の意にあり。此の故に人の敎なく、言にいづる事なし。病なきとき藥なきがごとく。仁義禮智信といふことはなし。不孝の子惡逆の輩代にありし時、仁義の敎顯れたりといふなり。河上公のいはく「大道廢れて仁義ありといふは、大道の代には家々に孝子あり、戶々に忠臣あり

御情、たゞ是れに候べし」と云ひしかば。子細にをよばずと、約束して、名殘惜く覺えながら、高野へ詣で、又下向のとき寄りたりしには、いと心よくも思はず氣にて申すべきことは大底申し候ひき」と云ひしかば、一夜とゞまりてかへりにき。其の後餘りに覺束なく、覺えしかば、一兩年の後、また行きて値ひたりしには、心地よげなる氣色にて、「かゝる者ありと御披露は、なかりけりと覺え候。ささの小法師を御供に具せられて候ふとて、兩三日とゞまりてなほ〳〵佛法の大意物語りして歸りし後は、都て聞く事なかりき。かゝる先達にこそあひたりしかと、意ある弟子にかたられける由、彼の孫弟子の僧なん語り侍りき。彼の僧正は、近頃の智者と聞えき。ありがたき知識にあはれて、佛法の大綱存知せられける。肇公の『寶藏論』『肇論』佛法の大綱これあり。此の老人の意天然と相叶へり『寶藏論』は最後の作、三帝佛法大意分明なり『肇論』の文下にこれあり。一行禪師・善無畏三藏の口傳を受け傳へ給へる『大日經疏』にも「菩提は人に授くる事、手の中の菓を人にあたふるごとくに非ず、必ず無師自悟の智慧ありて得べし。心を得る妙は、人に授くべきにあらず」と云へり高野大師の御言にも「密教の本意は、

(一)緣。心にうつすこと、認識すること。

(二)法相　法相唯識宗のこと

(三)權者　佛菩薩がかりに人間にあらはれたまへる方をいふ。

ちひ、格式を立つるより、眞實の旨はうする事なり。宗を弘むるは皆一門を立てて勝劣を論じ、一義を正として是非を判ず。方なき處に法を立て、言なき法に言を顯する故に、言へば格立す、思へば境存す。既に定相を立つ、何ぞ無礙の法ならん。また境界を存す。誰か無相の理と云はん。實に一心ならば誰か思ひ、誰か思はれん。はたして無相ならば、何か(一)緣じ、何か緣ぜられん、されば迷の機に對して宗を立つる事は、狂人走れば不狂人走と云ふが如く、やむ事なき假の方便なり。此故に教門顯れず、諸宗たゝざる時、眞實の佛法なる故を心得て侍る也」とて、樣々の法門目出たく語りき。大聖の出世にあへる心地して、餘りに貴く覺えしかば、「(二)法相の法門の大意承りたく侍り」と云ふに「君は佛法の棟梁になり給ふべき相おはします。あやしけなる栖居こそ御痛はしく思ひ奉れども、佛法のためなれば、なにかは」とて法相の本書の、大綱談じ入ること一兩月に及ぶ。都て普通の學匠の如くに非ず。教門宗旨、底にとほり、源をきはめて、實に佛意もかくこそと覺えしかば、(三)權者にあへる心地して、我身の一期の智慧、彼の師匠の恩德なり。さて、「かゝる者の是にありと云ふこと、穴賢、御披露な候ぞ。此程の

耀を心として出身の思ひ、官途の望のみにて、滅罪の行儀なく(二)唯識の觀念かけたる風情佛意にも背き法門の掟にもかなはず覺え侍りしかば、公請も物うく侍りしを師匠にて候ひし僧、出身の心のなき者とて常にはうけぬ事にて侍りし程に父にて侍り候ひし者勞はること候ひしかば看病なんど仕るとて、日來つかへ侍りし程に、凡夫の習の拙さは、隣の百姓か女におち候ひぬ。さて父死して後、只一人の子にて侍りしまゝに、此家を繼ぎて山里の習ひなれば、粟なんど云ふ物作りてすぎ候へば、ひたすら山がつに成り果てゝ恥しさに、本寺へ罷り通ふ事もなし。年闌ちて後は、世間の愛習もなくなりて、當時もこれにうはにて候者なり。さるまゝに昔、學せし佛法の忘れがたく、本寺へ聖教を尋ねて是れに候。御覽ぜよ」と云ふ。見れば皮籠五六合あり。さて又「することは候はず、聖教をこまやかに見候程に、近地佛教の大意を心得て侍るなり。其故は諸宗はみな未だ弘通せぬとき候ひけり。祖師弘通する故にうせて候なり。法相は慈恩大師の時よりうせ、天臺宗は智者大師の時よりうせ、眞言は弘法大師の時よりうせて候なり。有佛無佛、性相常住の法なり。言語なく、定相なく、分限なく、格量なき所に、言說をも

(二)唯識の觀念。一切萬有はたゞ我が心識の外になしといふ道理を觀念すること。

沙石集卷第十

一、佛教の宗旨を得る人の事

金剛王院の僧正(一)實賢、年たけて後佛法の心地ある弟子に、物語りせられけるは、當初、無下にわかゝりし時、高野詣の便宜に和州の山寺巡禮せしに、葛城の邊の山里に行きくれて、或る山賤が家に立ち寄りて宿をかるに、年たけたる法師出であひて「見苦げに候へども、入らせ給へ」と云ひしかば、立ち入りぬ。さて粟の飯を、折敷に木の葉うちしきて、取り出したり。「何にても器物に入れてたべかし」と云ひしかば、「尋常の人と見奉れば便なく」といひき。さて燒火なんどして物語せしは、智慧の相おはしませば、たゞ人とも覺え候はず、我が身の事委しく申し候はん。是れは此山がつが。子にて侍るが幼少のとき、興福寺の或る僧房に候ひて、學問仕りしが、器量も無下にも候はで、稽古し侍りしほどに、出家の後は學匠の覺えありて(二)公請なんどもつとめ侍りしが、佛法の大意は、死の流轉をたち、菩提の妙果を期すべしとこそ見ゆるに、學者の意樂たゞ今生の名利榮

(一)實賢。眞言宗の僧。藤原基輔の子、金剛王院に住し、醍醐寺の座主となり、東寺の長者となる。建長元年七十四にて寂す。

(二)公請。朝廷などよりの佛事の招待をいふ。

中に委く判ぜり。先徳のいはく、「發心僻越しぬれば、萬行徒に施す」と。よく〱辨ふべし。無益の苦行は外道の法なるべし。

いはく、「水月の道場に坐し、空花の萬行を修め、鏡像の天魔を降し夢中の佛果を成ず」とや。これ眞の教なり。請ひねがふべき心行なり。惡見の人の心には、かなはじかし。『起信論』には四の事を信ずべしといへり。眞如と三寶となり。眞如は三寶の妙體、三寶は眞如の妙用なり。此のほかに、何事をか信ぜんや。天臺のいはく、「但法性を信じて其の餘を信ぜざる」云云。此の信まことの道源、功德の母なり。先達の申されしは、佛法に入るといふは、內には眞如を信じ、外には因果を信ず、これ佛法の大意なり。此の道理にそむきて、無礙の見をおこし、放逸の事を行ぜば、道人の儀にあらず。釋子の風をそむけり。佛法を學すといへども、魔業を免かるべからず。『華嚴經』には、「菩提心なき行はみな魔業となる」といへり。靈の申しけること經の意に叶へり。是れ道人の龜鏡にそなへんために、經論の文を引きて、彼の語を證明し侍り。行人の用意、學者の故實なるべし。能く〳〵我が心の行を察して、魔業をなさずして、佛行を修すべし。喩ひ戒行おろそかなりとも、正見なるは(一)福田の業あり。『十輪』『心地』等の經に、僧寶とすと見えたり。戒行全くとも正見ならざるは、人の怨なり。福田の義なし。此のよし經論の

(一)福田。前出。

福をすらなさず。況んや罪をや」と。『智論』にいはく、「菩薩實相に住する時、一法も得ずば、戒をやぶるべしや。答へていはく、實相に住するが故に、なほ福をつくらず、況んや罪をや」またいはく、「空に二つあり。一には惡空、諸法は空なりと云ひて、心を恣にし、惡をつくる。二には善空、諸法の空をしりて、惡を恐れ善を行ず。善は空に順じ、惡は空に違ひぬる故なりといへり。惡見の人の意、法性の道理にそむけり。空といふは、無着の心、萬法の不可得の理を達する姿なり。不可得ならば執着あるべからず。水月鏡像を貪ぜざるが如し。既に惡をつくる着なきにあらず、若しなせども、著なしといはば、著なくは僞してなにかせん、又空なる故に作すといはゞ、善も空なり、これをなすべし。然るに惡見の人は、善をば厭ひてなさず、惡をば好みてつくる。既に愛恚あり、何ぞ平等の道に叶はん。又善は有相なりといはゞ、惡は彌々有相なり。たゞ妄情にのみかなひて、佛教の旨にそむけり。大乘の學者の中に、まゝに妄見をおこす人あり。天臺の『止觀』の中に、委しく釋せり。太乘の法に邪見を起すは、藥を毒になすが如しと云へり。されば(一)醍醐の上味世の珍たれども、惡見の人は毒藥とすと云へり。古人

(一)醍醐。前出。

といへり。幻化を實と思ふは(一)偏計の妄情なり。幻化もなしと思ふは斷無の邪見なり。此の故に「實際の理地には、一塵をも受けずして、佛事門中には一法をも捨てず」といへり。眞なる哉。

そのかみ東大寺法師にて、信救得業とて、才覺の仁ありけり。朗詠の注などしたるものなり。山法師の事を、一卷の眞言につくりて、陀羅尼を說きていはく、「唵山法師、腹黑々々、欲深々々、あらにくや娑婆訶」とつくれり。信救ぞしつらんとて、山法師いきどをり深かゝりければ、本寺を離れて田舍に住みけりといへり。是れを思ふに、唵の下をとりかへて、奈良法師、京法師、田舍法師も、俗士も、女人も、老少貴賤とりかへ〳〵、かき入れぬべき世の中なり。

(二)義淨三藏のいはく、「聖敎八萬、要するにたゞ二あり。內には眞を疑ふ知、見境俱に棄て、外には俗に順ふ途、禁を奉じて辭を亡す」いふ意は、內には能見の智をたてず、所見の境を存ぜずして、昏散共にのぞこり、寂照ならびて現ずべし。外にはふかく因果の理を信じ、緣起の相をやぶらずして、禁戒を守り、(三)舊業を消せといへり。實に佛法の肝心なるべし。天臺の師の言はく、「眞の無生の人は

(一)偏計。かたよりたる考量。

(二)義淨三藏。支那の僧。印度に入りて止まること二十年、歸りて譯經に從事す。華嚴經等五十六部二百三十卷を譯す。開元々年、七十九にて寂す。

(三)舊業。過去の惡業。

(一)三毒五欲。前出。
(二)三途八難。前出。

僧衆の經法にそむくのみにあらず、俗人の律令に違すること是れおほし。道俗共に欲心あさく、智慧ふかくは、自から法令にかなひぬべし。末代は年に隨ひて情なく、欲ふかく、德うすく、智あさし。なにとしてか先賢の敎に隨がひ、古聖の誡めにかなはん。(一)たゞ三毒五欲を恣にす。爭か(二)三途八難をはなれん。かなしき哉。夫れ智慧と云ふは、心空くして執著なき處なり。萬法の因緣和合して、夢の如く幻の如く、有と云はんとすれば、色もなく、質もなく、無と云はんとすれば、慮あり想あり、因緣和合すれば、十界の依正、假なりといへども、因果さだまりあり、凡聖品ことなり。このゆゑに、內には萬法の性空を達して著想なく、外には、因緣の假相たがはざることを辨へて、信心あらば佛の御意にかなふべし。一切の相みな幻化なり。地獄より佛界まで、幻にあらずと云ふ事なし。但し六趣の幻は妄情より化して、煩惱業苦、誠にかなしき幻なり。四聖の幻化は、眞性よりをこる、妙用の幻化にて、利生方便眞に妙なり。同じく幻化なりと雖も、差別なきにあらず。「よく分別して法相を說けば第一本心に於て動かず」と云ふは此意なるべし。『肇論』にいはく、「幻化の人無にあらず、幻化は是れ實にあらず」

へ」云云。誠に道を行じ、罪をおそるゝ人は、この事をつゝしむべし。永喜大師は耕鋤にあらざるを食とし、蠶口にあらざるを衣とすいひて、牛馬人の力を入れたるものを用ひず、絹の類をき給はざりけり。僧は信施のゆゑに、ことにをもし。人の苦しみより出でたる事は同じければ、在家の人も此事をわきまへて、仁義禮智信の五常を守り、國をやすくし、民をあはれみ、人のわづらひ、物のついへをしり、欲すくなく情あるべきに、仁惠ある人は末代にすくなくこそ聞こゆれ。仁惠なき王をば、書の中には「碩鼠〳〵我が稅を食す」といひて、大なる鼠の五穀を徒に食するにたとふ。國王は天下の父母として、萬人を哀れみ安くせんためなり。百官又その一の事を主どりて、王の政をたすけ奉れば、王の心をまなぶべし。然るに仁義なくて、徒に國をついやす事、鼠のごとしと云へり。また大海の底に穴あり、これを尾閭といふ。諸河の水日夜に入れども、かの穴に入りてうする故に、海水增せず。四海の民農桑して王にたてまつるを、用ひつくすにたとふ。官祿をうけながら、君に忠なく、民に惠なくして、徒に國をついやし、民をなやますは、(二)第二の戒の誡むるところに當る。しかれば、みな未來に償ふべきなり。

(一)第二の戒。偸盗戒をいふ。

故に、人身やぶれて畜生とあらはる。是れを以て思ふに、今の世の人は、彼れに及びがたし。虚しく信施を受くるの報い多くは地獄に落つべきをや。當來の果は今生の心にてしるべし。昔、僧護比丘、海邊に寺ありと見て、中食せんとす。見れば銅の湯をひく。僧、是れを飲んで身も寺も焼けぬ。是の如くして五十餘の寺をみる。歸りて佛に申すに、彼れは迦葉佛の滅後の破戒の比丘の地獄なりとの給まふ。また國清寺の僧、定を修するあり。定中に鹽現じて定をさふ。これは(一)常住の鹽を少分かりて、わすれて返へさゞりける故に、障となりけり。また或寺の長老、常住の物を惜つて客人にあたへて返さずして、寺の奴となる事ありき。南山律師いはく、一鉢の食をはかるに、一鉢の血より出でたり。汗は是れ肉の中にては血なり。皮にへだてられて住める故に、汗となる。しかれば汗は即ち血なり。始め田がへすより苦み營なむ。口に入るまでの煩ひ、いくばくぞや。定家の卿の詠にも、此の意をよみ給へり。

春の苗代秋のかりほのそめぎまで、くるしく見ゆる賤のをだまき。

書にいはく、「一食するごとに稼穡の艱辛を思へ。一衣するごとに紡績の劬勞念

(一)常住の鹽。寺院にて、常に畜へおく鹽。

是れ戒、心きよき即ち出家、我性、汝と合す。一切の法是の如し」といひて、牛をかりて昔の僧の名をよぶに、牛いらへほえて過ぎけり「前生に戒をたもたざれば、人面にして畜の心なり。佛恩大なりといへども是の如き物をば如何にとする事なし」と云ひて、泣く／＼牛をかひけり。凡そ一念の心中に、十界の性あり。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天、聲聞、緣覺、菩薩、佛界なり。性といふは、色形見えねども、その體性天然として、改まらずして、內にあるを云ふなり。花の中に菓たるべき性あり。木の中に燃ゆべき火の性あるが如し。緣にあひ時いたりて顯るゝを相といふなり。緣なければ顯はれず。その緣と云ふは善惡の業なり。(一)十惡の上中下は、地獄、鬼、畜の緣となり、三惡道の相あらはる。(二)十善の下中上は、修羅、人、天の緣となり、三善道の相あらはる。(三)四諦、(四)十二因緣は二乘の緣となり、(五)六度無相の行は、菩薩佛界の緣となる。然れば前世の十善の業因、今生の人身の果をえたり。今生の心中に思ひそみ、造りをく善惡の業因、秤のものを計るが如くして、まづ重き業その果を感ずべし。かの寺の僧、過去に人身をえて僧となれりと雖も、戒智なく信施消せずして、畜生の業心にありける

(一)十惡。前出。
(二)十善。前出。
(三)四諦。苦諦、集諦、滅諦、道諦。こ聲聞のさとる眞理なり。
(四)十二因緣。無明、行、識、名色、六處、觸、愛、愛、取、有、生、老死。これ緣覺のさとる眞理なり。
(五)六度。六波羅密のこと。布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧。これ菩薩の修行する行なり。

にも行じて、慚愧なからんをや。餘の盗殺妄も心に起すは、生死出づべからずといへり。此説を見るに、凡夫の心、誰かこれを斷たん。眞實に道念あつて、對治の行を修し、覺觀の念なからん人、やうやく斷ずべし。(一)論藏の中に(二)四重禁の家を作るに四の柱なければ立たざるがごとしとて、三乘の依住の處なるよし見えたり。(三)四根本を以て三乘の依住と云へり。いづれの行者も是れを恐れ謹むべし。

私に是れを一文字にて釋して云はく、おそろしく殺し、きたなく盗み、おしく淫し、むつかしき妄物なるをや。故に法性寺の禪定殿下の御時、御内の女房に靈つきて、さま〴〵のこと申しけるに、「中古の智者のきこえありし諸宗の名人、多く魔道にあり。明慧房解脱房ぞ何地へ行きたるやらん見えぬ」といひける。眞實の智者道心者ときこえしかば、さも侍らん。大唐の國清寺は、天台大師の舊跡なり。唐の代に豐干禪師の行者、拾得つねに寒山子と伴なひ狂ぜるに似たる人なり。まことにゞ普賢文殊の化身なりける。寺の僧、(四)布薩說戒しけるを見て、「幽々たるかな、頭をあつめて何事をかなす」といひて、牛を駈て堂の外にて笑ひけるを、老僧いかりて、「風狂子、我が說戒を破す」といひける返事に、「瞋ることなき

(一)論藏。論議の書物。
(二)四重禁。殺生、偸盗、邪婬、妄語の四戒律をいふ。
(三)四根本。四重禁戒のこと。
(四)布薩。前出。

(一)乘の緩急。乘とは教義のこと。教義を學ぶに勉むるを乘急といひ、これを怠るを乘緩といふ。

(二)滅度。涅槃といふ梵語の譯なり煩惱を滅し生死海を渡りこゆること。

(三)愛見。貪愛の思想。

文の意は、富貴にして容貌たへに廣學多聞なりとも、戒も智もなからん人は、鳥獸の如し。卑賤にして寡聞なりとも、戒智あらば勝たる人なるべしと。實にしかるべき事なり。諸道の昇沈は、戒の持毀により、見佛不見佛は(一)乘の緩急にまかせたりと云ひて、惡趣をはなれ善處に生ずる事は戒により、悟を開き佛を見ることは智慧による。戒と智とまことに寶なるべし。多聞の益すくなし。たゞ如實の智をうる方便なるべし。一向には非すべからず。されば聖財の中には入れたる也。たゞ名利の思をやめ、憍慢の心なくは、利他の益も、興隆の徳もありぬべし。『首楞嚴經』に云はく、「心を攝するを戒とし、戒によつて定を生じ、定によつて慧を生ず。六道の衆生、其の心婬せざれば生死相續せず。婬心の起らざれば生死出づべからず。たとひ多智禪定現前すとも、若し婬を斷ぜずば必らず魔道におつ。上品は魔王、中品は魔民、下品は魔女となりて、みな徒衆ありて、各々無上道をなれりと思はん。我れ(二)滅度の後、末法の中に、此の魔民多くして、世間に熾盛ならん。ひろく貪淫を行じて、善知識として、諸の衆生をして、(三)愛見の穴におとし、菩提の道を失せん」と說けり。心に淫を斷たざる猶魔道に落つ。況んや身

の僧來りても由なし」と云ひければ止めてけり。ある時、北野に參籠したりけるに、(一)持經者の經よむを聞きて、簾中より走り出で、この僧が頭をはりて、「あら聞たからずの聲ざしの恐しさや。これていに讀むをば、經よむと云ふか」といふ。見れば若き女房の尋常なるなり。さて「何によみ候ぞ」といへば、「いで讀みて聞かせん」とて、經の文をさら／＼とよみて、一段づゝ、その意をえもいはず釋しければ、實に法門の道理、明かに申し立て、尊く聞えけり。聞く人みな隨喜しけり。持經者も信心を致し、奇特の思ひをなしけり。此のことは十年ばかりが中の事なり。丹後の國の人とやらん承りき。此の靈の申しけること、聖教の道理にかなへり。實に多聞と智慧とは別の者なり。世の常は、多聞の人を智者と思ひあへり。然るに七種の(二)聖財とて、信と戒と慚と愧と多聞と智慧と捨離といへり。多聞と云ふは、ひろく內外の典籍をならひ、あまねく權實の敎門をわきまへたるが如し。かゝる人も名聞利養、我相憍慢ありて、眞實の戒も智慧も道心もなければ、みな魔道に落ち邪路に入るなり。故に經にいはく、「色族及び多聞ありと雖も、若し戒智なくば、禽獸の如し。卑賤小聞見に處すと雖も、戒智慧あるを勝士と名く」と

(一)持經者。前出。

(二)聖財。聖者の精神的財寶。

佛法にてこそあるらめ」と云へば、「名利の心ありて、佛法を賣る方の、きたなきを履むなり。佛法の方をば履まず」と云ひけり。かくの如く云ふを聞きて、「これほど佛法の道理も知り給へるに、よしなく人を惱まし、靈となり給ふこと何に」と問へば、「誠に不審する所云はれたり。但し佛法眞實の道心ありてこそ、生死をはなれ、悟を開く事なれ。何に學し行ずれども、名利執著の心ありて、まことの菩提心なければ、魔道を出でず。我は一代の聖教一つも不審なく知れり。然るに道心なくして、今に出離せず。わづかに紙一重、へだゝりて覺ゆるなり。我は天台山の立ち始りし時の者なりとかたる。さて當世の智者と聞える人の事を問へば、みな云かひなく云へり。東福山の上人開山の事をとへば、「それは末代に難有き智者なり。それも未だ三昧は發せず」といふ。かゝる靈と聞きて、或る遁世者、佛法問はんとて來りけるを、その家へ未だ行きつかで、道を來るを知りて、「かの僧が我れに物とはんとて來る。片腹いたし」と云ひけるを傳へ聞きて、道より歸りにけり。又かの夫ゆかりある僧の眞言師なるを、祈禱のために、高野へ請じに人をやらんとて、内にて狀をかくを知りて「なにしにつかはす、人くるしめに、か

なほ名利のために出離せざらん事とこそ、あはせ給ひけん。まめやかに名利を捨つるこそ、隱遁のかたち、出家のすがたなり。されば佛道に思ひ入らば、此心をえて、實にのがるべし。古人の詞には、鈍なる者は財と色とを愛し、初なる者は名と見とに著すといへり。或は世を捨てたる姿をかへて、名聞にする人もあり。或は德を隱すよしにて、放逸なる者もあり。能く〳〵心行を察して、多利の穴をいで、執著の氷をとくべきをや。

九、靈の佛法物語を詑する事

洛陽にある女房、靈病ありければ、種々に祈りけれども、有驗のものをも、あざむき笑ひければ、力をよばて、はては打ち捨てゝけり。東山觀勝寺の上人の(一)符をかけさすれば、物狂の者も驗ありと聞こえければ、彼の符を掛けさせんとするに、うち笑ひて、「かの符も我れ知り、彼は法成就の人なり。道心のある人なれば貴し、高く置け」とて置かす。また或る上人の符とて掛けさせんとすれば、「あら片腹いた」とて笑ひけり。「此れも知れり。但し秘事なれば云はじ」と云ふ。又ある名僧の符を見て、唾はきかけて、足にて履みにじりて捨つ。「いかにこれも

(一)符。經文など書きつけたるふだ。

實に捨てたる人なり。一には、世を捨つるは安し、自から貧くして、世にも捨てられ、或はまた愛別の悲みもありぬ、思の外の事いできて、世にもたちまじるべき事なくて、世を遁るゝ事も侍り。二に、身を捨つる、是れも思ひ捨てゝ、非人となり、飢寒を忍びて、强いて行ずれば、身は習慣の物にて、わずかに命をつぐ事あれば、年月を送りて、姿ばかりは捨てたるものなり。第三に、心を捨つといふは、五塵六欲、名聞利養かつて心にかゝらず、執心執着なくして、浮世を夢の如くさとり、身命を幻の如く思ひて、心の底より淸き心を捨つといふなり。此の心にて、念佛修善をも怠たらず、或はまた觀念坐禪もふかく思ひ入り、出離解脫の道は物にさへられず、念緣に轉ぜられぬ道人なりと語りき。當世の遁世、多くは第一第二重は見え侍り。第三重は希なるにや遁世の人の中に、隨分に佛法を學し、坐禪觀念する人も、偏執多く、法門に付けても振舞に付けても、是非我相うすしとも見えぬ事のみ侍るをや。(一)澆季の習ひならし。(二)迦葉佛在世の國王の十夢の中に、大象の窓をいづる、身は出てつゝ、猶尾にかゝへらて、出でやらぬと見て、佛に問ひ奉りしには、釋迦佛の遺法の弟子、出で難き家を出でたりと雖も、

(一)澆季。末の世。末代。
(二)迦葉佛。前出。

て罪を恐れず、恣に三惡四趣の業をのみなす事、世に多し。濁世には多く、魔往生あるべしといへり。惡人なんども心を改めて十念成就し、宿善開發したらんは、實に往生すべし。宿善もなく、正念にも住せざらん人の、こと〴〵しく往生とのみ申しあへらん心得がたし。惡人も心をひるがへして、往生せんは、教門のゆるす處なり。惡人と云ふべからず。善人も妄念ありて、臨終惡しき事あるべし。此れまた善業のあしきにあらず、妄念はつよく、善業はよはき故なり。此の理を信じて、因果をみだるべからず。高野の遁世ひじりども、臨終する時、同法よりあひて、評定するには、おぼろけに往生人なしといへり。或るとき(一)端坐合掌し、念佛唱へて引き入りたる僧ありけり。是れこそ一定の往生人よと沙汰しけるを、或る上人は、是れをも往生と定めがたし。其ゆゑは、誠に來迎にあづかり、往生する程の者は、日來あしからん面も、心地よき氣色なるべきに、眉すぢかひて、物すさまじげなる面ざしなり。魔道に入りぬるにやとぞ申されける。一兩年の後に、人に託して魔道に落ちたるよし語り侍りけり。彼の上人かしこく見とがめられけり。また高野上人の遁世の事を物語りせしは、遁世は第三重にたち入りて、

(一)端坐。たゞしく坐ること。

て、心濁り、妄縁に封着せば、道に遠からんこと疑ひなし。さしも賢人道心者と聞えし上、その執心も世のため人のため、(一)利生の一分にてもありぬべし。あながちに罪あるべしとも覺えねども、實の道に入る時は、法執とて佛法を愛するまでも道の障なり。まして夢幻の世の政、心にかくるにも足らぬ事を、常は思ひつゞけむ。爭か觀念の心もみだれざらん。念佛の妨げともなりぬべし。よしなき道に入りけん事も理なり。されば人の臨終は、知り難き者なり。

常州に眞壁の敎佛房とて、明遍僧都の弟子にて、道心者と聞えし高野上人なりけり。人の臨終をよしと云ふも、「いざ、心の中しらず」とぞ云ひける。また高野にありける古上人は「弟子あれば往生はせんずらん、後世こそ恐しけれ」とぞ云ひける。子息弟子なんどは、父母師長の臨終のあしきをも、ありのまゝに云はんもかはゆく覺ゆるかにて、よきやうに云ひなす、よしなき事也。あしくは有儘に云ひて、我も懇に吊ひ、餘所までも憐れみ、とぶらはん事こそ、亡魂のたすかる因緣ともなるべけれ。末代は多くは往生とのみ云ひあへり。惡人の中にまれに臨終たゞしければ、是を見て惡人も臨終よし、惡業恐るべからずと云ふ(二)見を起し

(一)利生。衆生を利益すること。

(二)見。邪見。

高野山に隠れ居て、念佛の行を宗として、眞言なんどもうかゞひて、道心者の聞えありけり。平生の願に、最後の時、念佛の數返は時によるべし。まさしく最後の十念をば、のどかに心をすまして唱へ、第十の念佛一返をば、ことに聲打ちあげて思ひ入れて、のび〳〵と申して、やがて引き入ればやと念願して、願のごとく少しもたがはず、念佛して息絶えにけり。其後、一兩年ありて、同法の僧、物狂なりけるが、口ばしりて、やう〳〵の事云ふをきけば、かの入道の靈なり。姿、聲差、少しもたがはず。同法ども思はずに覺えて、「御臨終目出たかりしかば、決定の御往生とこそ心安く思ひあへるに、何なる御事にてかくは御坐すぞ」といへば、「年來思ひそみ願ひし事にて、十念はせしかども、妄念の殘りて往生も仕そこなひぬるなり。其故は、當世の御政の濁れる事、常に心にかゝりて、我が其の官にありて、其事を司りて、ひきなをさば、さりとも是れ程の事はあらじなんど、よしなき事、やゝもすれば心の中ばかり、人しれず思はれし妄執、忘れがたくして、かかる由なき道に入れり」とぞ語りける。世をすてゝ深き山に住み、實の道に入れども、思ひそみぬる妄念、捨てがたきにこそ。まして塵勞の中にし

く思ひなしたり。それほどに四の文字の音だにも、いまはしき心に、正月は殊に恐るべき死せる魚鳥を家の内に取り入れて、切り盛り煮り燒くは、たゞ人畜に異なれども、死の形ち同じければ、葬送の儀なるべし。經には肉を食する口をば、死骸を捨つる塚なりといへり。などかこれを忌まざるべき。精進潔齋し、戒を持ちて佛につかへんこそ、壽命福德も目出たかるべけれ。正月には尤も此れを行ずべし。世間の人の物祝ひ、返へす〴〵道理なく侍り。ほしからぬ物をば、死人の具足とていとひ、大切なる所領財寶は、死人の跡なれども、此れを取らんと論じ爭ふ人を忌むも、氣色わろき者をば、序に久しく忌み、切りものなんどは、さしも忌まぬ事なり。かくのみ顚倒の心にて、世間のあさき道理をだに知らず。ふかき佛法の義理誠にさとりがたし。をろかなる凡夫の習ひかな。本覺佛性内にあり、世間出世の道理、知識の緣に値ひて、是れをさとりしり、常住の妙道に歸して、顚倒の邪執をすつべきなり。

八、妄執によりて魔道に落つる人の事

中比、某の宰相とかや聞えし、才覺も優に、賢人の覺えありける人出家して、

くならして思ひの如く臨終も、誠に聖衆の來迎にあつかりて、目出たく往生の本意とげてけり。此れを迎講の始めといへり。天の橋立に始めたりともいへり。また慧心の僧都の脇息の上にて、箸をとりて佛の來迎とて引よせ〳〵して、案じ始め給へりと云ふ說も侍り。實に物にすき、其道をこのまん人は、寤寐に其事に心をそむべし。習さきよりあらずは、懷念いづくんぞ存ぜんといへり。能く〳〵思ひそみならすべきは、臨終正念の大事なり。返す〳〵も思ひ捨て、疎むべきは無始輪廻の執着なり。然るに世の人、往生を願ふやうなれども、朝夕にしなれ、思ひそむ事は、たゞ流轉生死の妄業なり。正念分明なるとき思ひそまずば、病患苦痛のとき餘念なく、臨終たゞしからんこと難かるべし。彼の上人の風情、うらやみたうべきをや。世間の習ひ、今生の身命を重くし、榮花富貴のみ心に願はしきまゝに、正月は殊によしなき空事ども取り集めて、今生の祝ひ事をのみしあへり。去年、一昨年も祝ひしかども、まさりがほなきに懲りずして、年毎に祝ひあへり。さる程に死といふこと恐しく、いまはしき故に、文字の音のかよへるばかりにて、四ある物をいみて、酒をのむも三度五度のみ。よろづの物の數も、四をいまはし

ゝ、世間の人は正月の初は、思ひ願ふことを祝事にする習なれば、我も祝事せんとて、大晦日の夜、一人つかふ小法師に狀を書きてとらせけり。「此狀を以て、朝元日に門をたゝきて物申さんといへ。何くよりと問へば、極樂より阿彌陀佛の御使なり。御文ありとて此狀を我にあたへよ」と云ひて、御堂へやりぬ。敎の如くに云ひて門をたゝきて、約束の如く問答す。此狀を急ぎあはてさはぎ、はだしにて出で取りて、頂戴して讀みけり。娑婆世界は衆苦充滿の國なり。はやく厭離して念佛修善勤行して、我國に來るべし。我れ(一)聖衆と共に來迎すべしとよみつゝ、さめほろと泣き〳〵すること、每年をこたらず。其國の國司下りて、國の事物語りしける次に、かゝる上人あるよし人申しけるを、國司聞きて隨喜し、上人に對面して、「なに事にても仰せを承りて、結緣申さん」と申されけれども、「遁世の身にて侍り、別の所望なし」と返事ありけれども、「事こそかはれども、人の身には必ず要なる事侍る」と、强いて申しければ、「迎講となづけて、聖衆の來迎の莊をして、心をもなぐさめ、臨終のならしにもせばやと、思ふ事侍る」と申しければ、佛菩薩の裝束、上人の所望に隨ひて調へて送りける。さて聖衆來迎の儀式、年久し

(一)聖衆。佛菩薩のあつまりをいふ。

にしか、また一期のわづかの身たすけんため、名をおしみてだに、合戰の場に命をばすつる習ひぞかし。それは勳功を云ふにも、わづかの榮花なり。あるかひもなき事もあり。或はあしさまに振舞ひて、かへりて頭をはねらるゝこともあり。又ゆゝしくたけきは、いよ〳〵命を失ふ。今生なほ其の益なし。來世はいふに及ばず。一旦の我執名聞にだに命をすつる習ひなり。佛道にすてなば、佛の引攝あづかり、菩提の岸に至るべし。徒に捨てんずる命を、同じくは法のために捨つべし。古人の云はく、「法あつては死すとも、法なくては生きじ。法あつて死するは納種懷にあり。法なうして生ずるは、沈迷長劫」と云へり。或はまた「朝に道を聞いて夕に死するは可なり」ともいへり。一期程なき浮世なり。あるに付けても愁へ、無きに付けても苦し。如じ、たゞ此度大乘の修行をはげみ、忽に心地を開通し、(一)淨刹に往生して、菩提の妙果をひらかんには。

七、迎講の事

丹後の國普甲寺と云ふ所に、昔上人ありけり。極樂の往生を願ひて萬事を捨て、臨終正念のことを思ひ、聖衆來迎の儀を願ひげるあまり、せめても志の切なるま

(一)淨刹。刹は土と譯する梵語。淨刹は淨土のこと。

門の外にて加持し給ひければ、蘇生して、遂に后に立たせ給ひけり。上東門の女院これなり。大御室は慈悲ふかくして、佛法の効驗あらたにまし〳〵けり。御室の御所には、御架の菓子日々に式々とまゐらす。此菓子夜々うせければ、近習の人々あさましく覺えて、伺ひ見るほどに、夜ふけ人しづまりて、長高き僧の白衣なるが、袋を以て御架の菓子を取り入れけり。誰ならんと見れば、御所にてまし〳〵けり。さて袋うちかつきて出で給ふを、追々しのびて見奉れば、大内裏の墻の外に、諸の非人、乞丐、病者の、いたされたるに、加持してたびければ、多くは病もいえにけり。慈悲は佛の心なれば、法の德もことに顯れける。上代はかゝる慈悲もあり、智慧深き高僧まし〳〵ければ、世もおだしくこそ。其時も衆生の業報はなほ遁れがたし。末代には年に隨ひて、世間の災難は多く、佛法の効驗希なり。世くだれりと云ふとも、隨分に佛の制戒をも守り、大乘の修行をこたらずは、我が眼睛を守るが如く守らんと、佛の御前にて誓を發せる諸天、善神、日月、星宿等、世界に滿ち滿てり。などか其の本誓むなしからん。たとひまた佛道修行の故には、命をうしなふとも、何の歎きかあらん。多生曠劫、徒にこそすて

都率の僧都(一)覺超は、天臺の密宗の先達なり。行德聞こえありて、時の后の難産御加持のため、宣言を以て召されけれども、(二)行法に隙なくて參らず。宣旨たび〱申し返しければ、勸修寺のたれがしとかや、名人なる公卿相に仰せて、いかにもして。召して參れと宣下有りければ、彼の人横川の房にゆきて「宣旨たび〱申し返さるゝところ、王土にはらまれて、そのいひなく侍る上、仰せを承りて侍れば、御參內なくば、命を爰にて亡すべし」とて居られたりければ、事にが〱しく覺えて「さらば參らむ」とて、歩行にて參內して御加持ありければ、御産平安なりけり。やがて退出せられける、うしろに僧都の宣命をよみかけてけり。

一條院の御時にや、時の攝籙御堂の關白道長の御女、二歲になり給ひけるが、后にも立てんと思食して、かしづき給ひける程に、すこしなやみて、俄に息たえ給ひぬ。あまりに悲しく思ひ給ひけるまゝに、如何にして助けんと思ひめぐらし給ふに、高野の大御室こそたのもしくおはすれとて、錦の袋に姫君を入れて、我御頸にかけて、高野山へ馳せのぼりて、事の子細申し入れ給ひければ、幼なくおはせども、女人なれば、惣門の中へは入れ給ふまじとて、(三)五鈷ばかりを持ちて、

(一)覺超。天台宗比叡山の僧。横川源信の高足。性隱遁を欲ひ、名利を好まず。長元年中寂す。
(二)行法。行ひすますこと。
(三)五鈷。金剛杵の一種。兩端が五叉あるもの。金剛杵は前出。

（一）長者。東寺の上首をいふ。一二三四の長者ありて勅任なりき。一長者（一の阿闍梨ともいふ）は寺務法務を兼ね、これを正法務とし、二三四長者を權法務とす。

にしか〳〵と申しければ、「その丸が申す僻事はなし。子細知りてこそ申せ。東寺の一の（一）長者の上に居る僧なし。御室は上郎はさる御事なれども、遁世門の御ふるまひにて、御室に引き籠りて、昔より御室と申す。然れども世にしたがふ事なれば、制せよ」と下知せられける。故法性寺の禪定殿下、御物語ありける折節にて申されけるは、「實賢なんどが車に乘りて出仕つかまつるも、大方あるまじき事なり。されども、近代は昔の儀を振舞へば、狂せるやうに侍れば、世に隨ひてふるまひ候へ。醍醐の尊師僧正になりたまひて、悅び申し給ひけるには、雨のふりたりけり日、簑笠きて參內して、簑笠をば紫宸殿の高欄にかけられたりけり。伴には般若寺の觀賢僧正一人、履物もちておはしけり。御門も敬まひ給ひて、觀賢は法器の者なり。不便にし給へと仰せられける、古き日記なり。かくこそ上代は名聞の心なくして、德を以て公家につかはれしに、今は萬すたれたる」よし、僧正申されければ、禪定殿下も、感じ仰せられけり。上代の僧の官途は、上より賞し給ふを名聞にあらず、只法をあがむるしるしなり。近代は望みて官をもとめ、貪りて錄を思ふ。釋門の風すたれ、道人の儀かたける故なり。

ふべし。

「南都の故一乗院へ、故光明院の僧正參ぜられたりける時、御物語に、「人まずしきは心と貧しき也」と仰せらる。光明院申されけるは、「誰か貧しからんと思ひ候べき。人ごとに富み榮えんとこそ思へども、貧しきは常の習なり」と申さる。一乗院の仰せられけるは、「まことに貧しからんとは思はねども心の企て愚かにして過分の振舞するこそ、心と貧しきにて侍れ。我が分齊をしりて、其の果報のほど振舞はゞ、事かくべかず。十人かへりみるほどの人も、二三十人をかへり見、出仕のともにも二三人具すべき人も、五人十人具し過分に出で立つ。衣食什物をも、果報にすぎて用ひんとすれば、不足なり」と仰せられければ、「さては覺遍なんどが公請つとめんは、とざまなる疲駄に乘りて、檜笠なんどきて、出仕もすべくや」と申されければ、やがて「左だにもおはせば、よも御不足あらじ」とのたまひけり。

故金剛主院の僧正、公請つとめられける時、僧正の牛飼、御室の御車と、車立論じて、御室の御車を散々としたりけるを、房官侍、牛飼を制しかねて、僧正

はれけり。三寶の冥助、諸天の守護の故にや。次第に寺となりて、如法に勤行年つみて、臨終目出度くして終られにけりと聞こゆ。末代には有難きことなり。眞實に佛道に身を入れて、如説に修行せん人、衣食の二事かくべからず。

比良の山の眞如房と聞こえし上人も、止觀修行のため、少日彼の時料用意して、比良の山へ入りて修行せられけるにも、山人見あひて供養しけるときこえ、年久く行はれけり。山野の獸、江海の鱗、十惡の業によりて、つたなき報いなるすら、衣食住處、自づからそなへたり。毛を被、鱗をきたり。穴にすみ、水におよぐ。分々の身をたすくる果報あり。況はんや、五戒十善の因緣よりて、人關に生たり。衣食住處、自からあるべし。業報を辨へ、天運に任せて、夢の世を渡り、假の身を助けて、憂歎せずば、身も心もやすかるべし。愚にして過分の振舞、おほけなき果報を望み、名聞利養の心を恣にするほどに、不足にのみ覺ぼえなさるべし。欲に頂なしとて、欲心はそのきはまる事をしらず。頂生王は(一)南州の王なり。不足に思ひて(二)四洲を打ち取り。なほ不足に思ひて(三)四天王をうちぬ。(四)忉利天を打ち取らんとして、果報盡きて墮ちて死にけり。されば身の分を知りて振舞

(一)南州。南閻浮洲。前出の南浮をみよ。
(二)四洲。須彌山の四方にある國。南閻浮州、東勝神州、西牛貨洲、北倶盧洲。
(三)四天王。四王天の主。持國天王、増長天王、廣目天王、多聞天王。
(四)忉利天。前出。

人の世にある、後れ先だつ歎き、高き賤き、常の習なれども、必ずしも發心することを希なり。只あるまじき事のやうにのみ思ひあへるに、賢こかりける心ざまなり。生死の長夜には、會離の悲み絶えぬ習ひとなりながら、愛をすて、道に入る人のなきこそ愚かなれ。歎きあらん人、此の跡を忍びて、永く衆苦充滿の世界をすてゝ、はやく快樂不退の淨刹を願ふべきもの也。

六、證月房上人の遁世の事

松尾の證月房の上人は、三井の流を受けて、三密の行たけく、道心ある人と聞へて、遁世の初の事を人の語りしは、人間にながらへてもよしなし。(一)如說修行して臨終せんと思ひ立ちて、たゞ一人松尾の奧に、人にも識られずして、七日が(二)時料を用意して、かりに庵を結びて修行せられけり。七日の食盡きて芋の莖の干たるを水に入れて、やはらかになして、煮て食ひて、今日の命をのべしと思はれける程に、薪取る山人見あひて、其日の食は供養してけり。又芋の莖をば干しておきて、次の日水に入れて食にあてがへば、また山人見つけて供養しけり。其後、連々人見あひて、時料送りければ、遂に芋の莖もちゐずして、食物あひついで行

(一)如說修行。說の如く修行すること。
(二)時料。食糧のこと。前出。

縁こそゆかしけれ。誰も申さじ。某にも仰せられよ。是れは都に住みはんべりしが、歎く事ありて、住みなれし都も、止らずあくがれ出で、「この御山へ上りて」といふ。「これも都の者にて侍るが、思の外の縁に値うて、出家して侍なり」といふ。「然るべき因縁にこそ參りあひて侍らめ。委しく仰せられよ。誰も申さじ」といへば、いとつゝましげにはありながら、强ひて問ひければ、かくすべきにも非ずと思ひて、「相ひ語らひて侍りし者にすゝめられて、思の外の事をなんして侍りし」と、有儘に語りければ、何時ごろにて侍りし、また女人の小袖の色、年のほど、こま〴〵と問ひけるを、有儘に申しければ、此の入道手をはたと打ち、「さては御邊は、某が善知識にてこそおはすれ。彼女は志深く侍りしものなり。某にをくれて、やがて出家して侍るなり。かゝる縁なくば、爭か佛道修行の形となり、道に思ひ入るべき。然るべき善知識にこそ、御邊の外の同行あるべからず、ともに彼の菩提を訪ひ助けん」とて、互に涙を流しけり。さて共に勤め行ひて、一の人は既に臨終正念にて終はりにけり。今一人は當時も侍るとかや。世にあらば妬たむべきに、かく共に菩提に思ひ入れて、同行になりにける。いとありがたくこそ。

五、惡緣に値うて發心する事

洛陽に貧しくして世を渡る者あり。妻夫に云ひけるは、「かく貧しく心くるしき世間、堪へ忍ぶべしとも覺えず。人のせぬ事にもあらず、强盜引剝をもして、我を養へ給へかし」といふ。「人の貧しきは常の事なり。如何さやうの業をばすべき」といふに、妻恨みくねり、打ち泣なんどして、さらば暇をたべ。何なる人をも憑んで過ぎん」といふ。さすがに志も淺からざりけるにや、內野の方へ行きて、覗ひけるほどに、日のくれがたに、女人の、女童一人具してとをりけるを、人も見えざりければ、走りよりて打ち殺して、二人が著物はぎて歸りぬ。血つきたる小袖どもを取り集みて、「是こそしか〳〵の事してまうけたれ」と、妻にとらせければ、さこそ云しかども、かはゆき事かなんとも云ふべきに、笑ひまうけて、よに嬉しげなる顏氣色、餘りに恐しくうとましく覺えければ、日來の情も心忘れて、やがてさし出でて、或る僧房にて出家して高野へのぼりぬ。さて一すぢに彼の後世菩提を訪らひよしなく殺してし罪の深かさやさしくも悲しくも覺えて、念佛の功つみけり。或時、月夜に、ある入道かたらひよりて物語りしければ、「御發心の因

(一)衣鉢。三衣のことは前出。また佛道の本意を衣鉢ともいふ。

(二)因緣假有。因と緣とが相寄りて假りに萬有が存在すること。因緣はなれなば無に歸する萬有をいふ。

ん。人是れをしらず、眞實に道心あらん人は、德を隱し光をつゝみて、道行をこまやかにすべし。佛の(一)衣鉢を以て身を助けて、佛の制戒にそむかば、在家の十惡にも勝れたりと『佛藏經』には說けり。在家の惡人は、人の師とならず。自ら惡道に落つるばかりなり。出家の邪見非法なるは、多くの人をあしく敎へ學ばしむ。三千界の衆生の眼をくじるになると云へり。邪名說法といへるは、世間の人は布施とらんためとばかり思へり。それは云ふにも足らず。經には有所得の說法を邪命といふ。有所得といふは、諸法實相をしらずして、諸法の(二)因緣假有の法を實と思ひて、有相の法をのみ說くを邪命といふ。かゝる經を見るには、此の過のがれたる人は、稀なるべし。諸法實相をしらざる人は、施主の一盃の水をも消すべからず。大地をもぬすみ、虛空をもぬすむになると云へり。また諸法の空無相をしらずして、實に諸法有と說くは佛とあらそう。佛は一切空なりと說き給ふに、有と說く故に諍ひなり。佛とあらそうものは、心ず惡道邪路に入るべしと說けり。よく〳〵用意すべし。佛道にいらぬ人は云ふに足らず。道人とぼしき中にも、この意をわきまへぬ人あるをや。然らば實の道人にあらじかし。

の賊なり。戒を持つに似て内に放逸なる故は、信施消しかたし。戒を破りて外をかざるをば、五千の大鬼賊々といひて、その足の跡をはらふと説けり。恐るべし〳〵。(一)行德なくして空しく施を受しるは、(二)無間の業となる。心あらん人よく察すべく。南山は刀なき賊と釋し給へり。『律』の中に戒を持つに、四の品をわかつ。これを四分齋といふ。名利のために受け持つは、賊分齋といひて、賊の分なり。賊といふは、人の財をうしなふ。戒行等の德なければ、施主の福を得ることなし。彼の財をいたづらに失ふ故なり。罪分齋は、當來の惡趣を恐れて持つ。福分齋は、人天の果報を願ひ、道分齋は涅槃を期するなり。されば内はきたなく、外は清きは賊にあたるべきにや。二には內は淨く外は染なるは、德を隱して信施をうけず。內に道德ある、是れすぐれたる菩薩の內行なり。三には內外ともに淨きは、是れは教の本意なり。四には內外共に染なる、是れは一向放逸なる罪人なり。行人にあらず、末代(三)濁世は時の運、人每に戒定慧の德すたれて、懈怠放逸なれば、在家出家ともに佛の戒を守ること希なり。かゝる中にも、また宿善不同にして、定慧の德うちにある人もあり、また權者の光を和げ塵に同ずるもあるら

(一)行德。修行の功德。
(二)無間。無間地獄。
(三)濁世。五濁惡世。五濁は前出。

づの振舞の善惡は、心の向けやうに分れたり。強盜なんどして、往生の業になすべしとは覺えねども、此の趣にては、實に善行たるべし。されば善惡たがひに助けて、惡も善の緣となり、善も惡の緣となる事あるべきなり。經には或は煩惱の解脫のために因緣となれるあり。實體を觀ずる故に。或は解脫の煩惱のために因緣となるあり。執着を生ずるゆゑ」と說けり。まことに善惡源同じく、迷悟體一つなる故に、煩惱性のむなしき處を觀じて、執着をのぞけば、無相の定慧、煩惱の處より起る。このゆゑに煩惱の大海に入らずば、菩提の玉をうべからずと云へり。菩提の無相の體をさとらずして、執心をかたくすれば、生死妄業、菩提のところより始まる。無始の無明、(一)圓覺の心より建立すとも云ひ、知見に知を立つる、すなはち無明の本とも云へり。能く〳〵この心をわきまへて、佛道に相應する修行をならふべし。遁世の風情まち〳〵に、出家の行儀いろ〳〵なり。身は家に在りて、心家をいで、形は塵にまじはりて、志道をしたふ。是れ實の道人なるべし。この強盜法師が意樂、まめやかの遁世の心なるべし。古德、菩薩戒を釋するについて、行人に四句を作れり。一には外は淨く內は染なる、これは佛法の中

(一)圓覺。まどかなるさとり。

づけ、いましめらる。かの檢非違使が夢に、金色の阿彌陀の像をしばりて柱にゆひ付けたりと見る。驚きあやしく思ひて、先づ此の法師をとき許して、「御房の强盜する心はいかに」と云ふに、「御不審にも及び候。つたなく不當にして、物のほしさにこそ仕候へ」といへば、「たゞ直にいはれよ。思ふやうありて問ふ也」といへども、たゞ同體にぞ度々こたへけり。檢非違使申しけるは、「只ありのまゝに云はれよ、實は、かゝる夢を見て侍る也。御房をしばりたるが、佛とのみ夢に見ゆるぞ」といふ時、この法師はら〳〵と打ち泣きて、「本は南都の惡僧にて侍りしが、近比後世の事おそろしく覺え候ひて、武勇の道になれたる故に、同くは此道を以て、善根の因にせばやと思ひ侍る、其の故は京都の强盜いたづらに人を殺し、若干のものをかすみ候事、不便に覺えて、人の命をも助け、物をも少しかくさせて、このほかは、一向念佛を申さんと思ひ立ちて、かゝるわざをなし仕るなり。此の事心ばかりに思ひよりて、人にとふ事なく候ひつるが、さては佛の御意にかなひてばし候にや」と申す。檢非違使涙をながして、隨喜し、上に申して許してけり。其後の事は、なにとも聞へねども、定めて往生の志とげぬらんとぞ覺ゆる。よろ

中比南都に惡僧ありけり。武勇の道をのみ好みて、一文不通なりけるが、然るべき宿善や催しけん、年たけて後、つく〴〵と思ひけるは、人の身に死といふ事あり。遁れがたき道なり。惡業あれば惡道に入り、善業あれば善所に生る。その苦樂の報さだまりある事なり。我が一期の行業を思ふに、惡事をのみ好みては殖ゑたる善根なし。齡すでにたけて、冥途の旅ちかづきぬ。何事をたのみてか、黃泉の道の糧とせん。始めて習ひまなぶとも、佛法の理もさとりがたし。如何なるはかりごとを廻らしてか、人身の思出で、淨土の業因とせんと。人しれず思ひつゞけては、我れ强盜に交りて、人を助くる謀をし、ひそかに念佛を申して、往生の素懷をとげんと思ひしたゝめて、京都へ上り强盜に交らんと云ふに、さる名人なれば、左右なしとて伴ひぬ。さて人のもとへ入る時は、さきに打ち入りて、「しばし〳〵」とて、或は人をにがし、物をかくさせ、表べはゝしたなく見えて、ひそかに人を助けけり。かくして物わくる時は、「入ることあらば申すべし、當時は用なし」とて、物もとらず。友もはぢ思ひけり。さて、ひそかに念佛の功、他念なかりけり。かくて年日ふるほどに、或時からめとられて、檢非違使の許にあ

り」とて、をしかへし、使者を以て、此よしを申さる。また返事に、この仰せ畏(かしこま)りて承り候ひぬ。遁世の身なれば、親の孝養せじと申すには侍らず。各の御中へ參ずる事を、はゞかり申すなり。其の故は遁世と申すことは、何樣に御心得とも候やらん。身に存じ候は、世をもすて、世にもすてられて、人員(かず)ならぬこそ、其すがたにて候へ、世にすてられて、世を捨てぬは、たゞ非人なり。世を捨つとも、世に捨てられずは、遁(のが)れたる身にあらず。然るに各〻は南北二京の高僧名人にてまします御中に參じて、一座の講行をもつとめ候ひなば、若し公家(くげ)より召されん時は、いかゞ申候べき。かゝる山の中に籠居(ろうきよ)して候本意、たがひ候なんず。孝養をせじと申すにては候はねば、代官をまゐらせ候へん」とて、惠智房を以て勸められけり。兄の僧正達、この返事を聞きて、「小禪師にてありし時も、人をつめしが、當時もつむるや」とぞ申しあはしける故少納言入道、兄たちのこと、敎訓(けうくん)のときは、此の僧都の小禪師の時つかひとして、せめ伏せられける事を、思ひ出て申されけるなるべし。

四、强盜法師の道心ある事

ちに(一)十善萬乘の位を捨て、永く(二)一乘菩提の道にぞ入らせ給ひける。既に內裏を出でさせ給へける夜は。寛和二年六月二十三日、有明の月、隈なかりけるに、さすがに御名殘も殘りけるにや。むらくもの月にかゝりければ、我が願既に滿りとてぞ、貞觀殿の高妻戶より下りさせ給ひける。それより彼の妻戶をば打ちつけられけるとぞ。有りがたき御發心にこそ。はるかに承るも哀に侍べり。覺鑁上人の詞にも(三)三界は安きことなし、なほ火宅の如し。王宮もなを火宅の中なり。常に生老病死、憂患あり。玉體もまた無常の形なりとこそ申されけれ。誠に心賢からん人、虛妄轉變の世間をすてゝ、實相常住の佛道に入るべきをや。故小納言入道信西の十三年の佛事、その子孫、名僧上綱達、より合ひて、一門八講と名けて、ゆゝしき佛事醍醐にて行はるゝことありけり。(四)開白は聖覺法印、(五)結願は明遍僧都と定めて、覺憲僧正、澄憲法印、證憲僧正、靜憲法印等、使者を高野へつかはして、此よし申さるゝには、遁世の身にて侍れば、えまゐらじと、明遍僧都返事せられたりけるを、兄の僧正達、大に心得ぬことに思ひて、「されば遁世の身には親の孝養せぬ事か。さばかりの智者學匠と云ふ御房の返事、返へす〲思はすな

(一)十善。前出の十善君をみよ。
(二)一乘。一佛乘。唯一の佛の敎。
(三)三界。前出。
(四)開白。佛事を始めるにつき、先づ佛前に讀み上げる表白文。
(五)結願。前出。

「九州の長になさるべ宣旨を聞きて、耳よごれて覺えつれば、潁川に行きてすゝぎて歸る也」といふ。「さてはその水はよごれぬるにこそ、牛にかはじ」とて、牛を牽いて歸りぬ。許由耳をあらひ、巣父牛を牽くと申し傳へたるは、此事なり。末代はかゝる耳をば忝なく思ひて、綿にてもつゝみ、錦にてもまとひ、他所の人もおがみ尊びぞせまし。然るに、當世の人の中に、遁世門に入る事ありがたくこそ覺ゆれ。實の道に入りて世間のあだなる理を知らば、何事に心を止め、何なる縁にか障へらるべき。昔の大王は位をすてゝ、一乘の御法を習ひ、菜をつみ水をくみ薪をとり、千歳の給仕をだにも仕給ひけるぞかし。僅なる世間に心を留めて、道に入るの人なき習ひこそ愚なれ。我朝には花山院こそ實に御遁世ありけれ。小野の宮殿の御女、弘徽殿の女御に、後れさせ給ひて、御歎きあさからず。世の中御心細く思食し亂れたりけるころ、粟田の關白、いまだ殿上人にておはしける時、もち給へる扇に、「妻子珍寶及王位命終に臨むとき隨はざるものなり。唯戒及び施と不放逸とは、今世後世、伴侶となる」と書き給へけるを御覽じて、御心を發し、世の樂は夢幻の程なり。國の位もよしなしと思食し取りて、たちま

たゞ身大きに富貴なる人なり。然るに遁世の門に入りて、夏冬の膚をかくす衣、朝たの飢をたすくる糧、天運にまかせて、心やすく身自在にして、一生を送らんと思へる。まめやかに賢こき心なるべし。鹿をとりて檻にこめ、つなぎて居所をみじくし、食物をあまふして養へども、其身かならず痩すといへり。鹿は山をのみ思ひて心をとゞめず。若したゞ心をやすくして、山に臥す時は、草と水とばかり食へ共、身は肥たり。是は心やすければ肥、心苦しきは痩するにこそ、されば心のやすく、思ふ事なきほどの樂しみなし。此故に貧しき子の孝養の志ありけるが、母はその身肥え、富める子の不孝なるが 母はその身痩せたりといへり。ただ此世に心やすきのみにあらず。罪障なく妄念なくして、佛道を修行せば、當來もたのみあり。樂天いはく、「富貴しても苦あり、苦は心の危憂にあり。貧賤にしても樂あり、樂は身の自由にあり」といへり。まことに其ことはり疑なし。されば萬事をわすれ、萬の煩ひなき身とならん計りの樂みあらじ。賢なりし許由、帝王より九州の長になるべき宣旨を蒙りて、穎川にゆきて耳を洗ひけり。巣父牛を引きて穎川へゆきて水かはんとす。許由が歸るに行きあひぬ。許由がいはく、

も、心安くは樂みなるべし。されば經には、「知足の人は地の上に臥せども安樂なり。不知足のものは、天堂は處すれども心にかなはず。小欲人は貧と云へども富めり。多欲の人は富と云へども貧し」と云へり。實に財多けれども、不足に思はゞ貧しき人なり。僅に身をたすくる。衣食の事あるを不足なく思ひて、望む心なくば、これ富るなるべし。古人いはく、「財多ければ身を害し、名たかければ神を害す」といへり。國をしり、財多くとも、妻子眷屬をかへりみ、公私の大事を營む時は、國もせばく。財もたらず、不足の心は貧き人にもすぐれたり。貧き者は求むるところ少なきゆゑに、彼の富める者よりも事すくなし。龍の頭おほければ毒もおほきが如しといへり。大なる人と云はるゝ名聞を、いみじき事と思ひなしたるばかりなり。身大なれば事多し。家にありて人多く、さはがしく、道を行くには道づれ多くして、塵灰を蹴かけらるゝばかりなり。夢の中の名聞よしなくこそ。さるに付けては、身命も持ちがたく、人を惱まし、物を費し、心ならず罪業の積もれば、當來の苦果のがれがたし。身もいとまなく、心もひまなければ、佛法修行の志も退しやすく、淨土菩提の淨業もなしがたし。今生後生樂なきは、

り。嫡子申しけるは、「故殿の讓りの上は、子細申すべきにあらねども、所存の旨いかてか申さるべき。故殿は果報もさる事にて、計ひも賢くおはせしかば、京鎌倉の宮仕公役なども「かひ〳〵しく沙汰せられき。この所領を、かくあまたに分ちて、面々に安堵申し、宮仕はれんこと、ゆゝしき大事なり。身くるしく、人目見苦し。されば一人を面にして、家をつがせて、餘人は便宜の所に庵室を作りて入道になりて、念佛申して、一期身やすく後世もたのしくして、過したく侍べり。我身嫡子にあたりて侍べれども、器量もなく、身ながら覺ゆれば、此中に一人えりて家をつがせ申したく侍れば、各評定して計ひ給ふべし」といふに、然るべしといふ弟なし。「各もちゐ給はずば力なし。いかさまにも某は入道になり候べし。この中には五郎殿ぞ器量の人にておはする。されば家をつぎ給へ。各々は一向その影にて、田作りて引き入れて候はん」と、まめやかに打ち口說きいへば、餘人も其義になりて、みな遁世門にてありと聞こゆ。かしこき心なるべし。世間の人の樂と思へること、能く〳〵思ひとげば、顚倒の心にて、苦を樂と思ふなり。樂といふは先づ心を以て本とす。たとひ身貴くとも、心苦くはよしなし。身貧しくと

又ほむる下に必ず毀りあるべしと思ふべし。いよ〳〵身をつゝしむべし。かゝる心ならば、ほむとも、そしるとも、心動かずして、佛道に入る志を堅くすべし。八風に動せぬ、道實にまなぶべし。播州書寫の(一)性空聖人のいはく、「閑亭隱士あり。貧くしてまた賤し。富貴を羨まず、之を以て樂となす。四壁疎なりと雖も、八風侵し難し。一瓢底空しけれども、三昧自らこまやかなり。我れ人を知らざれば恨みもなく、喜びもなし、人我れを知らざれば譽もなく毀もなし。肘をまげて枕となし、樂み其中にあり。何によりて更に浮雲の榮耀を求めん。八風といふは、利、衰、毀、譽、稱、譏、苦、樂なり。人是れによりて心を動かす、風にたとふ。三味とは『涅槃經』には、老て三の味なし。出家、讀誦、坐禪なり」と。

三、俗士の遁世門の事

丹後の國に某とかや云ふ俗ありけり。名も承りしが、忘れ侍べり。小名ながら家中まづしからずして、年たけて失せにける。遺言に、所分の狀は中陰すぎて開くべきよし云ひ置きてけり。子息、其義にて開き見るに、男女の子あまたありけるに、嫡子には宗とゆずりて、次男より次第に少しづゝ減してむらなく讓りてけ

(一)性空。天台宗の僧。初め比叡山に登り、慈慧に學びしが、後、書寫山に圓教寺を剏す。寛弘四年八十四にて寂す。

する惡縁きたるとも、先業の感ずるところ、我が罪業をむくふ事と思ひ、人のあたふる事と思はずして、懺悔の心をもすゝめ、此によりて衆苦充滿の世界を厭ひ、怨憎會苦の遁れがたき國と知りて、韋提希の如く淨土を願はゞ、仇を結ばん人、知識となるべし。心にかなはぬとも、わづらひある處、みな娑婆の執心をうすくする縁なり。流轉生死の苦は、執心著想により、出離解脱の道は空無相の智にあり。無相のすがた執心なき心なり。されば佛の一代の敎文、第一義空を宗とす。『金剛經』には、「法なほ捨つべし、何に況んや非法をや」。佛法になほ執心をなすべからず。まして世間の事に心を止めんや。かゝる道理を思ひときて、惡縁にあだを結ばず、欲境に愛を深くせずば、解脱の道ちかゝるべし。人にそしられては思ふべし、實に過あらば、人のそしること道理なり。我れも人の上を云ふことなり。他に恥ぢて過をとゞむべし。此れ善知識なり。故に書に云はく、「我が惡をいふ者は我師なり。我が好をいふ者は我が賊なり」と云へり。此の故に、恨みそねむ事なくして、吾が知識と思ふて、過をあらたむべし。我をほむとも憍慢すべからず。僅の徳をほむるによりて、慢をおこすは魔の眷屬となる。大なる失なり。

やあるべき。『心地觀經』の心は、世の人子のために罪を作りて惡趣に入り、久しく苦を受くと說けり。此れは愛子のために、心をくだき罪を作る故なり。然れば、よき子はあしく、惡しき子はよき事もあり。また一向にかゝるべきにも非ず。惡子に遇ふて恨みあだを結び罪を作り、また惡人の子罪を作れば、亡せる親苦を受くる如きは惡子即ちあだなり。また孝順の心ありて淨藏、淨眼の如く、知識となりて導く子は、よき子すなはち善緣なり。一切の事みな四句の不同ありて、得失あひまじはる。心をかけて失を去り、得に付いて佛道に入るたよりとすべし。物に得失あり、人に賢愚ある事を辨へ知るべし。たとへば醫師の藥を用ふるに、下醫は藥を毒となし、中醫は毒を毒につかひ、藥を藥に用ふ。上醫は毒を藥に用ふ。此を以て知るべし。邪見にひがみたらん人は、よき子に値ひて知識とせずして、返りて惡を作る因緣とせん。出家修行する子を、惡み障ふるが如し。下醫の藥を毒とするに似たり。中品の人は惡子をば惡緣とし、善子をば善知識とすべし。中醫の如し。上品の賢士は、惡子を知識とすること、頻婆沙羅、韋提希の如くなるべし。上醫の毒を藥とするが如し。されば子のみならず、我にあだを結び我を損害

そ、人間に生れたる思ひ出もなけれと。よしなく思ひ取りて、執行を弟にゆづり、或る山里に遁世して、西大寺の思圓上人を請じて戒をうけ、洛陽より禪師なる僧請じて、宗風なんどうかゞひ、修行をこたらずして、臨終目出たくして巳に終りにけりと聞こゆ。さて弟の執行、わづかの一期のたのしみなる、執行をだにうらやみて、打ち取らんとしき。物をうらやまんにとりては、世をのがれ、實の道に入りて、臨終目出たきほどに、美しき事あるべからずとて、兄の執行が子息に、執行をば讓りて、また遁世してけり。ありがたき宿善にこそ。當執行も遁世の志ありと聞こゆ。先世の契り、たがひの知識となるべき人にやと、尊くこそ覺え侍れ。

善惡の緣ともに思ひとけば、佛道に入るたよりなるべし。(一)阿闍世王は、(二)調達と云ふ惡友に値ひて、父母を幽閉し、父母は惡子に値ひて、閉ぢ込められしかば、これほどの惡緣は、いかでかあるべきに、事の心をよく〳〵思ひとけば、調達、闍王は、(三)頻婆沙羅王、(四)韋提希のためには善知識なり。王は閉ぢこめられて、日々に(五)齋戒を受け、遂に(六)第三果を得。夫人は淨土の敎門を佛に受けて、極樂に生まれ、末代までの利益ひろし。されば父母を佛道に入れたるほどの善巧方便

(一)阿闍世王。前出の闍王をみよ。
(二)調達。前出の提婆をみよ。
(三)頻婆娑羅王。釋尊當時の中印度摩伽陀國の主。あつく釋尊を崇信せしも、太子のために弑せらる。
(五)韋提希。前出。
(五)齋戒。八戒のこと。前出。
(六)第三果。前出四果を見よ。

て、往生せんずらん。また今生こそ、かく愚なれ、未來には淨土にもまゐり、佛となるべしなど、よしなく心をやるもの世に多し。貧しき物の思ひに、今年こそかく貧しけれ、明年にはさりともと思ふ。なにをまつともなし。猶々わびしくのみなり行くが如く、平生よりも臨終はわろく、今生よりも後生は猶々おとりぬべし。能く〳〵佛法に薫習すべし。空を仰ぐ事あるべからず。淨土房の志の如く、一念もこの身を惜まず、此世に心をとゞめずば、往生の素懷をとげん事かたからじ。愚かなる人の心を勸めんとて、書き置き侍り。賢き人の爲には侍らず。

二、吉野の執行遁世の事

吉野の執行に、一門の中に威勢あれば、打ち取りてする習ひにて、當執行の父、執行なりける時、兄弟の執行をうち落して、執行せんとしけり。兄の執行用心ひまなし。かゝるほどに然るべき宿善やありけん。執行思ひけるは、一期の榮華は久しからず。當來の快樂をこそ願ふべきに、此の執行故に、兄弟中あしく、用心ひまなきまゝに、後世菩提の沙汰にもをよばず、かくて無常の殺鬼にとられん時は空しく捨てゝこそ行くべき道に、その用意無くして、合戰の事のみ支度するこ

て徃せり。彼れをひきかけてたのむは、信あるに似たれども、愚なる方もあるべし。彼れは先達の釋にも、宿善の人なり、一生惡緣に値ひて、罪人なれども、最後に十念唱へて、念々に八十億劫の生死の罪滅して、其後また罪なくして來迎にあづかる。三心具足し、八十億劫の罪きえぬれば生まると、古德の釋の心見えたり。今の人も、宿善もあり、心も決定せば、生まるべし。但し既に敎にあひ知識にあひながら、平生の志うすし、臨終に若し苦患にも攻められ、正念みだれば、三心もいかゞとこそ覺え侍れ。下品下生の人は、始めて遇ひ勇猛なれば、罪障も滅し、日輪の迎ひにもあづかる。今の人は遇ひながら、既に志うすからんは、習ひさきより疎なり。臨終に始めて實あらん事まれなり。全くさる人なかるべしとにはあらず、人の病重く、正念みだれ、臨終になりては、日來より〳〵仕なれ思ひなれ、心にそみたる事必ずあらはる。近年疫病に人多く病み死する事聞くに、平生になれたる事を、口にも云ひ、身にも振舞ふといへり。されば能く〳〵思ひ入れて、三心相應の專念功積みて、徃生の大事をとぐべき者なり。世間の愚俗の善惡因果の、道理もしらず、思ひなれたる事あり。平生こそかくあれ、臨終には念佛申し

ゝは、先づ心佛となる。憍慢即ち魔なり。菩提心即ち佛なり。『大般若』の意にいはく。般若を念ずる者は、軍に入るに刀杖身を犯さず。そのゆゑは般若は無相平等の智より、同躰無縁の慈悲を起すゆゑに。まづ我身に貪瞋愚癡等の兵杖なし。また是の故に敵自から、慈悲をおこし、こはき物は己れと損じ、落ちうするよしを説かれたり、老子の大道、猶その德あり。般若の妙躰、いかでかその德なからん。書にいはく。磁石、鐵を吸へども、曲れる針をすはず。琥珀塵をとれども、穢たる塵をとらず。薪をやく火木の中の火起てのち、外の火は付くなり。生きには遲く火もゆ。心より萬事起りて、外の緣來たる。然れば穢土をいとひ、淨土をねがう心實ある時、佛の來迎もたのみあり。世間の名利、夢中の事を心に思ひそみ、身の苦しき事も覺えず、淨土菩提の功德は倦く手に念珠を持ちながら、心はよも山の事のみ思ひ、身は道場に入り、佛に向へども、心にはよしなき事のみ思ふ。妻子にむかひ、朋友にともなひ、遊びたはふるゝは、時刻の過ぐるも知られず。かゝる心ざま振舞にて、一定往生と打ちかたむる人は、あぶなく覺え侍り。『觀經』の下品下生は、(一)十惡五逆の罪人なれども、臨終に善知識にあひて、十念となへ

(一)十惡五逆。前出。

（一）三心。前出。
（二）正定業。正しく往生すべきに定まれる業因。

の惡道をねがふになる。持戒修善を好むは、淨土天上の善所をねがふ人なり。是の故に、受けがたき人身なり、遇ひがたき本願なり、餘念をまじへず願ふべきは西方、たのむべきは本願なり。「（一）三心を具すれば必ず往生を得」と說けり。「念々に捨てざるをば、是れを（二）正定の業と名く」と釋せり。また「身命を惜まず西方に往く」と云ひ、「身命を顧みず求め得んと要す」と云云。信心勇猛にして、萬事をさしおくべき者なり。魔界の人をとるも、先づその心うごき、ものぐるはしくなる時たよりを得。佛の人をすくひ給ふも、先づ行者の心に、信心實あるとき感應むなしからず。老子の云はく、「道德ある人は陸を行くに、兕虎も爪をさしおく所なく、陣に入るに甲兵も刃をまじふる處なし」といへり。意は大道を心に修め、妄念なく、身にも過なきものには、身に死地なし。死地なければ殺すべき所なし。眼みだりに見、乃至、心みだりに愛し、手みだりにもち、足みだりにふむ時は、皆すでに生より死地に至る姿なり。されば人の殺す事は、既に死せる所を殺す。すべて心にも過なく、身にもあやまりなく、死地なき時は、毒獸もおかさず、矢刀もたゝずと云へり。此の故に魔にとらるゝは、先づ心魔となり。佛に度せらる

世に念佛を行ずる人は多けれども、往生をとぐる人のすくなきは、實を致す事のなき故」と釋せり。『淨土論』は、天親菩薩の造、淨土宗の本論なり。彼に云はく。淨土に生ぜんと思はゞ、菩提心を發すべし。菩提心と云ふは、衆生を度して佛の國土に生ぜしむるこゝろ也と云へり。されば淨土に生ずるには、菩提心を本とす。自利の心は二乘の心なり。大乘の國土に生ずべからず。此故に曇鸞法師、彼の論を注すとして。かの國の快樂を聞きて、受樂のためにねがひて、衆生を度する心なくば、生ずべからずと云へり。世間の人、五欲の樂み、名利の執ふかくして、穢土を厭ふ心なし。病死憂患種々の苦にあへども、なほ恐るゝ心なく厭ふ思ひなし。世路にたしなみわしれども、身ゆかたに、心のやすき事なし。かゝらんに付けては、菩提心を發し、往生の行をつとむべし。まれに受けたる人身にて、急いで淨土へ生じ、有緣無緣を導かんとこそ思ふべきに、流轉生死の業因は、作せども〳〵あきたらず。淨土菩提の妙業は、敎ふれども〳〵思ひ入れず、生を受くる事は心の愛著するところ、業のひくにまかせて其の報をうく。しかれば當來の生所は、今生の心に好みてなす業因果報にあらはる。三毒五欲の惡業を好むは、三惡四趣

(一)增賀。天台宗の僧。もと比叡山にあり。名聞を厭ひ常に狂態を演じて名利を避く。後大和多武峯にあること四十一年天保五年八十七にて寂す。

て、世間のこと營みをやめて、「影山を出でず、客を送りて虎谿を過ぎず」とて、谷の外へ出でずして、一向往生極樂の行業のほか他事なくて、往生の大事とげたりといへり。是れほどの遁世はかたくとも、志まことあらば、身は家を出でず、形は世にまじはるとも、まめやかの信心ありて、穢土を厭ふ心ふかく、淨土をねがふ思ひ切ならば、往生のたのみ疑ひあるべからず。末代は眞實の道心ある人はすくなく、教門を學びながら、佛の教にそむくのみ多し。世間に朝夕仕慣れたることだにも、心疎略にして不覺も誤もあり。況んや往生の大事、無始よりいまだせず。誰かなをざりに思はん。しかれば中古の先達智者、みな此事を大事と思ひて祈請して、道心をねがひき。(一)增賀上人中堂に千日參詣して、毎夜二千返の禮拜を行ひて、道心申されしが如し。慧心僧都も、往生の事心もとなく覺えて、道占なはんとて、作道四塚の邊にて、少し高き所に立ちて見給へば、雨ふり道あしきに、老翁のすべり〳〵歩みきて、僧都の立ち給へる所にて、「はや極樂へ參りたり」と云ひける。さてこそ往生はさりともと樂もしく思はれけれ。『往生要集』撰して、唐朝まで名をほどこし、目出たき往生人なり。彼の『往生要集』にも、「今の

房はつゝがなし。弟子共あまりの事にて嬉し泣きにぞ泣きける。淨土房思ひ入れたる氣色にて、「あさましき損を取りたるぞや。御房」といへば、「何事の御損かあるべき。御命のをはするこそ悅なれ。御損とは御庵室の事か。御本尊なんどの損じておはする事か」といへば、「其の事にはあらず。幼少のときより、觀音の名號を念ずれば、かくのごとくの災難まぬかるる事と思ひなれたる心にて、南無觀音と一聲となへたりける故と覺ゆる。命たすかりぬる。同じ暇にて南無阿彌陀佛と唱へて往生すべかりつるを、由なく命のびて憂き世にながらへんこと、きめやかに損をとりたる心地す」とて、涙を流しければ、弟子共も哀に覺えて、涙を流しけり。深く思ひ入りて、この世に心を止めず、淨土へ參らんと急ぐ心の實ありけるこそ、羨しく覺ゆれ。遂に終めでたく往生したるよし申し傳へたり。往生淨土の敎行は、(一)五濁相應の法門、(二)劣機直入の要路なれば、三國相傳して、諸宗の先達、諸道の賢者心あるも心なきも、道俗貴賤をいはず、念佛を行ずる人多くこそ聞ゆれ。されども、ましてある人はすくなく、人なみ／＼なるは多し。漢土の廬山に(三)慧遠等の十八賢の白蓮社と云ふ居所を搆へて、誓をたて契をむすび

(一)五濁　前出。
(二)劣機直入。劣れる機類がそのまゝ直に歸入すること。
(三)慧遠。支那念佛の初祖。一百五十人の同志と廬山に入りて念佛す。義熙十二年、八十三にて寂す。

沙石集卷第九

一、淨土房の遁世の事

伊豆の山に淨土房といふ學匠ありけり。時の二和尚なり。一和尚の老僧、重病を受けてかぎりなるよし聞きて、行きてとぶらひければ、一和尚申しけるは、「法師が死せんこと如何に嬉しく覺すらん」といふ。思はずに覺えて、「何ごとにか、左樣の心候べき」といへば、「一和尚になり給はんずればよ」といひける。(一)別當もなくて、一和尚を別當の如く思へる所なる故に、かく云ひけるを聞きて、固より道心ある僧にて、思ひけがされたるも、且は恥かしく覺えて、この老僧が生きけるとき、遁世して見せしと思ひて、弟子に房を讓りて、山のきしに小しき庵室をかまへて、後世菩提の行怠らず。ある時、長雨ふり震動して山くずれて、此の庵室をさながら打ち埋みてけり。弟子共あはてさはぎて、今は云ふかひなし、骸をとりて孝養せんとて、土をほりて見るに、庵室はくだけてあとかたなし。淨土

(一)別當。前出。

て常に用ふれば、當時大切なり。失せぬるも歎きなし。人にとらするも惜からず。旁得は多く、失はすくなし。自から(一)檀度の行もたよりなく、また世間の人の富貴なると、貧賤なるとを、思ひくらぶるに、得失あひならべり。能く〳〵思ひとげは、貧賤は得多かるべし。古人いはく、「富める時は則ち求め多し。貴きときは則ち憂多し。事寡ければ心泰に、情忘るれば累薄し」と云云。またいはく、「清貧は常に樂み、濁富は恒に愁ふ」と云云、またいはく、「財多ければ身を害し名高ければ神を害す」と云云。此事は眞實の大安樂の法門なり。能く〳〵思ひ入れ給ふべし。

(一)檀度。前出。

云はく、「最後の妄念つよくして、先づこの生を感ず。よつて法を説くに、蟲化して、天に生ず」といへり。是れは日來の戒善の因もあり、聖者の説法の縁によりて、天にも生ず。つねの人の善因はよはく、妄念はつよくして妻子等に愛習ふかゝらん、生死をはなれんこと、誠にかたかるべし。是の故に心にかなはん妻子、實には怨なるべし。花のかたちにつくれる箭を以て、射らるゝに喩ふ。見るところは、やさしけれども、命を失ふ。恩愛のなつかしき境界、智慧の命を失ふこと、是れに似たり。かゝれば、なか〳〵に心にかなはぬ妻子は、善知識なるべし。是れも只そねみあだまば、惡知識ならん。(一)韋提希の如く、(二)闍王の惡子にあひて、穢土をいとひ淨土を願ひし如くならば、惡子は眞實の善知識ならん。賢を見て等しからんと思ふべし。また會ふ時志ふかきは別るゝ時なげき切なり。會ふとき志うすきは、別るゝとき歎あさし。得失のあひならふ事、心得やすかるべし。牛馬財寶も是れになぞらへて同じかるべし。重き寶、珍しき玩物も、よきは求むるも苦しく、守も煩はし。失せぬるも歎かし。常にも用ひずして、用にもたゝず。若しは人の借るもいたはしく覺へ、心にかゝる事あり。わろき物はおしからずし

(一)韋提希。釋尊在世の頃、中印度摩伽陀國の頻婆娑羅王の后たりし女。我が子阿闍世太子のために逆待せられしため、世を厭ひて佛に歸す。『觀無量壽經』は實にこの女人の爲めの說法なり。

(二)闍王。阿闍世王の略。父頻婆娑羅王を弑して王位に即かんとして、父母を牢獄に禁ぜしが、後大いに慚愧して佛に歸し佛教のためにつくす所多かりき。

たとひ此の心得ずとも、まづ萬事得失ならべる道理を知りて、德ある事にも失をかんがへて、愛習をうすくし、失あらん事にも德をかんがへて、憂悲を輕くすべし。是れ一重の方便なり。一事を以て萬事をなずらへ知るべし。妻子眷屬の心にかなひ、なつかしく、心やすからんは、まことに德なるべし。然れども是れを育くみ養はんとする、急ぎ心のひまなく、身のいとまなし。身心ともに是れがために使はる。恩愛の奴となる故なり。さてあがむべき三寶勝妙の(一)敬田をも供せず、報ずべき父母師長の恩田をも重くせず。哀れむべき貧病の悲田をも助けず。善友を求むる志もうすく、知識につかふる暇もなし。今生のわずらひは、猶かろかるべし、當來のくるしみ何ばかりならん。臨終の妄念も、專ら恩愛の故なり。情ふかく契あつけれども、(二)中有に伴なふ習ひなく、苦患に代はるためしなし。昔し五戒の優婆塞ありけり。あひ思へる妻に愛習のこりける故に、死して後、妻が鼻の中の蟲にむまる。妻、鼻をかみて蟲のあるをみて、ふみ殺さんとす。時に聖者ありて是れを見て、「汝が夫なり。ゆめ〳〵殺すべからず」と云ふ。妻が云いはく、「我夫は持戒修善の者なり。天に生ずべし。なんぞ蟲とならん」と云ふ。聖者の

(一)敬田。前出の福田に同じ。

(二)中有。前出。

入るは我姉なり。時として離るゝことなし。姉をとゞめば我をも止めよ。我を追はゞ、姉をも追へ」といふ。是れによりて二人ともに追ひ出しつ。又つれてゆく。或人此の事を聞くといへども、姉を愛する故に、妹をも止ゞむ。是れを喩ふるに、生と會とは姉の如し。死と離とは妹に似たり。生死のことはり會離の習、かならずともなり。生者必滅、會者定離、たれか是をうたがはん。是の故に賢聖は生の因をとゞめ、死の苦を離る。會ふ悅びを愛せずして離るゝ憂なし。二人ともに厭ふ人の如し。凡夫は生を悅びて死をかなしみ、會を愛して離るゝを憂ふ。然れば死をば生の時かなしみ、離をば會ふ時うれふべし。會を悅び離を憂ふるは、誠に凡夫の愚かなる心なるべし。流轉生死は愛欲を根本とす。もし愛情なくば生死斷絕せん。先づ世間の愛心をやめて、法愛までもすつる。これ佛法に入る方便なり。たゞ愛習怨心のつたなき思ひをやめて、無念寂靜の妙へなる道に入る。眞實の道人のすがたなり。古人いはく「心は萬境に隨つて轉ず。轉ずるところ實によく幽なり。流に隨つて性を認得すれば喜もなくまた憂もなし」云云。生死去來の所に本來動ぜさる自性を認得しなば、生にあたりて不生なり、事に即して空なり。

を吞みつれば通夜ねられず。一には食にあけるとき服すれば、食消して身かろく心あきらかなり。一には不發になる藥なりと云ふ時、「さては得給はり候はじ。晝は終日に宮仕候ひて、夜こそ足もふみのべて臥し候へ。ねぶられざらん術なく候べし。また僅にたべ候少飯が消し候はゞ、ひだるさをば如何し候べき。又不發になり候ひなば、女童部がそばへも寄せ候ふべくばこそ。すかして衣物ばしもすゝがせ候はめ」と云ふ。是は一つ事の、人によりて得失ある事なり。雨の降る、日のてる事、時によりて得なる事もあり、失なる事もある事しりぬべし。また世間には得と思へること、出世には失なる事多し。世間には失と思へる事、佛法に入りて得なることとあり。都て德失は物毎に相習ふ事なり。『涅槃經』の中に、一の譬喩をとけり。或人の家の門に容貌美麗なる女人きたる。主じ「何なる人ぞ」と問ふ。女人答へていはく、「我をば功德天と云ふ。その故は、いたる所に吉祥福德あり」といふ。主悅びて請じ入る。則ちまた女人きたる。容顏醜陋にして見にくし。「何なる人ぞ」と問ふ。「我をば黑闇天といふ。そのゆへは至る所に不祥災害あり」といふ。主これを聞きて、「すみやかに去れ」といふ。女人のいはく、「さきに家へ

あるらん」とて、よろこぶ事なし。最愛の一子、此馬に乘りて遊ぶほどに、落ちて臂を打ちをる。人是れをとぶらふに、是も悦ぶべき事にやあるらん」とて憂へず。かゝる程に天下に大亂おこりて、武士かられて相戰ふ間、皆ほろび失す。此子かたわによりて、命を全くす。此の理能く〳〵思ひ知るべきをや。老子云はく、「禍は福の伏する所、福は禍の倚るところ」といへる意は、人とがをくやみ謹みて、德をおこなへば禍さりて、福きたる。若し福におごりて禍をおそれざれば、福去りて禍きたる。されば失をば能くつゝしみ、くやしみて善を修し、德をおこなふべし。德をばおごる事なくして、禍のきたらんことを謹むべし。萬事德失ならふ事を知らずして、一德を愛して餘の失をわすれ、一失をきらひて餘の德をわするゝは、人の常の心なり。德のみありて失なく、失のみありて得なき事あるべからず。また萬事において、人により時によりて、得失わかれたり。或る牛飼、僧の茶のむ所にのぞみて云はく、「あれは何なる御藥にて候やらん。己等がたまはる事は、かなふまじく候にや」といふ。「是れは三の德ある藥なり。やすき事なり。」とらせん」といふ。その德と云ふは、一には坐禪のとき眠らるゝが、是れ

ひて、恨をふくみ怨を報う事、返へす〴〵愚なり。經にいはく、「怨を以て怨を報ずるは、怨遂につきず、草を以て火をけすが如し。恩を以て怨を報ずるは、怨つひにつく。水を以て火をけすが如し」と。然れば昔の罪障を懺悔し、今更業因をむすばずして、輪廻の苦患をやむべし。或上人いはく、「一切の境界は我が心によりて善惡あり。我が心迷ふ時は塵々妄緣なり。我心悟る時は法々實相なり。古人いはく、「一翳眼にあれば空花亂墜し、一妄心にあれば恒沙生滅す。我身に此道理思ひ知る事あり。よろづ物の糞の香する事ありき。只事共おぼえずして、魔緣の所爲にやと思ひて、持佛堂に入りて念誦すれば、本尊もくさく念珠もくさし。仕勞れて持佛堂を出で、なにとなく顏をかきなでゝ見れば、鼻のさきに糞の付きて侍りける。さてさは〳〵とかき洗ひて後は、くさゝ失せぬ。一切我が心なる道理、譬はきたなけれども分明なり」と語りき。漢朝に北叟といふ賢人あり。事にふれて憂へ悦ぶ事なし。或る時たゞ一匹もてる馬失せにけり。人是れをとぶらふに、「いざ喜ぶべき事にかあるらん。憂ふべき事にや」と云ふ。兩三日の後、天下にありがたき駿馬を具して來る。人是れを悦ぶといへども、「是れも憂ふべき事にや」

一六、先世房の事

下總の國に、先世房と云ふ者ありけり。下地の者なりけれども、心様尋常なりけり。世をへつらふ事もなく、萬事に付いて、先世のことのみ云ふ。歎き悦ぶ心なかりけり。或時、家に火つきて燃えあがりけれども、先世の事と云ひて、さはがずして居たりけるを、「何にや」とて、人手を取りて引きて出しければ、「是れも先世の事」とて出でず。斯りければ、先世房と云ひけるなるべし。誠に何事も過去の善惡の業因によりて、今世の貧福苦樂あり。愚なる人は、此理を知らずして、人のあたふる事とのみ思ひあへり。(一)三界一心なり。心の外に別法なしと云ひて(二)無住の一心より(三)六凡四聖の十界の(四)依正を、つくり出だせり。惡念化して地獄鬼畜と現じ、善因積りて淨土善提とあらはる。法性の一理は平等なれども、人々の業緣によりて種々の差別あり。一の水を天は瑠璃と見、魚は窟宅と見、餓鬼は膿河と見るが如し。釋迦の淨土を、(五)身子は穢土と見、螺髻は淨土と見る。此のゆゑに境緣に好醜なし。好醜は心より起るといへり。されば萬事を自業の因緣と思はゞ、不祥厄難ありとも、人をとがめ恨むべからず。然るに人の過とのみ思

(一)三界。前出。
(二)無住の一心。かれこれと心に住むる能はざる心の本性。
(三)六凡四聖。十界のうち、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上を六凡といひ、聲聞、緣覺、菩薩、佛を四聖といふ。
(四)依正。前出。
(五)身子。舍利弗尊者のこと。

ず彼人語り侍りき。さて、「一所布施は五十貫ありと、後に聞けり」と云へり。これ我が身の不運のことゝて語りて、笑ひ侍りき。南都にて或人、「某が耳を買ふと申すに、用途一貫文ばかりの雜掌すべきこと侍りしを、「さらば此事いとなみてたべ」、「此耳は賣らふ」とて、うりをはりぬ。其後相人のありしに、件の耳買ひたる僧とつれて行き、耳買ひを相せさするに、「させる御福分見え給はず」と云ふに、「あの御房の耳は買ひとりて侍り。あの耳を某が耳にして相して」と云ふに、「さては明年の春の程には、御悦び候ふべし」といふ。みゝ賣の僧を相するに御耳こそ御福分は見え給ひ候へ。その外福分おはしまさずと申せし事、思ひ出でられ候。みゝ賣りたる故に、かゝる不幸の事ありと覺え候と語りき。夢をも賣り買ふ事なれば、かゝる事もありぬべきなり。宇治殿に候らはれける宰相の局といふ女房は、あひすまれ候友達が夢に、三日月を懐に抱くと見たるよし語りければ、「いでその夢買はふ」と云ひて、衣を脱ぎて買ひてけり。それ故に、宇治殿に思はれ參らせて、目出かりけり。かゝる事もあれば、耳も賣り買ふしるしありけり。さて彼の耳買ひたる僧は、次年の春所帶まうけてけり。

(一)般若。前出。

たり。貴げに思はれて、布施のかさもとらばや」と思ひて、「斷酒にて候」と答ふ。「さらば」とて、餅をとりいだして進めければ、是をちと食ひはじめて、「是れは「(二)般若の法味、不死の良藥なり。ことさら食ひはじめて候。病者に參らせ給へ」と云ふ。病者悦びて、「是は三寶より給はり候、太明神の御計にてこそと、かたじけなく候」とて、かきおこされて、一口食ふに、八旬にあまれる老病の、不食久しきが、是れを食ふほどに、むせて、きち〳〵とするを、女房どもかゝへて、項をうち、咽喉をさすれども、かなはず。やがて息絶えて事切れにければ、子どもも力をよばず。「何樣にもたのみなく候ひつれば、御歸りこそ候はめ。孝養の時こそ案内申し候はめ」と云ふ。さて苦りかへりて歸る程に、既に船に乘りてをし出すほどに、「さるにても此僧むなしく歸すも無下なり。ちと孝養の由にて施物とらせん」とて、使者をやる。馬に鞭うちて追ひつきて、「しばらく御とゞまり候へ」と云ふを、人殺しとて咎めかこたれんずるにやと心得て、「耳にな聞き入れそ、こげや〳〵」とて、返事もせず漕ぐほどに、風あらく波たかくして、既に入海しつべかりけり。衣裝なんどは皆ぬらして、死なぬ計にて歸りたるよし、人つてなら

上人申しけるは、「二日路の所に請用あり。老躰の身、ものうく侍り、擧し申さん。ましく／＼なんや。たゞし佛事なれぬ所にて、布施物なんどは、かひ／″＼しからじ。二三十貫にはすぎじ。また或社の神主有德なるが、(一)逆修すべき事侍り。子息とり／＼に佛事營みて、七月勤行すべし。それも請じ候。物ぐさく侍り。擧し申さんに相違あらじ。それは一日に無下なりとも、五貫はせんずらん。よくせば十貫づゝもせんずらん。ましく／＼かし。是れは一日の路なり。何も一所御心にてあるべし」と云ふに、仰せや及び候。二日路まかりて、三十貫とり候はんよりは、一日路まかりて、七十貫をこそ取り候はめ」といふ。さて一日路の所、海をわたりて行きぬ。子息ども申しけるは、「老體の上、病日久しくしてたのみなく侍れども、親子恩愛の道、思ひすてがたく侍り。先づ祈禱に『大般若』をよみ候ひて、逆修は用意仕りて候へは、やがて引き續けて仕るべし」といふに、「參り候ほどにては兎も角も、仰せに從ふべし」とて、『大般若』弟子ども同じく始めけり。逆修の外に、布施もあらんずらんと思ひて、開白して讀むに、「御酒はまゐり候やらん」と問ふに、「きはめたる上戸の愛酒なれども、酒のむなんど思はゞ、無下におちぶれ

(一)逆修。前出。

鼠は何にも勝れたるとて、鼠を聟にとりけり。是も定まれる果報にこそ。和泉國の癩人が女、播磨國の癩人が子、共になびらかなりけるが、本國にては人しりて卑しく思へり。京の方へ行きて常の人を夫にし、妻にせんとて上りけるが、鳥羽の邊にて行きつれて、互にたゞの人と思ひて、かたらひよりて妻夫になりたりける。鼠の聟どりに違はず。或る入道道法師の物語に、小所領知行せしときは、事かけず侍りき。病者にて身冷え腹病に食事心にかなはず。麥飯なんどは見れば心地あしく侍りき。女童部が衣に、某が衣かさねて候が、猶肩ひゆるまゝに、小袖を肩にかけて足冷えてわびしければ、小女童部あとに復させ侍りしが、所領得替の後は、ひたすら(一)暮露〳〵の如くにて、帷に紙衣きてぬるに、足も身も冷えず、食物は何こそわろしとも覺えず、麥飯なんどは甘露と覺え候なりと云ふ。たゞ天運にまかせて、なげかず愁へずして、夢の世をわたり、幻の身を觀じて、來世得脱の因を修すべし。

一五、耳を賣る人の事

奈良の僧の學匠、說經なんどもする人、坂東にある所の學頭にて侍るに、或る

(一)暮論々々。梵論々々、または梵論子とも書く。虚無僧のこと。

せがれたる小冠者、藁沓をつくりて御供仕るべしと云ひけり。誠に佛法の効驗なんどにて、自から貧をのぞく事はあるべし。生れつゝたる果報は定りありて、轉じがたき事なり。今生の果報は先世の業に答ふ。當來の果報は今生の業によるべし。たゞ未來無窮の果報目出たかるべき淨土菩提の道を乞ひねがひて、既に定まれる貧賤の身、非分の果報を望むべからず。鼠の女をまうけて、天下にならびなき聟をとらんと、おほけなく思ひ企て、日天子こそ世を照し給ふ徳目出たけれと思ひて、朝日の出で給ふに、「女を持ちて候。貌形なだらかに候。まゐらせん」と申すに、「世間を照す徳あれども、雲にあひぬれば光もなくなるなり。雲を聟にとれ」と仰せられければ、誠にと思ひて、黒き雲の見ゆるにあひて、此のよし申すに、「我は日の光をもかくす徳あれども、風に吹きたてられぬれば、何にてもなし、風を聟にせよ」と云ふ。さもと思ひて、山風の吹きけるに向ひて、此よし申すに、「我は雲をも吹き、木草をも吹きなびかす徳あれども、築地にあひぬれば力なきなり。築地を聟にせよ」と云ふ。げにと思ひて、築地に此のよしを云ふに、「我は風にて動かぬ徳あれども、鼠にほらるゝとき堪へかたきなり」と云ひければ、さては

陰陽の習か、若は眞言の習か、聞き傳へたる術ありとて、弟子一人小法師一人ありけるに申し合せて、「あまりに貧なること術なかりければ、今は貧窮を追ひ失しなはんと思ふなり」とて、十二月晦の夜、桃の枝を我もゝち、弟子にも小法師にも持たせて、咒を誦して、家の内より次第に物を追ふやうに持ち〳〵して、「今は貧窮殿、出でおはせ〳〵」といひて、門の外へ追ひ出して、門を堅く閉ぢつ。其夜の夢に、「やせがれたる法師の、古堂の破れたるに居て、年來候ひつれども、追はせたまへば出でまかり候」とて、雨のふるに、泣き居たると見て、圓淨房あはれなる事なり。貧窮法師が夢にかく見えつる。いかにわびしかるらんとて、さめ〳〵と泣きける。慈有ける心なるべし。さて其後、世間事かけずして、過ぎけると申し傳へ侍り。近きことなり。貧富は前世の事なれども、今生の善行に轉ぜらるゝこともあるべきにや。或る山寺法師の弟子、餘りに貧しかりけるが、他國へ落ちゆかんと、師に暇こひければ、「や御房、一升入る缻は、何處にしも一升入るぞ」と云ひける。「有漏の法は、繫地各別に候にや」と答へける。さることもあるにや。又ある僧も貧にせめられて、他國へ行かんと出で立ちける夜の夢に、や

は、五明の一なり。菩薩この五を明らむべしと云ふ。因明は外道の法、内明は佛の法、(一)聲明、醫方明、工巧明なり。

遠洲に蓮養房といふ山寺法師、前栽に柿の木をうへて、年來愛しけるが、他界の後、弟子の僧この木を切りて、湯木にせんとて割りて見るに、文字の勢二寸ばかりにて、蓮養房と文字あり。黑木のごとくして、木の中にわれども〳〵同躰にてありけり。是も執心ありけるにや。

和洲の或山寺法師、竹を愛して惜みもつに、笋の時、我もくはず、人にもあたへずして、病死して後、中陰に弟子ども笋を取りて、僧膳の菜の汁にせんとて、わりてみるに、黑き蟲おほかりけり。師妄念故に、蟲となりたるよし、夢に見えけるとなん云へり。昔も橘の木を愛して蛇となりてまどひける事あり。また錢入たる鉼の中に、小蛇になりてある事申し傳へたり。執心妄念おそるべし〳〵。流轉生死のとが是れ也。

一四、貧窮追ひ出す事

尾洲に圓淨房といふ僧ありけり。年闌けて後、あまりに貧窮なることを歎きて、

(一)聲明。

（一）宗因喩。正しく立てんとする思想を云ひあらはせる命題、即ち論理學の斷定を宗といひ、この宗を成立せしむる理由を因といひ、例をあぐるを喩といふ。

(一)宗因喩の三を以て、義理を成ずるなり。劫毘羅外道常見を起して大なる石になれりしを、陳那菩薩、量を立て石にかきつく。石ほえて破れて失せにき。汝が我は無常なり宗。外行を受くる故に因。猶し聚雲の如し喩。聲論外道も「聲は色形なし、常住の法なり」と計せしを、佛弟子、量を立てゝいはく、「聲はこれ無常なり宗。作所成なるが故に因。猶し瓶等の如し喩。先年南都に侍りしに、或人の物語に、故明惠上人の「我等は大時者なり」とて、非時に菓子など召しけると申し候を、なにとも思ひよらず侍りし程に、信濃國の山里を事の縁ありて越し侍りし時、犬辛夷の花を見て、此のこと心得て侍りき。悟道得法もかくやと覺え侍りしかば。南都に遊びなれて侍りし同法のもとへ、量を立て、一首送りたる事侍りき。思ひ出で侍んべるまゝに、徒事なれども書き付け侍り。我は是れ犬時者なり宗。形似て實にあらざるが故に因。猶し犬辛夷の如し喩。

猿似なる木律僧をはゝなれつゝ、犬時者にもやなりにける哉。

自から事の道理をいらへば、自然に因明の法門になること侍り。人のおろかなるを、汝は是れ愚癡なり宗。智慧なきが故に因。猶し畜生の如し喩。因明と云ふ

(一)常見。いつ迄も變らぬといふ見解。例へば人は死するも亦人に生ると主張する如きをいふ。
(二)量。論理的にものを量ること。
(三)諸行無常の四句。諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂。諸行は無常なり、これ生滅の法。生滅々しをはれば家滅し樂となすとよむ。
(四)因明。印度の論理學をいふ。

一三、執心の堅固なるも佛法によりて離る事

常州に或る人道法師の念佛の行者なるありけり。去ぬる弘安元年の疫癘に、臨終心よからずして死す。火葬にして見るに、堅き物手取の勢にて、大方やけぬ物あり。堅木をもて燒けども燒けず。炭多くそへて燒くに、灰白くなるまで燒けず。子息の僧これを見て、執心のかたまりて燒けぬにや。いかなる腹病なりとも、此の炭木には燒くべし。あやしと思ひて、昔、天竺に外道ありけり。(一)常見を起して石になりてありけるを、佛弟子、(二)量を立て石の面に書くによりて、石ほえわれて失せにけり。此事思ひよりて、彼文は覺えねども、執心のとらくる事やあると思ひて、幡の足の紙に、(三)諸行無常の四句の文を書きて、堅物の上になげかくる。既に消えかかりたる炭の火、此紙に燃えつきて、油をかけたるやうに、へら〳〵とやけて、跡なく失せにしと、彼僧まのあたり物語りて、かの昔の量立てたる文を尋ね申す事侍りき。末代なれども佛法の功能、目出たくこそ侍べれ。まして誠しく觀念坐禪もせん人、執心もとらけ、罪障も消えんこと、疑ふべからず。量を立つと云ふは、(四)因明の法門なり。外道を破する事は、因明の道理なり。

たもあれば、命をものべ、命をも殺さんこと疑ふべからず。都ては佛法の德をば世間の譬にて心得べし。火の薪をやき、藍のものを染むること人每にしれり。目に見る事ぞかし。然るに濡れたる木はもえず、垢づける衣はそまらず。是れを以て火、物をやかず、藍物を染めずと云はんは愚なり。佛法もかくの如し、罪障をけし、淨土に生れ、悟をひらき、佛となること疑ふべからず。只さはりありて疑ひ、愚にして信ぜず。法の如く行はざる時は、其のしるしなく、木のぬれ衣のあかつけるが如し。念佛眞言等の功德を、祖師釋するには、罪を作る時の心は、顚倒の因緣、妄想の所作なれば、是れ虛妄なり。念佛を行ずる心は、眞實の勝緣より起る。一は虛なり、一は實なり。此故に、念佛の德は、多劫の罪を除くなり。また眞言の師釋して云はく、罪障も幻なり、眞言の加持も幻なれども、煩惱妄想は顚倒の幻、一向に虛僞なり。眞言の幻は金剛の幻、不思議の妙用なり。譬ば弱き幻術師が現ずる幻をば、强き幻術師これを失ふが如しと云へり。衆生の愚かなる妄想の幻をば、諸佛の賢き幻術をもつて失ひ給ふなり。此事よく〳〵信じたもつべき法門なり。先德の釋なり。佛法の道理なり。努力疑ふべからず。

り月輪觀、功つもられける（一）。夜中にも消息なんど、燈なけれども書かれけるとなん承りき。眞言に殊に信ふかき人にて、かやうの効驗ありけるにこそ。されば（二）經には、「信に道の源、功德の母」と說かれたり。信の前に德なきことなし。不信の人には、佛法の益なし。洛陽に或る女人年來たのみたる眞言師の上人に申しけるは、「眞言の中に人ころす眞言や候。敎へさせ給へ」といふに、「何事の用事ぞ」と問へば、我夫、年來の情ふかく候ひつるが、若き者を思ひて、我をばすてゝ候が口惜く候。子供の母にても候。是れ程本意なきこと候はず。さて申す也」といふ。此事難治の次第なり。調伏の法は慈悲を以て天下の怨たる物を、調伏し、殺すことにてこそあれ。只にくき心にて殺すは、道理にあたらず。相添ひて敎へし事ゆゝしき罪と思ひて、命の延ぶる眞言延命の呪をさづく。是れこそ人殺す眞言といへば、悅びて信じてみてけり。其後來りて云ふやう、「末代なれども眞言の功能は候ひけり。七月と申に歸て殺して候」と云ひけり。あさましく思へども、力をよばず、「さる事こそ侍りしか」と、或る眞言師かたり侍りき。ましてありのまゝに信じてつとめんに、其しるし空しからじ。誠には一の眞言に諸の德を含めるか

（一）禪。「華嚴經」

打ちわられて、此方へむきて泣々まかりぬ。又寺より手おほかる佛おはして、追ひ拂ひ給ふと見へ候」とて、病やがて癒え侍りき。

南都の戒壇院の僧の語り侍りしは、或る在家の女房靈病ありしを、千手陀羅尼を滿てけるに、刀のやうなる物を、吐きいだして侍りけり。又或る女人、陀羅尼誦する僧どもの目に見えて、蛇走り出でゝ、つかはるゝ女房が前へはひ入ると見えけるが、其の女人狂ひ止みけり。うはなりか靈蛇にて見えけると云へり。

故實相房上人も、眞言に付きて不思議の效驗ありける中に、白川に或る人の女、腹中に大なる手鞠のほどにて、石の如く堅き物あり。冷え痛みて止みけるが、物狂なりけるを、彼の親歎きて實相房に此よしを申すに、「咒詛にもあれ、病にもあれ、文字の智火にて、燒き失なはんに、などか癒えざらん。護摩せん」とて、大土器に煨を入れて、杉折敷一枚こまかにわりて、壇木にして、不動の火界の咒誦して加持するに、腹中あたゝかになりて、彼の堅き物ゆる〳〵となりて、あとかたなく失せにけり。其の後かの親、上人を信ずることあさからず。世間に兎角そしる人ありけれども、かたく信じたるよし或僧物語りし侍りき。此の上人は本よ

(一)加持。前出。

洛陽の東山觀勝寺の大圓房の上人、寶篋印陀羅尼の德多く聞ゆる中に、或若き女房物狂なりけるを、此の陀羅尼を誦して、(一)加持せられけるに、物をはき出したるを見るに、乃ち文字を八つかきて中に病者の名をかけり。病者さめ〴〵と泣きて申しけるは、「あな心うや。佛法は人をこそ助け給ふに、我をかく陀羅尼のせめ給ふ事よ。我は某といふ者なり。人を咒詛して世を渡り侍るなり。此の御前の姉御前の殿を取り給へる故に、姉御前の咒詛してと仰せらるゝ時に、咒詛したれば、此の符をせめ出し給ふ事、よからんには我身何として、身もすぎ候べき」といひつる。其の座にて陀羅尼誦したる老僧の物語なり。此の物語に書き付くる事、詞はすこし〴〵たがふ事ありとも、虛誕はいさゝかも侍らず。殊に佛神の德、陀羅尼の驗、一言も虛言なく侍り。三寶の知見ある事なり。後見疑ひ給ふことなかれ。

去ぬる弘安元年、坂東に疫癘おびたゝしくして、病死數知れず侍りき。十一歲の小童のやみ侍りしが、「小童部のおほく來りてなぶり候が、餘りにわびしく候」と申せし間、僧ども四五人して、千手陀羅尼を二十一返滿て侍りしかば、「小童頭を

（一）迦葉佛。過去七佛の第六。釋尊の前にこの世にましませし佛なり。
（二）分衛。僧が乞食して廻ること。托鉢すること。

行因の淺深重々なる故なり。昔、五百の長者山中にして、路に迷ふてつかれにのぞめり。樹神ありて是れをあはれみて、指のさきより甘露美食を出して是れにあたふ。其中の長者の上首是れを得て、音をあげて泣く。樹神その故をとふに、我れに伴あり、是れを與へずして、我一人用ふる事をかなしむよしを答ふ。「我れ此食つくべからず。悉くよびて與へよ」といふ。喜びて伴の長者ことごとく尋ねて、あくまで是れをたすけつ。「そもそもいかなる因縁にて、此の果報を感じ給へるにか」と問ふに、神答へていはく。「（一）迦葉佛の時、鏡をとぎて世をわたる。大城の門の前にてこの事をせしに、乞食の沙門あれば、（二）分衛の所をしめず。我は貧にして與へずといへども、沙門を哀む志ありて、此の指をもつて乞食の所を教へし業因にて、指より飲食をわかすに盡くることとなし」と云ひけるに、沙門を供養する業因の貴きことを信じて、月々に八千の僧を供養しける。米を洗ふ汁流れて河となりて、船を浮ぶるほどなりと云へり。經の文の意なり。これは鬼神と雖も、果報人にもすぐれたり。分衛とは乞食の梵語なり。

一二、眞言の功能の事

（一）他化自在天。欲界の天。欲界の天主魔王の居る所。この天の壽命は人壽九百二十一億六百萬歲に當るといふ。（二）傍行。橫になりて行くもの。犬猫の如きをいふ。

ば、出離も遠かるべし。眞言師の中にも、此道に入る者多し。近比高野に聞えし眞言師も、天狗になりて後、大事の秘法を靈付きて弟子に授けるといへり。智慧道心あらば、何の處にても行じて、それより出離すべし。善天狗、惡天狗と云ふ事あり。このすがた也。唯今生の心行の善惡によるべし。『華嚴經』には、菩提心なき行をば魔業といへり。我執憍慢等の心、あひ雜はるれば、定めて此の道に入るべし。淳淨の心を以て、菩提心の上に行ずる人のみ、まことの道に入るべし。形直ければ影も直く、源きよければ流も清きが如し。因果の道理うたがふべからず。我が心行を委しく觀じて、當來の果報はしるべし。善因は樂の果、惡因は苦の果あり。必然の事也。日本に天狗と云ひならはしたる本說なしといへり。南山の『業疏』の中には、「罪福相雜る、業、鬼趣相似の報を得」といへる、これにやまた魔鬼といへるこれあるべし。天子魔は（一）他化自在天なり。鬼類にあらず。その部類なるべし。

圭峯の釋には、（二）傍行の物をば畜生といひ、竪行の物をば鬼といふと見へたり。『盂蘭盆經疏』の中にあり、鬼神には重々果報の優劣ありと見へたり。是れたゞ

の後、彼生所ゆかしく思ひ、弟子ある時、春日野にて師匠にゆきあひぬ。「わ御房、我が生處を不審に思へり。いざ見せん」とて、春日山の奥へ具してゆく。興福寺の如くなる寺あり。三面の僧坊あり。かの師が坊へよび入れて、「爰に居て我が有樣見よ」と云ふ。さて佛事講行なんど覺えて、面々に法服取り裝束きて、講堂とおぼしきに並み居て、問答する事常の如し。其後、空より足ある釜ふり〱として落つ。銚子土器體の物つゞきて落つ。獄卒のやうなるもの落ち下りて、釜の中に銅の湯のわけるを、銚子にくみ入れて、土器にて押しまはし、僧どもに呑ましむ。術なげなる氣色ながら、皆のみて、やがて身やけて失せぬ、と計ありて、又本の如く蘇生して、坊へ歸りて、「我等名利の心にて、佛法を學し行ぜし故に、かゝる苦をうくるなり」と云ひけるを見聞きて、弟子の僧學匠にて公請なんど勤めけるが、此事に發心して修行に出で、何處ともなく逐電してけり。

大方は同じくして魔界となれども、善惡不同なり。佛法に信あれども、我相執心つきざる者は、佛法を我も行じ、他人の行ずるをも障碍せずして、隨喜し守りともなる。佛法に信なく、偏に名利憍慢ふかき者は、他の善根をさまたぐ。され

ければ、陀羅尼滿てなんどして、本心になりぬ。さて、語たりけるは、山臥どもにさそはれて、時のほどに、筑紫の安樂寺といふ所の山の中へ具せられて行きぬ。老僧の八十あまりなるが、世に貴げにて、その中の尊者と見えしが、「あの兒こゝへ來よ」とて、そばに於きて「彼奴らは所詮なき者ぞ。爰に居てもの見よ」といふ。たのもしく覺えて居て見るほどに、山臥ども舞ひ踊りけるに、網のやうなる物の、空より下りてひき廻はすやうに見ゆる時、山臥ども興さめて逃げんとするにかなはず、網の目より、火の燃えいでゝ、次第にもえあがりて山臥ども皆やけて、炭灰になりて、暫ありて、又本の如く山臥になりて、又あそびける。老僧、「あの山臥是れへ參れ」とよびて、「いかに、わ山臥は、此兒をば具して來るぞ。とく〳〵本の山寺へ具してゆけ」と云はれて、おそれたる氣色にて、具して歸ると覺えつると云ひけり。天狗と云ふこと聖敎のたしかなる文見えず。先德魔鬼と釋せる、是にや。日本の人の云ひならはしたる計なり。只鬼の類にこそ。佛法者の中に、破戒無慚の者多く此報を受くるなるべし。我相、憍慢、名利、諂媚の業、佛事に相交へて、雜類の報を受くるなるべし。南都の興福寺に學匠ありけり。他界

（一）隱形の印。姿を他人に見せぬため結ぶ印相。

（二）如法經。法の如く經文を寫すといふことにて、主に『法華經』を書寫することに云ふ。

一一、天狗の人に眞言を教ふる事

奥州修行の僧、或山中の古き堂に宿りす。天狗のすむよし里人云ひければ、すさまじく覺えて、佛壇の上に上り、佛座の後に坐す。夜ふけて山の峯より、人多くをとなひ下る。をそろしく覺えて、（一）隱形の印をむすび、心をしづめて見るに、白く清げなる法師を、手輿にかきて、小法師原二三十人伴して堂の内へ入る。この法師、「小法師原庭に出て遊び候へ」と云ふ。はら〳〵と出でゝ遊びけり。さてこの僧、「や御房〳〵」と云ふ。みつけられぬと思ひて「候ふ」と云ふ。「御房の隱形の印の結びやうの、わろくて見ゆるぞ。おはしませ、「教へ申さん、といふ時、心安堵してそばへ寄りぬ。こま〳〵と教へて、さて「物見給へ」、所詮なきやつばらに見せ申さじとて、追出したり」といふ。さて印むすびて居たれば、「よし〳〵只今は見えたまはぬぞ」といふて、「法師原、參り候へ」とて、堂の中にて遊び舞ひをどりて、曉山へ歸り登りにけり。

伊勢の國の或る山寺に、（二）如法經を行ひける僧どもの、弟子の児いづちともなく、失せて見えざりけるが、一兩日過ぎて、堂の上にて見つけ、正念もなく見え

（一）大小等。大乘と小乘、權敎と實敎、聖道門と淨土門、顯敎と密敎、禪門と敎門。
（二）諸惡莫作。前出。
（三）諸法實相。前出。
（四）煩惱即菩提、生死即涅槃。煩惱そのまゝが佛道なり、生死そのまゝが證なりといふこと。

流布す。佛法は、(一)大小權實、聖道、淨土、顯蜜、禪敎、法門の義理まち〳〵なれども、(二)諸惡莫作、衆善奉行の敎の替ることなく、我相人相、執心執著を除くこと、都て異義なきに、明師に相傳なき無智無道心の惡見の師多く出來て、(三)諸法實相一切佛法の詞、(四)煩惱即菩提、生死即涅槃の文はかりをとりつめて、機法のあはひ、解行のわかれもしらず。男女を兩部の大日なんど習ひて寄あふは、理智冥合なんど云ひなして、不淨の行、即ち密敎、秘事修行と習ひ傳へて、惡見邪念すてがたくして、諸天の罰を蒙る。佛陀の冥助なきにのみにあらず、横死横難にあひ、多くは人に殺され、物に狂ひ、疾病やみ自害し、臨終狂亂顚倒す。現世にも中夭にあひ、冥加なく、後生には定めて、無間地獄におちて出づる期なく、また佛法に遇ふことあるべからず。悲むべからず、凡そ眞言の罰と云ふことはあるべからず。たゞ邪念のとが、己れと招くなるべし。もしは守護天等のとがめ給ふか。よく〳〵師匠をえらびて、正流の人、正見の師にあひて、習修行ずべし。末代は眞言の利益ことに目出たかるべし。また惡見世に多し、よく〳〵辨へらるべし。

（一）本覺。眞如のこと。本來かはさる智慧。

濫行にして、愛染の法に付きて、敬愛の秘法を習ふ。彼の相應物を赤色に染るにつや／＼赤根の色つかず、あたらしき絹の白きに、すべてつかざりけり。たしかなる同法、まのあたり見て申しき。是れは佛法に、眞實の信心なく、出離の一大事を心ざゝずして、世間の執著有相のために、あしさまの心地にて行ぜんと思ひけるにや。相應物も色つかず、不思議なりけり。眞言に敬愛の法と申すも、佛法の眞實を習ひ、（一）本覺に冥ずる心地をひらくを、敬愛と習ひ侍り。これらに付きては、佛法のふかき習ども侍るなり。是れ眞實の法門の立ち入る習なり。然るに世間の人の思ひ相へり。男女の中らひ思ひあへるばかりを、敬愛ならはし侍る。それも眞實佛法の敬愛德用何れにも渡る事は餘薰にてこそ侍るに、ひとへにたゞ世間有相の思ひのみに取りなす事、佛法の本意にあらざる事なり。まことしく佛法に取り入らん人は、能く／＼思ひわけ、目出たき法をいやしく輕め思ふべからず。此の僧内々濫行にて、甚深の秘法を、あしきさまの心向にて行ぜんと思けるにや、相應物の色つかざりけり。此事は知人の尼公かたり侍りき。されば當時も眞言の功能あるべき也。近代眞言の流に、變成就の法とて、不可思義の惡見の法門、多く

木に菌になりて檀那が截り取れば、又おい／＼しける。隣の人盗みて切るに、叫び泣きけり。故を問ひけるに、先の肉の山の如く答へけるといへり。(一)虚受信施は阿鼻の業なり。恐れ慎みて、行徳あるべき者なり。これをつゝしまずして、信施をほしきまゝに用ひば、さだめて悪趣に落ちん事うたがひなし。これを恐れざるは、道念のなき故なり。唯いそひで心地をあきらめば、信施の罪を自ら消滅し、無始の罪障一時に殘りなん。

一〇、不法にして眞言の罰蒙る事

或僧、眞言を習ひしが、(二)灌頂もせずして既にしたるよしを師に申して、秘事をゆるされて、聞きみる程に、此のこと自然に師聞きて、彼の書せめ返へしつ。眞言の習いまだ傳受せざる法を、披覽する事は、(三)越三摩耶の失とて、無間の業となるなり。然るに此の僧、此の失をかへりみず、未だせぬ灌頂を、しか／＼の所にて既に遂げたりと云ひ、未だ其位にもいたらぬ秘書を、僞りて開き見るほどに、いく程なくて病付きて苦痛おびたゞしくて、やがて目くれて都て見えず。遂に苦痛顚倒して命終しけり。そのあたり見たる同法語り侍りき。また或僧、内々

(一)虚受信施。虚しく信施を受く。

(二)灌頂。前出。

(三)越三昧耶。戒三昧耶戒とは眞言の戒律のこと、これに違反するを越三昧耶戒といふ。

毎日二十一返滿てて、命をのべて佛法にあへるかひありて、學問をもし、興隆すべきよし、よく〳〵教へしる。この兒師の教よりも數遍多くみて、信心まことありけるこそ、さきの相人三年の後また相していはく。「いかなる御事のおはしまし候やらん。御命七十にあまりて、延びて見え給ふ」と云ひけるにあはせて、八十あまりにて、地藏の引導によりて、目出たく往生せられける。頭光に五色あらはれ、紫雲たなびき、音樂きこえなんどして、京都の人々おがみあへりき。まのあたり拜みたる尼公物語り侍りき。建保の比と申しやらん。されば尊勝陀羅尼は在家も壽命のため、福德のために、是れを誦すべし。出家は殊に、信施消しがたし。陀羅尼のか力もたのもしく侍り。昔、天竺に道人ありけり。信施をうけ、行業うすき故に、肉の山と成る。切りとれば又生い〳〵しける。隣の里の人聞きつたへて、盜みて切りとるに、山ひびき動き、音を立てゝ叫びけり。我は是れ昔佛道を行ぜしかども、德行至らず、此里の人の信施をうけて、償ふほどの行德なくして、肉の山となりて、返へし報うて、汝が施をうけざるゆゑに、いたみ忍びがたしといふ。漢朝にも道人ありけり。檀那の施を受けて、行業なきゆゑに、園の

見るに、四五尺ばかりなる蛇はひかゝりけり。たち歸りて、鍬をとりて、追ひのけんと、さて見ばれ蛇は見えず。女童ねいれるが如し。驚かして「如何おぼゆる」と問へば、「只今こゝに若き殿のみめよきが、其處に伏せ〳〵と仰せられつる時によりをしつる時、首のほどに近付きて、なにゝやら驚きて、恐れたる氣色にて逃げさり給ひつる」といふ。「守りばしや持ちたる」と問へば、さる事もなしと云ふ。さるにても、やうあるらんにこそと思ひて、よく見れば、尊勝陀羅尼かきたるを引きさきて、元結にしたりける。それに怖れて逃げゝるにこそと、不思議なる事になん語り傳へ侍り。守は人の持つべき者なり。知らぬだに自ら斯くの如し。ましで信じあがめて持たんをや。隨求陀羅尼の一字、風にふかれて骸にふかれたるゆゑに、婆羅門、地獄より出でゝ、天に生ず。如來の(一)等流、(二)變化の分身の字として、佛の化身也。いかでか其德むなしからん。

三井寺の(三)長吏、(四)公胤僧正、幼少の時より法器の人なりければ、(五)補處の仁に思ひあてらる。(六)相人のいはく、御器量は左右なき御事なり。但し御命二十にすぎさせ給はじと申す。師匠此事をなげきて、尊勝陀羅尼は命をのぶる功能あり。

(一)等流。前出。
(二)變化分身。佛が本身より分けあらはし給へる變化の身。
(三)長吏。一寺の主長たる僧のこと。
(四)公胤僧正。天台宗の僧。『淨土決疑鈔』三卷を著して源空の淨土宗を反駁せしが、後、却つて源空に歸し、著書を燒く。建保四年寂。
(五)補處。師匠の後を繼ぐこと。
(六)相人。人相を見る人、ららなひ師。

天子、七日あて命終して畜生の身を受くること七度、後に大地獄に落ちて、出づる期有るべからずと云ふ。是れを聞きて恐れかなしみて、帝釋に此のよしを申す。帝釋、定に入りて見給ふに、云が如くなるべしと知りて、佛の所に詣で丶、此事を申し給ひき。佛、尊勝陀羅尼を說きて、帝釋に授け給ふ。是れをまた善住天子に授けて、七日すぎて天子を具して來れと仰せられし陀羅尼なり。一返耳にふるれば、諸の罪障滅し、地獄、餓鬼、畜生、閻羅王界を淨うして、病をのぞき、命を延べ、福を增す。每日二十一返誦すれば、諸の(一)信施の罪消えて、命終して極樂に往生すと說けり。亡者を極樂に送くるとも說かれたり。されば諸寺諸山に是れを誦す。高野山殊に此の陀羅尼をあがめ誦ず。心あらん人、在家出家これを習ひ誦すべし。病をのぞき壽命をのべ、福德來り、極樂に生ず。何事か此の陀羅尼にかけたる事あらん哉。畜類も聞きて罪きえ、亡魂また助すかる。尤とも信じ誦すべし。この眞言を書いて幢の上に置くに、其風にあたり、その塵をふきかけられたる畜類人倫等、なほ罪を消すといへり。尾州の甚目寺の邊に十二三ばかりなる女童の、菜つみけるが、俄にひれ伏しけるを、田かへす男あやしみて、走りよりて

(一)信施の罪。資格なくして施物をうけたる罪。

施の罪を消滅する功能あれど、さすが聞きおきて誦ぜんと思へども、習もせねばかなはず。せめては名字をも唱へんと思へ共、舌こはくして正しくは云はれず。唯「そゝ」とぞ云ひける。「此牛は病のあるにや、草もくはず、水ものまず、そゝめく」と人いひけれども、心うさに、食物のことも忘れて、三日三夜そゝめきて、志のつもりにや、尊勝陀羅尼と云はれたりける時、本の法師になりぬ。さて繩ときて、師の前へ行きぬ。いつ御房來ると云へば、「三日になり候」と云ふ。「何處にありつるぞ」と問へば、「馬屋に候ひつる」とて、事の仔細ありまゝに語りけり。師の僧、哀れみて、尊勝陀羅尼教へ、經なんど授けゝると、或人語り侍りき。尊勝陀羅尼は、緣起殊に目出たきこと也。佛陀波利三藏、天竺より漢土へ越えて、五臺山の文殊を禮せんとす。山の麓に老翁一人あひて、「『尊勝陀羅尼經』や持ちておはする」と問ふ。「しからず」と答ふ。老人の云はく、「『尊勝陀羅尼經』は、在家出家の利益めでたき事也。若し是れを弘通し給はゞ、文殊の御坐すところ教へ申さん」と云ふによりて、また天竺へ歸りて、わたせる經なり。此經の說相は、(一)忉利天に善住と云ふ天子ありけり。園にいでゝ遊びけるが、空に音ありて告げて云はく、「善住

（一）忉利天。前出。

れば、いよ／＼大にして失する事なし。聖靈の功德大なるべし」と、こまやかに敎へられければ、「さては目出度事にて候ひけり。但し、隣に候ふ三郎檢校と申す者ばかりは除かせ給ひ候へ」と申す。さしたる敵にてあるなる故なるべし。一切衆生の中に、唯一人もらしけんも、けしからずこそ覺ゆれ。是れは其座にありけり僧の物語なり。世間の人の廻向の文も、たゞ理ばかりにて、まことの心はうすくこそ。彼の百姓に最もかはらじかし。

九、愚癡の僧牛となる事

三河の國のある山寺に、修學の二法闕けたる若き僧ありけり。緣に付きて、近江國に住みけるが、年月經て、三河の師の許へ行きて、坊へ入らんとするを、小法師棹をもて打たんとす。「こはなに事ぞ」といはんとすれども、物も云はれず逃げ去りぬ。また行けば先の如し。はる／＼と思ひ立ちて來り、空しく歸るに及ばずと思ひて、また行くとき、此の小法師、「この牛は思ふ事のあるやらん、度々來る」と云ひて、馬屋に引き入れてつなぎつ。其時我身を見れば牛なり。心うき事かぎりなし。是は日來の信施のつみ深き故にこそと思ひて、尊勝陀羅尼こそ、信

これ心うつれば、一心なしがたき故なり。

或る女人、出家のため、山寺へのぼりて髪をそりてけり。出家師、法名をつけ參らせんと云へば、「法名は先より案じてつきて候なり」といふ。「いかにつかせ給ひて候や」といへば、佛といひ、神といひ、我れ信じたのみ參らせて候が、なつかしく捨てがたく候まゝに、彼の御名の文字を一つづゝ取りあつめて、阿釋妙觀地白熊日羽嶽存とつきて候」と云ける。誠になかき名なり。阿彌陀、釋迦、妙法、觀音、地藏、白山、熊野、羽黑、日吉、御嶽の文字を一つづゝ付けるなるべし。雜行の行人の心ざまに似たり。いづれも偏なり。信心のあまねくとも、行も名も一つを專らすべし。

八、廻向の之心狹き事

和州の山里に百姓ありけり。草堂を造りて、供養の導師に、西大寺の思圓房の上人を請ず。願文の(一)廻向の詞を聞きて、此の堂は故婆にて候ひし者のために、兎角はげみて造りて候。(二)法界衆生に御廻向候は、婆は萱一すぢにも當りもつき候はじと覺え候。唯婆がためとばかり遊ばされ候へ」と申すに、「功德は廻向す

(一)廻向。我が修めし善根を他へふりむけること。
(二)法界衆生。十方世界のあらゆる生あるもの。

に細き竹の筒をねぢ入れて、かたはしをば、佛の鼻の穴にねぢ入れて、いさゝかも、香の煙の散らぬやうにして、香を燒くほどに、泥佛の鼻漆をぬりたるやうにて、金色もみえず。この尼公逝去して、女人に生れて、貌形はよかりけれども、鼻の穴は黑くして墨のごとし。彼の尼公が生れたるよし人の夢に見えけり。因果の理はさもあるらん。和州に尼公ありけり。地藏の行者にて、矢田寺の地藏をとりわき信じて、常に名號をとなへけるが、たゞ矢田の地藏ばかりとりわき憑みたてまつる由とや思ひけん、南都には地藏の靈佛あまたおはします、知足院、福智院、十輪院、市の地藏など、取り〳〵に靈驗あらたなるを、寶號となふる時、この地藏をとなへぬよしに、「知足院の地藏も、十輪院の地藏も、福智院の地藏も、まして市の地藏は、思ひばし寄らせ給ひ候な。南無や、尼が矢田の地藏大菩薩」と唱ひける。まことに心せばし。鼻ふすべたる心に似たり。是れは一向專修の餘を隔てきらふ風情なり。專修の本意は、一心不亂のためなり。必ずしも餘行餘佛をへだてよとには非ず。凡夫の心は散亂するゆゑに、此の方便あり。(一)雜行は(二)行體はとり〳〵に殊勝なれども、彼此と心みだるなり。宿世とかや申す樣に、あれ

(一)雜行。南無阿彌陀佛を念ずる以外の佛道修行をいふ。

(二)行躰。修行そのものゝ性質。

「何に」と問へば、「日來しつる事のつもりて口惜き事にあひはべり。『大般若』の泥をとらむとて燒きつるほどに、眼二つながらぬけて只今火鉢に落ちぬる」とて、泣きかなしむ事かぎりなし。家中の者さはぎ集まりて泣きかなしみけり。いかばかり當來の苦患あらん。多劫、地獄に落ち、生々世々目なく、愚痴闇鈍の者にこそ生まれふらんめ。今生一旦の此身のために、長劫の苦患にしづみはてなん事のかへすぐ\も愚にこそ。近代は湯屋にとめ湯して、女房いれまゐらせんとて、ひさくとひしめきて、後に見れば泥佛の金泥を洗ひて、佛をば黑々として打ち捨て行くことありと申しあへり。彼の罪障いかばかりならん。

七、佛の鼻薫する事

或る尼公、金色の立像の阿彌陀佛を美麗に造り奉りて、本尊に仰いで恭敬供養しけるが、本は洛陽に住みける程に、緣に引かれて片田舍へくだる。此の本尊をも持ち奉りて、或人の持佛堂に立てゝ、華香など供養しけり。この尼公、事にふれて限りがましく、嚴しく慳貪なりけるまゝに、香をたくに、餘の佛あまたおはする持佛堂なれば、香の煙ちりて、我佛はあたりつき給はじと思ひて、香盤の蓋

に、覆盆子を柏の葉につゝみて、隙を伺ひて、此猿尼公に渡しけり。あまりに、あはれにいとほしく思ひて、布の袋に大豆を入れて猿にとらせつ。其後、栗のさかりに、先の布の袋に栗を入れて、隙にまた持ちて來る。此度は猿をとらへてをきて、子息を呼びて、此の次第を語りて、「子々孫々までも、此所に猿ころさしめじと起請を書け。もしさらずは、母子の儀あるべからず」といひ、たゞしく誓狀しければ、子息起請かきて、當時までも此所に猿を殺さぬよし、或人かたりき。所の名までは書かず。まして人として恩を知らざらんは、げに畜類にも猶おとれり。近代は父母をころし、師匠をころす者、聞え侍り。かなしき濁世の習ひなるべし。

六、經を燒き目を失ふ事

洛陽の或在家に、修行者の僧宿れり。夜うち更けて、寢醒に聞けば、はらく〱と物のなる聲す。何なるにやと思ふ程に、「あらかなし、あら口惜し」と、大いに驚きさはぎたる聲のしければ、この客僧驚きて、内へさし入りて見れば、一間なる所に火鉢に火をおきて、紺紙に金泥にてかきたる經とりちらして居たる者あれば

み殺しつ。さて大なる蟹、蛇を三つに挾み切りて、頭の方をば我分にし、中をば中の蟹のまへに置き、尾の方をば小蟹の前におくに、小蟹泡をかみて、ふし〳〵として打ちしさりて食はず。我こそ奉公したれと云ふ心にやと見えけり。其時大蟹、我が分の頭の方を、小蟹の前におき、尾の方を我分にする時、小蟹食してげり。さもありぬべし。畜生も心は只人にかはらぬにや。遠州にも。燕の雌死せり。雄別の妻を尋ねて來る。先の子、巣にありけるを、今の雌、茨の果を食はせて、皆殺しつ。雄これを見て、雌を食ひ殺してけり。嫉妬の心ありける人にたがはず。是慥に見たる人の物語なり。

五、鳥類恩を知る事

中比、伊豆の國の或所の地頭に、若き男ありけり。狩しける序に猿を一匹生捕にして、是をしばりて、家の柱に結付けたりけるを、彼の母の尼公慈悲ある人にて、「あらいとほし、如何にわびしかるらん。あれ解き許して。山へやれ」と云へども。郎等冠者原、主の心を知りて、恐れて是を解かず。「いでさらば我とかん」とて、是れをとき許して山へやりぬ。是は春の事なりけるに、夏覆盆子のさかり

て、物も食はで、はひさりぬ。その後かの約束の日、蛇ども大小あまた家の庭にはひ來る。恐しなんど云ふばかりなし。爰に山の方より蟹大小いくらと云ふ數も知らずはひ來りて、此の蛇を皆はさみ殺して、都て別の事なかりけり。恩を報いけること、哀にこそ。人は情あるべきにぞ。

山陰の中納言の河尻にて、海龜をかひて放たれける故に、其子の海にあやまちで落ち入りてけるを、龜の甲に乘せて助けたる事申し傳へたり。されば八幡の御託宣にも、「乞食、癩、蟻、螻までも哀むべし。慈悲ひろければ命長し」とのたまへり。蟹なんどの恩を知るべしとも覺えねども、蟲類もみな佛性あり、靈知あり。などか心もなからん。或る澤の邊に大中水小。三の蟹ありけり。蛇を挾みけるに、蛇木にのぼる。頓て續きて、大なると、中なる蟹。木にはひ上りて、挾まんとするに、蛇口より白き水を吐きかく。蟹是れにしじけて、はひおりて力もなき體なり。小さき蟹、蕗の葉を挾み切りて、打ちかつぎ木に上る。蛇また白き水を吐きかくれども、葉にかゝりて、蟹にはかからず。其時葉を打ち捨てゝはひよりて、ひし／＼と挾む。蛇たへずして木より落つ。二の蟹力出できて、さしあはせて挾

云ひて、やう〱に狂ひけり。兎角すかしこしらへて癒りてけり。彼の子息の物語なり。畜生なれども加樣に心あるにこそ。みだりに狂惑すべからず。昔物語にも、或人の女、なさけ深く悲慈ありて。よろづの者のあはれみけるに、やり水の中に小き蟹のありげるを、常に養ひけり。年ひさしく食物を與へけるほどに、此女みめかたち宜しかりけるを、蛇思ひかけて男に變じて來りて。親に乞ひて妻にすべきよしを云ひつゝ、かくす事なく蛇なるよしを云ふ。父此事を歎き悲しみて、女に此のやうを語る。女、心あるものにて、「力をよばぬ我身の業報にてこそ候らめ。かなはじと仰せらるゝならば、其れの御身も我身も徒になりなんず。たゞ許させ給へ。此身をこそ徒になさめ。かつは孝養にこそ」と打ちくどき泣く〱申しければ、父かなしく思ひながら、理に折れて、約束して日取してけり。女、日比養ひける蟹に、例の物くはせて云ひけるは、「年比おのれを哀み養なひつるに、今は其日數。いく程あるまじきこそ、あはれなれ。かかる不祥にあひて、蛇に思ひかけられて、其日我は何處へか取られて行かんずらん。又も養はずして止みなん事こそ、いとほしけれ」とて、さめ〲と泣く。人と物かたらん樣に云ひけるを聞き

（一）徒　佛徒のこと。
（二）『法華』持者及『法華經』を常に讀む行者。

あはれなりける發心の因緣なり。漢土に法宗といひけるも、鹿のはらみたる中腹を射やぶるに、子の落ちたるを矢をふくみながら、子をねぶりたるを見て、やがて弓矢を折りすて髮をそりて、（一）徒に入り、（二）『法華』の持者にて、をはり目出さこと。『法華の傳』に見えたり。發心の緣、定まりなきこと也。

四、畜生の靈の事

寛元年中の事にや、洛陽にさはぐ事ありて、坂東の武士、馳せのぼること侍りき。相知りたる武士、索かせたる馬の中に、殊に憑みたる馬に迎ひて、「畜生も心あるものなれば聞け今度自然の事もあらば、汝を憑みて君の御大事に遇ふべし。されば餘の馬よりも物を別に層して飼ふべし。返へす〲不覺すな。たのむぞよ」と云ひて、舍人に云ひ付けて、別に用途を下し給ひけるを、この舍人馬にはかはずして、私に用ひけり。さて京へ上り著きぬ。この舍人、俄に物に狂ひて、口走りて云ふやう。「殿の仰せに汝をたのむなり。自然の大事もあらば不覺すなとて、別に物をそへて下したべは、いかにも御勢にあひ參らせんと思ふに、己が物を取り食ひで、我にはくれねば、力もあらばこそ。御大事にもあはめ憎きやつなり」と

悲し〱」といひて、よに恨めしげなる氣色にて、うち泣き〱するを見て、この子なやみて、程なく失せぬ。弟のありけるが、又なやみける時も、さきの女人すこしも違はず、さきのやうに云ふとみて、その子も失せにけり。當時ある人也。

三、鴛の夢に見ゆる事

中比下野の國に、阿曾沼と云ふ所に、常に殺生をこのみ、ことに鷹つかふ俗ありけり。ある時、鷹狩して歸りさまに、鴛の雄を一つとりて、餌袋に入れて歸りぬ。その夜の夢に、裝束尋常なる女房、姿形よろしきが、恨みふかき氣色にて、さめ〲と打ち泣きて、「いかにうたてく、妾が夫をば殺させ給へる」といふ。「さることこそ候はね」といへば、「たしかに今日めしりて候ふものを」と云ふ。猶かたく論ずれば、

日暮ればさそひしものを阿曾沼の、まこも隱れの獨寢ぞうき。

と打ち詠めて、ぶつ〱とたつを見れば、鴛の雌なり。打ち驚きて、あはれに思ふほどに、朝見れば昨の雄と嘴くひあはせて、雌の死せるありける。是れを見て發心し出家して、やがて遁世の門に入り侍りけるとなん、かたり傳へて侍る。

沙石集卷第八

一、鷹狩する者酬ふ事

下總の國に、或る俗、一生鷹をつかふ。或るとき病患大事にして、苦痛五體をせむ。殊に股を雉の食ふこと堪えがたしと、聲を立てゝ叫ぶ。是れを見るにさることなし。物狂はしきにこそと、看病の者おもふ程に、あまりに術ながりけるとき見れば、股の肉さながら刀にて。切りとりたるが如く見えけり。さておめき叫びて亡せにけり。これていの事、あまた侍れども、一にて足りぬ。また下野にも鶉に食はれたる者のありき。また鷹の夏飼に殺せる者共、病中に圍遶したること侍り。事のてい、同じやうに侍れば記るさず。

二、雉の子を殺し酬ふ事

尾列に若き女房、子にくはせんとて、鶏のかい子をあまた殺してけり。或るとき夢に、女人一人來りて、我子の臥したる枕許にうちゐて、「こは、いとほしきぞ

て是を食はましと思ひて、房主他行のひまに、たなに高くおきたるを取るほどに、髮にも小袖にも、打ちこぼして付けたりけり。日比ほし〳〵と思ひけるまゝに、能く〳〵二三盃くひて、房主の秘藏の水瓶を、雨だりの石に落して打ちわりて、房主の歸りたる時、しく〳〵と泣く。「何事ぞ、けしからずの泣きやうや」と云へば、「あさましき事の候。御水瓶をあやまちに打ちわりて候時に、如何なる御勘當もやと思ひ候ひて、命生きてよしなく覺えて、人の食へば死すと仰せられ候物を、一盃たべ候へども、死なれ候はず、二三盃たべつれども死なれ候はず。髮にも小袖にも付けて死なんとし候へ共、すべて死なれ候はず」と云ひける。慳貪なるはまさる損なり。少しくはせたらば、水瓶はわられじかし。兒の心が賢かりけり。學問の器量も無下にはあらじ。盗人と智者の相は同じと云へり。舍利弗は昔の盗人なり。智慧をもつて盗も能くする也。

沙石集卷第七終

臣のためにも奪はれ、或は火にやけ、水にながれ、求むるもくるしく、守るも煩ひあり。失せぬれば徒然に身心を苦しめて利益なく、身にも用ひずして、俄かに打ちすつるときは、是れがために造りし罪のみ身にそひて、一物も(一)中有の旅に身をたすくる事なし。(二)檀度を行ずれば、永く朽せず、つきせぬ事をしらぬこそ、返へす／＼も愚かなれ。是をあらそひて孝養もせず、子息弟子の中のあしきも財寶の故なり。或る山寺に有德の房主、弟子門徒多くありけり。頓死して處分もせざりけるまゝ、弟子ども、處分論の中あしくて問答し、葬もせず、兩三日に及ぶほどに、臭くなりけるを見かねて、餘所より葬してけり。彼葬したる者かたりき。むげに近き事なり。されば心あらん人は、眞實の福田の藏に積み蓄へて、七分全得の惠業を修すべきなり。世の人の賢きと思はゞ悲し。たゞ善事に費す事をばおこがましき事と、慳貪のものは思ひあひたり。實に後の世のふかき畜へを知らざるこそおこがましく覺ゆれ。能く／＼思ひはからふべし。或る山寺に慳貪なる房主ありて、粘桶を一つもちて、只一人ある小兒に、いさゝかも食せずして、是は人のくへば死ぬ物ぞとて、たゞ一人くひては、よくおき／＼しけるを、此兒いかがし

(一)中有。前出。
(二)檀度。檀那波羅蜜または布施波羅蜜ともいふ。檀とは梵語檀那の略布施と譯す。この布施より生死海を渡る行なるゆゑ度といふ。

ゝろみ〳〵、只一人くひて此子にたび候はず、まして妾には思ひだにより候はず。さりともすしはたび候ひなんと思ひしに、いまだならぬぞ〳〵と申して、一つもたび候はず。是れを以て、よろづ御心得候べし」と申す。夫を召してひきあはするに、妻が申狀にたがはずと申しければ、「不當のものなりけり」とて、境を追越す。「妻丸はいみじく今迄あひつれたり、なさけありけり」とて、女公事ばかりして、男公事は許されて、もとのごとく家に置かれけり。財寶のほしきも、ひとへに妻子のためとこそ、人の心は思へるに、至りて慈なきものは、かゝるにこそ。餘りに心かたきものは、我身に惜む事あり、自施は施とならず、自慳は慳となると云ひて、我身にも惜むは、至て慳貪のふかき故に、十惡の隨一、慳貪の戒を犯するなり。「淫心は火となり、慳心は氷となりて、地獄に入りて苦を受く」と、經に說かれたり。人の心の賢きと云ふは、久しく身をたもち、樂をも受け、財をよくをさめ、永く失せぬはからひをこそすべきに、慳貪なるものは、人にもあたへず、善根にもし入れず、三寶の福田、父母師長の恩田、貧病乞丐の悲田にも施さずして、たゞかたく藏にをさめ、ふかく篋に封ずれども、盜賊の難もあり。王

(一)福田、恩田、悲田。前出。

(一)逆罪。恩に逆ふ罪。五逆罪あり。前出。

りに心うかりければ、やがて家をつき出で、行くを、夫逃がさじとす。はては地頭に訴ふるに、事の子細きゝて、(一)逆罪の者にこそとて、境を追ひこして、妻はなさけある者なりとて、その家敷たびて、公事なんども許されけり。近きほどの事なり。返へす〳〵も不思議の事にこそ。罪障のほどこそ思ひやらるれ。

一六、慳貪者の事

奥州に百姓ありけり。慳貪にして、妻子にもなさけなかりければ、妻にげ〳〵するを、たび〳〵とらへてぞおきける。ある時五六歳なる子を懐きて、地頭のもとにゆきて申しけるは、「夫にて候もの、餘りになさけなく慳貪に候ゆゑに、絶え忍びてあひ添ふべき心地も候はず。御下知を蒙りて離れ候はゞ然るべく候ひなん」と申す。地頭、「夫こそ妻をさるならひなれ、妻として夫を去る事何なる子細ぞ」と尋ぬるに、「餘りになさけなく候事、さのみは申し盡しがたく候。一事を申さば餘の事は御景迹あるべし。過ぎ候ひし比、山川に罷りて、大なる鮎を三十ばかり取りて歸りて、少々は煮てくひ候。殘りは、すしにしておき候。此の子たゞ一人候が、父よ魚くはんと申して、とりつきてなき候に、やれ未だにゑぬぞとて、こ

美州遠山と云ふ所の百姓が妻、夢に見けるは、亡せにし男來りて云はく、「明日地頭殿の御狩に、我命たすかりがたかるべし。此の家に逃げ入る事あらば、何にもしてかくしてたべ、生々世々に嬉しと思はん。我れ固より片目の盲ひたりしが、當時もかはらぬを、しるしと思ひたまへ」とて、物思ひたるすがたにて、泣く〳〵語ると見て、あやしくあはれに思ふほどに、次の日、地頭鷹狩しけるに、雉の雄家の内へとび入りぬ。夫は他行して、妻ばかりありけるが、夢に見えつるは、この事にやと思ひ合はせて、此雉をとりて、釜の中にかくして、蓋うちしておきぬ。狩人とめ入りて見けれども、釜の中をば思ひもよらずして、求めかねて歸りぬ。さて夫其夜歸りぬ。妻しか〳〵と委しく語る。さて雉をとり出して見れば、夢にたがはず片目しひたり。夫かきなづるに、恐れたる氣色もなし。哀なることかなとて、此妻も涙を流しけり。雉も涙をながして、よく飼ひたる鳥の如く見えたり。さて夫申しけるは、「げにも父にておはしけり。生きておはせん時も、目の片端くおはせしが、たがはぬ事のあれはさよ。親子の契なれば、父の慈悲いとをしく思ひて、子にくはれればやとてこそ、おはしつらめ」と云ひて、ねぢ殺してけり。此妻あま

（一）報命。果報として定まれる壽命。

りともなく、犬一匹來りて、打てとも去らず、主が夢に見けるは、この犬の物を負ひたるを、取りかへさむとて來れり。今米一斗あれば、それを食ひ盡さゞらん程は、去るまじきなりと云ふと見て、不思議と思ひて、心見に米を一斗別に置きて、この犬に少しづゝ食はせければ、米つきて後、何地ともなく失せにき。さればみな然るべき因縁なり。人をも厭ふべからず。昔の物語にも、海人の親子三人ありけるが、毎日に魚三つつられけり。父母思ひけるは、子なくば二人して三つの魚くひなましとて、子を追ひ出す。其後は二つつられける。生分さだまれるにや。

漢土に法慶といふ人、釋迦の像を造立の願ありけるが、惱むことありて、死して閻王の所へ至る。王この願を感じて、人間へ返すべしと冥官に仰せけるに、「(一)報命は願の故にのび候べし。食物つきて候」と申すに、など何にても食物なからんとて之を勸へしむるに、荷葉ばかり食ふにあたるよし申す。さて蘇生してよろづの物を食するに吐きかへす。荷葉ばかり氣味よろしく覺えて、たゞこればかり食ひて、三年存して佛造り終りぬと云へり。傳の文也。

一五、前生の親殺す事

さるほどに或る俗來りて、この犬の子をほしがりければ、何にても一つ選りて取れと云ふに、「やせて候へども、この犬はけなりげに見候へば、いとほしく候」とて、にくまれ子を取る」。このとき人々夜の夢にたがはぬ事を思ひ合せて、「某と云ふ遊女ありしや」と問へば、「さる君候ひき、やがて某が伯父にて候ひしが、子夫にて候ひき」と云ふ。「さてかの君は、子夫猶ありけるにや」と問へば、「伯父がほか四人候ひしを、伯父にて候ひし者いきどほり、そねみ申しゝかども、共に通ひき」と云ふ。悉く夢にたがはざりければ、この俗にしか〳〵と申しける時、「さては哀なることにて侍るもの哉。かの伯父、我をはぐゝみ侍りし、恩をも報い候ふべし。さて見候もいとをしく候ひつる。其の故にこそ」とて、いだきて去りぬ。この事、近比の不思議なり。かの山寺の夢見たるもの、當時もありと聞こゆ。先業の報い始めて驚くべきにあらねども、正しくかやうの事を聞くには、彌因果の理疑なし。されば何なる事ありとも、只一世の事にはあらじと知りて、憎まれんをも、人の過と思ふべからず。只昔の業因縁と思ふべし。なに事も思ひほどきて、たゞ妄念なく罪障なくして、舊業を消し、新しき罪をつゝしむべし。ある人の許に、何[illegible]よ

としては、己が賣られん事を思ふべかりけるにや。

一四、前業酬う事

或る山寺の僧坊に、犬あり。五の子を生ず此の犬五つの子の中に一つを惡みて、乳を飲ませずしていがみ食ひければ、坊中の人、此の母をうち憎みけるほどに、坊主、同宿、兒共、あまた一夜の中に夢に見けるは、「我身はさきの生に某と申しゝ遊女にて侍るが、五人の子夫をもちて候ひしが、四人は事にふれて情ありて振舞しかば志も互に淺からず。一人は物にも覺えずして、我を煩はす事のみ侍りしかば、憎く思ひながら過ぎぬ。今この五の子は、彼の五人の夫なり。四人は昔の情ふかき故に乳を飲むも厭ふしく、煩はしくもなし。一人は昔も心つきなく、憎くのみ思ひし故に、乳を飲むもわびしく、憎くゝ候まゝに如何に人々憎くませ給へども、かゝる心にて候。力なき事なり。かの憎かりし夫が甥の、明日己の子をば取りてまかるべし。かくも申すまじけれども、然るべき昔の因緣にてありけりと思食ば、人々の御不審もあらじとて、かく申す」とぞ云ひける。次の朝、人々このこと我もかく見たり〳〵と云ふ。少しもたがはず。

の頸を切りて、彼れが恨み憤り申しける思ひの報いにや、次の年、同月同日同時に、切られけるとこそ申し侍れ。是れ程の事は、申すに及ばす。報うべき道理をば、ふかく信ずべし。やがて報はねば、遂に過なかるべしなんど思ふべからず。前世の罪をも懺悔すべし。今更また造ることなかれ。或る修行者、法師二人、同じ齢すがた大方似たりけるが、道に行き連れあひ語らひて修行しけるに、或里にとまりぬ。一人の法師夜ふけて、ひそかに家主に云ひけるは、「これに候ふ法師は由緒ありて召しつかふべき者にて候。時に賣り候ふべし。かはせ給へ」と約束して、既にあたひさだめつ。此の一人の法師、此事を壁をへだてゝ聞いてけり。不思議の事なりと思ひて、此の法師が寢入りたる隙を伺うて、内に入りて、夜部申し候ひし價給はり候はん。いそがしく候。此の法師は是れにねられ候也」とて、價とりて、うき出でゝ去りぬ。此の法師、目さめて見れば、一人の法師なし。さて支度相違してかへりて賣られて攻め使はれけり。よしなく人を狂惑せんとして、我身を煩はす因果の道理たがはず。此れ古人の云はく、「人をそしりては己が過を思ひ、人をあやぶめては、己が落ちん事をおもへ」といへり。誠なる哉、人を賣らん

らん、在家出家、爭か彼の教誡にそむかん、謹しむべし〳〵

一三、僻事は則ち酬う事

或俗士の下人、主の親しき人の下人の、乘りよき馬を持ちたるを、ほしく思ひけるまゝに、同禮を語らひて、野中にて夜陰に馬より引き落として繩をつく。「これは何に」と云へば、「主の仰せなり、御勘當にて頸切れと云ふことなり」と云ふ。「僻事にこそ、身にあやまちなき物を」といへども、やがて切るべきにて、最後の十念すゝめければ、念佛二三十遍申しける時頸を打つ。打ちふせて切りおほせつと思ひて、彼の馬とりて返りぬ。この男うち臥せられて絶入したりけるが、息あがりて、頭をさぐれば項きをば打ちかきたれども、別の事なし、繩つきながら主の許へ走り行きて、しか〳〵と申しければ、やがて親しきあたりなれば、件の子細申しやる。夜の中に二人のやつばら、搦めて問ふに、少しものびず。「別の子細あるまじ、件の男を以て、かの野の中にて切らすべし」とて、二人一度に切られけり。夜前の惡行、次の朝に報いてけり。ことに因果の報いたがはず、鎌倉にも文永年中、頸をはねられしが、武士の中に一人去年二月十八日申の時に、過なき者

倶生神といふ。幡の上に人の頭あるをば、人頭幢とも擅茶幢ともいふ。これは善惡の業をみて、閻王に奏する冥衆也。淨頗梨の鏡は第八識に現ぜる相といへり。內には種々器界、根身を含藏し、外には三業の善惡の影像、塵ばかりもかくれなし。爭か恐れ謹まざらんや。經の中に說きていはく、地獄にして殺生の報を受けて、或は皮をはがし、肉をさかれ、筋をたゝれ、骨をくだかる、或は燒棚にあぶられ、鼎に煮るゝ時、聲を擧げて叫けぶ、その時獄卒かいはく、「汝をろかなり。狩漁せし時は、聲をあげて悅びさけびて、今かの果を受る時、なんぞ喜ばすして悲しむや。彼時悅ばゞ今も悅ぶべし。今悲しむべくは、彼時も悲しむべし。因果必ずたがはぬ事、影の形に隨ひ、響の聲に應ずるに似たり」と云ふなり。心あるらん人、つゝしむべし〳〵。殺生をするも、身の安樂のためなり、當來も我身なり、一生の身をたすけんとて、多生の苦をおそれざる愚癡のいたり、何事か是れにしかん。身思はん人罪障をつゝしみ、生死をはなれ、淨土にむまれて、昔、殺害せし衆生をも導くべし。多生の恩所なり。同躰の含識なり。惱し殺す事なかれ、眞如平等なり、隔て思ふべからず。佛勅懇懃なり、唯か忽緒せにせん。佛子の數に入

一度に頸を召せと云ひけれども、三日が間に自然となぶり殺しつ。この男、「口惜く候事かな、下郎の盜は常の事なり。又殺し給はゞ、一度にこそ頸をも召さめ、かくなぶり給ふ心うさ、此れはくやしくおはせんずる者を」と、憤り深く云ひて死にけり。折節主の親に別れたる中陰なりければ、許すべきよし云ひけれども、承はりぬと云ひながら殺害してけり。主このこと聞きて、やがて追ひ出しつ。緣に付けて、尾州に下向して、後病付きて、一向に遍身を物のさすと云ひて、あら〳〵とのみ叫びて、遂に惱みて亡せにき。惡業はおそるべき者なり。生を殺せば必らず、かれ我を殺すべき報あり。人間には人の訴詔するに付いて、人を殺せるのみこそ其沙汰あれ。それすら訴人なければ沙汰なし。畜類の訴なければ山野の蹄、江海の鱗、心にまかせて殺し食す。かれは六道の惣の沙汰所、炎魔王界にて倶生神の薄、淨頗梨の鏡に引き向ひて、斷つて地獄鬼畜の久しき苦を受くべきことを知らずして、只いま訴人のなきまゝに、殺生を恐れぬこそ、返へす〳〵愚かなれ。經にいはく、人生る始より二人の神左右の肩にあり。一をば同生といふ、一をば同名といふ。人は神をみず。神は人を見る。夜も晝も善惡を記す。これを

懐妊したる腹を、熨しければ、ふくれひわれて、肉ところ〳〵されて見えけり。僅に息ばかり通ひける時、母の許へ返しつかはしぬ。車より抱だきおろしはてければ、やがて息絶えにけり。母これを見て、心のあられぬまゝに、やがて走り出でゝ、もろ〳〵の社に詣でゝ、をめきさけび、たゝきをどりて、我が讎とりてたべとぞ云ひける。餘の思ひに頓て思ひ死に死にけり。その靈にて幾程なく、彼の北の方病つきて、身ふくれはれ、苦痛して亡せ給ひぬ。代々その靈絶えぬとぞ承る。しかるべき人の御事にや。書きつけ侍るも恐れあれ共、くはしく子細しらぬ身なれば、中々その過あるべからず。たゞ人に因果の道理を知らしめんためなり。人のとがを記さんには非らず。されば人を損ずるは我を損ずると知らずして自他の分別かたく愛恚の念慮、ふかき習は、返へす〳〵愚かに迷へる心なるべし。

一一、人を殺害し酬う事

洛陽に或る武士の郎等下人の、手鋒を盗めるをとらへて、柱にしばり付けて、「己がほしがる物とらせん」とて、手鋒のさきにて身をあまねくさしけり。たゞ

たり。是を取りて串に指して、道の傍にたてゝ家に返りて、魚さばくりける處に串にさゝれながら蛇來れり。やがて打殺す。殺せば又來り〱。さきに殺されたるもありながら、重ねて來る。いくらと云ふ數をしらず。はては身の毛いよだち、心地なやみて、終て病み苦みけり。詮なき事は何にもすまじきものなり。か様の僻事則ち酬う事のなきを以て、因果を信ぜざるは、返す〱愚かなり。惡業を造りて果を感ずるに、三の様あり。一に現報といふは、やがて此の生に感ず、さき蛇の如し。いたりて重きゆゑ、二に生報と云ふは、次の生に感ず、つぎに重きゆゑ。三に後報といふは、三生四生の量、無量の生を經ても朽ちずして、遂に其の報を受く。あまりに重き業なんどは、やがて今生に感ず。かろきは久しくして感ずる也。人の思ひも切に、惱も深きは、やがて今生に感じ、代々の靈とまでなる也恐るべし〱。

一一、嫉妬のゆゑに人を損じ酬う事

洛陽にある卿相の思ひ給ひける人を、北方そねみて、殿の仰せとて、車を遣りて迎ひよせて、一間なる所に押し籠めて、女房共に仰せて、熨斗に火を入れて、

しく道理を申しのべて、災をのがれけるこそ、賢く覺ゆれ。道理をも申し述べずして、兎角くふせがましかば、ゆゝしき災なるべし。然れば物の命を左右なく害する事、よく〳〵謹しむべきものなり。

一〇、蛇を害し頓死する事

下野の國或所の路の傍に、大なる木のうつろより大蛇の頭をさし出したるを見て、或る俗、「何を見るぞ、にくきものかな」とて、矢をぬきいだして、頸をつよく木に射つけて、打ち捨てゝ行く程に、大きなる沼のほとりを打ちめぐりて過ぎけるに、水の上におよぐ者あり。見れば大蛇の一丈ばかりなるが、頸に矢たちて水の上をおよぎて來る。又待ちうけて射殺しつ。さて家へ歸りはてぬ。やがて病みくるひ、種々の事ども云ひて、狂に死に死にけり。詮なき事して今生もともに亡ぼし、來世も苦果をこそ受くらめ。某の社とかやの神にてなんおはしけるとぞ申し侍りし。所の名をわすれ侍り。同國に沼あり、岸の下の穴の中より、魚多く出で、いくらと云ふ數を知らず。ある男よく〳〵是れを入て見れば、小き瓶子の中より魚いづ。不思議の思ひをなす程に、瓶子の中より小蛇の一尺ばかりなる一つ出で

かり具して來る。みな頭をあげ舌をうごかす。恐ろしなんど云ふばかりなし。女共は肝魂もなき躰なり。今は乞ふにこそと思ひて、主申しけるは、「各何として、かく聚りたまへるぞ。大方、存知しがたく侍り。一日女童部が晝寢したりしを、蛇の犯したる事侍りき。まのあたり見つけて侍りしかば、宿世のかたきなる上は、命をたつべかりしを、慈悲を以て助けて、後にかゝる事あらば命を絶たつべしとて、杖にてすこし打ちなやして捨てたること侍りき。此ことを各きゝ給ひて、某が僻事とばし思ひておはしたるか、人畜異なりと雖ども、物の道理はよもかはり侍べらじ。妻を犯かされて耻がましき事にあひ、なさけありて命を助すけながら、猶ひが事になりて、よこさまに損ぜられん事こそ、無慚次第にて侍れ。此事冥衆三寳も知見をたれ、天神地祇、梵王帝釋、四大天王、日月星宿も、御照覽あるべし。一事も虚誕なし」と、事うるはしくかひつくろひて、人に向ひて申す様に云ひければ、大蛇より始めて頭を一度にさげて、大蛇のそばに居たる、一日の件の蛇と覺しきを一嚙かみて引き返る。是れを見てあらゆる蛇、一口つゞ嚙みて、みそ〳〵とかみなして、山の方へ皆かくれて後、すべて別事なかりけり。さか〳〵

りき。正しく出でける事は、聞かざりき。人のためはら黒きはやがて我身に追ひ侍るにこそ。人をあやぶめては、己がおちん事を思へといへり。因果のことはり、たがふべからず。

九、蛇の人の妻犯す事

中比、遠江の國の或山里に、所の政所なる俗ありけり。さが〱しき者なりけり。他行の隙に、妻ひる寢して久しく驚かず。夫歸りて閨へ入て見れば、五六尺ばかりなる蛇まとはりて、口さし付けて臥したり。杖を用ゐて打ちはなちて申しけるは、「親の敵、宿世の敵と云ひつれば、子細に及ばす殺害すべきなれども、今度ばかりは許す、今より以後かゝるひが事あらば、命をたつべし」と云ひて、杖にて少し打ちなやして、山の方へすてつ。其後五六日ありて、家内の男女驚きさわぐ。「何事ぞ」と問へば、「蛇のおびただしく集り候」と云ふ。主「な、さわぎそ」とて、直垂き、緋袴さして出居にゐたり。一二尺の蛇頭をならべて、間もなく四方をかこみて、庭のきはまで來る。さしまさりたる蛇つゞきて、幾千萬と云ふ數を知らず。はてには一丈二三丈ばかりなる蛇、左右に五六尺ばかりなる蛇、十ば

八、繼女の蛇欲に合ふ事

下總の國に、或者の妻、十二三ばかりなる繼女を、大なる沼の畔へ具して往きて、此沼の主に申す。「この女を參せて婿にし參らせん」と度々云ひけり。ある時世間すさまじく風吹き空曇れる時、また例のやうに云ひけり。此の女殊に恐ろしく身の毛いよだつ。沼の水浪たち、風あらくして見えければ、急ぎ家へ歸るに、物の追ふ心地しければ、いよ〳〵怖しなんと云ふ計なし、さて父にとりつきて、かゝる事なんありつると、日比の事まで語る。さるほどに、母も内へ逃げ入りぬ。其後大きなる蛇きたりて、頸をあげ舌を動して、此女を見る、父下郎なれどもさか〳〵しき者にて、蛇に向ひて、「此女は我女なり。母は繼母なり。我が許しなくては爭かとるべき。母が詞によるべからず。妻は夫に從ふ事なれば、母をば心にまかす取るべし」といふ時、蛇、女を打ち捨てゝ、母が方へはい行きぬ。その時、父この女をかい具して逃げぬ、此蛇、母にまとひつきて、物くるはしくなりて、「旣に聞き、(文永年中夏の比の事と沙汰しき。)來月三日、大雨大風ふきてあれたらん時出づべし」と申しあひしが實に彼日おびたゞしくあれて、風雨はげしく侍

骨さながら小蛇になりたるもあり、なからばかり成りかゝりたるもあり。此事はかの父母、或僧に孝養してたべとて、ありのまゝに語りけるとて、たしかに聞きて語り侍りき。近き事也。名も承りしかども、はゞかりありて記るさず。此物語は多く當世の事を記するゆゑに、其所其名をはゞかりて申さず。不定の故にあらず。凡そ一切の萬物は、一心の變ずるいはれ、始めて驚くべからずと雖ども、此事ちかき不思議なれば、まめやかに愛欲の過思ひとけば、いと罪ふかくこそ覺え侍れ。されば執著愛念ほどに恐るべき事なし。生死の久しく流轉のやみがたき、只この愛欲の所致なり。『肇論』にいはく、「生死に流轉すること、著欲による。佛神にも祈念し、聖教の對治をたづねて、此の愛心をたち、此の情欲をやめて、眞實に解脱の門に入り、自性清淨の體を見るべし。愛執つきざれば欲網を出でず。無始の輪廻、多生の流轉、たゞ此事を本とす。何の國とかや、或る尼公、女を我夫にあはせて、我身は別の家に居て、女にかゝりて侍るが、指の蛇になりたるを、つゝみかくして當時ありと云へり。昔もかゝる事、『發心集』に見えたり。かれは懺悔して念佛を申しけるまゝに、元の如くなれりと云へり。

るめに遇はせ給へ」と祈りけり。山臥また垢離かきて、數珠おしすりて、「魔界の所爲にやかゝる惡緣にあひて、不覺を仕りぬる。南無惡魔降伏大聖不動明王、今はさてあれと制せさせ給へ」と云ひて、二人ゆきわかれにけり。是れも男子は愛執のうすき習ひなるべし。

七、愛執によりて蛇となる事

鎌倉に或人の女、若宮の僧坊の兒を戀ひて病になりぬ。母にかくと告げ知らせければ、彼の兒が父母も知人なりけるまゝに、此由申し合せて時々兒をかよはしけれども、志もなかりけるにや、疎くなり行くほどに、遂に思ひ死に死にぬ。父母悲みて、彼の骨を善光寺へ送らんとて、箱に入れておきてけり。其後、此兒また病付て大事になりて、物狂なりければ、一間なる所に押し込めておく。人と物かたる聲しけるを怪みて、父母ものゝ隙より見るに、大なる蛇と向ひて、ものを云ひけるなるべし。さて終に亡せにければ、入棺して、若宮の西の山にて葬するに、棺の中に大なる蛇ありて、兒とまとはりたり。やがて蛇と共に葬してけり。かの父母、女が骨を善光寺へ送る次、取り分けて鎌倉の或寺へ送らんとして見けるに、

「さればこそしてけり、我が摺粉には鹽を加へたるに、是はしほがなき」とて、ひき伏せてしばりけり。心深さ餘りにうとましく覺えて頓て打ちすてゝ鎌倉へ下りにけり。近き事なり。舊き物語に、或る男、他行の時、まをとこもてる妻を、しるしつけんとて、かくれたる所に、牛をかきてけり。さるほどに、まめ男の來るに、かゝる事なんありと語りければ、「我も繪はかけば、かくべし」とて、さらば能く〳〵みて、もとのごとくもかゝで、實の男は伏せる牛をかけるに、まをとこは、立てる牛をかきてけり。さて夫歸りて見て、「さればこそ、まをとこの所爲にこそ。我がかける牛は伏せる牛なるに、是はたてる牛なり」と叱かりければ、「あはれやみ給へ、伏せる牛は一生伏せるか」と云ひければ、「さもあるらん」とて許しつ。男の心は淺く大様なるならひにや。おこがましきかたもあれども、情量の淺きかたは罪もあさくや。池田の女人には事のほかに似ざりけり。或山の中に山臥と巫女と行きあひて物語りしけるが、人もなき山中にて、凡夫のならひなれば、愛欲の心起りて、この巫女におちぬ。この巫女山澤の水にて、(二)垢離かきて、つゞみとう〳〵とうち、數珠おしすりて、「熊野、白山、三十八所、猶もかゝ

(一)垢離。身躰をきよめること。

いて衣の蚤とらむとて炭櫃をとび越えけるほどにすべらかして、炭櫃に、どうどをとしつ。男これを見て目見のべ口をほひしてのどかなる氣色にて「あらいしの蚤の大さや」と云ひてなにともせざりければ、勢は大なれども小蚤の如くも飛ばずして裸體にてはひ逃げにけり。あまりにきもすぎてしてけるにこそ夫の心おだしかりけり。

遠江國池田の邊に庄官ありけり。彼の妻きはめたる嫉妬心の者にて男をとりつめてあからさまにもさし出さず。所の地頭代鎌倉より上りて、池田の宿にて遊びけるに、見參のため宿へ行かんとするを例のゆるさず。地頭代知音なりければ、「いかゞ見參せざらん、許せ」といふに、「さらば、しるしをつけん」とて、かくれたる所に摺粉をぬりてけり。さて宿へゆきぬ。地頭みな子細しりて、「いみじく女房に許されておはしたり、遊女よびてあそび給へ」と云ふに、「人にもにぬ物にて、むつかしく候。しかも符をつけられて候」と云ふを、しか〳〵と語りければ、冠者原にみせて、元の如くぬるべしとて、遊びて後、もとの樣にたがへず、摺粉をぬりて、家へ歸りぬ。妻、「いで〳〵見ん」とて、摺粉をこそげてなめてみて、

色ふかくは自らしもあるべきにや。

信濃の國に或る人の妻のもとにまめ夫のかよふよし夫聞きて、天井の上にて伺ひけるに例のまめ夫來りて物語したはふれけるを、天井にて見るほどにあやまちて落ちぬ。腰打ち損じ絶入しければま男是れをかへて看病し、兎角あつかひ助けてけり。心ざま互におだしかりければ許してけり。

洛陽にも天文博士が妻を、朝日の阿闍梨と云ふ僧かよひて住みけり。ある時、夫他行の隙と思ひて打ちとけて居たる所に夫俄に來る。逃ぐべき方無うして西の方の遣戸をあけて逃げゝるを見つけてかくぞ云ひける。

あやしくも西に朝日の出づるかな、

阿闍梨とりもあへず、

天文博士いかゞ見るらん。

さて呼びとゞめてさかもり連歌などして許してける。

或人の妻まをとこと寢たりける時夫、俄に閨の內へ入らんとす。如何にして逃がさんと思ひて衣の蚤とる由にて逃がさじとてまをとこの裸體なるを蓆にかい卷

よきは我が心のよきなり。あた見恨めしきは我が身のとがなり。縦ひ今生にことなるとがなきに人のにくみあだむも先世の我が過なり。自ら人に愛せらるゝも先世の我がなさけなるべし。されば人を恨むる事なくして、我が身の過去今生の業因、縁心からと思ひて怒り恨むべからず。世間の習、多くは嫉妬の心ふかくして、怒りはらだち推し疑ひて人をいましめ失なひ、色を損じ目をいからかし、語をはげしくす。かゝるにつけては彌うとましく覺えて、鬼神の心地こそすれ。爭かいとをしくなつかしからむ。或は靈となり或は蛇となる。返す〴〵もよしなくこそ。されば彼の昔の人の心ある跡を學ばゞ、現生には敬愛の徳を施し當來には毒蛇の苦をまぬかるべし。或る人元の婦をも家におきながら、また婦を迎へて住みけり。今の妻と一所に居てかき一重へだてゝ元の妻ありけるに、秋の夜鹿の鳴く聲聞えければ、夫「聞き給ふか」と元の妻に云ひければ、返事に、

　我も鹿なきてぞ人に戀ひられし、今こそよそに聲ばかりきけ。

と云ひければ、わりなく覺えて今の妻を送りて又還りあひにけり。嫉妬の心ふかくして情なくば、かくは非じかし。たゞ嫉み妬まず仇をむすばずして、まめやかに

なりけり。心ざしや薄かりけん事の序を求めて、鎌倉へ送らばやと思ひて「この前栽の鞠のかゝりの四本の木を一首によみ給へ。ならずば送りたてまつるべし」と、男に云はれて、

櫻さくほどはのきばの梅の花、もみぢまつこそ久しかりけれ。

これを感じて送る事、思ひ留まりにけり。人の心はやさしく、いろあるべし。當時ある人なり。

或人、妻を送りけるが、雨のふりければ、色代に、「けふは雨ふれば、留まり給へ」と云ふを既に出たちて出でつゝ、かくこそ詠じける。

降らばふれ降らずば降らず降らずとて、濡れで行くべき袖ならばこそ。

餘りにあはれにいとをしく覺えて、やがて留めて死の別れになりにけり。和歌の徳に人の心を和ぐると云へり。誠なるかな、西施が江を愛し嫫母は鏡を嫌ふと云ひて、わが形ちよかりし西施は江に影のうつるを見て、これを愛しき。我顏みにくかりし嫫母は鏡にうつるかげ見にくきまゝに鏡をきらひき。是れ江のよきに非ずわが形ちのよきなり。鏡のわろきにあらずわが顏の見にくきなり。然れば人の

なき心ばへにこそ。

遠江の國にも、或人の女房去られて既に馬に乗りて出でけるを「人の妻の去らるゝ時は、家の中の物、心に任せてとる習にて侍るなれば、何物もとり給へ」と夫申しける時、「殿ほどの大事の人を打ち捨てゝ行く身の何物かほしかるべきとてうち笑ふてにくいけもなく云ひける氣色、まめやかにいとをしく覺えて、やがて止めて、死の別れになりにけり、人に憎まるゝも思はるゝも、先世の事と云ひながら只心からにてよるべし。

常陸の國、或所の地頭、京の名人歌道人に知られたる女房を語ひて年久しくあひ住みけるが、鎌倉へをくりて後、年月へてさすが昔の名殘のありけるにや、衣小袖など色々に調へて送りたりける返事、別の事はなくて、

〽　つらかりし涙に袖は朽ちはてぬ、この嬉しさをなにゝつゝまん。

是れを見て、さめ／＼とうち泣きて、「あらいとおし、その御前とく／＼むかへよ」とて呼び下して死の別れとなりにけり。更に近くはまゝあるべし。

同國に、或人の女房、鎌倉の官女にてありけり。歌の道も心得てやさしき女房

六、嫉妬の心なき人の事

或る殿上人、田舍下りの序に、遊女を相具して上られけるが、使をさきだてゝ「人を具して上り侍るなり、むつかしくこそ思食さんずらめ、御心なく出でさせ給へ」と女房の許へ情なく申されけり。女房すこしも恨みたる氣色なくして、殿の人を具して上らせ給ふなるに、御設けせよとて、こま〳〵と下知して、見ぐるしきものばかり、とりしたゝめて、よろづあるべかしく用意して、我身ばかりの出で給ひぬ。遊女この事を見きゝて、おほきに恐れて殿に申しけるは、「御前の御ふるまひありがたき御心はんにておはしますよし承り、且事の樣見まゐらせ候に、如何かゝる御栖居の所には候べき。身の冥加もよも候はじ。たゞ御前をよびまゐらせて、元のごとくにて、此身は別の所に候て、時々めされんは、しかるべく侍りなん、さらでは、一日も爭か、かくて侍るべき」とおびたゞしく誓狀しければ、殿も理りに折れて、北方の情もわりなく覺えて、使をやりて北方を呼びたてまつる。すべて返事もなかりければ、たび〳〵とかく申されければ歸り給ひぬ、遊女も心あるものにて、互に遊びたはふれて、へだてなき事にてぞありける。ためし少

文。古徳いへり「毫釐も念を繫くれば三途の業因、瞥瞥も情生ずれば。萬劫の羈鏁」文。經にいはく「當處出生、當業輪轉」と、然れば、一念の妄心無窮の生死の根本なり。此の一念佛性を奪ふ賊なり。また寶藏の開く媒なり。佛性靈光は一精明なり。六塵の緣にへだてらる。是れを生死と云ふ。眼にあるを見といひ、耳にあるを聞といひ。鼻と舌と身にあるを覺といひ、意にあるを知と云ふ。此の見聞覺知、六塵に著せずして、現量無分別なる、これ本分の靈光、自性の寶藏なり。六境を緣し、執著するを失ふといふ。まことに失すべきにはあらねども知らず用ひず、是れを失ふと云ふ。されば道人は此の心をわきまへて、六境をとらずは自性の寶全かるべし。わづかにも六塵をとらば寶を失ふなり。無盡の莊嚴、恒沙の萬德を、幻夢の塵境に奪はるはゝこと、彼のつゝがなき齒をとらせけん、俗の心にかはらじ。今生一期の身の上の假なる齒をとられたるよりも、當來多劫の心中の誠の財失はん事、遙かにおこがましき心なるべし。よく〱此の心を思ひしりて自己の寶藏を開き、本來の法財を用ひ給はゞ、此の物語書き置き侍るしるしなるべし。

法をつとめて、我が身の滅罪にもあて、檀那の福業を祈るべし。然らば自他の利益あるべし。若したゞ利養のみ思ひて、その行業ことなく行ずと云へども、なをざりにつとめて供料をのみ用ひば、當時は得分に似たりとも、施主の福をうしなひ、我が信施消せずして、當來に苦を受けつくのふべし。實には損なる事、かの歯とらせたるが如し。また『觀音品』に商人重寶をつゝみて、險路をすぐるに怨賊にあふ。商主、餘の商人を敎へて、一心に觀音を念ぜしめて、賊の難をまぬかると說けり。世間の利益は文のごとし。(一)觀心の釋をいはゞ、一切衆生の心中に、佛性の寶をもてり。然るに(二)第八識心王は商主の如し。(三)心所は商人の如し。(四)六塵は賊の如し、(五)六根若し(六)六境に著すれば、自性の寶をうばゝる。眼は色の賊のために、眼の自性の寶を奪はれ、乃至意は法の賊のために、意の自性の寶を奪はる。もし心の外に法をみずめに一心をなして眼色をとらす。意法に著せざる時は犯す事なし。一心稱名と云ふは、此のこゝろなり、能所の意なく、執著の思ひ止む時、當所に解脫す。わづかにも六塵を緣する是れ流轉なり。怨賊に犯さるゝ義なるべし。老子いはく、「合抱の木、毫末より生じ、九層の臺は累土より起る」

(一)觀心の釋。自已の心念を觀きはめるといふ方面から解釋すること。
(二)第八識心王。心の根本をいふ。阿賴耶識のごと。
(三)心所。心王に附屬せる種々の精神作用のこと。
(四)六塵。前出。
(五)六根。前出。
(六)六境。六塵に同じ。

得る事はすくなく、罪を得る事はおほし。然れば未來に樂はすくなく、苦は多かるべきなり。是れは當時は得分と思ひあへども、大なる損なり。齒とらせたる損よりも猶おこがましき事にや。當來には惡趣の苦をうけ、まれに人間に生れても病苦にまとはれ、苦しみあるべし。天竺に戒賢論師といひしは、(一)付法藏の(二)三藏、やんごとなき智者にて、玄弉三藏の師なり、重病にしづみて苦痛忍びがたかりければ、自害せんと思ひたちけるを、夢に聖人來りて告げていはく、「汝自害する事おろかなり。先世に國主として民をなやましたりし報なり、たとひ生をかふるとも、苦は遁れがたし。今三年ありて償ひの終るべし」と。はたして、三年と云ふに病癒えにけり、凡そ出家としては衆生を惱亂する事を痛み、施物を用ふる事を恐れて、小欲知足にして、釋子風儀をまなぶべきに、末代は如說の行儀すたれ、眞實の道念なきまゝに、清淨の佛法を名利の心にけがし、解脫の行儀を度世の計とすること悲いかな。王臣、寺舍を建立して料庄供料等をあてをくこと佛事をたすけ福業を得んと思ふ志なく、しかれば諸寺の僧侶は信心の(三)檀那の善願を助けて、この資緣をもつて、我が學する所の佛法を行じ、施主の崇むる所の

(一)付法藏。法脈を受け繼ぐこと。

(二)三藏。經藏、律藏、論藏に詳しく通ぜざる僧のこと。

(三)檀那。施主と譯する梵語なり。

ほどの房舍ならば事たりぬべし。近代は、美麗につくること佛意にかなはじかし。在家の有德の檀那なんどの營まんをも、信施の重き事をいたむべきに、佛子として道業をばむねとせずして、造營功夫を入るゝ、道人の儀にあたはずこそ。昔の禪師は大なる寺に、五たび長老する事ありしかども、椽一をも動かさずと云へり。寺は佛法にあらず。たゞ生身をたすくる緣なり、道これ佛法なり。心に深くそむべし。修行をたすくる程の緣あらば足りぬべし。その外の莊嚴あながちに要に非ず。『像法決疑經』に云はく、「我が滅後(一)像法の時は、堂塔佛像多くして道のほとりに滿ちて、人恭敬の心あるべからず。是れ我が法の滅すべき相」と說かれたり。近代の作法、佛の(二)懸記にたがはずこそ。佛弟子なほ佛意にそむく。まして在家の俗士、堂塔を建立する多くは名聞のため、或は家のかざりのため、或は是れによりて利を得るもあり、或は酒宴の座席、詩歌の會所として、無禮の事共おほし。又は世間の雜具をおき、又は客人の寄宿にあつ、滅罪の行儀すくなく、生善の淨業まれなり。然も造營の間に人を惱し、所をわづらはし、非分の公役なんどを行ふに貧しき民は妻子をうり家財をつくし、憂悲苦惱すること聞ゆ。かゝれば福を

(一)像法。前出

(二)懸記。豫言のこと

定を修するものありけり。心を靜めて修せんとするに、林に鳥集りてかまびすしかりければ、佛に此事をなげき申すに「その鳥に羽一はづゝ乞へ」とのたまふ。さて歸りて乞ひければ、一羽づゝ食ひぬきてとらす。又次の日こひける時、鳥共いはく、「我身は羽をもちてこそ空をかけりて食をも求め、命をも助くるに、かく日々に乞はれんには皆うせてん、此林にすめばこそ、かゝる事もあれ」とて飛び去りぬ。また恒伽河の邊に(一)梵志ありて、梵行を修す。河の中より大蛇いでゝ常には身にまとはれて慣れ親しむ。いぶせくむつかしく覺えて、佛になげき申すに、佛のたまはく「かの蛇は玉もてりや」と問ひ給ふ。「首にもちて侍る」と申す。「さらばその玉を乞へ」と仰せらる。さて梵志その玉を乞ひければ「汝は小欲知足なる故にこそ、なつかしく思ひて、むつびつれ、我が玉は只一つ持てる寶なり與ふべからず」とてその後は來たらずかゝる因緣をひき給ひて(二)房戒をば制し給ひけり、されば佛法修行は、身に行じ、心につとむべし。然れば上代の人器量もたえたりしは、樹下石上、茅屋巖窟にてこそ修行しけれ。中古より、此のかた寺舍の建立こまやかなり。人の根機くだれる故なり。風雨をふせぎ、病苦をのがるゝ

(一)梵志、婆羅門の行者のこと、前出。

(二)房戒。他人のものを乞ひ集めて大なる僧坊を建つべからずといふ戒律。

（一）事善。形にあらはす、善根。

自から感ある事なり」と申されけり。さて「故梶原大なる者にて侍りしかば、罪もさだめて大なるらん。如何なる善根を營みてか、彼の苦患を助けん」と申せば「(一)事善の中には塔を立つこそ最上の功德なれ、當寺に塔を立て給へ」と僧正申されけければ、三所の所領の、我が得分の物にて、三年の中に組み建てられにけり。いさゝかも人の煩ひなかりけるとぞ。信心ありけるゆゑにこそ、四度の炎上に、僅かに三丈ばかりへだゝりて、こがるゝ程なりけるに、燒けざりけるこそ、返す〴〵不思議なれ。かの寺うちつゞき炎上あり。棟別なんと云ひて、心ならぬ奉加をもちて切て畢へける。佛意にかなはずや、佛、在世に、舍利弗、目連、廣野城と云ふ國をすぐるに、その國の人、逃げかくれけり。鬼神なんど恐るゝがごとし其故は、その國に僧ありて、僧坊を造らんとて、人毎に財木用途なんどを給びければ、人是れをいとひて、佛の弟子は、人に物こふ者なり、また乞はれじとて逃げにけり。歸りて佛に此事を申す時、御弟子をあつめて、具足戒の中に、二つの戒を制し給へり。我が身のために大なる坊を造るべからず。大かたの寺は制にあらず、と誡め給ふ。畜類までも人の物乞ふをば厭ふ事なり。昔し、林の中にして

事なり。世をも人をも恨み給ふべからず。故大將殿の御時、萬の軍の謀をば、仰せ合せられしかば、人の亡びうせし事、然るべき事と云ひながら、彼のはからひによる。その過のがれがたくして、遂に亡せられしかば、人の過と思ひ給ふべからず。ただ恨み歎きをやめて、ひとすぢに、後世菩提をとふらひ給へ」とぞ、よりよりは、教訓せられける「何事の道理も覺えず。たゞ、口惜とこそ思ひ給へ」とて、歎きの心のみ深かりけれども、常にいさめ教へられける故に、漸く事の道理を思ひほどきて「げにも、然るべき事なり、自業自得果の謂れもさる事なり。又世にあるには、事にふれて生死の業こそつもるべきに、此なげき故に、自から遁世の身の如くなりて、無常身にあたりて思ひしらるゝ事も侍り。かの菩提のために佛法をいとなめば、今生は歎きに似たれども、當來はたのもしくこそ侍れ。世にあらましかば、いよいよ罪こそ重りぬべけれ。この世の歎きは後の世の悦なるべし」と覺え給ひしは、今は世をも人をもうらみたまはじ。善知識の御恩こそ嬉しけれとて、我身も持齊して眞言行ひけり。さるほどに、内に信あれば外に徳あらはるゝ事にて、大なる庄を三所給はりぬ。僧正も「さればこそ我心さよき時は、

眼前のまぼろしの利にふけりて、身の後の菩提の財寶を失ひ、佛法の利を得ざる事のみこそ多けれ。上代は人の心すなほに欲なくして、善根を營みしも、皆まことしき心に住しき。宇治殿の平等院を建立し、阿彌陀堂供養のありけるに、山僧になにがしの阿闍梨とかや、貴き聞えあるを、御導師に請じ給へるに、施主分に此の御堂造立の故に、地獄に落ちさせ給はん事こそ、淺猿く侍るとしたりければ聽聞の人々までも、興ざめて思ひけるに、御供養すぎて「如何して此の罪懺悔し侍るべき」と仰せられけるを、「此御堂造立の間、非分に人を惱まし給へる分を、御得分の物にて、償ひ返し給はゞ、目出く侍りなん」と申されければ、悉く尋ね聞食されて人夫までも暇の分をぞ賜ひける、かゝる清淨の信心ありて、つくりおき給へる寺にて、昔より今にいたるまで、やけず損ぜず。建仁寺の塔もたび〳〵の炎上にまぬがれたり。故あるにや、彼の寺のふるき僧の語りしは、故梶原景時打たれてのち、彼の女かのゝ尼公あまりに歎き悲しみて、すゞろに世をも人をも恨み思ひ沈みてのみありけるを、建仁寺の本願僧正、常には敎化せられけり。「何事も自業自得果とて、我がつくる業むくいて、善惡の因たがはず。苦樂の果をうくる

ば冥途には貴賤を論ぜず罪なきを貴しとす。我をうやまふ事なかれと仰せられけり。上人涙を流して山の外に出でければ、四の山ひしとあひにけり。高岳の親王此心を讀み給へるにや。

いふならく(一)奈落の底に入りぬれば、(二)刹利も(三)首陀も替らざりけり。

五、齒取る事

南都に齒取る唐人ありき。或る在家人の慳貪にして利簡をさきとし事にふれて、商ひ心のみありて、得もありけるが虫の食ひたる齒をとらせんとて唐人が許へゆきぬ。齒一つとるには錢二文に定めたるを一文にてとりて給べといふ。少分の事なればたゞも取るべけれども心ざまの憎くさにふつと一文にては取らじと云ふ。やゝ久しく論ずるほどに、おほかた取らざりければ、「さらば三文にて齒二つとり給へ」とて虫も食はぬ世に善き齒を取りそへて二つとらせて三文取らせつ。心には利分とこそ思ひけれども、きづなき齒を失ひぬる大なる損なり。是れは申すに及ばず大に愚なる事をこがましき仕業なり。但し世間の人の利養のこゝろふかきは事にふれて利分を思ふ程に因果の道理も知らず、當來の苦果をもわきまへずたゞ

(一)奈落。前出の泥梨と同じ梵語にて、地獄のこと。
(二)刹那。印度の王族をいふ。
(三)首陀。印度の賤族にて農商を主とするもの。平民。

泉の大將の烏帽子を、河風の水に吹き入れたりける時、取り出で丶高名したりとこそ申し傳へ侍れ。まして人毎に行くべき道の支度は、賢げなる人も用意なきこそ愚なれ。眼のまじろき、息のかよふほどこそ威勢種姓、榮花重職もあるに似たれ。命つき神さりぬれば過去今生の業にまかせて、惡業多ければ惡趣に沈み苦しみ重かるべき事を思ひ入れずして、なにとなく遊びたはふれて明かし暮す事、よく／＼思ひはからひて是を愚に嗚呼がましと知りて菩提心を起して、菩提の行をはげむべき也。醍醐の御門かくれさせ給ひてのち、日藏上人、承平十四年四月十六日より、笙の岩屋にこもり、同八月一日午の時頓死して、同十三日によみがへりて、冥途の事をなん語りけるは御門四の鐵の山の高さ四五丈ばかりなる、其うちなる茅屋にぞましましける。我は寛平法王の御子なり。在位の間、五の重き罪ありき。法皇の御心にそむきし事と菅丞相の事、殊に其科をもくして苦報をうくる事ひさし。主上並に國母に申して此の苦患すくふべきよし、御あつらへありけり。帝と三臣と共に赤き灰の上にうづくまり給へり。帝ばかりは御衣をめす、殘りはみな裸躰なり。各々悲涙をながしむせびけり。上人此事を承りて畏こまり給ひけれ

かゝらず、大王使者をやりて、問ふてのたまはく、「王位に居て如何ばかりの樂みあるや」と阿輸伽王、答ふ、「旃陀羅が鈴の音を聞くに、心も肝も身にそはず、五欲の境あれども見ず聞かず」と。さて晝夜に無常を觀じて寢食を忘れて一心に道を修し、七日ありて初果を得つ。その後大王是れをゆるす。無常の理是れほどに恐るゝ心あらば月日の早くすぐる影を見んに付けて、朝夕の鐘の聲を聞かんにつけても今日の命すでに過ぎぬ。あまり何日ぞと思へば、五塵、六欲、妻子、珍寶、名聞、利養、富貴、榮耀何物か心を止むべき。羊の歩みを心にかけ少水の魚に思ひをすまして、道業をいとなみ、淨土を願ふべきなり。流轉生死のぞめきに身も苦しく、心もみだれて、過ぐる月日も覺えず、近づく冥途を忘れん事、返す〳〵も愚かに嗚呼がましくこそ。これたゞ無明の酒に醉ひ煩惱の鬼になやまさるゝ故と思ひて、早く長夜の眠を驚かし、急ぎて生死の夢を醒すべきをや。心あらん人冥途の用意疎かなるべからず。人ごとに身を思はぬ人なし。只一期の榮花をのみ思ひて、今日か明日か、必ず去くべき冥途の旅の用意なき事こそ、返す〳〵も愚に侍れ。如夢僧都は、大井川の御幸に、(三)三衣箱の底に烏帽子を用意して、

(三)三衣。前出。

は盡きざるは、人の常の心なり。無常を知ると知らざるとは、執心のあると無きとに別れたり。口に云ふをたのむべからず。昔、阿育大王、(一)南閻浮提の主として、ふかく佛法に歸す。滅後百年の王なれば、正法の時にて羅漢の聖者おほかりけり。雞雀寺の僧二萬の羅漢を、つねに宮の中に請じて供養し給ひけり。大王の弟の阿輸伽は、佛法を信ぜずして、衆僧の供養を受くることを嫉み憎みけり。大王弟にかたり給はく、「僧は供養を受くれども、無常を觀ずる故に五欲の境に著する事なし」と。阿輸伽この語を信ぜず。大王調伏せんと思ひて、王位を弟に讓るべきよしを聞かしむ。阿輸伽その用意しけるをうかゞひて、「我に別の事なきに、我が位を奪はんとす。その過死罪にさだむべし。但し國の位をのぞめば七日の間、南閻浮提の主となす。五欲のたのしみ心にまかすべし。七日の後は殺害すべし」とて、宮の内に閉ぢこめて、王位の如くあがめながら、(二)旃陀羅をもつて門を守護せしむ。旃陀羅に仰せ付けて、朝な〳〵鈴をふりて、一日已に過ぎぬ。六日ありて害し奉るべし」といふ。斯くの如く乃至、「六日已に過ぎぬ、あまり一日ありて害すべし」と云はしむるに、鈴の音耳に入り、胸ふさがりて五欲の境かつて心に

(一)南閻浮提。前出。

(二)旃陀羅。居者などと譯スル梵語。印度にて、牢番、屠殺などを業とせる最下層の種族。穢多非人。

四、死の道知らざる人の事

鎭西に土佐の寺主といふ僧ありけり。知りたる僧に遇ひて語りけるは、「某は念佛も申さじ、一切の善根もせじと、年來は思ひ候ひつるが、近比より念佛をも申し、善根をも營まばやと存候。その故は、日來はすべて死ぬべしとも覺えず、死ぬるにとりてこそ、後生の營みはすべけれと思ひて過ぐし候ひつるが、死にや仕候はずらんと、あやしき事候なり。その故は父にて候ひし者も死に候ひぬ。母にて候ひし者も死に候ひぬ。伯父伯母また兄にて候ひし左衛門尉も死に候ひぬ。死しぬる一家にて候が、あやしく候」とぞいひける。この僧は賢しきものにて、世の人の心を表して云ひけるなるべし。げにみな人の知り顏にして知らぬは死する事なり。誠に知るならば、五欲の財利もなにかせん。冥途の資糧つゝむべし。わづかに近き道ゆかんとても、心のひまなく出立つぞかし。まして包める粮もなくたのめる伴もなくして、遙かなる黃泉の旅近付く事を思ふには、何事も忘るべきに、口には無常の道理を云ひて知り顏なれども、心には常住の思ひに住して、百年の貯をかたふく。頭に雪を頂き、面に波をたゝみつゝ、一生は盡くれども希望

かた〳〵に飛び去るが如し。みな業に任せて離れ別るべし。何の歎きかあらん」さて、かの家へ行きて見れば、女人食物をもちて門にあふ。しかしかとかたればさてはとて、一人が食をとゞむ。家の内に老女あり。僧とふ「彼の死せる人はその御子か」と問ふ。「しかり」と答ふ。「などなげきたる氣色なき」と問へば、「なにをか歎くべき。母子の契は渡に船に乗りて行くが、岸につきぬれば、ちり〳〵になるが如し。各が業にまかせて行くなり。驚くべきにあらず」といふ。又この女人に、「この死せる人は其許にはなにぞ」と問ふ。答へていはく、「我が男なり」と云ふ。「何に歎きたる氣色なき」と云へば、「なにをか歎くべき。夫婦のなからひは、市に人のゆきあひて要事すぎぬれば、方々にちるが如し。添ひはつべき習にあらず」と云ひける時、この道人萬法の因縁かりにして、執心あるべからず。在家人の中にすら、かゝる心もありと慚愧の心起りて、諸法の因縁、幻化虚妄の事をたよりとして、即ち佛法を悟りにけるとぞ。誠にふかき悟りまでは堅くとも、無常轉變の世、幻化虚妄の事、見てもしり、聞きても辨ふべし。誰か長生の齡に樂み、不死の藥を服せる。よく〳〵無常の道理をしりて、常住の佛法を尋ぬべし。

き所は地にかへる。やさしく慈ある心も、猛く賢き心も、何地か行きぬらむ。たゞ木のごとくして、燒けば灰となり、埋めば土となる。賢きも卑しきも、誰かこの事を逃れん。樂天いはく、「古墓いづれの世の人ぞ、姓と名とを知らず、化して路傍の土となる、年々春草生ず」と。まことに玉のうてなを磨けども野邊こそ遂のすみかなれ。錦のしとねを重ぬれども、夕の煙ぞかたみなる。何事にか執心も止まるべき。又いはく、「筋骸もと實なし。束の芭蕉草、眷屬たま〳〵相依る。一夕林鳥に同じ。去るとも惜みしたふ事なかれ。住すとも又愛し欲ふ事なかれ」といへり。げにも假なる身、暫くの伴なり。昔、佛法をもとむる道人ありけり。ある山の中を行くに、二人の山賤、一人は臥して一人は畠を造るあり。父子なるべし。寄りて見ればその子毒蛇のためにさゝれて俄に死せり。父なげく氣色なくて、此の道人にかたりて云はく、「そのおはする道のほとりに家あり。これ我家なり。それより食をもちて來るべし。唯今この子俄に死せり。一人が食をもちて來れと告げて給ふべし」といふ。道人、「父子の別は悲しかるべし。何に歎の色なき」と問ふに、答へて云はく、「人の親子は僅の契なり。鳥の夜林によりあひて、明くれば

ひければ、「六十にあまり候」といふに、七十にもあまりて見えければ不審に覺えて、「六十にはいくらほど餘り給へるぞ」と問へば、「十四あまりて候」と云ひける。遙の餘りなりけり。七十と云へるよりも、六十といへば少し若かき心地して、かく云ひける人の常の心なり。色代にも「御年よりも遙か若かく見え給ふ」と云ふは嬉しく、「事のほかに老いてこそ見え給へ」といへば、心ぼそく本意なきは人毎の心なり。此心をよく〳〵思へば、人間の餘執つきがたくして、此の假なる身のおしく住處も心とゞまり妻子眷屬よろづにつけて執心ある故に、老病も死苦もおそろしく疎ましく覺える心なるべし。遁るべき道にもあらず。添ひはつべき伴にもあらず夢の如くにして業に任せて、散り〳〵になるべき身なり。此身は父母の遺滞をうけ。また地水火風をかり集めて造れり。堅き所は地、濡れたるは水、暖なるは火、動くは風なり。此中に我とたのむべきものなし。心こそ我と云ふべきに、妄心は妄境を縁じて、念々にうつりきえ、刹那々々生滅して、暫も止まる事なし。身も心もたのむべきものなし。息絶えぬれば、心も失せ身も本にかへりぬ。暖なるは火にかへり、濡れたる所は水にかへり、動く事は風にかへり、堅

ず」といへり。されば俗人この心を存ずべし。僧は信施を恐れ己れが得失をかへりみて、請に趣くべし。俗は佛語を守りて、たやすく治罰すべからず。『十輪經』『大集經』の教はかくの如し。『涅槃經』には、「破戒の僧、持戒の僧をなやまさば國王、大臣、彼の破戒の比丘を殺害し、正法を守るべし。五戒をたもたずして、兵杖を帶し、佛法を護持すべし」と見えたり。昔、覺徳比丘、持戒清淨にして、大乘を弘通せしを、破戒の比丘これをそねみて殺害せんとせしに有徳王軍を起して、破戒の比丘と戰ひてみな殺害し畢んぬ、さて王疵をかふりて死す。此功徳によりて、東方佛國の第一の弟子と生れ、覺徳比丘は第二の弟子と生ると說けり。先徳是を會するに二の義を立つ。一には『十輪經』は在家を教へ、『涅槃經』は出家をいましむ。一には『十輪經』は先の說なり。『涅槃經』は終窮の極說とす。涅槃によりて正法を守るを本とすと云へり。眞實の正法のため、私の執情なくば、涅槃の說まことに其の益あるべきにや。

三、老僧の年隱す事

武州に西玉の阿闍梨と云ふ僧ありけり。「御年はいくらにならせ給ふぞ」と人問

つれば、『法華經』にせんとて取りて來れり」と云ふ。「『法華經』は八卷こそあれ、給へ。二卷は法師が『仁王經』もたぬに『仁王經』にせん」と云ふに、「とくとり給へ」と云ふ。さて二卷はとりて歸りてけり。文字にかゝはらず、手にまかせて取り來ることは是れに似たれども、愚癡の程おかしくこそ。或る在家に『大般若』よませける中に、愚僧ありて、經をさかさまに持ちたるを、奉行しける俗、「あの御房のもち給へる經の、倒に候は」といへば、よく持ちたる僧、とりなをして倒に持ちてけり。さて倒に持ちたる僧は、我はよく持ちたる氣色にて、そばの僧を嗚呼がましく思ひて、「さ、見候ひつる」と云ひけり。また大文字をしらで、「またふりのやうなる文字は何ぞ」と問へる僧ありけり。また大と打ちあげて、般を見しらで船からとぞ云ひける。かゝる僧のありけるこそ、餘りに不思議に侍れ。末代いよ〳〵かゝりぬへし。（一）『月藏分』の中に說いて云はく、「有戒、無戒、破戒乃至頭をそり袈裟のかたはしをも著たらん僧をば、繫縛し、鞭打し、禁閉すべからず。かくのごとくの僧、清淨の比丘の中にあらば、たゞ法によりて寺を出だすべし。若し是れを惱せば國に災起り、善神國を守らず、隣國あひ戰ひ犯し、賢聖すてゝ來ら

（一）『月藏分』で大集經の中にあり。

天人佛陀の知見をもはゞからず炎魔王冥官の苛責をも恐れざらんほどに、嗚呼がましき事、あらじかし。たゞ耻がましきのみにあらず久しく苦患をうくべし。此の故に妄業をやめ道行をすゝまんこそ賢く嗚呼がましからぬ心地なれ。古人のいはく、「道念もし情念にひとしくは成佛する事多時ならん」と。妄念は凡なり。道念は佛なり。此故にたゞ妄念をはなるれば如々の佛なりと云へり。佛性本來是あり。只へだつる所妄念なり。然れば道念なきことの嗚呼がましき故を思ひ知りて世間のあだに墓なき他人の非を嘲る事なかれ。

二、愚癡の僧文字を知らざる事

或山寺に所の習として、『法華』『仁王』の二經僧ことに暗誦しつけたる中に文字にも向はで覺えたる愚僧多し。其中に或る若かき僧師の譲りあたへたる『大般若』を虫はらはんとて取りひろげたるを、隣房の若かき僧きたりて、「なに經ぞ」と問ふ。「いざ何經やらん。先師が譲りて侍るなり」といふに、「給べ、その經十卷、法師が『法華經』をもたぬに、『法華經』にせん」といへば、「とくとり給へ」と云ふ。一帙とりて歸りぬ。「また隣房の僧來りて此經を問ふに「隣の某房が許にあまた見え

「所望申したき事の侍る」といへば、「何事にや」と問ふに、「申すにつけて憚りあれども、思ひかけぬ縁にあひて、人をたのみたる物をたゞならぬ身になして侍るが然しながら我身の過にて侍る故に、かれが身、身となりて別に候はんほどの食物を沙汰したく侍り。御憐みありなんや」と、物はづかしげなる氣色にて云ひければ、哀に覺えて、「やすき事也」とて、人して送らんとしければ、「忍びたる所にて侍れば、はゞかりあり」とて、持ち得るほど我れと負ひて行くをあやしみて、見送らせければ、北山の奥はる〴〵と分け入りて小さき庵のありけるに、俵をうちをきて、「あな苦し、(一)三寶の御助けなれば(二)安居の食まうけたり」と獨言しておこなふ音しけり。使歸りてしか〴〵と聞えければされぱこそと思ひて今はつきぬらんと思ふほどにまた時料具足なんど、ねんごろに調へて送りけるをば返事もせず。又つきぬらんと思ひて送りてみすれば後に送りたる物は、手もかけず鳥獸食ひちらして、人もなかりけり。實の道人なるべし。近代の人の意はかくれごととして養はんとて安居の食といひぬべし。善惡因果の理を知らず流轉生死の苦を忘れて、惡業を身に謹まず、妄念を心に恐れずして、智者道人に近付く思ひもなく、

(一)三寶。前出。
(二)安居。夏中、僧侶が外出を禁じ一坊に集りて修學すること。

ど心をほしきまゝにして、生死の妄業をいよ〳〵習ひ心にそめば、いつかは流轉の境を離るべき。學びがたしとて佛道修行を疎くせば、爭か淨土菩提の道に入らん。古德の云はく、「勇士陣に交りて死すれとも歸るが如く、丈夫の道に向ふ何の辭するところかあらん。初て入るは恒に難し、永く易きことなし、難に由て若し退かば、何れの劫にが成ぜん」といへり。押しても遠ざかるべきは流轉生死の妄業、强ゐても學ぶべきは出離解脫の因なり。正信房が眠りを思ひて、我心の過をいましむべし。非を知りて改むるはこれ賢き心なり。此卷に嗚呼がましき事をあつむる、心賢き道に入れとなり。嗚呼がましき事は、一旦人のわづらひを招くばかりなり。世間の嗚呼がましき事故に、人に輕しめらるゝ事は、罪障の殘る因緣なり。また嗚呼の物は多分正直なり。たゞ思ふまゝに云ひ振舞ひ色代もなくへつらふ心なき故なり。是によりて人に輕しめ賤しめらる。『金剛般若經』に云はく、「此世に人にかろしめ賤しめらるれば先世の罪業きえて菩提を得」と說けり。古人の德を藏せる此意なるべし。失をかくし德をあらはせる、實に道を逆ふ。中比、美作守と云ひける人の許に、若き僧來りて、經を尊くよむ事あり。「何なる人ぞ」と問へば、

もち、習因わすれずと云へるは此事なり。聖者となりてもなほ習因たちがたし。凡夫いかでか其の過なからん。また佛阿難と共に道をすぎ給ふに、田かへすもの二人あり。一人は「佛の出世にあひがたし、禮し奉らん」とて、手口すゝぎて。佛の所に詣づ。一人は「佛はいつも禮してむ今日せでは」とて耕しけり。阿難、「何なる因緣ありてか、一人は禮し奉り一人は禮し奉らぬ」と問ひ奉る。佛のたまはく、「二人ともに七佛の出世にあへりき。一人は今日のごとく七佛ともに禮せずして、今に善根の因なし」とこそ仰せられけん。此れ懈怠の習果なり。昔の心をば習因といふ。それに酬いて又その心の絶えずして、相次いで來るを習果といふなり。されば貪欲瞋恚等の心のつねに起らん人は、生を經とも止みがたかるべしと、知りて恐れ遠ざかり、對治の觀念滅罪の方法を營むべし。古人の云はく、「熟處を捨てゝ生しからしめ、生處を習ひて熟せしめよ」と云へる心は、熟處と云ふは、無始の煩惱妄想よく〳〵慣れたる事にて、自然に心にあり。此心を捨てゝ、生しくせよといへり。生しとは。仕習はぬ相なり。生處を習ひて熟せしめよといふは、佛法は始て遇へるによりて新らしく學びがたきを能く〳〵仕慣れよとなり。た

堂弟なり。何によつて一座に坐せざる」と。「餘の僧衆の坐せざることも、そのゆへ知りがたし」といふに、阿難の云はく、「汝と我等とその意樂異なり。此故に同坐せず。汝は欲のために戒を持つ。我等は涅槃のために戒を持つによりて、汝が心けがれたり。一つ座に居るべからず」といふ。佛また「汝地獄やみんと思ふ」とて。地獄へ具して御座ます。(一)八寒八熱等の諸の地獄みせ給ふ。みな罪人ありて苦をうく。其中にある地獄、釜も獄卒もあれども罪人なし。佛に問ひ奉る。佛獄卒に問はしめ給ふ。難陀、獄卒にその由を問ふ。獄卒答へて云はく、「佛の御弟に難陀と申すなる僧、持戒の業によりて忉利天に生じて、一千歳の樂みを受け、其の後この地獄におち給ふべし。さて構へをけり」といふ。是れを聞きて身の毛いよだち、天女の事も忘れて、涅槃のために戒を持ち、つゐに羅漢の果を得たり。佛の方便こそかたじけなけれ。欲の鈎を以て、引いて道に入るといふ是れなり。古の人は信あるゆゑに愛をすてて道に入り、今の世の人は斯のごときの道理を聞けども、心うごかずして惡趣に歸るにや。悲しきかな。樂を受くる時は苦を忘れ、苦を受くる時は樂を忘る。返へすがへすもつたなく愚かなり。難陀欲のために戒をた

(一)八寒八熱。前出。

めに、雪山やみんと思ふ。いざ」とて、御衣の裾に取りつかせて具して御座す。雪山を見めぐり給ふに、妻猿の火に燒けて盲目なるあり。佛問ひ給はく、「汝が愛する孫陀利と、この猿と何れか貌よき」と。答へて云はく。「孫陀利は天下にならびなき美人にて候。たとふべきにあらず」と申す。さて歸り給ひぬ又。「天上や見たき」と仰せられて、御衣の裾にとりつかしめて、忉利天へ具してのぼり給ふ。天上のよそほひ、天人の體まことに目出かりけり。所々をみせさせ給ふに、天人みな夫婦どもなるに、或天人女天ばかりにして男天なし。佛にそのよしを問ひ奉る。佛天人に問はしむ。難陀、天女に故を問ふ。天女、答へていはく、「佛の御弟に難陀と申すなる人、持戒の德によりて、此天に生して、我が夫たるべし」と云ふ。佛、難陀に問ひ給はく、「汝が后とこの天女と、いづれかまされる」と。答へて申さく、「雪山の猿の、孫陀利に劣れるよりも、孫陀利はなほ劣れり」といふ。さて(一)閻浮に歸りて、この天女の事を思ひて、后の事も忘れて、一心に戒行を守りて、天に生ぜん事を願ふ。かゝるほどに、難陀坐する事あれば、餘の比丘座をたち去りて、一座に坐する僧なし。阿難の座に居るに又立ち去る。難陀いはく、「汝と我と

(一)閻浮。前出。

けるを、出家の期いたれりと思食して、佛御鉢を持して難陀が家に乞食し給ふ。難陀御鉢をとりて、飯を入れて自ら送り奉るに、佛は已に過ぎさせ給ひぬ。阿難につたへて奉るに、阿難「自から送り奉るべし」と云ふによりて、祇園精舎へ持ちて參す。佛「出家すべし」とて、やがて髮をそらしめ給ふ。孫陀利と云ふ后を思ひて、その志ふかくして、出家の志なしといへども、佛の威におそれて髮をそる。心中にはにげ返るべき心地なり。佛も御弟子の比丘僧も、みな請をうけて出で給ふ。難陀を以て寺を守らしむ。この隙に家へかへらんと思ひて、堂の戸扉をたておさむるに、東をとづれば西ひらけ、西をとづれば東ひらく。かゝれども、我れ國王となりなば、寺を造り、寺の物失せたりとも、つくのひ返すべし。この隙に逃げむと思ひて家へかへる。大道を過ぎば、佛の歸り給はんにあひ奉らん事を恐れて、小路よりかへるに、佛知ろしめして、小路より歸り給ふ。佛と大衆と歸り給へるを遙かに見て、木に上りてかくる。佛のすぎ給ふ時、風木葉を吹き開いて、難陀が身あらはる。佛「いかに歸る」と問ひ給へば、「孫陀利が戀しく候て歸る」と申すに、「いざ」とて又具して寺へ歸り給ひぬ。佛方便して心をすすめんた

驚きて見れば、白御小袖、籠のかたつきて、香色にこがしてけり。あさましと思ひて、かひ巻きて濡れたる方を上にして持ちて參りぬ。「未だ濡れたるはいかに」と仰せらるれば、「たゞ上り候へ。したはこがれて候」とぞ申しける。「尾籠なり」と仰せられて、御小袖は給はりてけり。近比與福寺の東門院にありける兒、隱所に居たりけるに、春日山の方より鵄一つ來りて、此兒の前に眠り居たり。恐ろしさに腰刀を拔きてはたと切りて、やがて絕入したりけるを、人見つけて、房へかき入れていのりけり。刀に血つき鵄の毛ちりたりけり。さて口ばしりて、「忠寛かなにとなく眠り居たるを、あやまちたる事やすからず」とぞ云ひける。兎角いのりこしらへて、別事なかりけり。先生に眠りしが、生をへだてゝも眠りけるにこそ。習因習果と云ふこと侍り。わきまへ知るべし。常に心に思ひそみ、身に仕なれぬる事は、生を經れども相繼ぎて忘れず。捨てがたくぞ目づからせられ思はるゝなり。佛の御弟子舍利弗は、五百生蛇にて有ける故に、瞋恚の相見えけり。難陀は色にふける。心深かりけるが、(一)羅漢の果を得て後も、先づ女人に目を掛けゝり。難陀は佛の御弟なり。悉達太子御出家の後は、(二)輪王の位につぐべき仁にてあり

(一)羅漢。前出。
(二)輪王。轉輪王、前出。

沙石集卷第七

一、眠正信房の事

和州菩提山の本願僧正御房に、忠寛正信房と云ふ僧ありけり。餘りに眠りければ、眠りの正信とぞ申しける。御(一)舍利講の法用(二)散華すべかりけるが、(三)唄ひくほどに、例の眠りけるを、唄終りて傍なる僧驚かしければ、眠るものから、又物總なる僧にて錫杖を取りて手執錫杖と誦しけるを、如何にやと云はれて、「やら唄かと思ひて」とぞあひける。また或る夜九番鳥の鳴きけるを眠耳に御所に忠寛々々と召すと聞きなして事々しく御いらへ申して、御前へ參る。「いかに何事ぞ」と仰せらるれば、「召の候ひつる」と申す。「さる事なし」と仰せありければ鳥の猶窓に聲のするを指さして、「あれに召の候ひつる」とぞ申しける。或る時、御湯の後、汗にぬれたる御小袖をふせごに打ちかけて例の物總は濡れたる方を上にして、さかりなる火にあぶりて、眠りゐたるほどに「疾くまゐらせよ」と仰せの有りけるに

(一)舍利講。舍利會ともいふ。舍利を講讚する法會。
(二)散華。佛前などにて華をまき、供養すること。
(三)唄。讚頌と譯する梵語。聲たかく讚歎するを唄ひくといふ。

野干を敬まひき。師を敬ふ先蹤に引きけり。近代は在家のまことしく佛法を信ずるものなければ僧をうやまふこと希なり。出家また法の如くに振舞ひ、釋門の義を存するもの希なれば反て在家を敬ひ、佛法を輕しめ、利養を重くしへつらふ。誠に經の中に（二）「白衣は高座にしてきゝ出家は地に立ちて法を説くは法滅の相」と云へるに遇ふて心うくこそ覺ゆれ。よく〳〵道俗共に此の儀を存せば、佛法久住の因縁たるべきをや。佛法の利益大なる事を信ずべし。昔の大王千歳の給仕をいたして、妙法を聞き、雪山の大士は半偈のために身命をすてき。一文一句も生死を出で菩提をさとる因縁あり。佛法の妙なる事、仰ひて信ずべし。みだりに輕しむる事あるべからず。よく〳〵心をとゞめて此の道理を思ひとくべき者也。

（一）白衣。俗人。

沙石集卷第六終

るべし。されば佛法を信ぜむには、まづ弘通の人を尊とぶべし。相を取りて賤しみ失を見て輕むる事なかれ。『智論』には、「犬の皮の袋の臭きにつゝめる金をば、袋の臭きによりて捨つべからず。たとひ僧は破戒なりとも、說く所の法眞實ならば、信じて人の失を正さゞれ」といへり。過去に佛世に出で給はずして、佛法の名字も聞かざりける時、(一)宿命智ありて悟りふかき、野干ありけり。師子に追はれて逃げ走りけるが、ふかき穴に落ち入り出づべき力なうして、數日をへて思ひけるは徒に捨てける命を、同じくは師子に與ふべかりけるを慈悲もなくして、もろくあやうき身を惜みて他に施さぬ事を悔みて「南無三世の諸佛、此の心を照したまへ」と云ひける音、忉利天へ聞えければ、(二)帝釋驚きて聲を尋ねて無數の諸天と共に下りて見給ひければ、穴の中の野干が聲なり。さてさま〳〵の事ども賢しく申しければ、「汝法を說け」と帝釋請じ給ふに、野干のいはく、「(三)三十三天の主として、禮儀なく軌則も知り給はぬものかな。法水は下へこそながるれ。師は下に弟子は上にしていかゞ法を說かん」といふ。帝釋はぢ驚きて、天衣をかさねて高座を設けて、その上にして法をとかしむ。諸天聞きて益をえたりき。天帝

(一)宿命智。宿世の命を知る智。前世のことを知り得る智慧。

(二)帝釋。忉利天に居る天神の名。

(三)三十三天。忉利天のこと。忉利天は前出。

ども、辭退申されけり。「さらば日本國の惣講師になし奉らん」と仰せられけれども、其れも辭退申されけり。惣講師と覺しめされけることは、本寺本山のその時の碩德に、召し合せられて、禪敎の法門問答ありけるに、敎門の碩學も口を閉ぢ、あまさへ其の宗の人この法門を聞きて、敎家の法門いよ〳〵奧義をわきまへけり。また密宗の明匠に問答ありけるも、この上人の難勢を申し述べらるゝ人もなし。すべて顯密共に其旨をふかく達せりと聞えき。然る間、惣講師になし奉らんと思食されける此の故なり。然れども、かたく辭し申されければ、聖の一と思食されて、つけられけるとも云へり。圓爾をば後に實名にせられけり。本朝の禪門の繁昌これよりこと起れり。凡そ法を信ぜむには、まづ弘通の人を崇むべきものなり。(一)正像末の三時のつかさどる所、在世には佛を本として、法と僧とは佛による。滅後正法の時は法は面として佛と僧とは威あり。像末に及び、佛と法とは自から威德なし。僧の弘通によりて佛法の利益あり。仍て末代はたとひ破戒無慚なりとも、正知正見にして佛法を開演せば、國の師ともなり、世の福田たるべし。其のよし『十輪經』『心地觀經』に見へたり。僧の弘通するによりて、佛の威も、法の驗もあ

(一)正像末。正法像法末法。前出。

磨の宗風を學びて、尊き禪師なりけり。故法性寺の光明峯寺禪定殿下召して、法門御尋ねありけり。一なげし下りたる所に、上人候はれけり。「禪の法門と云ふ事いまだ聞かず。何か體の法門ぞ」と仰せられければ、上人申されけるは、「下座にて法門申す事は、佛法の中に候はぬ事」と申されければ、實にとて驚きて、上へ召あぐ。さて、「のたまへ」と仰せらる。「對座にても申す事候はず」と申さるれば、「さらば」とて、御座敷に高く座をかまへて。「其れにてのたまへ」と仰せらるれば、「師弟の禮を御振舞候はゞ申さん」と。「子細にをよばず」とて、御約束ありて、禪の法門問ひたまひけり。法門きこし召されて、御信心ありて、師弟の禮儀亂れず。御歸依あさからざりけり。さて申されけるは、「鎭西に(一)圓爾房と申し候こそ、徑山の佛法をつたへて、歸朝の僧にて、禪門も教門もあきらかに候へ。某には十倍のまさりにて、師匠と存ずる」よし申されければ、さらばとて御使者ありて請じのぼせ、月の輪度にて始めて禪門弘通し、普門寺にて(二)叢林行ひはじめ、後に東福寺建立ありて和尚號ありて聖一和尚とて、師弟の儀にておはしき。禪定殿下の仰せに、「僧正にならせたまへ、建仁寺の本願もさる事にてこそ」と仰せられけれ

(一)圓爾房。辨圓といふ。臨濟宗京都東福寺の開山。聖一國師なり。本書の著者無住の師。弘安三年、七十九にて寂す。

(二)叢林。僧侶の集り學ぶところをいふ。學寮。談林。

十餘日に及びぬ。あるとき大臣殿、夜半許に俄に壽福寺へ入御あり。人是れを知らず、門をたゝくに「誰ぞ」と問へば、「御所に入らせ給ふ」といふ。法印驚きて入れたてまつる。大臣殿、左右なく法印の足をとりて頂戴して、泣く〳〵仰せられけるは、「師こそ弟子をば勘當する事にて侍るに、御弟子として勘當をしたてまつりたる罪障、いかゞして懺悔し候べき。申したる事をたがへじとて、百日かほどは申し承はらじと思ひ給ひつれども、忍びかねて參りたる」とて、はら〳〵と泣き給ひければ、法印も思はずに覺えて、涙を流して申されけるは、「御勘當かふむるも然るべき事、また御許し候も然るべき事にあり」とて、はるかに御物語ありて御歸りありけり。此事は彼の寺の老僧語り侍りき。大臣殿に宮仕しける古き人の語りしは、「御夢に氣高げなる俗の白張裝束にて、『いかに貴き僧の心をば惱まし給ふぞ』との給ふと御覽じて驚きて夜半ばかりに、急ぎ寺へ入御ありけるとぞ、承はりし」と語りき。信心の實におはしければ、若宮の御告にや。師資の禮儀を存じ給ひけるこそ難有く覺え侍れ。

洛陽に猫間の(一)隨乘房の上人と聞えしは、度宋して徑山の佛法を訪らひ、(二)達

(一)隨乘房。湛慧といふ、臨濟宗の僧。筑前崇福寺の開山。藤原道家に崇信せらる。
(二)達磨。前出

りがたく侍れ。されば人の貧くとも心をば倒さず、耻をも知り、忠をも致すべき事なり。

一九、師の禮ある事

壽福寺の故庄嚴房の法印は、貴く聞えありし上人なり。鎌倉の大臣殿、御歸依重くして、師弟の禮を存じたまへり。法印慈悲ふかき人にて、訴詔人の歎き申すことあれば、「御計り候へ」と申されけり。彼の申さるゝ事をば、一事もそむき給はず。やす〱とかなひけり。さて彼も此も申しければ、常に申し入れられけるを、「世間の樣は、一人は悅べども、一人はなげく事あり。今は御いろひな候ぞ。但し仰せをば違へじと思ひ給ひ候へば、此計は承りぬ。自今以後は御口入れあるべからず」と申されけるを、「承り候ひぬ」と申して、あながちに歎き申す人あれば、心よはく、此計〱と度々申されけるほどに、以の外に大なる事に、いろひて申されける時、「度々申して候に、御承引なくて、かやうに仰せられ候事、心得られず候。國の政には偏頗なき事に候。自今以後は、永く申しうけたまはり候まじ」と、あらゝかに御返事ありければ、恐れ入りて退出せられぬ。其後音信なくて七

からず、見えける上は、さらば兎も角も女房の計ひに從はん」とて、屋地を賣りて、用途五六十貫が程ありけるにて、銀の折敷に金の橘をつくらせて、こと〳〵しからぬやうに、紙につゝみ懷中して、手に色々の引出物共しけり。「いかにも某は。上の御相手に參りて、其の用意あるか」と。傍官ども問ひければ「爭か用意仕らざらん」と云ふ。いかばかりの事か、仕出すべきとて、目ひき鼻ひき顏をそばめてぞ、可笑げに思ひける。上にもよに片腹いたき事に思食たる氣色なりけり。すでに懷中より。紙に裹みたるものをとり出すを見て、させる事あらじと思ひて、餘の片腹いたさに、諸人面をうつふせけり。さて御前に置きたる物を引きひろげて見給へば、銀の折敷に金の橘を置きたり。心も及ばず作りたりけり。是を見て皆目を驚し、諸人にがりてぞ見えける。「抑何として御恩もなきに、かゝる不思議は仕出したるぞ」と、御所の人に尋ね給ひければ、かゝる子細とぞ承ると、委く聞きたる人申しければ、大に感じ仰せられけり。さるほどに返り引出物とて、紙一枚をぞ給はりける。都近き庄の千石ばかりなるを給ひて、富榮えていよ〳〵奉公つかまつり、重ねて御領も預り、かた〳〵榮華目出くありける。妻の志こそ、あ

取りつるに、人こそ多かるに、上の御相手にしも取りあたりて耻をかきなんず。傍官ならば形の如く前をもはらふべきに、見苦からん事も恐れある事、よろしく營まんとすれば、其の力らなし。たゞ跡をくらふして、此の序に、道心なくとも山々寺々をも修行して、耻がましき事を遁れんと思ふばかりなり」といへば、此の妻申しけるは、「其の事ならば、何シに歎き給はん、人は果報も幸も心にこそあれ。縱つゐに世をのがれんと思はんに付けても、すでに御相手に參りぬ。尋常なる御引出物をも進せてこそ、御所中をも罷出で給はめ。先世の契あればこそ、妻男ともなりて、今日まで志かはらずして過ごしつらめ。榮えば同じくさかえ、惑はゞ共にこそまどはめ。此の家地なんとあれば、しちがへて營み給へ」といふに、夫申しけるは、「果報つたなくして、今まで御恩もかうふらねば、思出もなくて、年來日來すごしつるだにも、心苦しく片腹痛きに、我れ故それさへまどひ給はんことこそ口惜けれ」と云へば、「何にかくは思ひ給はん事の序に共に尼法師にもなりて、後世菩提の勸せば、善知識とこそ思ひたてまつらめ。是れ程のあり甲斐もなき世間は、まどふとても歎きにもあらずと云ひければ、「志の色、誠にあさ

なかれ。

一八、君に忠ありて榮ゆる事

先年の比、何者の云ひ出しけるにや、相手を孔子に取りて事をし、相手引出物をせば、時の横災をまぬかるべしと云ふ事、京田舍に普くその沙汰ありて、上つかたにも此事ありけるにや。或る公卿の御所に此事あるべしとて、相手をさだめられけるに、思も蒙むらず私のたぐへも無くして、貧しき侍の宮仕へけるが主の御相手に取りあたりぬ、是れも不運の至りと、身にも思ひ餘所にも沙汰しけり。かたの如く商ひて世を渡りける貧しき女人を、年來相語ひて過ぎけるが、妻に語り申しけるは、「然るべき契にて、年來互に志あさからずして、過ぎつれば、限あらん道にも後れ先立たじとこそ思へども、思のほかの事出て來たれば。出家入道して國々をも修行せばやと思ひ立ちたり。相そはん事も、今夜ばかりと思ふに、名殘の惜しさこそ、心に思ふほども云はれね」とて、さめ／＼と泣きければ妻、「何事によりて、かゝる心の出できける。道心のおこり給へるか」と問へば、「道心にはあらず、御所中に世間に沙汰する、御事あるべしとて、相手を孔子に

『梵網經』には、「一切の男子は是れ我が父、一切の女人は是れ我が母、我が生々にこれに隨ひて生を受けずといふ事なし。故に六道の衆生はみな是れ我が父母なり。然るを殺し食するは、我が父母を殺し食する也」と說かれたり。唐の國淸寺に拾得と云ひしは、豐干禪師の行者なり。或る在家人、客人をもてなさんとて、禪師に申して、拾得をよびて給仕なんどせさせけるに、寒山子も伴ひて行きてけり。さて酒をのみ肉を食ひて、樂しみ遊びけるを、寒山拾得二人、傍にして、けしからぬ程に笑ひければ、主も客人も興さめてぞ覺えける。主、其後禪師に此の由を申しければ、禪師、拾得をよびて、「何にかゝるけしからぬ事ありける」と、諫められければ、「爭か笑らひ候べき。彼が先生の親ども、癡愛の因緣によりて、畜類の身を受けて、今、食物となれるを、親が肉とも知らずして。是れを愛し遊びたはふれ樂しみしことと、あまりに悲しく覺えしかば、寒山と共に此ことを云ひて歎げき侍りしを、彼等がつたなき眼にて、笑ふと見て侍るなり」とぞ申しける。知ると知らぬと近きと遠きとこそあれ、云はゞみな父母を殺し食するにこそ。平等の慈悲をおこし、孝養の懇志をはげまして、衆生をすくひ助くべし。群類を惱し殺する事

事を、清水に祈り申して、かゝる示現を蒙りたるよし、泣く〳〵語りければ、主哀に覺えて、その馬をたづぬるに、昨日鎌倉へ下ける由下人申しければ、「別の馬をつかはして、彼の馬をゐてかへれ」とて、急ぎ使を下しけり。江洲の四十九院と云ふ宿にて追ひ付きて、ゐて歸るほどにこの馬俄に病みて、其の夜死にけり。使あさましく覺えてむなしく歸り上らんも其のしるしもなかりければ、馬の頭を切りてもちて上る。女は馬のくひ物なんど懇に用意して、日を數へて侍りける程に、空しく頭ばかりを持ちて上りたり。此れを見て彼の女房、馬の頭に袖うちおほひて、音もをしまず泣きかなしむ事かぎりなし。此を見聞く人、よその袂もしぼる計なり。さて此馬の頭を袖に裹みて歸りて、墓を築き種々の孝養をぞしける。

人の親の子を思ふ、癡愛の因縁によりて、多くの惡道に落ちて、苦をうくるを。神通なければ是れを知る事なし、知らざれば先世の恩所知識をも、或は殺し、或は惱すこそ、まめやかに愚かなれ。此の女人は孝養の志深くして、佛に祈りて先世の親の事を知れり。人ごとに生を受くる度に父母あり、恩所あれども、生を變へぬれば如何なる形となり、如何なる報を受くるをも、知らぬのみこそ侍るめれ

女はふつと、もちゐざりけり。「なにさまにも、遂には離るべき道なれば、かゝる田舎の住居などさめかたき所に、共に心苦しくて過ぐさんよりは、只上り給へ、離れたりとも、さて都にも心安くおはすらんと思はゞ、心をも慰むべし。さあらんにつけては、孝養にてこそあらめ」とて、上るべきよし一向に云ひければ、泣く〳〵別を悲しみながら、相具せられて女上りぬ。さて京にて相すみけるほどに田舎のこと風のたよりもなかりければ、互にをとづるゝ事もなし。朝暮は母の事を申してぞ泣きける。さるほどに清水寺に詣でゝ、母の事世にあるとも無きとも示し給へと祈り申しけり。日數つもりて感應むなしからず、夢につげ給ひけるは「汝が母は別れて後、汝に離れたる事を歎きし程に、病付きて幾程なくて亡せにき。築紫人の某と云ふ者のもとに、栗毛駮なる駄に生まれて、當時京にあり。宿所はしか〳〵の所」と、あきらかに示し給ふ。夢さめて、やがて彼の宿所を尋ねつゝ、「是には何なる人のおはするぞ」と問へば、「築紫の人の宿也」と云ふ。さて、「栗毛駮の御馬や候」と問ふに、「有り」と答へければ、「さらば、あれを見候はゞや」と云ふに、主あやしみて、事の子細を問ふ。女人申しけるは、離れて候母の

にか流離ひ行きて、夕の煙、朝の露と消えて、また母を見ずぞや、止みなん」と、口説き立てゝ泣きければ、見聞く人も、袖をしぼらぬはなかりけり。至孝の志まめやかに、昔に耻ぢず、ありがたく覺えて返す〳〵も哀に侍り。

一七、祈請して母の生所を知る事

洛陽に貧しき、母と女とありけり、都にて住みわびて、緣に付いて、越後の國に下りてぞ、世を渡りける。生れ付きたる果報なれば、何處にても貧しうてぞ過ごしける。京の者にて念佛者のありけるに、此の女、相かたらひて住みけるが、餘りに心やすからぬ世間を見て、此の念佛者申しけるは、「かく心苦しくて、住まんよりは、都にては兎ても角ても過ぎなん」とて、京へぞさそひける。此の女、母に離れん事を歎きてもちひざりけれ共、度々申しすゝめて、はては、母の尼公に、「かくて心苦しくおはせんよりは、都にてはさすが住みなれて侍れば、此程の事はあらじと思ひて、女房を具して上らん」と申すを、離れたてまつらん事を、「歎きてもちゐ給はず」といふ、時に母申しけるは、「誠に貧くとも相添ひてこそ侍るべけれ。さりながら、ひとり〳〵も心安くてこそありたけれぱ、只上り給へ」といふ。

母子ありけり。固よりたよりなき上、かゝる世にあひて、飢ゑ死ぬべかりければ忽に心うき事を見んよりは、身を賣りて母を助けんと思ひて、母にこの樣を云ひければ、たゞ一人持ちたる子なりける上、孝養の志ありければ、離れん事かなしく覺えて、「死すとも同じ所にて、手をもとらへて伏し、頭をも並べてこそ死なめ幾程もあるまじき世に、生きながら離れんも口惜きことなり」とて、母ふつと許さゞりけれども、若し命あらば自から、廻り遇ふこともありなん、忽ちに飢ゑ死なん事も、さすが悲しく覺えて、母はかく制しけれども、身を賣りて、代を母に與へて、泣く〳〵わかれて東の方へぞ行きける。三河國矢作の宿に、相知りたる者語りしは、商人の人あまた具して下りける中に、若き男の人目もつゝまず、音をたてゝ泣くありけり。人あやしみて、「何故にさしも泣くぞ」と問ひければ、美濃の國のものにて侍るが、母を助けんがために、身を賣りて何處に止まるべし共なく、東の方へ下り侍る也。母のあまりに、別るゝことを悲みて、悶えこがれ候ひつるが、日を數へてこそ思ひ起すらめ、命あらば廻りあふ事もありなんと、こしらへおきつれども、また二度、母の姿を見ずして、東の奥の、山の奥、野の末

心のゆくかたと袈裟衣きながら、玉襷して、桂河にて、捕りもならはぬ、魚を捕らんとするに、然るべき事にてや、少々捕り得たりけるを、官人に見つけられて引き立て院の御所へ具して參りにけり。天下の殺生禁斷そのかくれなき上、法師の身として、袈裟衣きながら、此の惡行を企つこと、かへす〴〵不思議なりとて重き過に行はるべかりけるを、此僧申しけるは、「老母が命をたすけて、暫くもや添ひ候と思ひて、我が身はいかなる過にも行はれ候へ。母が命少しものびん事、本意に存じ候。此魚は今は助かるまじきにて候へば、是を母が許へ。つかはし候て、一口も物食ひて候はんを承りて、如何なる御戒にもあたり侍べらば、固より存じ設けたる事なり。うらみも候まじ」と奏して、涙を流しければ、事の體あはれに思食て、母を養ふ程の物不足なく、給はりて許されにけり。至孝の志、實ありけるにこそ。

一六、身を賣り母を養ふ事

去りし文永年中、炎旱日久しくして、國々飢饉おびたゞしく聞えし。中にも美濃、尾張、殊に餓死せしかば、多く他國へぞ落ち行きける。美濃の國に貧くして

なる人ぞ」と問ふに、内に答へけるは、「わびもの、盲目にて侍るが過ぎわびて、此山の麓に住みて、薪を取りて里に出でゝ育む子息の童の候をたのみて、昨日出で候ひしまゝに、露の命もさすがに消えやらで侍り。此童見え侍らねば覺束なく心もとなくて、人のおとなへば此の童にやと思ひ候へば、あらぬ人にこそ」と云ふ。使、急ぎ歸りて上人に此のよし申しければ、「童が詞たがはざりけり」とて、哀に思はれければ、母を養へるほどの食物たびてけり。さて佛物なれば徒に與へんも恐れありとて、杣作の間は。童をば召しつかはれけり。仕業は不當なるに似たれども、孝養の心は實にありがたければ、然るべき三寶の御惠みにや。母を養ふほどの食物にあたりけるこそ、返す〳〵も不思議に覺え侍れ。孝養の志まことある故に冥の御哀もありけめ。

白河院の御時、天下に殺生禁斷せられて、自から犯す者あれば、重き過にあたりけるころ、或る山寺法師、母の年たけて世間まづしきが、物も食はず煩ひけるが、魚なんどなき外は。物食はぬくせ者にてありけり。世間にうりかはぬ事なれば、如何にすべしとも覺えず。忽に母の命たえなん事、悲しく覺えけるまゝに、

一五、盲目の母を養ふ事

南都の春乘房の上人、東大寺の大佛殿造立のために、安藝、周防、兩國の山にて、杣作せさせて、其の間の食物の俵おほく打ち積みて置きたりけるを、或時俵を一つぬすみて、逃げる者を見付けてからめてけり。痩せかれたる童にてぞありける。上人、「何なる者にて、かゝる不當のわざをし、佛物を犯すぞ」と問はれければ、童申しけるは、「云ひ甲斐なく貧き者にて、すぎわびて侍る上、盲目なる老母の一人候を、薪を取りて遙なる里に出でゝ、かへて養ひ育み候へども、身もつかれ力もつきて、はか〳〵しくたすけ、心安くすぐるほども侍らねば、此の杣の食は多くも候佛事なれば、御事もかけず盡くる事もあらじ、と思ひて、少分ぬすみて、母を助けばやと思ふばかりにて、かゝる不當を仕りて、耻をさらし候こそ、先業までも、今さら、耻かしく口惜く覺え侍れ」とて、さめ〳〵と泣きければ、上人も事の子細哀に思はれけれども、實否を知らんために、此童をば召しおきて、使を以て、童が申し狀に付けて、母が居所を尋ねにつかはしけり。使尋ね行きて見ければ、山の麓に小さき庵あり。人おとなふ聲しければ、立ちようて「何

かねて、禪門に、「子息某、妾を打ちて侍る」と訴へ申しければ、「不思議の事なり」とて、彼の俗を召して、「實に母を打ちたるにや、母しか〳〵と申すなり」と問はる。「實に打ちて侍る」と申す。禪門「かへす〳〵奇怪なり。不當なり」としかりて所領を召し、流罪に定めにけり。事にが〳〵しくなりける上腹もやうやくゐて、淺猿しく覺えければ、母また禪門に申しけるは、「腹の立つまゝに、この俗われを打ちたりと申し上げて侍りつれども、實はさる事候はず。大人氣なく。彼を打たんとして、たふれて侍りつる妬さにこそ申し候ひつれ、まめやかに御勘當候はん事は、あさましく候、ゆるさせ給へ」とて、けしからず打ち泣き申しければ。「さらばめせ」とて召して、子細を尋ねらる。「實にはいかで母をうち候べき」と申す。「さては、など始めより有の儘に、申さゞりける」と禪門申されければ、母が打ちたりと申さん上は、我身こそ過にもしづみ候はめ。母を虚誕の者には如何なし候べき」と申しければ、「いみじき至孝の志ふかき者なり」とて、大に感じて別の所領をそへて給はり、ことに不便の者におもはれけり。末代の人の心には、ありがたくこそ。

り。奉行の人々より始めて、上にも下にも聞き及ぶ類「かゝる珍しく。哀なる沙汰、未だきかず。至孝の志もふかく、世間のことはりも辨へ存ぜるにこそ」とて、ほめのゝしりけり。心ある人は涙をながしてぞ、感じける。さて件の物を以て、兩人の亡夫の菩提をとふらふべきとぞ下知せられければ、國に下りて、兩人相合せて、二人の亡父の爲めに、佛事いとなみける。實にありがたき賢人なり。されば人の物を。借り置きたらんをば、相構へて怠なく返すべき者なり。攻むる事なをざりなれば。兎角のびて年月を經て、若し其の主死ぬれば、無沙汰なる事も、世におほく見きこゆ。一旦此世にては、嬉しき心地ありとも、生を經ても遂に返へし。果すべき道理たがふことなし。この道理をわきまへて、あひかまへて人のものをば疾く返しつぐのふべし。ゆめ〳〵心あらん人、怠を存ずべからず。

一四、母の爲めに忠孝ある人の事

鎌倉の故相州禪門の中に仕候の女房ありけり。腹あしく、たて〳〵しかりけるが、或時成長の子息の同じく仕ふまつりけるを、いさゝかの事によりて、腹を立て打たんとしけるほどに、物にけつまづきて、いたくたふれて、いよ〳〵腹をすゑ

して後、二人の子ども、親共のむつびしが如く。いひかよはしけり。まづしかりけるが、子夢に見けるは、亡父來りて、よにもの悲かしき氣色にて云ひけるは、「某、殿の物をいく〱らかりて。返さゞりし故に、あの世にて、せめらるゝ。彼の子息のもとへ返すべし」とつぐ。「夢さめて親の時の後見に、事の子細を尋ねければ、「さる事侍りき、御夢にたがはず」といふ。「さては不思議の事なり」とて、いそぎ員數の如く沙汰して、彼の子息の許へ、かゝる子細侍れば、かの借物沙汰し進ずるよし申し送りけり。かの子息の返事に申しけるは、「この物爭か我身には給ふべき。あの世にて、某が父せめてまゐらせん上は、又かさねて給ふべからず」とて、返へしけり。又おしかへし送りて云はく、「此世にてさたし參らせざらんに就きてこそ、あの世にては攻められ參らせ候へ。親のなげきをやすめ、夢の告げをたがへじと思ひ侍べり。まげて留め給へ」とて又やりけり。又云ひけるは、「親の事を重くも思ひ、いたはしくも存ずることは、誰も劣り參らすべからず。さればあの世にて、親にこそとらせたく思ひ候へ。爰にて我身に給ふべき事候はず」とて返しけり。たび〱問答往復して事ゆかざりければ、鎌倉に上りて對決しけ

奈良の都の八重櫻と聞こゆる、當時も東圓堂の前にあり。當初時の后上東門院興福寺の別當に仰せて、彼の櫻を召しければ、堀りて車に入れて參らせけるを、大衆の中に見あひて、事の子細を問へば、しかじかと答へければ、「名を得たる櫻を、左右なく參らせらるゝ、別當かへすがへす不當なり。僻事なり。且は色もなし。后の仰せなればとてこれ程の名木を爭か進すべき。止めよとて、やがて貝ふき大衆もよおして、打ちとゞめ、「別當をもはらふべし」と、のゝしりけり。此事によりて、いかなる重科に行はれれば、我身張本に出づべしとぞ云ふなる。此事、女院聞こしめして、奈良法師は心なき者と思ひたれば、わりなき大衆なり。眞に色ふかしとて、さらばこの櫻をば、我が櫻となづけんとて、伊賀國に、余野と云ふ庄をよせて、花かきの庄と名づけて、墻をせさせられ、花のさかり七日宿直をして、是れを守らせらる。今に彼の庄、寺領たり。昔もかゝるやさしき事ありけりとぞ。

一三、亡父夢に子に告げて借物を返へす事

中比、武州に境まぢかき程に住みて互に云ひむつぶる俗ありけり。一人はまづしく、一人はゆたかなりける。さるまゝに常に借物なんどしけり。さて共に死去

弓箭の道人にゆるされ、心もたけなく器量も人にすぐれたりけるものから、心もやさしくして、民の煩を思ひ知り、よろづ優なる人なりけり。所領の内に山寺法師ありける。八重躑躅を持ちたりけるを、ほしく覺えて請はゞやと思ひながら我が心をもて思ふに、かれも愛し思ふらん、如何なさけなく乞ふべきと思ひ返して、日來すぐるに、或時彼の僧大なる過ありて、まとふべき事ありけるに、藤兵衛尉某と云ひて、檢斷しける侍に仰せ付けて、此科料に、七匹四丈の絹をやまいらする、八重躑躅をや進らすると云ひて、過におこなへとぞ下知しける。さて藤兵衛尉、行き向ひて、しか〳〵の仰せ也といへば、此僧「七匹四丈をこそまゐらせ候はめ、此の躑躅をもつて心をもなぐさめ候へば」と申しけるを、「主の心を知りて絹を參らせては、なほ御不審のこることあるべし、たゞ躑躅を參らせ給へ」と云ひければ、力なくて堀りて奉る。さて、「檢斷の職は、半分の得分なり。その所に躑躅のおろし枝一とるべし」と云ふに、「絹を進ずべし」とておしみけれども、おして取りてけり。共にやさしくこそ。彼の躑躅今にあり。近代はかゝる人ありがたくこそ聞ゆれ。

人なり。故鎌倉の右大將家の御時、武藏の江戸子細ありて、彼の江戸をめして、葛西に給びけるを、葛西の兵衞申しけるは、「御恩を蒙り候へば親しき者共をもかへりみんためなり。身一つは、兎ても角ても候ひぬべし、江戸したしく候。僻事候はゞ、召して他人にこそたび候はめ」と申すに、「いかで給らざるべき、もし給はらずば、汝が所領も召し取るべし」としかり給ひけれども、「御勘當蒙るほどのことは運の極りにてこそ候はめ、力及ばず。さればとて給はるまじき所領をば、爭か給ふべき」と申しければ、江戸も得とり給はず。上代は君も臣も仁義あり。芳心あり。末代は父子、兄弟、親類、骨肉あだをむすび、たてをつき、問註對決し境を論じ、處分を諍ふこと、年にしたがひて、世に多く聞こゆ。仁王經には、(一)六親和せざれば天神祐けず」と說きて、父子兄弟等の不和なる時は、天神地祇も人をたすけ守り給はず。さるまゝには飢饉、疾疫、兵亂等の災難しば〳〵きたる。心うき末代の習なり。これたゞ人の心により、果報のつたなくして、惡業を恐れず、善因を修せずして、(二)三災刧末に近づく、業增上力のいたす所也。

尾州に山田次郎源重忠と云ひしは、承久の時、君の御方にて打たれし人なり。

(一)六親。父、母、妻、子、兄、弟

(二)三災。水災、火災、兵災。

く候まゝに、見たすくるに及び候はず、且は親のかたみにも、彼の所領の中に屋敷一所、思食あてさせ給ひなんや。面々に各々御恩を蒙りたりとこそ、存じ候はんずれ」と云ふに、「その殿は何處にましますぞ」と問ふ。「是れに相具して參りて候へども、便宜を伺ひて、左右なく召さず」と云へば、「いかに是れこそ申させ給はめ相計ひ候ふべし」と、たのもしげにぞ云ひける。さてよび入れて、後來とて酒すゝめて「引出物まゐらせん」とて、內へ入りつゝ、度々に買ひ取りたる、文書を皆とらせて、「恐れながら子息とこそ。憑みたてまつらめ」と云ひければ、あまり思はずの事にて、あきれてぞありける。「是れほどの御計ひは、思ひもより候はず」とて、各々悅んで歸りぬ。さて彼の子息、親とも主とも、一筋にたのみ入りて、當時ありと聞こゆ。末代にも是れ程の慈ある人承り及ばず。まめやかにありがたく、覺えて書置き侍るなり。

故葛西の壹岐の前司といひしは、秩父の裔にて、弓箭の道に得たりし人なり。輪田の左衛門、世をみだりしとき、葛西の兵衛といひて、あら手にて、鬼こゝめのやうなりし。輪田が一門をかけちらしたりし武士なり。心もたけく慈もありける

悲もふかく芳心ありと聞こゆ。洛陽の人とかや承りし。近所の地頭、世間不階にして、所領を年々にうりけるを、たび〳〵に皆買ひ取りてけり。さてかの地頭、世間もをとろへ、遂に身まかりぬ。只一人ありける子息、財寶も所領もなければ、ゆづるに及ばず。ひたすらまどひ者にてぞ侍りける。さすが一門ひろき者にて、親しきあたりに通ひありきて、命をつぎけり。其れもみな小名なれば、哀みながら、思ひあつる事まではなかりけり。さすがに見るもかはゆかりけるにや、一門の者共よりあひて申し談じけるは、「某の子息、まどひはてゝ侍べる事、不便の次第なり。彼の親の所領買ひたる人は、芳心もあり、慈悲深き人なり。世間不足なければ、各々列參して、屋敷一所乞ふて取らせばや。さりとも空しからじ」といふ。「さるべし」とて、一門集りて行きてけり。主對面して、酒すゝめなんどしけり。「訴詔申すべき事候て、一門列參仕れり」といふ。「何條事にか」といふ。「知ろしめされて候某と申しゝ者は、各が一門にて候ひしが、世間不調にして、僅の所領こと〳〵く沽却仕りき。是れに召されて候とこそ承り候へ。彼の子息のたゞ一人候が、まどひ者にて候を、不便に存じ候へども、各々が身も云ひ甲斐な

眼賢き者にて、この主は不實の者なり。見つけたる者は、正直の者とみながら、なほ不審なりければ、彼の妻を召して別の所にして、ことの子細を尋ぬるに、夫が詞にたがはず、この妻も正直の者と見て、判じて云はく、「夫妻共に正直なればこそ引籠ずして、ふれて主といふ者出來るに渡さんとすらめ。いかでか一つを引きこむべき。さらば六ながらこそとらめ。今主となのるもの、七ありけるを落したらば、さては此軟挺にはあらざりけり。七あらんを求めて取るべし。これは別の軟挺なりけり」とて、六ながら夫妻にたびけり。宋朝の人、いみじき成敗とぞ、ほめのゝしりける。心直ければ自から、天の與へて寶を得たり。心まがれば冥のとがめにて、財を失ふ。返へす〳〵も此理をわきまへて、正直にして冥の加護をねがふべし。聖徳太子の御ことばには、「謀計は眼前の利潤たりと雖も、終には佛神の罰當る、正直は一旦の依怙にあらずと雖も、必ず日月の哀を蒙る」と。まことなるかな。心あらん人、深くこの心を存すべきなり。

一二、芳心ある人の事

武州に世間ゆたかなる地頭あり。先世の布施の因緣にや、福徳のあるうへ、慈

を修し出家を供養し、出家の教導によりて、天に生ずべき夢とこそ佛は說き給ひけれ。頭をなで衣に恥ぢて敎に隨ひ、道に趣くべし。誰か袈裟の下に人身をおしまず、(一)福田の中に荊棘を生ぜんや。

一一、正直の人寶を得る事

近年、歸朝の僧の說とて、或人の語りしは、宋朝にいやしき夫婦あり。餅を賣りて世をわたりけり。あるとき道のほとりにして餅を賣りけるに、人の袋をおとしたりけるを見ければ、銀の軟挺六ありけり。家にもちて歸りぬ。妻心すなほに欲なき者にて、「我等は商ふて過ぐれば事もかけず。此の主いかばかり歎き求むらん。いとほしき事なり。主を尋ねてとらせよ」と云ふ。男も「さるべし」とて、普くふれければ、主と云ふもの、出で來て是れを得て悅びて、「三をば上つらん」と云ひて、既に分つべかりける時、思ひ返して煩をいたさんために、「七つこそありしに、六あるこそ不審なれ。一はかくされたるにや」と云へる。「さる事なし、もとより六つなり。一つひきこむる心地ならば、なにしにかやうに披露して上るべき」と云ふ。かやうに論じて、果ては。國の守のもとにして是を斷らしむ。國の守、

(五)福田。前出。

唐の育王山に、或る僧二人、布施をあらそひて、かまひすしかりければ、其の寺の長老、大覺の連和尚、此の僧を恥ぢしめて云はく、「ある俗、他人の銀を百兩預りて、置きたるけるに、彼の主死して後、其子に是れをあたふ。子是れをとらず。親すでに與へずして、其許によせをく。某の物なるべしと云ふ。彼の俗、我はたゞ預りたるばかり也。讓り得たるにあらず。親の物は子の物なりとて又、返へしつ。たがひに諍ひてとらず。はては官にいでゝ判斷を乞ふに、共に賢人なり、云所あたれり。すべからく寺に寄せて亡者の菩提をとぶらへと判ず。此事まのあたり見きゝし事也。世俗塵勞の俗士、なほ利養をむさぼらず。況や(一)割剃出家の沙門、何ぞ世財をあらそはん」とて、法に任せて寺を追ひ出してけり。末代の習在家の富貴なるは(二)著もうすく、信もあり禮もあり。出家の貧賤なるは、貪欲ふかく、智もなく德もなし。或は布施をおくりて、(三)導師をのぞみ、或は祈禱を事として財產をのぞむ。權を恐れ威をたのみ、利養恭敬を心とする故に、釋子の風にそむき、出家の義をかく。昔、王の夢に、出家の人の頭をふみて、(四)白衣あなをいづと見たるは、滅後、遺弟の沙門は、破戒にして惡趣にをち、在家の人は善

(一)割剃。頭髮をすりこぼてるもの。
(二)著。執著。
(三)導師。佛師などの師主。
(四)白衣。俗人のこと。出家は黑衣、俗人は白衣。

（一）生死の稠林。生へしげれる林に生死のはげしきを譬へたる語。

なり。去ぬる文永年中の事なれば、無下にちかき事なり。或人物語りし侍りしが、随喜の心切にして、かゝるためし人にも聞かせ、世のすゑまでも云ひ傳へて、人の心のまがれるをも引きなをす端ともせんと思ひて、かきつけ侍べり。この女人、金をひきかくしたらば、非分の事なれば、盗賊にもかすめられ、由なく失なふ事もあるべし。たとひありとも、幾程かあらん。後生はまた佛物を犯す罪ふかゝるべし。すでに佛をつくる功徳を得べし。かた〳〵ありがたくこそ。正直の者をば、天これをたすけ幸を得しめ、諂曲の者をば、冥これを罰して禍をあたふ。（一）生死の稠林をいづるには、心直くして出やすしと云へり。曲れる木は稠林出でがたし。直は出やすきが如くなり。正直なれば神明も頭にやどり、貞廉なれば佛陀も心を照す。現當二世、無爲安樂なるべき事、正直にはすぎず。『法華』には、「柔和質直のもの、則ちみな我身を見ん」と說きて、心やはらかに直なる者、我が身を見るべしと、釋尊も說き給へり。いかにも諂曲の心をすてゝ、正直の道に入るべきをや。

一〇、正直の俗士の事

を申すなり」といふ。「何を御わすれ候ひつる」と問ふ。その時かなしくて、馬よりおりて、「しか〳〵の願を發して、金を五十兩入れて候ひし、守袋を忘れたり」にと有儘にかたりければ、「妾こそ見つけて候へ」とて、したゝめたりしまゝにて、取り出して取らせければ、あまりのことにて淺猿かりけり。さて、「これは、亡せたる物にてこそ候へ、十兩は參らせん」といへば、「十兩ほしくば、五十兩ながらこそひきこめ候はめ。佛の御物なり。いかゞ少しも給ふべき」と云ひければ、中々とかくの子細に及ばず、「下向の時、よく〳〵申すべき旨あり」とて、やがて其れより、また上洛して本尊思ひの如く造立して下りさまに、此女人を尋ねて、「抑いかなる人にてをはするぞ」、なんど語らひ聞こえければ、「京の者にて侍るが、親しき者のみなうせて、緣にふれて下りて侍るが、白地と思ひしほどに、此宿に一兩年すみ侍り」と云ふ。「さては何處くも同じ御旅にこそ、いざゝせ給へ、小所領なんど知行する身なれば、世間うしろみてたべ」といへば、「承りぬ」とて、やがて具せられて下りて、世間うしろみて樂しく心やすくて、當時ありと聞こゆ。

上古には、かゝるためしもある。當世には、まめやかにありがたき、正直の賢人

(一)二世。現世と來世。

り。高野大師のたまはく、「殺盜を行ずる者は現に衣食の利を得。人を謗じ法を謗ずるは、己において、何の益かある」と宣へり。げにも當來の苦あれども、殺盜は眼前の利あり。人法を謗するは(一)二世の利なくして長劫の苦まぬかれず。罪障をおそれん人、よく／＼謹み恐れ給ふべし。妄情をほしひまゝにして、金言をうたがふ事なかれ。

九　正直の女人の事

近比、奧州の或る山寺の別當なる僧、本尊を造立せんと年來の思ひ企てゝ、金を五十兩、守の袋に入れて首にかけて、上洛しけるほどに、駿河の國原中の宿にて、ひる水あびける家にて、この袋をわすれて、菊川にて思ひ出したりけり。口惜く淺猿かりけれども、ちから及ばず。今は人の物にこそなりぬらめ、歸りて尋ぬともあらじと思ひて、上洛して空しく下向せんも本意なく覺えて、形の如く本尊をかきたて、まつりてぞ下りける。さて原中の宿にて、「下人にこの家とこそ覺ゆなれ」といひて、見入りて通りけるを、家の内に。若き女人ありて、「何事を仰せらるゝぞ」といふ。「上洛の時、物を忘れたりしが、この御宿とおぼえ候事

寺ぢかき在家人に樹神つきて申しけるは、「我等は此木をこそ、家にたのみて住むに、情なく僧の切り給へるあさましき事なり、制止まゐらせて給べ」といふ。「さらば僧にこそ付きてもたゝりもせめ、よその者をかく攻むべきやうやある」といへば、「我等は僧の袈裟衣の風にもあたり、陀羅尼の聲を聞きてこそ、苦患もたすかる事なれ、僧をばいかでか惱し奉らん。たゞ、かく申してたべ」と云ひければ、僧共きゝて、切り殘してけり。この事は、十餘年が前なり。同じ國、味鏡と云ふ所にも、すこしもたがはず。或僧、木を切りて堂の修理にするに、兩度まで人に付いて樹神なげきけり。「僧はおそろしければ申さぬなり。制し申せ」と云ひけり。此は文永年中の事なり。心あらん人、佛法の結緣むなしからぬ事を信じて、袈裟の德、解脱の期あるべき事をわきまへて、一旦の過をそしりて、長時の苦をうくべからず。袈裟をかくるほどの者は、彌勒佛より後うちつゞき、佛出世あらんに得道すべし。いかにさかるとも、現在の千佛の後の後の樓至佛の時、一人ものこらず得道すべしと、經文分明なり。仰いで信ずべし。佛弟子の過をとくは、有戒にもあれ、無戒にもあれ、萬億の佛身より、血を出すに過ぎたりと、說かれた

み見て、遠き德を知らず。あながちに是れをそしる。『律』の中には、「僧は栴檀にして、また蒺藜なりと云へり。德を見て是れをあがむれば、栴檀のごとく妙なり。過を見て此れをそしれば。蒺藜のごとく身をやぶる。上の諸文はみな如法の袈裟、如法の比丘の犯戒にとりて論ず。我國の作法たゞ頭をそり、衣をそめながら、如法の衣鉢もそなへず、受戒とて戒壇走り廻りたれども、一戒をもたもたず、袈裟の德もあらじとぞ覺ゆるに、雷神世間の小袈裟の、如法ならず里法師の僧と云ふべきにも非らざるをたすく。せめても袈裟の德いみじくして、似たるも敬ふにこそ。經の中には、金のなき國には、銀を以て寶とし、銀の無き國には銅を以て寶とし、乃至白鑞まで寶とす。此の如く得道得定、持戒、の比丘なからん國には、有戒無戒をえらばず、形の似たるをあがむべしと見えたり。堅誓師子の心ならば、內心の得失を見ず。たゞ外相をあがむと見えたり。況んや末代なり。邊國なり。如法の僧寶希なるべし。

尾張の國、中島と云ふ所に、遁世の上人、寺を建立して僧五六人止住して、如法の衣鉢なんど帶して侍べり。其所に古木の大なるを造營のために切りけるに、

を袈裟の内にかくして、或る時彼の師子の許へ寄るに、僧の形を見てなつかしげにて、尾をふりてよるところを、箭をぬきいだして此を射る。師子、獵子なりけりと知りて、走りかゝりて食はんと思ふ。又思はく袈裟をかくるほどの者は、たとひ心中に善心なくとも、此の緣つひに佛になるべし。其の形佛子に似たり。いかでか害すべきと思ひて、忍びて文を誦して死にをはりぬ。これ釋迦の因行なり。華色比丘尼たはふれに、袈裟をかけたりし因緣に、つゐに(一)羅漢の果を得たり。また南山大師に、威陀將軍語り給へること侍りき。漢土の僧は天竺より慚愧の心あり。隱して非をなせども、慚愧の心ある故に、その百の非をわすれて、一の德もあれば、諸天これる守る。佛勅をうけて人間に下りて、佛法をきゝ佛弟子を守る。人間の臭きこと、上四十萬里なり。諸天は淸淨なりといへども、忍びて下る。犯戒の人をば魔に犯さしめじとて、泣く／＼これを守るといへり。人の親の慈悲、子をあはれむも、過を忘れて、少しの德もあれば是れを愛す。佛弟子も其の非あれども、一戒をもたもち、袈裟をもかけ、何れの佛法にも功を入るれば、(二)冥衆は捨て給はず。遠き益を見て近き過をわすれて守り給ふを、俗士は一旦の過をの

(一)羅漢。前出。

(二)冥衆。人間の眼に見えざる、くらきところに居たまふ聖者のむれ。

の難なし。龍宮の門には袈裟を置いて、(一)金翅鳥の難をまぬかる。(二)舍利をもあがむること同じ。袈裟四寸をも持てるは、軍の中にして難なしともいへり。『十輪經』には或る國王、比丘の非法あるによりて、是をしばりて鬼神のある嶋へ流しつかはす。鬼神ども集りて食せんとするに、母餓鬼が云はく、「是れは佛弟子なり、赤き袈裟をかけたり、かけ乍らしばりてあるを見て、我れ聞く袈裟をかくるほどの者は、かならず解脫の期ありて佛となる、いかでか是れを犯さん」とて、偈を說きて子共の飢ゑ〳〵として食せんとするをも、制止して繩をときて、これを守りて菓を拾ひて養ふ。七月すぎて。王の使行いて見るに、命たえず色おとろへず。事の次第をきゝて、王に奏するに、「鬼類なほ袈裟の德を敬ひ、佛弟子を貴ぶ。人倫として信敬の心なからんや」とて、過を懺悔して召返してあがめ給ひけり。

昔、堅誓師子と云ひて、金色の文ある師子ありけり。獵師ありて、この師子を取りて皮をはぎて、王に奉らんと思ふに、この師子男子だにも見れば、逃げかくる。僧には近づきてをぢす。これを見て獵子、にはかに法師になりて、毒の弓箭

(一)金翅鳥。鷲の如き鳥といふ。假想上の鳥なり。
(二)舍利。前出。

行を德と思ひ道俗に向ひて自歎し、濫行非法にして放逸なる人多し、福田の德もあるべからず。心あらん人、聖教によりて、我が非をかざる事なかれ、天人、南山大師にかたりて、「破戒の人を守らずば、たれか佛法をひろめむ」といへり。是は正見の僧なるべし。邪見ならば利益もなし。天人何ぞ是れを守らん。

八　袈裟の德の事

去ぬる文永七年七月十七日、尾張の國下津の宿に雷おちて、道ゆく馬三疋を損して、小家にはしり入りて、帷にけさかけて、雙六うちて居たる法師のせなかに、かきあがりて、帷をば散々にかきさきて、袈裟をばすこしも損せず、法師もつゝがなかりけり。次の日事の縁ありて、その近邊にて慥にきゝ侍りき。不思議の事にて、年號日月も覺え侍べり。『十輪經』『悲華經』『大悲經』『心地觀經』等に、袈裟の功德くはしく說けり。誠にめでたく覺えて、驚くべきにあらず。但し經の中には如法の袈裟にとりて、其の功能あり世間の小袈裟如法ならず。然るに今この德あり。是れも『大集經』には袈裟のかたはしといへり。されば德あるべしと見えたり。『心地觀經』には袈裟の絲一すぢをも身に帶しぬれば、大海をわたるに毒龍等

間の福業あれ共、菩提にうとし、此經に「我れ無量の佛に値ひて供養せしに、多劫の間たゞ(一)轉輪王の位を得て、菩提を得ず。諸法實相を悟りて、我れ佛となれり」と說き給へり。されば有相の福は次の生に威勢ありて天に生じ、若は國王、大臣、長者ともなれども、眞實の智慧道心なくて、威勢にほこりて衆生を惱亂し、罪業を造りて第三生に必ず惡道に入るなり。著相なくして福を作るは道の助なり。執心ありて善を修するは、出離にはうとし。福業に道をさへ道を助くる二の樣、たゞ著の有無による。能々わきまへ存ずべき者なり。『佛藏經』は道人の見るべき經なり說法せん人、いかにも、無相の法門を說き、正直に說くべし、我が非をかくさんとて、因果をみだるべからず。『十輪經』には、末代には正見僧とて、我身非法なりとも、佛法の道理を正直に說き、善惡因果をみだらず、生死涅槃の差別を說かば、(二)福田たるべきよし見えたり。『心地觀經』にも、「此人をば僧寶とすべし」といへり。(三)羅什三藏、濫行になりて後は、寺の邊に住して縵衣をかけて、說法の度ごとに、「まづ我身は泥のごとし、我がいたす言は蓮華のごとし」とぞ申されける。末代には我身の非をしらず。持戒の人をば、下だし。かへりて非法の

(一)轉輪王。一世界を統ぶる王といふ。

(二)福田。前出。

(三)羅什三藏。前卷に物語あり。

へり。

七　有所得の說法の事

邪命說法と云ふ名目は、『佛藏經』に出でたり。有所得とも云へり。同じことなり。世間の人は有所得と云ふは、布施をのぞみてする說法と思へり。經中には、(一)諸法實相をしらずして、有爲の法を說きて、無相の理を說かざるは邪命說法なり。(二)無所得の道理を說かざるがゆゑに、有所得と云へり。かゝる說法は(三)三千大千世界の人の眼をくじるよりも罪なり。また日夜に十惡を作る者よりも、をもき罪なり。十惡を造る者をば、人これを師とせず。其の身苦に墮すといへども、人を引て墮すことなし。有所得の說法は、人をして生死の業をまし、實相の理に遠ざからしむと云へり。まして布施の希望は名利のためなれば云ふにたらず。但し『正法念處經』には、「名利の心なくして、利他の思に住して法を說くは、上品の法施、勝他の心にて說くは中品の法施なり。名利のために說くは下品の法施なり。天上の智慧の鳥となりて、法音をさへづる」といへり。此は法をありのまゝに正直に說きて。しかも利益を思ふにや。『佛藏經』の說は、實相に違すれば、世

(一)諸法實相。前出。
(二)無所得。前出。
(三)三千大千世界。前出の三千世界を小三千世界といひ、これを千倍せるを中三千世界といひ、中三千世界の三千倍を三千大千世界といふ。

男女も、理智の二法に出でぬよしばかりを聞きて、凡情の染著をもつて、定慧冥合なんど名けて、不思議の非法邪行をはゞからぬも、文の料簡のあしき故なり。委く申さば、教相ひろくして記しがたし。大綱、法の體は迷悟なく、凡聖なし。眞空寂滅の故に、機情には是非あり、善惡あり、仍て煩惱業苦たえず。しかれば行門は機情をとゝのへ、見解は法體をしる。いづれの佛法も内に染著なく、外に邪業なき通相なり。眞言、念佛、禪門等の、行業の精進といへるは、いさゝかも妄念雜はり起らぬ時を云ふなり。然るに修行のとき妄念のすこしまじはるは、酒に水少し入れたるがごとし。妄念のみ多くは、水に酒を入れたるがごとし。されば念佛坐禪等の行門のとき、妄念おこらば、妄念くさき念佛、眞言なり。妄念のみ多くは念佛くさき妄念なるべし。目出たきたとへなり。苗の草にまじはりて長ぜぬが如し。妄念の草に善苗は長ぜざるなり。凡心を養ふて妄業をなさば、一切の佛法にそむくべし。かゝる邪見近代さかりなり。此の如きたぐひのあらん國は、災難來るべしと『佛頂經』には見えたり。よく／＼恐るべし／＼。たとひ破戒なれども、正見なるは人天の師となる。持戒なれども邪見なるは、國の仇なりと云

法師も存じて候。今日々來の本懷申し開くべし」とて、佛經の釋は、たゞ大方ばかりにて、酒に水入るゝ罪障を勘へあつめて、少々はなき事までさしまじへて、思ふほどに云ひけり。さて說法をはりて、尼公共の邊の聽衆まで、皆よびあつめて、大なる桶に酒を入れて取り出です〵む。能說房、一座せめて。杯とりあげて呑みけり。此尼公、「あさましく候ひける事かな、さけに水いるゝは、罪にて候ひけるを、知り候はざりけるよ」と云ふに、水のすこし入りたるだによし、今日いかに目出度あらんと思ふ程に、能說房一度のみて、「あ」と云ひければ、如何によかるらん、感ずる音かと聞くほどに、「日來はちと水くさき酒にてこそ候ひつるに、これはちと酒くさき水にて候は如何に」と云ひければ、「さも候らん。酒に水いるゝは罪ぞと仰せられ候ひつる時に、是は水に酒を入れて候」とて、大桶に水を入れて、酒を一鍉ばかり入れたりける。此の尼公、興懷にしたりけるにや。また惡しく心得たりけるにや。佛法も詞を惡しく心得つれば邪法になる。近代、變成就なんどいふ眞言世に多く侍り。おほきなる誤の法なり。佛知見の悟の境界、凡情つき、執心なくて能所わすれ、彼我たえて、金剛の幻不思議の妙用の時、陰陽も

をあさましき事なり」と思ひあへり。されども眞實の慈悲をもつて、惡口の心はなくて、佛法の道理を思ひ入れてとき給ひける故に、その感ありて、この山臥(一)方丈へ參して、「今日の御說戒聽聞仕り候へば、げにもかゝる形、佛法の敎にかなひても覺え侍らず、いかゞ仕り候べき」と、まめやかに思ひ入りたる氣色にて、打ちくどき泣く〳〵申しければ、「さらば持齋して此寺にをはせかし」とのたまひければ、「然べく候」とて、やがて遁世してけり。彼の德もいみじく、山臥も宿習ありけり。哀にこそ。

六　能說房の說法の事

嵯峨に能說房と云ふ說經師ありけり。隨分辯說の僧なりけり。隣に酒を賣る家の德人の尼ありけり。能說房きわめたる愛酒の上戶にて、布施物をもて、一向酒をかひてのみけり。或時、此の尼公佛事する事ありて、能說房を導師に請ず。近邊のもの是れをきゝて、能說房に申しけるは、「此の尼公の酒をうり候に、一の難に、水を入るゝによりて思ふ程もなし。今日の御說法の次に、酒に水入れて賣るは罪なるよし、こまかに仰せられ候へ」といふ。能說房、「各の仰られぬさきに、

(一)方丈。僧の居間のこと。もと惟摩居士の室か四方一丈なりけるより此名あり。

の二衆は、(一)優婆塞。優婆夷なり。其位にしたがひて、(二)五戒八戒をもたもち、十戒、(三)具足戒、菩薩戒なんど持つに、出家の形となれるも、戒もたもち守ることなし。學し知らざれば、たゞ俗の如し。出家は(四)三衣一鉢を持して戒を本として、其上に定慧の修行、顯密禪教を習ふべしとみえたり。三國の風儀かはるべからず。然るに我國も上代は鑒眞和尙、唐朝より來りて。如法受戒の作法ありけれども、久しからずしてすたれつゝ、たゞ髮をそり衣を染て、受戒といひて。戒壇はしりめぐりたるばかりにて、(五)化制のをきてもしらず、受隨のしなもわきまへずして、空しく(六)臈次をかずへ、いたづらに(七)信施を受くる僧のみ國にみてり。さるまゝに異類異形の法師世間に多し。なまじひに佛弟子の名を得ながら、或は妻子を帶し、或は兵杖をよこたへ、狩すなどり殺生偸盗なさずといふ事なし。かかるまゝに、(八)布薩なんといふ事は名をもしらぬ者もあり。此座にも見え侍べり。男かと見れば、さすがに袈裟に似たるものかけたり。また烏帽子にもあらず、童にもあらず、法師にも非ず、さるものゝ候ぞや」と。山臥のありけるを見て宣ひければ、僧共は「かゝる心うきなき事のたまふものかな。山臥はたてゝしき物

(一)優婆塞。前出。
(二)五戒八戒。前出。
(三)倶足戒。あらゆる戒律をみな持つこと。
(四)三衣一鉢。前出。
(五)化制。化は益を得ることにて、定慧二字をいひ、制は惡を制することにて戒學をいふ。
(六)臈次。年齡の順序。臈は出家してよりの年齡をいふ。
(七)信施。施物のこと。
(八)布薩。前出。

ては御悦なり。後生の障とならぬ程のさかえ身をたすけて、眞實の道に入る方便のためには、今生も自から樂みある利生はあるべし。執心もふかく、染著も重き人は、かゝる方便をもつて引導する故に、七難に値ふにこそ。是れ私の愚推なり。されば佛にも神にもつかふる人、難もあり災も來らん時、佛神をうらむる事あるべからず。いかなる方便にやあらん。また業力にて神力業力にかたねば、御方便も及ばぬにや。また信心まことなく、行業をよばぬにこそと思ひて、我身を誡しめ、我心をはげますべし。よしなく人をそねみ、法をうたがひ、神をうらみ、佛をそしる事あるべからず。

五　榮朝上人の說戒の事

上野の國新田の庄、世良田の本願、釋圓房の律師榮朝上人は、慈悲ふかく智慧かしこくして、顯密ともに學し、說法說戒まことにたつとかりければ、近國の道俗歸依渇仰して聽聞しけり。或時の說戒に、「我國邊地にして、佛法時を追ふてすたれ、法如の僧のなきことの悲しさ、僧と云へは、(一)戒定慧の三學を宗として、出家の五衆といふは、(二)比丘、比丘尼、(三)沙彌、沙彌尼、(四)式叉摩尼なり。在家

(一)戒定慧。戒律と禪定と智慧と。
(二)比丘。乞士と譯す出家の僧。
(三)沙彌。前出。
(四)式叉摩尼。正法學と譯す。沙彌尼より比丘尼に入るまでの二年間の女。

めなくば、何のたのみかあるべきと云ふことはりを申したてられたりけるに、萬人袖もしぼるほどなり。げにも眞實の行は一心に思ひ入れてするこそ、決定の業となる事なれば、難にも値ひ歎きもある時、至誠の心おこる事なり。千手觀音の持者の(一)七難にあふといふ事あり。たしかの本說は見侍らねども、道理を思ふにはさもありぬべし。佛につかへば現世安穩、後生善處こそあらまほしけれども、人の心おほくは今生の樂にほこりぬれば、後生菩提のつとめを忘るゝたぐひ、難にもあひ歎もある時、世間の執着もうすく、因果の道理をも恐れ、身あぶなき時は心おどろきて、一心に菩提の道にも思ひ入れぬべし。かゝるべき機には善巧方便にて、難にもあはせしめ給ふべきなり。この難は、世間にはなげきなり、佛法には悅びなり。世間のなげきは一旦のなげき、當來の苦は、長劫の愁へ、今世の榮は夢の中のよろこび、後生の樂は覺のまへの悅なり。後白河の法皇は、千手の持者にて、七難にあはせ給ひたりと申し傳へり。平家のために、鳥羽殿に打ちこめられて、今夜うしなはれぬと思食して御行法ありけるぞ、一期の御行の中には、餘念なく眞實に菩提の妙因にもなりぬらんと覺え侍る。此の難は即ち佛道にむけ

(一)七難。火難、水難、羅刹難、刀杖難、鬼難、枷鎖難、寃賊難。

寵の便宜なりければ、二十餘座供養ありける中に、ことに三座耳目を驚かす說法ありけり。其の一座の說法。聽聞したる人の語りしは、「施主段に、我朝に、至つて御果報目出たきは隱岐の御所、至つて御果報わろきは持明院」と申されければ、人耳を驚しけり。隱岐の御所の御果報は、末代の賢王明主にて、諸道を興し、榮耀めでたく御座せし御事、申すはかりなかりしかば、今生は思食す御事なく、一期御榮えありき。かくて御臨終あらば、御往生はたのみなかるべきに、切り續いて後生の御果報目出たかるべきにて、世亂れて遠國へ移されさせ給へる事、一旦の御歎ありといへども、是の御歎を善知識として、先業の過をもはたし懺悔し、當來の苦患を思食しり、罪を恐れさせ給ひて、此の如くひとすぢに、後生の御ため御逆修もあれば、往生淨土の素懷も、などかとこそ、たのもしく覺え候へ。さればば今生後生の御果報、共に目出たかるべし。持明院は、一期御心にもまかせずして、御思出もなくて、空しく御年たけぬ。さらばこれを緣として、後生の御行もあらば、來生はたのもしかるべきに、御位の事ありて、且の御樂に後世の御勤なくは、二世ともに御果報わろき御事にてありぬべし。今生は一旦の榮耀、後生の御つと

ても造るべし。況や眞實の父母の御堂の燒けぬるをば、一人しても力あらば造りて奉るべし。まして隨分の資財をなげて、などか助成し給はざるべき」と、目出たく辯說ありて申し立てらる。諸人袂をしぼりけり。さて申されけるは、「此事流石道理なれば、面々に奉加の志はましますらん。されども凡夫の心のつたなさは、家に歸り給ひなば、明日進ぜん、明後日奉加せんなんど思はん程に、さしあたりたる世間公私のぞめぎに打ち忘れて、おほくは空しき事なるべし。奉加せんと思ひ給はん人は、やがて此の座にたてまつり給へ」と、せめられければ、衣ぬぎ小袖ぬぎ、直垂、帷、太刀、刀、はら／＼と、あるほどの人奉加しければ、日來二三十日のあひだの、奉加よりも物出來て、程なく造營ありけり。時にとりて目出たかりける事と申し傳へ侍べり。

四　聖覺法印の施主分の事

故持明院の法皇の御子に、高野の御室とてまし／＼けるに、隱岐の御所より、梵字を御自筆にあそばして、(一)御逆修と思しめされて、四十八日御供養あれとて、高野へ進じたまひたりけり。さて御供養ありけるに、折節、聖覺法印、高野に參

(一)逆修。死せざる前に、あらかじめ自身のため佛事を修め冥福をいのること。

也」とて、すてゝ歸りにけり。彼の不當の心の中に、加樣にしけること、わりなくこそ。是れは近き事也。たしかに聞きつたへて、或人かたり侍りき。

三　淨遍僧都の說法の事

嵯峨の釋迦堂、炎上のとき、勸進のために、五十箇日の間、每日に說法ありけり。其の中に、淨遍僧都の說法に、「釋尊一代の教主として、(一)八相の化儀をしめし、(二)八萬四千の法門を說き、(三)六趣四生の群類を度し給ふこと、昔、菩薩の行を行じ、(四)三千世界に身命をすて、十方の淨土に擯棄せられたる我等を、世々番々に出世して調伏し教化して、「今この三界は皆これ我が有なり。其の中の衆生は悉くこれ吾が子なり。而るに今此の處にもろ〳〵の患難多し。たゞ我れ一人よく、救護をなす」と說き給ひて、此の娑婆世界の衆生をば、我子とのたまへり。諸佛の中にひとり本師として、種々の方便をもて濟度し給へば、世間の父母はたゞ今生一世の身を助く。釋迦大師は多生利益の恩、出離解脫の道をおしへ給ふ。眞實の父母なり。その恩世間の父母には、百千萬億倍勝れて、たとふべきにも非ず。然れば心あらん人は、世間の父母の家の燒きたらんには、其の子としては、一人し

(一)八相。前出。
(二)八萬四千法門前出。
(三)六趣四生。前出。
(四)三千世界。一の世界を三千合せしをいふ。一世界には、日月、須彌山、四天下、四王天、三十三天等を含めり。

事をなさゞるは、たゞ畜類に同じ」といへり。(一)善導和尚も(二)三福分なきものは、人の皮をきたる畜生なりと釋し給へり。よく〳〵祖師の教誡を信じて道に入るべし。佛性もとより是れあり。智鑑またあきらかなり。彼のつたなき强盜に及ばざらんや。過をしりて心をあらたむるは、賢き人なるべし。

二　强盜の法門を問ふ事

鎌倉の若宮に、三井寺の法師、實相院の民部阿闍梨圓智と云ふ眞言師ありけり。說法なんども尋常なりけるが、或時、請用して布施物巨多に取りてけるを、强盜五六人、彼の房に打ち入りて房主をとらへて布施物をはこびとる。其間、强盜法師一人、此の房主に眞言の法門を問答しけり。次第に(三)事相の大事どもを問ふ時、「是は宗の大事なれば、たやすく云ふべからず」と云ふ時、此の法師、「さらば御房をあやまち奉るべし」とて、長刀を胸にさしあてゝ、「慥にのたまへ」と云ひけれども、少しもさはがず、「云ふべきほどの事は答へつ。この重は我宗の大事なり。命おしとても爭か云ふべき」と云ひける時、此の法師、「御房はいみじき佛法者にて御座けり」とて、大に隨喜して、はこびける用途十結をば、「御布施に奉つる

(一)善導和尚。前出。

(二)三福分。世福、戒福、行福とて、世の人道を守り、戒律を持ち、修行するをいふ。

(三)事相。教相と對語にして、實際上の修行に關する秘傳をいふ。

除くべからず。餘善は雜行なり。是を行ずるは念佛を輕しむる失がありと云ひて、大きにこれをそしる。若しこの意ならば、餘善は懺悔すべし。夫が重き故に惡行は廻向すべし。凡夫の位に失がなしと許す故に、是れおほきに佛教祖意にそむけり。一向專修の本意は、凡夫の心散ずる故に、餘事をまじへず、一行を專らになさしむ。是は行體の惡には非ず。行人の用心みだるゝ故なり。眞言の行者も、「一尊に付て(一)悉地を成ぜんとする時、餘尊を行ずれば、餘尊即ち魔となる」といへり。是れも諸尊の體の魔たるに非ず、行者の心亂るゝを魔といへり。淨土門も此の如し。(二)地想觀を行じて成ぜんとする時、水想觀を思ひ出さば邪觀といはる。例するに同じ意なり。たゞ一心につとめ行ひて、是非偏執あるべからず。佛法は各々の宗の敎へを聞くに、かやうにこそ見え侍べれ。聞かず習はぬ宗も、さこそ尊かるらめと、仰いで信じて、たゞ我が有緣の宗、我がため利益あるべしと思ひて、道念ありて、一心に勤め行ふべき也。我が有緣の行をも勤めずして、而かもよろづの法を謗りては何かせん。龍樹の云はく、「人身を受けながら道行をなさずば、禽獸とことならず。かれも(三)五欲の樂をのみ思ふ。道を行ぜず、人として善

(一)悉地。前出。

(二)地想觀。極樂世界の大地を觀察すること。

(三)五欲。前出。

念佛の功を入れぬにや。いづれも祖師の本意にかなはずこそ侍るらめ。西山に古遁世門の人ありけるが、申しけるは、「雙紙片脇にはさみて學問するほどの淨土門の人の、臨終のよきを見ず」といへり。たゞ念佛は學をやめて一向信を立て、(一)厭離穢土、欣求淨土の志ふかくして、眞實の心にて念々にすてず、功を入るゝ外の義なし。然るに(二)唯除五逆誹謗正法の文を讀みながら、餘教をそしり輕しめ、是非偏執ある故にこそ、臨終もあしかるらめと覺え侍べり。よく學し、よく行ぜば學によるべからず。

　圭峰禪師のいはく、「解は通達して隔つる事なかれ。行は一門によつて功を入れよ」と。これ目出度をしへなり。『禪源』の中にこれあり。『般舟讃』の文のごとく(四)餘教餘行をばたゞ隨喜して謗ぜず、一行に功を入るべし。近代淨土門の人の中に、餘宗をそしることおほし。祖師の誡にそむけり。祖師の意は貪瞋等來しまじはらば、念を隔てず時をへだてず、日をへだてず、懺悔すべしと釋して、一心稱名の外は、餘行をまじへざれとなり。餘行はたゞ(四)一心專念のために是れをさしをく。(五)行體の惡きにあらず。或る學者の義には、惡は凡夫の位なれば力及ばず。

(一)厭離穢土欣求淨土。この穢れたる世を厭ひ離れかの淨土を欣び求む。

(二)唯除五逆誹謗正法。前出。

(三)四餘教餘行。念佛以外のと教修行。

(四)一心專念。一心に專らたゞ阿彌陀佛を念ずること。

(五)行體。修行そのものゝ本質。

き光陰をおしまず、なすべき善因をなさずして、(一)三途の舊里に歸り、(二)八難の險岨にまよはんこと。(三)慧心の『往生要集』に云はく、「麁强の煩惱は人をして覺せしむ。たゞ無義の談話のみ覺えずして、常に道を障る」といへり。道人の詞存知すべし。『摩訶止觀』の中に、世間の緣務をやむべき事をいへるには、是の事なほ捨つべしとて、學問までもやめ給へり。況んや世間の事をや。嘉祥大師、同法の僧の學問を專らにして、修行のをろそかなるを誡め給ひていはく「百年の命は朝露は奢るに非ず。須らく道のために緩なるところを急にし急なるところを緩にす。豈に一生自ら誤るに非ざる耳ならんや」の意、學は行のためなり、緩なるべし、行は出離の要道なるべし、急なるべきに、さかさまに用意せん事、誠にあやまりなりと云へり。南山の宣律師の云はく、「佛敎の本意は、たゞ奉行のためなり。若したゞ談文せば本意にあらざるなり」と云へり。たゞし(一)四箇の大乘なんどは、敎門ひろければ、學せずば解行も立ちがたし。禪門は不立文字の宗、念佛は一向專稱の行、この二つは殊に學をむねとすべからず。然るに心を得ざる人、或は古人の言句を愛し、學の工夫を專らとせず、或は聖道淨土を分別し是非して、

(一)三途。前出。
(二)八難。前出。
(三)慧心。前心。

(一)四箇大乘。前出。

の安樂を思はゞ、(一)道行を專にすべし。佛法の中にも、小乘の行はなほ(二)十二頭陀を行じ、(三)三生六十劫の修行久しく苦し。當來の果ありといへども、今生の因苦しみあり。大乘の修行は、たゞ心に染著なく、身に緣務すくなくして、名利貪求の心やみ、煩惱妄念のわづらひなく、本來安樂の性にかなひて、無爲常住の道に入るべし。今生もわづらひなく、當來も安樂なるは、大乘の修行なり。たとひ身心くるしくとも、當來安樂なるべくは、なほ行ずべし。況んや身心やすからんをや。また世間の惡業名利は、當來の苦果のみにあらず、今生も身くるしく煩多し。あながちに此を好みなさんや。たゞ業障の故に捨てがたかるべし。然るを我身の安樂を思ひながら、今世も後世も身をくるしむるわざ、返へす〴〵も愚かなるべし。哀れなるかな。萬劫に一たび得たる人身を徒にすて、多生に希に値へる佛法を信じ行せざる事。然る間、流轉生死の業因、なせども、なせども厭きたらずして、是れを愛し、出離解脫の方便は、數ふれども〳〵倦くして嘗て進まず、人間悤々として日月の過ぐるも覺えず、世事忙々として身命のつゞまるをもわきまへず、無義の戲論に日をくらし、無益の雜談に暇を入れて、惜むべ

(一)道行。佛道修行。

(二)十二頭陀。頭陀は修治と譯する梵語。修行して煩惱を斷ち去ること、閑靜の地に住す、常に乞食す、貧富貴賤をへだてず乞食す、一日一食、午後食量を定む、午後は食せず、弊衣をきる、たゞ三衣のみを用意す、塚間に坐す、樹下に坐す、露地に坐す、坐のみにて臥せず、この十二行をいふ。

(三)三生。三度生れかはること。

しき事なり」と、智慧ふかく慈悲ある三藏なれば、いみじく說き給ひければ、國の者みな發心して、邪神につかふる事をやめて、佛の弟子となり（一）五戒をうけ三寶に歸しけり。かゝる詞のすゑにて、はるかに時代へだつといへども、なほ德用ありて、さしもつたなき强盜までも發心しけるにこそ。辯說は無間の業を轉ずと云へり。まことなる哉や。まして心あらん人、此の詞を聞きて發心せざらんや。人みな佛性あり。緣にあひ時いたらば、發心せん事かたからじ。昔漢土に戴淵と云ひける海賊も、陸機と云ふ大臣の河を下るを、我は岸にたちて下知して、惡黨共を以て大臣の財物をかすめ取りけるを、器量ゆゝしく見えければ「あはれ、いみじき器量をもちて、つたなき業を振舞ふものかな」と大臣にいはれて、忽に心をあらためて惡行をやめ、此の大臣に付きて帝王の見參に入りて、將軍の位に登りてけり。人ごとに心あり。其心の我身を安樂ならしめんとのみ思へり。然れども、今生も後生も、安樂なるべき心も振舞ひもなきは、人常の習なり。先づ今生の安樂は、仁義禮智信を守りて、其身をはづかしめ害らず、つゝがなく家をたもち國をたもつ。然るに仁義を行ふ人希なり。身を安穩にたもつ事かたし。後生

（一）五戒。前出。

る國をすぎ給ふに、かの國の者、三藏を取りて神にまつらんとす。みめ形世にすぐれたる人を取りて、牲にする習ひなるに、三藏みめかたち勝れて見え給ひければ、國のもの悅びてとらへつ。佛法弘通の志をのべ給へども、固より佛法を信ぜざればもちゐず、弟子の僧ども師に代らんといへども、形三藏に及ばされば許さず、既に俎に三藏を乘せ奉り切りくだくべきよそほひを見て、「時の程のいとまを得させよ、觀念せん」とて、いとまをえて、其の間(一)入定して(二)兜率の內院へまゐりて、彌勒を拜し給ふ。その間に俄に大雨大風震動雷電おびたゝしかりければ、神のうけ給はぬにこそとて、諸人おほきに恐れ戰く。三藏入定の間なれば、是れも知り給はず、定より立ちて、「今はとく〳〵」との給へば、諸人恐れ入りて、頭を扣いて過を懺悔し、「我等をたすけ給へ」と申しける時、三藏佛法を說きすゝめ給ひける詞に、「何ぞ電光朝露の小時の此身のため、阿僧祇耶長時の苦因を造らん。一期の身命は露のごとく電光のごとし。永劫の苦因をつくり長夜の苦果をうけん事のかなしさ、眞實に妙なる佛法を信ぜずして、鬼神をあがめて惡道に沈まん事をろかなり。たま〳〵人身をうけながら、佛法の道理わきまへざる事かな

(一)入定。禪定に入ること。
(二)兜率。前出。

ほどの難にあひ給ひて、何事を御心すまして、かくのどかに仰せ候ぞ。抑々此は何といふ意にて候ぞ。よに心肝にそみて尊く覺え候」といひければ、この僧固よりいみじき辯說の人なりければ、生死無常の道理より申し立てゝ「一期は夢まぼろしの如し、電光朝露にことならず、因果の道理遁れがたく苦樂の報をうく。三寶の物をかすめ取りて妻子をやしなひ、身命を繼んとする。凡夫の習と云ひながら愚かなり。罪なくして世をわたるわざ多かるに、かゝる大罪を作りて、大地獄におちて、(一)無量劫の苦を受けん事のかなしさに、我身の事は忘れてかく云ふなり」と泣く／＼申しければ、此賊も袖をしぼりて去りぬ。さてその次の日の夕方月代ある入道、この房に來りて、ひそかに申し入れけるは、夜の强盜、入道になりて參りて候。夜の御說法に發心して、同じ惡黨共あまた入道になりて候」とて、髻とも少々持ちて來れり。「事々しく候へばさのみはまゐらず候」とて、夜取る所の布施物、みなもちて返し奉りてけり。是れ眞實の心より、佛法の道理をいひたてける故に、かゝる惡人も發心しけるにこそ。返へす／＼も難有き事なり。此の詞は玄弉三藏、天竺に渡りて、佛法を漢土へ傳へんとし給ひけるに、邪神を祭

(一)無量劫。量りなき時間。劫は梵語、時と譯す。

沙石集巻第六

一、說經師の强盜を發心せしむる事

洛陽に說經師ありけり。一說には聖覺法印、一說には淸水法師、某請用して布施物多くとりて、夜陰に入りて歸りけるを、河原にて賊共あまた待ちかけてあるほどの物みな取つてけり。張本の男、矢うち矧げて、輿の前に立ちて、物取共のばしけるほどに、此の僧思ひけるは、信心の施主三寶に供養する志を以て、施物をさゝぐ。此を以て佛事にも用ゐ、利益あらん事に用ふべきよし思ふに、此の賊共よこさまにかすめ取る事、同じぬすみと云ひながら、ことに罪業おもくして(一)惡道に入りなんとする事かなしく哀れに覺えて我が難にあへる事はわすれて、心をすまし、聲うちあげて云はく、「何ぞ電光朝露の小時の此の身のために、(二)阿僧祇耶の長時の苦因を造らん」と、澄める音を以て兩三返詠じけるを、心は知らねども、何となく貴く覺えて、この盜人身の毛もよだちて、矢さしはづして、これ

(一)惡道。地獄、餓鬼、畜生の三惡道。
(二)阿僧祇耶。無央數と譯す。數かぎりなく多きこと。

としたりける心根も花もあり。この心をもつて返事に、世をすて給へる人と聞けば、かゝる所に御心ばし止むなと思ひてこそ、かし參らせね。さらばおはしまして、とまり給へとばし云ひたらば、さしもの『撰集』に如何が入るべきや。長明がいへる事、『古今』の序、その心得られたり。平政村、(左京權太夫)

高し山ゆふこえ暮てふもとなる、濱名の橋を月にみるかな。

『近代集』に入りて侍るをや。

和歌の陀羅尼に似たる事、惣持の道理なり。たゞも思ふほど祈念しけんに感なくして、和歌にめでゝ利生あり。陀羅尼も常の言葉なれども、たゞの言葉に益なし。眞言になれば勝利あり。准へて知るべし。陀羅尼は、准ふれば佛の和歌なり。

たらちねはかゝれとてしもうはたまの、わが黒髪をなでずやありけん。

とよめる。此歌にはいづれ言葉が肝心に覺ゆる」と問ふに長明が云はく、「とてしもこそ、肝要とおぼゆれ」と云ひければ、既に境に入れりとほめたり。これになづらふるに、赤染が歌には、さても肝心なり。子に問ひたく、よろづの志、たゞさてもの中にありとて、しもの詞もよろづのこゝろざし、この四字にあるをや。

長明が云はく、「忠胤僧都の説法に、淨藏、淨眼の十八變を、經には、「或現大身滿虛空中、而復現小」といへり。此事を詞をかへて、大身を現ずる時は、虛空も狹くなり、小身を現ずる時は、芥子の中に隙ありと、口傳隨分秘事なり。和歌の風情はかゝるべし」と云へり。『古今』の序にいはく、「和歌は其の根を心地につけ、其の花を詞林に開く」といへり。此の道の口傳、この言葉に盡きたり。

西行法師、修行の時、江口の長者が宿をかさゞりし時、

世の中をいとふまでこそかたからめ、假のやどりをおしむ君かな。

と云ひたりける返事に、

世をいとふ人とし聞けばかりの宿に、心とむなと思ふばかりぞ。

名人なれば、耻がましき事あたへんも、然るべからずと思ひて、熊野へ參詣の時、妻うち具して奥州の千福と云ふ所に縁たるもの丶ありけるを尋ねて下りにけり。下向に、軈て彼の家を見れば、逃亡して人なし。淺猿く思ひて、人に問へども、固より行方をかくしてければ、人是れを知らず。さて閨のほとりを見れば、柱に妻が手にて歌を書き付けたりけり。

戀しくは問ふてもわせよ高觀房、千福にあるぞ藤四郎の許に。

是れを見て哀にわりなく想ひて、彼れが見るべきにあらねども、心の行くかた返事せんと思ひて、書き付けゝる。

出てゆかばかくとも云はでうたてやな、藤追の女房の千福の藤四郎のもとも我したらはこそあらめ。

心ざしはさりぬべし。歌は誠にをかしゝ。萬葉の代ならばこれも『集』にいるべくや。

長明は俊頼の子息、俊惠法師が歌の弟子なり。俊惠、問ひて云はく。「良少將出家の時、

或僧これにつく。

たゞし毘沙門なしとこそみれ。

中古に東大寺に、何物がしたりけるやらん、立札に、

東大寺最第一のてらなれや、

立札にこれをつく、

南京にこそ北と去ひたし。

又立つ。歌詞に北と云ふこと聞きなれず。

又立つ。『萬葉集』に云はく、

山臥の腰につけたるほらの貝、岩尾の上にほとゝおち、

丁とわれくだけて物を思ふ比哉

是はいかにと。『萬葉』がゝりの歌の事。

中古に、常州田中の庄と云ふ所に、高觀房と云ふ山臥ありけり。隣家に藤追と云ふ百姓が妻に、忍々よりあひける。また山臥の種つかんと思ひけるにや、此事自然にもり聞こえて、口惜く思ひけれども、且は師檀の儀なり。熊野の先達などする

浪にかたぶく弓はりの月。

或人。

大魚をいるかと人や思ふらん、

故鎌倉右大將家の狩の時、狐の野に走りけるを、

しらけて見ゆる晝きつねかな。

との給ひて、「梶原付けよ」と仰せければ、

ちぎりあらは夜こそこうと云ふべきに、

奥入の時、名とり河にて、

頼朝が今日の軍に名とり河、

と仰せられて、「梶原付けよ」とありければ、

君もろともにかちわたりせん。

南都の興福寺に、常に寄り合ひて、連歌などする寺僧四人ありけり。人これを四天王となづく。或時の連歌に、

我等をば四天王とぞ人はいふ、

よひ〳〵にもちひみぞうついとなみて、

是をつく、

軒のたちばなもとつはもなし。

させる句ならねども、書き付け侍り。寫し給ふべからず。

宇都宮にて連歌ありけるに、

親わかくして子は老いにけり、

と云ふ句、難句なりけるに、明覺房。

我宿のそともにうゑし三年竹

歌人、播磨房、感じて落涙しけるといへり。

鎌倉にて連歌ありける座に、

船の中にて老いにけるかな。

と云句に、或人 古法同也。

浮草のかけひの水に流れきて、

人々感じけり。東福寺僧の中の連歌に、

是もやむ事なくて付け侍りし、

　雪の帷打ちかつぎつゝ。

させる秀句ならねども書き付る也。

峰の八つ見えしを、ある人に、

　八あればこそはちといふらめ。

是をつく、

　さゐはゝたをもにてぞあるべきに、

又或人これにつく、

　四十からこそ鳥のかすなれ。

或人の句に、

　竹のあなたに鳥のなくなり。

是をつく、

　ふしながら夜は明ぬると知られける、

又或人の句、

大和の桃尾の山寺に、辨の阿闍梨と聞えし眞言師、長谷へ參詣の道に、鎌口の山寺に紅葉の盛りなるを見て、ともに具したる小法師、主の馬の口にとりつきて、

かまの口こがれてみゆる紅葉かな、

やむことなくて付けゝる、

なべての世にはあらじとぞ思ふ。

此句よろしからず。なにかあらじと聞こえず。また鎌にはあひしらひあり、紅葉のあひしらひなし。昔、筑紫の鑊戸山にて、或人の句に、

春はもえ秋はこがるゝかまと山、

是を付く、

霞も霧も煙とぞみる。

是には付けをとりたり。

先年海道をとをり侍りしに、富士の山に雲の立廻りて見えしを、ともに具して侍りし小法師、

富士の山雲のはかまをきたるかな、

うす紅になれるそらかな。

と云ふ句難句にて、多くかへりて興もなかりけるに、

あまとふやいなおふせ鳥のかげ見えて、

花下の十念房ありけるが、あまとふやと打ち出でたりければ、「あはつき候ぬるは」と、心はや云ひけるとなん。

又阿彌陀佛連歌のありけるに、

なのりて出づるほとゝぎすかな。

と云句に、

武士のたてをならぶるとなみ山、

又、東にて連歌しけるに、あれ句に、

饌所の雜仕も赤裳をぞきる。

と云句に、

大海老のからむきおける中にゐて、

是れを感じてとゞめてけり。其座にありけると云ふ入道語り侍りし。

此の句殊勝なり。一行の疏の心かなへり。『大日經疏』に云はく、「即心は是れ道、何ぞ衆生迷へる哉」取意。譬を以て云はく、「無智の畫師、鬼形を書いて、畏れて悶絕す。また蠶の口より糸を出して、苦を受くるに似り」と云へり。即心道なれども、迷ふ時は我心にまとひ、悟る時は我心をさとる。法界は只一靈眞如なり。何ぞ法にあらんや。『法華』に云はく、「唯この一事のみ實なり。餘の二つは則ち眞にあらず」云云。

東の入道、病の床にふして日久し。賴みなく覺えければ、日來あそびなれたる歌仙よびて、最後の會と思ひて、月の夜、病床に臥しながら亭主、

あはれげに今いくたびか月をみし、

發句には禁忌に覺えて、人々付け煩ひたりけるに、簾中に、

たとへばながき命なりとも。

此の句のあまりにおもしろさに、心地宜しくなりて、その度は助かりたりけり。妹の若狹の局の句なり。

彼の入道、そのかみ毘沙門堂の連歌の座にありけるが、

さて、此中に菖蒲を見しりたらば、賜ふべしと仰せられければ、見わきがたくて、

薦草あるさかのぬまに茂りあひて、いづれ菖蒲とひきぞわづらふ。

といひたりける時、菖蒲顔をあかめて、袖を引きつくろひけるを見て、「あれこそ」と申して、やがて賜はりけり。

或る時、覆盆子を人の進したりけるを題にて、歌つかまつれと仰せければ、

もり山のいちごさがしくなりにけり、いかにうはらかうれしかるらん。

建仁寺の本願の談議の座にのぞみて、自業自得果の心をよみける。

奥山の杉の村立ともすれば、をのが身よりぞ火を出しける。

二二、連歌の事

鎌倉の極樂寺にある僧夢に見る。文殊連歌したる付けよとて、

いざかへりなんもとの都へ、

僧共多く付けゝる。少々ところ〳〵忘れ侍り。

慈濟律師　賢明房

思ひたつ心の外に道もなし、

の習も、實に人間の思出なく覺え侍り。唯このことはりばかり思ひしりつゝ、道心にはあらで、人なみ〳〵に隱遁の形に成り侍りし後は、人ならぬ身は、靜にいとまありて、心やすく日月を送り侍れば、厭ざりし昔も、今更くやしくおぼえ侍りしまゝに、思ひつゞけ侍り。

世の中はおもひみだれて夏引の、いとはぬほどぞくやしかりけり。

無窮の生死は物を思ふ心の色をそめなし、寂靜涅槃は念無處におのづから顯るべし。故に論にいはく、「有念は即ち生死、無念は即ち(一)泥洹」といへり。誠となるかな、この詞は。

本の裏書に云はく。草本に多くこれあり。此本は同法之を書きみな辨へたり。仍てまた書き付く。寫す人心まかせて取捨あるべし。　無住　八十三

二一、人の感ある歌

故鎌倉の右大將家、京より菖蒲といふ、はしたものゝ美人なりけるをめし下して、かくし居かれたりけるを、梶原の三郎兵衛尉所望して、みたりければ、同し齡の十七八ばかりなる女房美女の、みもしらぬを十人裝束させて、ならべすゑを

(一)泥洹。涅槃と同じ梵語。滅度と譯す。煩惱を滅し生死海を渡りこゆること。さとりを云ふ。

奥山にたぎりておつる瀧津瀨の、玉ちるばかりものな思ひそ、
建治二年の比、紀州にして、八幡大菩薩の御詫宣のありけるにも、「世にある人は我身を思ひ、妻子を思ふ。とにかくに物をおもふが罪にてあるなり。片時も物おもはぬが目出度ことにてあるなり。遁世殊勝なり」と仰せられけり。さて「諸宗にいづれか、當世殊に利益候」と問ひ申しければ、「坐禪殊にゑらばれたり。我も常に坐禪の心地なり」との給ひけり。亦「我は本地阿彌陀なり。我が本願をたのみて念佛する、此の行やすくして妙なり。都て念佛も、眞言も、一心に行ずれば、必ず生死をはなるべし」と敎へ給ひけり。いづれの神慮も同じ御事にや。凡そ(一)三界の流轉、(二)四生の轉變、ひとへに一念の妄心によりて、(三)六塵の幻境を執するによる、夢幻虛假の世間を、まことゝ思ひしより、思相覺觀の分別止む時なし。過去を顧りみ、未來を思ひやり、現量にくらくして、念々に消え行く身を重くし、歩々につゞまる命を守る。人間怱々として冥途の近づく事をも知らず、眼前の夢の中の事をのみ營み、身の後の誠の道の粮をつゝまざる事、靜に思ひとくに悲くこそ侍れ。富貴にしてさはがしからんすら由なし。貧賤にして閑なる事なき世間

(一)三界。前出。
(二)四生。前出。
(三)六塵。前出。

らるゝ宿は幻身なり。身は是れ地水火風の四大かりによりあへり。堅所は地、ぬれたる所は水、あたゝかなるは火、うごくは風なり。この外に身と云ふものなし。されば息たえ、魂されば、本の四大に歸る。妄心はまた我相人相、貪瞋癡の分別浮雲電光のごとくして、有に似て實になし。境を緣じてうつり、物に隨て轉ず。我と云ふべき物なし、此を客塵に喩ふ。無我の大我の外に實なし。眞我は常住なり。生滅去來なし。されば一切妄念思慮なくば、をのづから自性の佛なるべし。經に云はく「一切の法を念ずれば般若を念ぜず。般若を念ずれば一切の法を念ぜず」といへり。また古人の云はく「但、妄緣を離れば如々の佛なり」と。是故に一切の事を思はずして、佛となれと敎へ給ふにや。凡夫若し念をはなると云ふは、此ことはりなけんと云ひて、妄念相續せるを凡夫といひ、一念不生なるを佛といふ。佛の御敎のみにあらず、神明もかくこそ敎へ給ひぬれ。和泉式部、保昌夫とかれ〴〵になりけるころ、貴布禰に籠りて螢の飛ぶをみて、

　物思へばさはべのほたる我身より、あくがれ出づる玉かとぞ見る。

かく詠めければ、御殿の中より忍たる御聲にて、

（一）和讃。和語にて造れる讃歌。

へり。彼の御誕生の所に、昔より講行なんと行ひて、（一）和讃を作り誦し侍りける初の詞に「藥師御前御誕生、心太きにして似たりける。すりこ鉢にさし入れて、榎の本にぞ置いてける」と侍る。よしある人語りき。事は誠に奇特不思議なれども、和讃の詞はいとよろしからず、信心もさむる心地せり。靈佛のみめわろきに、戸帳をかくるごとく、此の和讃も箱の中に收むべきをや。先年、彼の御筆、御遺誡の文、見侍りしに、目出き事ども侍りき。「淨土にあらざれば、心にかなふ所なく、聖衆にあらざれば、思に隨ふ伴なし。世に隨へば望あるに似たり。俗に背けば狂人のごとし。あなうの世間や。いづれの所にか、この身をかくさん。口虎身を害し、舌劍命をたつ。口をして鼻のごとくしぬれば、死して後もとがなし。口を守り心を攝めて、身に犯す事なかれ。此の如く行ふもの、世を渡る事を得」と書き給ひて御詠に云はく。

　かりそめに宿かる我ぞいまさらに、ものな思ひそ佛とおなじ。

大聖の御詠なれば、深き意侍らん。まことには知りがたし。但うち見る所は、凡聖の形異なれども、有爲の身命は皆かりなり。かりそめの宿かるものは妄心、か

(二)大佛頂陀羅尼。〇大佛頂尊の陀羅尼にて陀羅尼のうち長文のものなり。

(三)勸進聖。寄附をすゝめあるく僧。

古の先達の心を學んで、近代の學者の情に伴ふべからず。敎と禪とは父母の如し。禪は父、敎は母なり。父は禮義を敎へ、あらゝかなり。母はこまやかになつく。敎門のこまやかなるが如し。また敎は飢ゑて食するがことし。禪は腹ふくれたるに、瀉藥を以て下すが如し。共に益あり、空しく行いて滿ちて歸るとて、物をしらぬもの〻、因果の道理をも知り、迷悟凡聖の差別をも知れるは、大切なり。飢ゑたるもの食するが如し。また知見解會、佛見法見、共に放下して佛法に相應する、禪門の方便は腹ふくれたるに、下藥にて助くるが如し。また敎も終には捨つれば、瀉藥をのんで補藥を服するがごとし。禪敎あひ資けて、佛法は目出たかる。

二〇、行基菩薩の歌の事

行基菩薩は、和泉の國に降誕し、藥師と云ふ下女の腹に宿り給へり。心ぶとの様にて生れたりければ、あやしみて鉢に入れて門の榎のまたにさしあげて置く。乞食の沙門、彼の家に望んで聞くに、鉢の中に(二)『大佛頂陀羅尼』の音してければ、「此の鉢の中のもの様あるべし」とて、敎へてよく置かしむ。日來へて後、うつくしき童子一人出で來る。即ち成人して東大寺大佛殿などの(三)勸進聖と成り給

り無相へ入ること、是れ多くは中下の根を接する方便なり。禪門は迦葉(一)正法眼藏を傳へしより、(二)單傳密印不立文字の宗として、初より文字をたてず、義理を存ぜず。此の風情諸教の方便に超たり。教は至極の所をこめ(三)廢詮談旨とも、言語道斷とも云へども、次位を立て階級を存す。猶し靈龜の尾を引にたとふ。文字忘れがたく、覺觀おこりやすし。此故に達磨西來して(四)直示の宗を弘め、單に心印を傳ふ。心を以て傳へ、門戸を立てず、軌則を存ぜずおほく上々の機を攝す。無門は解脱の門、無意は道人の意と云へり。然れども、禪と教と方便を尋ぬれば隔りて同ずべからず、證理を論ぜば隔てゝ異すべからず。當世の學者宗風を伺はざる輩は、そしり嘲ること、先づ謗法の失恐るべし、愼むべし、また禪者も教門の義理の甚深なるを、一宗をだに辨へずして教淺とすゞろにそしる。其の失大なるべし。機を引く方便は異なりといへども、道をさとる實理、理何ぞ異ならん。末代偏學の輩、偏執わすれぬにこそ。大乘の心は煩惱と菩提と猶し相即せり。禪門と教門と何ぞ實に隔あらん。古人いはく、「癡愛も妄染も、野分の拂ひ盡す事ありといへども、煩惱と菩提と、關屋の還つて隔てはつる事なし。」たゞ上

(一)正法眼藏。釋尊の内心のさとりをいふ。正しき法をみる。智慧の眼。
(二)單傳密印。直に秘密の印を傳へること。
(三)廢詮談旨。詮は云ひあらはすこと。言葉に云ひあらはすことを廢して、而を心にて旨を談ること。
(四)直示。直接の指示。

利生も、かのすゝめを待ち給ふにや。また『華嚴』の五十三の智識にも文殊を最初とし、『圓覺』の十二の菩薩にも、文殊上首たり。

『法華』の序品の(一)六瑞をば、文殊燈明の往事を引きて衆の疑ひを開く。『首楞嚴』の二十五の(二)圓通をも文殊これを判じて、勝劣を分つ。また大乘の寺には文殊を聖僧とす。旁佛家の棟梁、法門の樞鍵なり。いづれの宗の人か、此の尊の利益を離れん。然れば吾國の佛法の濫觴、文殊、達磨大師の善巧より起れるにや。かゝる因縁なれば、禪門尤もあがむべし。然るに近代の禪門、世にさかりなるを、諸家の學者の中に、少々あやしみそねむ事あり。誠に心得がたし。されば、ある人の歌にも、

らちのほか達磨を破する人をこそ、法しらずとはいふべかりけれ。

禪敎の差別は方便の位にあり。實證の所はことなるべからずと見えたり。故に古德の云はく、「敎は佛の言、禪は佛の心、諸佛は心口相應す」と云へり。また「汝は行じて知る。我は知りて行ず」とも云へり。諸敎は文字を立て文字をやり、念想をかりて念想を除く。機情を守り生熟を待ちて、淺より深にすゝめ、有相よ

(一)六瑞。釋尊が法華經を說きたまはんとせし時に現れたる六種の瑞相。說法瑞、入定瑞、雨華瑞、地動瑞、衆喜瑞、放光明瑞。

(二)圓通。圓融溶通にて、佛のさとりの境界をいふ。

(一)達摩大師。前出。

しなでるや片岡山の飯にうゑて、ふせる旅人あはれをやなし。

御返事。

いかるがや富の緒川の絶ばこそ、我が大君の御名はわすれめ。

彼の飢人は(一)達磨大師なり。平氏が『太子傳』に太子先生には、大唐の衡州衡山に居られけり。惠思禪師これなり。達磨大師すゝめ給はく、彼の東海の人、因果をしらず、佛法を聞かず、生を殺して食とし、生を殺して衣とす。君、彼の國に因縁います、彼國に生れて佛法をひろめ、衆生を利し給へと勸め給ひけるゆゑに、太子我が國に生れ給へり。されば本朝に佛法ひろまりて、我等まで三寶の名字を聞き、因果の道理を辨ふる事、ひとへに太子の御恩德なり。その源を尋ぬれば達磨大師の御すゝめより起れり。かの御方便、誠にかたじけなし。達磨大師をば、漢家には觀音といへり。日本の口傳には文殊と云ひ傳へたり。文殊、觀音は、大日の悲智の方便なれば、いづれにても恭けなし。文殊と見えたる方には、眞實の智慧より、無緣の大悲はおこるゆゑに、文殊の智門の方便より、觀音の大悲の利益あるにこそ。又經には一切如來の初發心は、文殊の敎化の力と云へり。觀音の

（一）靈山。靈鷲山のこと。

（二）迦毘羅衛。釋尊の生れたまひし故城の名。

り給ふ。閼伽の器、迎にまゐりて、導引て返りけり。さて婆羅門僧正、行基菩薩の百僧の末に立ち交りて御座すを、かきわけて手を取りて涙を流し給ふ。行基菩薩、歡喜の餘り、かくぞ詠じ給ひける。

（一）靈山の釋迦のみもとに契りてし、眞如朽せずあひみつるかな。

御返事。

（二）迦毘羅衛に契りしことのかひありて、文殊の御顔あひみつるかな。

さて婆羅門僧正供養し給ふ東大寺を、四聖同心の寺といへるは、婆羅門僧正普賢、行基菩薩文殊、聖武天皇觀音、良辨僧正彌勒、天竺の菩薩も、我國の大聖も、和歌を翫び給へり。是すなはち境の風たるゆゑにや。道の便りたるよしにや。

聖德太子は、用命天皇の御子、御形ちをやつして、童子の中に御坐けるを、高麗の日羅來りて禮して、「敬禮救世觀世音、傳燈東方粟散王」と唱へしより、觀音の化身垂迹たる御事、世以てかくれなく、人皆しれり。或時、片岡山を過ぎ給へるに、御馬すゝまず。あやしみをなして見給へば、異僧一人飢ゑて臥せり。御馬より下りて、御物語ありて、紫の上の衣を脱ぎておゝひ、また歌を賜はりける。

和歌の一道勝れ侍り。我國に跡をたれ給へる、權化先德、昔より翫び給ふ事も此の故にや。

十九、權化の和歌翫び給ふ事

東大寺の緣起を粗承りしは、良辨僧正、幼少のとき、鷲に養はれて木の上に住みて、此の所に大伽藍を建立せんと云ふ誓願を起して、國王の力を離れては成しがたかるべしと思ひて聖朝安穩、天長地久と祈り申しける音、聖武天皇の御耳に聞食しければ、勅使をつかはして音の聞ふ所を尋しめたまふに、當時の東大寺の昔、深山なりけるに、大木の上に小童ありて、此の事を祈り申しけり。傳には東山の仙人といへり。勅使、事の由を尋ぬるに、大願の心を語る。勅使、歸り參りて、此のよしを奏す。是に依りて帝王御感ありて、行基菩薩をして(一)勸進の上人として、諸國の人をすゝめ、帝王大(二)檀那として、御建立あり。御供養の導師は行基菩薩と仰せありけれども、辭し申し給ひて供養の日近付て、百僧幷に伶人を引具して、難波の津に行き向ひて、雅樂を調べ、(三)閼伽の器を海上にうかべ、手に香爐を持ちて、西に向ひて待ち給ふに、(四)婆羅門僧正、天竺より船に乘りて來

(一)勸進。前出。
(二)檀那。前出。
(三)閼伽。功德水と譯する梵語。佛前などに供へる水をいふ。
(四)婆羅門僧正。印度の僧。初め支那に來り、更に日本に渡る。大安寺に住し天平寶字四年寂す。

歌を稽古し給ひて後傳ふべしとのたまひけるとなん云へり。誠に眞實の佛法は言説の外にあり、念慮の内にあらず。心閑に情むなしくば、(一)本有の靈光忽に照し、自性の覺海漸くすむべし。されば高野の大師のたまはく、「密教の本意心は、を以て心をつたふ。文字はこれ瓦礫、文字はこれ糟粕」と。心を傳ふと云ふは、人の心を我に傳ふべしとにはあらず、我が心師の心とひとしきを傳ふと云ふ。されば心を傳ふとは讀まで、心に傳ふと云ふ義あり。世縁俗念やみ重昏巨散のぞこをり、靜に明なる心の上に、人の教を待ずして知らるゝ所あるべし。無師自悟の智とも、自然のさとりとも云ふは是れなり。念慮にあらず。また念性を斷たず。見聞覺知に住せず、また見聞覺知を離れざる所は、我心靜にして、自から知れぬべき時、師すなはち指し示す。是れ佛法の秘傳、宗旨を傳ふるすがたなるべし。何字と云ふは本不生の義なり。文字を傳ふるにあらず、唯心不生なるこれ阿字なり。密宗の大意こゝにあり。誠に(二)心地に染汙なく分別なくは、阿字を心得べし。一念不生の心すなはち阿字なり。此故にあさき方便を、とりよりにせんとて、和歌をすゝめ申しけるにや。誠に塵勞の苦しき域を忘れ、解脱の妙なる境に入る方便、

(一)本有。先天的に本來あること。

(二)心地。心の奥底。

一心を得、理には、一性を覺る。此ゆゑに『華嚴』には「三界唯一心」と云ひ、「法華』には「唯有一佛乘」と說き、『起信論』には「一心法界」と云ひ天台には「唯一實相」と談じ、毘尼には「常爾一心」と云ひ、淨土門には「一心不亂」と云ひ、宗門には「一心不生」と云ひ、密敎には「唯一金剛」と說く。然れば流轉生死は一理にそむきて、差別の諸法を執するにより。寂滅涅槃は萬緣をすて平等の一理に叶へるにあり。然るに一心を得る初のあさき方便、和歌に如くはなし。是れを案ずれば世務をうすくし、是れを詠すれば名利をわする。事にふるゝ觀念、折にしたがふ修行、すゝみやすく、忘れがたし。飛花をみては無常の風の遁れがたきことを知り、朗月をながめては煩惱の雲の覆ひやすきことを辨ふべし。佛法の中にも誠の悟を得ざるほどは、情量つきず、念慮やまず。然れば先づ有相の方便によりて、終に無相の實理に入る。是れ諸敎の大意、諸宗の軌則なり。禪家に公案を持ち、密宗に阿字を觀ずる此の意なり。西行法師、遁世の後、天台眞言の大事を傳へて侍りけるを、吉水の慈鎭和尚、傳ふべきよし仰せられければ「先づ和歌を御稽古候へ、和歌を御心得なくば、眞言の大事は御心得候はじ」と申ける故に和

後鳥羽院に召し仕へて、おり〳〵の御幸、思ひ出で悲しかりける餘りに、隱岐へ奉りける、西恩法師、

思出やかた野の御狩かりくらし、歸りみなせの山の端の月。

見ればまづ涙流るゝみなせ河、いつより月の獨りすむらん。

西行法師、國々修行しけるに、讃岐院の御廟に參りて、昔、(一)十善の餘君によりて、萬機の政を收め、四海の帝王として、九重の臺に崇められ御座しに、かゝる松山の苔の下にうづもれ給へる事、無常轉變の理を知るといへども、夢の心地して哀に覺えけるまゝに、

よしや君むかしの玉の床とても、かゝらん後はなにゝかはせん。

苔の下に、かすかなる御音にて詠じ給ひける、

濱千鳥あとは都にかよへども、身はまつ山に音をのみぞ鳴く。

是等の歌は、世のつねに、人毎に口に付けたれども、靜に詠ずるとき萬緣悉く忘れ、一心漸く靜なるものをや。老子の云はく、「天一をえつれば淸く地一を得つれば安し」と。佛法に入る方便まち〳〵なれども、唯一を得るにあり。事には、

(一)十善の餘君。前世に十善を修めし報として天皇となり給へるをいふ。十善は前出。

人々衣かふるよし聞きて、

みな人は花のたもとになりにけり、こけの衣よかはきだにせよ。

泉式部、小式部の内侍にをくれて、思ひ入りたりけるに、上東門院より、年比賜ひける絹を、なきあとまでも遣したりけるに、小式部の内侍と書き付けられたりけるを見て、

もろともに苔の下には朽ちずして、埋れぬ名を見るぞかなしき。

或人の母にをくれて、

しばしだに忘られればこそ慰まめ、面影ばかりうきものはなし。

或人病おもりて限りなりけるに、

小篠原風まつ露の消えやらで、子の一ふしを思ひおくかな。

大納言爲家卿、最愛の女におくれ給ひて、彼の孝養の願文の奥に、

あはれげに同じけぶりと立ちそはで、殘る思ひに身をこがすかな。

彼の髮を以て梵字をぬひて、供養の願文の奥に、

吾泪かゝれとてしもなでざりし、子の黑かみを見るぞ悲しき。

(三)偏計。偏執のはからひ。前出の偏計所執性をみよ。

また道慶僧正の歌に、

杣かたのまきの立がれ枝をなみ、をのれぞ白き雪はたまらず。

此の歌も心あるべし。諸法は空無相にして、生死の流轉、色心の幻化、誠には其體なし、たゞ(三)偏計の虚妄、分別の思付にて、有と思へば有に似て有を現じ、空と思へば空しき理を見る。されば枯木を雪かとみれども、唯己が白きなり。萬法此の如し。空しく思ひなすばかり也。

一八、哀傷の歌の事

和歌を綺語と云へる事は、由なきことを云へるなるを、或は染汙心によりて、思はぬ事をも云へるは實に過なるべし。離別哀傷の思ひ切なるに付けて、心の中の思を、ありのまゝに云ひのべて、萬縁をわすれ、此の一事に心すみ思ひ靜なれば、道に入る方便なるべし。古き歌を見るに、作者の心、誠ありて、思をのべたる歌は、遙に傳へ聞きて詠ずるに、我心もすみ侍るをや。まして其身にあたりて、さこそはと思ひつゞくれば、げに哀に侍り。昔し良小將、深草の天皇に後れ奉りて、世を遁れ、まことの道に入りて行ひけれども、彼の御名殘悲くて、御はてに

忠見、心うく覺えて、胸ふさがりて、其れより不食の病付て、たのみなきよし聞えて、兼盛訪ひければ「別の病にあらず、御歌合のとき秀名歌よみ出て覺え侍りしに、殿の物や思ふと人の問までに、あはと思ひて、あさましく覺えしより、胸ふさがりて、かくおもり侍る」とて、遂に身まかりにけり。執心こそよしなけれども、道を執ずる習ひげにもと覺えて哀れに侍るなり。共に名歌にて『拾遺』に入りて侍るにや。

一七、心ある歌の事

鎌倉の大臣殿の歌には、

鳴子をばをのが羽風に任せつゝ、心とさはぐむら雀かな。

此の歌は深き心の侍るにや。『法華』には、「諸法は本より來、常に自ら寂滅の相」と說き、古人は、「萬法もと閑なり、人みづから閙し」と云ひて、諸法は固より寂靜安樂にして、生死去來の勞なきに、一念の迷心、(一)六塵の妄境を現じ、空しく煩惱業を作りて、其中に苦患をうけ、(二)三惡八難のよしなき所を見出て、おそれ苦しむ事、雀の鳴子を動かして、己と驚きさはぐに似たるをや。

(一)六塵。前出。
(二)三惡八難。前出。

太宰の大貳高遠、身まかりて後、ある人の夢に、

ふる里へ行く人もがな告げやらん、しらぬ山路にひとり迷ふと。

一六、歌の故に命を失へる事

長能卿、三月小なりける年、秀歌よみてこそ侍れとて、公任卿に語り申しける。

心うき年にもあるかな廿日餘り、九日といふに春はくれけり。

公任卿に、春は三十日候にやと難ぜられて、胸塞りて、覺えけるほどに、軈て病ひ付きて遂にうせにけり。道を重んずる執心にや。

天德の御歌合の時、兼盛、忠見、左右に番てけり。初戀と云ふ題を給ひて、忠見秀歌よみいだしたりと思ひて、兼盛もいかで是れほどの歌よむと思ひける。

こひすてふ我が名はまたき立ちにけり、人しれずこそ思ひそめしか。

さて既に御前にて講じて、判ぜられけるに、兼盛が歌に、

つゝめども色に出けり我がこひは、ものをや思ふと人の問ふまで。

共に秀名歌なりければ、小野宮殿、しばらく天氣を伺ひ給ひけるに、御門、兼盛が歌を微音に兩三返御詠ありけり。仍て天氣、左にありとて、兼盛、勝にけり。

申しければ、百姓なりけるを、彼の所帶公事、一向御免ありて、永代を限りて、子孫まで違亂あるまじき由の御下文賜りてぞ、下りける。わりなき勸賞にこそ。百姓が子なりけれども、兒たちにて和歌の道、心得たりけるとこそ、人申し侍りし。

一五、夢の中の歌の事

安樂寺の飛梅を、或る武士の郎等、子細も知らずして、枝を折りたりける。其夜の夢に、けたかげなる上臈の、彼の御殿の縁にて詠じ給ひける。

情なく折る人つらし我やどの、主わすれぬ梅のたち枝を。

相知りたる人の子息の兒、粉河の寺にて身まかりて後、彼母の許に使ひしけるもの丶夢に見けるは、清き河の流れたるほとりに、秋草の花の色々に咲き亂れて、よろづ物さびしく、わりなき景氣せる叢の中に、彼の兒の聲ばかりして打詠じける。

別路の中に流る丶泪河、袖のみひちて遇ふよしもなし。

彼の兒、歌も心得、よろづ器量の仁なりしが、思ひかけぬ事ありて失せにき。母の歎き云ふばかりなかりける比、かく告げたる事のあはれなる由、かの母語り侍りき。相知りたる人なり。

時雨する稲荷の山の紅葉は、あをかりしより思ひそめてき。

呼び入れてけり。いかなる子細かありけん。おぼつかなし。

後嵯峨の法皇の御熊野詣ありけるとき、伊勢の國の夫の中に、「今宮の音無川といふ所に、梅の花の盛りなるを見て讀ける。

おとなしに咲き初めにける梅の花、にほはざりせば如何で知らまし。

夫が歌にはいみじき秀歌なるべし。此の事を御下向の時、道にて自然にきこしめして、北面の下郎に仰せて召されけり。馬にて彼方此方打ちめぐりて、「本宮にて歌よみたりける夫は、いづれぞ」と問ふに、「是れこそ件の夫にて候へ」と、そばにて人申しければ、「仰せなり參るべし」と云ひければ、返事に、

花ならば折りてぞ人の問ふべきに、なりさがりたる身こそつらけれ。

さて返事にも及ばて、をめ〳〵と馬より下りて、具して參りぬ。事の子細きこしめされて、御感ありて、「何事にても所望申せ」と仰せ下さる。「いふ甲斐なき身にて候へば、何事の所望か候べき」と申し上げければども、「など分にしたがふ所望なかるべき」と仰せければ「母にて候ものを、養ふ の御恩こそ、望む所に候へ」と

顕照法師、(一)綱位を望むとて、

　浦山しいかなる人の渡るらん、我をみちびけ法の橋もり。

法橋になされにけり。

　信光法眼法印を望むとて、

　ひきたつる人もなぎさの捨て舟は、さすがに法の印をぞまつ。

法印になされにけり。

　宇治の入道殿に候ひける、うれしさと云ふ、はしたものを、顕輔の卿懸想せられけるにつれなかりければ、つかはしける。

　我といへばつらくもあるかな嬉しさは、人に随ふ名にこそありけれ。

入道殿きこしめされて、秀歌に返事なしとて、つかはされけり。

　和泉式部、稲荷へ詣でけるに、田中の明神の邊にて、時雨しければ、せんかたなくて、田かりける童の、あをと云ふものを借りて、打ちかつぎてまゐりにけり。さて雨やみにければ、歸りさまにかへしてけり。其後、雨三日すぎて、此の童、文を持ちて來れり。見れば、

(一)綱位。昔朝命によれる僧侶の位。

かく申すよし傳へてたび候へ」とて、

もろともにあさりし物を濱千鳥、いかに雲井にたちのぼるらん。

此事を披露しけるを、上に聞き給ひて、感の餘りに紫の衣を一重たびけるを、

紫の雲のうはぎもなにかせん、かづきのみする海士の身なれば。

と申して、返しまゐらせければ、いとゞ色まさりて哀に思ひ給ひて、やがて召してけり。都へ具して上らんと仰せられけるを、父母に離れん事を歎き申しければ、父母共に具して上り給ひて、御臺所となりて、君達あまた出きなんどして、目出かりけり。人の心は、やさしかるべき者なり。

三河守定基、志深かりける女の、果なくなりにければ、世をうき物に思ひ入りたりけるが、五月の長雨の比、いとあしからぬ樣なる女の、鏡を賣りに來るをとりて見るに、其包紙に、

今日のみと見るに涙のます鏡、なれにし影を人にかたるな、

これを見るに、涙も止まらず、鏡をば返して、樣々にあはれみけり。さて道心いよ／＼かためけるは、此ことによれり。

山の端に待つをばしらで月影の、まことや三井の水にすむとは。

寺法師是れを見て感じて秀歌返事なしとて、別の子細にをよばず、山へ送りけり。

鎌倉に、或僧房の兒師をうらむる事ありて、他の房卿へ行きてけり。物の具足を取り落したる中に、『詞華集』を忘れたりけるを見出して、送りつかはすとて、本の師、

如何にして詞の華の殘りけん、うつろひはてし人のこゝろに。

其の兒この歌にめでゝ、また歸りにけり。互にわりなく侍り。

或る卿相、石見國の國司にて、石見方にて遊びたまひけるに、國の習にて、かづきする海人ども得も云はず、歌をうたひけるを、人々、「かゝる事なん侍り。召してうたはせて、聞食せかし」と申しければ、「さらば召せ」とて召されけるに、皆にげゝるを、中間雜色ども走りちりて、少々とらへて參ら、又酒なんど賜りて、歌、仕りける時、逃げちりたりつる海人ども、又かたはらにひきのけて、此處彼處にむらがり居て、聞きける中に、十七八計なる女の、みめことがら、下郎ともなく宜しく見えけるが、小侍を一人招きよせて、「あの御前に候歌仕る女房共に、

(一)寺法師。三井寺の法師。

返事。

侘人の命をかくる草のみと、聞けば涙の露ぞこぼるゝ。

筑紫人に、大進房と云ふものありけり、悪黨の事によりて、禁獄せられて、鎌倉の獄屋に八年ありけるが、七夕の歌に、

脱ぎかふるたもとなければ七夕に、しほたれ衣きながらぞかす。

この歌の事を、坂東の入道聞きて、感の餘り申し預りて、娉婿にして、奥州に知所の代官せさせてありとなん。慥に聞きたるもの語り侍りし。

或る藏人なりけるが、子を山へのぼせたりけり。禪衆行人の房になんありけり。みめ形よろしき兒なりけるを、里へ下りたる次に、寺法師すかしとりて、寺にをきてけり。山僧此事を聞きて、「我山は他寺(一)兒をこそ取るべきに、寺法師にしもとられぬること口惜し」とて、大衆いきどをり、のゝしりて、先つ此の師の行人に事の子細を問ふに、「兒共の里に久しく候こと、常の習ひと存ずる計なり。三井寺に候らんこと、つや〳〵承はり及ばず、先づ狀を遣して見候はん」とて、紙と硯を取りよせて、かくぞ云ひやりける。

一四、人の感ある和歌の事

家隆の子息の禪師隆尊、坂東こゝかしこ修行して、或る地頭の家の前栽の櫻の花を一枝をりて逃げゝるを、主みつけて、「あの法師とらへよ」と、事々しくのゝしりければ、冠者原をはへて、からめてけり。禪師、不祥にあひて、せん方なかりければ、殿にかく申し給へとて、

白波の名をばたつとも吉野川、花ゆゑしづむ身をばうらみじ。

使しかしかといへば、「繩はなつけそ、唯具して來よ」とて、とり留めて、さまざまにもてなし、かしづきて、歌など學問しけると聞えし。若く侍りし時、坂東にて聞きて侍りし。彼の禪師、始めて修行せんとて、同行一人具して都を出でゝ、江州の或里に行きくれて宿かるに、すべてかさゞりければ、せんかたなくて、或る小家のあやしげなるに立ちよりて、日も暮にければ、押し入りて夜を明して、朝出でけるを、主呼びとゞめて、物のひまより差し出だしたる物を見れば、折敷に紙打ちしきて、稗の飯を置きたりける紙に、物を書き付けたるを見れば、

數ならず賤しき草のみなれども、これにぞかくる露のいのちを。

みけり。曉、母おどろかして「如何にや、さしも思ひたちて詣でたるに、思ふこ
とも、よく〳〵祈り申せ給へかし。こゝろやすくも打ちとけて、やすみ給ふもの
かな」と云ひければ、返事に、

身のうさは中々なにと石淸水、思ふこゝろは汲みてしるらん。

下向の時、道にて、時めきたる殿上人見あひて、車に乘せてをはしけり。神の
御利生なれば、今世後世、たのもしくこそ。

小式部內侍、病重くして、心よはく覺えける時、母を見て聲の下に、

いかにせん行くべき方もおもほえず、親にさきだつ道をしらねば。

天井に感ずる聲ありて、病愈えにけり。神明の御助けにこそ。

大江の擧周、病おもくして、たのみなかりけり。住吉の御たゝりなりければ、
母、赤染の衞門、「おこたり申して、我が命をめして、彼をば助け給へ」と祈り申
して、幣にかきて、御社にたてまつる。

かはらんと祈る命はおしからで、さても別れんことぞ悲しき。

其夜、白髮の老翁、此の幣をとると打ち笑むと夢に見て、病愈えにけり。

重うせたりけるに、無號きいて北野に七日參籠して、起請を書きて失を守るほどに、あやまちて香水の水を打ちこぼしてければ、仰せ付けられたる人、「是れこそ失よ」と申しけるを、「あやまちは世の常の事なり、是れをば許し給へ」と打ち泣きて、あながちに申しければ、許してけり。さて、あまり心うさに。紅の薄樣に書きて、御寶前に奉る。

　思ひ出づや無き名たつ身はうかりきと、あら人神になりしむかしを。

其夜、法皇の御夢に、やんごとなき老翁の束帶にて、「御使者給ひて目出たき事の侍る。見せまゐらせん。我は北野の右近の馬場に候者なり」と仰せられけり。さて、急ぎ御使者あるを、この歌を見て奏しけるほどに、やがて其の日女院の御所に、敷島といふ雜仕、法師と二人かつぎて、師子舞にして、御衣を持ちてくるひ參りてけり。其の後、小大進は召されけれ共、日來心わろき者の思食されてこそ、かゝる心うき事も侍る」とて、仁和寺に籠り居て、まゐらざりけり。

洛陽に貧しくして世を渡る若き女房ありけり。母と具して八幡へ詣でゝ、身の貧しきことを祈り申しけるに、娘は歩みつかれて、宵より通夜ら打ち伏してやす

感應あるべし。大聖、我國に顯れて、既に和歌を詠じ給ふ。淸水の御詠にも、

唯たのめしめぢが原のさしも草、われ世の中にあらんかぎりは。

とあり。此れ必らず陀羅尼なるべし。疑ふべからず。神明また多く歌を感じて人の望を叶はしめ給ふ。かた〳〵和歌の德、惣持の義、陀羅尼、ひとつに心得べし。綺語の失を論ぜば、失は人の染汙の心にあり。聖教とても、名聞利養に用ふるときは、みな魔業となる。是人の失なり。是れによりて惣持の德を失ふべからず。經を讀むも折あしきをば、『成論』の中には綺語となるといへり。此れは自然と此理を意得て書き置き侍り。などかこの謂なからん。(一)諸法實相なり(二)色香中道なり。麁言軟語みな第一義に歸す。和歌何ぞ必らずしも簡みすてん。治生產業悉く實相に背かず。何事か法の理に叶はざらん。そのかみ或る山中に閑居して侍りし時、鹿のなく音を聞きて思ひつづけ侍りき。

たれがきく／聞くやいかに妻よぶ鹿の聲までも、皆與實相不相違背と。

一三、神明歌を感じ人を助け給ふ事

鳥羽の法皇の御時、待賢門院に、小大進といふ女房召つかはれけり。御衣の一

(一)諸法實相。天臺宗にて一切萬有そのまゝ眞實本性の相を現はしつゝありといふこと。

(二)色香中道。一色一香みな中道實相にして、一色一香の外に眞如を求むるに及ばずといふこと。

道理を、三十一字の中につゝみて、佛菩薩の應もあり、神明人類の感もあり、彼の陀羅尼も天竺の世俗の言なれども、陀羅尼にもちひて是をたもてば、滅罪の德、拔苦の用あり。日本の和歌も、世のつねの詞なれども、和歌に用ひて思ひをのぶれば、必ず感あり。まして佛法の心をふくめらんは、疑ひなく陀羅尼なるべし。眞言密教の習には、法爾所起曼荼羅、隨緣上下迷悟轉と云ひて、六大法界、四種曼荼羅なり。依報をいへば寂光を出でず。正報をたづぬれば毘盧遮那佛なり。たゞ己れと迷へば衆生となりて下々來々し、無明の海に入る。自己を悟れば、上々去々として佛果にのぼる。法は本來曼荼羅なり。このこゝろを思ひつゞけ侍り。

　おのづから燒野にたてる薄まで、曼荼羅とこそ人もいふなれ。

和歌を眞言と心得て侍る事、聖人は心なし、萬人の心を心とすと云へり。然れば法身は言なし、萬人の言をもつて語として、佛法をとき給ふ。言の中に義理を含めば、必らず惣持なり。惣持ならば必らず眞言なるべし。天竺、漢土、和國、その詞異なれども、其の心通じて其の益すでに同じき故に、佛教弘まりて、其の義門を得て、利益虛しからず。詞に定れる法なし、たゞ心を得て思を述べは、必ず

この歌の心まめやかに思ひ入りたる詞と覺え侍るまゝに、委く其の趣き申し侍る也。

一二、和歌の道深き理ある事

和歌の一道を思ひとくに、散亂麁動の心をやめ、寂然閑靜の德あり。また言すくなくして意を含めり。(一)惣持の義あるべし。惣持といふは即ち(二)陀羅尼なり。我朝の神明は、多くは佛菩薩の垂跡、應身の隨一なり。素盞嗚尊すでに出雲八重垣の三十一字の詠を始め給へり。佛の語に異なるべからず。天竺の陀羅尼も、たゞ其の國の人の詞なり。佛是をもつて陀羅尼を說き給へり。この故に、一行禪師の『大日經疏』にも、「(三)隨方の詞みな陀羅尼」といへり。佛もし我が國に出で給はゞ、たゞ和國のことばを以て陀羅尼としたまふべし。惣持は本文字なし。文字惣持をあらはす。何の國の文字か、惣持をあらはす德なからん。況や高野大師も、(四)「五大みな響あり、(五)六塵こと〴〵く文字なり」と宣べり。(六)五音をいでたる音なし。阿字をはなれたる詞なし。阿字即ち密教の根本なり。されば經にも舌相言語みな眞言といへり。『大日經』の三十一品も自から三十一字にあたれり。世間出世の

(一)惣持。短語に長意を總べ持てるもの。
(二)陀羅尼。前出。
(三)隨方。何處といふに同じ。隨處。
(四)五大。地大、水大、火大、風大空大これ全宇宙を生成せる要素なり。
(五)六塵。前出。
(六)五音。宮、商、角、徴、羽。

死を出づべし。一期なす事なくして明暮なば、後に必ず悔むべし。老ぬれば、若かりし時、勤めざることを悔い、病に伏しぬれば、身つゝがなかりし時努めざることを悔い、命終らんとして惡相現じ、苦痛にせめらるゝ時は、たとひ老と病とありとも、苦がろく心みだれざりし時、など一善をも成じ、一佛をも念ぜざりけんと、くやしかるべし。我は醫師の如し。よく病をしり、藥を知りて敎へおくに、愚にして煩惱業の病をもちながら、妙法の藥を服せざるは、我が過にあらじと說き給へり。されば若く壯につよく、病なからん時、つとめ行ふべし。老を待つ事なかれ。古人いはく、「道ふことなかれ、老來りて初めて道を學ばんと。古墳多くはこれ少年の人なり」と。(一)老少不定の國なれば、若しとても賴むべからず。衆苦充滿の境なれば、富めりとも安樂なりと思ふ事なかれ。古墓をとふらへば、多くは若くして世を早くせし人なりといへり。かゝる世のためし、眼に遮り耳に盈つれども、思よりて驚く心なし。頭に雪をいたゞき、面に波をたゝみながら、なほ百年の蓄をし、一生は盡くといへども希望はつきずして、此世の望すてがたくして、榮華を思ひ富貴を願ふ。後悔さきだゝぬ事を辨へざること、誠に愚なる哉。

(一)老少不定。老たるも若きも、死することは定めなしといふこと。

浦山しいかなる空の月なれば、心のまゝに西にゆくらん。

凡そ狂言綺語と云ひて、口業の過に和歌を入るゝ事は、染歌と云ひて、愛情にひかれて、由なき色にそみ、空しき詞をかざる故なり。聖教の理をものべ、無常の心をもつらねて、世縁俗念をうすくし、名利情執をも忘れ、風花を見て世上のあだなる事を知り、雪月を詠じて心中の潔き理をもさとらば、佛道に入る媒、法門を悟る便りなるべし。されば古人の佛法を修行し、必しも此の道を捨てず。折にしたがふ述懐これおほく聞ゆ。大原上人、西行法師など、寄りあひて、老後の述懐に或る上人、

山のはに影かたぶきてくやしきは、空しく過し月日なりけり。

彼の作者の心中、をしはかられて遙に聞くに、心なき身にも哀に覺え侍べり。人毎にくやしかりぬべきもの也。由なき事に打ちまぎれて、實の道の營なみは、實におろそか也。此の歌は『遺敎經』の心にあひかなへり。佛、最後の說法に、「爲すことなくして空しく死せば後に悔あることを致す」と說き給へり。文の意は、我が說く所の法の中には、有緣の法を受習ひて、一心につとめ行へば、何の法も生

「兒共は學問なんどするこそさるべき事なし。此の兒歌をのみ好きて所詮なきものの也。あれ體の者あれば、餘の兒どもゝ見學ぶ。明日里へやるべし」と、同宿によく〱申し含められけるをも知らずし、月さえて物靜かなるに、夜打ちふけて緣にたち出で、手水をつかふとて、彼の兒詠じて云はく、

手にむすぶ水にやどれる月影の、あるかなきかの世にもすむ哉。

僧都これをきゝて、折節といひ、歌の體といひ、心肝に、そみてあはれなりければ、歌は道心のしるべにもあるべきもの也けりとて、此の兒をも留めて、其後歌をよみ給ひけり。近代の集に其うた見え侍るにや。或說には、近江の湖に船のゆくを見て、此兒

世の中をなにゝたとへん朝ぼらけ、こぎ行く船の跡の白波。

と詠じけるを聞きて、歌をこのまれけるとも云へり。先の歌は貫之病ひ重くして、心よはかりける時の歌、後の歌は滿誓が歌なり。二つながら古歌を詠じたるにこそ、共に『拾遺』にあり。

僧都詠じて云はく、

三井寺に敎月房とて、中比碩學ありけり。幼少の時より萬事をまじへず、學問の外他事なくして、論談決擇の道ゆるされたりけるが、和歌の道つや〳〵知らざりけり。弟子ども申しけるは、「我朝の習、古も今も翫ぶ和歌の道、御心得なきこそ、無下に覺え候へ」といふ。さて「和歌の體はいかなるものぞ」と問へば、『古今』の歌を語る。

　年のうちに春はきにけり一歳を、去年とやいはん今年とや云はん。

といへば、「兩樣に問ひたるな、御房とはれたり〳〵」とぞ云ひける。よろづ論議に聞えけるにこそ。一代の聖教は、佛意みな生死を解脫せんためなり。道人のみるには、みな出離の門なり。說經師が見るには、みな說經書なり。まして聖教は、みな論議にこそ見え侍りけめ。出離の道遠くや。智慧を生ずる方便はゆゝしけれども、是非執諍は近くは生死の業なり。よく〳〵思ひわくべし。

一一、學匠の歌を好みたる事

惠心僧都は、修學の外他事なく、道心ふかき人なりければ、狂言(一)綺語の徒事にくまれけり。弟子の兒の中に、朝夕心をすまして、和歌をのみ詠ずるありけり。

(一)綺語。語をかざり、へつらふこと。十惡罪の一なり。

れりとも見えず。百足の如し。僅に一所をしる人も、其分を知りて振舞へば事かけず。一足のごとし。また無縁なるものも天運かぎりあれば、必ず飢ゑこゞえず。蛇のごとし。誠に宮も藁屋も、はてしなし。兎にも角にもありぬべきもの也。されば鶴の脛も切るべからず。鴨の脛も續ぐべからずといへり。此れは各々自位に住して天然道を守り、愁へず悦ばざる心にて、無爲の化を行ふ事をいへるなるべし。かやうの古事を聞くには、學匠の蟻螺などか問答せざらん。

九、學匠の歌讀む事

(一)已講なる僧二人、公請つとめて退出しけるが、草鞋をはきたがへて、一人の許へ云ひ遣りける。

はきたがへはた如何にしてしてけるぞ、これをば返すさて彼はたべ。

返事。

はきたがへ己が進みてしてけるか、然らばそよに我は過なし。

語のかゝり、まことに學匠の歌と覺えたり。

一〇、學匠の萬事を論議に心得たる事

(一)已講。探題とも云ふ。論議式のときに出題を司る僧職の名なり。已に三會の講師をつとめ終りたりといふ意にて已講といふ。

て歸りぬ。是れは獸までも枉惑の心のあることを經に說かれたり。

また烏と鳩と蛇と鹿と山中にありて、たがひに問ふ。「何事か苦なる」と。烏が云はく、「飢ほど苦しき事なし。飢ゑぬれば目もくらく心まよひて、網にかゝり命の失せん事も忘する」と。鳩の云はく、「我は婬欲の心の起るほどの苦みなし。胸くるしくほとをりて、堪へ忍びがたし」といふ。蛇の云はく、「我は瞋恚ほどの苦なし、腹たちぬれば身もえこがるゝ」といふ。鹿のいはく、「我はものゝ恐ろしきほどの苦なし。人の音、弓の影もすれば、身のくだけん事もしらず、谷峯を越えて走る」といふ。

又百足と山神と蛇と知音にて、山中にすみけるが、百足山神にいはく、「我は百足あれども、餘りとも覺えず。汝足一にては、いかでか易くあるかん。九十九の足をつくべし」といふ。一足がいはく、「我は足一にて踊りあるくに不足なし。汝が九十九の足をきりて捨てよ」と云ふ。蛇のいはく、「我は一もなく百もなけれども腹をもつてあるくに事かけず。百も一も捨てよ」と云ふ。此事を思ふに。實にも然るをや。世をわたる人、所知庄薗おほきも人をかへりみ、ひろく振舞へば餘

かゝる時なれば、得參らじ」とぞ返事しける。げにもあぶなき見參なり。ぐつと、呑まれなば、如何に思ふともよみがへる道あらじ。

海の中に虬といふ物あり。蛇に似て角なき物といへり。妻懷妊して猿の生肝をねがひければ、山のほとりに猿ありける所にゆきて、「この山に菓多しや」と問ふ。猿の云はく、「甚だ得がたし」といへば、虬の云はく、「我がすむ海中に菓のおほき山あり。おはしませかし」といふ。猿の云はく、「海の中へは如何でか行かん」といふ。虬の云はく、「我が背に乘せて」といふ。「さらば」とて、背にのせて行く。海中へ遙にゆけども、山も見えず。「いかに、山は何處ぞ」といへば、「げには海中にいかでか山あるべき。我妻、猿の生肝をねがへば、其のためなり」といふ。猿色を失ひて如何にすべき方なくて申しけるは、「さらば山にてものたまはで、やすきことなりけるを、我が生肝はありつる山におけり。急ぎつる程に忘れたり」といふ。「さては肝のためにこそ、具して來つれ」と思ひて、「さらば返りて取りて給べ」といふ。「安き事」と云ひければ、返りて山へゆきぬ。猿、木に上りて、「海中に山なし、身をはなれを肝なし」と云ひて、山へふかく入りぬ。虬ぬけ〳〵とし

「爾らず、前に輪子の名を得たるが故に執轉提等を准例せば亦爾なり」。前に已に輪子の名を得たる故にありと云はず、執轉提も、例せば亦しかなりと答ふ。蟻、蝻に問ていはく、「何故に蝻を蝻と名くる耶。答ていはく、「背の上に谷ある故に蝻と名く」。背の上くぼみて谷にゝたるゆゑにと答ふ。難じていはく、「背の上に谷あるを蝻と名けば、團子等に於いて蝻と名けざる」。背くぼき故に蝻といはゞ、團子をも蝻といふべしと問ふ也。「前に團子の名を得たるが故に、突拍子等も准例せば亦爾り」。しからず、さきに團子の名をうるゆゑに、突拍子等も是れをなずらふべしと答ふる也。

南都にて或人かたりしかば、才學のために書き侍る也。前生の學匠にてありけるにや。此は野槌よりも、やさしくこそ覺ゆれ。經論のの中に畜生の問答多く見えたり。『大論』には或池の中に蛇と龜と蛙と知音にて侍りけり。天下旱して池の水も渇る。食物もなうして飢ゑてつれ〴〵なりける時、蛇、龜を使者として蛙のもとへ「時の程おはしませ。見參せん」と云ふに、蛙、返事に偈を説いて「飢渇にせめられぬれば、仁義をわすれて食をのみ思ふ。情も好みも世の常の時こそあれ。

ひありけるを、「あの御使にはいかゞに候べきや」と云ふに、「掃木、若紫」など云ひて、たる〳〵として明らかならざりけるを、心地あしく思ひて、つぶやきける。「あら心づきなの様や、まだこそ何なる昔の衣通姫、小野小町といひし人も、『源氏』かしぎ料にしたること聞かね」と云ひける。いみじき利口なり。この法橋の小法師も、かくさか〳〵しくは、「まだこそ昔の傳敎、弘法も、『仁王經』田の糞に入れよといふ事、、仰せられたること聞かね」と云はましと覺え侍り。

八、學匠の蟻蟎の問答の事

南都の春日野の邊に、、學匠の房近き所に、、蟻と蟎とありけり。自然に學問するほとりに住みて、、共に學匠なりけるが、、互に聞及びて寄りあひて、、論議せんと思ひけるほどに、、或時道に行きあひ互に悅びて、、やがて、蟻、蟎に問うていはく、「何故ぞ、蟻を蟻となづくる耶」何のゆゑに蟻を蟻となづくる、其の意いかんと問ふなり。答ふ、「前後ある故に蟻と名く」で中はくびれて前後のかたちある故に、蟻といふと答ふ。難じて云はく、「前後あるを蟻と名けば、輪子等に於いて蟻と名けざる」、前後あるものを、蟻といふべくは、輪子等をも、蟻と云ふべしとなり。答ふ、

く、「なにしに其の糞をもつぞやれ、法師が祈りに『仁王經』を讀むぞ。馬の糞にをとる『仁王經』しもあらんや」とぞ云ひける。また或時、弟子共に語りて云はく、「世間の人愚にして、物の計不覺なり。法師興ある事案じ出したり。杵一にて臼二つ搗くべき樣あり。一の臼は常のごとく置き、一の臼は空にしもに向けてつるべし。さて杵を上げ下ださんに、二の臼をつくべし」といふ。弟子の云はく、「上の臼には物がたまり候べくはこそ、何をつき候べき」といへば、「此難こそありけれ」とて、つまりにけり。

洛陽に或る女房、世間さかしく世智辨聰なるありけり。常に使ひつけたる女童に敎へけるは、「人の世間は大事なり。人の使ひなどあらんに、物くはせん事も我にいへ。人により折によりて、多くも少くもくはすべし。但し客人などのあらん時、一合二合など云はんもまさなし。やさしき事には『源氏』の詞とこそいへ、『源氏』の卷の次第をおぼえよ。一桐壺、二帚木、三若紫など云ふぞかし。されば桐壺などにもせよかしといはゞ、一合と心得よ、二三もかく心得よ」と敎へおきつ。或時、客人の女房と『源氏』など見てあそびけるに、遠所より急ぐ使

(一)相即。二物同一なることをいふ。

く善くよく諸法の相を分別すれば、第一義心に於いて動かず」云云。文の意眞諦第一義においては、平等無相の智慧明にして、能く諸法の俗諦緣起、善惡凡聖の品を分別すべしといへり。諸佛の所說の法常に二諦によれり。古人のいはく、「實際の理地には一塵を交へず、佛事門の中には一法をも捨てず」と云ふ。然るに此の學匠は、平等を惡く心得たり。若し眞諦の理によせて(一)相即をいはば何ぞたゞ鹽賣博賣のみ即せん、房主も同宿も、下人も、一切相即すべし。十界みな一相無相の故に、誰か誑惑し、誰か誑惑せられむ。無我無人、無自無他の故に。もし俗諦緣起の假相の面は、鹽賣博賣、別の衆生なり、何ぞ抑へて是をしへたげん。見解のひがめること勿論なり。弟子もげに非學匠なりけり。などか此の道理にてつめざらん。

七、學匠の世間無沙汰の事

常州の東城寺に、圓幸教主房の法橋とて、寺法師の學匠ありけり。他事なく正教に眼をさらし、顯密の行怠りなき上人なり。世間の事は無下に無沙汰なり。田舍の習ひなれば、田に入れんとて小法師糞を馬に付けて行くを見て、禁制していは

品一匹にて、鹽俵十ばかりも買ふべく候に」と云ふ時、さては安からぬ事なりとて、頭をかく所に、次の日榑賣「榑やめし候」といひて、馬に付けて來る。「をろせ」とて、やがてをしとゞむ。「此はいかに」と云ひければ、「昨日をのれに枉惑せられたりしかば」と云ふ。「さることこそ候はね」といふ。弟子共、「かゝる御僻事こそ候はね、昨日のは鹽賣なり。是は榑うり也」といへば、「御房達は、本より非學匠にて、子細も知らぬ賢しらするもの哉。鹽賣は鹽うり、榑うりは榑うりとは、(一)別教の心なり。圓教の心には、榑賣即ち鹽賣、鹽賣即ち榑賣なりとて、しかりければ、弟子共かたはらへ呼びて價をとらせて歸しけり。この學匠の見解まことにひがめり、佛法には(二)眞俗の二諦あり。眞諦は空平等の理なれば、自他依正等の別なし。諸法の自性空なる故に。俗諦は諸法の因緣和合せる假相をやぶらずして凡聖位わかれ迷悟品ことなり。天台の法門にも(三)三諦の中に、空中は眞諦如々平等なり。假諦は(四)緣起の故に、(五)十衆の依正歷然として亂れず。『肇論』に云はく、「般若の門は空を觀じ、漚和の門は有にわたる」と。漚和は方便の梵語、世間の緣起の假相をやぶらず、和光利物し、俗諦の差別を辨ふべし。いかゞ亂らんや。『淨名經』にいは

(一)別教圓教。天台宗にて、釋尊の一代教を藏、通、別、圓の四教にわかつ。そのうち別教は事理各別をいふ教。圓教は事理相卽をいふ教とす。

(二)眞俗二諦。眞諦とは萬有の本性平等なるの理をいひ俗諦とは萬有の假相差別せるの理をいふ。

(三)三諦。空諦、假諦、中諦。

(四)緣起。因緣によりて起ること。

(五)十衆。十界のこと。前出。

續して有るに似たれども、刹那々々に落謝して、火と薪と共に消えて、暫も留らざるがごとし。身心の危きを知らざる事を示すにこそ。三井寺の學匠の法門、孔子の心に似たり。無常の理よく〳〵心を留むべし。佛法に入る方便多けれども、無常を知る至要なり。智者大師釋にいはく「知解胸にあふる精進火を滅すれども無常を悟らず」。諺にいはく「憐むべし、無五の媚」云云。無常を知る、道心の色といへり。常に心にかけて、執心をのぞき、妄情をわすれて無心の道に入り、無我の理をさとるべし。

六、學匠の見解僻む事

伊豆の山に、中比學匠ありけり。弟子も下人も他行の時、鹽賣一人來りて、「鹽や召し候」といふ。坊主、「誠に鹽は大切のものなり熊野の道にも百味と名けて、萬の物の氣味は鹽にこそあれ」とて、買はんと云ふ。一俵が直物を問ふに、「唯御計ひ候てこそ召され候はめ」と云ふ。「上品の絹一匹にうりてんや」といへば、「子細に及び候はず」とて、悦びて代へて去りぬ。弟子下人歸りたるに、「あきなひこそしたれ、しかしか」といふ。「かばかりの事候はず。鹽賣に枉惑せられ給へり。上

と師の云はく、「我に何の危き事かあらん。侍郎が危きこと此よりも甚し」といふ。侍郎いはく、「某し、江山をつかさどる、何の危き事かあらん。」師いはく、「薪火相交はり、識性停まらず何の危き事なからん」。侍郎がいはく、「いかなるか佛法の大意」。師のいはく、(一)「諸惡莫作衆善奉行」と。侍郎いはく、「三歳の孩兒も此の如くいふ事を知れり」と。師いはく「三歳の孩兒も云ふことを得れども、八十の老翁も行ずる事を得ず」といへり。誠なるかな、此の語は、諸惡莫作の教にたがふは眞の佛法に非ずと云ふこと、先德の口傳なり。(二)七佛の通誡なり。佛子として是れを信ぜず行ぜざらんや。諸惡莫作とは只惡つくらざるのみに非ず、(三)有相の善をも作す事なかれとなり。衆善奉行とは終日に善を行ずれども、不行にして不行の處にも住せざるなり。天台のいはく、「眞の無生の人は福すら猶なさず、何に況んや罪をや」と。古の大賢子を誡めていはく、「愼んで善を作すことなかれ」。子のいはく、「寧ろ惡を作すべきをや」と父のいはく、「善すら作すべからず、況んや惡をや」。是れ諸經の大意、賢聖の通儀なり。鳥窠和尚の言に、「薪火相交はり識性停まらず」とは、薪は(四)六境に似たり、火は(五)六根の如し。心境あひ對して念々に相

(一)諸惡莫作。前出。

(二)七佛通誡。過去に出世せる七人の佛が通じて誡められたること。

(三)有相善。差別的見解の執著よりする善。

(四)六境。色、聲、香、味、觸、法。

(五)六根。眼、耳、鼻、舌、身、意。

(一)國師。國の師匠。

(二)梵志。淨裔と譯す。師につきて修學する婆羅門敎の行者をいふ。

(三)道林禪師。圓修といふ。支那唐代の禪僧。寂年不詳。

と、爰に王此僧を智者なりとて、あがめて(一)國師とせられけり。我等が無始の妄想顚倒の愚なる心には、此身も依報の山河大地、屋宅什物も、昔の物かはらめと思へども、刹那々々に生滅して、先の物は滅して新しく生ずるなり。業因緣によりて相續してあるべき程ありて、盡くべき時は盡くるなり。油のあるほど燈はあれども、刹那々々に火消えて、油の力にて又生じ、又生じつくなり。水の流れも同じ、あるに似たれども本の水は暫も止まらざるが如し。されば孔子の言にも、「我終日に臂を交へたるほど顏回が新なるを見る」と云ふ心は、念々に先の身は滅する故に、顏回が新なる身を見ると云ふなり。古人いはく、「紅顏は自ら童子の時にあり。白髮は今老體の身にあり」と云ひて、若き時の色形は其の時失せぬ。老體の身は今新たに得たり。昔(二)梵志ありて若くして他國に行きて年たけて後、古鄕へ歸る、里の人、「昔の人の來れるや」と云へは、梵志、「我はむかしの人に似たり。昔の人に非ず」と答ふ。誠に年月の去る事をばしりて年に隨ひて昔の身の去ること人しらず。むかし(三)道林禪師、秦望山の長松の上に居す。時の人是を鳥窠和尙と名づく。白居易侍郞、その國に下りし時、行いて問ふて云はく、「禪師の居所危くこそ」

（一）落謝。すべてのものは一念の後直に過去に消ゆ。これを落謝といふ。
（二）有爲。かりに因緣によりて出來たること。

五、學匠の怨み解くる事

三井寺に若き俱舍學匠の器量も同じ程にて、知音なるありけり。或時少しの事によりて、一人を恥がましく惡口したりけるを、本意なく思ひつめて、便宜をうかゞひて、太刀を拔きて走りかゝりけるを、少しもさはがずして打ちわらひて、「これは何ごとぞ」と云へば、「一日惡口したりしためし立てんずるぞかし」と云ひけるを、「御房は學匠と思ひたれば無下なりけり。其事は其座に(一)落謝せしは今いづくにかある」と云ひける時、「げにや御房なきぞかし」とて、太刀をさしてつれて行きけるこそ、學解なれども(二)有爲の法の念々に滅して、暫くも留まらざる道理をよく〳〵學し信じたるゆゑに、怨の心もとけにける。佛法の利益めでたくこそ。昔し漢土に國王ありて、天下の智者を試みんとて、百人の高僧を內裡へ請じて、武士を數百騎かくしをきて、百僧を俄に殺害すべき體にてかこみければ、皆あはてさわぎて四方に逃げ去るに、一人の僧少しもさわがずして、儼然として坐す。さて事の色ばかりにて止みぬ。王此僧に問はく、「餘の僧みな恐れ去る。和尙一人何ぞ恐れざる」と。僧のいはく、「生るゝより念々に死す、何ぞ始めて驚かん」

生のためなりしかば、廣大の慈心にこたへて、一鉢の飯、十二由旬の大會に供養せしに、乏しからず。其心を佛說き給ひしかば、人天の大會、異口同音に「南無純陀、身は人身也といへども、心は佛心に同じ」と讃めけり。此れに准ふれば、貪瞋、愚癡、憍慢、嫉妬等の心あらば、身は人身なりといふとも、こゝろは地獄、餓鬼、虎狼、毒蛇等の心なるべし。されば心の和かなるは菩薩の心なるゆゑに、自ら其德ありて魔緣も是を惱まさず、災害これををかさず、藤柳のやわらにして風に隨ふゆゑに損せざるに譬ふ。慈心(一)三昧に入りぬれば、一切の毒害をかさずといへり。昔し天竺に王の后慈悲深くして、一切を哀れみ、心いさぎよくして(二)三寶を敬ひ給ひけるを、國王邪見にして是れを猜み、弓を引いて射給ひけるに、后すこしも恨みあだむ心おはせずして、いよ〳〵慈心を發して、王の邪見をあはれみ給ひけるゆゑに、矢返つて王のむねに立ちて死し給ひぬ。世間の諺にも、「にぎれる拳し咲る面にあたらず」とて惡いけなく心の底より打ち咲みてむかへる者には既に握ぎれる拳を開いて心を止むと云へり。されば佛性を顯はさんと思はん人、慈悲を心に習ひ好むべきなり。

(一)三昧。禪定と譯す。心を亂さぬこと。
(二)三寶。前出。

（一）調達。提婆達多のこと。

て一日の中に多の鹿を殺し給ふ事を、菩薩の鹿王悲みて進み出で、國王に申す。少事を以て多の鹿の命を失ひ給ふこと不便に侍り。毎日に一の鹿を奉りて供御とすべきよしを申すに、然るべしとて次を以て一の鹿を日々に奉りけるに、（一）調達が群鹿の中に孕める鹿次に當る。孕める子を悲みて、「我身はのがるゝ所なし子は次に當らず。餘の鹿をさしかへて、子をうみて後に、我を出し給へ」と申しければ、誰か命をおしまざる次第たらば參るべしとて愼りければ、菩薩の鹿王に參りて、此のよしを歎げき申すに、あはれみたまひて是を歸へし遣はし、鹿王かはりて王宮へまゐり給ふ。金色の文ある鹿なれば、人見知りて。王に鹿王こそ參りて侍れ」と申すに、「既に群鹿盡きたるにや」と問ひ給ふに、鹿王事の子細を委しく申していはく、「慈を以て苦厄をすくふは功徳無量なり。若し人慈なくば狐狼と何ぞ異ならん」と申しければ、王驚て座を立ちて偈を説いて曰はく、「我は是れ實に畜生なり。人頭鹿と名く。汝は是れ實に人なり、鹿頭人と名く。慈を以て人とす。形を以て人とせず」とて、ながく殺生を止めて鹿を返へし遣す。また沙羅林にして釋尊の御入滅のとき、純陀長者一鉢の飯を佛に供養せし志、法界の衆

(一)空無相。空にして差別の相なきをいふ。

(二)利生。利益衆生のこと。

(三)三身佛性。三縁佛性のこと。正因佛性、了因佛性、縁因佛性。

(四)提婆達多。前出の調達をみよ。

といへり。大乘の行者專ら無所得を以て方便とする。誠の解脱の因緣なるべし。我相人相を離れ、(一)空無相の觀心の用意、これを心にかくる、眞實の道人の形なるべし。諸法の空を觀じ慈悲ある人、今世後世佛道に近し。尤も信仰すべし。されば智慧こそいみじかるべけれども、自利の心なるは小乘に共にして(二)利生の德なし。學解の多聞は世智なれば、いよ〳〵其益少し。慈悲は菩薩の體、佛の心なり。少分なる時は仁といひ、廣大なる時は慈悲と名く。譬ば火を以て物をやく。火の體は同じけれ共、小さき薪を燒く時は火の用少なし。大なる薪には火の用はげしきがごとく慈悲の心其境のせばき時は、癡愛とも、情とも、仁とも云はる。この心漸く大にして法界の衆生を利する心ならば、全く菩薩の慈悲諸佛の心なり。(三)三身佛性の中の因緣の種、應身の德とあらはる。『觀經』には「佛心とは大慈悲心これなり」と云へり。『法華』には如來室といふは「一切衆生の中の大慈悲心これなり」と云へり。『瑜珈論』には、「菩薩は何を以て體とすと問はゞ、慈悲を以て體とすと答ふべし」と云へり。昔鹿野苑に鹿王ありけり。五百の群鹿を領ず。是れ釋迦菩薩の因行なり。又鹿王あり、同じく五百の群鹿を領ず。(四)提婆達多なり。國王狩し

（一）僧綱。僧の官位をいふ。こゝは官位ある僧のことを云へるなり。

（二）我相。我れがといふこと。

なく宥なんどしければ、隨分の名人の若大人にて、人も恥ぢ思ひけり。或る（一）僧綱、新羅明神に參籠す。夢に見けるは、異類異形の鬼神、御寶前に參ず。神官一人出で向ひて、「侍從をば助け、式部をばたまはれと仰なり」と云ふ。此僧綱夢の中に思ひけるは、侍從はさせる法器のあるにも非ず。式部は器量のもの學匠なるに此仰せこそ心得がたけれと思ひて、神官を呼びてしか／＼と申し入れければ、神官このよし申し入れて、御返事とおぼしくて申しけるは、式部は誠に學匠なれども、自利の心にて人のため益あるまじき者なり。侍從は慈悲なるものにて、我寺に住すまじきもの、彼れ故に住せるもの百人にあまれり。不便に思食なりと仰にて候と云ふと思ひて夢覺めぬ。不思議に覺えて使者を侍從房が許へやりて、「何事かある」と問はせければ、この兩三日重病に取りふせられて侍りつるが、此曉よりあせ出で心地たすかりて覺え候」と云ひけり。式部房のもとへ使を遣りて聞けば此曉より重病を受けて大事なるよし申しけるが、終に失せにけり。天狗人に託していはく「慈悲ある人はをそろしくして何にも犯し難し。いかなる善事を行ずれども、（二）我相僻慢ある人をば、哀れ我が伴黨よと思ふ故に、心やすく覺ゆ

も、解脱の因縁なり。名利我相を心とすれば、善事に似て流轉の因縁なり。作すことを以て善惡を定むべからず。意樂をもつて昇沈をわきまふべし。これ隨分自己の法門なり。『首楞嚴經』に云はく、「若しよく物を轉ずれば即ち如來に同じ」またいはく、「三科七大、もと(一)如來藏」と『楞伽』に云はく、「如來藏は善不善の因なり」。さればものは得もなく失もなし。心に用ふるとき彼れに着し、轉ぜらるゝときは假りに煩惱といひ、轉じて利益あるときは菩提といふ。實には煩惱もなく菩提もなし。たゞこれ頭もなく尾もなき、一靈無相のくせもの也。何とかこれを云はんや。されば名を立る事も方便なり。實證の所には無名無心なり。

四、慈心ある者の鬼病を免るゝ事

中比、三井寺に、式部・侍從とて若き僧二人ありけり。式部房は學匠にて法器の聞えあり。侍從房は學問非器の者なり。たゞ心操たゞしく、萬人にうけられ、慈悲あり情ある者にて、小兒共の始めてのぼりて有りも付かぬには繪なんど見せ、遊び戲れてあり付けるまゝに、寺中に始めたる兒のぼれば必ずよびけり。亦人の中のわろきをも得もいはず云ひなをし、鬪諍がましき事あれば、中に入りて事も

(一)如來藏。眞如のこと。如來の德を藏する故にいふ。

し。然れば生身をたすけて法身の慧命を全くせんと思はば、世間の治生産業みな佛法の助けとなりて道業を成るべし。昔の道人、或は種をまき、畬をすきしが如し。其ときは世間すなはち佛法なり。正くは六根淨の位にこそ。治生産業、實相に違背せずと說けども、佛法修行の志まことしくして、五欲の塵勞に心をそめず、少欲知足にして修行の機をたすけんは、分に實相にそむかん道理などかなからん。例せば、戒門を委しく論ずれば、「唯佛一人淨戒を持つ」と云ひて、佛のみは眞の持戒の人なり。また許して云ふときは百行律儀とてわづかに人ばかり殺さぬ不殺生戒、また婬戒を晝ばかり持ち、不殺生を夜るばかり持ち、十善戒を六十歩の程たもつも分に持戒と云ひ准へて心うべし。世間者、出世者の事は我と思ふより待ちて後、聖敎をみるに文證多く侍り。『仁王經』にいはく、「菩薩いまだ成佛せざるときは菩提を煩惱となし、菩薩成佛のときは煩惱をもつて菩提となす」と。『守護經』にいはく、「或は煩惱のよく解脫のために以て因緣となるあり。實體を觀ずるが故に。或は解脫のよく煩惱のために以て因緣となるあり。執着を生ずるが故に」と。この文肝要なり。意樂善なるとき執着なくして道を志せば、煩惱に似たれど

塔となせば皆すでに佛道を成ずと云ふが如し。當時の行儀を檢へ、順次の生所をいはゞ、心品に隨ひて利害あるべし。出離の志は菩提のために學せば大に利益ある名聞の心、利養のために學せば、大なる損害あり。されば世間出世なす事は同じけれども、善惡は心に分れたり。倩ら此の事を案ずるに、佛法を曾て知らず學せぬ者は云ふにたらず。佛法を學ぶ者について、世間者、出世者を分つべし。其の本意眞實に佛道をこゝろざし、解脱を期する心ならば、出世者なり。度世を心とし、今生を重くして、佛法を以て名利の價にして、利養供敬に貪著せんは世間者なり。たとへば管絃に呂律あひ交へ、五音ともにしらぶれども、一の調子を本として、此を奏ずる時は、餘の四の音は助として自から調子の能なし。互に主どり、互に助けて、相ならばず。此の如く世間者も佛法をこそ學すれども、名利の媒とすれば、佛法もさながら世間の助となりて、自の功能なうして出離解脱の因にあらず。此時は佛法即ち世間となる。然れば出世の道人も爭でか道具衣食の緣、住所資財の蓄へもなからん。有待の依身、緣かくれば保ちがたし。下界の報必ず助をかるべし。(一)南浮の人身受けがたし。この機をあひ助けて道行を成ずべ

(一)南浮。前出。

そ覺ゆれ。

三、學匠の畜類に生るゝ事

山に二人の學匠ありけり。同法にて年齢も心操振舞、よろづかはらず、學問も一師の下にて稽古しければ、殊に見解も同じ。何事につけても同じ體なりける故に二人契りていはく、「我等一室の同法たり、萬かはらず振舞へば、當來の生所も同じ報にてこそあらんずらめ。先立つ事あらば、生所を必ず告ぐべし」と、能々たがひに契りぬ。一人他界して夢に告げて云はく、「我は野槌と云ふ者に生れたり」といふ。野槌といふは常にもなき獸なり。深山の中に希にありと云へり。形大にして目鼻手足もなし。たゞ口計りある物の、人を取りて食ふと云へり。これは佛法を一向名利のために學し、勝負諍論して、或は瞋恚を起し、或は怨讐を結び、憍慢勝他等の心にて學すれば、妄執のうすらぐ事もなく、行解のおだやかなる事もなし。さるまゝには、口計はさがしけれども、智慧の眼もなく、信の手もなく、戒の足もなきゆゑに、かゝる恐しき者に生れたるにこそ。凡そ佛法を學するに結縁を論じ、遠因を云ふには、少しきの因縁も終にむなしからず。「沙をあつめて佛

(一)戒緩乘急。前出。
(二)夜叉。前出。
(三)著樂。快樂に執着すること。
(四)三惡八難。前出。

と問へば、「我が信解する圓頓の法は是にあり」とて、にぎれる拳を開くを見れば寶珠の光明赫奕として世界を照すあり。此の玉を以て身にすりぬれば、苦患やすまるといふ。さて此の光に映じて鬼形と見えつる形もすきとをりて、天人のごとくにして飛び去りぬ。されば(一)戒緩の故に惡趣におつといへども、乘急ならば智慧も悟もあるべきにや。在世に龍神(二)夜叉等の佛會に列りて得益せし此の類なるべし。戒急なりとも止觀定慧の修因なくば、人天の善處に生じて佛道に入りがたかるべしと見えたり。舍衛の三億、見ず聞かず、(三)著樂の諸天のしらず來らざりし此の類ひなり。教の本意は乘戒共に急にして人天の身にて佛の出世にあひ、悟を開けと教へたり、誠しき解行たゞずして、(四)三惡八難に入りなば、出離解脱にかたかるべし。されば止觀修行の方便二十五あれども、持戒清淨を宗とす。『遺教經』には「若し淨戒、諸善功德なくんば、みな生ずることを得ず」と說きて、戒行闕けぬれば一切の善生じがたしと見えたり。又戒によりて定を得、定によりて智慧を得るは、佛法の通相、修行の漸次なり。この學者は圓頓の觀行なんどありけるにこそ、されども執心ありて異趣にとゞこほりけるにや。さりながら出離は近くこ

自ら半錢の分なしと。是は行をすゝめんためなり。多聞ばかりも猶々業の種子と成る。七種の聖財の一なり。一向徒に思ふべからず。(一)荊溪いはく、「如實智は多聞より起る」云云。(二)耆婆、藥草等を取り集めて童子をつくり、是を藥童と名く。病人これを見て輕き病は形をみるに愈え、重き病は近付いて手を取り、言を交へて即ち愈えけり。遊行言語すること生ける人の如し。佛像を是れにたとへたり。見たまてつらば自から罪障滅すべし。信心の厚薄、觀念の淺深によりて、其の益異なるべし。青丘の大賢師、『梵網經』の汝是畜生發菩提心と誦すべしと云へる文を釋して云はく、「下劣の有情は設ひ領解なくとも聲毛孔より入りて遠く菩提の因縁となららん」と。

二、圓頓の學解の之益の事

中古に碩學の聞えありて、圓頓の信解も深く、人師(三)探題の位にあがれる山僧ありけり。(四)他界の後ち生所不審なりければ、弟子共ねんごろに祈請しけり。夢に先師、鬼神の形にて來れり。思はずに淺猿く覺え、「圓頓の教法を翫び給ひしかば淨土にも往生し、人天にも生じ給ひつらんとこそ思ひ奉るに、何なる御事にか」

(一)荊溪。前出。
(二)耆婆。前出。
(三)探題。論議式のとき論題を出す僧役の名。
(四)他界。死ぬること。

をけし、藥王の病患を愈すごとく、災難おのづから除き、業障必ず滅すべし。心あらむ人この文を習うて、常に口にも誦し、心にも觀ずべし。仍て本文を書き侍るなり。天台の學者は皆口に付たり。心をさとるまでなくとも、猶し益あるべし。『涅槃經』には、「この大涅槃の光明、常に衆生の毛孔より入りて、菩提の緣となる」と云へり。また『梵網經』には、「一切の畜類を見ん時は、汝是畜生發菩提心と云ふべし」と說く。下劣の有情、たとひ領解なくとも、法音毛孔より入りて、遠く菩提の因緣となると云へり。また先德の云はく、「(一)泥木の形像は大智よりおこり、紙墨の經卷は法界より流る」と。まことに佛智を假りて形像を刻み、法界を全くして文字に顯す。是故に佛像を拜すれば、自ら益を得經卷に向へば必ず罪を除く然れば徒に人畜に向ひて愛恚の心をおこさんよりは、常に佛像に向ふべし。由なき世間の文字をよみて、妄慮をなさんよりは、同じくは經卷を見るべし。人に善性あり惡性あり。勝緣たる(二)三寶の境にむかへば、妙用顯れやすし。惡緣たる(三)六塵の境に對すれば、妄業つくりやすし。須らく善知識の緣にちかづきて、ふかく大乘の益を信ずべし『華嚴經』に(四)多聞を誹する事、日夜に他の寶を數へて

(一)泥木形像。金や木の佛像。

(二)三寶。前出。

(三)六塵。前出。

(四)多聞。多く聞き廣く學ぶこと。

れば、(一)集として斷ずべきもなし。邊邪みな中正なれば、道として修むべきもなく生死すなはち涅槃なれば、滅として證るべきもなし。苦もなく集もなし、故に世間もなし。道もなく滅もなし、故に出世間もなし。純一實相なり、實相の外に更に別の法なし。法性寂然たるを止と名け、寂にして常照なるを觀と名く。初後を云ふといへども無二無別なり。これを圓頓止觀と名く」といふ文を誦しければ、鬼神いかにも近づく事あたはずしてさて御社へ返り參りて、このよしを申すに、「さては力なき事」といふ仰せにて、鬼類共さりぬとみて、此僧彼の住山者のもとに行きて、かゝる事をまのあたり見侍りたると語りければ、「神慮さやうに思食たる御事のかたじけなさよ」とて、本國へ下る事思ひとゞまりて、永く山にぞ住してける。此の文は、天台大師、南岳大師に、(二)三種の止觀を傳へ給ふ中の圓頓止觀の肝心の文なり。『止觀』の第一の卷に有り。圓頓の解行この文にきはまる。深く觀ずれば無明をすら斷じ、或は(三)五品(四)六根にも叶ひぬべし。それほどの益はいふに及ばず、わづかに信心をいたし學解の分なれども、世間の利益かくのごとくの事はあるべきなり。(五)法界等流の音聲、眞善妙有の文字なり。日光の霜露

(一)集。業因のあつまり。

(二)三種止觀。漸次止觀、圓頓止觀、不定止觀、止觀、は前出。

(三)五品。圓頓止觀の修行者の極めて淺き位、隨喜品、讀誦品、說法品、兼行六度、正行六度。

(四)六根。六根淸淨位とて、五品位の上に眼耳鼻舌身の六根の淸淨なる位。

(五)法界等流。宇宙の眞理そのまゝといふこと。

沙石集卷第五

一、(一)圓頓の學者鬼病を免るゝ事

中比、或る山僧、日吉の大宮に參籠す。夜半ばかりに夢にもあらず覺にもあらずして見れば、(二)行疫神の異類異形なる數しらず參りて、「天下一同の災にて候、山僧少々給ふべし」と申すに、神人出で向ひて申しけるは「山門の學者をば許すべしたゞし住山者の中に、我山に住せよかしと思ふに、近く本國へ下るべき僧あり。かれを惱して暫にても留むべし。命は奪ふべからず。其の谷の其の坊にあり名をば某と云ふ、と仰せなり」と云ひければ、疫神共ばら〳〵と出でぬ。件の坊に行いて入らんとするに、この僧國へ下るべきにて、山の名殘も惜く覺えければ夜ふくるまで心をすまして、「圓頓といふは、初めに(三)實相を緣ず、造も境も即ち中なれば眞實ならずといふことなし。緣を法界に繫け、念を法界にもつぱらにして一色一香も中道にあらずといふことなし。己界及び佛界、衆生界もまた然なり。(四)陰入みな(五)如なれば、苦として捨つべきもなく、無明塵勞すなはち是れ菩提な

(一)圓頓行者。天台宗の觀法を修行する人。
(二)行疫神。病氣を流行せしむる神
(三)實相。萬有の眞實の相、ありのまゝのすがた。
(四)陰入。萬物の要素をいふ。
(五)如。眞如。

然寂照の月の光、虚妄幻化の露にぬるべからず。志の及ぶ處ばかり、述懐を書きつけ侍り。をこがましく侍れども、固より愚なる人の心を勸めんための物語なり。かしこき人のためにあらず。智者自から心を得て、あざける事なかれ。

圭峯の言を題にして思ひつゞけ侍り。

よしもなく地水火風をかりあつめ、我れと思ふぞ苦しかりける。

八十路までかりあつめたる地と水、火と風いつか主にかへさん。

よしさらばもぬけて去らんおしからず、八十路にあまるうつせみのから。

あやまりに影を我れぞと思ひそめて、まことの心わすれはてぬる。

明かに靜なるこそまことには、我がこゝろなれ其のほかはかげ。

隨分述懐　　無住　　八十三歲

徳治三年戊申五月二十一日

沙石集卷第四終

ば萬途自ら正なり」と。この故に『阿差末經』にいはく、「常にその意を正うして餘事を學せざれ」と。正といふは無の義なり、一切の念なきとき正念なり。經にいはく、「一切法を念ずといふは、(一)般若を念ぜず、般若を念ずれば一切の法を念ぜす」といへり。般若は(二)火聚の四方より取るべからざるが如く、情識をもつて(三)緣ずべからず。たゞ一切の分別なきとき、般若に相應すべし。大乘の行人、朝暮に心行を察して(四)塵勞に染む事なかれ。(五)圭峰禪師いはく「空寂をもつて自身として、色身を認むることなかれ。靈知をもつて自心として妄念を認むることなかれ」。これ則ち止觀修行の肝要なり。常に心にかけて忘るべからず。此の心を思ひつゞけ侍り。

　白露に苔の衣はしほるとも、月の光はぬれんものかは。

妄念あだに結びおくこと露の如し。色身かりにをりなすこと衣に似たり。心、(六)五塵六欲に貪著し、身、(七)六趣四生に苦惱するは、露に衣のしほるゝが如し。月は靜にして空寂の理に似たり。光は明にして、靈知の德のごとし。この所を解し行じて、萬境に向ひてとゞこほらずば、光の露にぬれざるがごとく、本來明靜天

(一)般若。前出。
(二)火聚、火のあつまれるもの。
(三)緣。緣慮といひ、ものを認識すること。
(四)塵勞。煩惱のけがれ。
(五)圭峯。前出。
(六)五塵六欲。色、聲、香、味、觸の物質を五塵といひこれに法の一塵を加へて欲求するを六欲といふ。
(七)六趣四生。前出。

(一)無染。けがれなきこと。煩惱なきこと。

(二)大小權實。大乘小乘權敎實敎。

に所求なく、身しづかに心安くして、佛法修行の功をつまんばかり、人身の思ひ出あらんじかし、俗士なほ世上をかろしめ、無常をわきまへて、「蝸牛の角の上に何事を爭はん、石火の光の中に此の身を寄せたり」といへり。誠に榮枯事過ぬればみな夢となる、憂喜心に忘れなば空門に入り易かるべし。今も昔も眞實の道人は、貪著の過を恐れて、(一)無染の行を志すものなり。故松の尾の松月房の上人の寺に、南都の律僧來ることありけり。客僧のもてなしに、種々の珍物ありけるに、いさゝか貪著の心の起られけにるや「汝等比丘、莫得樂住、三界火宅、勿貪麁蔽、色聲香味觸也、若貪著生愛、則爲所燒」と音うちあげて誦し、箸うちたてゝはら／＼と泣かれけり。まことの道心者ときこえし人なり。終も目出くきこえ給へりき。凡そ敎門の(二)大小權實は、一往の義門なり。能化の意にのぞめ、實證の所をいふには、一理平等の無爲の上の差別なり。實には高下なし、行人においては何の敎門も只よく行じて、執心妄念なき是れ本意なり。されば古德のいはく、「情塵すでに遣れば人乘すなはち是れ眞諦なり、心跡いまだ亡せざれば佛乘なほ究竟にあらず、何となれば心の分別あれば一切みな邪なり、心の攀緣なけれ

なり。生死もなく流転もなし。一たび塵に合せしより知らざれば、失へるがごとし。妄苦といふは分別の念、妄に煩惱をつくりて苦惱をうく。本空なりといへども、其中に憂愁す。愚かなるかな、先づ世間の名利をすつる、一重の妄苦を離るゝ始めなり。貪をやすくして道を愛する、又はじめなり。解脱の道に足をあぐる方便なり。光明皇后の內裡の屛風に書きおき給へるとかや。「淸貧は常に樂み、濁富は常に憂ふ」と。誠に執心ふかく世路を營む人は、財あれどもいよ〳〵厭足はすのみあるまゝに、求むる時もわづらひ、守る時もくるしく、失ひぬればいよ〳〵憂ふ。たとひ一期安穩に持つといへども、(一)中有の資糧ともならず、冥途の伴侶ともならず。されば(二)經にいはく「田あるものは田をうれへ、家あるものは家をうれふ。牛馬六畜なければ、是をもとめ、あれば又これを養なふ憂あり。あるに付けてもうれへ、無きに付けても憂ふ」といへり。人間忽々として一期夢のごとし、空しく明けくれて、また三途の舊里に歸りなんとす。これ濁富の今世も後世も、憂へあるべき理なり。たゞ天運にまかせ、先業をかへりみて、希望の心なく貧賤をなげかずして、佛道に心を入れ(三)空門に思ひをすまし、內に所得なく外

(一)中有。前出。

(二)經。『大無量壽經』。

(三)空門。一切皆空の法門。

染なり」と云へり。無染の一句、行者の肝心なるべし。俗なほいはく、「事寡なければ心やすく、情わすれぬれば累ひ薄し」と。されば古の賢人世に仕へずして、心をやすくし、己が道をやしなふ、賢き心なるべし。人の世にあるを見るに、福貴にほこり、榮華を愛する、たゞ苦をもつて樂とし、勞をもつて富とす。身大なれば事多く、位たかければ心苦し。龍の頭多ければ苦多きが如し。たゞ人の事を沙汰し、人の煩ひを請け取りて、上につかへ下をかへりみ、世に随ひ伴に交る、閑ならざるをもつて榮とし、苦み多きをもつて貴しと思ひなしたり。身もやすく心も靜なるをば樂としらず、實に愚なるかな。樂天いはく、「富貴もまた苦あり、苦は心の危憂にあり。貧賤もまた樂あり、樂は身の自由にあり。」此の言、實なるかな。心うれへ身あやうくば、何の樂みもよしなし。林下の(一)貧道の、風月にうそぶきて法味をあぢはひ、心を道門にそめ、身に解脱を期して、世上を幻の如く思ひ、身心を夢のごとく觀じて、希望なく貪求なくば、當時もやすらかにして、後生もたのみあるべし。(二)賢首菩薩のいはく、「眞樂はもと有なるを失つて知らず妄苦はもと空なるを得て覺らず」といへり。眞樂といふは無心無念の寂滅の理處

(一)貧道、貧に安んぜる道人。

(二)賢首菩薩、支那華嚴宗の開祖。廿八歳勅命によりて出家し、屢華嚴經を講ず。睿宗の先天元年七十にて寂す。著書多し。

も、種をまき水をひき、作らざれば、草のみ生ひて、稲を得ざるが如しと云へり。他の寶を數ふるに、半錢の分なきが如しとも云へり。毗沙門堂の故(一)明禪法印、『止觀』の談議せられける座席に、遁世門の八道のぞみて、聽聞するありけり。法門の次に樂天が詩を引き出していはく、「匹如身の後には事何かあらん、應向世間には求むる所なし」。文の意は、人の一物も手にもたぬを匹如身といふ。また杖つくほどの地も持たぬを應向世間といふ。身に一物も持たず、住所もなく捨てはてぬる身は、中々もとむる所もなく、わづらふべき事もなし。かゝる人ぞ道に入りたる相なるべきといふ談議を聞いて、『止觀』の法門は承け候ひぬ」とて、座を立ちければ、この入道は、『止觀』一部はみな心得つとぞ法印申されける。南山大師も(二)五部の律をしらんと思はゞたゞ財色の二事を絶つべしと云へり。まことに佛法の肝心おほかるべからず。老子の云へるが如し、「一を抱いて天下の式たり」と。況んや佛法に入りては、一心をあきらめ、空門に入りなば、萬事すべてあきらかにしてかゝとゞこほるべからず。明鏡に像の迹なく、虛空の色にそまざるがごとく、身と心を練しなす、まことの道心なるべし。先德、「道行如何ん」と問ふて、「一切無

(一)明禪法師。天台宗。參議藤原成頼の子。仁治三年七十六にて寂す。

(二)五部律。前出。

て解行を立つるは、賊を養ひて子とすれば、家財を失なふいましめあり。大乘の空門、佛法の源底に心をかけ、誤りなく信解して、何れの行をも勵むべし。我相をのぞき執心をおそれて、名利を思はず、才覺を求めずして、さしあたりたる執著妄念の過を覺知して除くべきなり。毒の箭の身に立ちたらんをば、たゞ疾くぬく事を思ふべし。ひろく餘事を論じ、箭の善惡長短等を沙汰せざれ」と云へり。故に栂尾の明惠上人の申されけるは、「凡夫のならひ煩惱はみな具足すれども、殊にをもき障あり。それに眼をつけて、まづ對治すべし、とりわき心をかけ、まことしく治せざれば、遁れがたし。衣の垢をすゝぐに、世の常のあかは落ちやすし。しみものは、とりわき灰汁をもそへ、水をもふくみて、懇に洗はざれば落ちざるが如し」とのたまひけるとかや。されば餘所の事をしり、才覺を好まんよりは、我心の三毒五欲の中に、殊に重きを先づ對治すべし。佛神にも祈り、聖教の中の對治の藥をもちひて、これを除くべし。南山律師の云はく、「聖教之本意は、たゞ奉行のためなり。若したゞ文を讀まば本意にあらざる也」と。まことに行ぜんとする、なほ相應し難し。たゞ文を讀んで行を立てざるは、廣く地をしめてもてど

詮なし。されば『法華』にも「衆生處々に著す。之を引いて出すことを得しむ」と說きて、たゞ顚倒の空しき所を達す。是故に菩提は無得なりと云ふ。衆生の執著のぞきがたきゆゑに、佛の說法の中にも『般若』をとき給ふこと三十年、諸部の般若、たゞ第一義空の一理なり。(一)自性淸淨無相寂滅の處に、能所の分別を生じ自他の執著を生して、無量の煩惱を起し、無窮の妄苦をうく。般若の火をもつて煩惱の薪をやき、生死の海をわたり、涅槃の岸にいたらむこと、執着をすつるより外の事あるべからず。一切の過はたゞ執心なり。執する所の萬法多ければ、(二)能治の法門に名を立つと雖ども、執著の心はたゞ一の(三)不了の妄念、(四)背覺合塵の(五)情量なり。一切の法門はまたたゞ中道第一義空なり。『大智論』に『般若經』の十八空を釋すとして曰はく、「空は一なれども除く所の法にしたがひて十八の名を立つ。喩へば、火は一なれども、薪にしたがひて、松の火とも竹の火ともいふがごとし。衆生の內我をやるゆゑに內空といひ、外境をやる故には外空といふ。中間の執をやらんとして內外空といへり。根本の我相をのぞかば枝末をのづからたちやすし。佛法修行の人、根本の執をのぞかずして我相をもつて法の相をとり、情量をもつ

(一)自性淸淨無相寂滅。その本性淸淨にして差別のすがたなく寂靜なることをいふ。
(二)能治。能く對治すること。
(三)不了。不明無智といふこと。
(四)背覺合塵。さとりにそむき煩惱の塵に合すること。
(五)情量。迷情のはからひ。

のなり。頸くゝり上人よりは、能々ならして往生しける事、心かしこくこそ覺え侍れ。

八、道人執着を捨つべき事

小原の僧正(一)顯眞座主、四十八日の間『往生要集』の談議し給ふ事ありけり。(二)法然房の上人、(三)俊乘房の上人なんど、談議の衆にて小原の上人達あまた座につらなり、如法の後世の學問の談議なりけり。四十八日功をへて、人々退散しけるに、法然房俊乘房、兩上人ばかり端ちかく居て、法然房申されけるは、「此の程の談議の所詮いかゞ御心得候」と俊乘房に申されければ、「秦太瓶一なりとも執心とまらん物は捨つべしとこそ心得て候へ」と語る。僧正御簾のうちにて聞き給ひて、「上人たち何事をかたり給ふぞ」と仰せられければ、「俊乘房かくこそ申候へ」と法然房申されければ、御衣の袖に御涙をはら〳〵とこぼして、「此ほどの談議に是れ程にめづらしきこと承はらず」とて、隨喜し給ひけるよし、或人語り侍りき。

實に無始の輪廻は一心の執心よりおこりて、生死の牢獄やぶりがたし。一代の諸敎方便の門ひろけれども、たゞ衆生の執心をのぞきて、無我の理に入るゝ外の所

(一)顯眞。前出。
(二)法然房。前出。
(三)俊乘房。重源をいふ。源空の門に入り、東大寺再建を主る。建久六年七十餘にて寂す。

へまゐらんと思ひけるあまり、入水して死なんと思ひて、同行を語ひて船に乗りて湖にこぎいでぬ。此の上人申しけるは、「臨終は一期の大事なり。仕慣れたる事だにも誤もあり不覺する事なり。往生の大事臨終の作法、いまだ得ざる事なれば、如何と覺束なし。それに付て、水に入りて後も如何なる妄念執心もあり、命もをしく、餘念も起らば、住生不定なり。かゝる心ありて浮き出たくば、繩をひくべし。さあらば引き出し給へ」とて、繩をわきにかけて念佛數返申して、飛び入りぬ。哀に思ふ程に、繩を引きければ、引き出しつ濡れ〳〵として上りぬ。「水の中にて、苦痛ありて妄念おこりつれば、此心にてはよもと思ひて上りたり」とぞ云ひける。さて心えず覺えけれども、今度は歸りぬ。また日比へて今度はさりともとて船に乗り出でぬ。先の如くに飛び入りぬ。又繩をひきければ、又ひきあげぬ。其後兩三度ならして又出ぬ。同行心得ず覺えて、例のはか〳〵しからじと思ひける程に、今度は飛び入りて繩も引かず。さる程に、空の中に音樂きこえ、波の上に紫雲たなびきて、目出かりければ、隨喜の涙かぎりなし。實に名聞我相をもつて、往生の大事とぐべからず。眞實の信心願行の力にて、素懐は遂ぐべきも

はれたる小原の上人の物語なり。よく〳〵執心妄念をばわきまへて、平生猶つゝしむべし。況んや臨終には殊に用意あるべきものなり。平生の心はゆるくして善惡共に勇猛なることすくなし。臨終には執心も信心も、はげしき心ありぬべし。『大論』に臨終の一念は百年の業に勝れたりと云へるはこのよしなり。いま〳〵諸根をすてんとし、勇猛の心をおこす、軍の陣にて命を捨てんとするに喩ふ。善人も惡念をおこして、惡趣に入る。阿耆陀王といひし國王、善人にておはしけるが、臨終のとき看病の者、扇を顏にをとしかく。これによりて瞋恚を起して、死して大蛇に生れて迦栴延にあひて、此由を語りけり。一生五戒を持せる(一)優婆塞、臨終に妻をあはれむ愛習ありけるが、妻が鼻の中に蟲に生れたりける。これも聖者にあひてこれを知れり。また一生の惡人も、臨終に善知識にあひて、勇猛に念佛して往生する事なり。『觀經』の下品下生の人の如し。さればよく〳〵臨終は謹しみ用意すべき者なり。

七、入水の上人の事

或る山寺に上人ありけり。道心ふかくして憂世に心をとゞめずして、急ぎ極樂

(一)優婆塞、梵語、淸信士と譯す。在家の佛教信者のこと。

(一)座主僧正。比叡山の主僧をいふ。勅命により任ぜらるゝ習なりき。

まらぬ時の事なり。これ程にのゝしり披露して、時日も定まり、結縁の人々も集まり、拜まんとするに、生こざかしき、さかしら異義の出來ごと、返す〳〵あるまじき事なり。御往生さまたげんとする、天魔の所爲にこそ。とく〳〵御行水まゐらせて、急ぎ給へ。時刻のびなんず」とのゝしりければ、上人も物いひさしつさて行水し、坊の前の榎木に繩をかけて、頸をくゝりて死にけり。人々おがみ尊み、面々に其の遺物をぞかたみにとりける。さて其後、半年ばかりを過ぎて(一)座主僧正の御弟子の中に、惱み候ふことありけり。例ならぬ氣色に見えければ、護身・し陀羅尼なんど見てけるほどに、口ばしりて樣々のことども云ひけり。「彼頸くゝり上人が付いて、あはれ僧正御房制止し給へかし、思ひ止らんと思ひしに、其の御事なかりし。口惜く候」とぞ云ひける。實に妄念執心は忘れがたく、捨てがたし。たゞ思ひ止るべかりけるに、よしなき名聞によりて魔道に入りける事、返々も愚かなり。弟子いかにのゝしるとも、なぢかは用ふべき。魔界のさはりにこそ、智慧もあり誠の心あらば、此程のことは存ずべきに、愚癡のいたすところか、名聞を思ふゆゑか、罪業の障るところか、魔界のなす故か、この上人にあひかたら

さる程に京中の道俗男女、聞きをよぶに隨ひて結緣せんとて此處に來りひさめきて、拜まんと云へば出でゝ拜ましけり。あひかたらへる上人共は、この事然るべからずとて、うけぬ事にして思ひける。さるほどに、日數すでに滿じて、行水用意し、臨終すべき時刻近づき、また同法の上人の中に申しけるは、「今はこれほどの義になりて、別の子細あるまじく候へども、凡夫の心は(一)刹那の間に兎角かはる習にて候へば、若し妄執ものこり、また思食事あらば、仰られなんどして、御心の底にのこる所なくして、御臨終あらば然るべく覺え候。今は無言も詮なく覺え候」といふ時、この上人まことにやと思ひけん、申しけるは「始め思ひたちし時は、心も勇猛なりき、一日の比湯屋の坊のやけて、かの房主燒死なんとせしを聞きし時は、今一日もとく〱臨終して、かゝるうき事も聞かじ、早やなんと思ひしが、この程は心もゆるくして、急ぎ死せばやとも覺えぬぞ」と語るとき、年來の弟子の中に、おとなしかりける在家法師、京に住みける。この事によりて來たれるが、道場には入れられず、少しそねましげなる氣色して障子のきはに居よりて、上人の加樣に語るを聞きゝて、聲だかに申しけるは、「ものゝ義なんどいふは、定

(一)刹那。極めて短き時間をいふ。

りてけるを、妻後に見つけて、「あら口惜し、(一)拘留孫佛の時より、つきそひて、とりつめたりつるものを、逃しつる」とて恐しげなる氣色になりて、手を打ちて飛びて失せにけり。『發心集』に侍るをや。流轉生死のをもきさはり、たゞ此ことなり。されば如何にも恐るべし。これ程のことは希なれども、妻子なみ居て悲しみ歎き慕ふを見ては、下根の機いかでか障とならざらん。まめやかに生死を離れんと思はん人は、菩提の山に入る道のほだしを捨て、煩惱の海を渡る船のともづなを解くべし。

六、頸縊上人の事

中比、小原に上人ありけり。無智なりけれども、道心あるにやと見えけるが、かゝる憂世にながらへて、よしなしとて、三七日無言して、(二)結願の日頸をくゝりて臨終せんと思ひ企て、同法の上人兩三人あひかたらひて、道場にこもり居ぬ。かゝる聞こえありければ、哀に貴しとて、小原の僧正も結縁のために往生講なんど行ひ給ひけり。いふべき事あれば、書きつけゝるに、往生の志をもすゝめ、念佛聽聞の志もありとて、都の名僧どもあまた請じて、七日の(三)別時念佛を始む。

(一)拘留孫佛。過去七佛の第四番の佛。人の壽命四萬歳の頃世に出でゝ説法せりといふ。

(二)結願。佛事の最後の日のこと。

(三)別時念佛。特に時日を定めて嚴修する稱名念佛の行。

子よりも女子は孝養の志も侍り。養ひのつとめも懇なる事と申すもことはりにや。

五、妻臨終の障になる事

或る山寺法師、世におちて或る女人をかたらひて、あひ住みけるほどに、此の僧病に伏して月日を經にけるに、この妻ねんごろに看病なんどし、萬こまやかに見あつかひければ、賢してあひかたらひける弟子なんどの、此程に志ある事はありがたかるべし、心やすく臨終もしてんず、」と思ひけるほどに、病日かず積りて、すでに心よはく覺えければ、固より道心ありて念佛の數返なんどしける者にて、最後と覺えければ、端座合掌して西方に向ひて、高聲念佛しけるを、此の妻「我を捨てゝは何處へおはするぞ、あら悲しや」とて頸に抱きつきて、ひきふせけり。「あら口惜、心やすく臨終せさせよ」とて、起きあがりて念佛すれば、又ひき伏せ〳〵しけり。聲をあげて念佛はしけれども、ひき伏せられて終りにけり。魔障のいたすところにや。まことしく菩提心もあり往生の志もあらんにつけては、必ず魔障あるべしと見えたり。ふるき物語にも道念ありける僧、世におちて妻をかたらひて、庵室にこもり居て、妻にしられずして持佛堂に入り端坐して目出たく終

にて侍り。人に知れまゐらすべき者にて非ず」といふ餘りにありがたく看病し、月日も歷ければ、この病人申しけるは、「佛法世法の恩を蒙れる弟子だにも、打ちすてゝ侍るに、これほどに懇におはする事しかるべき先世の契にこそとまで、あまりに難有く思ひ給ふに、いたくかくし給ふこそいぶせけれ、そも〳〵何なる人にて御坐るぞ」とあながちに問ひければ、「誠に今は申し侍らん、これは其のかみ思ひがけぬ緣にあはせ給ひて、思ひの外なる御事の候ひける。某と申す者の娘にて侍るなり。それにはかくとも知らせ給はねども、母にて侍りしものゝ、汝はかゝる事にてと告げ知らせて後は、心ばかりは御女と思ひつゝ、あはれ見もまゐらせ、見えも參らせばやと、年來思ひながらかゝる御身には萬はゞかりありて、空しく年月を送くり侍りつるに、此の御病に御看病の人もつかれて、事かけたるよし傳へ承りて、御孝養に心やすくあつかひ參らせんと思ひたちてなん參りて候」と泣く〳〵語りければ、まめやかに志のほど哀に覺えて淚もかきあへず、「しかるべき親子の契こそ哀なれ」とて、互になつかしく隔てなき事にて、つひに最後まで看病し、心やすくして終りにけり。至孝の志こそ難有くおぼえ侍れ。人の子に、男

く、「六情根完具し、智鑒また明利にして道法を求めず、唐に身の智慧を受く。禽獸またみな欲樂を知れり。以て自恣にして方便を知らず、道修善事をなす、すでに人身を得たり。宜しく自ら利益を勉めて道行を修することを知らず、彼とまた何ぞ異ならん。道行とは何ぞや、一切無染なるもの是れなり。良に衆生無始より封著して、此を是し彼を是し、得を是し先を失するによりて、因として染を起し、纏縛、獄にあり。故に世鈍なる者は多く財色に著き、小しき利あるものは多く名見に貪す」巳上。祖師の意みな同じきにや。大慧禪師いはく、「只染汙を誡む」、世間の事より、乃至、菩提涅槃まで著するを染汙といへり。

四、上人の女父を看病する事

坂東の或山寺の(一)別當、學匠にて上人なりければ、弟子門徒おほかりけれども、年たけて後中風して病の床に臥して、身は合期せずながら、命はながらへて年月をふるまゝに、弟子ども看病しつかれて、いとこまやかならざるに、何處よりともなく女人一人出で來りて「御看病申さん事いかに」といへば、弟子共しかるべしとて許しつ。えもいはず懇に看病しけり。如何なる人ぞと問へども、「まどひ者

(一)別當、一山を監理する僧役。

（一）宣律師。道宣のこと。支那南山律宗の祖。著書多し唐の乾封二年七十二にて寂す。

たとひ偸盗の心なけれども、いたづらに他の財を損ずる、これみな盗なり。たとひ我身一分の利なけれども、他を損するを盗といふ。五用三寶物の盗たること。施主の福分をうしなふ故なり。こまかに之をいへば、この戒持する人まれなり。本說に知りて行ぜざるは國の師なり、知らざれども行ずるは國の用なり。知りて行ずるは國の寶也、知らず行ぜざるは國の賊といへり。學する事もなく、行ずる事もなく、徒に遊びたはぶれて、國の費をしらざる人のみ世中に多し。このいましめのがれがたし。これは世間の俗の中の事なり。佛法の中これになぞらふべし。智行あひ兼ぬべし。『大論』云はく「智慧あるとも多聞なきは實相をみず。眼あれども燈なき闇の中の如し。多聞なれども智慧なきは實相をしらず、燈あれども眼なきが如し。智慧多聞ありて實相を知るは、眼ありて明の中にあるが如し。智慧もなく多聞もなきは、人身に似たる牛也」といへり。まことに人身の牛、世間におほし。恥かしや〳〵。三福分齊をば善導の釋に、「人の皮をきたる牛なり」といへる心これに同じ。施戒、禪定、孝養等の福行せざるもの、たゞ皮ばかり人なり、底はたゞ畜類なるべし。南山（一）宣律師の『業疏』の釋の中に『智論』を引いては

習なれ。『涅槃經』には「我が滅後に飢餓のために出家受戒の者おほかるべし、これを意樂損害の者とす」といへり。戒行を守るといへども涅槃を期せずして、渡世を意とする故なり。この人供養を受くべからずといへり。まして破戒無慚にして、出家の形として、解脱を期せざるが、空しく供養をうくるをば、賊分齊とて賊の分といへり。或は禿居士とも名け、袈裟を被たる獵師ともいへり。悲かるべき末代なり。かゝる世に(一)法滅の菩提心を發し、如說の修行をも精まん人、まめやかに貴かるべきなり。戒を持つについて、『四分律』には四分齊を立てたり。一には破戒にして渡世に施を受くるをば賊分齊と云へり。施主の財を徒に失ふ是れ賊なり。二には罪分齊三途をまぬかれんと思ふ、これ心せばきものなり。三には福分齊、天上に生ぜんために持す。四には道分齊、涅槃のために持つなり。又四用と云ふは、破戒にて施を受くるは盜用賊分なり。二には負債用、持戒なれども(二)五觀せざる負物となりて、施主に還すべし。三には親友用(三)三果の聖者、親類のものを用ゆるがごとし。四には自己用、羅漢は(四)應供の德そなはり、自己の物を用ゆるがごとし。破戒の物を賊分齊といふ事、第二の戒は律の中に微細なり。

(一)法滅の菩提心。佛法の滅せんとするとき佛道を修行せんとする志を立てること。

(二)五觀。食物を造るの苦心、これを受くる身に德ありや、否や多く食らざらん、これ身をたすくる良藥、道を修むる糧なることを觀念すること。

(三)三果。前出初果をみよ。

(四)應供。供養を受くべき資格あること。

る本意、佛法修行のためなり。合戰をするほどならば、俗の形にてこそあらめ。よしなしと思ひ返して、やがて超勝寺に引き籠りて、一すぢに修行する事、勇猛精進にして、香の煙の中に、生身の彌陀の像現じ給ふ。やがてとりとゞめ奉れりともいひ、又うつし奉れりともいへり。かの像、今にいます。御長五六寸ばかりの像なり。御形嵯峨の釋迦に似給へり。先年これを拜す。發心修行まことありし昔は、かゝる感應もありき。然るに近代は在家の風情みなかはりて、器量もよはく果報もくだりて、心のかさなくをほけなき企てなし。たゞ世に隨ひへつらひて、名をもをしみ恥をもしれる人、年に隨ひて希也。かたのごとく妻子をも養ひ、身命をも繼げば、不足の思ひなくして驕れる心なし。かゝる在家人の子息の中に、隨分に人々しく甲斐々々しきをば選びて家をつがせ、えりくづの捨て物不覺人を法師になして、乞食ばしもせよかしとて、智慧をえらび器量を見るにをよばず、道行のためにもあらず、解脱を期する志もなし。たゞ髮をそり、衣をそめたり。何とてか、はか〴〵しからん。これたゞ佛法をかろくし、世間を重く思へる世俗の風儀なり。悲哉。その中に、希にも佛道を行じ智慧もあるこそ、しかるべき宿

さる。仍ち時の人これをほめて、まさる肇公といへり。一説には叡公と云。かゝるためしもあれども、かの上代の聖人は、智行徳たけ、和光の方便利益の因縁まことに計りがたし。されば、その子も智恵あり利益ひろし。近代の上人は、父上人も愚癡なれば、ましてその子上人の爭か、はか〲しからん。させる益もなく、よそよりをとす事もなきに、よしなき種をのみつぐにこそ。凡そ、代くだり人つたなくして、智慧もあり徳行もある上人、年おひて希なり。つら〱事の心を思ふに、在家出家、道ことなれども、心もたけくおこれる振舞ありし昔の武士は、王位をも奪はんとしき。純友が謀反をおこし、將門が平親王といはれしがごとし。畠山の重忠が館の内に煙をたてざりけるは、鎭守府の將軍を志しけるとかや。かゝりし武士の親類骨肉の中に、自から出家學道せしは、發心もまことあり、器量もつよく、智慧もふかく修行もはけし。上古の大師先徳多くは田舍の人なり。南都の超勝寺の本願淨海上人は、東大寺法師なり、田舍の武士のすゑとかや。京の人とも云へり。身の丈七尺ばかりにて器量人にすぐれたり。興福寺と合戰すべきにて、已に甲冑を帶して軍の庭に出でゝ、つく〲思ひ廻らすに、抑も寺に住す

上人の子は、いかにも智者にて聖なりと申せば、或人難じて云はく。父に似て聖るへからずと云ふ。答へて云はく。さらば(一)一生不犯の聖のゆゑ父に似て聖らんずらんと答へて比與すと云云。南山の『感通傳』に、「大師天人に問ふて云はく、羅什亂行の聞えあり。實か不や。答へて云はく、(二)三賢の菩薩なり。沙汰すべからず」云云。私推して云はく、末代は持戒の人希なり。然ども正法を弘通せば益あるべし。其跡を示し給ふにや。又問ふて云はく『法華』は前後四品あり。何ぞたゞ什公の譯のみ天下に之を翫ぶや。答ふ、什公は七佛の出世の度ごとに翻譯の三藏なり。『十輪經』に「正見僧と云ふは、犯戒なれども正法を說く。師となすべし」といへり。『心地觀經』の意これに同じ。『安樂行品』の「國王大臣に親近せざれ」の文を、(三)慈恩大師釋すとして、呉王妻を讓りしかば恥を千歳にのこすといへりと。犯戒の後は縵衣をかけて寺の外に居し、寺に入りて說法の時は、度ごとに我身は淤泥のごとし、說くところの法は蓮華のごとしといへり。さて『法華』翻譯の庭に、四人の弟子と共に譯せり。富樓那の授記の文の「人天交接兩得相見」は肇公の譯の語なり。古譯には「人見レ天々見レ人」と譯せられけるを、聞きにくゝ候とて釋しなほ

(一)一生不犯。一生婬を犯さぬこと。

(二)三賢、小乘にては五停心觀位、別相念住總相念住をいひ、大乘にて、十住、十行、十廻向をいふ。

(三)慈恩大師。窺基といふ。支那法相宗の大成者。玄弉三藏の弟子。永淳元年。五十一にて寂す。

童にてありけるを、見たるよし物語り侍り。上人の子もつこと先蹤なきにあらず。天竺の鳩摩羅炎三藏、優塡王の栴檀の像を負うて漢土へわたし奉る。龜茲國等の四の國を經るに、彼の國の王、像をとゞめ、また聖の種つがんとて、王の女をおし合ひて羅什三藏を生めり。鳩摩羅炎は、かの國にして入滅す。什公幼少のとき羅漢の聖者、相して云はく、「この子漢土へゆかば、三十餘の年、世におつべき相あり」といふ。成長の後、先師の本意をとげんとして、彼の像を漢土へわたさんとす。母、羅漢の語を憶して、子をいさむといへども、「わが身は縱ひ犯戒し、塗炭に墮つるとも、衆生の利益あるべくは痛むべきにあらず」とて、像を漢土へわたし奉る。今の嵯峨の釋迦これなり。嵯峨の釋迦のこと、律の中には龜茲國等の四國の王、次第に本佛を留めて寫して是れをわたし奉る、第四傳とみえたり。(一)奝然法橋、盜みて唐の本佛を渡せりといへり。嵯峨には第二轉と申すとかや。實にこれをしらず。吳王后を二人おし合ひて、聖の種をつがんとす。遂に生、肇、融、叡の四人の弟子をまうく。生肇等は羅什の子と常に申しなれたり。但し一說には只の弟子と云へり。實事知りがたし。

(一)奝然。三論宗の僧、永觀元年宋に渡り、歸りて長和五年寂す。

と云ふ。たとひ身口に行ぜすといふとも、心に貪欲やまずして、煩惱内にこはきは、次の生に淫欲熾盛の報をうけて、第三生に地獄に入るといへり。餘の煩惱もなずらふべし。『佛頂經』の制、この意也。況んや身に行じ、心にも著して放逸ならん、まことに出離その期なからん。たとひ多智禪定ありとも、淫をたゝずば魔道に入ると云へり。諸宗の學者、多く魔道に落つといへり。このゆゑに眞實に對治して、身心二つながら清淨にして、解脱の道に入るべきなり。

三、上人の子を持つ事

信州鹽田の或山寺に上人あり。三の腹に三の子をもてり。初の腹の子はまめやかに忍びければ聖の子といひけれども、不審に覺えて、名をば「思ひもよらず」とつく。次の腹の子は、時々は我房にも忍び〳〵かよひければ、ひたすら疑の心もうすくして、名をば「さもあるらん」と付く。後の妻はうちたへ我房におきて、疑ひの心なかりければ、名をば「子細なし」と付く。これは當時の事なり。或人にあひて自ら名乘りて、「この上人三人の子あり、しか〳〵と名づけて候。これは「子細なし」が母なりしとて、妻もいでゝ見參し、「思ひもよらず」も少しをとなしき

らゆる失、これより起らずといふ事なし。さてつひに前後相違、別離の悲歎にしづみ、いたづらに癡愛の水におぼれ、常に哀傷の炎にこがれ、輪廻の業をまし、煩惱の根をふかくす。返へすがへすも厭ふべし。彼れがために罪をつくり、苦を受くといへども、恩をしり德をむくひて、(三)中有にともなふ妻妾もなく、苦患にかはる男女もなし。これを軟賊にたとへ、毒蛇に類す。德をやぶり道を損し、樂すくなく災おほし。不淨なり無常なり、幻化なり苦惱なり。空しく二世の身心を苦しくす。尤もいとふべし。南山大師の云はく「四百四種の病は宿食を根本とし、三途(四)八難の苦は女人を根本とす。今法を解れりと云ふ人をみるに、なほ財色に貪す。既に道人にあらず、また(五)白衣にあらず。名づくる所なし。知りて殊更に犯す解脱の期なし。千佛世に出づれども見ず聞かず。財を貪し色を愛する人は、餘德ありといへども見るにたらず。道俗二つながら財色のために現に一百三十六の大地獄の中にありて、千萬種の苦を受く」といへり。淨心觀にあり生死の長夜會離の悲み、六趣やむ事なし。悲いかな。解脱の道にいたらんと思はば、離欲を本とすべし。身口になさゞるをば戒律儀と云ひ、心に五欲をはなるゝをば根律儀

(三)中有。死して後、次に生るゝまで迷ふ間をいふ。

(四)八難。地獄難、畜生難、餓鬼難、長壽天難、北洲難、盲聾瘖瘂難、世智辨聰難。

(五)白衣。俗人のこと。

ことなり。『首楞嚴經』には「淫心を斷たざれば生死いづべからず、淫心斷たずして生死を解脫せんと思ふは、沙をむして飯とせんがごとし」といへり。欲界の煩惱の根本として、「諸の苦の所因は貪欲を本となす」とも說き、「愛は是れ諸の煩惱の足」とも云ひて、三界の牢獄に人をつなぐ鎖、たゞ淫欲の事なり。老子猶いへり。「罪は可欲より大なるはなく、禍は不知足より大いなるはなし」と。可欲とは色を愛する事なり。不知足とは財にあきたらぬ事なり。財をむさぼる慾心のふかきも、多くは妻子を養ふゆへなれば、源色欲よりおこれり。經にも欲に近き習ひぬれば、罪として造らずと云ふことなき故に、彼の果をうくる時は、苦として受けずといふ事なしといへり。たゞ平生に身をくるしめ、心を煩はすのみにあらず、臨終の時、妄念おこりやすく、愛執わすれがたし。この故に出離の道を障へ、惡趣の苦みに沈み、長劫にいでがたし。輪廻のもとゐ、流轉の因、ひとへに此事にあり。我身よりも重く、いたはしき妻子あれば、恩愛の奴となりて、欲のためにつかはれ、父母師長の(一)恩田をも報せず、三寶勝妙の敬田をも供ぜず、貧病孤獨の(二)悲田にも施さず、かへつて殺盜、邪淫、妄語、貪瞋、嫉妬、放逸、迷亂、あ

(一)恩田。父母師長に供養すれば、善果を得る故に父母師長のことを恩田といふ。
(二)悲田。前出。

習知れる人なるべし。すべては偏執我慢を存するは、小智愚鈍のいたす所なり。ひろく數門を學し、あまねく諸宗をうかゞへる人の中に、隔つる心なし。智者の心をまなびて、愚人の心に同ずる事なく、是非偏執の心をやめて、如説修行の志をはげむべし。かやうに書き付け侍れば、また世間の人を謗る偏執に似たり。「狂はしたふな」の上人になりぬるにや。誰か又我こそそしらずして偏執なき身なれと心中に計して、法師ばかり其の上人になり給はんずらん。

二、上人の妻に後るゝ事

八幡山の邊に、某の上人とかや聞こえしが名の下に、まことなくして妻を持ちたりけるが、惱む事ありてうせにけり。人とふらひて、「あさましく候ことと哉、上人の御房の、御前に後くれ給へる」といへば、「如何にとし候はんぞ、妻もたず聖にてこそ候はめ」といひける。勿論に覺えてをかしけれども、末代には妻もたぬ上人、年を逐うて希にこそ聞えし。後白川の法皇は、「かくすは上人、せぬは佛」と仰せられけるとかや。この聖は、かくす迄もなかりけり。今の世には、かくす上人猶すくなく、せぬ佛いよ〳〵希なりけり。生死の業因、輪廻の苦果、たゞこの

く。淨名國土にしては成佛の身を現し、雜染世界にして觀自在と名く」と云へり。法華、彌陀、觀音、一體のこと此の釋分明なり。尤も信受すべし。或る念佛者の云はく、「觀音地藏などいへば鼻がうそやいてをかしきぞ」と。地藏はせめてよそにも思ふべし、觀音ををかしくあなづらば、來迎の臺には乘りはづしなんかし。おほかたは遍一切處無相の眞金をもつて、諸佛菩薩(一)四重曼荼羅を造ると釋し給へり。十界の身、何れか眞實には大日法身の垂迹にあらざる。衆生なほ實には一體なり、同じく(二)六大法界の體なる故にまして佛菩薩を隔てんや。殊に地藏は彌陀觀音と同體なり。眞言の習に、胎藏の曼荼羅は大日一の身なり。是を支分曼荼羅と云ふ。一々の支分一善知識となり、有緣の機を引きて、菩提の道に入る。然るに彌陀は大日の右肩、觀音は臂手、地藏は指なり。(三)觀音院の地藏とてまします。また(四)地藏院に九尊まします。是れ一方なり。或口傳には(五)六觀音、(六)六地藏となり給ふと云云。三井寺の大阿闍梨慶祚は顯密の明匠なり。山の西坂本の人宿りの地藏堂の柱に、法藏比丘の昔のすがた、地藏沙門の今の形、藏の字思ひ合すべしとかける。寛印供奉これをみて、書き取りて柱けづりてけりと云へり。彌陀地藏一體の

(一)四重曼荼羅。前出。
(二)六大法界。地大、水大、火大、風大、空大、識大によりて全宇宙は生成すといふこと。
(三)觀音院。胎藏界曼荼羅の大日如來の右方第一重の廊。
(四)地藏院。胎藏界曼荼羅の中台八葉院の右第二重。
(五)六觀音。千手觀音、聖觀音、馬頭觀音、十一面觀音、准胝觀音、如意輪觀音。
(六)六地藏。六道を化する地藏、地藏、寶處、寶手、寶印手、持地、堅固慧を云ふ。

の幻はたつとし。これ佛事門の中の分別なり。實際理地にこれを論ずることなし。近比大原の(一)顯眞僧正と聞えしも、顯蜜の明匠にてをはしけるが、此意を得給へるにこそ。大念佛申さんとては、道場に入りて『法華經』を讀誦し、『小法華經』よまんとては念佛を申し給ひけると申し傳へたり。中古の智者明匠、かくの如く是非の意なし。眞言の中にも。阿彌陀の習こまやかなる口傳ありて、六字の名號を(二)五佛の種子と習ふことあり。一切の如來を五佛に接すること密敎の談なり。天臺の與稱十方佛の御釋もこの心を得給へるにこそ。禪師の中にも、智覺禪師は念佛を我も行じ、人にもすゝめ、心地あきらかならざらん學者は念佛を行じて淨土に生じ、大事を發明すべしといへり。都ては萬行一門なり。心をえて行ずればみな佛意にかなふと云ひながら、ことに法華念佛一具の法門にて、中惡かるまじきに、當世の是非謗法かなしむべし。古德の口傳に云はく、「昔靈山にあるを法華と名け、今西方にありて無量壽。娑婆の示現、觀世音大悲一體にして衆生を利す」と云云。此の文(三)高野の大師の法華の御開題の意に符合せり。『金剛頂經』を引いて釋し給はく、「『妙法蓮華經』と云ふは、觀自在王の密號なり。此の佛を無量壽と名

(一)顯眞。天台宗の僧。後、源空の念佛門に歸す。建久三年寂す、壽六十三。

(二)五佛。前出。

(三)高野の大師。弘法大師。

（一）丈六。一丈六尺。
（二）端坐。正直に坐ること。
（三）法藏比丘。阿彌陀佛が未だ佛とならざる以前の名。

あり。よろづの三法、通融平等一體不二なり。道（煩惱、業、苦。）識（七、八、九。）性（正、了、緣。）般若（實相、觀照、文字）菩提（實相）大乘（理、隨、得。）身（法、報、應。）涅槃三寶（佛、法、僧。）德（法身、般若、解脫。）彌陀の名號、廣大善根の道理しられたり。誰か是れをゆるかせに思はんや。

楊傑のいはく、「近うして知り易く、簡にして行じやすきは西方淨土なり。但よく一心觀念して惣べて散心を接し、彌陀の願力によつて、直に安養に趣く」といへり。（一）丈六の彌陀の像を畫がきて隨行して觀念し、臨終に佛の來迎を感じて（二）端坐して化し、辭世の頌に曰はく、「生もまた戀ふべきなく、死もまた捨つべきなし。大虛空のうち、之れか者か。西方極樂、これか者か」と云ふは、たゞ詞の助なり。徒ら事なり。錯を以て錯につく、若干のあやまり、生死の夢ひさし。これ錯のごとし。錯といふは衆生の迷、知見立知せしより、若干のあやまり、生死の夢ひさし。これによりて（三）法藏比丘願を立て淨土を構ふ衆生の錯なく、淨土の錯もあるべからず。自證の中には無佛無生の眞空冥寂なり。然れども衆生の錯は痴より起りて苦患久し。諸佛の錯は悲よりおこりて濟度たへなり。錯に差別なきにあらずよく諸法の相を分別すといへり。幻の藥をもつて幻の病を治する事もなぞらふべし。衆生の幻はかなしく、諸佛

融通せるは假なり。この空假實には心實相の中道なり。銅鏡の明々たる德ありといへども取るべからざるは空の如し、影像歴然として浮ぶは假の如し。明も像も鏡の德なれば鏡の外になし。空假共に中道の德なるがごとし。この三諦の理、衆生の一念の心にある時は(一)在纏眞如とも、如來藏理ともいへり。蓮の水にあるがごとし。諸佛の果位にありては法身と名け、菩提涅槃ともいへり。月の雲をいでたるに似たり。この三諦をさとり、(二)三德を備へ給へる彌陀なれば、名號の阿彌陀は天竺の梵語、漢には無量壽といふ。阿は無、空の義、般若の德なり。彌は量、假の義、解脱の德なり。陀は壽、中道の義、法身常住の壽命なり。また法報應の三身、佛法僧の三寶、かくの如くの恒沙の德、三字の中に具せり。この三諦、三身、我等が一念の心中にある時は、本性の彌陀とも、自性清淨の蓮ともいふ。是れ則ち如來藏理三諦の義なり。如は空、藏は假、理は中なり。この法門を證し給へる故に、天臺の御臨終には、『觀經』『法華』の首題を御弟子に唱へしめ、「四十八願、莊嚴淨土、華池寶樹(三)易往無人」と自ら唱へて、觀音來迎し給へば、淨土へ往くとこそ御弟子には告げ給ひけれ。『摩訶止觀』第三下の釋に、(四)類通三寶の法門

(一)在纏眞如。纏は煩惱のこと。煩惱の肉身の上にある眞如をいふ。

(二)三德。法身、般若、解脱。

(三)易往無人。往き易くして人なしといふこと。

(四)類通三寶。一切の三通のものを融通すること。

の有緣の行をそしり、自が有緣の法を讃めば、諸佛の法眼を破る。法眼すでに滅せば、菩提の道、足をふむによしなし。淨土の門何ぞよく入ることを得ん。生盲業にまかせてはしり、深坑におちむ。この貪嗔の火をほしひまゝにせば、自を損じ他を損じ、長く無明の海にしづみて、木にあふによしなし」と釋し給へり。祖師の御誡にそむきて餘行餘宗をそしること、誠に心得がたし。法華を弘通する人の中に、また念佛を謗ることあり。是れまた天臺大師の御意にそむけり。法華の修行は、(一)止觀の四種三昧に出です。常行三昧は、九十日口に彌陀の名號を唱へ、意に彌陀の身心を觀ず。或は先づ唱へて後に念じ、或は先づ念じて後に唱ふ。或は唱念ともに運ぶ。歩々聲々念々。みな阿彌陀に在りと釋せり。或は十方の佛を稱ふると功徳まさに等しとも釋して、彌陀一佛を唱ふるは十方の佛を唱ふと同じと見えたり。荊溪は「諸教に讃むるところ多く彌陀にあり」と釋して、一代の教に彌陀をほむる事多しとのたまへり。況んや法華の妙體は空假中の(二)三諦を以て規模とす。因緣にて生ずるところの法、無自性の故に緣をかる。緣もまた性なき故に空なり。空なりといへども因緣和合すれば、(三)十界の依正、歴然として、互具

(一)四種三昧。常行三昧、常坐三昧、半行半坐三昧、非行非坐三昧。

(二)三諦。諦は明なる道理といふことにて眞理のことと一切萬有に空の理有の理、中の理あるを三諦といふ。

(三)十界。前出。

す。三學齊しく修すべきなれども、時代くだり機根よはくして、(一)宿種にまかせ意樂にしたがひて、或は戒儀をたもち、或は心地を守らんを、互にそしるべからず。戒律の行相を學せんとすれば、心地の修行にうとく、禪門の工夫を專にせんとすれば、毘尼の制門にくらきこと、末代を悲み劣機を恨むべし。たれの心あらん人か、如來の(二)正法輪を謗りて、無間の業をまねかんや。返へす〳〵謹むべし〳〵。無言の上人が物語は、一旦をかしけれども其とがなし。當世の謗法その罪大なるものをや。聖道淨土の是非、また世にさかり也。念佛の行者、眞言止觀等を雜行とそしり、眞言法華を弘通する人は、念佛をいやしく思へり。これまた如來の方便を失し祖師の教誡にそむけり。▣淨土門の人、餘行を謗るべからざることは、(三)本願の文に「たゞ(四)五逆と正法を誹謗するをば除く」と說き、善導和尚の『般舟讚』の序には、「釋迦はこれ父母なり、我等がために種々の方便の門を說き給ふ。若し敎によりて行ぜば門々佛を見、淨土に生ずべし。若し人の善を行ぜんを見てはこれをたすけ悟りあらんを聞きてはこれをよろこべ。何の意ぞ然るとならば、同じく佛を以て師とし、法を以て母とす。生養ともに同じく情親外にあらず。他

(一)宿種。過去世の種因。

(二)正法輪。正しき佛法を輪にたとへていふ。車の輪が轉ずるとき石丸をくだくに似て、煩惱をくだす故。

(三)本願の文。『大無量壽經』に出る阿彌陀佛の第十八願の文。

(四)五逆。前出。

云ふかひなく、愚かなり。されば大智律師も、大乘の學者を學語の輩と釋する下には、今の時は律師もたゞ學律の者なりとて、如法の持律はすたれたるよし釋し給へり。あながちに餘宗の學者を非すべからず、我宗の學者の如法ならん事を思ふべし。また禪門の學者、敎を學し、律を學する人をば、一向に輕慢し拙きことに思へり。然るに律僧の中にも、外には律儀を學して、小學を執ずるに似たれども、大乘の行門を本意として有緣の宗々を行ずる事あり。抑へて小乘の學者と思へる、是れまた妄なり。誠に(一)執則障道の行人もあるべし。善惡の根性淺深の機根は、何の宗にも相交れり。偏に一宗の學者を非すべからず。牛羊の眼を以つて他人を評量することなかれといへり。何の宗の學者も、互に是非することよしなくこそ。この故に『大智論』にいはく、「自法を愛樂する故に他人の法を毀呰るは、淨戒を持つ人と雖も、惡道に墮することを免れず」云云。凡そ佛法の大綱は(二)諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛敎と云へり。大小乘の學者これに背くべからず。七佛の通戒なり。たれかあへて異義を存ぜん。諸惡莫作は戒、衆善奉行は定、自淨其意は慧と釋せり。然れば戒は賊をとらへ、定は賊をしばり、慧は賊をころ

(一)執則障道。執着すれば卽ち道を障ふ。如何なる善事も執着すれば道にそむくこと。

(二)諸の惡はなすことなかれ、衆の善は奉じ行へ。自ら其の意を淨くすること、是れ諸佛の敎。これを七佛通誡の偈とよぶ。

異なれども、(一)七衆を分つことはみな小乘の軌則にまかす。髮をそり衣をそめ、寺舍をたて佛事を行ずる作法、おほくは律儀による。大乘は心を達するを本とす。形服にかゝはらず。然れば華嚴の知識、或は(二)夜叉、或は女人これあり。若し釋子の數に入り比丘の形とならば、戒を以て本とすべし。然るに佛事を行ひて利養を受けんとては、我は佛子なり、これを行ずべしといひ、戒を守り非をたゞす時は、我はこれ大乘なり、小乘によらじといふ。『佛藏經』にこれを鳥鼠比丘といへり。蝙蝠の鳥の數に入れんとすれば、我は土にすむなりとて穴に入り、土の中の役をのがれんとては、我れ空にこそ住めとて、飛び出づ。實には鳥にもあらず、獸にもあらず。その身くらくして黑闇をねがふ。これを破戒の比丘の王者の公役をのがれんとては、我は佛弟子比丘なりといひ、戒を守らずして我はこれ大乘なりといひて、(三)自恣(四)布薩等の如法の比丘には列らず。その身不淨にして罪闇の中にあるに喩ふ。末代の比丘この過遁れがたし。恥かしかるべきこと哉。此のいましめによりて自から大乘の解行まことありて、(五)乘急戒緩の行人も間にある事をもわきまへず、をしなべてそしり、大乘の信解廣大の益ある事を知らざるも、

(一)七衆。比丘、比丘尼、沙彌、沙彌尼、式叉摩那、優婆塞、優婆夷の稱。
(二)夜叉。鬼神の一種。
(三)自恣。心のまゝにつゝまず罪を告白して懺悔すること。
(四)布薩。淨住と譯す。月の十五日間、特に自ら清淨を守り罪を懺悔すること。
(五)乘急戒緩。乘(明法)をのみ願うて戒をゆるかせにすること。

一(一)閻浮提の有智高德の羅漢一千人をもつて、(二)畢波羅窟にして、律は優波梨誦し、經は阿難誦して結集すること、專ら迦葉上座として、これを行ず。『智論』の第一卷にこれあり。然るを近代の禪門の人の中に、まゝ敎門をかろくす。祖師の心にそむくにや。佛祖の誡るところは、たゞ文字の執心なり。然に敎門の助觀の功あることをば遮せず、指を執して月をわすれ、文に著して理にくらき事をきらふ。指の月をみるは人なり。敎の道を悟る緣たる事をきらはず。斯のごとくならば、敎門に過なし。たゞ學者の意を得ざることを誡む。然るに禪敎の學者、毘尼を小乘とくだして、律師をば愚痴なりとて、禽獸のごとく思へり。律師は又大乘の學者は因果をわきまへず、律制にかゝはらずとて、偏に外道のごとく思へり。かゝるまゝに、互に毀りくだして、佛法を滅せんとす。人を謗るは法を謗るになる。法みづから顯れず人の弘通による。人法一體にして利益まことに大なる故に失をもとむれば何の學者にもこれあり、德を考ふれば、又何の行人にも得益空しからず。南山大師、大乘の學者の道を達せず、意を得ずして、只言をのみ學するをば、學語の輩とて、經文を引いて誡しめ給へることあり。一代の(三)化儀、大小

(一)閻浮提。前出の南浮を見よ。
(二)畢波羅窟。八葉窟と譯す。
(三)化儀。化導の形式。

弟子、中あしくして、たがひに各が當るところの師の足を打ち折る。これは末代に大乘の學者は、小乘をきらひ、小乘の學者は、大乘をそねみて、大聖の敎法を二途ともに失ふべきにたとふ。近代の學者、年に隨ひ偏執我相ふかくして、聖法の滅せむ事を思はざるや。悲しむべし〳〵。夫れ戒律は釋子の威儀、(一)毘尼は佛法の壽命なり。正法を興隆する軌則、みな(二)律藏の中より出でたり。諸宗の妙解の後、妙行を立つるには、必らず律儀による。『勝鬘』『智論』の意によるに、毘尼は大乘の學といへり。また『涅槃』の扶律顯常、『法華』の安樂行品、專ら戒律の門をもつて大乘の修行をはげむ。是れ開會の意、決了の談なり。天臺の止觀の修行、律儀を方便としたまへり。(三)荊溪釋して云はく、「戒に大小なし。受者の心期による」と云云。また(四)西天の付法藏の祖師三學ならびに弘通す。迦葉尊者、靈山にして(五)拈華微笑の時、すでに正法眼藏涅槃妙心を傳ふ。經律もし益なくは、必ずしも結集すべからず。三藏の法門を(六)結集して(七)遐代に傳ふる事、根本、迦葉の初祖なり。如來入滅の時、(八)荼毘は人中天上の福を願はんものにこれをゆづりて、我等は三藏の敎法を結集して、佛の恩德を報ずべしとて、銅の揵稚を打ちて、

(一)毘尼。戒律のこと。

(二)律藏。戒律を記せる書。

(三)荊溪。湛然とよぶ。支那天台宗五世。興元々年寂。壽七十三。「法華玄義釋籤」等著書多し。

(四)西天の付法藏の祖師。印度に佛法をうけ傳へし祖師。

(五)拈華微笑。釋尊、花をひねり微笑し、迦葉それをみて第一義をさとることを云ふ。

(六)結集。釋尊の說きたる言葉を編輯すること。

(七)遐代。末代。

(八)荼毘。燃燒と譯する梵語。死骸を火葬すること。

し。正智にあらず。正智は必らず無念無分別なり。是故に大智無分別ともいひ、般若無知ともいへり。無縁の智を以て、無相の境を縁ずるゆゑ也。(一)観照般若眞實の智慧なり。然れば一心の上の三の義、三學の法門なり。一心不動、一念不生なれば、自然に三學(二)六度の法門を具足すべし。かるがゆゑに『法華三昧經』に云はく、「心を空じて動ぜざれば六波羅蜜を具足す」云云。誠に無相淸淨の所には、慳貪、犯戒、瞋恚、懈怠、散亂、愚痴の相迹なし。この六弊なきところに、三學六度の名を立つる也。然れば戒定慧の源一なる道理を達して、方便の義門暫く異なるを是非する事なかれ。是れ則ち佛法の大綱を心得るすがたなり。彼の禪師の答の意、諸宗の旨を達せるにや。上古の先達は、かくのごとく隔つる事なし。末代は顯蜜、禪敎、聖道淨土、是非、諍論、世間におほく聞こゆ。『像法決疑經』に云はく、「(三)像法の時は、我は是れ律師、禪師、法師と云ひて、三學たがひに謗りて、地獄に入ること、矢を射るがごとくならん」といへり。末法に入りては、いよ〱さかりなり。如來の金言、なじかは違ふべき。悲しきかなや。『百喩經』に云はく、一人の師、二人の弟子をもちて、二の足をあてゝ、時に隨ひてなでさす。大小の

(一)観照般若。般若は智と譯す。眞理を觀る智慧。

(二)六度。前出。

(三)像法。前出。

滿す。犯と不犯との相は不可得なるが故に」云云。『梵網經』には、「自性清淨の體を金剛寶戒とすといへり。天台の祖師、此の意を得て、(一)有部の戒體の色を克體して、(二)性無作の假色と釋し給へり。是れは色香中道の意、法住法位の理なり。是れを出世の戒といへり。分別を生ずるを犯戒とす。是の故に『文殊問經』の意は出世の戒なり、これ地上戒なるゆゑに、分別を(三)波羅夷と制す。戒は位ふかければ、制細なり。縲の聲を聞きて是男是女の分別をなすを、第三の波羅夷といへり。眞實には無相の妙體、自性の(四)尸羅なり。眞言教にも無相の菩提を無爲の戒といへり。定も世間(五)有漏の定は慮を息め、心を凝して、智慧を生ずる方便とす。風中の燈の光なきごとく、散心の智慧は理をてらす光なし。又たゞ定にして智なきは、色無色の天に生ずといへども、果報つきぬれば下界におつ。眞實の定は、(六)首楞嚴定とも、王三昧とも自性禪ともいへり。『圓覺』には、(七)禪那といふ。定慧相應の名なり。動を止めて止に歸するは、止もいよ〳〵動ずといへり。是の故に大定は出入なく、事理なし。動靜一致にして法性を全くす。是れ中道の妙定なり。智慧も方便の位は(八)揀擇籌量し、思想觀察す。世間の智なり。(九)斷惑の力な

(一)有部。小乘有部宗。
(二)性無作假色。その性不變なるものをいふ。
(三)波羅夷。前出。
(四)尸羅。戒と譯す。
(五)有漏。前出。
(六)首楞嚴定。勇健定と譯す。
(七)禪那。定と譯す。
(八)揀擇籌量。ものをわけて量ること。
(九)斷惑。煩惱の惑を斷つこと。

の談ずる所と思へり。禪師答へて云はく、「無上菩提を身に蒙らしむるを戒といひ、口に說くを法といひ、心に行ずるを禪といふ。應用は三つあれども其の體は不二なり。譬へば江河淮漢の有所に名を立つること異なれども、水體は無二なるかごとし。戒即ち法、法禪をはなれず。何ぞ分別を生ずる」といへり。圭峰の宗密禪師も、「禪は佛の意、敎は佛の言、諸佛は心口相應す」と云ひて、(一)三宗(二)三敎の和合のこと『宗鏡錄』の第三十四卷半分以下にこれあり。又圭峰の『禪源諸詮』の中にこれあり。上卷の終り也。道人尤もこれを見給ふべし。凡そ戒定慧の三學、方便の位には異なれども、眞實の體を論ずれば全く一なり。戒罪人の三を分ちて、犯不犯の品を立つるは世間の戒なり。たとひ持するも有漏の果報をうく。たゞ定を發する方便なり。體は(三)欲界の下業なり、このゆゑに、南山律師釋し給はく、「執ずれば則ち道を障ふ。これ世善の法なり。違すれば則ち道を障ふ、(四)三途を免れず」云々。持する猶し道を障ふ、(五)戒相を執ずるゆゑに。犯すれば又いよ／＼道に遠し。三途に入るが故に。是れ則ち世間の戒なり。是の故に『法句經』には、「戒相は虚空の如し。持する者を迷倒となす」云云。『大品經』には、「不護を以て淨戒波羅蜜を圓

(一)三宗。法相宗、破相宗(三論宗)、法性宗(華嚴宗、天台宗)。
(二)三敎。性空敎、性空敎、圓敎。
(三)欲界。前出。
(四)三途。前出。
(五)戒相。戒律のすがた。

りけるに、清辨いはく、「汝が唯識といへるに違ふとて、且く唯境と云ふ。實には唯識にも非ず、唯境にも非ず、彌勒の成佛の時、この事證明として決すべし。當時は菩薩なれば用ひず」とて、岩の中に入りて、岩を閉ぢて入定すと云へり。是は一法性の中に寂照の德あり。寂は境なり、如なり。照は智なり、心なり。明鏡の銅と明との如く、一水の照と潤との如し。然れば明に鏡を接するは、唯識無境のごとし。銅に明を接するは、唯境無識のごとし。是二義なるべし、偏執すべからず。『華嚴經』の文、證明なるべし。如のほかに智なきは三論の法門、智の外に如なきは法相の法門なり。法相にも「空を門とする故に眞性に入る」と云ひて、空といひ有と云ふ、みな方便の門なり、實には一心法界非有非空なり、有執をやぶらんとして空といひ、空見をのぞかんとして有といふ。一心の妙理、有といふべきものもなく、空と執ずべき相もなし。心言路たえたり。義理なんぞ存せん。諸宗の差別是になずらへて意を得べし。また〔一〕戒定慧の三學、眞實の體は無二なり。京兆の興善寺の惟寛禪師は、馬祖の弟子なり。白居易、問うていはく、旣に禪師と云ふ。何ぞ法を說く」問の意は禪は不立文字の宗なり、心にありて言にあらず。法は敎師

〔一〕戒定慧。戒律と禪定と智慧と。

（一）四箇大乘。天台宗、華嚴宗、眞言宗、禪宗。

にいはく、「如の外の智の如を證するなく、智の外の如の智を發するなきなり」と。如は境、智は心なれば、三論は唯境といひ、法相は唯識といふ。共に佛意にかなふべし。五百の比丘、身因を説きし事各別なれども、佛なほ正説とゆるし給ふ。（一）四箇の大乘の法性を談ぜる、爭か佛意にそむかん。實際は源の一なる事を達して、方便は流れの共なるをへだつる事なかれ。諸宗根本の師、みな此意なるべし。或る遁世の尼公二人、大津をすぐるに、道の邊に車の輪の一あるを見て、一人がいはく、「この車は大乘誹謗のものにこそ、片輪のあり」といふ。今一人がいはく、「大乘誹謗せぬ者なり片輪のなき」といふ。また洛陽に辨阿といふ相人ありけり。片足の短くして腰を引けるが、弟子にあひて、「誠にや世間に辨阿を片足の短しとて、人の笑ふなる」といへば、「思ひもより候はず、あやまつて、片方の御足をば長くおはするとこそ人は申し候へ」と答ふ。斯のごとく、世間のことはりも、詞ことなれども道理たがはず。有無の詞變れども、車の一輪うごかず、長短のそしり異なれども、辨阿が身もとのごとし。有宗空宗、唯識唯境、義門異なれども、法體これ同じかるべし。この故に、護法、淸辨の門徒、相共に問答あるべか

（一）安立諦非安立諦。諦は諦理にて眞如のこと、これを言語にあらはすを安立諦といふ。言語以上のものとするを非安立諦といふ。
（二）五教。小教、始教、終教、頓教、圓教。
（三）四教。藏教、通教、別教、圓教。
（四）一乘。一佛乘。乘は前出。
（五）三乘。聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘。

れたり。法相にも、(一)安立諦の時は、義門を立て丶淺深を論ず。非安立諦、廢詮談旨の時は、義理隔なし。三論の師も、諸大乘經、顯道無二と云へり。天台の內鑒冷然の御釋にその意見えたり。華嚴の師も、色卽是空なれば淸辯の義立ち、空卽是色なれば護法の宗成ずといへり。倶にゆるして嫌らふ所なし。義門の差別の時は華嚴は(二)五教を立て丶、法相三論をば始教終教とくだし、天台は(三)四教を立て丶法相を別教に攝す。法相は(四)一乘方便、(五)三乘眞實と云ひ、三論の師は法相は三を執し、天台は一を執す、我は非三非一と云ひて、餘宗をそしる。これ機を引入する方便なり。實證の所を隔つるにあらじ。諸宗の論は、一往他宗の劣なる所を見て、わが家の勝れたる義を以つてそしる。相撲をとるに我がつよき所を以つて、人の弱きところにあたると云がごとし。たゞ有緣の機に信心を深くせん爲なり。謗法せよとにはあらじ。求那跋摩三藏の云はく、「諸論おの／＼異端なれども修行の理は二なし。偏執に是非あれども、達者は違諍なし」云云。まことに偏執是非は佛祖の意に叶ふべからず。また萬機の入路をふさぐになる。法相、三論の義門をいはゞ、心の外に境なければ、唯識といふ。境の外に心なければ唯境と云ふ。是故に『華嚴經』

落ちて(一)分別計度し、能所取捨わすれざるは、「狂はしたふな」と云ふかごとし。「無了知に於いて眞實を辨ぜず」といふは、無分別にも住すべからず、所住なき是れ眞實の所なり。これを無住の心體といふ。所住あれば本分にそむく。知もなく得もなくば、一念相應し靈知現前すべし。若し無分別の所を執し、眞實の相と思はゞこれ妄執なり。上座の僧が、たゞ無言ならば過あるまじきに、我れ無言なりと思ひて、「法師ばかりぞものは申さぬ」と云ふがごとし。この心法門修行の肝要、學者の龜鏡なり。尤も用意すべし。そもそも(二)法相三論は、(三)中天より始まりて、護法、淸辯、唯識唯境の諍ひかたくして、門徒、宗を分てる事を、(四)天台釋して云はく、「天親龍樹は(五)内鑒冷然なれども外時機にかなひて各一門に據る」といへり。法相の祖師天親、三論の祖師龍樹、内證はみな眞如の一理を通達し、外用の時機を引入する方便、或は(六)唯識無境といひ、或は(七)唯境無識といふ。有門、空門、時にしたがひて定まれる准なし。然るに末學佛法の源底にくらくして、是非偏執の過をいたす由を釋し給へり。凡そ佛法の大綱は、法體は分たず、義門は別つことを得と云ひて、一心の妙體は諸教不二なり、義門の差別は諸宗暫く分

(一)分別計度。分別し計ひ立てすること。

(二)法相三論。法相宗と三論宗。

(三)中天。中天竺。印度の中國。

(四)天台。支那天台宗の開祖智者大師を指す。

(五)内鑒冷然。内心は明けく澄み渡りて少しも執着なきこと。

(六)唯識無境。識のみ實在にて外境は非實在なりといふこと。唯心論をいふ。

(七)唯境無識。一種の唯物論をいふ。

り。一念無念といへるも、念をおこして無念と思はゞ、又これ有念なり。このことも觀行者の用意すべき法門也。『圓覺經』の中に、觀心の用意分明なる文あり。四人の上人が風情を以て譬として心得べし。「一切時に居して妄念を起さず」と云ふは、無言の道場には言語あるべからずと用意するが如し。若し妄念を起すは、「火かきあげよ」と云ふがごとし。「諸の妄念に於いて亦た(一)息滅せず」と云ふは、妄心もとより虛なり、體性寂滅せるゆゑに、これ滅すべきにもあらず。靈光はまた消すべきにあらず。滅せんと思ふ念すなはち妄分別なり。この故に弊起るはこれ病、つゞかざるはこれ藥とも云ひ、念起らば覺せよ、これを覺すれば則ち無也ともいへり。前念はこれ凡、後念は是佛ともいへり。また妄心しば〳〵おこる、眞心いよ〳〵明鏡也とも云ひて、たゞ本分にくらからずして、妄念に目をかけざれば、自ら本心明々なり。猪、金山をすり、薪、火を増すがごとし。然るに念をおこして滅せんとするは、「無言道場に物申す樣候はず」といふが如し。「妄想の境に住して了知を加へず」といふは、萬境に向ひて(二)現量無分別ならば、道に相應すべし。「六塵惡しからず、還て正覺に同ず」といへり。然るに知見をおこし(三)比量に

(一)息滅。やむこと。

(二)現量。現にありのまゝを量ること。

(三)比量。比較推量すること。

る事かたし。希に學する人も、只偏執の心あれども薫修の功うすし。是れ(一)我想ふかくして、嫉妬の心をさしはさむ故也。すべからく是非偏執をやめて修行を專にすべし。わが有縁の法をのみ執して、他の有縁の法を毀る事、又をろかなる意なり。近比(二)三論の明匠と聞きし上人、ある僧に語りて云はく、「宗ごとに我宗勝れたり／＼と偏執するに、我三論宗ばかりぞ其の偏執なき」といへり。此言やがて偏執なり。餘宗は偏執あり、劣なり、我宗は偏執なし、勝たりとす。まことの偏執なり。無言道場に物申す樣候はずと云へるが如し。大方は、宗ごとに宗旨を同する談これあり。下にあら／＼是れを引く。三論の師も法相は(三)三を執し、天台は一を執ず、我宗は三に非ず一にあらずといへり。是れ偏執に似たり。智者もなほ此心をわきまへずして、是非の過のがれず。まして僅に一宗の法門のかたはし聞きたる人は、餘宗の談をば知らずして、唯をしてくだし毀る、謗法の過のがれがたし。觀心の法門に立ち入りては、殊に差別の義門をわすれて、平等の心地に相應する解行要心の肝要なり。無言の上人が無言也といへば有言なるが如く、(四)一念不生、前後際斷、修行の法門の肝心なれ共若し心をおこして不生と知らば、かへりて有生な

(一)我想。をれがといふ想。

(二)三論。三論宗。

(三)三を執じ一を執ず。三乘教が眞實なりと執着すると、一乘教が眞實なりと骨張するとをいふ。

(四)一念不生前後際斷。一の思ひの生せずして、前後の時を離れたる無念の境界。

て、はては疊のへりにつかみつきて「入道が聞かぬ所にてこそ仕候ふべけれ、かのつく音を聞き候へば、堪へがたく候」とて、もだえこがれけり。此事は彼の主の物語なり。佛法を愛し佛の音聲に歡喜の心かゝらん人、得果疑なからん。これほどの事は稀なれども、人每に愛する事あり。せめて物愛しせぬものは、或ひは晝寢を愛し、或は徒なるを愛す。南都の或る寺の僧、朝の粥を食はずして、日高くまで眠る。「いかに粥はめさぬ」と人問へば、「粥よりも寢たるは、はるかに味よき也」と答へけり。これほどに(一)法喜禪悅の食を愛せば、佛道遠からじ。斯のごとく、或は詩歌管絃に好き、或は博奕田獵をこのみ、色欲にふけり、酒宴を愛する人、これによりて財寶の費え、身命のほろび、病のおこり、禍の來らんことを忘る。世間のこと好むところ、異なるがごとし。佛道に入る因緣も、人によりて其の愛樂し信解する法門異なり。此故に佛(二)萬機をもらさず方便をほどこして、(三)八萬四千の法門を說き給へり。かの酒を愛し碁を好むが如く、佛法を愛樂し修行せば、道を悟らん事やすかるべし。然るに、世間のことは無始よりなれて自らこのみ、(四)任運になし易し。佛法は始めて習ひ學するゆゑに、信をいたし功を入

(一)法喜禪悅食。佛法を喜び、禪定を悅びて精神の糧とすること。

(二)萬機。いろいろ異なれる機類。

(三)八萬四千法門。八萬四千の煩惱をそれぞれ對治する法義。

(四)任運。運に任す。心身の殊更なる努力なきを云ふ。

又人を損ずる事なずらへて心得べし。佛法は妙なるなり。信ずれば益大に、謗ずれば罪大なり。まして世間の事、なに物か得失並ばざらん。而かも失は多く、得は少し。佛法は失はすくなく、得は多し。世間の失多き事をすてゝ、佛法を謗ずるなほ縁となりて、得おほきなる道に入るべし。然るに世間のことは、無始よりなれきたりて、好み愛する人多し。佛法は始めてあへるにこそ愛し學ぶ人希なり。悲いかな。或る入道、圍碁をこのみて冬の夜よもすがら打ち明す。中風の氣ありて、手冷ゆる故に、かはらけにて石をいりて打ち、油つくれば萩をたきて打つに灰身にかゝれば笠うちきて打ち明す由、近程にて聞き侍りき。坐禪修行なんど、是れほどにせん人、悟道かたからじ。また或る下手法師、酒を愛するありき。値もなきまゝに、一衣の片袖をときて買ひて飲みけり。是れほどに(一)三寶をも供養し、父母にも孝養し、(二)悲田にも施し、惜む心なくは感應むなしからじ。物のなきと云ひて、善事を行ぜぬは、物のなきにはあらず。たゞ志のなきなり。或入道、餅を好む。醫師なるゆへに請じて主餅をせさするに。彼の音を聞きて、始は小聲に「おう〱」と云ふほどに、次第に高く、「おう〱」と鞠なんど乞ふ様にをめき

(一)三寶。前出。
(二)悲田。貧病孤獨に慈悲を行へば善果わが身に來る故、貧病孤獨を悲田といふ。

されば書に云はく、「人を毀りては己が過をおもひ、人を危ぶめては己が落ちんことを思へ」といへり。樂天がいはく、「人にみな一癖あり、我癖、章句にあり」と云ひて、世間の事萬緣をすてゝ、佛道に入りて後も、文章を好み愛する癖の捨てがたき事を云へるなり。人ごとに心の中にも、身の業にも、愛し好んで捨てがたく忘れ難き事あり。これを癖といふ。佛法の談には、習因習果と云ひて先を習因と云ひ、後を習果と云ふ。無始より仕なれたることの、人の敎をまたず、思はれせらるゝを習といふ也。佛道に入らん人、この事をわきまへて、流轉の業たらん習をすてゝ、解脫の門に趣くべき習をこのむべし。然るに人ごとに、我が好む事には失を忘れて愛し、我が承けぬことには失を求めてそしる。然れば我が好まん事には失ありて、人のそしらん事をかへりみて、かたく執すべからず。我がうけぬ事には得のあることを考がへて、あながちに毀るべからず。是れ達人の意持なるべし。たとひ輕重淺深はあれども、物ごとに得失ならざる事なし。(一)功德天、黑闇天時としてはなれず。是れ天然の理なり。是の故に江はよく船をわたし、又船をくつがへす。君はよく民をめぐみ、又民をわづらはす。水火等の人を益し、

(一)功德天黑暗天　胎藏界曼荼羅の中にある二尊。功德天は吉祥天の異名黑暗天はまた黑夜天ともいふ。

沙石集卷第四

(一)眞如の離言。眞如の本體は言葉にて詮はすこと能はざるをいふ。
(二)淨名の杜口。惟摩居士の默不二とて、惟摩は不二の法門を口をふさぎて示せるをいふ。
(三)道場。前出。

一、無言上人の事

或山寺に四人の上人ありけり。(一)眞如の離言を觀じ、(二)淨名の杜口を學ばんとや思ひけん。契を結びて(三)道場を莊嚴し、萬緣をやめ三業をしづめて、道場に入り、四人座を並べ、七日の無言を始む。承仕一人ぞ出入しける。こゝに更たけ夜ふけて、燈の消えんとするを見て、下座の僧、「承仕、火かきあげよ」といふ。並の座の僧、「無言道場に物申す樣候はず」といふ。第二座の僧、二人共に物いふ事、餘に心地惡しく覺えて、「物にくるはしたふな」といふ。上座の老僧、樣はかはれども、面々に物いふこと、あさましくもどかしく覺えて、「法師ばかりぞ、物は申さぬ」と云ひて、打ちうなづきける。賢げにて、殊に嗚呼がましくこそ覺ゆれ。此事を思ひ逐げば、人ごとに此の風情のがれがたし。世間に人の上をいふを聞けば、其人は由なく人をそしり、又、其事をこのみ愛して過をわすれ、放逸也なんと云ふが、我人をそしり、また愛しこのみて、過を忘れたる事をば、さとらぬにこそ。

して大乘の修行はげむべきこと此生にあり。彼の和尚の慈訓、心の底にくたさし
と思ふ故に、書きつけ給ふ所、教門に符合して、あやまちなき法門なるべし。

沙石集卷第三終

の(一)言語道斷、これ皆な法の體をとく。此所を達して、(二)事理無㝵ならば、萬法をつかひ得て、別の修行あるべからず。然るに(三)頓悟頓修の人は希なり。(四)龍女が菩提心をおこして、やがて成佛し無垢の成道を唱へしがごときこれなり。頓悟漸修の機のみおほし。經に云はく、「理は則ち頓にさとる、乗悟に併しながら消す。事は頓に除くにあらず。次第によりて盡す」と云。しかれば法は頓にさとるといへども、機情はつきがたし。風はやむといへども波は猶たち、日は出づといふとも霜は漸くきゆ。境緣にひかれて。萬法を轉ずるかたき時は、持律坐禪等の調伏の行を修むる是れを機と云ふ。法體にあづからず、只機情の上の(五)著相を漸くのぞくなり。此の分別なき人は、佛知見の照す所の法の體を機、情をもて、計度分別して、不生なりと思ひて、無㝵の見をおこし、空無の解をなして、無善無惡、無凡無聖と道理ばかりを心得て、妄業をば恣につくり、行もなし修もなしとて、善行をば、ものうくめなさず、己に情量の中に取捨し、分別の上に惡愛す。いかでか平等の一心をさとり、(六)無相の妙體に合はん。機法の分別これなり。佛法にあやまりなき解行をわきまへん事、眞の善知識の力なるべし。よく〳〵用意

(一)言語道斷。言語の道たゆといふこと。

(二)事理無㝵、本體と現象とが無㝵融通すること。

(三)頓悟頓修。頓に悟り、頓に修めつくす。

(四)龍女成佛『法華經』に八歲の龍女が佛となり、無垢世界に往生せりとあり。

(五)著相。執着の差別見。

(六)無相妙體。眞如は形なく相なきをいふ。

骨にきざみ紳にかくべし。此故に古人云はく、「神丹の九轉は鐵を點じて金となす。至理の一言は凡を轉じて聖となす」といへり。先賢のことば愚に思はんや。故に東福寺の長老(一)聖一和尙の法門(二)談議の座のすゑに、そのかみのぞみて、時々聽聞すること侍りしに顯密禪教の大綱、誠に目出たく聞え侍りき。その旨をえずといへども意の及ぶ所の義門心肝に染みて、貴くおぼえ侍りき。恨むらくは晩歳にあひて久しく座下にあらざる事を。しかれども、佛法の大意よく〳〵慈訓を蒙り侍りき。關東下向のとき、海道の一宿の雜事、營みて侍りしに、世のつねの人の風情には、いみじくなんと色代する事にこそ侍るに、「何しにかゝること營み給へる、あるべからぬ事なり。(三)初心の菩薩は事に涉りて紛動すれば、道の芽を破敗すとこそ申せ」とて別の語なし。此の語心肝にそみ耳の底にとゞまれり。此は『玄義』の中に侍るにや。(四)觀行初心の行者は、觀心を專として、事の(五)六度なを行ぜず、まして世間のこと心にかけず、身にいとなまず、萬事を休息し、用觀を專とすべし。もし事にわたれば觀心の芽破るといへる事を示し給ひき。凡そ機法あはひ、分明に教導ありき。法の體は、無迷、無悟、無惑、無智、諸教の廢詮の不生不滅、至理

(一)聖一和尙。辨圓といふ。臨濟禪の僧京都東福寺の開山なり。弘安三年、七十九にて寂す。

(二)談義。法談說教。

(三)初心の菩薩。未熟なる大乘の修行者をいふ。

(四)觀行。觀心修行。心をみきはめる修行をすること。

(五)六度。生死海を渡るべき菩薩の六種の行。布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧。

(一)圭峯禪師。支那華嚴宗の學僧。唐の會昌元年寂、壽六十二『原人論』等の著あり。

(二)修觀、觀法を修行すること。

(三)繫念情生。思を起して執着すること。

にて侍るべけれ。(一)圭峰禪師いはく、「空寂を以て自身とせよ。色身を認むること勿れ。靈知を以て自心とせよ、妄念を認むることなかれ。有義をなさば事これ惺悟の心、無義の事をなさば、是れ狂亂の心、狂亂は情念によりて臨終に業に牽かれて、惺悟は情に隨はず。臨終に能く業を轉ず」といへり。文の意は妄心分別はこれ狂亂なり。眞心をわする一念不生はこれ惺悟なり。本心をあらはす情念の所作はみな無義なり。無常の果をうく。無念の修行はこれ有義なり。常住の理にかなふ。此故に臨終に妄業にひかれずして、自在の妙藥を得んと思はゞ、行住坐臥に妄念をゆるさずして、本心をあきらむべし。德山いはく、「事に無心に、心に無事なれば、虛にして靈なり、空にして妙なり。毫釐も繫念すれば、三途の業因、弊瞥性生、萬劫の羈鏁」云云。是れ行人の用心、(二)修觀の龜鏡なり。無心無事なるは眞身のあらはるゝすがた、(三)繫念情生するは本心をわするゝ時なり。此故に孔子の物語、あまねく天下の人を敎へて、佛法に入る方便なり。大唐の祖師の敎誡、本朝の上人の物語、むするゝ事なくして、道人のあるべきやうをわきまへば、人身をうけたる思出なるべし。古德の言、先達の誡め、識に熏じ神に染め、

よりも、まさなくこそ覺ゆれ。古を以て鏡として、今の世を見るに、興廢誠に異なり、古の遁世の人は、佛法に心をそめて、世間の萬事をわする。近代は世間の名利をわすれずして、佛法はすたるゝにこそ。かゝるまゝに遁世の名のみありて、遁世のまことなし。世にありては人にも知られず、名利もなき人、遁世門に入りては、なか〳〵名も利もあるまゝに、かならず道心にあらねども、たゞ(一)度世のために遁世する人、年々におほく見え侍るにや。されば當世は遁世の遁の字をあらためて、貪世とかくべきにや。この心を思ひつゞけ侍り。遁世の遁は時代に書きかへん。昔はのがる、今はむさぼる。世にまことある人も聞ゆるに、朝暮はゞかりあるにや。近代も道に志しある人ありといへども、半ば遁世の風情みな變りたり。これ遁世のあるべき樣を知らざるか。知りながら學びがたきか。思出なき身にこそ。

夫れ一切衆生みな靈知覺了の性を具せり。此の性即ち佛性なり。此の佛性を忘るゝを、生死の凡夫といふ。(二)本覺の眞心にそむきて、幻化の(三)塵境に著するを、無明妄想といふ。然れば法身の大儀をわすれぬこそ、まことの道人のあるべきやう

(一)度世。世を救ふこと。

(二)本覺の眞心。先天的に具はれる智慧心。

(三)塵境、迷の世界をいふ。

にそむきてこそ」とて、一代の教門の肝要、出離解脱の道に入る人のあるべきやうとて、佛法の大意うち泣き〳〵語り給ふ。上人共に墨染の袖しぼるばかりなり。さて今日の夕方より通夜がら語りあかし、次日ひめもすに語りくらし給ふに、鐘のなるを、これはなにの鐘ぞと問ひ給ふに、日沒と申しければ、「こはいかなる物語申して候ひける」とて、入り給ひぬ。たゞ片時の心地なりけり。佛の說法の六十小劫を時の衆、半日と思ひけんも思ひしられけり。誠に在世にあひ佛の說法を聽聞せんも、かくこそと思ひあひて、泣く〳〵歸りけりとなん。高野の遁世者の聞きつたへて物語りし侍りき。或る遁世の(一)長齋の上人、河內國へ請用してゆく、七里の道を冬の日、「時以前におはしませ」と請ず。いと道もあゆまぬ馬にのりてゆくに曇りて日影も見えねども、はるかに日たけて覺えければ、「今日は日さがりぬらん」といふに、「檀那いまだ午時にてぞ候らん」とて、種々の珍物を以て齋いとなみてすゝむ。本より食者なれば、かひ〳〵しくをこなひ、食後の菓子まで至極せめくひて楊枝つかふに、鐘の音きこゆ。「是は何の鐘ぞ」と問へば、日沒といふ。日沒の鐘をまがふ事は似たれども、食にまがへるは、かの上人の物語に忘れたる

(一)長齋。長き間齋戒を守れる人。

申すべし。なをざりならば兎角の子細あるまじきに、身のあるべき様をわすれて侍りけり。一代の聖教を年久しく見侍るに、敎ふるところ假名にかゝば、あるべきやうの六文字なり。在家のあるべき様、出家のあるべき様、遁世のあるべき様、此の如きの道々にへ、法々にをいてあるべき様敎へおき給へり。しかるに末代はあるべき様みだれて侍るなり。國王大臣は外護の知識として、佛法を守護し信敬して、釋尊の付屬の事をわすれ給ふべからず。是れ王臣のあるべきやうなり。その外の在家、王の御意にそむくべからず。諸寺諸山の出家の僧侶は、宗は替り學は殊なりとも、釋子の風なれば、先づ戒儀によりて、剃髪染衣の形とならば、欲をすて愛をたち、(一)五衆の位をわきまへ、(二)二學の行を專にすべきに、頭をそれども欲をそらず、衣を染て心をそめず、或は妻子を帶し、或は甲冑をよろひ、たゞ(三)三毒(四)五欲をほしいまゝにして、かつて(五)五戒十善なほ持つ事なき僧ども、次第に國に滿てり。これ出家のあるべき様をわきまへず、遁世門こそ、ことに我慢執著をすて世情妄念なくして、世間の人にかはりて、佛法の敎へのあるべきやうに、身心をなすべきに、人々しきやうに申して候ひつる。まめやかに佛のをしへ

(一)五衆。出家の五種。比丘。比丘尼、式叉摩那、沙彌、沙彌尼の稱。
(二)二學、慧學、定學の稱、智慧をみがくこと、禪定を修めること。
(三)三毒、貪欲、瞋恚、愚痴。
(四)五欲。前出。
(五)五戒十善。前出。

(一)五分法身。戒身、定身、慧身、解脫身、解脫知見身をいふ。五種の因によりて得る證りの身。
(二)六趣。前出。
(三)四生。前出。
(四)明慧上人。前出。

て、己靈の萬德をうづみ、(一)五分法身を忘れたる事、まことに悲しむべし。父母のあたふる身を全くせざるは、今生一世の身をわするゝ人なり。佛道修行の志なく出離生死の營みなくして、空しく輪廻の苦果をまし、いよ〳〵流轉の業因を作り、(二)六趣の巷にめぐり。(三)四生の形にわづらひ、無窮の生死を受け、多劫の業苦にしづまん人は、諸佛の法身と同體にして、釋尊の子となれる身を忘るゝは是れ多生の身をわすれたる人なり。心あり悟りあらん人、よく〳〵心をしづめて、今生後生の身をまつたくする用意わするゝ事なかれ。

八、栂尾上人の物語の事

(四)明慧上人に結緣のため、高野の遁世上人あまた步みつれて、栂尾へ參じて「しか〳〵」と申し入る。折節風氣ありて見參せぬ由、返事し給ひて、やがて使者につゞきて上人おはせけり。人々さはぎて入り奉る。上人申されけるは、「此の明慧房が過職になりて候がにくさに、具して參りて侍るなり。各々はる〳〵と高野より老法師御覽ぜんとて、をはしませり。やがて見參に入るべきに、風氣なんど申せば世間の人々しき風情なり。大事ならば臥しながらも見參して、佛法の物語も

ず、下として亂れず、醜にありてよく推る」と云云。是れを孝養とす。此の三事を行はざるを不孝とす。上にありて驕れば亡び、下にして亂るゝは刑せらる。醜にあつて爭へば兵すといへり。災難夭亡、是よりおこれる。これ身をわすれたる人なりまた色欲を愛して精を盡し、酒肉をほしいまゝにして臟腑をくだし、家を美麗に作り、民の惱を思はざれば、身を損じ命を失ひ、久しくたもつ事なしといへり。然るに末代は人の振舞ひ昔にかはり、富貴の家は心をほしいまゝにして酒色に貪し、屋舍を過分につくり、人民の苦をしらず、精をつくすは養性にそむき、器量よはく病患おこる。祿重く家ゆたかなれば、身をあやうく命つゞまる。しかれば仁義をおこなはずして、天命をたもたざる人は、今生の身を忘れたるなり。是れ猶一期の程なき物忘なり。是にもまさる物忘あり。夫人身を受くること、爪の上の土のごとし。佛法にあへること(一)優曇華よりも希なり。たま〳〵佛法にあひて、わづかに因果の道理をしり、幸に善緣にちかづいて、すでに菩提の妙道を聞く。然に何れの宗をも學し、何なる行をも修せずして、常住の佛性を具し、無盡の妙用を備へながら、愚に流轉生死の妄業をのみ造り、かつて出離解脫の善因なくし

(一)優曇華。前出。

（一）五戒。在家のために制定せる五の戒律。

仁といふは、ひろく人をめぐみ愛す。老いたるをば親のごとく敬ひ、幼をば子のごとくあはれむ。若し人仁なきは、鬼畜のごとし。なさけ深く、めぐみあつき心せばき時は、これを仁惠といひ、廣き時は慈悲とす。其體は同じといへども、德用に優劣あり。たとへば火の體は一なりといへども、薪の多少によりて光に明昧あるがごとし。義といふは正直にして道理をわきまへ、是非を判じ、偏頗なく、奸邪なき事なり。（一）五戒には仁は、不殺生戒、義は不偸盗戒にあたる。禮といふは、人をうやまひ、讓りて次でを亂らずつゝしみ恐れて惰らざる事なり。不邪婬戒にあたる。邪婬は人をあなづるきはまりなり。智といふは、照了の心ありて、是非好惡をわきまへ、をろかなる事をすてゝ、かしこき道を慕ふ心なり。不飮酒戒にあたる。酒は人の心を狂せしめ、愚痴の因縁なる故に。信といふは、心にも言にもまことありて、いつはりなく、口の虎、身を害し、舌の劍、命をたつ事をおそれて、みだりに言をいたさず。不妄語戒にあたる。この五常を全くする人は、災害をのづから去り、運命久しく保つ。父母のあたふる身體髮膚を破り、耻かしめずして、名をあげ、德をほどこすを孝養の本とす。『孝經』に云はく、「上に居て驕ら

七、孔子の物語の事

孔丘は儒童菩薩の後身として、周の代に出で、佛法の方便のために、先王の要道をのべて國の政を示し、仁義の孝行を敎へて人の心をたゞしくせし賢聖なり。或時に、魯の哀公、「世に物忘れする者ありて移徙に妻を忘る」と語り給ふに孔丘の云はく、「臣、物忘する人の、これにも過ぎたるを見る。桀紂の君は其身を忘れ給へり」と語らる。夏の桀王、殷の紂王は、仁惠なき君にて、國をわづらはし、民を惱す。時の后を愛するあまり、彼心をよろこばしめんとして、酒の泉をたゝへ肉の山をつき、人をして飮み醉はしめ、惱まし殺し、銅の柱を燒いて、人をせめのぼせ燒きころす。是をみて后のわらひ愛するを、心よき事として、人の悲み歎きつもりて、天のせめを蒙り、俄に后と共にほろび失ひ給ひけり。此は我身をわすれたる人なり。妻は猶身の外なれば、わするゝ事もあるべし。我身をわするゝ事、愚なるよしを申されけるなり。哀公この語にはぢて、政をたゞしくして「賢王にておはしけり。この事を思ふに、身をわすれざる人は希にこそ。先づ仁義禮智信の五常をまつたくし、家をたもち國をおさむる。これ身をわすれぬ人なり。

と、弟とは過なし。我を誅せられん」と申す。弟は「母と兄とは過なし。我を誅せられん」と申す。母を召して問はれば、母「二人の子はとがなし。我子を教へざるゆゑなれば、我身に過あり。二人の子をたすけられん」と申す。倶に申す所あれども、母をばたすけて、二人の子の中に一人を誅すべし。但し母が言葉によるべしとて、母に問はる。母申さく「弟を召し取りて兄をばたすけらるべし」と申す。王ののたまはく「人の親の子を思ふ習ひ、おほく幼を愛す。何の故に弟をすつるぞ」と。母申さく「弟は我が實の子なり兄は繼子なり。兄が父命をはりし時、我子のごとく育むべしと申しゝかば、彼の詞忘れがたき故に、此を助けんと思ふ。我子なれば弟をばまゐらす」と申す時、王大に感じて「一門の中に三賢あり一室の内に、三義あり」とて、二人ながら臣下に召しつかはれ母も同じく富み榮えけり。我身をわすれて我身まつたし。情ふかく義ありて、賢人の名天下に聞こゆ。されば人を損ずれば身を損ずるになり、人をたすくるは身をたすくるになる。此の道理をしらずして、情なく義をわするゝ人は、人の皮をきたる畜生なるべし。心あらん人、先賢の跡をまなびて、後昆の範となるべし。

（一）、『梵網』。『梵網經』のこと。

けれぱ、夫これをたづね出だして、我は物もえかゝず讀まざりけるまゝに、子息の兒、戸隠の山寺にありけるを呼びて、母の前にて讀ませけり。母色を失ひて、肝心も身にそはぬ體なり。此の兒心あるものにて、たゞ世の常の文のやうに、やはらげて、あまたの文を讀みてければ、人の和讒なりけりと思ひてやみぬ。此の繼母餘りにうれしく思ひでいたひけしたる翫び物取具して文をやりける

しなのなる木曾路にかくるまろ木ばし、ふみゝしときはあやうかりしを。

此兒の返事に

しなのなるそのはらにしもやどらねど、みなはゝきゞとおもふばかりぞ。

かの閔子騫にゝたり。（一）『梵網』の文にも、あひて哀れなり。「一切の男子はみな我父、一切の女人はみな我母なり」と說けるに、違はぬ心なるべし。哀れなりける心なるべし。父の家をも繼ぎて侍りけるとなん。

魯州に母子三人貧くして、世をわたる者ありけり。二人の子他行のひまに隣の人母に耻ちがましき事をあたふ。子歸りて此事を聞きて母が耻をすゝがんために隣人を殺害しぬ。門を開きてさゝず。官に過を行はるべきよしを申す。兄は「母

けるこそ、元啓が父にはをとりて覺ゆれ、すべては人とならば賢なるべき者なり。耻を知り義を存し、情ふかく智ありて、いかなる縁にあふとも無道をおこなはず、恩を以て怨を報じ、身を輕くし、人をたすくる心ある、是世間には賢人なり。佛法に入れば菩薩の行となるべし。賢の下地なくして、俄に菩薩となり難かるべし。

孔子の弟子の四人の上足の中に、閔子騫といひけるは、繼母これをにくみて、我子二人には、常の綿をきせ、騫には葦の花を綿にしてきせけり、此を恨むる心なくして、父にかくしけれども、自然にある時みつけて、父おほきに怒りて、妻を追ひだす。騫、父をいさめて云はく、「母家にありては、一子一重ならん。母家になくては、三子一重ならん」と。まことに母なくは共に薄かるべし。たとひ餘の母あらば、又三人まゝ子たるべき由をいひけるに、父道理にをれて妻を留む。其の後繼母、心をあらためて、我が實の子よりも、いとをしくしけり。この故に賢人の名をえて遂に上足の弟子につらなる。信州に中昔、或人、京より人をおもひて具して下りてけり。京にもの申す人あまたありける方より、文を下しおこせけるをあまたありけるを、かくし置きたるを、かゝる事なんありと告げ知らする者あり

母とのみふせり候」といふ時、この子父がひざをつゐたちて内へ入りさまに、「父は我をば母と寝るといへども、父もまた母とは寝るめるは」と云ふ。實にさもと覺えてをかしく、いたいけしたりしよし語り侍りき。父を恥ぢしめ教ふるに似たり。漢朝に元啓と云ふ者ありけり。年十三の時、父妻がことばにつきて、年たけたる親を山にすてんとす。元啓しきりにいさむれども用ひずして、元啓と二人あからさまに、手輿を作りてもちて深山の中にすてつ。元啓これをもちて歸らんと云ふに、父「今は何にせんぞ、すてよ」といふ時、「父の年老い給ひたらん時、またもちて捨てんずるためなり」といふ。其のとき父心つきて、我れ父をすつる事まことにあしきわざなり。是をまなびて我をすつる事ありぬべし。由なき事をしつるなるべしと思ひ返して、父を具して歸りてやしなひける。此事天下にきこえて、父を教へ祖父をたすけぬる孝養者なりとて、孝孫とぞ云ひける。いとけなき心の中に、父を教ふる智慧ふかゝりける事、まめやかの賢人なり。人の習ひよき事をば必ずしも學ばねども、惡しきことをば學び習ふ事をつみしらせける心、まことにありがたくこそ、此の幼子も父を恥ぢしめけるに思ひしりて、また聖還らざり

れ、佛知見の照す所を執し、見をもつて計度し、或は無事の見をおこして、因果を撥無し、或は證餘得の思ひをなして邪行をほしいまゝにし、自を損じ他を損じ、佛法日々に魔滅し、やうやく淪亡して喉につまれり。悲しむべく、をしむべし。(一)永嘉大師云はく、「豁達して空なり。因果を撥無して漭々蕩々として惡趣を招く」諸法の空と云ふは、一念不生の無染汙の心なり。たゞ情量を以て空の道理を心得て、因もなし果もなしといふ。これ(二)惡取空の大邪見なり。近代聖教もしらず道心もなく、觀行もわきまへぬ愚俗僧愚の中に、此たぐひ多し。これ甘露を毒藥となすものなるべし。「實際理地には一塵も受けざれども、佛事門の中には一法をも捨てず」と云へり。假名をやぶりて佛法を談じ、因果を信ぜずして修行をたてん事、おほきに佛祖の教へにそむけり。此の事よく〳〵わきまふべき道理なり。

六、小兒の忠言の事

南都に或律僧、世間になりて子息あまたありける中に、殊にいとをしくする子五歳の時、知りたる上人兩三人、彼房にゆきて物語する序でに、此子父が膝の上に居たるを、「きやつは不覺の者にて候。これ程になり候て、父とは都て寢候はで

(一)永嘉大師。唐の禪僧。開元元年寂、壽四十九。『證道歌』『永嘉集』等あり。

(二)惡取空。惡しく平等皆空の理に偏すること。自他平等なりと云ひて他人のものを盜むが如きをいふ。

(一)本願上人。戒律興隆の願を立てし解脫上人を指していふ。

(二)犯戒。戒律を犯しやぶること。

(三)聲聞戒。聲聞僧、即ち小乘の僧の持つ戒律。

(四)波逸提。墮と譯す。懺悔すれば許さるゝ罪をいふ。

(五)菩薩戒。大乘戒のこと。

(六)波羅夷、前出。

者の中より發心して、如法の持律の人世間におほし。彼(一)本願上人の御志の感ずる所にや。さて彼の六人の内に、名も承りしかども忘れ侍り。持齋もやぶりて、僧房に、同宿兒どもあまた置きて、昔の儀すたれはてゝ、兒にくはせんとて、さを河といふ河にて魚をとらせて我身はひたいつきの内にゐて下知し、弟子の僧火たきて前の爐にて、生きたる魚をにるに、鍋の湯のあつくなるまゝに、魚炭櫃にをどりおつ、愛弟の兒これをとりて、手水桶の水にすゝぎて鍋に入る。房主これを見て、「よし〱よくしたり〱、兒共はそれていに、おめぬがよきぞ」といふ。同宿の僧、烏帽子引き入れて火たきけるが、「これは(二)犯戒には何にて候べきぞ」と問へば、(三)聲聞戒には(四)波逸提、(五)菩薩戒には(六)波羅夷なりと答ふ。戒相は誠に明々なれども、威儀はことの外に散々の事にこそ。學と行とたがひたる事、一國の風儀久しくなれるにや。「佛法の滅せん事は天魔外道のあたはざる所なり。わが未來の弟子うしなふべし。師子の死せるをば餘の獸食する事あたはず。師子の身の中より虫いでゝ食するがごとし」と說き給へり。末代の法滅の學者、如法は行ぜずして、名利の價とし、渡世の媒として、聖敎を邪妄の情に引き入

(一)『浄名經』に「欲の釣をもつて、引いて後に道に入る」と云へる、まことなるかな。せめては名利のためにも學すべし。(二)順逆みな縁となる。但し遠近遲速あるべし。同じくは道にちかき參學もつとも肝要なるべし。

五、律學者の學行と相違する事

唐の龍興寺の(三)鑒眞和尚、聖武天皇の御宇本朝に來りて、南都の東大寺、鎭西の觀世音寺、下野の藥師寺、三の(四)戒壇をたて給ひ、毘尼の正法をひろめ、如法の受戒を始め行ぜしかども、時うつり儀すたれて、中古よりたゞ名ばかり受戒といふて、諸國より上りあつまりて、戒壇はしりめぐりたるばかりにて、大小の戒相もしらず、犯制の行儀もわきまへず、わずかに﨟次をかぞへ、空しく供養をうくる僧寶になりはて、(五)持齋持律の人跡たえぬる事をなげきて、故笠置の解脱上人、如法の律儀興隆の志深くして、六人の器量の仁をえらびて、持齋し律學せしむといへども、時いたらざりけるにや、皆正體なき事にてありけれども、堂衆の中に器量の仁を以て常喜院と云所にて、夏中の間律學し侍り。持齋すべき供料なんど計ひおかる。夫れも夏をはれば持齋もせずして如法の儀なかりけるに、近比かの學

(一)『浄名經』。『維摩經』のこと。

(二)順逆。順縁と逆縁。目的に順ふことと、目的に反することとが、いづれも共に目的實現の助けとなるをいふ。

(三)鑒眞和尚。唐の律僧。苦心して我國に渡り聖武天皇以下多くの人に戒を授く。天平寶字七年七十七にて寂す。

(四)戒壇。戒律を授くるときに登る壇。

(五)持齋持律。齋戒を持ち威儀を亂さぬこと。

（一）馬祖、諱は道一。支那の禪僧。唐の貞元四年寂す。大寂禪師と謚す。

なり。古人の佛法を問ひし皆此の心なり。昔、大珠和尚(一)馬祖に參ず。祖の云はく、「何のために來れる。」大珠云はく、「佛法をもとめんため也。」祖の云はく、「汝が自家の寶藏をすてゝ、外にもとめて何かせん。」大珠云はく、「いかなるか是慧海が自家の寶藏。」祖云はく、「汝が我に問ふもの是れ汝が寶藏なり」と。大珠言下に道を悟る。それより後に、學人佛法を問ふ事あれば、「自己の寶藏ゝ開き、自己の家財を用ひよ」と敎へき。かくの如く生死の疑ひ、根をたち、自己の本分をあきらむる問答、是れ道人の風情なるに、この客僧生死の大事をさしをきて、他事を論ずる故に、志しなしと見て立ち入られけり。我國の學問、名利のため廣學を事として、眞實の道をさとり如說の行を修する事、中古よりすたれて侍るにや。諸寺諸山の學問、ひとへに名利を心として、解脫を期する志なし。然れども敎門に眼をさらし、學の功のつもるは、智慧の方便にて發心する人自からあるにや。惠心僧都、菩提心をおこして後、名利の二字を拜まれけるとかや。名利の心をもちて、稽古して學問の力によりて、道心をおこす事を思ひとりて、若し名利の心なくば學問すべからず、學なくば智慧あらじ、智慧なくば道心をこりがたしと、思はれける故にこそ。

り僧にて、心も語もたゞ本の俗の如くなるのみ多し。かなしき濁世なるべし。此中に若し(三)三業佛誡にしたがはゞ、まことに思ひ出なるべし。

四、禪師の問答是非の事

草河の故眞觀長老は、教院に六年、禪院に七年、在唐十三年、天臺禪門の觀心の用意、心にくゝ思はれたりし人にて、歸朝の後、洛陽の學者道人、緣をとり便をうかゞひて、問ひとふらひける中に、或とき遁世の僧、齡五旬にあまれるが見參に入らんと、あながちに申すありけり。たやすく人に對面する事なく、法門なんど申さるゝ事も稀なりけるが、さて此の僧に對面して、「何事の御用にや」と問はる。「天臺の法門を、かたのごとく承りて候について、草木成佛のこと不審に候」といふ。良久しく返事なし。とばかりありて、「草木の成佛は、しばらくおき候、御邊の成佛はいかゞ御存知候」と問はるゝに、「其事はいまだ何とも存ぜず」といふ。「先づ其御用意かあるべく候ひける」とて、立ち入られにけり。この僧、ことばなくにがりてぞ出でける。道人の問答は生死の一大事を心にかけて、無始の輪廻をたち五陰の重擔をすてんと思ひて、直に問ひ直に答ふ、是れ參禪學道のすがた

(一)三業。身口意の三業。

(一)沙門。桑門とも書く、梵語にして勤息、止息など譯す。諸の善を修めつとめて惡を息むといふ意。僧のこと。

(二)釋眼儒心、形は釋子に見えて心は世間の人に同じといふ事。

に彼家にゆきて供養をうく。或時遠國より客僧來る。居士懇に供養しけり。善法比丘これを見て、我をばかやうに供養せずして、他國の僧を重くすること本意なし。そねましく思ひて、もとより腹あしき比丘にて惡口をしけり。「今日の御供養こそ目出く見え候へ。山海の珍物を數をつくされたり。たゞなき物とては油糟ばかりなり」といふ。居士油をあきなひて世をわたる由をいへり。こゝに居士、「只今思ひ合はすること侍り。あきなひのため、諸國をあるきしに、或る國に雞の形は、よの常の雞にて、鳴く音は烏の音なるあり。其の由を問へば、此雞の母、烏にとついで生めり。仍ち形は母に似たり、音は父に似て候。是を烏雞と名くと云へりき。今御形を見たてまつれば(一)沙門の御姿なり。仰せらるゝ御語は在家の語なり。彼の烏雞こそ思ひ出でられ候へ」と云ふとき、善法比丘ことはなく腹を立て、食せずして座を立ちさりぬ。此の嚴融房の風情、彼に似たり。善法比丘の後身にてや侍りけん。『遺教經』にいはく、「智慧なきものは既に道人にあらず、又白衣にあらず、名くる所無し。」と。また「袈裟を被たる獵師」とも云へり。古人は釋眼儒心の者と云ふ、在世上代、なほ如法の僧すくなし。今の世には、たゞ形ばか

は知りて侍るか」と云ふに、「いかでか知らぬ者候べき」と答ふ。さてこの事しれる人は、「人ごとに心も剛なりや」といふに、「さる人は希なり」といふ時、「されば世間のことは無始より狎れきて、名利をも思ひ、耻辱をわきまへて、かけくみ打ち合ひ身をわすれ命を捨てんことは、多生に狎れきたる事にて、よに易すかるべき道に、猶心たけきは希に、不覺なるは多し。まして佛法は其の道たかく、其理かすかなり、學び難く學びやすし。知ること猶たやすからず、行ずることいよ／＼かたし。無始より今にさとらずして、今日はじめてあへり。まれにも信じ行ずるこそ、ありがたけれ。佛の心をしり、佛の行を學ぶ。如何でかたやすからむ。我身にやすき世間の事を知るまゝに、なす事の難きをもつて、佛法の習ひがたく行じがたき事を推して、學者を罵るべからず」と申しゝかば、道理にをれ侍りき。この上人此道理をわきまへずして、なか／＼在家人につまりけり。妹は多聞はをとり智慧はまさりて、還つてつめてけるにこそ。

如來の在世にも、これに似る事ありけり。質多(一)居士といふ俗の(二)初果の聖者なるありけり。信心ふかくして、常に僧を供養しけるに、善法比丘といふ僧、つね

(一)居士。出家せず、家にありて佛教を信奉する人。
(二)初果。前出。

（一）七種の聖財。信、進、戒、慚、愧、多聞、布施、定慧の七は佛道の財といふこと。

「よしさらば如何にも思ふさまに歎き給へ」とて、しかりて出でにけり。誠につまりてけり。學生の妹のしるしと聞こえけり。

凡そ物の理を知ると、知るが如く行ずるとは、道異なり。されば過をしりて過をあらため、理をわきまへて理をみたらざる、實の賢人智者なるべし。多聞廣學也とも、身の過をあらためず心のひがみを直さずば、徒らに他の寶を數ふるに似たり。されば(一)七種の聖財の中に、智慧と多聞とは別なり。學生の才學あるも如何でか知れるがごとく行ぜん。智者と云ふは廣く物を知らざれども、道理をわきまへてしれるが如く、過を恐れ理を心得て心あきらかに、悟りあるをいふ也。如實の行は多聞よりおこるとて、多聞は實智を生ずる因縁とはなる也。或俗の云はく、「智慧なく愚痴なる在俗の、不當不善なるはさるべき事にて候。多聞廣學の僧の中に、心えぬことどものみ聞こえ候は、何を習ひ知り給へる甲斐こそなけれ」と申しゝを、此の道理をもつて、しると行ずるとは異なり。されば書にいはく、「知る事の難きには非ず、能する事の難きなり」と云へり。先づ世間に弓箭を取る人、「合戰の庭に名をも惜まず命をも捨てず、逃げかくれ落ちふためくは、口惜き恥と

とて、かさ〳〵として行きぬ。「誠にやは、女房のなげきを、法師とふらはずとて恨み給ふなる」といへば、「あまりのなげきに、心もあられぬまゝに、さる事も申してや候ひけん」と云へば、「無下の人かな。さすが此の法師が親しきしるしには、世の常の人にや似給ふべき。生ある者はかならず滅す。會者は定めて離る。(一)南浮はもとより老少不定の國なり。前後相違、母子のわかれ、世になきことか。始めてなげき驚くべきにあらず。返す〳〵云ふかひなし」と、しかりければ、「かたのごとく、此道理は承はり知りて侍れども、身をわけていで手付けて候ひつる上、心さまもかひ〳〵しく候ひつれば、何の道理も忘れて、たゞ別のみ悲なしく覺え候」とて、涙もかきあへず泣きければ、「あら愚癡や。道理しりながら猶なげくべきか。さればそれは知りたる甲斐か。あら不覺や」とて、いよ〳〵攻めふせけり。とばかりありて、涙をしのごひて、「抑人の腹立ち候ことは、あしき事か、又くるしからぬ事か」といへば、「それは貪瞋癡の三毒とて、宗との煩惱の一なり。疑ふにやをよぶおそろしき過なり」といふ時、「など、さらばそれほどに御心得あるに、御腹はあまりに惡しきぞ」といふに、はたとつまりて、云ひやりたる事はなくして、

(一)南浮。前出。

(一)愛別離苦。前出。

三、嚴融房と妹の女房との問答の事

中比甲斐國に嚴融房といふ學匠ありけり。修行者おほく給仕奉事して學問しけり。あまりに腹あしき上人にて、修行者ども、時非時さばくりかようずるに、湯のあつきも、ぬるきも叱かり、をそきをも腹立てゝ、疾くもてきたれば「法師に物くはせじとするか」とて、食ひさして打ち置きてしかりけり。其のあはひを見んとて、障子ひまよりのぞけば、あれはなにを見るぞとて、いよ〳〵腹立てければ常には心よからずのみありけれども、よき學匠なりければ、忍びて學問しけり妹の女房最愛の一子に後れて、人の親の習と云ひながら、あながちに歎きければよその人も吊らひ哀みけるに、此の上人とふらはざりけるを、「あらうたてや、此程の歎きを、上人のとぶらはれぬよ。餘所の人だにも情をかくるに」と云ひけるを、弟子の中に聞きて「彼の女房のうらみ申され候なるに、御とふらひ候へかし」といへば、例の腹立てゝ、「無下の女房かな。法師が妹なんど云はん者は、普通の在家人に似るべからず。生老病死の國に居ながら、(一)愛別離苦の愁なかるべしと思ひけるが、あら不覺や。いふ甲斐なき女房かな。いで〳〵往いてつめ伏せてこん」

荷澤は第六の祖、慧能の嫡弟、即ち第七の祖師なり。如來知見と云ふは法華の四佛知見なり。無住の心は淨名の無住の本なり。禪教の所詮、不定方便すこしき異也。

是は此巻十一丁目の註なり。

他鄕と云ふは三界なり。本國は淨土なり。『安樂集』にこれあり。敵國に人の子とられて、惡く使はるゝが、本國へ歸らんと思ふ如く、娑婆を他國と思ひ、極樂を本國、父母の國と思ひて、淨土の行業すべしと云へり。

述懐に云はく

あながちに目みせぬ人をへつらはじ
　目みせん人をもまた否と思はで。

法にすきなさけふかくて目をみせん
　人にむつばんそのほかはいや。

へつらひてたのしきよりもへつらはで
　まづしき身こそ心やすけれ。

勝軍論師の心を察してよめり。

萬法を照す」といへり。世間の人の我が失をわすれて、人の失をのみ見て、人を鏡として我が身を照すことなきこそ愚かなれ。人をそしりては我が身の失をかへり見る、これ人を鏡とする心なり。人の愚につたなきを見は、我れをも、また人のかくのごとく見ん事を思へ。是れ人すなはち我鏡なり。猿房官がごとし。また人の得を見て我が及ばぬ失を照すべし。また古のいみじき事を聞ては、今のすだれたる事をわきまふる。是れ古を鏡とする心なるべし。(一)上宮太子の十七憲法にいはく、「面の忿をたち、心の瞋をやめて、人のたがはんを瞋ることなかれ、人みな心ありて、各心に執する事あり。我が是は人の非、人の是は我が非、我もかならず聖にあらず、彼も必ずしも凡にあらず。共にこれ凡夫なり。是非の理たれか是れを定めん」とのたまへり。誠に凡心各執すること、妄情の上の是非なれば、是非ともに非なるべし。人の非をもつて鏡として我が是をてらさば、我が是も是にあらじ、人の非も非にあらじ。この故に古人のいはく、夢の中の有無は、有無共におなじく無なり。迷の前の是非は、是非共に非なり。しかれば得失是非、一時に(二)放下して物我一如、自他平等の大道を達すべきをや。

(一)上宮太子。聖徳太子。

(二)放下。放ち去る。脱却すること。

き、これ人の本也。都て病なき人のごとし。過あれどもあらため、罪を犯かせどもよく懺悔して、後にまた犯さゞるまた健人なり。健といふは、病なきすがたなり。昔も今も漢家本朝、時にとりて忠言を申し傳へて侍るは、遥かに聞くところに感ある故に、左史は事を記し、右史は言を記すといへり。させる忠言ならねども、思ひ出づるにしたがひて、書き付け侍り。故に吉水の(一)慈鎭和尚の御房に房官ありけり、また御室の御所に房官ありけり。共に名人なりけるが、二人ながら猿にすこしもたがはず、世人猿房官とて。人々に愛しわらはれける。共にさかさかしき者にて、召しつかはれけり。或時御室より件の房官、吉水の御所へ御使に參る。件の猿房官參ぜりとて、御所中さゞめきけり。これの猿房官いだし合ひてあひしらはせよとて、御所にも御覽じけり。御所中の上下、彼處こゝに、たゝずみて見る程に、吉水の房官あゆみ向ひて、うちゑみて如何おぼゆると問ふに、「鏡を見る心地こそすれ」と答へければ、人々奥に入りて愛し感じけり。時にとりてゆゝしく聞えけり。古人のいはく、「銅をもて鏡としては衣冠をたゞし、人をもつて鏡としては得失をしり、古をもつて鏡としては興廢をしり、心をもつて鏡としては

(一)慈鎭。慈圓といふ天台宗の僧比叡山の座主となり嘉祿元年七十九にて寂す。

されてけり。萬人掌を合せて悦びけり。聖人は心なし、萬人の心を以て心とすといひて、人の心をかねて、民のわづらひを思ひ給ひけん。まことに賢にこそ。賢王には賢臣の生れあふ事にて、君も臣も仁慧を心として、國おさまり民安しと申すは、この謂ひ歟。魏の文王、「我は賢王なり」と思ひて、臣下の中にて、「朕は賢王なりや」と問ひ給ふに、任左といふ大臣、「君は賢王にてはおはせず」と申す。「いかに」と問ひ給へば、「天のあたふる位を受くるこそ賢王とは申せ。威を以て位につき給へり、賢王の儀にはあらず」といふ。これは伯父の位をうばひ、彼の后をとりて、我后とし給へることを思ひて申しけるにこそ。さて怒りて座を追ひたてらる。次に翟黄といふ大臣に、「朕は賢王なりや」と問ひ給ふ。「賢王とこそ申さめ」と申す。「なにの故に」と問ひ給ふ、「賢王にはかならず賢臣の生まれあふことにて候ふに、任左程の者の生まれあひまゐらせたれば、賢王にこそ。任左はいみじく申し候」と申しける。この詞にはぢて、任左を召し返して、政たゞしくして、賢王の名をえたり。書にいはく、「木の縄に従ふは材なり、君の諫に従ふは賢なり」といへり。佛法の中にも、二人の健人あり。專精不犯と、犯已能悔とて、性罪な

し。用心のためと仰せ候へども、泰時運つき候ひなば鐵の築地をつきて候ともたすかり候はじ。運ありて召し使はるべくは、かくて候とも何事か候べき。堀なんどほりて候はゞ、そらさはぎの時、馬人おち入りて中々はかりなき煩ひ出來ぬと覺え候。鰭板のすきなんどは、かきもなほし候ひなん」と申されければ、人々ことばなし。心ある人は感涙をながしけり。はるかに承るも不覺の涙禁じがたしまして其座の人、さこそ感じ思ひ侍りけめ、かゝりし人にて、子孫いよ〱繁昌せり。情は人のためならず、道理誠に思ひ知れ侍り。故鎌倉大臣殿、御上洛あるべき定まりながら、世間の人々内々なげき申す子細聞こしめさるゝかにて、京上あるへしや否やの評定ありけるに、上の御氣色を恐れて、ことにあらはれて子細申す人なかりけるに、故筑後の入道知家、遲參す。古き人なり、異見申すべきよし御氣色ありければ「天竺に師子と申し候ふなるは、獸の王にて候なる故に、獸をなやまさむと思ふ心なしといへども、彼のほゆる音をきく獸、こと〱く肝心をうしなひ、或は命もたえ候と申し候へば、君は人を惱さんと思食す御心なしと雖も、民のなげき爭でか候はざらん」と申しければ、「御京上とまりぬ」と仰せ下

にあまらん事を思へといへり。人是をつゝしまずして、威勢にまかせて人を損じ、民をなやます。かゝる人は一期も保ち難く、子孫もかならず亡ぶ。今生もやすからず、來世も苦みあるべし。つゝしむべし〳〵。泰時の常に申されけるは、「貧しふして諂はざるはあれども、富んで驕らざるはなし」とて、我身は萬人に仰がれながら、人を敬ひ、世を恐れつゝしみて、二十年の間、世をたもち、天下おだやかなりき。民のわづらひを思ひて、遂に造作なかりけり。或時の物語に、御所へ參じたれば、「人の家の鰭板は內の見苦き事かくさんためなるに、泰時か家の鰭板は內まで見ゑとほれりとこそ、仰せありつれ」と、人々の中にて申されければ、次てを以て奉公せんと思へる人々、「御所の仰せの如く、誰々もかくこそ存じ候へ、大方は御用心のためにも築地につかれ堀ほられて候はんは、めでたく候ひなん。各一本づゝ築き候はんに、十日には過ぎ候はじ、やすきことに候。やがて此次にびし〳〵と御沙汰候べし」と、口々に申しければ、うちうなづきて、「各の御志の色は、かへす〳〵有難く覺え候。誠に御志あれば、御身には易くこそ思ひ給へども、國々より人夫ども上りて築かんこと、計りなきわづらひ大事にて候べ

にてありければ、用途馬鞍なんど沙汰し給びて、「いかに女は具して下るべきか」と問はる。「この二三年わびしき目みせて候つるに、具して下り候ひて、早く飯くはせてこそ、心は慰め候はんずれ」と申しければ、「いみじく思はれたり。なさけの色、かへす〳〵哀なり」とて、「女房の出立もせよ」とて、こま〳〵と馬鞍用途まで沙汰し給びけり。有難き賢人にて、萬人の父母たりし人なり。道理程に面白き物なしとて、人の道理を申すことあれば、涙をながし感じ申されけるとかや。書に云はく、「貧賤の知る人忘るべからず。糟糠の妻堂より下すべからず」といへり。貧しき時の知人を忘れ、妻をいやしく下さざれといへり。此の訴詔人の心、古人のをしへにかなへり。人の心は恩をわすれ慈なうのみこそ侍るに、返へす〳〵哀なりける心なるべし。『論語』に云はく、「貧ふして諂ふことなく、富みて驕ることなかれ」と。人の貧は常の事なり。たゞ心きよくして、つたなきわざをし諂ふべからず。また富らん人は驕るべからず。にはかに衰ふる事もあり。災難も來り病死の患もあり、富につけてはいよ〳〵謹むべし。非例をおこなひ、無道の振舞すべからず。やうやくに滿てばすなをに滿たんことを思ひ、やうやくにたゝへば器

しらせけり。かゝりけるほどに、いかなる子細かありけん、弟に跡をさながら讓りぬ。兄關東にて訴詔す。弟召されて對決す。兄嫡子なり奉公あり。申すところ道理あれども、弟讓文を手にゝぎりて申す上は、共に其のいはれあり。成敗しがたしとて、明法の家へたづねらる。法家に勘へ申していはく、「嫡子なり奉公ありといへども、父すでに弟に讓りぬ。子細あるにこそ。奉公は他人にとりての事なり。子として奉公は至孝のつとめ也。弟が申すところ道理なり。仍て弟安堵の下文給ふて下りぬ。泰時この兄を不便に思はれければ、「自然に闕所ばしもあらば、申しあつべし」とて、我内にをきて衣食の二事思ひあてられけり。名人なる女をかたらひて、あひすみけるが、彼女も貧しきものなりける事を、雜談の次に人々申し出でゝ、「あの殿の女房は頂に毛一つもなきとこそ承はれ」と云ふ。泰時いかにと問はる。「二人ながら貧しく候ほどに、下人は一人も候はず、われと水をくみ、いたゞき候ほどに、頭には毛一もなきとこそ承はれ」とて、人々わらひければ、「あはれなることにこそ」とて、うち涙ぐみて、事にふれて慈ありてぞ育まれける。さる程に本國に闕所ありける。父が跡よりも大なる所を、秋の毛の上へを給ひて下るべき

あからさまに立ち出でたるひまに、米を一ほう打ちくゝみて、食はんとするところに、妻かへりきたる。耻かしさに面うち赤めてゐたり。頬のはれて見え給へば、「いかに」と問へども、物もいはず、いよ〱面あかみければ、腫物の大事にて物もいはぬにやと思ひて、父母に告げゝれば、來りて「あれは、いかに〱」と問ふに、いよ〱耻かしさに、顔あかみけり。隣の者みな集りて、「聟殿の腫物の大事におはする。あさましき事かな」と訪らひけり。「いかさまにも大事の物にこそ」とて、醫師をよびて見すれば、「ゆゝしき大事の物なり、急ぎ癒治すべし」とて、大きなる火針にて、頬をやきやぶる。米ほろ〱とこぼれて、耻がましきこと限りなし。これは罪を發露懺悔せずして、かくしをきて焔魔の廳庭にして(一)倶生神の簡の文、(二)淨婆利鏡の影かくれなくして、(三)十王冥官の前にひきすゑられ、(四)阿防羅刹にしばられて、はぢがましきのみにあらず、地獄におちて大苦を受くるにたとふ。よく〱因果の道理を知りて、事理の懺悔を行ずべし。

同じき御代官の時、鎮西に父の跡を兄弟相論する事ありけり。父貧くして所領を賣りけるを、嫡子かしこきものにて貧しからぬまゝに、これを買うて還つて父に

(一)倶生神。一切衆につきまとひて晝夜をわかたず善惡二業を記録する男女二神をいふ。

(二)淨婆利鏡、すべて衆生の業をもれなく影すといふ鏡。

(三)十王冥官。冥府にあり十人の官人。秦廣王、初江王、宋帝王、五官王、閻魔王、變成王、太山王、平等王、都市王、五道轉輪王の稱、死者は七七日中、毎七日、百ケ日、一週三年忌に順次各王の許にて罪の聽斷をうくといふ。

(四)阿防羅刹。下方可畏鬼と譯す牛頭人首の地獄の鬼のこと。

(一)發露懺悔。つゝまず口にあらはして先非をあやまること。

領家の御代官の申さるゝところ、肝心と聞ゆるにしたがひて、陳狀なく敗け給へる事、返々いみじく聞え侍べり。正直の人にて御坐けり」とて、うち涙ぐみて感じ申されければ、笑ひつる人々、皆にがりてぞ見えける。さて領家の代官も、「日來は事の子細きゝほどき給はざりけり、ことさらの僻事はなかりけるにこそ」とて、敗けやうを感じて、六年の未進の物の三年は許してけり。わりなきなさけなり。是れこそ敗けたればこそかちたれの風情にて侍れ。されば人は道理をわきまへ、正直なるべき者なり。世間出世ともに正直なるは德あり。過を犯すものも道理を知り、正直にとがをのべて恐れ謹むは許さる。是非をしらず僻み、過をかくしてかだましきは、いよ〱しずむ事なり。『心地觀經』に云はく「若し罪を覆ふ者は罪即ち增長し、(一)發露懺悔すれば罪即ち消滅す」といへり。罪をかくすは、木の根に土を覆へばいよ〱木さかふ、懺悔するは、根をあらはせば木の枯るゝがごとしといへり。しかれば罪業の木を枯らさんと思はゞ、覆藏の土をおほふべからず。『百喩經』に云はく、「昔をろかなる男あり。人の聟になりてゆきぬ。さま〱にもてなせども、由ばみて、いと物もくはず、飢えて覺えけるまゝに、妻が

を聞きて謗を生じて地獄に墮するは、恒沙の佛を供養するよりも勝れたり」と云へり。謗じて地獄におつる、猶つひに種子となる。解脱の因たる故に、恒沙の佛を供養すとも(一)有漏の果をうくるは輪廻まぬかれず。須らく諸宗の旨みな同じき事を信じて、何の方便の門にもとりよりて、信解修行すべし。是非諍論を止め眞實の了義を達し、戲論の分別をすて般若の大智を開くべし。(二)傅大士いはく、「論ずるは義にあらず。義は論にあらず」。

二、忠言感ある事

下總の國の或地頭、領家の代官と相論の事ありて、鎌倉にて對決す。泰時の御代官の時なり。重々の訴陳の後、領家の方に肝心の道理を申し立てたる時、地頭手をはたと打ちて、泰時の方へ向ひて、「あら敗けや」といふ時、座席の人ども、「は」と笑ひける時、泰時はうちうなづきて、「いみじくまけ給ひぬるものかな、泰時御代官として、年久しく成敗仕るに、いまだ斯くのごとくのこと承はらず。あはれ敗けぬると聞こゆる人も、かなはぬものゆゑ、一言も陳じ申す習ひなるに、我とまけ給へる事めづらしく侍り。前の重々の訴陳は一往さもときこゆ。今

(一)有漏。漏は煩惱の異名煩惱のけがれあるを有漏といふ。

(二)傅大士。支那天台宗の信者。佛教のためにつくし慈善をなす。陳の大建元年寂。壽七十三。

（一）第一義諦。根本の明なる道理、諦は明なる理のこと。

へり。『大般若』には「一法の涅槃に過ぎたるものありとも、我れ說く幻の如し」と。『圓覺經』には、「非作の故にな無り、本性無なるが故に」と云へり。眞言の祖師一行禪師は「一切衆生の色心實相なり、本際よりこのかた、常にこれ毘盧遮那の平等智身なり。是れ菩提を得るとき、强いて諸法を空じて法界となさしむるにあらざるなり」と釋して、「一切衆生、本來空寂にして毘盧遮那法界の體なり。菩提を得るとき始めて空ずるにあらず」と云へり。されば空門を眞實の門とし、一心を萬法の源として、いづれの佛法も修行すべし。是れ斷滅の空にあらず、惡取の空にあらず、偏少の空にあらず、住相の空にあらず。これ（一）第一義諦の眞空なり。かやうになずらへて思へば、癲狂人が利口自づから無窮の義理をふくめり。一隅をあぐるに三隅をもつて反する。先賢のほむるところなり。心をとゞめて佛祖の本意を得べし。佛法の大綱を心得、修行の肝心をしらしめんために、宗々のはし〴〵聞き及ぶ所、すこしき書き付け侍べり。才學がましき風情、智人の前にはゞかりありといへども、固より愚なる人に大乘の法門の大綱を信ぜしめんとなり。もし結緣の益もあらば、大乘の種子とならんと思ふばかりなり。經にいはく「法

直に我等が日用の見聞覺知の、凡に在りても減ぜず、聖に居しても增せず、靈々として不昧、了々として常に知なる自性清淨の處を示して、本來の面目とも、本地の風光とも云へり。此處を見ん時は、見ざればこそ見たれ、見たらば見ざらまし、かしこくぞ見ざりける、興に見ざるらうにと云ふべし。上にいへる(一)顯密禪教の大意、一心をあきらめ眞空をさとらしむ。方便をすてゝ實理を達せば異なるべからず。大珠和尚のいはく、「迷へるときは人、法を逐ひ、悟りやみぬれば法人による、森羅萬像は空に至りて極まり、百川衆流は海に至りて極まり、一切賢聖は佛に至りて極まり、(二)十二部經、(三)五部毘尼、(四)四圍陀論は心に至つて極まる心はこれ惣持の都院、萬法の源。またこれ大智慧の藏、無住涅槃なり。百千の名號はみなこれ心の異名なり」云々。一代の教門空を明らむるを大體とす。然るに教學の人禪門をば空に落つと思へり。これ教門にくらき故なり。『法華』には「如來の智はこれ一相一味の法、謂ゆる解脫相、離相、滅相、究竟涅槃、常寂滅相、終ひに空に歸す」と說き、また「諸法は空を座となす」といひ、「一切諸法は空にして所有なし」といへり。『涅槃經』には迦毘羅城も空なり、大涅槃も空なり」と云

(一)顯密禪教。顯教秘密教不立文字の禪門、立文字の教門。

(二)十二部經、說法の體裁に十二通りあるをいふ。長行說、重頌說、授記說、孤起說、無問自說、因緣說、譬喩說、本事說、本生說、方廣說、未曾有說、論議說。

(三)五部毘尼。毘尼は律をいふ。四分律、十誦律、解脫律、五分律、僧祇律の五部の律書。

(四)四圍陀論。印度古代の神話書を圍陀、または吠陀といふ。これに梨倶、僕馬、耶柔、阿他婆の四種あるをいふ。

(一)荷澤。神會といふ。支那の禪僧六祖慧能の弟子なり。上元元年七十五にて寂す。
(二)摩訶般若。大智慧と譯する。
(三)無住の心。執着なき心。
(四)無漏。前出。

たれども、念相をかつて心體をあきらむ。禪門の直示にことなり。諸教は暫く曲げて機情にしたがふ。禪門は單傳密印、不立文字の方便なれば、初より知解情量をゆるさずして、上々の機を接す。これを直示の方便といふ。是の故に見性成佛といふもの教の談には性を見て佛と成ると心得て、能觀の智をもて所觀の性を見、凡夫の情をあらためて佛身を得べしと心得つべし。然るに、たゞこれ見性もと成佛なる心地をふみゑて、無心無染の工夫をなす。この門の方便なり。古德の云はく、「無門は解脱の門、無意は道人の意」と。眞實の道體はたゞ佛知見なれば、一心の妙體禪教これ同なり。この故に(一)荷澤のいはく、「我れこの禪門一乘の妙旨は無念を以て宗となし、無住を本となし、眞空を體となし、妙有を用となす。妙有は即ち(二)摩訶般若、眞空は即ち清淨涅槃、般若は見ること無くして能く涅槃を見る、生ずること無くして能く般若を生ず。西天の諸祖ともに(三)無住の心を傳へ同じく如來の知見を説くを『首楞嚴經』に説かく、知見に知を立つる、即ち無明の本、知見に見なき、これ即ち涅槃(四)無漏の眞性なり。達磨大師のいはく、一法を見ざるを名けて見道となす、一物を行ぜざるを、名けて行道となす」と。佛祖の言は、

「菩提といふは淨法界と名く、無覺了と名く」と。然れば眞言教の無相の菩提心を發し、自心是佛の悟を開くすがた、たゞ(一)阿字の本不生の義理に相應する位なり。この不生の心地を覺すといふは、自心即菩提一切の智々なる時、知解の心もなく、開曉の相もなき時なり。もし知解のものあらば自心にそむく。能所分別は虚妄の相なる故に。もし始めて覺る心あらば本不生にあらず。始終有無は無常の法なるがゆゑに。このゆゑ實には覺もなく成ぬなしと云へり。此心をもて眞言の無相の觀成ぜん時は、覺せねばこそ覺すれ、覺せましかば覺せじ。かしこくぞ覺せぬ、與に覺せざらんと云ふべけれ。また(二)禪門には、(三)直指人身見性成佛といひて、釋尊言說の方便をもつて、一代の教門を說き終りて、事をへて最後に、「我に正法眼藏涅槃の妙心あり。汝にさづく」とて、(四)迦葉に付屬し、西天の二十八祖相傳し、(五)達磨大師、梁朝に漢土に渡りて初祖として第六祖(六)惠能大師に至るまで、衣を傳へて法の信とす。其の後法をうる人、寰海にあまねしといへり。此宗の方便、文字を立せず義理を存せず、直に本性をしめし、正しく自心を印す。諸教は(七)惣持は文字なけれども、文字によせて惣持をあらはし、心體は念相を離れ

(一)阿字本不生。阿は一切の言語の根本にして、これに本不生の義ありといふ。本不生とは萬有が本來不生不滅なることをいふ。

(二)禪門。禪宗の法門。

(三)直指人身見性成佛。直に人身を指し性を見て佛となると讀む。

(四)迦葉。摩迦迦葉をいふ。釋尊の十大弟子の一人にて上行第一と呼ばる。釋尊教團の上首なり。

(五)達磨大師。支那禪宗の開祖。印度の人、梁の世に支那に來り、大通二年寂す。

(六)惠能大師。支那禪宗の第六祖。先天元年七十六にて寂す。

(七)惣持。教を總べ持つところの言葉。經文陀羅尼等をいふ。

るところに非ず」といへり。外に證文を尋ぬべからず。これ佛の知見なり。能所なきゆへに一靈の性しるべからず。されば「唯この一事のみ實なり。餘の二は則ち眞にあらず」と云へり。『智論』に云はく、「念想觀すでに除いて(一)戯論の心寂滅す。無量の衆罪除いて清淨の心常一なり」と云へり。念想はみな虛妄なり、戯論なり。たゞ明靜の止觀をもつて(二)寂照の理智を緣ず。境も(三)如々なり、智も如々なり如をもつて如を緣ず。水を水に入れ、金を金にかふるがごとし。實には照す事もなく緣ずる事もなし。日月の萬物を照し、明鏡の衆色をうつすが如し。あに心ありて照し、念ありてうかべんや。是れすなはち天台の觀心の用意なり。然れば圓頓の觀心相應の時は、緣ぜねばこそ緣ずれ、緣ぜましかば緣せじ。かしこくぞ緣ぜぬ。興に緣ぜざらんといふべし。また眞言敎の修行の大意を談ずるには、自心即ち菩提なり。經には「知解の者もなく、開曉の相もなし」と云へり。一行禪師の釋にいはく、「自心をさとるを云へば本よりこのかた不生即ちこれ成佛にして、實には覺もなく成もなき也」と。またいはく、「この乘に住する者は初發心のとき即ち正覺を成ず、生死を動ぜずして而も涅槃に至る」と。『菩提心論』にいはく、

(一)戯論。無駄なる議論。
(二)寂照の理智。寂靜の眞理と明照の智慧。
(三)如々。口に云ふべからざる眞如そのもの。

の記をえたり」と。されば釋尊むかし菩提の記を得給へる事を、我國の詞に、やはらげてとき給はましかば、得ざればこそえたれ、得たらば得ざらまし、かしこくぞ得たりし、興にえざるらうにとぞ說き給はまし。また天台(一)智者大師、『摩訶止觀』を說きて、(二)圓頓行者の觀心の用意を敎へ給ふには、「初より(三)實相を緣じ(四)一念三千の觀を凝して、(五)色香中道の理を達する故に、無緣の智をもつて無相の境を緣ず」と釋し給へり。常住の妙境は無相寂然なり。此の妙境に相應ずる觀智かならず無心無緣なるべし。然れば古人の云はく、「道は無心にして人に合ひ、人は無心にして道に合ふ」と。夫れ妙といふは不可思議に名く。思はるべく議べくは、かならず麁なり。妙にあらじ。故に『大智論』にいはく、「不可思議また不可思議なる、誰か信受せん者ぞ。久しく發心する者、乃ちよく信受す。いかなるをか久しとなす。一切の法に於いて分別を生ぜざるを名けて久しと爲す」といへり。また地藏菩薩の『進趣大乘經』に云はく、「然も彼の法身は是れ無分別離念の法なり。たゞ能く虛妄の識想を滅して念を起さゞる者のみありて、乃ち得べき所」といへり。況や法華の正體をあらはす文に、すでに「是の法は思量分別の能く解す

(七)當作佛、當に佛となるべしといふこと。

(一)智者大師、支那天台宗の開祖。隋の煬帝に尊信せらる。開皇十七年、六十にて寂す。有名なる天台三大部はこの人が「法華經」によりて造るところ。

(二)圓頓行者。天台宗の行者。

(三)實相。萬物ありのまゝの本性のすがた。

(四)一念三千。ひとおもひのうちに三千ノ諸法を具ふといふこと。三千とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天、聲聞、緣覺、菩薩、佛のあらゆるもの、即ち世界萬物をいふ。

(五)色香中道。一色一香中道にあらざることなしといふ眞理。中道とは執着なき眞理をいふ。

唯識に住するに非ず。若し時々所緣智に於て都べて所得なくんば、そのとき唯識に住す。二取の相を離るゝが故に」といへり。文の意は心に分別して、これこそ唯識の性とし念あらば有所得なり。眞如の理にあらず。もし智にすべて所得なく、智の外に境なく、境の外に智なくして、智と眞如と平等、平等にして空と光と隔なきがごとく、(一)能取所取の(二)度量絕え、能緣所緣の觀智亡ぜん時、實に唯識の性に住すべしと見えたり。まさしくは(三)初地見道の位なりといへども、觀行の人初より、(四)癈詮の觀を心にかけて勝義の理に相應すべしといへり。笠置の(五)解脫上人の『觀誘同法の記』には、「慮を忘れ念をやめて外に向つて求めず、無念の念はこれ絕妄の利劍、不觀の觀は則ち見眞の明眼なり。機あり時ありて忽然として一念不生を悟解するを則ち名けて佛となす」と。されば唯識觀成就せん時は住せねばこそ住すれ、住したらば住せじ、かしこくぞ住せぬ、興に住せざらんと云べふし。また『金剛經』に釋迦大師、むかし菩薩の行を行じて、燃燈佛の(六)記をうけ給ひし事を說いてのたまはく、「我れ菩提において小分も所得なし。若し所得あらましかば、燃燈佛我に記をさづけ給はじ、所得なかりし時、(七)當作佛

て得る智慧。
(一〇)天親。世親ともいふ。紀元三世紀頃の印度の學僧、佛教唯心論の主張者。
(一)有所得。得る所有り云ふことにて心に執着する何物かがあること。
(一)能所。能くするものとせらるゝものとをいふ。
(二)度量。思ひはかること。
(三)初地見道、菩薩の初地の位に入り初めて眞理の一分を見るときをいふ。
(四)癈詮。すべて口や心にあらはすことをやめること。口や心にあらはせば、眞理そのものにあらざればなり。
(五)解脫上人、前出。
(六)記。佛が修行者に對し、汝は將來何佛になるべしと豫言せらるゝこと。

三性の法門を立つ、偏計、依他、圓成なり(一)偏計所執といふは、依他の因緣和合の假なる相に、(二)實我實法の情をおこす時、情にあたつて現ずる六趣四生の形これなり、愚夫顚倒して煩惱をおこし、業をつくり、苦をうくる事、ひとへに偏計妄情のとがなり。(三)依他といふは、一切衆生に(四)八識あり。其中の第八阿賴耶藏識諸法の(五)種子盡く具足して、因緣假に和合すれば、非有にして有に似たる(六)染淨の諸法なり。水月鏡像の如し。(七)圓成實性と云ふは、眞如の妙理、諸法の實性なり。たとへば麻をもつて繩とす、繩に於いて蛇の思ひをなせば、蛇のいきほひ現ずる、偏計所執の如し。これは情のみありてその理なし。繩の上に蛇の體用かつてなきが如し。繩の相かりにあるは依他の假なるがごとし。たゞ麻のみ實の體あるは圓成の理のごとし。偏計は情はあり理はなし、唯識觀の所詮は、偏計の妄情を遣つて、依圓の性相を觀ず。(八)正體智は圓成の理を證し、(九)後得智は依他の相を照す。無分別の正智は自證、後得智は大悲化他なり。是の故に偏計の能執所執の情塵を遣つて、如理如量の依圓の境界を存ずるを、觀心の大體とす。(一〇)天親の頌に曰はく、「現前に少物に立つ、是れを唯識性といふ。(一一)有所得によるが故に、實に

(一)遍計所執性。遍計に執着せらるゝものゝ妄情にて無きものを有りと見らるゝもの。
(二)實我實法。一切は因緣やむとき破壞せらるゝにも係らず、實に我あり實に物ありと執着すること。
(三)依他起性。他の因緣に依りて生起せる性質のもの一切萬有はみなこれなり。
(四)八識。眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識、末那識、阿賴耶識。
(五)種子。萬物の原因となるもの法相宗は唯心論を主張するゆゑ萬物みな心内に因ありといふ。
(六)染淨。けがれたるものと淸きもの。
(七)圓成實性。圓なる眞如そのものを云ふ。
(八)正體智。先天の智慧。
(九)後得智。後天的に修行により

去り、面々の業にまかせて品々の果をうけむ時は、我も人を知らず、人も我をしらず。山野の獸と生まれ江海の鱗となりなば、互に殺し食して、昔の情も恩もしるべからず。然れば眞實の菩提心を發し、父母妻子の情を捨て、山林閑靜の居をしめ、善友にちかづき正法をきゝ、眞正に信解し、(一)如說に修行して、生死をはなれ、淨土に生じ、(二)無生を證し神通をえて、種々の方便を以て先づ有緣の父母妻子等を敎化し引導して、一佛淨土の快樂をうけ、無爲自然の果報をえて、生老病死の苦もなく、(三)愛別離苦の憂もなき、常住不退の(四)無漏の佛國に住して、常に十方の佛に事へ、あまねく(五)六趣の生を利せん時は、昔すてゝ今あへる事を思ひつゞけて、かくこそ申しつべけれ。離れたればこそ離れね、はなれずは離れなまじ、かしこくぞ離れける。興に離るらうに。西行法師、(六)初發心のとき最愛のいとけなき娘の、とりつきたりしを、緣よりけおとして、遁世して後心づよく捨てたりける由を詠みしも、此心にこそ。

　世を捨つる捨つる我身はすつるかは、すてぬ人をぞ捨つるとはみる。

此心をもつてなずらへて、諸宗の修行法門の肝要を心得べきをや。法相宗には

(一)如說、佛說の如く守ること。
(二)無生、生も滅もなき眞正のさとり。
(三)愛別離苦。愛するものに別離する苦み。
(四)無漏。漏とは膿血の如くもれ出づる煩惱のこと。煩惱なきを無漏といふ。
(五)六趣。前出。
(六)初發心。前出。

父子あひ見て常に喜ぶに非るべし

誠に佛道に入る因緣、善知識にすぎたるはなし。父母妻子は心にかなふ時は愛習をまし、心にそむく時は怨心をおこす。兎に角に輪廻の業をのみ重ぬ。善知識となる事まれなり。さて遂に業にまかせて惡道に入り、毛をき角をいたゞく畜類となりなば、昔の恩も情も互に知るべからず。たま〳〵人身をうけて要法を聞く。娑婆の他の鄕をすてゝ、彌陀の本國に歸るべしと勸め給へり。父母妻子なつかしく、傍ひたくば眞の道に入るべし。「恩を捨てゝ無爲に入るを眞實の報恩の者」と云へり。(一)悉達太子、金輪の位をすてゝ檀特山へ入り、車匿を王宮へ返し給ひし時、(二)車匿泣く〳〵申さく、「深宮に長なり、萬人にあふがれまし〳〵き。かゝる深山にたゞ一人は、いかでか栖せ給ふべき。事へ奉るべし」と申しゝかども、「生死の習ひ獨り生まれ、ひとり去る。中間に何ぞ必らずしも人と伴なはん。我れ(三)無上道をえたらん時、一切衆生を伴とすべし」とて、王宮へ歸し給ひき。果して(四)三界の獨尊となり、四生の群類を導き給ひき。まことに生老病死の國、衆苦充滿の界、すこしきの前後あれども、傍ひはつべきにあらず。夢のごとくして死し

(一)悉多太子。悉多は梵語、一切義成と譯す。釋尊の太子たりし時の名

(二)車匿。樂欲と譯す。もと太子の御者なりしが後佛弟子となる。

(三)無上道、この上なき道、佛のさとり。

(四)三界。欲界、色界、無色界とて迷界の全體をいふ。

路をわたり假なる一身を養はんとして、身をくるしめ心をいたましむ。或はさせる恩もなく、又あるかひもなき事もあり。また大なる恩あれば、煩ひ大に營みしげく、身あやうき事おほし。上に仕へ下を顧み、静なる心なく、易き時なし。此世のたのしみ無きのみにあらず、暇なく、ひまなければ、出離の勤もなしがたく(一)道行の志も忘れやすし。名利は身をたすけんためと思ふばかりにて、名利の身をくるしむる事を知らず。是れを悲しき事どもわきまへず、唯かゝるべき習とのみ思ひなれたり。返す〴〵も愚かなり。勝軍論師の言、肝にそみてぞ覺え侍る。誠に佛道を行はんと思はん人、世間の妄縁をいとひ、菩提の知識に近づくべし。この故に(二)善導和尚の『般舟讃』に曰はく。

普く同行知識等に勸むべし　同行あひ親みて相離るゝことなかれ
父母妻兒百千萬あらんも　是れ(三)菩提の(四)増上縁にあらず
念々あひ纏ひて惡道に入らしむ　(五)分身受報すれば相知らず
或は猪羊六畜の内にありて　毛を披角を戴いて何れの時か了らん
慶に人身を得て要法を聞く　頓に他の家を捨てゝ本國に歸れ

(一)道行。佛道の修行。
(二)善導和尚。前出。
(三)菩提。前出。
(四)増上縁。前出。
(五)分身受報。死して互に別れ〴〵に果報を受けること。

(一)出離。迷の世界を出で、苦を離るゝこと。

(二)玄弉三藏。唐の譯經僧。二十九歲、艱難を排して印度に入り、經卷を求めて歸り、諸僧を督して、七十五部千三百三十卷の經を譯す。麟德元年六十五にて寂す。

(三)内典外典。佛教内の書と以外の書籍と。

將として、しきりに勳功ありけれども、年四十にして出家して山の中に行ひけり。昔の友達二人、尋ねゆきて、「郎將狂せりや、何としてこゝに御坐るぞ」と云ひける返事に、「我が狂は醒めなんとす、汝が狂はまさしく起れり。色にそみ聲を愛し、榮にほこり寵をたのむは、生死に流轉す。何によりてか(一)出離せん」と云ひければ二人感歎して去りぬ。佛法をしらず、因果をわきまへぬこそ、狂せる人なれ。眞實の道に入るを狂せりと思はんや。天竺の勝軍論師は、戒賢三藏の弟子、(二)玄弉三藏の師匠なり。天文地理、(三)内典外典、大小の教門に明かなりけり。俗ながら世をのがれて杖林山と云ふ所に籠り居て、勤め行ひけり。戒日大王召して、國の師とせんとて、十八の大なる縣を賜ひけれども、かたく辭してまゐらず。强て召されけれども、「人の祿を受けぬれば、人の事を憂ふ。生死の身に纒縈を斷たんと思ふ務あり。なにの暇ありてか、君に事へまつらん」と申しければ召されず。實に人の恩を蒙りぬれば、人の身となりて自在ならず。その人にしたがはねば、恩を知らぬ者なり。其とが遁れがたし。さるまゝに歎きも煩ひも、人の事を我身に受けつゝ、我身のもとの煩ひの上に、又かさねて苦しき事を受けとる。僅の世

(一)經。『大無量壽經』
(二)活命。生活。
(三)三十二相。佛の身體の上にある三十二の勝れたる相。
(四)釋子。釋迦の弟子。
(五)無爲。涅槃のさとり。心身の勞作を離れたるゆゑ無爲といふ。

無盡の食あり、廣大の家あり。寺舍はみな我が家なり。田園はこと〳〵く我食なり。家ある時は四海我が家にあらず、田ある時は諸國我が分にあたらず。さればこれこそ、云はゞ、家なければこそ家あれ、家あらば家あらじ、かしこくぞ家なき、興に家なかるらうにと云つべけれ。(一)經には「家あるものは家を愁へ、田ある者は田を愁ふ。牛馬六畜これなければ、なき事を憂へ、あれば養ひ守ることを憂ふあるに付けてもうれへ無きに付けてもうれふ」と說けり。出家は煩ひなく愁すくなし、頭陀を行ずれば、世間にはいやしき業と思へり。佛法のうちには淸淨の(二)活命也。(三)三十二相の中の無見頂の因は乞食也。釋尊の三界の獨尊たる、すでに其の跡を示す。(四)釋子として彼の風を學ばざらんや。世間の人のをろかなる心、父母、妻子、朋友、眷屬に、常にはなれずして、遊びたはふれて樂まんとのみ思へども無常の殺鬼、貴賤をえらばず、別離の魔賊、老少を論ぜざる習ひなれば、事と心とたがひ、樂と苦と伴ふなり。されば恩愛の繫をたち、(五)無爲の家にすまんと思ひて俗塵をすてゝ、道門に入るべきに、實の道に入る人をば、愚なる類は、ものくるはしく、をこがましき事にのみ思へり。唐に智嚴禪師と云ひし人は、武德年中に郞

山寺法師に此の物語をせしかば、「我身にもこれに似たること侍り。師匠の代官に、或る地頭の許にゆきて、師匠にて候老僧、下人の沙汰仕り候事の仔細承るに、由緒ありて召仕はるべき者也。此の沙汰やめられ候へと、弟子ども申し候へども、老いひがみて、くねり腹たちて用ひず候間、かの心をすかさんために參りて候。老僧が僻事にて候。仰せのをもむき、其の謂ある事にて候へば、しか〱の仰せ也と申しきかせて、すかしこしらへ候べし。これまでも申し入れ候事、恐れ入りたるよし、御披露候へとて、我と問注にまけて歸りしを、この僧は物に心えたる者也。誠に道理はなけれども、御房のいはるゝところ感じ思へば、御房に此の下人は奉るとて、彼の下人を給ひしを、再三辭し申し侍りしかども、請取て歸り侍りき。これこそ云はゞ、敗けたればこそ勝ちたれ、勝ちたらば敗けなまし。かしこくぞ敗けてける。興に敗くらうにと申すべけれ」とて、一座の比興にて侍りき。

彼の僧學生にて、世間出世存知ある僧なりき。戒律の門に、出家の人の事をいへるには、居家をすて親里をはなれて、庄園田畠、奴婢六畜をたくはへず、(一)三衣一鉢を身にしたがへ、四海をもつて家とし、百姓の門に立ちて(二)頭陀を行ずれば

(一)三衣一鉢、三衣は前出す。一鉢は一食を容るる鉢、應量器といふ。(二)頭陀。修治と譯する梵語。修行と同義なり。乞食修行すること。

沙石集巻第三

一、癲狂人の利口の事

或里に癲狂の病ある男ありけり。此病は、火の邊、水の邊、人の多かる中にして發る。心うき病也。俗はくつちと云へり。或時大河の岸にして、例の病おこりて河へおち入りぬ。水の上にうかびて、はるかに流れ行いて、河中の洲崎に押しあげられぬとばかりありて、よみかへりて、こは如何にして、かゝる所にあるにやと思ひめぐらす程に、例の病によりて、河へ落ち入りにけり、あぶなかりける命かなと、淺猿しく覺えて、獨言に「死にたればこそ生きたれ、生きたらば死になまし。かしこくして死してんける。興に死ぬらふに」とぞ云ひける。まことに大河の流れ疾く、底深かりければ、息絶えずば、沈みて死なまし、息絶えれば浮ぶ事にてこそ、かく助かりぬる事を云ひけるにこそ、いみじき利口なり。此の事は、ひろく(一)世間出世に渡りて佛法の義理までも、なずらへ心えつべし。或る

(一)世間出世間、迷の世の中と、これを出でゝ悟ることをいふ。

〳〵來り、異國きそひて境を犯すべし」と說けり。されば經は失あれども德を見るに、十に一二も德あれば、これを捨てず。たとひ(一)惡趣におつといへども、遠く菩提を得べき因を見る故なり。不輕々毀の衆の如し。これを毒鼓の緣といへり。毒鼓の緣といふは、鼓に毒をぬりて、これをうつに、聲の聞ゆる所の衆生、命を失ふ。法音の無明惡業のため毒として亡ぶるにたとへたり。菩薩の論藏のみ、得失の多少、罪福の輕重を判ぜり。是の故に律に制すとも、結緣のむなしからざる事を信じて、善緣をわすれざれ。經にすゝむとも、罪障のまじはらん事を察して、福業にをごらずして、過をつゝしみて、(二)無相の善因を志すべし。此の分別はたゞ智慧をもつて輕をすて、重に付き、失を遠ざかり、德をしたひ、佛道に入る方便をわきまふべし。みだりにあやまるべかず。これは先達の口傳、聖教の大意なり。ゆめ〳〵忘るゝ事なかれ。是れ(三)三學をあきらむる明眼、五藏をさとる智鍵也。

沙石集卷第二終

(一)惡趣。三惡道をいふ。

(二)無相の善因。平等の見地に立ち、善をなすといふ思ひを離れて行ふ善根。

(三)三學五藏。前出。

を制して徳をゆるさず。これ佛法を興隆し、また早く道果を得しめん爲なり。經の中には、たとひ失あれども、遠き益を見て機にのぞみて之をすゝむ。『十輪經』の中には、「破戒の比丘の盲目ならん、妻に手ひかれ、子をいだいて、酒の家より酒の家へいたらんをも、舍利弗、目連のごとく、敬はゞ、福をうべし」と說く。同經には、(一)「瞻蔔華は萎めりといへども、なほ餘華にすぐれたり。破戒の比丘は外道にすぐれたり」といへり。『心地觀經』には「破戒なれども正見の物は、國の(二)福田なり」といへり。持戒なれども、惡見のものは惡知識とみえたり。『悲華經』等にも、「袈裟をかくるほどの者は、かならず解脫すべし」と云へり。或る女人たはふれに袈裟をかけし因緣に、破戒の比丘尼となり、其の因緣つゐに羅漢の果を得ると說けり。また醉の中に出家の心をおこし、遂に(三)如法出家の緣となるといへり。『大集經』には重々の寶にたとへて、「金銀等のなき時は、白錫まで寶とす、得道の人なく、乃至、持戒破戒なき時は、たゞ髮を剃り袈裟の片端をもきて、僧の形ならんをば供養すべし。繫縛し殺害すべからず。たとひ犯罪ありとも、法により寺をいだすべし。若し王臣これを繫縛し殺害せば、賢聖、國を去り災難しば

(一)瞻蔔華。黃華と譯す。印度の海岸にある高樹の花の一種。

(二)福田。田に種を下せば稻を得る如く、佛僧に供養すれば福を得る故に佛僧を福田といふ。

(三)如法出家。佛法の敎にかなふたる眞面目な僧。

(一)婆羅門ありて人の髑髏をうる。此をかふ人銅の箸をもつて耳の穴を貫して、深きには値を多くあたへ、淺きには少しあたへ、すべて貫らずには、あたへず。其の故をとへば、昔法を聞ける人の耳は穴深し。すこしき聞けるは淺さし。すべて聞かざるは穴とをらずといへり。さて聞法の人の髑髏をかひて、塔を立て供養せしかば天に生じたり。況んや自から法をきゝ、信解し修行せんをや。されば『善住天子經』に云はく「法を聞いて謗を生じ地獄に墮するは、恒沙の佛を供養するに勝れり」と。凡そ佛法の中に結緣を論ずると、現益を說くと、其のいひ、はるかにことなり。教門ひろしといへども、經律論の三藏にすぎず。經は定を詮し、律は戒を說く。論は慧をあきらむ。然るに律は威儀を本とし、現益を宗とし、譏嫌を悟り、違犯を制する故に、たとひ其德あれども失を雜ふればこれを制す。十に一二も失あればいましむ。(二)邪命の財をもつて佛を造るをば、清淨の比丘は禮すべからずといへり。『涅槃經』は律をたすけて制門きびしき故に、破戒の比丘(三)不淨の財を蓄ふるをば、たとひ知らざれども供養する人なを地獄に入る。清淨の比丘は、一河の水をも飲むべからずといへり。律藏のいましめ大意少しきの失も、是れ

(一)婆羅門。婆羅門教の行者。

(二)邪命。道ならぬ行により命をつなぐこと。

(三)不淨の財。佛法にそむいて得る財產。法を賣りなどして得たる金品

て大聖の(一)化儀をうたがはざれ。

一〇、佛法の結緣空しからざる事

高野に南證房の(二)檢校寬海といふ人は、近きころの密宗の明匠と聞えき。先生の事を知りたく思ひて、(三)大師に祈念するに、七生の事をしめし給ふ。初は天王寺の西の海に、小さき蛤にてありしが、自然に波に打ちよせられて濱にありしを、少き者これを取りて、金堂の前にもちてゆく。經、陀羅尼の聲を聞きし故に、牛に生る。『大般若』の料紙をおふせたりし故に馬に生まる。熊野詣の者のりて參詣せし故に、柴燈たく者と生まれ、常に火の光を以て人をてらす故に、智慧の業やうやく熏じて奧院の承仕と生まれ、三密の行法を常に耳にふれ目に見る熏習の故に、いま檢校と生まれたりと示めし給ひけり。此の事を聞くには佛法の結緣たのもしくこそ。律の中にも在世に蛤、池の中よりいでゝ佛の法を說き給ふを、草の根にまとはりて聞く時に、牛を牧ふ人知ずして杖の端にてさし殺しつ。聞法の因緣によりて、忉利天に生まれて神通をもつて、すなはち諸天と共に佛所に詣す。佛、蛤天の因緣を說き給ふに、諸天と共に法を聞きて(四)初果を得。また天竺に

(一)化儀。化導の儀式。化益の形式。

(二)檢校　檢知校量の義。一山の事務を監督する僧職の名。

(三)大師。弘法大師。

(四)初果。前出。

の性なくばまた現ずべからず。此の如く佛性あるといへども、佛菩薩の慈悲方便無くば現はるべからず。大願大悲有といふとも、佛性なく自善なくば、また成佛すべからず。この因緣天然の道理、經論の中に見えたり。然れば內には(一)眞如佛性もとよりある事を信じ、外には佛菩薩の慈悲願力の妙なる事をたのみて、增上緣として惡趣を出で(二)淨刹に生じ、凡身を改め佛身を得べきなり。增上の勝緣、尤もたのむべし。さかりなる火の中には、生しき木も猶もゆるが如く、佛法のさかりなる寺なんどには、初たる出家の者も(三)勤行し精進す。これ緣の強さによる。たゞし、寺をいでゝ其の善緣を遠ざかれば、佛法の氣分なし。生しき木の燃ゆるやうなれども、引き出だせば、やがて消ゆるが如し。これ內の火の用よはき故也。たび〳〵になれば、やう〳〵枯れ乾はく。しゐても善緣に近づくべし、(四)宿習となるべし。若し宿善ある人は、善緣をされども佛法をすてず、枯たる木のひきいだして後も猶もゆるがごとし。これを以て機の生熟と、感應の遲速との間を心得て、みだりに佛菩薩の悲願を疑ふべからず。たゞ罪障の水を乾して悲願の火を待つべし。自善の力もしあらば(五)聖應の益うたがひなし。よく〳〵信心を堅固にし

(一)眞如佛性。一切萬有に行き渡りて其の本性となれる第一義的の理性を眞如といひ、この眞如は佛となるべき可能性を有する故佛性ともいふ。
(二)淨刹。刹は梵語、國と譯す。淨刹は淨土に同じ。
(三)勤行精進。勤め修行をはげみ進むこと。
(四)宿習。古き習慣。
(五)聖應。佛が衆生に應じて利益を垂れ給ふこと。

同じく眞性なれば、願即苦、苦即願なるを代といふ。七には法界を身として自他異ならざれば、衆生の苦卽ち菩薩の苦なるを代りて受くといへり。此の中に餘は義勢意樂法門なり。まさしくは第二の增上緣と、四と五と、代受苦の益あるべし。これについて、感應の有無、利益の遲速、其の道理を心得べし。喩をもつていはゞ、衆生の機根は木のごとし。菩薩の慈悲は火に似たり。火をもつて薪を燃く。外の火は增上緣のごとし。木の中の火をおこす力あり。この緣ばかりにて、若し木の中の火をまたずば、枯たるも生しきも燃くこと同じかるべし。然るに中の火をまつ故に、遲速同じからず。これが如く佛菩薩の慈悲願力は、衆生に平等に蒙らしむるども、衆生の機なましき時は感應なし。生しといふは、罪障の水の氣ありて、慈悲の應火つく事なし。信心のうすく智解の發せざる事、これ生しきすがたなり。生しき木に火のつかざるが如し。若し信解まことあれば、感應むなしからず、枯たる木の火のつきやすきが如し。衆生の心中に佛性あるは、木の中の火の性の如し。漸く乾くは善根の生ずるが如し。佛菩薩の願力は、外より來る火の如し。木の中に火の性あるといふとも、方便なければ現はれず。火の緣ありといふとも火

(一)無間の業。無間地獄に墮つべき業報。
(二)初發心。初めて佛道修行を思ひ立つた心。
(三)齋戒。心身を清め戒律を持つこと。

し此の緣なくば、衆生の自善根ありとも其力よわし。又菩薩の慈悲深しといふとも、衆生の善根なくば加すべき所なし。月明なれども、濁さふれば水にうかばず。日暖かなれども、雲へだつれば霜きえざるがごとし。これ天然の道理也。世間の事をもてもしりぬべし。三には惑をとゞめて苦を受くる身となり、物のために法を說いて思行をやむ。業因亡ずれば苦果ほろぶるを代りて苦を受くといふ。これ其の道理也。說法は(一)無間の業を轉ずといへり。四には衆生の無間の業を造らんとするを見て、彼れが命を斷つて自ら代りて地獄に入るがごとき也。これまさしく代りてうくる事也。五には(二)初發心より常に惡道に處し、乃至飢餓の世に身大魚となりて、衆生のために食せらる。釋尊の昔し大蛇となりて(三)齋戒を受けて晝ねぶる時に、金色の文現ずるによりて、獵師これをはがんとす。眠さめて毒をはいて害せんと思ふ。又思惟すらく、「今日齋戒をうく、人を害すべからず」。よつて苦を忍びて皮をはがる。蟲おほく吸ひ食ふに、願をおこしていはく、「我を食せん衆生、こと〳〵く未來に度せん」と。さて命終りて遂にこの因緣をもつてこと〳〵くかの蟲を度すといへり。此れ則ち代て苦を受くる也。六には願も、苦も、みな

（一）増上縁。ものゝ力を増さしむる助縁。
（二）宿願。昔の願望。

云へり。二には諸の苦行を修して、物のために(一)増上縁となるを代ると云ふ。慈善根の力、衆生の信心に加して、代りて苦をうけ法をとき、若しは來迎すと見る。みな法身は無相なれども、(二)宿願にこたへて衆生の善根熟すれば、彼の識の上に感得して利益あり。これを増上縁といへり。衆生の微少の善根を助けて苦をぬき樂をあたふ。『涅槃經』の中に見えたり。在世に女人ありて僧を信じ供養す。僧ありて重病をうく。肉を藥に用ゆべき病なるに、すべて世間にえがたし。よつて女人自の股の肉をさきて、あたへ服せしむるに、僧の病いえぬ。女人苦痛忍びがたくして、南無佛陀〳〵と唱へて、信心を致す時、釋尊來りて藥を付け給ふに、痛やみぬ。又法を說き給ふを聞きて道を悟る。ついで佛所に詣して此の事を佛に申す。佛言く、「我かつてゆかず、藥を付け法を說くこと無し。只わが慈善根の力汝が信心にたゝかれて、此の事を見るなり」と。これ増上縁なるべし。無心の上の妙用、みなかくのごとし。日の暖かにして霜をけし、月の明かにして水に浮ぶが如し。何ぞ必ずしも心あらん。無心の故になさずといふ事なく、遍ぜずといふ事なし。もし有心ならば限ありて平等ならじ。佛菩薩の利生たゞ増上縁となる。若

(一)悉地。前出、有相の悉地をみよ。
(二)密嚴華藏。眞言宗にいふ大日如來の淨土。
(三)劫。劫波といふ梵語、時と譯す。
(四)行願。願望と修行。志と實行。
(五)業力。業因の力。

ば、(一)悉地成じやすし。近くは安養知足に生れ、遠くは(二)密嚴華藏にうつる。また現生には災障をはらひ、當來には、菩提を得。國土をいのるにも其の効驗いちじるし。亡魂を弔ふにも其の利益すぐれたり。如來内證の秘藏、衆生頓悟の法門也。すこしきも結縁し、强いても勤行すべし。

九、菩薩の利生代りて苦を受くる事

佛法の効驗の掲焉なる事、菩薩利生の廣大なる事を聞くに、衆生の苦患に沈み、感應のとゞこほる事ある可からず。然るに受苦の衆生も多くしてつきず。佛菩薩をたのむ人あれども、感應のいちじるき事もまれ也。此事、凡夫の心に不審開きがたし。今經論の意になずらへ、古德の釋によりて心得ば、一切衆生自心に業をつくりて、各々苦報をうく。所作の業、百千(三)劫をふれども亡ぜずして、因緣會ひ遇ふて還つて其報をうくといへり。菩薩の(四)行願ありといへども、いかでか、たやすくこれを助けむ。神力、(五)業力にかたずといへり。若し由なくをして救はゞ、一切衆生苦におつべからず。是の故に代て苦を受くるの義に、古德七の意を述べたり。一には慈悲の意樂をなす。必ずしも代りてうけず。是は初心の時の意樂と

がら自力もあり、されば二力也。眞言は以我功徳力、如來加持力、及以法界力とて三力也。これを譬へば、釘拔の棒は如來の加持力、坐は法界力、我手は以我功徳力なり。釘拔のよりあひて大なる釘を易くぬくが如し。重障の除こること自ら知られ侍りがたし。眞言は末代に益あるべし。これふるき人のたとへに、聞かずと雖も、私に思ひより侍り。念佛眞言は大概風情あひ似たり。義門たがひに相ひ資けて信をますべし。諍ひあへる事かへすがへす詮なくこそ。當世は西山の淨土宗の人ども、眞言を習ひあへると聞く。尤も然るべき事にや。或る眞言の傳には六字の名號をも(一)五佛の種子と習ふに、全く眞言にて侍り。誠に阿字の一字、正しく眞言の肝心也。深く習へば舌相言語みなこれ眞言なり。佛陀の名字、何ぞ眞言にあらざらん。すべては法身常恒の説なれば、世々に絶ふることなく、憶持不忘の教なれば生々に忘るゝ事なし。(二)三大僧祇の修行を一念の阿字に超え、(三)五相瑜伽の寶藏を、一座の觀心にひらく。一字の眞言もあれば、鈍根のものも習ふに是れやすし。(四)本有の曼荼羅なれば、重障のものも得る事かたからず。智慧あさけれども、信心深ければ利益むなしからず。觀念おろそかなれども、加持の力なれ

(一)五佛。金剛界曼荼羅にて、大日、阿閦、寶生、彌陀、不空成就の五佛をいふ。

(二)三大僧祇。僧祇は詳しくは阿僧祇といふ梵語にて無央數と譯す。無限の長時間を三倍せるをいふ。

(三)五相瑜伽。五相とは修行者が佛身を成就する五種の階段にして、通達菩提心、修菩提心、成金剛心、證金剛身、佛心圓滿をいふ。瑜伽は相應と譯する梵語にして、心が法理に應ずること、即ち觀法することをいふ。故に五相の階段を觀法するを五相瑜伽といふ。

(四)本有。本來具有。先天的にあるもの。

證なき事は奏し難し。佛法に偏頗あるべき事なければ、自他宗と隔つべきに非ず。念佛の中にも分明なる文證あらば、追てこそ奏し申さめ」と、申されけると承り傳へたり。誠に智者と聞きしに合ふて、偏執なき意なり。乘願房上人の詞の大綱を以つて、次に本文をあら〳〵注す。公家へ此の如くこまかに奏し申す事は分明に承はらねども、本文を注して道俗の信を催さん事とがあらじかし。經文を或は略し、或は廣うして人に施す。眞實の法施なりと佛說き給へば、この金言をあふぐなるべし。(一)善導和尚の『般舟讃』の序の意に叶へり。彼の經の文に「重障鈍根の者の餘經に漏れたるをば、陀羅尼藏を以つてこれを利す。餘の藥の治せざる重病を、醍醐の妙藥これを治するが如し。この陀羅尼忽ちに無明を除いて、涅槃をさとる」と云へり。まして淨土の往生はやすかるべし。六字の名號こそ持ちやすきに、一字の陀羅尼もあれば、鈍根の者も習ひやすし。また念佛はひとへに他力による。眞言は(二)三力による。また念佛には(三)「特留此經、止住百歲」と云ふ。眞言は末法刧末の時にも舍利の利益あるべしと云へり。然れば念佛門にあひ同じき法門なるを、聖道と云ふて益なしと思へる心得がたくこそ。念佛は他力と云ひな

(一)善導大師。唐の念佛僧。淨土敎は大師によりて一面目を改む。永隆二年、六十九にて寂す。『觀經疏』等の著あり。

(二)三力。我が功德力、如來加持力、法界力。

(三)持留此經止住百歲。特にこの經を留めて止住すること百歲せんとよむ。『大無量壽經』の語。

徳なれば、其の道理疑ひなし。何の法にか其の益なからん。たゞし(一)十惡(二)五逆の者の往生すと云ふも、善知識に遇うて、我が(三)十念を唱へてこそ來迎にあづかり、極樂に生ずることとなれ。寶篋印陀羅尼は、十惡五逆の罪人、惡道に隨うてまぬかるるに期なきに、其の子孫ありて、此の神咒をわづかに七返滿てて、かの亡魂に廻向すれば、忽ちにその洋銅熱鐵變じて(四)八功徳の池となり、蓮華生じて足をうけ、(五)寶蓋いたゞきに止まりて、その蓮飛ぶが如くして須臾の間に極樂に生じて、一切種智を證じ、位補處にありと說かれたり。光明眞言はまた『儀軌』の說に、地獄におちて苦患にしづむ亡魂に、此の眞言一返みてゝ廻向すれば、(六)無量壽如來、この亡魂に手をさづけて、極樂世界へ引導し給ふとも說き、況んや十二十返誦ぜん功徳、量るべからずと說かれたり。又亡魂の墓所にて、この眞言を四十九遍誦して廻向すれば、無量壽如來、この靈を荷負して極樂世界へ引導し給ふと說き、又經の中には、この陀羅尼をみてゝ土沙を(七)加持する事一百八返してこの土沙を墓所にちらし、死骸にちらせば、土沙より光をはなちて、靈魂を救ひて極樂へ送ると說かれたり。念佛にはこれ程の文證いまだ見及び侍らず。道理あれども文

(一)十惡。殺生、偸盜、邪婬(身三)妄語、綺語、惡口、兩舌(口四)貪欲、瞋恚、愚痴(意三)の稱。
(二)五逆。前出。
(三)十念。十聲念佛を唱へること。
(四)八功德。澄淨、清冷、甘美、輕軟、潤澤、安和、除患、增益の八德ある水
(五)寶蓋。寶の絹がさ。
(六)無量壽如來。阿彌陀佛のこと。
(七)加持。前出。

(一)三杵。五鈷、三鈷、獨鈷の三種の金剛杵。これ印度の武器なるが密教にては、煩惱を破る心の象徴として用ゆ。

(二)乘願房。宗源といふ。法然上人の高弟。建長三年八十四にて寂す。

中に見えたり。先達は加樣に隔つる所なし。末學みだりに偏執して餘宗をそしる、由なき事なり。眞言の利益經文分明なる上に、當時の現證をいはゞ、弘法大師、大唐にして密教を青龍寺の慧果大師に傳へて、我國へ(一)三杵をなげて、眞言修行相應の地にとまるべしと誓ひ給へるに、五鈷は東寺にとゞまり、三鈷は高野山に、獨古は土佐國にとゞまりて、既に四百餘歳、三密修行の靈地として、世こぞつて歸する故に、有縁の亡魂の遺骨を彼山に納むる事、貴賤をいはず、華夷を論ぜず、年に隨ひてさかりなり。夫れ法の興廢、物の盛衰、これ人のしわざにあらず。必ず天のしからしむる故なり。これをもつて思ふに密教の末代に益ある事を信ずべし。故に醍醐の竹谷 (二)乘願房の上人、淨土宗の明匠と聞えき。亡魂の菩提を訪ふには、何の法か勝れたると勅宣のくだりけるには、寶篋印陀羅尼、光明眞言のすぐれたるよしを奏し申さる。門弟本意なき事に思ひて、「淨土門の師也、念佛こそ廣大善根なり、無上功德なり。何事に無下に不足あるまじきに、他宗の利益をほめて、我が家の佛法をつぎにせらるゝこと然るべからず」と申しあひければ、「誠に念佛に衆德を具足して、祈り念ふに隨ひて、願望をとぐべき道理は、都て善根の

は陀羅尼藏の利益さかり也。上品の藥の重病を治するが如し。眞言經の中には、末法とのみ說けり。日本の習ひ、國王大臣は灌頂し給ひ眞言を行じ給ふ。凡下の者は習ふまじきやうに思ひならはせり。經の中には、貴賤を論ぜず。たゞし自然に戒力なくして、凡下の者こひねがふ心のなきにこそ。また眞言教は內證の法として、上﨟しき故に自らかゝるにや。されば慧果大師の御言には、人の中に貴きは國王、法の中に貴は密經と云云。(一)『性靈集』の中に見えたり。然るに此の義を辨へざる世間の人は、眞言教をば、上代の利根の人、淸淨の僧のみ學し行ずべし、在家の男女の分に非ず、末世の根機に相應せずと思ひあへり。さてあげてこれをそしる。愚癡冥闇のゆゑなり。まして淨土門の人は聖道の法門は、末法萬年に利益なしといふをや。大きに此の經文に違せり。眞言經の中には、偏へに末法の利益を說く。善男善女、此の法を修行すべしといへり。但し傳法の師と成る事は比丘僧にかぎり、自行の要法を修する事は在家出家を論ぜず。まして有緣の本尊の眞言を持すること、人をえらぶ事なし。日本の淨土門の祖師たる(二)法然上人も、此の經文を引いて念佛の末代に益あるべき事、眞言教の如しと釋す。(三)『選擇集』の

(一)『性靈集』弘法大師の著十卷あり。

(二)法然上人。源空をいふ。初め比叡山に學び、後洛東吉水にて淨土宗を開く。建曆二年寂。壽八十。圓光大師、慈教大師等の諡號あり。

(三)『選擇集』。二卷。源空上人の著。淨土宗獨立の宣言書なり。

同じ。是れ機感の不同なるべし。上に云ふ所の因の菩薩の實にして果の佛は權といふ事、暫く菩提の實義成佛の外跡の一義によれり。こゝをもつて彌勒慈尊の德用、最も勝れ給へり。凡そ末代に眞言の利益あるべき事は、經の文といひ、現證といひ、疑ふべからず。まづ經と云ふは『六波羅蜜經』也。彼に云はく、「三世の諸佛の(一)法寶藏を五に分つ。一に(二)素多覽藏、禪定をこのむ機に說く。二に(三)毗奈耶藏、威儀をこのむ機に說く。三に(四)對法藏、智慧を好む機に說く。四に(五)般若藏、大乘の第一義空無相の法門をこのむ機にかふむらしむ。五に(六)陀羅尼藏、これ眞言教なり。初の三は小乘の(七)三藏也。第四は諸大乘、第五は密宗なり。(八)三學にもかなはず、諸大乘の機にもたらずして、障り重く根鈍なるために、陀羅尼藏を說いて、頓に無明を除き、涅槃をさとらしめんと云へり。この五藏を乳と酪と生蘇と熟蘇と(九)醍醐とに喩へて、前四味は輕病を治し、醍醐の妙藥は重病を治するが如く、顯教の治せざる機をば密教これを救ふと云へり。されば小乘の三藏は(一〇)正法の時さかりにして、人多く得道す。下品の藥の輕き病を治するが如し。顯の諸大乘は(一一)像法の時さかりなり。中品の藥の病を治するに似たり。(一二)末法に入りて

(一)法寶藏。佛法を藏むる經文。寶は尊びていふ。
(二)素多覽藏。經藏と譯す。御經のこと。
(三)毗奈耶藏。律藏と譯す。戒律の書。
(四)對法藏。論藏ともいふ。論書のこと。
(五)般若藏。慧藏と譯す。一切空の智慧を說ける書。
(六)陀羅尼藏。禁咒藏と譯す。咒文を集めたるもの。
(七)三藏。經、律論の三藏。
(八)三學。戒學、定學、慧學をいふ。
(九)醍醐。牛乳を煮つめ精製せるもののバタの如きもの。
(一〇)正法。佛法が正當に弘まりて修行者多き時代。佛滅後五百年間をいふ。
(一一)像法。佛法の像(形式)のみ盛なる時代、正法後一千年間をいふ。
(一二)末法。佛法の形式修行共に衰へたる時代。像法後一萬年間をいふ。

譬ば世間の賢人は、世を遁れて山に入る。伯夷、叔齊、蕨にうゑて首陽山に死せしがごとし。また綿上山に薪にこがれし人もあり。許由、耳を洗ひ、巣夫、牛を牽きしが如し。聖人は國につかへ、塵にまじはり、光をつゝみ、迹をかくして、涅にくろまず、泥にそまぬが如し。これに似て彌陀は賢人の如く穢土をすて、彌勒は聖人の如く欲界にいます。眞實の內證は同と雖も、因は深く果は淺し。賢人はあさく聖人はふかきがごとし。穢土をすて給ふは少しきうとく、(一)欲天に處し給ふは誠にしたし。菩薩の德をいふに、其體を論ずれば、眞如平等の故に、四生の群類に少しきの隔なく、其の用をいへば恒順衆生の故に、六趣の(二)含識に暫もはなれ給はず。因位の菩薩の利生、果德の佛の化儀よりも、勝れ給へりともいひつべし。是れ一徃の義門也。誠に是非する事なかれ。高野の大塔は不二の總體なり。其れより政所へ五里百八十町に彌勒のましますは、胎藏の大日にあたる。仍て胎藏の百八十尊の種子を、(四)町率都婆にも書けり。又奥院へ一里は、金剛界の三十七尊の種子をかく。大師の御本地、金剛界の大日とも習ひ、若しは金剛薩埵にてもましますにや。或は如意輪觀音ともいへり。彌陀と一體なり。金剛の大日に

(一)欲天。欲界の兜率天といふ事。

(二)含識。識を含めるもの。心を有するもの。有情。

(三)種子。諸佛の內證を象徵せる梵字。

(四)町率都婆。町に建つ塔。率都婆は塔婆、塔ともいひ梵語にして墳、廟など譯す。

(一)三十七尊。金剛界曼荼羅の羯磨會の諸尊をいふ。

(二)欲界。五欲盛なる世界。兜率天はやはり欲界のうちにあり。

(三)權跡。かりに跡をたれ形をあらはすこと。

と云へり。然に上生の因は菩提心の文なし。希求の志し深くして、少しきの淨業あらば生じつべし。密教の意には、安養、兜率をば密嚴華藏の淺略と習へり。華藏は花の如し、密嚴は臺の如し。蓮華は一體也といへども、權實體用の差別なきにあらず。また彌勒は胎藏の大日、彌陀は金剛の大日と習ふ事あり。兩部の大日、實には理智不二の故に、平等一體なり。また(一)三十七尊の中に、西方の無量壽の四親近の菩薩の中の、法利因語は次での如く、觀音、文殊、彌勒、淨名なり。かた〳〵彌陀、彌勒、師弟因果の差別なり。勝劣あるべからず。但し密教の習ひは因を實とし果を權とす。因位の彌勒、果佛の彌陀に勝るべからずと雖も、此義の意は彌勒は在家の俗形をあらためずして本有不改の故に必しも(二)欲界の外に淨土をしめ給はず、自證の極る處、いづくも法界宮にあらずと云ふ事なし。自性淸淨本不生際に取捨の心なく、道俗の形なし。たゞ世俗の風儀にまかせて、同類の衆生を利す。彌陀の果佛は、俗塵をいでゝ出家の形となり、穢土をいとひて淨名の國をしめ、愚癡の凡俗を引導する、(三)權跡のすがたなり。中下の機は出家の形となり、厭離の心を發して淨土に生じ、菩提をうべき由を示し給ふ。螺髮は出家の形也

内院の往生をとげて、(一)高祖大師に値遇せらるらん。うらやましくこそ。夫れ彌勒慈尊は(二)補處の菩薩也。當來の導師也。『上生經』の意は、「兜率の上生は生因甚だ安し、一念希求の志、一稱南無の功、その素懷をとぐ」と見えたり。また「(三)三會の庭の得脱の因も、僅に、一摶の食を衆生にほどこす因縁、(四)龍花會にして彌勒を見奉りて、得脱すべし」と云へり。釋迦遺法の弟子、(五)三歸(六)五戒をたもち、袈裟をかくるほどの人は、初會に度を得べしといへり。天竺の風儀おほく上生を願ふ。同界にして因縁あり。報土に非ずして凡夫の望むにたれり。菩提心ともいはざれば生因またやすし。安養兜率の勝劣の時、安養は(七)不退也、兜率は内院外院の不同ありて、外院は退位なりといへり。然れども慈尊の教化にあづかり、三會の莚にまゐるべくは不足なし。況んや内院は四十九院の中に無量壽院あり。これ極樂と一なるべし。一佛の淨土に生じぬれば、諸佛の國へだてなし。都ては是非偏執し、互にそしるべからずといへり。極樂の往生は、必ず菩提心をもつて生ずべしと見えたり。(八)『淨土論』の文、必ず菩提心を發すべしといひ、曇鸞の法、同じく其の意なり。「彼土の快樂を聞きて、受樂のためにして度生の心なくば、生ずべからず」

(一)高祖大師。弘法大師をさす。
(二)補處の菩薩。佛の候補者たる菩薩。佛の後を補ひて更に佛となるべき菩薩。
(三)三會。彌勒は五十六億七千萬年の後、兜率天の龍華樹の下にて佛となり、直に三回の説法をなすといふ。これを龍華三會の説法といふ。
(四)龍華會。前項をみよ。
(五)三歸。歸依佛歸依法、歸依僧をいふ。
(六)五戒。不殺生戒。不偸盗戒、不邪婬戒、不妄語戒、不飲酒戒の稱。
(七)不退。更に惡道へ退墮せざる位。
(八)『淨土論』。印度天親の著。
(九)曇鸞。支那の念佛僧。魏主の尊信をうく。興和四年六十七にて寂す『淨土往生論』等の著あり。

近比、八幡の清水と云ふところに、唯心房の上人とて、貴き眞言師聞えき。廣澤の(一)保壽院の流を傳へて、彌勒の行者にて、(二)內院の上生を願ひ、如法修行の上人なりけり。道場の中に、兜率の內院現じけり。有相の(三)瑜伽成就の行者なるべし。中比緣にさへられて、暫く現ぜぬ事ありけれども、また行じて常に現じけるとなん。慈悲ありて傳授もやすかりければ、遁世の上人共おほく傳授しけり。或る僧眞言の志侍るに、指す事ありて關東へ下向し侍り。上洛して傳授すべき由申しければ、「必ず上りて習ひ給へ、末代なればとて眞言の功能は愚かなる事なし、穴賢、披露し給ふな。眞言の功能見せ奉らん」とて、舌をさしいださせて、印を結びかくるに、舌の甘きこと甘露もかくやと覺ゆ。さてまた印をむすびてとるやうにする時、其味うせぬ。また鈴の印をむすびてふるに、如法ありがたき鈴の音しけり。「これは御房に眞言の信をおこさせんためなり。ゆめ〳〵披露し給ふな」といはれける由、或る僧語りき。文永の末の比にや、(四)胎藏の行法して後、鈴もふらずして(五)禮盤の上にして入滅すと聞えき。「彌勒の淨土常に現ず、內院の往生うたがひなし」と、弟子に示されけり。彌勒をば胎藏の大日と習ふ事あり。行法も胎藏也。

(一)保壽院流。東寺眞言密敎の一流
(二)內院の上生。兜率天の中央の內院には彌勒現に說法すれば、其處へ上天することをいふ。
(三)瑜伽。梵語。相應と譯す。心と理と相應じて觀法自在なるをいふ。
(四)胎藏の行法。胎藏界曼荼羅による秘密の修法。
(五)禮盤。登りて禮拜する台。

たゞ今生一世のみに非ず。遂に必ず斷ちがたき無始の輪廻をたち、入り難き常住の妙道に入る。これがために誰れか身命を惜まん。佛法の利益はたとひ今生のためと思ふも、猶を(一)二世の利益あり。經の中に諭を出だせり。「佛の所にしてなすところの善根は、たとひ世間のためと思へども、遂に解脱の因となる。譬ば長者の田の種子をまき、水をひき、時に隨ひつくろひて後、この種子長ぜざれと云へども、必ず其の果を得るが如し」と云へり。また眞言の功能を(二)一行禪師釋し給はく、「行者たとひ(三)有相の悉地を成じ、世間の福德のために行ずれども、三密薫習してつゐに佛果を成ず」といへり。世間の水は必ず大海に入る、これ大海は水の惣體なる故に。一切の善は必ず法性に歸す。法性はこれ諸善の惣體なるが故に。然れども、行者菩提に廻向する時は、悉地すみやかなり。有相に住著する時は、利益とゞこほる。遂の利益はむなしからねども、當時の得益は行者の心向によるべし。この道理を知りて、眞實の智慧をならひ、勇猛の精進をはげみて、(四)五陰の重擔をすて、(五)三身の妙果に登るべし。

八、彌勒行者の事

(一)二世。現當二世。この世と後の世と。

(二)一行禪師。唐の眞言僧。玄宗の尊信を受く。開元十五年、四十五にて寂す。大慧禪師と謚せらる。

(三)有相の悉地。悉地は梵語、成就と譯す。功德を積むこと。差別的偏見にありながら功德を積むを有相の悉地といふ。

(四)五陰。色、受、想、行、識とて我等の肉體精神を造れる諸要素をいふ。

(五)三身。法身、報身、應身。

り。古徳の口傳には、「不動と地藏の力ら離れては、生死を出る事なし」といへり。地藏は大日の慈悲のきはまり、不動は大日の智慧の極りなり。世間の萬物陰陽の和合によりて生長するが如く、出世の菩提、悲智の方便によりて成就すべし。神咒をも持ち、名號をも唱へて、魔界の障礙をはらひ、臨終の正念を祈るべし。佛菩薩の利益は、行者誠あるとき感應あらはる。鐘の打つに隨ひて音をいだし、谷の音に隨ひて響をおこすが如し。金石の意なき、人のたゝくによりて猶音をいだす。佛神の誓ある、物の信ずるによつて、何ぞ徳を施さゞらん。感應のとゞこほる事は、信心のおろそかなる故也。世の人、主君の恩を蒙ふるも志まことありては身命を惜まぬほどの忠あるに、其恩も惠みもあり、合戰の庭に命をすつるが如し。然るに、其の恩は僅かに一期の身命をたすく。當來の菩提の因緣とならず。たとひ妻子を育めども、冥途の伴侶とならず。或は其の恩なきこともあり。又あれども幾の事なし。又たとひ大なる恩あれども、公役おほく營しげゝれば、我が得分幾なし。是によりて身も勞れ、心もくるし。面目なき事もあり。恥辱なる事もあり。かゝる僅の恩のために、猶身を捨つる習なり。況んや、佛法の利益は、

り。餘の僧共はみて、やすみて是れを見るほどに、一時ばかりせめて後、大息つきて物もいはず。「いかに〳〵」と人ども問へば、すこしやすみて申しけるは、「上人の佛道を障へたてまつらんとて、もろ〳〵の魔界の數もしらず目に見えつれば、上人を助け奉らんと思ひて、身命をすてゝ勇猛强盛に咒をみて侍りつるが、信心骨にとほりて覺えつる時に、不動の劍をふりて拂ひ給ふと覺えて、心地すこしおちゐて侍るといふ。上人も眼の性なをり、心地も明々として、臨終の用意おだやかにして、この行人の事を隨喜し、年來の本尊佛舍利、宗徒の弟子よりも、この行人につたへて、臨終(一)如法に目出たかりけり。さる程に次ぐ日、年來の檀那の入道はせ來りて、「昨日の夜の夢に、諸の魔界、上人の御菩提をさまたげんとする所に、不動明王追ひはらひ給ひて、御臨終めでたくましますと見て候」となん。此の事方々同じ様なれば疑ひなく。不動の御方便によりて、菩提の道におもむき給ひぬらんと、門徒歎きの中に悦びあへり。經には「(二)南浮の衆生は、三障重きが故に不動を念ずべし」といへり。僅の善に猶さはりあり。まことしく菩提心も行業もあらば、いよ〳〵さはりあるべし。此故に「道たかければ魔盛なり」といへ

(一)如法。佛法にかなふこと。

(二)南浮。南閻浮洲の略。須彌山の南面にあるゆゑ南の一字を加ふ。我等の住める土地のこと。

井の底より、此の幼き者を負ふて出で給ふと見て、歎きも少やみにけり。

古徳の口傳に云はく。佛の眞身は無相無念なり。大悲本誓、善根の力によりて種々の形を現じ給ふ。形像も應身の一なり。然るに行者の信心、智慧の分に隨ひて、木石の思ひをなせば、佛體も只木石の分なり。木石をも佛の想ひをなせば、佛の利益あり。恭敬の心も、信仰の思ひも、誠に深くまめやかに懇なれば、生身の利益に少しもたがふべからず。愚かなる心にて、輕慢の振舞なれば、利益の用あらはれがたし。人をば敬へども、佛の御前に耻ぢず恐れずのみ世間には振舞ふ。爭でか佛德を蒙り、利益にもあづかるべき。返へす〲も愚かなる人の習なり。

七、不動利益の事

信州の或る山中に、貴き上人ありけり。(一)三密の修行久しく熏修し、弟子門徒多かりけり。年たけて後、病に臥してたのみなく見えけるが、魔障と覺えて。眼の性もたゞしからず、心地も例ならず見えければ、弟子ども臨終正念のためと思ひて。慈救の呪を誦して、一心に祈念しけり。其中に(二)行人の一人ありけるが、ことに至誠心を起して、頭より黑煙をたて、聲をつくし、汗を流し、勇猛にみてけ

(一)三密。身密、口密、意密をいふ身密とは、手に印を結び起居の威儀を守ること。口密とは口に陀羅尼を誦すること。意密とは心に本尊を觀ること。
(二)行。行者。修行を事とする人。

めける。一人は世間ゆたかなりければ、いみじく造立して、厨子なんど美麗にしたてゝあがめ供養しけり。此の人さきだちて世を早くしける時、まづしき知音に地藏を信ずる人なればとて、本尊をゆづりけり。悅びて今の本尊をあがめ供養して、年頃の古地藏をば、傍にうちをきて。供養もせざりけり。或るとき夢に、此の地藏ものうらみたる氣色にて、

世をすくふ心は我もあるものを、かりのすがたはさもあらばあれ。

かくうち詠め給ふと見て、おどろきさはぎて、一つ厨子に安置して、同じく供養をのべけるとぞ。

常州築波山の麓に、老入道あり。手づから地藏をおかしげにきざみて、あがめ供養しけり。家中の男女、よろづの事、此の地藏に申しける。隨分の利益面々に空しからずなんありける。其の家におさなき者ありけり。あやまちに井におち入りて死にけり。母泣き悲みて、「よろづの願ひもみて給ふに、地藏の我子をころし給ひたる口惜さよ」とて、理もなく歎きける夜の夢に、此の地藏、井のはたにたちて、「我をうらむる事なかれ、力をよばぬ(一)定業なり。後世はたすけんずるぞ」とて、

(一)定業。決定されたる業報といふこと。

ち捨てゝ忙がはしげにて、おはしつると思ひて、よみがへりぬと語る。彼の師弟ともに見たる上人の物語也。近き事也。

或遁世門の僧、随分に後世の心ありて、念佛の行者なるあり。時料のために耕作なんどせさする事、さすがよしなく罪深く思ひける夜の夢に、或山の邊に火車あり。是れを師子にかく。獄率是れをやる。火炎おびたゞしく見るにおそろしなんと云ふばかりなし。獄卒が云ふやう、「是れはかたきのあるを責むべき也」といふ。何とも返答にも及ばず恐れ入りて過ぐ。其山の峰に若き僧二人たちて云はく、「獄卒がいひつる事は、御房は聞きつるか」とのたまふ。「承り候ひつ」と答ふ。

あれは耕作して多くの蟲をころす者の、かたきとしていましむべき者也。

極樂へまゐらんことをよろこばで、なになげくらん穢士の思ひを。

かく三返ばかり詠じ給ふと見て、夢さめぬ。さて耕作の事ゆめ／＼思ひとまりたるよし、まのあたり語り侍りき。地藏の御方便にや。忝くこそ覺え侍べれ。

鎌倉に或る武士二人知音なりけるが、地藏を信じて倶にあがめ供養しけり。一人は世間貧しかりければ、ふるき地藏の相好もとゝのをらぬを、花香奉りてあが

ざ〳〵」とて焔魔王の御前へ具してましまして、「誠に此の法師は、御ゆるされあるにや」と仰せらるれば、「さる事候、ゆるめ侍る」と申し給ひければ、「さらばいざ」とて野中を遙々と具してまします。野の中に餓鬼共いくらと云ふ數もしらずありけり。其の形、繪にかけるに違はず。其中に或る餓鬼申しけるは、「あの讃岐房は我子なり、あれ養なふとて、多くの罪を作りて、此報をうけて、飢渇にせめられて術なく候。あれ給りて食し候はん」と申しければ「ひが事なり。是は汝が子に少しもたがはぬ別の者なり」と仰らるゝに、「慥に我子にて侍り、所も父もしか〳〵」とあきらかに申しけれ共、「そゞろ事ぞ、かれに似たる別の者也。いざ〳〵」とて、やがて具しておはす。「哀々」と餓鬼申しけれども用ゐ給はで、遙に行き過ぎて、「げにはかれは汝が母なり、汝を養ひし故に、彼報いを得たり。然ども、汝を食ひたりとても、其苦の助かる事も久しかるまじ。また汝人間に生れて、思出もなふして命を失はん事も不便なれば、我が空事をもつて、汝をたすけつる也。穴賢々々。母の孝養よく〳〵して、彼の苦患をたすけ、己が後生善提のために勤め行ふべし。我は暇なき身なれば行くぞ。是よりは、道は覺えんずらん」とて、う

『法華經』讀みて、後世の行と思ひあてけり。他界の後讚岐房と云ふ弟子に庵室をば讓りてけり。かの弟子いささか煩ふことありて息だえぬ。一日一夜ありて蘇り語りてけるは、炎魔王宮へ參りて、報命を勘へられつるに、報命いまだ盡きずとて、うちすてらる。何方へゆくべしとも東西も覺えず。さる程に師匠論識房、『法華經』一卷、手に握りて出で來り、「あれはいかに」と問ふに、「かゝる次第にて御許されは候へども、何方へゆくべしとも、方角も覺えず」といふ。「いざ御房法師が栖も見よ」とて具して行く。小さき庵室に釋迦の像かけ奉り、文机に『法華經』一部おきたり。「我れ惡しき意樂に住して、召人になれり。佛弟子の習ひなれば、法を説いて人にもきかせ、聞法の緣をむすばしむべかりけり。田つくるとても佛子の儀にあらず、それも過なりとてめさる。我が如きの召人は、多ほくあるなり。されども別の苦患はなしと云ふ。さて「此身はいかになり候ふべきにや」といへば、暫く待ちて「地藏菩薩のおはしまさんずるに、歎き申して見よ」と云ふ。暫くありて錫杖の聲して地藏菩薩とほり給ふに、走つき奉りて、「御たすけ候へ、報命つきずとて許されて候へ共、いかになるべしとも覺え候はず」と申せば、「い

り以後は、たすくまじ」と仰せられて、こひ取りて能々いましめ給ふに、今はふつと殺生とむべきよし申して蘇りぬ。其の後一年ばかり止めたりけるが、また殺生しける程に、重き病に責め伏せられて息絶えぬ。獄卒あまたしばりて追立てゆくに、今度は地藏も見え給はず。「あらかなし、たび／＼約束たがへて、地藏にも捨てられ奉りぬ」と思ひて、一心に念じ奉るに、地藏の影の如くにて側を通り給ふを、御衣のすそに取りつきて、引きとゞめんとす。地藏は引きはなちて逃げんとし給ふ。獄卒「如何にかゝる惡人をば、よこさまに救ひ給ふぞ。たび／＼誑言申して候ふ者を」と申すに、「我はたすけず、彼れが執りつけるなり」と仰らるゝ時、一人の獄卒、矢をもつて背中より前へ射とほしぬ。また一人矛をもつて、胸を突きつらぬきて、土につきとほして、獄卒去りぬと思ひて、蘇生して後胸に疵ありて瘡となり、遙になやみて後、出家して當時後世菩提の勤め懇にして、地藏を恭敬供養し奉ると云へり。弘安年中のこと也。

和州の生駒に論識房といふ僧ありけり。說經なんどしけるが、信施うけてもよしなしと思ひて(一)持齋になり、小田つくらせて(二)時料として庵室をかまへて隱居し、

(一)持齋。齋は僧侶の食物、それを蓄へ持つを持齋といふ。田地、金財等を蓄へ積むこと。
(二)時料。時は齋なり。食料、生活費をいふ。

しか〳〵の所へこそおはしつれ」と云ひければ、心のあられぬまゝに、其の家の門にゆきて、「地藏の示現にはあらず、法師が示現をおこがましく」と、のゝしりけれども、「こは何事ぞ、物狂か」といふ人こそあれ、もちゐる人なし。心濁れるは益なし。信心深くして佛の御詞と仰ぎければ、此の女房は思ひの如く望むところ叶ひてけり。大聖の方便めでたくこそ覺え侍れ。鞍馬の老僧も、空示現の故に、互に房も皆ふみ破られ候ひける事、思ひ合せらる。常の物語なれば此等はかゝず。

駿河の國、富士河の上に、殺生を業とせる男あり。人のすゝめによりて、小地藏を一體もち、華香時々まゐらせて、家にあがめ奉りけり。或るとき、夢に鬼にとられてゆきけるを、此の地藏こひ給ひけるに、鬼「これは殺生の業によりて、地獄へゆくべき者なり」と申すに、地藏「これより後は止むべきよしを敎ふべし。まげて許せ」とて、具して歸り給ふと見て、一兩月が程は殺生とめたりけるが、また本の如くしけり。いさゝか煩ふ事ありて絶入しぬ。今度は牛頭馬頭しばりて追立て行くに、また地藏來りてこひ給ふに、「先に約束申したがへて侍れば、叶ひ候まじ」と申すを、「やう〳〵に仰せられて、「今度ばかり理をまげてたすけよ、今よ

さき〳〵下向する方を見置きて、勘解由の小路を東へ行かんずらんとて、走りめぐりて見るになし。此の女房然るべき事にや、烏丸を下りにぞゆきける。曉月夜に見れば、入道の馬に乘りて、供の者四五人ばかり具して行きあひにけり。立ちとまりて物いはんとする氣色を見て、入道馬より下りて、「仰せらるべき事の候にや」といへば、左右なくもうちいでず。良久しくありて、女童を以て云はせけるは、「申すにつけて憚り侍れども、勘解由の小路の地藏に、この日來詣で申す事の侍りつるが、此曉、下向の時、初めて遇ひたらん人をたのめと示現を蒙りて侍るを、申すにつけて憚りあれども、申さでも又いかゞと思ひて」といひて、物はづかしげなる氣色なり。此の入道は妻に後れて三年になりけるが、此の地藏に參りて、佛の御計ひにまかせて、契をむすばんとて妻もせざりけり。地藏堂へ參る道にて、かゝる事ありければ、子細にもをよばず、やがて馬にうちのせて歸りぬ。田舍に所領なんどもちて、まづしからぬ武士入道なりけり。さて此の法師は、縱さまにはしり。横さまにはしり、履物かた〳〵はきて汗をながし、息をきりて走りめぐれども、なじかは行きあふべき。夜もあけぬれば、あまねく人に問ふに、「さる人は

異なり。善惡は心のおもむきによるべし。作業は定りなし。生身既に此のごとし。遺像なずらふべし。但したやすく早ぶるべからず。笠置の彌勒はいろどり奉りて後、靈驗ましまさずといへり。古き佛像は、たゞ其の儘にてあがむる一の樣也。但し形ち見にくゝ、不具しきをば、(一)律の中には、戸帳をかけよといへり。みめわろき姫君なんどは、かくれて見えねば心にくき樣に、佛も只心にくゝ覺えて、行者の信心を催さしむべきなり。

近比、勘解由の小路に、利生あらたなる地藏おはします。京中の男女市をなして詣づる中に、若き女房のみめかたち、なひらかなるが、常に通夜しけり。また若き法師常に參籠しけるが、此の女房に心をかけて、いかにしてか近づかんと思ひけるあまり、同じくは本尊の示現の由にて、近付かんと思ひめぐらすに、此の女房宵のほど勤めし勞れて打ちやすみけるに、耳に「下向の時、初てあひたらん人をたのめ」といひて、たちのきてみれば、やがて起きあがり、女童を起しき。いそぎ下向しけり。仕おうせつと思ひて、出ちがひて行きあはんとするほどに、履物を置き失ひて、尋ぬれども見えず。をそかりぬべければ、履物かたくはきて、

(一)律。戒律を規定せる書。

よりともなく、下手法師の勢大なるが來りて、「十人が振舞は仕るべし」とて、もち奉る。十人計り不足なるに、此の法師かひ〴〵しく持ちて　やす〴〵とぞわたしつ。さて食せさせんとするほどに、かき消すやうにうせぬ。權化のしわざにやと人あやしむ。同法の僧憎に見て語り侍りき。さて彼の佛、御うなじの貧相にましますを、上人佛師をよびて、なほさしめんとするに、「靈像にてましませばたやすくやぶり難し」といひければ、別の佛師をよばんとする處に、件の佛師來りて、「夢に若き僧來りて、只我が身をばなほせ、くるしみなきぞと仰らると見て候へば」とて、なほし奉りぬ。其ののち(一)檀那出來て供料など寄進してけり。佛の相も人の相にたがはずといへり。當代の不思議なり。彼の上人の弟子の說なり。世間またかくれなし。さてかの夢に見奉る浦人、信をいたし步みをはこびて詣でて、餘所の人も聞き及びて、貴びあがめ奉るとなん。佛像をやぶりて修補する事、『大論』の中には、「好のためにやぶるは罪なくして福を得」と云へり。よくなし奉る意樂なるは苦みなし。されば(二)調達は血を出だして阿鼻獄におち、(三)耆婆は血をいだして、忉利天に生まる。血を出だす事は同じけれども、報を得る事は

(一)檀那。梵語、施主と譯す。
(二)調達。提婆達多のこと。釋尊の從弟にて阿難と兄弟なれども、常に佛を敵視せり。
(三)耆婆。釋尊時代の有名なる醫師釋尊の病を愈せしこともありき。

(一)三障。煩惱障、業障、報障をいふ。
(二)四魔。蘊魔(主に物質をいふ)煩惱魔、死魔、天魔。
(三)大勸進。佛法をすゝめ、寺の寄附をなさしむるなどする僧。

生にすぐれたり。不動は(一)三障、(二)四魔のさはりをのぞき給ふ事、また諸尊にすぐれ給へり。六趣をいでず四魔をさらずして、誰か解脱の門に入らん、よく〳〵思ひとぐべし。

永仁三年十一月二十一日、此の書文字誤あり。少々書き入れたき事候まゝに滿七十の老眼を拭うて、惡筆ながら、少々裏書き仕り候ひ畢んぬ。本愚老これを草す。不意に草案のまゝにて、洛陽披露闇顯につけて、其の憚多し。只愚俗の一念の信心をすゝめん爲なり。智人の前にすゝめがたく侍り。　沙門無住

六、地藏菩薩種々利益の事

鎌倉の濱に、古き地藏堂あり。丈六の地藏を安置す。其邊の浦人常に詣でけり。或時ひごろ詣ずる浦人ども、面々に夢に見けるは、若き僧のみめうつくしきが、「日來常に見參しつるに、人にうられて外へこそまかれ、さて名殘惜くて詣で來りたり」とのたまふと見て、あやしみ思ふ程に、此の堂の主まづしきまゝに、先祖の堂を賣る間、東大寺の(三)大勸進の願行房の上人これを買うて、二階堂の邊にうつし造らんとて、佛像をわたし奉るに、人夫不足にして思ひ煩ふ處に、何處

中の肝心に、「地藏は大日の柔軟の方便の至極、不動は剛強方便の至極」と云へり。たゞ(一)折伏攝受の至極也。世間の文武の政務の四海を治するがごとし。强軟の方便眞機を接し給ふ、法王の治化なり。惠心僧都の妹、安養の尼、絶入のとき、修學院僧正(二)勝算、火界の咒を誦じ、僧都地藏の寶號を唱へて、祈念せられけるに不動火炎の前にをしたち、地藏手を引いて歸らせ給ふと見て蘇生しけり。また惠心僧都の給仕の弟子頓死す。ものにとらはるゝ樣なりければ、不動の慈救の咒を誦せしめ、僧都地藏の寶號を唱へらる。蘇生して申しけるは、「男共四五人具して罷りつるを、若き僧のこひ給ひつれども、猶にくげに追ひたてゝ行くを、此僧「我れにこそおしむとも、是非もいはずとり返す者のあらんずるを」とのたまふ程に、びんづらゆひたる童子の二人、白杖を持ちたるが、男どもを追ひはらひて取り返へして、若き僧にうけとらせ給ひつれば、さて具して歸り給ふと思ひて、息いで侍る」と云ひけり。これこそ、げにやはらかに地藏はふるまひ給ふ、不動はあらゝかにしてたすけ給ふ。彼の口傳にあひかなへり。地藏不動の方便離れては、都て生死いづまじきよし見えたり。地藏は六趣四生の苦みを助け給ふ。諸佛菩薩の利

(一)折伏攝受。强きは折り伏してたすけ、弱きは攝めとりてたすくること。

(二)勝算。天台宗の僧、洛北修學院の開基寛弘八年七十三にて寂す。

の色身も、我等がためには既に隔りぬ。彌陀の(一)六八の願たるも十萬億の國をへだて、、華池寶閣の間にましませば、(二)三心念佛の機ならずば、攝取の光明にも漏れぬべきに、地藏薩埵は慈悲深重の故に、淨土にも居し給はず、有縁盡きざる故に入滅をも唱へ給はず、たゞ惡趣を以てすみかとし、專ら罪人を以て友とす。釋尊も三乘根性の熟せる時節を待ちて、(三)八相の化儀を示し、彌陀も念佛衆善の功つもれる冥目のきざみにこそ、三尊の來迎をもたれ給へ。此の菩薩は、機根の熟するをもまたず、臨終の夕ともいはず、とこしなへに(四)六趣の衢にたち、旦暮に(五)四生の族にそうて、緣なき衆生すら猶たすけ給ひ、夷にも見え給ふとかや。況んや、一沙一塵の善根もあれば、龍の水を得、虎の山によるがごとし。(六)八寒、(七)八熱、(八)泥梨の苦患をたすけ、人中、天上、諸佛の淨土へおくり給ふをや。我が淨土は上品は、安養知足、中は伽羅陀山、補陀落山、下は福舍人天の善趣なりとこそ宣ふなれ。末代の愚癡無慙の道俗、當來の生處惡趣のがれがたし。誰の心あらん人か、此尊に功を入れ志をはこばざらん。地藏の御事、顯密に倶にたのもしき事のみ侍り。建仁寺の本願僧正の口傳に『地藏の決』とて一卷の秘書あり。其の

(一)六八願。『大無量壽經』に說ける四十八願。
(二)三心。前出。
(三)八相。前出。
(四)六趣。前出の六道に同じ。
(五)四生。前出。
(六)八寒。紅蓮地獄、大紅蓮地獄等八處の氷地獄。
(七)八熱。焦熱、大焦熱、無間等の八處の火地獄。
(八)泥梨。奈落に同じく梵語にして地獄と譯す。

(一)闡提。前の一闡提のこと。
(二)無佛の導師。佛なき世に人を救ふ方。
(三)恒沙。印度に名高き恒河即ちインダス河の沙ほど澤山ある數。
(四)薩埵。菩薩のこと。
(五)實報寂光の都。眞實に願に報いあらはれたる寂靜光明の淨土。
(六)常在靈山の色身。釋尊は常に靈鷲山に在りて決して死したまはずといふ信仰より來る御身。

の一門に出でて、本誓悲願別々にして、萬機を利益し給ふ。然るに地藏薩埵は(一)闡提の悲願をおこし、本師の付屬を受け、(二)無佛の導師として、惡趣の利益をさきとし給ふ事、諸の賢聖にすぐれ給へり。されば『十輪經』には「普賢、文殊、觀音、彌勒等の(三)恒沙の菩薩の所にして、百劫の間念誦し、禮拜し、供養して諸の所求を祈らんよりは、しかじ地藏の所にして、一食の間念誦し、禮拜して、所願を求めんには。久しく大願大悲を修して勇猛精進なる事、諸の菩薩にすぎたればなり」と說き給へり。是れみなかたどる方ありて、互に且く勝劣を論ずる故なり。釋迦大師も、其の器量を見そなはして「我れ入滅の後、彌勒出世のさきの衆生を付屬す」と仰せられて、心やすく御入滅ありき。舊住娑婆の菩薩、恒沙の如し。智慧、慈悲、神通、妙用、いづれかをろかに御坐す。されども選びすぐりて付屬の仁にあたり給へり。然れば滅後には別の本尊を仰ぐべからず。當職の能化、濁世の導師なり。末代の衆生偏へに此の尊を憑むべし。機感相應の日は、いづれも利益あれども、此の菩薩は諸佛菩薩の中に、殊に我等有緣の(四)薩埵なり。其故は釋尊の一代の敎主たる化緣、薪つきて、(五)實報寂光の都へ歸り給ひぬ。(六)常在靈山

と思ふなり。されば何れの日死せりとも、二十四日に我が月忌をばすべし。やがて今月二十四日より(一)月忌始めよ」とて、伊豫の阿闍梨と云ふ弟子に、十月に月忌始めてけり。さて正月十四日、灌頂の作法違亂なく行ひ終りて、十五日より又病おもりぬ。今は思ふ事なしとて、聖財世寶の付屬、沒後(二)中陰の用意なんど申しおきて、偏に臨終の支度なり。病重りて日數へて、看病の人うちやすみけるとき若き僧のみめかたち美しきが、えもいはず看病するあり。誰ともしらず。兩三日の程、日毎に看病するを、これは如何なる人ぞと、問へども、餘の人の目には見えねば知る人なし。事の子細を聞きて、弟子ども「地藏菩薩の御看病候ひけるにや」といへば、「げに〳〵さもあるらん。歸り給ひつるが、錫杖をうちかたげて、見え給ひつるぞや。あらかたじけなや」とて感涙抑へがたし。弟子共も隨喜の涙をながしけり。さて正月二十四日端坐し(三)印むすび、弟子の僧共に(四)阿彌陀の大咒、(五)地藏の寶號なんど唱へさせて、禪定に入るが如くして終りぬ。彼の弟子の僧の物語なり。誠に地藏の御利益にこそ。凡そ諸佛菩薩の內證外用を論ずるに內證はみな自性法身毘盧の全體なり。外用の諸尊は、法王の一官を司どり、法界

(一)月忌。月々死せる人の當り日に佛道を修めること。
(二)中陰。人死して後、七七日間の喪中のこと。
(三)印。佛の內證を表示せる形を手指にてあらはすもの。
(四)阿彌陀の大咒　阿彌陀佛に稱へる長い咒文。
(五)地藏の寶號。地藏菩薩の名號。

慈悲の妙用を信じて。感應を憑むべし。此れ行者の肝要行修の用意なり。

五、地藏の看病し給ふ事

鎌倉に帥僧都とかや聞えし㈠密宗の明匠、齡八旬に及んで、若き弟子の器量の仁ありけるに、㈡秘法をも傳授し、㈢印信をもゆるしたく思ふに、此僧年十九になりければ、㈣灌頂をも許るさず、しかも風氣重かりければ、老耄の上、病さへ日かさなりて、㈤傳法のむなしからん事をなげきて、弟子の僧共に㈥炎魔天供して命をのべて、此の僧に灌頂授けて慧命をつかんと思ふよし申し合す。弟子共「此の御年にて御祈禱は人聞もしかるべからず詮なき事なり」と、諫め申しけれども、「我命の惜きにはあらず、法命こそおしめ。人はいかにもいへ、いたむ所なし。法のため百日の暇申さんに、炎魔王などか賜はざるべき」とて行法始めさせ、また十二月の初なりけるに、正月には灌頂行ふべき用意にて、百日の㈦加行同じく始む。さるほどに、心地倒さまになりて、要法なんど且つ傳授しけり。然れば大乘の法にあへるしるしに、地藏菩薩に隨逐し奉りて、㈧光明眞言を誦して、地獄衆生を㈨加持せん

(一)密宗。眞言宗。
(二)秘法。密教の秘密の修法。
(三)印信。秘法を授けたる證として弟子に與ふる書物。
(四)灌頂。香水を人の頂にそゝぐこと。密教にて行ふ儀式。
(五)傳法。秘密法を傳へること。
(六)炎魔天供。炎魔王を本尊として祈禱供養すること。
(七)加行。正しく行ふ修行をする前に行ふ準備の修行をいふ。
(八)光明眞言。眞言陀羅尼の一種。オンアボギヤ、ベイロシヤナフ、マカボダラ、マニハンドフマ、ジンバラハリタヤ、ウンの文これ也。
(九)加持。佛の大悲を加へて衆生を清淨にすること。

べし。佛菩薩を恨み奉るべからず。都て佛に(一)眞身應身まします。また衆生に妄心智心あり。佛の眞身は無相常住にして法身なり。妄心を以て縁ずべからず。智心これを照す。(二)無相無念の觀智、理と相應するとき、法身を縁ずる義あり。應身の情識の中に、妙用の方便を仰ぐ。信深くして父母をなつかしく思ひ、師君をおもく憑むが如く、志をいたし功を入れるとき、世間の利益にあづかる。病苦をたすけ危難をのぞき、惡趣をまぬがれ、善趣に生るゝ方便これなり。先づ應用を以て情識をたすけ、さはりのぞこり罪きえて、人天淨土に生れ、やうやく智性あらはるれば、引いて眞身を見せしむ。然れば先づ妄心の中に妙用の德をあつく憑み、次に觀智の前に眞身の躰を照すべし。此の心を得ざれば、或は應化の身をのみ信じて、無相の法身を信ぜず、或は無相の法身を崇びて應用の方便を輕むるはともに癡なり。慈悲の應身は波の如く、光に似たり。水を離れて波なく、燈をはなれて光なし、(三)體用無礙にして不二一體なり。分別をなす事なかれ。衆生の心も眞心は體なり。水の如し。情識は用也、波に似たり。只波をしづめて水を得、應を信じて眞を觀ずべし。是故に內には常住の法身を觀じて能所を忘れ、外には

(一)眞身應身。佛自らの眞のさとりの身を眞身といひこの眞身より衆生のいろいろの機根に適應して現るゝを應身といふ。

(二)無相常住。相なく常に寂靜にして動かぬこと。

(三)體用無礙。本體とその作用とが礙なく、のびやかなること。

てあり。さて酒なんどすゝめて後、事しづまりて主人この女房に申しけるは「抑いかなる御事にて都に人こそおほきに、かく親しくなりまゐらせつらん、ありがたき互の契かな」と云ふ程に、此女房「誠にこれも一世の事には侍らじ、定めて昔の契もふかくこそ。かゝるにつけては我身の事、ありのまゝに語り申すべし」とて始よりこま〴〵と語りければ、主人手をはたと打ちて、「あら不思議の事や、彼衣は妾が衣にてありしを、盗人にあひて後は、佛をもうらめしく思ひ奉りて、常にも詣でざりける心のをろかさよ、かゝる御計ひにて、末めでたかるべしと知らざりける、凡夫の心のをろかさよ。觀音の御慈悲方便、まめやかに忝なくこそ」とて、互に袖をしぼりつゝ、いよ〳〵打ちつれて清水へ詣でける。さて互に憑みつゝ、田舍よりも國の物のぼせ、京よりも色々の物くだしなんどして、實の親しき人も、爭か是れにすぎじとぞ見えたる。大聖の方便かたじけなくこそ侍れ。凡そ在家出家をいはず、有智無智を論ぜず、人毎に佛にもつかへ、經をもよみ候ぞかし。然るに信心清淨にして、精誠をいたせば、感應むなしからず。不信懈怠にして、等閑なるは、利益とゞこほる。されば我が信心のいたらぬとがをいましむ

給へ、田舍へ具しまゐらせん」と、なをざりに云ひかゝれば、「たよりなき身にて侍れば、御哀みあるべくは、何處へも參らむ」といふ。「實にや」とゝへば、まめやかに思ふよしいひけり。月の光に見れば、若き女房の、みめかたちなひらかなりければ、さてはとて、やがて引馬にうちのせて下りぬ。然るべき契にやありけん。また觀音の御たすけとや、互の志あさからずして年經。子息なんどもいでき、たのしくさかえて奧州の何とかやと云ふ所にありけり。さて十年計りすぎて、次ぎの大番に、此の女房相具してのぼりけり。都に縁もなくなりはててけるを、ありのまゝに云はんも、さすが人げなく覺えて、親しき者もあるよしいひつゝ、既に京へ入りて、或家の樂しげなるまへをすぐとて、是こそ我が伯母御前の許とて輿かき入りぬ。この女房内へさし入りて、主人を尋ねて申しけるは、「本は京の者にて侍りしが、縁ありし者も皆うせぬ。親しき者もなきまゝに、是ぞ我が伯母御前と申して候なり。御心えあれ見參の始めことさらに」とて、ふところより金を五十兩取りいでゝとらせければ、兎角の子細なし。姪御前のいらせ給ひたるとてかひ〳〵しくもてなしけり。家もたらひてたのしかりければ、ゆゝしくきらめき

(一)三昧耶形。三昧耶は梵語、本誓と譯す。諸佛がそれぐ\獨特の本因、誓願を、蓮華、杖等にて象徵せる形を三昧耶形といふ。

ず、金の涅にくろまず、蓮の水にそまぬ如くなり。されば得自性清淨法性如來と名く。蓮華を以て、(一)三昧耶形とし給へり。故あるにこそ。一切衆生の心中に覺悟の蓮華ありといふは、本性の觀音なり。一切衆生の佛性とは彌陀觀音になるべき性なり。佛菩薩ことに蓮華に坐し給へり。觀音の本誓にあらざる佛の慈悲智慧なしと心得べし。されば一切の佛の心は慈悲なり。一切の慈悲は觀音なり。また『妙法蓮華經』も觀音を以て體とす。方々本朝には一乘彌陀觀音有緣の國なり。深く信を至すべし。

貧しくして世にありわびたる若き女房ありけり。清水へ常に詣りけるが功つもりて示現に老僧の告げ給ひけるは、「その傍なる人の衣をぬすめ。」と仰せらるゝと見て夢さめぬ。此事いかゞあるべからんと返へすぐ\思ひわづらひけれども、慥の示現なれば、たとひ如何なる耻がましき事あるとても、如何にせんぞと思ひ切りて、傍の屛風に白き衣をうちかけたるを、引き落してうちかづきつゝ。やがて下向する程に、五條の橋に大番衆とおぼしき武士、勢々として行きあひぬ。「いかなる人ぞ、たゞ一人御坐すは」といへば、「物詣の下向」のよし答ふ。「いざゝせ

孫なんど今にあり。其の養子にてありし入道語りき。たしかの事なり。上代はかゝるためしもあれども、末代はありがたく目出くこそ覺え侍べれ。夢だにも有難きに、うつゝに現じて助け給ひける利益、たつとくかたじけなし。美濃國横倉の藥師は、根本中堂の藥師の御衣の木の切にて造り奉れると申し傳へて、靈驗あらたに聞こゆ。年來常に參詣しけり。尾張國龍山寺は、昔、龍王の一夜の中に造り供養せる寺也。夜あけゝれば塹は、ほりさしたりとて當時も其跡見え侍り。(一)馬頭觀音にて靈佛にて御坐す。年來月詣して、十八日毎に(二)三十三卷よみて奉りける。かゝる因緣を以て御たすけありけるにこそ。返へす〲悉し。觀音は(三)久住娑婆の菩薩の中に(四)施無畏者の名を得給へり。今この(五)娑婆世界は、耳根利にして聞法の因緣を以て道をさとる。觀音昔、(六)耳根得道の菩薩として、此界の(七)能化と御坐す。『首楞嚴』の中に、文殊この事をほめ給へり。わきては日域の佛法の濫觴、聖德太子、救世觀音の御方便なり。密敎の習、彌陀は權の用を示して穢土をすてゝ淨土をえらび、修行して道を成じ給へる、形ち出家の相也。因位の觀音は實體なり。穢土を出でずして自性淸淨の道理を表し、俗形にして本性を動ぜ

(一)馬頭觀音。七觀音の一。三面八臂にして功德の甚深なること、馬の水草をのみ念じて餘は知る所なきが如しといふ。(二)三十三卷。三十三觀音にかたどりて『觀音經』を三十三卷くり讀むこと。(三)久住娑婆。久しく娑婆に住すと讀む。(四)施無畏者。無畏を施す人、おそれを除く人。(五)娑婆世界。娑婆は梵語、堪忍と譯す、內には煩惱に堪へ外には寒熱に忍ばざるべからざる世界と云ふ意。(六)耳根得道。耳に法を聞くことによりて道を得ること。(七)能化。能く敎化利益する人。

堪へがたく覺えけるまゝになほ身なげんとて歩みよるに、またこの僧繩をひかへて「死ぬまじきぞ、あるべからず」と制し給ひければ、思ひとゞまりぬ。熱田の宮の講衆、神官なんど皆知りて「申しあづかるべし、社頭に講行なんどつとめて、奉公の仁にて候。しか／＼と申す者なり」と申ければ「名ある人也けり」とて許さずして、鎌倉へ具して參りて、義時の見參に入る。とく／＼首をはぬべしとて、湯井の濱へつかはす。また例の僧出で來りて、「な歎きそ死ぬまじきぞ」とのたまへども、今は最後と思ひて、一心に念佛しけり。さて亂橋といふ橋の許に、年來の知音ゆきあひて、「あれはいかに」とて馬をひかへて物語する「弋瀬河にて死ぬべかりし身の、せめても恥をさらさんとて、かゝるやうにて、只今こそ首をはねられんとて、濱へまかり候へ。最後の見參こそ嬉しき」とて涙をながす。此人申しけるは、「是は年來の智音にて候。相模殿へ參じて申しあづかるべし。暫くまち給へ」とて馬をはやめて參りて申しければ、あづかるべしといふ御文を給ひて、やがて馳せ歸りてあひ具して、さま／＼にいたはり、命たすかりて、はるかに年たくるまで、本國にありけり。空吭の疵ゆゑに、聲はしはがれたりけり。

き。さて肩に引きかけて青墓の北の山へ具して行きぬ。あまたの屍の中に空吭を突きとほして土につきつけたりける屍、むねと大事なりけり。何さまにも助かるべからず。首をとりて行けといへども、それもさすがに可愛ければ若しや助かると見るほどに、落人たづぬとて武士うちゝりてのゝしり、夜もあけがたになりぬれば、叶ふべくもなくて、大なる木の靭に手負ひをばかくして、二人はまた忍びぬ。武士血をとめて其のあたり探り求めけり。されども求めかねて去りぬ。其の後、黒衣きたる僧一人、横倉より來れりとて、草の葉をもみて給びければ、これを服して腹の中の血あるほどくだして、身もかろく、心地もたすかりて覺えける。さて此僧は見えず。二人また來りて。木の中より抱き出しつ。「かゝる事のありて身もかろく覺ゆ。あゆみてゆかん」とて、本國へ下るほどに、下津河、水まさりてかなはずしてやすらふ程に、關東へ下る武士見あひて、あやしみて搦めとりぬ。一度に死ぬべかりつる身の、恥さらさんこと口惜く覺えて、河に身を投げんとて河の端へあゆみよる時、若き僧一人、龍山寺より來れり。「死ぬまじきぞ、自害なせそ」と仰せられけり。夢かと思へば現なり。されども傷もいたく、日もあつし

見え侍る。慥の事なり。佛菩薩の境界、いづれも信心深くは、現當の望みむなしからじ、たゞ信敬もうすく、行業もおろそかなる時こそ、罪障の雲あつくして、感應のひかり隔ることに侍れ。世間の人の習、おもき主、なつかしき伴に志をつくし功を入るごとくに、佛に功を入れ、志をいたさば、利益うたがうべからず。然るに妻子をばこまやかにはぐゝみ、客人をば懇にもてなし、君父のためには、命をもすて、名利のためには身を亡せども、佛法の爲に身命をすつる人のなきこそ、誠にをろかなる心にて侍れ。人は今生一旦の假の友、佛は當來長夜のまことの師なり。力をも盡くし、功をもいれば、(一)二世の利益にあづかるべし。先蹤これおほし、後輩うたがふ事なかれ。

四、藥師觀音の利益に依りて命全き事

尾張の國山田の郡に、右馬丞明長と云ふ俗ありけり。(二)承久の亂の時、京方にて弋瀬河のたゝかひに疵あまた被ふりて、既に止めさしてうちすてゝ、武士ども京へ馳せのぼりぬ。友達の二人おちて其邊に忍びてありけるが、夜に入りて骸をとりて孝養せんとて、戰の庭を見るに、手はあまた負ひながら、命は未だ絶えざり

(一)二世の利益。この世と後の世との利益。現當二益。

(一)宿善。宿世、即ちさきの世の善根。

鎌倉二町の局とやらんきこえし徳人ありけり。近くつかふ女童、しかるべき(一)宿善やありけん、念佛を信じて、人目には忍びつゝ、ひそかに數返しけり。この主は、きびしく、はしたなく物を忌み、祝はひ事けしからぬ程なり。正月一日にかようしけるが、申つけたる事にて、心ならず南無阿彌陀佛と申しけるを、此主なのめならず怒り腹たちて、いま〳〵しく「人の死したる様に今日しも念佛申すことゝ、返へす〳〵不思議なり。」とて、やがてとらへて錢をあかくやきて、片頰にあてゝけり。念佛のゆへには、如何なるとがにも當れと思ひて、それに付けても佛をぞ念じ奉りける。思はずに痛みなかりけり。さて主年始の勤なんどせんとて、持佛堂に詣でゝ、本尊の阿彌陀佛、金色の立像を拜み奉れば御頰に錢の形、くろく付いて見えけり。あやしみてよく〳〵見るに、金燒にしつる錢の形、此の女郎が顔のほどにあたりて見えけり。あさましなんど云ふばかりなくて、女郎をよびて見るに、いさゝかも傷なし。主大きに驚き、慚愧懺悔して、佛師をよびて、金薄をおさするに、薄は幾重ともなく重なれども、疵はすべてかくれず、當時も彼の佛御坐す、金燒の佛と申しあひたり。まのあたり拜みて侍りし。當時は三角に

常陸の國、中郡と云ふ所に、草堂あり。藥師如來を安置す。其堂ちかき家に十二三ばかりなる小童ありけり。わろき病をして息絶えにけり。近き野へ捨てつ。一兩日鳥獸もくはず。此の藥師、童子を負ふて家へ具して御坐すと思ひて、よみがへりけり。藥師をば地頭家、鎌倉へ迎へ奉りて、堂造りなんどして崇め奉り、彼の童子は既に法師に成りて承仕して侍るとなん、當時の事なり。末代なればとて、感應のむなしき事はあるべからず。

文永の末の比にや、一說に彌陀と云へり。尾張の國熱田の社頭に、若き下手男今年十一月十五日、俄に兩目ともに盲てけり。心うく覺えければ、神宮寺に參籠して藥師如來に祈念す。次の年、三月十五日の夜、夢に一人の僧來りて、「汝起きて目見あげよ〳〵」と仰せられければ、「目は盲て候」と申せば「たゞ見あげよ」と仰せらると思うて、見あげんとする程に、やがて開いてけり。盲目になりて後、主人追ひすてたりけるを、目あきて後、又つかはんとしけるを僻事なりければ、社司さゝて許してけり。まのあたり見たる人の說なり。文永年中の事なり。

三、阿彌陀利益の事

體脇足の風情なり」と申しける。才覺してめでたけれ。まして家の事いかにあきらかなりけん。『宇治の物語』にあり。佛の御弟子須利槃特は、あまりに鈍根にして、我が名をも忘れけり。止観の法門のたとへに、觀は箒のごとし、止は掃ふがごとしと敎へけるに、箒の名を復すれば掃はわすれ、掃を復すれば箒をわするゝほどなりけり。佛あはれみて、五百の羅漢を師として、一夏九旬の間に、一偈を敎へ給へり。守口接意身莫犯。如是行者得度世と。文の意は口を守りて、妄語等せず、意をおさめて妄念なく、身にとがをおかす事なかれ。是のごとく行ずる者は生死をはなるべしとなり。槃特これを信じおこなひて、(一)羅漢の果を得たり。されば才智のおほからんよりは、信じて行ぜば一偈一句の下に道を得べし。經にも千章を誦ぜんよりは、しかじ一句を聞いて道を得んにはと云へり。また云はく「常に其心を正うして餘事を學ばず」。心をたゞしくして、一切の事ならはざれとなり。正と云ふは、一切の邪念なく、分別なきなり。有念はみな邪なり、無念は則ち正なり。この信深くは道に入りぬべし。

二、藥師利益の事

(一)羅漢。阿羅漢。無學と譯す。小乘の第四果で、小乘のさとりの頂上。

佛現じて法を說き給ふに、道を悟ると云へり。また(一)在世に(二)晩出家の老比丘、寺に來りて信心ふかくして、我に(三)道果を賜べといふに、若き比丘あざむきすかして、齋營まば與へんと云ふ。云ふがごとく營なみけり。さて禪鞠とて、坐禪の時眠をさまさんがために頂におく手鞠のやうなる物を、「是こそ初果よ」とて頂におくに、深く信じて「誠に(四)初果を得つ、初果は既に得たり」といふに、また「二果よ」とておく。次第に第四果まで誠に得て、道品の功德を自在に說きければ、比丘その耻ぢ恐れて過を謝しけり。鳥羽法皇、山へ御幸ありけるに、前唐院の寶藏を開いて(五)大師の御寶物叡覽ありける中に、圓なる物の投ぐれば聲ありけり。御尋ありけるに、山僧これを知らず。大師の御時より御寶物とてありとばかり申しけり。小納言入道信西が申しけるは、「あれは禪鞠と申して、(六)止觀の坐禪の時、頂におきて眠る時はおち候。それは驚きて坐禪し候者なり」と申す。また杖のさきに圓なる綿をつゝみてつけたる物あり。これをも「法杖と申して、坐禪の時、身の不調なるをこれにてさしつぎ候なり」と申す。また木を枷のやうにしたるをも「助老と申して、老僧の坐禪の時、苦しければ、脇をかけてやすみ候。大

(一)在世。釋尊の世にましますとき
(二)晩出家。老年になりて出家せる僧。
(三)道果。佛道の證果。さとり。
(四)初果。小乘のさとりに初果、二果、三果、四果と四階級あるものゝ第一階をいふ。
(五)大師。傳敎大師。
(六)止觀。天台宗の修行をいふ。止は散亂心を止めること、觀は佛教の眞理をみきはめること。

ゆゑと見えたり。信に二つあり、解信は智慧門より法の道理を解了して信ず。深信はたゞ少しも疑はず、佛教をひらに信ず。行門には深信ことに入りやすし。(一)大乘の佛法、識情のをよばぬ所をば、先づ深信をもつて仰いで信じて、深き悟りにも入る也。『法華』には(二)舍利弗も信を以て入れりと說き、信なき者をば、(三)一闡提と名けて、佛にならぬ者といへり。或る在家人、山寺の僧を信じ(四)世間出世ふかくたのみて、病事もあれば、藥までも問ひけり。此僧醫骨もなかりければ萬の病に藤の疣を煎じて召せとぞ敎へける。信じてこれを用ふるに、萬の病いえずと云ふことなし。或時馬をうしなひて。「いかゞ仕るべき」といへば、例の「藤の疣を煎じて召せ」といふ。心得がたけれども、やうぞあるらんと信じて、あまりに取り盡して、近々には無かりければ、山の麓を尋ねけるほどに、谷のほとりにて、うせたる馬を見つけてけり。是れも信のいたす所なり。或經の中に、魔ありて佛身を現じて、佛道を退轉せしめんがために說いて云はく、「汝が身の皮をはぎて紙とし、血をいだして墨とし、骨を折りて筆とせば、佛法を說くべし」といふ時に、信心深くして云ふがごとくする時、まことの信心ある故に魔は去りぬ

(一)大乘。大人の乘物といふことにて、菩薩が佛になるまで乘りゆく敎をいふ。
(二)舍利弗。釋尊十大弟子の一人で智慧第一と呼ばる。
(三)一闡提。闡提とも云ふ。梵語、信不具足、斷善根など譯す佛になる緣なきものゝこと。
(四)世間出世。この世の中と、この世を出でゝさとること。

ちて覺ゆ也。御舍利十粒ばかり出し奉りて、此中に一粒えりて取り給へ」と云へば、「我に有緣の御舍利ましまさば、其相を示し給へ」とて、掌を合せて祈念しければ、御舍利一粒虫のはふ樣に、はひより給ひけり、「これこそ」とて渡し奉りぬ。感涙おさへがたかりけり。御廟の御前へ歸りて、「抑いかなる人にてましますぞ、住所はいづくぞ、御名はなにと申すぞ。夜明なば宿房へ御坐せ、能々申し契らん」と懇にかたらひければ、「さして住所はなし、名をば寂靜とこそ申す」とて返事すくなにて、うちやすみけり。ちとまどろみて曙に見えければ、此の神子見えず。あさましく覺えて、遍くたづねけれども、遂になかりけり。人にとひければ、此の七八日見えつれども「何處より來り、如何なる者とも知らず」とぞ答へける。變化の人にこそ。さて其後も禮し付けて、五百返の禮拜怠らざりけり。或上人、たしかに彼の御舍利おがみて、事の子細よく〱聞きたるよし、語られき。無下に近き事なり。されば、たゞ人は信心のあるべきにこそ。此入道、無智の在家人なれども、眞實の信心ありければ、感應むなしからず。(一)經には「信は道の源、功德の母」と說き、寶の山に入りて、手を空しくすといふは、信の手のなき

(一)經。『華嚴經』

(一)舍利。梵語。身骨と譯す。多く釋尊の遺骨にいふ。
(二)不空三藏。印度の僧、後支那に渡り經典百十部を譯す。唐の玄宗等に歸敬せられ、太歷九年長安に寂す。壽七十。眞言宗の第二祖なり。
(三)舍利禮の文。佛骨を禮するとき唱へる文句。
(四)太子の御廟。大和磯長(シナガ)の聖徳太子の廟をいふ。

沙石集卷第二

一、佛舍利感得の人の事

河内の國に、生蓮といふ入道ありけり。年來まことの佛(一)舍利感得の志ふかくして、(二)不空三藏の一心頂禮の(三)舍利禮の文を唱へて、毎日五百返、五體を地に投げて禮拜をして祈念しけり。十四五年の後、(四)太子の御廟に詣でゝ、殊に精誠を至して祈請しける示現に、御廟窟より老僧一人出で、「汝が所望する御舍利は、そのかたはらなる者に乞へ」と仰せらるゝと見て、うちおどろきて、傍らを見れば、歩き神子の髮肩にかゝりて、色白くたけたかきが、齡二十二三計なるが臥したる外人なし。是れしも御舍利持ち奉らんやと思ひながら、やゝとおどろかして、「只今かゝる示現を蒙りて、かく申すなり。御舍利や持ち給へる。渡し給ひてんや」と云へば、「淨土堂へおはせ、渡し奉らん。安き事なり」といふ。思はずに覺えてつれて堂の後戸へゆきぬ。脇にかけたりける守の袋より、水精の塔の六七寸ばかりなるを取りいだせり。燈の光も及ばず、御戸へ光明かゞやきけり。先身の毛立

には稀なり。邊地の在俗の中に、かゝる風情まゝにきこえ侍り。念佛門のみならず、天台、眞言、禪門なんどにも、邊國の末流には、多く邪見の義門侍るにや。されば如何にしても智者に親近し、聖教を知識として、邪見の林に入るべからず。是故に『心地觀經』には「菩提の妙果の成じ難きにあらず、眞の善知識に實に値ひがたきなり」とゝき、古德は「出世の明師に逢はず抂げて大乘の法藥を服す」といへり。天台の祖師も、「利根の外道は邪相を正相に入れて邪法を以て正法とし、鈍根の(一)內道は、正相を以つて邪相に入れ、正法を以て邪法とす」と釋し給へり。(二)六祖大師も「邪人正法を說けば、正法も邪法となり、正人邪法を說けば、邪法も正法となる」とのたまへり。下醫は藥をもつて毒となし、上醫は毒を以つて藥となすと準知すべし。中醫は毒を毒となし、藥を藥となす。凡夫(三)二乘に準ぜよ。近代は正見の人希にして如來の正法を邪見の情に任せて、自他共に邪道に入るべきをや。牛は水を飲みて乳とし、蛇は水を飲みて毒とす。法はこれ一味なれども、邪正は人による。よく〳〵此義を知りて、邪見の過を遁れて、正眞の道に入るべき也。

(一)內道。佛道內の人をいふ。
(二)六祖大師、支那禪宗の第六の祖慧能禪師をいふ。
(三)二乘。聲聞乘と緣覺乘。佛の敎を聞いてさとる人と、飛花落葉をみてさとる人、共に小乘の人である。乘とは人を乘せてさとりの岸に至らしむる敎及びその敎を奉ずる人々をいふ。

(一)四句。純善人純惡人、善人の惡性人、惡人の善性人をいふ。
(二)宿善。宿世すなはち前の世に積める善。

血みどろになりて、くるひ死にゝけり。勸めたる僧の云ひけるは、「この人は『法華經』よみたる罪は懺悔して、その報いに舌唇もくひきりて、罪消えて決定往生しつらん」とぞ云ひける。また中比、都に念佛門流布して、惡人の往生すべき由を云ひたてゝ、戒をも持ち經をもよむ人は、雜行にて往生すまじきやうを曼陀羅に圖して、尊げなる僧の經よみて居たるには光明さゝずして、殺生する者に攝取の光明さし給へる樣をかきて、世間にもてあそびけるころ、南都より公家へ奏狀を奉る事ありけり。其狀の中にいはく「彼の地獄の繪を見る者は、惡をつくりし事をくい、この曼陀羅を拜する者は、善を修せし事をかなしむ」と書けり。(一)四句を以て物を判ずる時、善人の惡性もありて、上は善人に似て名利の心ありてまことなきあり。惡人の(二)宿善ありて、上は惡人に似て、そこに善心もあり。道念もあらんは、かゝる事にて侍るべきを、愚痴の道俗は、偏執我慢の心をもつて、持戒修善の人をば、惡人なり雜行なり、往生すまじき者とて、そしりかろしめ、造惡不善の者をば、善人也、攝取の光明に照さるべし、往生決定とうちかたむる。邪見おほきなる過なるべし。是れは聖教をも學し、先達にもちかづきたる人の中

佛餘教皆いたづらもの也とて、或は『法華經』を河にながし、或は地藏の頭にて蓼すりなんどしけり。或里には、隣家の事を下女の中にかたりて、「隣の家の地藏は、既に目のもとまで。摺りつぶしたるぞや」と云ひけり。淺猿かりける仕わざにこそ。或淨土宗の僧も、地藏菩薩供養しけるとき、阿彌陀佛のそばに立ち給へるを、便なしとて取りおろして、やう〳〵にそしりけり。或淨土門の人は、「地藏信ぜんものは、地獄におつべし、地藏が地獄におはする故に」と云へり。さらば彌陀觀音も利生方便には、(一)大悲代受苦と誓はせ給ひて、地獄に(二)遊戲してこそおはしませ地藏にかぎるべしや。此みな佛體の源をしらず、差別の執心ふかき故也。また此國に千部の『法華經』よみたる(三)持經者ありけり。ある念佛者すゝめて、念佛門に入れて、『法華經』よむものは必らず地獄に入るなり、淺猿き罪障なり。雜行の者とてつたなき事ぞと云ひけるを信じて、さらば一向に念佛をも申さずして、年來經よみけん事の悔しさ、口惜さとのみ、起居にいふほどに、口のいとまもなく心のひまもなし。かゝる邪見の因緣にや、わろき病つきて物くるはしくして、「經よみたる、くやしや〳〵」とのみ口ずさみて、はては我舌も、脣も皆くひきりて、

(一)大悲代受苦。大悲代りて苦を受くとよむ。
(二)遊戲。佛の化益を施したまふことは、大悲心を滿足せらるゝことと故、化益を遊戲ともいふ。
(三)持經者。經よむことを主行とする人。

(一)我建超世願　我れ超世の願を建つと讀む。『大無量壽經』にある語。
(二)廣大無邊際。廣大にして邊際なしと讀む。天親菩薩の『淨土論』に出づ。

を習ふ輩をも攝取し給はんこそ、餘の諸佛にもすぐれ、餘の淨土にもこえて、(一)我建超世願の誓もたのもしく、(二)廣大無邊際の國もめでたかるべきに、餘行餘教はえらびすてられて、往生せぬ事ならば、佛は慈悲すくなく、國はさかひ狹くこそ覺ゆれ。或乳母、姬君を養なひて、餘りにほめんとて、「妾がやしなひ姬君は御みめの美くしく、御目は細々として愛らしくおはするぞや」と云ふを、人の目のほそきはわろき物をと云へば、「やら〳〵かた〳〵の御目は、大きにおはするぞ」と云ひけるこそ、思ひ合せられ侍れ。彌陀をもほめぞこなひて侍るにや。「また餘行の往生ゆるさぬ流の中にも、義門まち〳〵也。或人師の義には餘行の往生せぬと云ふは、三心を具せざる時の事也。三心を具すれば餘行もみな念佛となりて往生すべし。名號を唱ふとも三心なくば往生すべからずと云へり。此の義ならば餘行の往生疑なし。もとより三心なくば、稱名念佛とても往生せず。餘行と念佛と、全くかはる事なし。先達はかやうに隔つる心なく申して、機をすゝめ宗をひろむ。其志とがなし。末學在家の人なんど、たゞ詞ばかりを聞いて、餘行をそしるなるべし。中比念佛門の弘通さかりなりける時は、餘

は諸行にわたるべし。但し稱名は念佛の中の肝心也。惠心『往生要集』の正修念佛の下には、諸行これあり。坐禪は(一)法身念佛、經咒は報身念佛なるべし。(二)相好を念じ、名號を念ずるは應身の念佛なるべし。餘行の往生を念佛往生と云はんも、此の意にては苦しみあらじ。稱名の外は往生せずといふ義はひがめるにや。況んや『法華』を誦し、(三)眞言を唱へて往生の素懷をとぐること、經文といひ傳記と云ひ三國の先蹤これ多し。押へて大乘の功能を失なひそしりて、餘經の利益をないがしろにすること然るべからず。されば只仰いで本願を信じ、懃に念佛の功を入れて餘行餘宗をそしり、餘の佛菩薩神明を輕しむる事あるべからず。此人の臨終にそのとが見え侍り。前車のくつがへりは、後車のいましめなるをや。眞實に往生の志あらん人、此事をわきまふべきなり。(四)經に「たゞ(五)五逆と正法を誹謗することをば除く」と云へり。謹しむべし〳〵。「但しかやうに申し侍る事、さだめて又他のそしり侍るべけれども、所存の一義を申し述べんと思ひ侍り。餘行往生ゆるさぬ流は、彌陀を讃るに似て、實にはそしるになるをや。其故は彌陀は慈悲廣大にして、萬行萬善を修する人をも迎へとり、極樂は境ひ無邊にして、餘敎餘宗

(一)法身、報身、應身。宇宙ノ最高理體で全世界にみなぎれるものを法身といひ修行によつてこの法身をさとりあらはした佛を報身といひ、衆生の根機に應じて大小の身體をあらはすを應身佛といふ。

(二)相好。佛のみすがた。

(三)眞言。陀羅尼。咒文。

(四)經。大無量壽經を指す。

(五)五逆。殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血は最も重い逆罪。

は、讀誦大乘、解第一義、孝養父母、五戒八戒、世間の五常までも、廻向して往生すべしと見えたり。(一)『雙觀經』には、四十八願の中には、第十八こそとりわき稱名念佛にて侍れ。第十九は、諸の功德を修して廻向せば、(二)來迎すべしとちかひ、第二十は、德本を植ゑ繫念して、往生すべしと云へり。されば念佛はとりわき諸行の中に選びすぐりて、一願に立てゝ正也、本也、餘行は惣の生因の願に立てゝ、傍也末也。さればとて往生せずとは如何が申さん。善導の御釋にも、「萬行倶に廻してみな往くことを得、一切廻心して安樂に向ふ」と釋して萬行萬善いづれも廻向せば往生すべしと見えたり。雜行の下の釋に「廻向して生るゝことを得べしと雖も、すべて疎雜の行と名く」と釋し給へり。疎きと親しきとはあれども往生せずとは見えず。諸行往生ゆるさぬ流の一義に云はく、(三)三心を念佛と心得て三心具足して餘行を修し、往生するは、たゞ念佛の往生也。三心なき餘行は往生せぬを、諸行往生せずと云へり。此のこと心得られず。三心は安心なり。いづれの行業にも渡るべし。されば安心三心、(四)起行五念行、(五)作業四修と見えたり。稱名も三心なくば生ずべからず。さらば稱名は念佛とは云はれじや、惣は念佛と云ふ

(一)『雙觀經』。『大無量壽經』をいふ。
(二)來迎。佛がこの世へ現れ來て衆生を淨土へ迎へ取ること。
(三)三心。至誠心、深心、廻向發願心。まことに深き往生極樂の信心。
(四)起行五念行。禮拜、讚歎、作願、觀察、廻向の五念は身に行ふこと。
(五)作業四修。長時修、無間修、無餘修、恭重修は修行の形式のこと。

(一)濁世相應の要門。濁れる世にふさはしき肝要の法門。
(二)餘行餘善。念佛以外の修行善根をいふ。

現をおろし奉りて、をこたり申す。「我は制し申せしかば、御咎めあるべしとも覺えず」と申すに、「誠に制せし事はさる事なれども、子を思ふこゝろ切なる故に、心中に我を恨みしこと安からず」とて、遂に失せにけり。彼の子息、家を繼いでありけるも、幾程なくて、家の棟に鷺の居たりけるを占ひければ、神の御咎めと申しけるを、その中にありける陰陽師「神の罰、何事の候べき。封じ候はん」と云ひけるが、酒盃持ちながら縛られたるが如くに、手を後へまはして、すくみて死にけり。彼の陰陽師が子息、今にありて、此の事、且は人にも語り侍るとぞ。當世の事なれば、聞き及びたる人多く侍り彼の子孫親類ある事にて、其の憚り侍れども、人の上を云はん爲にはあらず。たゞ神の威の輕からざる由を人にしらせん爲なり。凡そ、念佛宗は、(一)濁世相應の要門、凡夫出離の直路なり。誠にめでたき宗なるほどに、(二)餘行餘善をきらひ、餘の佛菩薩神明までも輕しめ、諸大乘の法門をも謗ることあり。この俗、諸行往生ゆるさぬ流(流儀)にて、餘の佛菩薩をもかろしめける人也。凡そ念佛宗の流れ、まち／＼なりといへども、暫く一義によせて申さば、おほかたは經の文も釋の中にも、餘行の往生見え侍り。『觀經』に

せて、「をこたり申し給へ」と、泣く〳〵申しけれども用ひず。病ひ次第におもりて、たのみなく見えければ、母思ひかねて、神明をおろし奉りて、病者のもとへ使をやりて、「まげて神田返しまゐらせ、をこたり申して、神田をも猶そへてまゐらせ給へ」といふに、病人物くるはしき氣色にて、頸をねぢて「何條、神」といひて、少しもゆるさず。使ひひそかに「しか〳〵」と申しければ、御子に神つきて、樣々に詫宣しける程なれば母やはらげて、「病人は神田返しまゐらせんと申し候。今度の命ばかり助けさせ給へと申せば、かんなぎ打ち笑ひて、頸をねぢて。「何條、神といふ物をや。あら、きたなの心や。我は本地(一)十一面の化身なり。本師阿彌陀の本願をたのみ誠の心ありて念佛をも申さば、如何にいとをしくも覺え尊とからん、此程にきたなく濁り、まさなき心にては、爭か本願に相應ずべき」とてはた〳〵と爪はじきして、はら〳〵と泣き給ひければ、此をきく人みな涙を流しけり。さてねぢたる頸なをらずして、息たえにけり。最後のとき年來の師匠、學生、(二)善知識にて、念佛すゝめければ、こざかしとて枕を以て打ちけるが、頭を打ちはづして希有の命とぞ見えける。其の後、母の尼公、又わづらひて白山の權

(一)十一面。十一面觀世音。

(二)善知識。佛法を敎へる善き師匠。

す。故に佛說いて生死の長夜となす」と云云。慈恩大師は、「心外の法あれば生死に輪廻す。一心を覺知すれば生死ながく棄つ」と釋し給へり。生死の長夜あけざる事、心外に法を見て、妄境のために轉ぜらるゝ故なり。心の外に法を見ずば、法すなはち心、心すなはち法にして、生死を出づべしといへり。心あらん人、一心の源をさとりて、(一)三有の眠をさますべし。

十、淨土門の人神明を輕んじ罰を蒙る事

鎭西に淨土宗の學生の(二)俗ありけり。所領のうちの神田を撿注して、餘田をとる間、社僧神官等いきどほり申し鎌倉にて訴訟しけれども、餘田をとること地頭の申すところ一分道理とて、沙汰なくなりける間、地頭になほ〳〵申すに、大方ゆるさず。はては(三)咒詛し奉らんといひけれども、いさゝかも恐るゝ事なし。「いかにも咒詛せよ、(四)淨土門の行人神明なんど何とか思ふべき。(五)攝取の光明を蒙らん行人をば神明もいかで、罰し給ふべきとて、烏許づきあざむきけり。さて神人ども憤りふかくして、咒咀しけるほどに、幾程なく、惡き病つきて物くるはしかりければ、母の尼公おほきに驚き恐れて、我が孝養とも思ひて、神田を返しまいら

(一)三有。三界に同じ。三種の迷の世界にあること。
(二)俗。在家の人をいふ。
(三)咒詛。神佛に祈禱して咒ふこと。
(四)淨土門。淨土往生を敎ふる宗門
(五)攝取の光明。阿彌陀佛が救濟のうちに攝め取る光明のはたらき。

ども、生死の中の夢なり。『唯識論』の文この心なるべし。樂天いはく、「榮枯事過都成レ夢、憂喜心忘便是禪」と。實には事すぎて空しきのみにあらず、時にあたつても自性なき故に空なり。この故に生にあたつて不生なり。諸法をまことに夢と知りて、喜もなく憂もなく、心地寂靜ならば、自然に(一)空門に相應すべきにや。又いはく、「禪功自見無ニ人覺一合レ是愁時亦不レ愁。」文の意いはく、夢の中の事は喜も憂も心をとゞむべき事なし、我等が覺と思ひつけたる世間の事みなこれ夢なり、生を悅び死を憂へ會を樂しみ離を悲しむ事、これ夢と知らざる心なり。此等の事に都べて心うごかずば、即ち空門に入る人なり。口に云ふを禪とせず心に諸念わすれて寂靜なるを禪と云ふべしと也。『莊子』にいはく、「狗はよく吠ゆるを以て良しとせず、人は善く言ふを以て賢とせず」云云 されば法門を能く云ふ人も、心に名利(二)五欲の思ひわすれずば、空門に遠し。『梵網』にいはく、「口には便ち(三)空と說けども、行は(三)有のうちにあり」云云末代は眞實の智慧も道心も有る人稀なれば、口には法を說けども、心には道を行ずる事なし。されば夢の中の事を實とのみ思うて執心ふかく愛執あつし。『唯識論』にいはく、「未だ眞覺を得ず、恒に夢中に處

(一)空門。諸法一切みな空なりとさとる門。

(二)五欲。色、聲、香、味、觸の物質的欲。

(三)空有。一切平等にして無なり(空)と云ふと、差別にて實在なり(有)と云ふと。

なこれ(一)無明の眠の中の妄想の夢なり。されば『圓覺經』には「始めて知る、衆生本來成佛なり、生死(二)涅槃、昨夢の如し」と說いて、眞の悟を開きて見れば、無始の生死、始覺の涅槃たゞ一念の眠なり。本覺不生の心地のみこそ、眠りもなく、夢もなき眞の心なれ。古人いはく、「昨日の覺、今日の夢、別なる事なし。覺の境も事すぎぬれば夢の如し。夢の事も時にあたつては覺に似たり。誰の智あらん人か、夢と覺と殊なりと思はんと云へり。誠に深き理りこそ悟りがたく侍へれ。夢幻の世上の事、心あらん人うたがふべからず。梁の武帝のとき夢相ありけり。帝これを試みんために空夢をかたりたまはく、「朕が寢殿の甍、ふたつ鴛となりて飛びさると見たり。いかなる夢ぞ」と。夢相奏していはく「今日臣下二人、夭亡すべき御夢」と。さる程に近臣二人鬪諍して、共に夭亡す。帝驚きて夢相を召して、「昨の夢は、まことは汝を試みんため也。然るに此事たがはず。いかに」と仰せられければ、「かく仰せあらんと思食す、即ち夢なり」と申しけり。是れ夢と覺とおなじき心なり。(三)法相には常の夢と思へるは、(四)獨散の意識とも、闇昧の意識とも云へり。我等が覺と思へるは、明了の意識の夢といへり。明闇すこし異なれ

(一)無明。迷のくらやみ。

(二)涅槃。滅度と譯する梵語。煩惱を滅し生死海を渡りこえたさとりをいふ。

(三)法相。法相宗『唯識論』により唯心論を主張す。

(四)獨散の意識。外境によりて働かず。たゞ意識のみ働くときをいふ。

かたちなだらかに、尋常の者なりける上、さが〳〵しく手跡なんども、なだらかなりければ、今は子にこそし奉らめとて、鎌倉へも代官に上せ物の沙汰なんども賢々しくしけり。孫また形まことに人々しく見えければ、かしづきもてなしけり。子共も兩三人いできぬ。この子十三と云ひける年、元服のために鎌倉へのぼる。さま〳〵の具足ども用意して船あまたしたてて、海を渡るほどに、風はげしく波たかきに、この子舟端にのぞみて、あやまちに海へ落ち入りぬ。あれ〳〵と云へども、沈みて見えず。胸ひしげてあはてさはぐと思ひて夢さめぬ。十三年が間の事をつく〳〵と思ひ續くるに、たゞ片時の眠の間也。たとひ本意とげて樂みさかえありとも、たゞ暫くの夢なるべし。悦びあるとも、又かなしみ有るべし。由なしと思ひてやがてそれより歸り上りて、熊野にて(一)行ひけり。和光の御方便にてこそありけめ。昔莊周が片時の眠の中に胡蝶となりて、百年か間、花の薗に遊ぶとみて醒めて思へば暫くの程なり。『莊子』にいはく、「莊周が夢めに胡蝶となれりとやせん。胡蝶が夢に莊周となれりとやせん」と云へり。誠には現と思ふも夢なり。共に夢なれば分きがたきよしを云ふにこそ。凡そ(二)三界の輪廻、(三)四生の轉變、み

(一)行ひ。修行すること。

(二)三界。欲界、色界、無色界。迷の世界の總稱である。

(三)四生。胎生、卵生、濕生、化生、

我れ淨行の志ありて、靈社にして佛法を行ぜんと思ひ企つ。かゝる惡緣にあひて妄念抑へがたきこと口惜しと思ひて、本尊にも權現にも、此心やめ給へと祈請しけれども、日に隨うては、かの面影たちそひて忘れず。何事も覺えざりければ、忍びがたくして心のやるかたと、負うちかけて、あくがれ出て、上總國へ下りける。さて鎌倉すぎて、六浦と云ふ所にて便船をまちて、上總へ越さんとて、濱にうち伏して休みける程に、あゆみつかれて打ちまどろみたる夢に見けるは、便船を得て上總の地へわたり、高瀧へ尋ねゆきてければ、主いであひて「如何にしてくだり給ひたるぞ」といふ。「鎌倉の方ゆかしくて、修行にまかり出で侍りつるが、近き程と承りて、御住居も見奉らんとて參りて侍る」と云ふ。さてさま〳〵にもてなしけり。やがて上るべき體に申しければ、「暫く田舍の樣も見給へかし」とて止めけり。本よりその志なれば止まりて兎角うかゞひよりて、忍び〳〵かよひけり。互の志あさからず。さる程に男子一人いできぬ。父母是をきゝて、大いにいかりて、やがて不孝したりければ、忍びて緣ありける人のもとにかくれ居て、年月を送るほどに、たゞ一人娘なれば力及ばずとて許しつ。この僧も若き者のみめ

（一）禪師。坐禪觀法をする師僧。支那にては神秀を大通禪師。日本にては道隆を大覺禪師の稱號を賜ふより勅諡號となる。

もめでたくおはすべきなり。

漢土の或山の麓に靈驗あらたなる社ありけり。世の人これをあがめ、牛羊魚鳥なんどを以て祭る。その神たゞ古き釜なりけり。或時、一人の禪師かの釜を打ちて、「神いづれの所より來り、靈いづれの所にかある」と云ひて、しかしながら打ちくだきてけり。其時青衣きたる俗一人現れて、冠を傾けて（一）禪師を禮して云はく、「我こゝにして多くの苦患をうけき。禪師の無生を説き給ふによりて、忽に業苦をはなれて、天に生ず。その恩報じ難し」と云ひて去りぬ。されば殺生をして祭るには、神明苦を受け、清淨の法味を捧げ、甚深の義理を説くには樂を受くと云へり。此の意を得て、罪なき供物を捧げ妙なる法味を奉るべき也。

九、和光の方便に依りて妄念を止むる事

上總國高瀧と云ふ所の地頭、熊野へ年詣しけり。只一人ありける娘を齋きかしづきて、かつは彼れがためとも思ひければ、相具してぞ詣りける。此の娘みめかたち宜しかりけるを、熊野の師の房に某しの阿闍梨とかやいふ若き僧ありけり。京の者なりけり。此の娘を見て、心にかけて如何にも忍びかたく覺えけるまゝに、

この女房もの思ひたるいろにて食事もせず、年來ちかく使ひつけたる女人、主の氣色を見て、「何事を思食し候ぞ」と問ひければ、「しか〳〵」と語りて、「年ひさしく思ひたちて參詣するに、かゝる心うき事あれば、物もくはれず」と云ふ時、「さらば只物もまゐり候へ、夜なれば誰ともしり候はじ、我身代りまゐらせて如何にもなり候べし」といへば、「己れとても、身を徒らになさんこと悲しかるべし」とて、互に泣くより外の事なし。「然るべき先世のちぎりにてこそ、主從となりまゐらせて候へば、御身にかはりて徒らになり候はん事、つや〳〵なげくべからず」と、打ちくどきて泣々いひけり。「さらば」とて、物食うてけり。さて夜よりあひたりけるに、先達はやがて金になりぬ。熊野には死をば金になるといへり。女人はことなる事なし。此事かくすべくもなければ、世間に披露しけるに、人々「すべて苦しからじ、たゞ女人參るべし」と云ひけり。まことに恙なし。(一)律の制にかなへり。同心の欲愛ならば、二人金になるべし。主のため命をすてゝ、我が愛心なきゆへに過なし。律制に違はず侍るにや。熊野詣で等みな戒行にたがはず。諸諸の靈社に中古より講行なんと行るは、(二)本地の御意に叶ふべき故に、和光の威

(一)律制。戒律の制規。

(二)本地。神の本體の地位なる佛をいふ。

古徳の云はく、「佛法はたやすく流布しがたし。仍て天竺の菩薩、漢土へ生まれて、まづ外典をひろめて父母の神識ある事をしらしめ孝養の志を敎へて佛法の方便とす」と云へり。されば(一)外典の敎をば(二)權敎といひて正しき佛法にはあらず。佛法流布しぬる後は、釋敎を行ずる人は、かの祭を改めて僧の(三)齋とし、佛法を以つて孝養の儀をなす。これを以て思ふにも、我國は佛法の名字も聞かず、因果の道理も知らざりし時、佛につかへ法を行ずべき方便に、祭といふ事を敎へて、漸く佛法の方便とし給へり。本地の御心をうかゞひ、佛法の敎ひろまりなば、昔の業をすてゝ法味をさゝげんこそ、眞實に神慮にかなふべきに、人の心はふるく仕慣れぬる業をば捨てがたく、思ひ染みぬる心は忘れがたきまゝに、只ものを忌み祭をおもくして、法味を奉る事すくなきは、返す〳〵も愚かにこそ。和光の面もなほ戒を守るこそ神慮に叶ふ事なれ。

熊野へ詣づる女房ありけり。先達この檀那の女房にこゝろをかけて、たび〳〵その心をいひける。さて先達の心をたがへぬ事なれば、すかして「あすの夜〳〵」といひけり。いま一夜になりて、しきりに「今夜ばかりにて侍る」と云ひける日、

(一)外典。佛教以外の典籍（シヨモツ）。
(二)權教。權（カリ）の教。佛教へ導き入れる方便の教。
(三)齋。僧の食時を云ふ。僧は正午を過ぎざる前に食事するが規則にて若し正午を過ぎてて食すれば非時といひて正食と見なさず。

說には寺法師、昔より未だ定らざる也。この餌を取りて說法しけるは、「汝放つまじければ、生くべからず。たとひ生くるとも久しかるべからず。生ある者は必ず死す、汝が身は我が腹に入れば、我心は汝が身に入れり。(一)入我々入の故に、我が行業汝が行業となりて、必ず出離すべし。然れば汝を食ひて、汝が菩提を訪ふべし」とて、打ち殺してけり。まことに慈悲和光の心にて有りけるにや。また只ほしさに殺しけるにや、覺束なし。信州の諏方、下野の宇都の宮、狩を宗として鹿鳥なんどを手向くるもこの由にや。大權の方便は凡夫知るべからず。眞言の(二)調伏の法も、世の爲め人の爲め、仇となる暴惡のものを行者慈悲利生の意樂に住して調伏すれば、彼れ必ず慈悲に住し惡心をやめ、後生に菩提をさとるといへり。たゞ怨敵の心を以つて行ぜんは、彼の法の本意に非ず。定めて罪障なるべし。また法もなすべからず。返つてわが身災難にあひ罪障ふかし。されば神明の方便もこの心なるべし。凡そは殺生をせずして佛法の教の如く(三)戒行をもまほり、(四)般若の法味をさゝげんこそまことには神慮にかなふべき事にて侍れ。その故は漢土に、儒、道の二教を始めてひろめしに、牛羊等を以つて孝養には祭る事なるを、

(一)入我々入。密教の語。大日我に入り我れ大日に入りて融け合ふこと。

(二)調伏の法。惡魔怨敵を降伏するために修める祈禱。

(三)戒行。戒律の修行。

(四)般若。梵語、智慧と譯す。佛のさとりにあらはるゝ眞實の智慧をいふ。

とぞ。或上人、參籠して社頭の樣なんど見ければ、海中の鱗いくらといふ事もなく祭供しけり。和光の本地は佛菩薩なり。慈悲をさきとし、人にも殺生をいましめ給ふべきに、此樣おほきに不審なりければ、とりわき此の事を先づ祈請申しけり。示現に蒙りけるは「誠に不審なるべし、これは因果のことはりも知らず、徒らに物の命を殺して浮びがたき物の、我に供せんと思ふ心にて、過を我にゆづりて、彼は罪かろく、殺さるゝ生類は、(一)報命つきてなにとなく徒らに捨つべき命を我に供する因緣によりて、佛道に入る方便をなす。仍て我力にて報命盡きたる鱗をかりよせてとらする也」と示し給ひければ、不審はれにけり。

江州の湖に、大なる鯉を浦人とりて、殺さんとしけるを、山僧直をとらせて湖へ入れにけり。その夜の夢に、老翁一人來りて云はく、「今日我命を助け給ふ事、大に本意なく侍るなり。その故は、徒らに海中にして死せば、出離の緣缺くべし。賀茂の贄になりて、和光の方便にて出離すべく候ふなるに、命のび候ひぬ」と恨みたる色にて云ひけると、古き物語にあり。

江州の湖を行くに、鮒の船に飛び入りたる事ありけるに、一說に、(二)山法師、一

(一)報命。果報として受けたる壽命

(二)山法師。比叡山の僧を山法師といふ。三井寺の僧を寺法師といふ。共に天台宗の僧なり。

と見て道心の色も深くして終りめでたかりけり。世間の事をのみ心にかけて、佛神に祈り申すは返す／＼愚かなり。和光の御本意は、佛道に入れんため也。世間の利益は暫の方便なるべし。このこと、彼の孫弟子の永海法印物語なり。慥の事にこそ。(一)『止觀』にいはく「和光同塵は、結緣の初め、(二)八相成道は以つて其の終を論ず」いかにも佛意を仰いで、成道の化儀をまつべし。世間の善には孝養は最上の福なり。然れども菩提心に比ぶれば劣れり。淨土に生じて引導せん事まことの孝養也。善根の優劣は、譬へば星の光あれども月の光に及ばず。月あきらかなれども日に及ばず、此の如く孝養も菩提心に及ぶべからざる也。

八、生類を神明に供ふる不審の事

安藝の嚴島は、菩提心祈請のために、人多く參詣するよし申し傳へたり。其の故を或人申せしは、昔、(三)弘法大師參詣し給ひて、甚深の法味を捧げ給ひける時、示現に何事にても御所望のこと承るべきよし仰せられけるに、「我身には別の所望候はず末代に菩提心祈請する人の候はんに、道心を賜び候へ」と申し給ひければ、「承りぬ」と仰せありける故に、昔より上人ども常に參詣する事にてなん侍る

(一)『止觀』。支那天台大師の『摩訶止觀』をいふ。

(二)八相成道。佛が世に出でゝ衆生を濟度せらるゝに當り、必ずふみたまふ八種のすがた降天、託胎、降生、出家、降魔、成道、說法、涅槃をいふ。

(三)弘法大師。空海をいふ。眞言宗の開祖。唐に學びて密教を傳ふ。承和二年六十二にて高野山に寂す。『十住心論』、『即心義』等の著書多し。延喜二十一年弘法大師と勅諡せらる。

るれば、取り返すなり」と仰られけりと見て、さては深き、御慈悲にこそとて、夢の中にも、かたじけなく覺えて、驚いてやがて本山へ歸りて、一筋に後世菩提の勤のみ怠らずして、往生したりとなん申し侍れば、神にも佛にも申さん事は、示現なくとも空しからじ。いかにも御計ひあるべきにこそ。たゞ信をいたし功をいれて、(一)冥の益をたのむべきなり。

(二)行基菩薩の御遺誡に云はく、「一世の榮花利養は、多生輪廻の基なり。」(三)寶地房の證眞法印、夢に西坂本より、十禪師の上らせ給ふに參り遇ひぬ。手輿にめして御眷屬濟々としてましゝます。何事をか申さましと思ひて老母の貧しきことを思ひ出て、「彼の老母養ふほどのこと御計り候へ」と申しければ、御色差しまことにめでたく、御心地よげに見えさせ給ひけるが、此の事を聞かせ給ひて、しほ〳〵とやせおとろへて、物思ふ相にならせ給ふ。まことや世間の事を申すによりて、御心にかなはぬにこそと思ひ返して、「老母の事は幾程あるまじき世にて候へば、いかでも候ひなん、後世菩提の事いかゞ仕り候べき。御たすけ候へ」と申しければ、御氣色もとの如くにならせ給ひて、打ち笑みて、うなづかせ給ふ

(一)冥の益。冥加の利益。凡夫は知らねども、どことなく加へたまふ神佛の利益をいふ。
(二)行基菩薩。法相宗の僧。和泉の人。後諸國を巡化して傍ら交通を計る。天平勝寶元年八十にて寂す。
(三)寶地房の證眞法印。天台宗の學僧。比叡山に閉ぢこもり、專ら述作を事とし、源平の戰亂を知らず。後、源空に淨土敎を聞く。「三大部私記」三十卷等の著あり。

だ我心を恥ぢしめて、今より後、過なく罪なき身となりて、淨土菩提をこひねがふべし。二條院の讃岐、この心をよめるにや、

うきもなを昔のゆゑとおもはずば、いかにこの世を恨みはてまし

凡そ佛神の感應も、少しきの因緣を以ってこそ加する事に侍れ。今生夢の世の榮華は、いかでもありなん。後世菩提の事を、かなはぬまでも祈り申さんところ、神慮にもかなひぬべき。(一)桓舜僧都と申ける山僧も、あまり貧くて、日吉に參籠して祈請しけれども、示現も蒙らず。山王大師をも恨み奉りて、離山して、稻荷に詣で申しけるに、幾程もなくて、千石といふ札を額におさせ給ふとみて、悅び思ふほどに、また夢に、稻荷の仰せられけるは、「日吉の大明神の御制止あればさきの札は召し返しつ」と仰らる。夢の中に申しけるは、「我こそ御計なからめ。よその御めぐみをさへ御制止あるこそ心得がたく侍れ」と申せば、御返事に、「我は小神にて法味を悅びて、そのほかの事思ひもおかず。彼れは太神にておはしますが、桓舜は今度生死はなるべき者なり。若し今生の榮花あらば、障りとなりて出離かたかるべき故に、いかにと申せども聞きも入れぬに、何しに賜ぶぞと仰せら

(一)桓舜僧都。天台宗の僧。後法性寺の座主となる。天喜五年八十にて寂す。

（一）羅漢。詳しくは阿羅漢といふ。小乘の最上のさとり。

れて、天上に隱しをかせ給ひしも、餘の釋種の打たれける日、自然として、御鉢の中にして死せり。かの因緣を說き給へるは、「五百の釋種、昔五百人の網人として、一つの大なる魚を海中より引きあげて、害したりし故なり。かの大魚といふは、今の瑠璃太子なり。我れそのとき童子として草の葉を以つて魚の頭を打ちたりし故に、今日頭いたきなり」と仰せられて、釋尊もその日御惱みありけり。況んや凡夫の位に、因果の理り遁なんか。利軍支比丘といひけるは、（一）羅漢の聖者なりけれども、あまりに貧しくして、乞食すれども食を得ず。佛敎へて塔の塵をはかせさせ給ひければ、その日はその福分にて乞食を仕得けり。或時朝寢をして遲くはきけるを、餘の比丘これをはきてけり。其後乞食するに得ずして、七日が間、食せずして沙を食し水をのみて、餓死しぬ。佛因緣を說き給ひけるは、「過去に母のために不孝にして、母が餓ゑて食物を乞ひけるとき、「沙をも食ひ水をも召せかし」と云ひて、七日食をあたへずして、母を干し殺したる業なり。聖者となれども、猶報うなり」とこそ說き給ひけれ。かゝる因緣なれば、貧しく卑しきも、難に遇ひ苦しくある事、みな我昔の過なり。世をも人をも恨むべからず。た

（一）廻向。此方から彼方へふりむけること。

（二）釋種。釋迦家の種族。

にむけて(一)廻向しかなはざらんまでも、道心をば祈り申すべきなり。

東塔の北谷に、貧しき僧ありけり。日吉へ百日參詣して祈り申しけるに、「あひはからふべし」と仰せある示現を蒙りて、悦び思ひて過すほどに、いさゝかの事によりて、年來の房主に追ひ出されて、寄るかたもなかりけるまゝに、西塔の南谷なる房に同宿してけり。示現蒙りて後は、物を待つ心地にて有りけるに、させる事なきのみにあらず、房主にも追ひ出だされぬ。面目なく覺えて、また參籠して祈請申す程に、示現に蒙りけるは、「先業つたなくして、いかにも福分なき故に、東塔の北谷は寒き房なれば、西塔の南谷の暖かなる房へやりたるなり。此こそ小袖一つの恩と思ひ計ひたれ、此外の福分、我力の及ぶべきにあらず」と示し給ひける上は、思ひ切つて祈り申さず。先業の決定して、逃れがたきは、佛神の御力もかなはず。されば神力、業力にかたずといへり。佛の在世に、五百の(二)釋種、吠瑠璃太子に打たれしを、釋尊得助け給はず、目連、神通を以て救ふべき由申せしを佛ゆるし給はず。釋尊の御親類なれば、何なる神通をも運びてたすけ給ふべきにと、不審申せしかば、その不審を開かんために、十人の釋種を御鉢の中に入

(一)山門。比叡山のこと。

(二)佛陀。佛の詳しき梵語。覺と譯す。

心なるべしとて、やがて遁世の門に入りて、ひとすぢに出離の道を勤めける。

昔、三井寺、(一)山門のために燒き拂はれて、堂塔、僧坊、佛像、經卷のこるところなく、寺僧も山野にまじはり、人もなき寺になりにけり。寺僧の中に一人、新羅明神へ參りて、通夜したりける夢に、明神御戸を挑げて、よに御心地よげにて見えさせ給ひければ、夢の中に思はずに覺えて、「われ寺の佛法護らんと御誓ひあるに。かく失せはてぬること、如何ばかり御なげきも深かゝるらんと思ひ給ふに、其御氣色なきこと、如何に」と申しければ、「まことに、如何でかなげき思食さざらん。されども、此事によりて眞實の菩提心をおこせる寺僧一人ある事の喜ばしきなり。堂塔佛經は財寶あらば造りぬべし。菩提心をおこせる人は千萬人の中にも有難くこそ」と仰せられけるとみて、かの僧も發心して侍りけるとこそ申し傳へたれ。神明の御心、菩提心をおこし、眞實の道に入るを悅び給ふ事、いづれの神もかはり給はじかし。今生の事を祈り申さんは、神慮にはかなはじとこそ覺ゆれ。先世の果報にて、貧富さだまりあり。あながちに現世のこと、神明(二)佛陀に申さんは、且は恥かしかるべし。まことに愚かにこそ覺ゆれ。同じ行業を菩提

め行ふべし。

七、神明道心を貴び給ふ事

南都に學匠ありけり。學窓に肱をくだして、螢雪の功、年つもりて、碩學の聞えありけり。或るとき春日の御社に參籠す。夢に大明神、御物語あり。(一)『瑜伽』『唯識』の法門なんど、不審申し、御返答ありけり。但し御面をば拜せず、夢の中に申しけるは、「修學の道にたづさはりて、稽古年久しく侍り、唯識の法燈をかゝげて、神明の威光を增し奉る。然ればかく親たり尊體をも拜し、慈訓をも承る。これ一世の事には侍らじと、宿習までも悅び思ひ侍るに、同御貌を拜し奉りたらば、いかばかり歡喜の心もふかく侍らん」と申ければ、「誠に修學の功の有難く覺ゆればこそ、かく問答もすれ。但し道心のなきがうたてさに、面はむかへたうもなきなり」と仰せありとみて、夢さめて慚愧のこゝろ肝にとほり、歡喜の淚袖にあまりて覺えけり。まことに佛法はいづれの宗も、生死を(二)解脫せんためなり、名利をおもふべからず。然るに(三)南都北嶺の學侶の風儀、ひとへに名利を先途に思ひて、菩提をよそにする故に或は魔道に落ち、或は惡趣に沈むにこそ。口惜さ

(一)『瑜伽』『唯識』『瑜伽論』『唯識論』とて、佛教の唯心論を述べたる書。

(二)解脫。迷を解き苦を脫れることとさとることと。

(三)南都北嶺。奈良地方と比叡山とをいふ。

なりしはみな學生なり。まのあたり大明神の御說法聽聞することこそ忝なく侍れと語りける。地藏は本社鹿島の三所の中の一なり。殊に利益めでたくおはするとぞ申しあひ侍る。無佛世界の導師、本師付屬の(一)薩埵なり。本地垂迹何もたのもしくこそ。されば和光の利益は何處も同事にや。日吉の大宮の後にも、山僧おほく天狗となりて、和光の方便によりて、出離すとこそ申し傳へたれ。それも諸社の中に(二)十禪師靈驗あらたにまします。これも本地は地藏薩埵也。とてもかくても、人身をうけたる思ひ出、佛法に遇へるしるしには、一門の方便にとりつきて。出離を志すべし。『心地觀經』には「一佛一菩薩を憑むを要法とす」と說けり。されば、內には佛性常住の理を具せる事を信じ、外には本地垂跡の慈悲方便を仰いで、出離生死の道を心中にふかく思ひ染むべきをや。(三)三惡の火坑足の下にあり、(四)六道の長夜夢いまださめず、爪上の人身をうけ、(五)優曇の佛法にあひながら、なすことなく勤ることなくして、(六)三途の古里に歸りなば、千度悔い百度悲しむとも、何の益かあるべき。多生に希にうかび出で、億劫に一たび遇へり。心をゆるくして空しく光陰を送る事なかれ。時、人をまたず、死、かねてわきまへず。ゆめ〳〵勤

(一)薩埵。大有情と譯す。菩薩に同じ。

(二)十禪師。日吉山王七社の一。

(三)三惡の火坑。地獄、餓鬼、畜生の最も惡しきところ故、三惡道、三途ともいふ。火坑は三惡道を火の穴にたとへたる語。

(四)六道。三惡道に修羅、人間、天上の三善道を加へていふ。

(五)優曇。優曇華のこと。靈瑞華と譯す。三千年に一度開く花といふ。珍らしきことに喩へる。

(六)三途。三惡に同じ。

神明は内には智慧ほがらかに、外には慈悲たへなり。智慧も慈悲もあらば、かならず神明の伴と思食すべきにや。書にいはく「火は乾けるにつき、水は潤へるに流る。」まことに衆生苦惱して、心かはかば、智慧の火も付きぬべし。なさけの潤ひあらば、慈悲の水も流れぬべし。

六、和光の利益甚深の事

南都に小輔僧都璋圓とて、解脱上人の弟子にて、碩學の聞こえありしが、魔道に落ちて、或る女人に付いて、種々の事ども申しける中に、我が大明神の御方便のいみじき事、いさゝかも値遇し奉る人をば、如何なる罪人なれども、他方の地獄へは遣はさずして、春日野の下に地獄を構へて取り入りつゝ、毎日晨朝に第三の御殿より、地藏菩薩の(一)灑水器に水を入て、(二)散杖をそへて水をそゝぎ給へば、一滴の水、罪人の口に入りて、苦患しばらく助かりて、少し正念に住するとき。(三)大乘經の要文、陀羅尼なんど唱へて聞かせ給ふこと、日々に懈りなし。この方便によりて漸く浮び出で侍るなり。學生共は春日山の東に香山といふ所にて、大明神(四)『般若』をとき給ふを聽聞して、論義問答なんど人間にたがはず、昔學生

(一)灑水器。水を入れてそゝぎかける器。
(二)散杖。水をつけてまきちらす細き尺餘の杖。
(三)大乘經の要文　大乘の經典の肝要な文句。
(四)『般若』。般若經のこと、『大般若經』六百卷、『般若心經』一卷などをいふ。般若とは智慧と譯する梵語なり。

とこそおほせられけれ。或時この兩人、春日の御社へ、參詣し給ひけるに、春日野の鹿の中に膝を折りて伏して敬ひ奉りけり。明慧房上人。渡天のこと心中ばかり思ひたち給ひけるに、湯淺にて春日の大明神御託宣ありて留め給へり。彼の御託宣の日記侍るとぞ承る。遙々と離れんことを歎き思食すよしの仰せありて御止めありけるこそ、哀れに覺ゆれ。「もし思ひたち候はゞ天竺へ安穩に渡りなんや」と申し給ひければ、「我だに守らば、などか」とこそ仰せありけれ。そのとき上人の手をねぶらせ給ひけるが、一期のほど香ばしかりけるとぞ。解脫房上人、笠置に般若臺と名けて閑居の地をしめて、明神を請じ奉り給ひければ童子の形にて、上人の頸に乘りて渡らせ給ひけり。さて御詠ありけり。

　我ゆかん行きてまもらん般若臺、釋迦の御法のあらんかぎりは

或るとき般若臺の(一)道場の虛空に御音ばかりして、

　我をしれ釋迦牟尼佛の世にいでゝ、さやけき月の夜をてらすとは

常に法門なんど仰せられ申し給ひけるとこそ、誠に在世の事を聞く心地して、かたじけなくも、浦山しくも侍るかな。光ある者は光ある者を伴とすといへり。

(一)道場。佛道修行の場所。

（一）明慧房。高辨ともいふ。山城高尾山の文覺に仕へ後、華嚴宗の學僧となる。北條泰時の崇敬をうけ、貞觀元年六十にて寂す。

（二）解脱房。卌四頁をみよ。

とて、請じてさま〴〵にもてなして馬鞍用途なんど沙汰して、高野へ送りける。無下にちかき事なん。

また去ぬる承久の亂の時當國の住人おそれて社頭にあつまり築墻の内に世間の資財雜具まで用意して所もなく集り居たる中に、或は親にをくれたるもあり、或はうぶやなる者もあり、神官ども制しかねて、大明神をおろしまゐらせて、御詫宣を仰ぐべしとて、御神樂まゐらせて、諸人同心に祈請しけるに、ひとりの禰宜に詫して、「我れ天より此の國へ下ることは、萬人を育みたすけんため也、折にこそよれ忌むましきぞ」と仰せられければ、諸人一同に聲をあげて隨喜渇仰の涙をながしけり。其の時の人、今にありて語り侍る。されば神明の御心は、いづれもかはらぬにこそ。たゞ心清くは身も穢れじかし。日吉へも或る遁世者、死人を持ち孝養して頓て參りけるを、神人制しければ、御詫宣ありて御ゆるしありけりと云へり。

五、神明慈悲智慧ある人を貴び給ふ事

春日の大明神の御詫宣には、「（一）明慧房、（二）解脱房をば我が太郎次郎と思ふなり」

經住が、「我は觀音の化身なり」となのれども。人信ぜぬまゝにおびたゞしく誓狀するを、或る人、「觀音の化身となのるを人信ぜずば、(一)神通なんどを現してみせよかし、誓狀こそ無下におめたれ」といひければ、「あまりに久しく現ぜで、神通もわすれて侍るものをや」といひける。思ひあはせられて、をかしくこそ。末代は時にしたがふ振舞ひにて、權者もわきがたかるべし。牛羊の眼を以って衆生を評量せざれと云へり。誠には知りがたかるべし。

尾張國熱田の神官の語りしは、(二)性蓮房と云ふ上人、母の骨をもちて高野へまゐりける次に、社頭に宿せんとす。人みな知りて宿かす者なかりければ、太宮の南の門の脇に參籠したりける夜、大宮司の夢に、「大明神の御使とて、神官一人來りて今夜大事の客人を得たり。能々もてなせと仰にて候ふと云ふとみて、夢さめて、使者を社壇へまゐらせて、通夜したる人やあると尋ぬるに、この性蓮房のほかに人なし。使者歸りて此由を申す。「さては」とて、この僧を請ずるに「母の骨をもちて候へば、得參らじ」と申しけるを、「大明神の御下にては、萬事神慮を仰ぎ奉る事にて侍り今夜かゝる示現を蒙むりぬる上は、私に忌みまゐらするに及ばず」

(一)神通。不思議の通力。天眼、天耳、神足、他心、宿命、漏盡の六神通あり。神は不思議といふこと。

(二)性蓮。關東の人。高野山に住めり、寂年壽缺く。

大きに驚き思ひながら、試に吉野の方へむかひて歩めば、少しもわづらひなかりけり。その時こそ、「さてはまゐれと思食したるにや」と、心とりのべて參詣するに、別のわづらひなし。さて恐もあれば、御殿より遙なる木の下にて、念誦し法施たてまつるに、折節かんなぎ神つきて舞をとりけるが走り出でて、「あの御房はいかに」とて來たりけり、「あら淺まし。これまでも參るまじかりけるに、御咎めにや」と胸うちさはぎて、恐れ思ひける程に、近づきよりて、「いかに御房、此程待ち入りたれば、遲くはおはするぞ。我は物をばいまぬぞ。慈悲こそ尊とけれ」とて、袖をひきて拜殿へ具しておはしける。上人あまりにかたじけなく、尊とく覺えければ、墨染の袖しぼるばかり也」さて法門など申し承りて、泣く〳〵下向してけり。そのかみ(一)惠心僧都の參詣せられたりけるにも、御託宣ありて、法門なんど仰せられければ、めでたく難有く覺えて、天台の法門不審申されけるに、明に答へ給ふ。さて次第にとり入りて宗の大事を問ひ申されける時、此かんなぎ柱に立ちそひて、足をよりてほけ〳〵と物思ふ相にて、あまりに和光同塵が久しくなりて忘れたるぞと仰せられけるこそ、なか〳〵哀れに覺えし。東大寺の石聖

(一)惠心僧都。源信をいふ。天台宗。比叡山に居り學德後世にひゞく。寬仁元年七十六にて寂す。「往生要集」其他百五十餘部の著書あり。

(一)淨名居士。惟摩居士のこと。
(二)上宮聖靈。聖德太子。
(三)常觀房。眞言宗の僧。大和の三輪に居る。寂年不詳。
(四)陀羅尼。お經の呪文のこと。

かの迹をまなび給ふべし。天竺の釋迦、(一)淨名居士、漢土の孔老、和國の(二)上宮聖靈、これみな和光の慈悲、甚深の化儀なり。たゞ神明と同じき也。

四、神明慈悲を貴び給ふ事

和州の三輪の上人、(三)常觀房と申しゝは、慈悲ある人にて、密宗を旨として、結緣のために普く眞言を人にさづけられけり。或時たゞ一人、吉野へ詣られける路のほとりに幼きもの兩三人ならび居てさめ／＼と泣きければ、なにとなく哀に覺えて、「何事になくぞ」と問ふに、十二三計なる女子申しけるは、「母にて候者、わろき病をして死して侍るが、父は遠くあるきて候はず、人はいぶせき事に思ひて、見弔ふ者もなし。我身は女子なり。弟どもは、云がひなく幼く候。たゞ悲しさのあまりに、なくより外の事侍らはず」とて涙もかきあへず。誠に心の中さこそと哀れに覺えければ、今度の物詣を止りて、これを見助けて、何時にても又參りなんと思ひて、便宜ちかき野邊へもちてすてつゝ、(四)陀羅尼なんど唱へて弔ひて、さて三輪の方へ歸らんとすれば、身すくみて働かれず、「あはれ思ひつる事よ、垂跡の前はきびしき事と知りながら、かゝる事をしつる時に、神罰にこそ」と、

（一）役の行者。役の小角といふ。修驗道の開祖。文武帝頃の人。

昔（一）役の行者、吉野の山上におこなはれけるに、釋迦の像現じ給へるを、「此の御形にては此の國の衆生は化し難かるべし。かくれさせ給へ」と申されければ、次に彌勒の御形現じ給ふ。「猶これもかなはじ」と申されける時、當時の藏王權現とておそろしげなる御形を現じ給ける時、「此こそ我國の能化」と申し給ひければ、今に跡を垂れ給へり。釋尊、劫盡の時は夜叉となりて無道心の者をとり食うて、人をすゝめて道心を起さしめ給ふもこの心なり。行人の信心ふかくして心を一つにし、愼み敬ふこと實ある時、利益にあづかる。我國の風儀、神明はあらたに賞罰有る故に信敬を厚くし佛菩薩は理に相應して、遠き益はありと雖ども、和光の方便よりも穩かなるまゝに、愚なる人、信をたつる事すくなし。諸佛の利益も、苦ある者にひとへに重し。されば愚癡のやからを利益する方便こそ實に深き慈悲の色こまやかなる善巧の形なれば、青きことは藍よりいでゝ藍よりも青きがごとく、尊き事は佛よりいでゝ佛よりも尊きは、たゞ和光神明の慈悲利益の色なるをや。古德の寺を建立し給ひ、かならず先づ勸請神をあがむるも、和光の方便をはなれて佛法たちがたきにや、彼の僧正の意樂、かゝるおもむきにこそ。心あらん人、

る、無盡の莊嚴、恒沙の德用をあらはすなり。信心まことありて、我が三業、佛の三業に相應する時は、行人即ち佛と成るなり。村上の御宇の事にや、内裏にて(一)五壇の法を修せられけるに、(二)慈慧僧正は中壇の阿闍梨にておはしけるが、御門ひそかに御覽じけるに、行法の中に不動になりて、本尊にすこしもたがひ給はず。(三)寛朝僧正は降三世の(四)阿闍梨にておはしけるが、或時は本尊となり、或時は僧正となりけり。御門これを御覽じて、「不便の事かな、寛朝は妄念の起れるにこそ」と仰せられける。余の僧は、只もとのごとし。經にいはく、「一切衆生みな如來藏なり。普賢菩薩、自體あまねき故に」と説きて、我等が全體法身なりといへども、差別は迷と悟との故なり。されば『不增不減經』には「即ち此の法身、五道に流轉するを説きて衆生と名く。即ち此の法身、六度を修行するを名けて菩薩となす。即ち此の法身、流に反して源を盡す。說いて名けて佛となす」といへり。いま垂跡を思ふに即ち此の法身、和光同塵を名けて神明となすとこそ心得られて侍れ。然るに本地垂跡、その意おなじけれども、機にのぞむ利益、暫く勝劣あるべし。わが國の利益は、垂迹のおもて猶すぐれてましますをや。そのゆゑは

(一)五壇の法。不動明王(中央)、降三世明王(東)、軍荼利明王(南)、大威德明王(西)、金剛夜叉明王(北)、を本尊として、兵亂鎭定、息災增益を祈禱する修行法。

(二)慈慧僧正。良源といふ。比叡山の座主。寛和元年七十四にて寂す。元三大師と呼ぶ。

(三)寛朝。東寺の長者。長德四年六十二にて寂す。

(四)阿闍梨。秘密法を修する高僧。一種の僧職の名。

流の身、ことに劣機にちかづきて、強剛の衆生を利する慈悲すぐれたり。されば(一)和光同塵こそ諸佛の慈悲の極なれと信じて、かくのごとく行儀異樣なれども、年久くしつけ侍る」とかたらる。善阿は誠に尊き御意樂なりと隨喜して歸りて、僧都に申しければ、「智者なれば愚の行業あらじと思ひつるに、あはせていみじく思ひはからはれたり」とて隨喜の涙をながされけるとなん。ふるき遁世上人かたり侍りき。されば智者大師の『摩訶止觀』をときて、「止觀とは、高尙の者は高尙し。卑劣の者は卑劣せん」との給へるがごとく、和光の垂跡をも、高尙の者は高尙すべきにこそ。密敎の深き意は、十界みな無相法身の所現なれば、炎魔の身も、毗盧の形も、實には(二)四種法身を備へ、五智無際智を具せり。其の內證に入れば、炎魔鬼畜の身をあらためずして、自性法身の心地を開きぬべし。されば古德の云はく、「阿鼻の依正は全く極聖の自心に處し、毗盧の身土は凡下の一念を踰えず」と。また三種の即身成佛とは、理具の成佛とは、人々もとこれ佛なり、我執によりてあらはれず、諸佛は顯得の成佛をとげて、自在に利益をほどこし給ふ。加持の成佛とは、已成の佛の(三)三業の妙用をまなびて、增上緣として、我が心に具足す

(一)和光同塵。佛が光をやはらげて塵の世界に形を同じくする。神となること。

(二)四種法身。自性法身、受用法身、變化法身、等流法身。

(三)三業。身口意の三業。

地より十界の身を現じて衆生を利益す。妙體の上の妙用なれば、水をはなれぬ波のごとし。眞如をはなれたる縁起なし。『寶藏論』にいはく、海の千波を涌す、千波即ち海水也と。然れば西天上代の機には佛菩薩の形を現じてこれを度す。我國は粟散邊地也、剛强の衆生因果をしらず、佛法を信ぜぬたぐひには、同體無緣の慈悲によりて(一)等流報身の應用を垂れ、惡鬼邪神の形を現じ、毒蛇猛獸の身をしめし、暴惡のやからを調伏して佛道に入れ給ふ。されば他國有緣のみをのみ重くして、本朝相應のかたちを輕しむべからず。我朝は神國として(二)大權迹をたれ給ふ。又我等みなかの孫裔也。氣を同じくする因緣あさからず。此の外の本尊をたづねば、却つて感應へだゝりぬべし。仍て(三)機感相應の和光の方便を仰いで、出離生死の要道を祈り申さんにはしかじ。金をもつて人畜の形をつくる、形をみて金をわするれば勝劣あり金を見て形をわするゝ時は異なる事なきがごとし。法身無相の金をもつて(四)四重圓壇(五)十界隨類の形をつくる。形をわすれて體を信ぜば、いづれか法身の利益にあらざる。智門は高きをすぐれたりとし、悲門は降れるを、妙なりとす。底き人のたけくらべは、底きをかちとするが如し。大悲の利益は等

によつて本性の德をはたらき現すを修德といふ。
(一〇)普現色身。あまねく色身を現ずとよむ。無色無形の法身佛が、衆生濟度のために形ある佛身となること。
(一)等流報身の應用。形なき法身佛がそのまゝ流れ下つて形を報いあらはした佛の適應なるはたらき。
(二)大權。佛が權(カリ)に神とあらはれたるをいふ。大は敬語。
(三)機感。衆生の根機に感應すること。
(四)四重圓壇。胎藏界曼荼羅の圖式に四重あるをいふ
(五)十界。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛。

見奉れ。いかなる御行にか」と申しければ、「進みても申したく侍るに、問ひ給へることそ本意なれ。我身には顯密の聖教をまなびて、出離の要道を思ひはからふに、自力よはく智品あさし。勝緣の力をはなれては、出離の望とげがたし。よつて都の中の大小の神祇は申すに及ばず、邊地邊國までも聞き及ぶにしたがひて、日本國中の大小の諸神の御名を、書きたてまつりて、此一間なる所に請じ置き奉りて、(一)『心經』三十卷、(二)神呪なんど誦して(三)法樂に備へて、出離の道、偏へに和光の御方便を仰ぐほか、別の行業なし。其故は大聖の方便、國により機に隨つてさだまれる準なし。聖人は常の心なし、萬人の心をもつて心とすと云ふが如く、法身は定れる身なし、萬物の身をもつて身とす。『肇論』にいはく、佛は非天非人の故に能天能人なり。然れば(四)無相の法身、(五)所具の十界、みな一智(六)毗盧の全體なり。天台の心ならば、(七)性具の三千、十界の(八)依正、みな法身所具の萬德なれば、(九)性德の十界を修德にあらはして。(一〇)普現色身の力をもつて、九界の迷情を度す。また密教の心ならば、四重曼荼羅は法身所具の十界也、內證自性會の本質をうつして、外用大悲の利益をたる。顯密の意によりて計り知りぬ。法身

(一)『心經』。『般若心經』の略。
(二)神呪。陀羅尼のこと。
(三)法樂。佛法を味ひ樂しむこと。
(四)無相の法身。色形なきさとりの佛身。
(五)所具の十界。全宇宙に具はれる地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛をいふ。
(六)毗盧。毗盧遮那の略。大日如來のこと。
(七)性具の三千。あらゆるものゝ本性に先天的に具はつてをる總べてのもの。一物に萬物の性を具へてをることをいふ。
(八)依正。自己が正しき果報として受けたる肉體精神を正報といひ、この正報の依り住む山河大地等を依報といふ。
(九)性德修德。本性に具はりて未だはたらかざる德を性德といひ、修行

ふ。さて金を三兩負の中より取り出でゝ奉らる。やがて彼の俗の家に宿して、社頭の樣なんど、こまかに問ひ給ひけり。「我今度、生死を(一)出離せずして人間に生まれば、當社の神官と生まれて、和光の方便を仰ぐべし」と誓かひ給ける」と語り侍りき。かの經基に親しき神官が語りしかば、慥の事にこそ。年久しくなれりと雖ども、此のこと耳の底に留まりて忘れず。よつて之を記す。

三、出離を神明に祈る事

三井寺の(二)長吏、(三)公顯僧正と申しは、(四)顯密の明匠にて道心ある人と聞えければ、高野の(五)明遍僧都、かの行業おぼつかなく思はれけるまゝに、善阿彌陀佛といふ遁世聖を語らひて、彼の人の行儀を見せらる。善阿、僧正の坊へまゐる。高野日笠に脛高なる黑衣きて、異樣なりけれども、「しか〳〵」と申し入れたりければ、高野聖と聞いてなつかしく思はれけるにや、ひたひつきしたるけゐによび入れて、高野の事、後世の物語なんど、通夜せられけり。さてその朝、淨衣き、幣もちて、一間なる所の帳かけたるに向ひて、所作せられければ、善阿思はずの作法かなとみけり。三日が程かはることとなし。さて事の體能々みて、「朝の御所作こそ異樣に

(一)出離。迷の世を出で、煩惱を離れること。さとること。

(二)長吏。一寺の主長僧三井寺の長吏は貞觀元年、圓珍が勅任せられしに始まる。

(三)公顯。安藝守顯康の子。比叡山の座主となり、建久四年八十四にて寂す。

(四)顯密。顯敎と密敎。あらはに說ける敎と、祕密に說ける敎。

(五)明遍僧都。眞言宗の僧、藤原通憲の子、高野山に居りて三十年山を下らず念佛す。元仁元年八十三にて寂す。

同じき神官の語りしは、「故笠置の上人、(一)菩提心祈請のために八幡に參籠す。示現に「我力にははかなひがたし。太神宮へ參りて申し給へ」と、夢のうちに御告ありて、道の樣くはしく敎へさせ給ひけり。さて夢のうちに參り給ひけるほどに、外宮の南の山をすぐに越えて參り給ふ。山の頂に池あり。大小の蓮華、池にみちたり。或は開きたる花、つぼめる花、色香まことに妙なり。かたはらに人ありていふやう、「此蓮華は當社の神官の、既に往生したるは開きたり。往生すべきはつぼめり。和光の方便にて、多くは往生するなり。あのつぼめる蓮華の大きなるは、經基の禰宜と申すが往生すべき花なり」と語る。さて御社へ參りて、(二)法施たてまつるとぞ見給ひける。夢さめて。やがて負うちかけて、只一人、夢にまかせて參り給ふに、少しもみちすがら夢にたがはず。たゞし外宮の南の山の麓をめぐりて、大道ありて山の路はなし。これのみぞ違ひたりける。社壇の體は夢にたがはず。さて若き(三)俗の有りけるを招きよせて、まづ夢にみし禰宜のことを問ひ給ふ。「これに經基と申す禰宜やおはする」とのたまふに、「某甲こそ、さは名のり候へ。禰宜にはなるべき者にて候へども、當時は禰宜にては侍らず」とい

(一)菩提心。菩提は梵語、覺と譯す。佛のさとりを求める心を菩提心といふ。

(二)法施。經文を讀みて佛法を傳へ施すこと。

(三)俗。俗人の略。在家の人を云ふ。

ば生死を共にいむべしとこそ、申しつたへ侍れといひき。誠に不生不滅の(一)毘盧遮那法身の内證を出でて、愚癡顛倒の(二)四生の群類を助けんと、跡を垂れ給ふ本意、生死の流轉をやめて、常住の佛道に入らんと也。されば生をも死をも忌むと云ふは、愚にくるしき流轉生死の妄業を造らずして、妙なる佛法を修行し、淨土(三)菩提を願へとなり。まことしく佛道を信じ行はんこそ、太神宮の御心にかなふべきに、たゞ今生の榮花を思ひ、福德壽命を祈り、執心ふかくして物を忌み、都て道心なからんは、神慮にかなふべからず。然れば(四)本地垂跡その御形ことなれども、其の御意かはらじかし。漢朝には佛法を弘めんために、儒童、迦葉、定光の三人の菩薩、孔子、老子、顏回とて、先づ外典をもつて人の心を和げて、後に佛法流布せしかば、人みなこれを信じき。我朝には(五)和光の神明、まづ迹をたれて、人のあらき心をやはらげて、佛法を信ずる方便とし給へり。本地のふかき利益を仰ぎ、和光のちかき方便を信ぜば、(六)現生には息災安穩の望をとげ、(七)當生には無爲常住の悟を開くべし。我國に生を受けん人、此意を辨ふべきをや。」

二、笠置の(八)解脫房上人、太神宮參詣の事

(一)毘盧遮那法身。大日如來のこと。

(二)四生。胎生、卵生、濕生、化生。

(三)菩提。梵語、覺と譯す。佛のさとりをいふ。

(四)本地垂迹。本地の佛が、かりの形をあらはすこと。

(五)和光の神明。神は佛が本地の光を和げて位を下れるゆゑに云ふ。

(六)現生。此の世一生。

(七)當生。當に來るべき一生。來生。

(八)解脫上人。貞慶といふ。法相宗の僧、山城笠置山に居る。建保元年五十九歲にて寂す。

れ。かの內證の都を出でて、日域に迹をたれ給ふ故に、內宮は胎藏の大日、(一)四重曼荼羅をかたどりて、玉垣、瑞籬、疎垣なんど重々也。鰹木も九つあり。胎藏の(二)九尊にかたどる。外宮は金剛界の大日、或は阿彌陀とも習ひ侍る也。然れども、金剛界の(三)五智にかたどるにや。月輪も五つあり。胎金兩部、陰陽に官どる時、陰は女、陽は男なる故に、台には(四)八葉にかたどりて、八人女とて八人あり。金は五智の男に官どりて、五人の神樂人といへるは此故なり。又御殿の茅葺なることも、御供のたゞ三杵つきて黑きも、人のわづらひ、國のついえを思食す故なり。鰹木も直に、垂木も曲らぬは、人の心を直ならしめんと思食す故なり。されば心すなほにして民のわづらひ國の費を思はん人、神慮にかなふべきなり。しかも當社の神官は、自然に梵網の十重を持てるなり。人を殺害しぬれば、ながく氏をはなたる。(五)波羅夷罪の佛子の數に入らぬがごとし。人を打ち、刄傷なんどしぬれば、解官せらる。輕罪に似たり。また當社に物をいみ給ふ事、餘社にすこしかはりて侍り。產屋をば生氣と申す。五十日忌む。また死せるをも死氣として同じく五十日忌み給ふ也。其故は死は生より來る。生はこれ死の始め也。され

(一)四重曼荼羅。大曼荼羅、三昧耶曼荼羅、法曼荼羅、羯磨曼荼羅。

(二)九尊。胎藏界曼荼羅の中台八葉院の九尊。大日如來、寶幢佛、開敷華王佛、阿彌陀佛、天鼓雷音佛、普賢菩薩、文殊菩薩、觀音菩薩、彌勒菩薩。

(三)五智。法界體性智、大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智。

(四)八葉。前出の九尊のうち、大日如來を除く四佛四菩薩の居たまふ所、八葉の蓮華をかたどる。

(五)婆羅夷罪、極惡罪と譯し、これを犯せば僧をやめられ、死して阿鼻地獄に墮つ。

をば染紙、僧をば髮長、堂をばこりたき、なんどいひて、外には佛法をうとき事にし、內には三寶を守り給ふ事にてましますゆへに、我國の佛法、ひとへに太神宮の御守護によれり。

當社は本朝の諸神の父母にてまします也。素盞嗚尊、天津罪を犯し給ひしことを、にくませ給ひて、㈡天の巖戶を閉ぢて隱れ給ひしかば、天下常闇になりにけり。八萬のもろ〳〵の神達かなしみ給ひて太神宮をすかし出だし奉らんために、庭火をたきて神樂をし給ひければ、御子の神達の御遊ゆかしく思食して、岩戶を少しひらきて御覽じける時、世間あきらかにして、人の面みえければ、「あら面白し」といふ事は其時いひ始めたり。さて太力雄尊と申す神、抱き奉りて、岩戶に木綿を引いて、この中へは入らせ給ふべからずとて、やがて抱き出だし奉りてけり。遂に日月となりて天下をてらし給ふ。日月の光にあたるも當社の恩德也。都ては大海の底の大日の印文より事おこりて、內宮外宮は㈠兩部の大日とこそ習ひ傳へて侍れ。天の巖戶といふは㈡都率天なり。たかまの原とも云へり。神代の事、みな由あるにこそ。眞言の意には、都率をば㈢內證の法界宮密嚴國とこそ申すな

㈠兩部の大日。金剛界の大日如來と胎藏界の大日如來とをいふ。金剛界とは智法身、胎藏界とは理法身也。
㈡都率天。欲界六天の第四天。この天にある天人の壽命は五十七億六百萬歲といふ。彌勒菩薩こゝにありて說法せり。
㈢內證の法界宮密嚴國。大日如來の內心にさとれる淨土のことで、宇宙法界にゆきわたれる秘密莊嚴の國をいふ。

(一)三寶。佛寶、法寶、僧寶。佛と、その說ける法と、これを信ずる僧とは、世の精神界の寶ゆゑ三寶といふ。
(二)大日の印文。大日如來の內證をあらはせる形のもの。大日如來は密敎の本尊なり。
(三)第六天。欲界六欲天の最上位にある他化自在天のこと。

沙石集卷第一

無住禪師

一、太神宮の御事

去ぬる弘長年中に太神宮へ詣でゝ侍りしに、或神官の語りしは、「當社に(一)三寶の御名を忌み、御殿近くは僧なんども詣らぬ事は、昔この國未だなかりける時、大海の底に(二)大日の印文ありけるによりて、太神宮御鉾をさしいれて探り給ひける。其鉾の滴り、露のごとくなりける時、(三)第六天の魔王はるかに見て、この滴、國となりて、佛法流布し、人倫生死をいづべき相ありとて、うしなはんために下りけるを、太神宮、魔王に行きむかひ遇ひたまひて、「われ三寶の名をもいはじ、我身にも近づけじ、とく〳〵歸り上り給へ」と、こしらへ給ひければ歸りにけり。その御約束をたがへじとて、僧なんど御殿近くまゐらず、社壇にしては經をも、あらはには持たず、三寶の名をも、正しくいはず、佛をば立ちずくみ、經

らず、修すれば萬行の旨みな同じき者をや。是の故に、雑談の次に教門をひき、戯論の中に解行を示す。此を見ん人、拙き語をあざむかずして、法義をさとり、うかれたる事をたゞさずして、因果をわきまへ、生死の郷をいづる媒とし、涅槃の都に、いたるしるべとせよとなり。是れ則ち愚老が志のみ。彼の金を求むる者は、沙をあつめて是れをとり、玉を翫ぶ類は、石をひろひて是れを瑩く。仍て『沙石集』と名く。巻は十にみち、事は百にあまれり。時に弘安第二の暦、三伏の夏の天、集レ之。

林下貧士無住

沙石集序

夫れ麁言軟語、みな第一義に歸し、治生産業、しかしながら、實相にそむかず。然れば狂言綺語のあだなる戯を縁として、佛乘の妙なる道に入れ、世間淺近の賤しき事を譬として、勝義の深き理を知らしめんと思ふ。是故に、老の眠をさまし徒なる手ずさみに、見しこと、聞きしこと、思ひ出づるに隨つて、難波江の、よしあしをもえらばず、藻鹽草手にまかせて、かきあつめ侍り。かゝる老法師は、無常の念々におかす事を覺り、冥途の歩々に、ちかづく事を驚いて、黃泉の遠き路の粮をつゝみ、苦海の深き流の船をよそふべきに、徒なる興言をあつめ、虚しき世事を注す。時にあたつては光陰ををしまず、後にをいては賢哲をはぢず、由なきに似れども、愚なる人の、佛法の大なる益をもさとらず、和光の深き心をもしらず、賢愚の品ことなるをもわきまへず、因果の理さだまれるをも信ぜぬために、或は經論の明なる文を引き或は先賢の殘せる誡を載す。夫れ道に入る方便一つにあらず、悟をひらく因緣これ多し。其の大なる意を知れば、諸教義ことな

第拾卷

第九卷

第八卷

第七卷

第六卷

第五卷

第四卷

第三卷

沙石集總目次

第一卷

第二卷

品の人は一の疊一の蓆なり。故に(一)巨畝の地價はこれ我れ等が分にあらず、萬餘の(二)食封は是れ我れ等が分に非ず、僧統檢する所の天下の伽藍は、是れ我れ等が房にあらず、大師釋迦、多寶分身の來り集まる日、文殊の問に答へて聲聞を求むる者を問訊することを許さず、共に一の講堂の中に住することを許さず、共に一の(三)經行する處に行くことを許さず。是を以て、食を朝來に乞ひ、(四)撮飯を受けて山中の飢ゑたる口に供じ、檀を秋節に行じ、(五)寸布を納めて雪下の裸身に著けよ。衣食の外、更に望む所なかれ。但だ(六)出假利生の者は除かんのみ。

傳教大師臨終遺告 終

(一)巨畝の地價。廣き屋敷。
(二)食封。扶持なり。
(三)經行。經を讀み修行すること
(四)撮飯。さばの飯。
(五)寸布。小さき布。
(六)出假利生。菩薩の修行。

また我が同法は、第一に(一)階を定めよ。先づ大乘戒を受くる者は先に坐し、後ちに大乘戒を受くる者は後ちに坐せよ。若し(二)會集する日、一切の所には、内には菩薩の行を秘し、外には聲聞の像を現はして、(三)沙彌の次に居るべし。他より讓らるる者は除く。

第二には用心なり。初に(四)如來の室に入り、次に(五)如來の衣を著、終りに(六)如來の座に坐せよ。

第三には充衣なり。上品の人は路側の淨衣、中品の人は東土の(七)商布、下品の人は乞ひ索めて得るまゝの衣。

第四には(八)充供なり。上品の人は求めずして自ら得たる食、中品の人は清淨に乞ひ得たる食、下品の人は(九)嚫施せらるる者を受くべし。

第五には(一〇)充房なり。上品の人は小竹の圓房、中品の人は方丈の(一一)圓室、下品の人は三間の板屋たるべし。房を造るの料、修理の分は、秋の節に(一二)檀を行ぜよ、諸國は一升の米、城下は一文の錢。

第六には(一三)充臥具なり。上品の人は小竹藁等、中品の人は一の蓆一の薦、下

(一)定階。階級を定むること。
(二)會集。寄り集ること。
(三)沙彌。出家の男子にして未だ大比丘僧に至らざるもの。
(四)如來の室。佛は慈悲を室となす。
(五)如來の衣。佛は忍辱を衣となす。
(六)如來の座。佛は諸法空を座となす。
(七)商布。商人より買ふ衣服。
(八)充供。食料にあつるもの。
(九)嚫施。布施と同じ。
(一〇)充房。住居にあつる處。
(一一)圓室。あばら屋。
(一二)檀。具には檀那と云ふ、布施行乞なり。
(一三)充臥具。寢道具。

傳教大師臨終遺告

傳教大師

弘仁十三年夏四月、諸の弟子等に告げて言く、

我が命、久しく存せざらん。若し我れ滅して後ち、みな俗服を著ること勿れ。また我が(一)同法、佛の制し給へる戒に依て、酒を飮むことを得ざれ、若しこれに違ふ者は、我が同法にあらず、また佛の弟子にもあらず、早速に擯出して、(二)山家の界地を踐ましむることを得ざれ。若し藥に合す爲にもせよ、山院に入ることなかれ。

また女人の輩を、寺の側に近づくることを得ざれ、いかに況んや、院內淸淨の地にをや。

また我れ生れしよりこのかた、口に(三)麤言なく、手に(四)笞罰せず。今我が同法、童子を打たざれば、我れ大恩とせん、努めよや努めよや。

(一)同法。法義を同ふする者、今は弟子、末徒の意。
(二)山家の界地。叡山結界の地。
(三)麤言。あらあらしき言葉。
(四)笞罰。むちを以て打つこと。

未だ(一)般若の心を得ざるよりこのかた、世間人事の縁務に著かず。相似の位を除く。其四

三際の中間、修する所の功德、獨り己が身にのみ受けず、普ねく(二)有識に回らし施して、悉く皆な無上菩提を得せしめん。其五

伏して願はくは、解脱の味ひ獨り飮まず、安樂の果獨り證せず、法界の衆生と同じく妙覺に登り、法界の衆生と、同じく妙味を服せん。若しこの願力に依りて六根相似の位に至り、若し(三)五神通を得ん時、必ず自度を取らず、正位を證せず、一切に著せざらん。願はくは、必ず今生無作無緣の(四)四弘誓願に引導せられて、周ねく法界に旋らし、遍ねく(五)六道に入り、佛國を淨め、衆生を成就し、未來際を盡くすまで、恒に佛事を作さんことを。

傳教大師願文 終

(一)般若。淸淨なる智慧。

(二)有識。有情に同じ。

(三)五神通。天眼通、天耳通、宿命通、他心通、神足通。

(四)四弘誓願。衆生無邊誓願度、煩惱無數誓願斷、法門無盡誓願知、佛道無上誓願證。

(五)六道。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天道。

り。因なくして果を得ることは、是の處りあることなく、善なくして苦を免るゝことは、このことわり有ることなし。伏して己が行迹を尋ね思ふに、無戒にして竊かに(一)四事の勞を受け、愚癡にしてまた四生の怨みをなす。この故に『未曾有因緣經』に云はく、「施す者は天に生れ、受くる者は獄に入る」と。(二)提韋女人の四事の供は、(三)末利夫人の福と表はれ、貪著利養の五衆の果は、石女擔轝の罪と顯はる。明かなるかな善惡の因果、誰の有慚の人か、この典を信ぜざらんや。然れば則ち、苦の因を知りて苦の果を畏れざるを、釋尊は(四)闡提と遮し給ひ、人身を得て徒らに善業を作さゞるを、聖教には空手と嘖め給へり。こゝに於て、愚の中の極愚、狂の中の極狂なる、(五)塵禿の有情、(六)底下の最澄、上は諸佛に違ひ、中ごろは皇法に背き、下は孝禮を闕けり。謹んで迷狂の心に隨ひ、三二の願を發す、(七)無所得を以て方便となし、(八)無上第一義の爲めに、金剛不壞不退の心願を發す。

我れ未だ(九)六根相似の位を得ざるよりこのかた、出假せず。其一

未だ理を照す心を得ざるよりこのかた、才藝あらず。其二

未だ淨戒を具足することを得ざるよりこのかた、檀主の法會に預からず。其三

(一)四事。飲食、衣服、臥具、湯藥。
(二)提韋。又は韋提希と云ふ、摩揭陀國頻婆娑羅王の后妃。
(三)末利。舍衛國波斯匿王の夫人。
(四)闡提。斷善根又は信不具と云ふ因果を信ぜず慚愧なき者を云ふ。
(五)(六)塵禿底下。身の賤しきを云ふ。
(七)無所得。心に執著なきを云ふ。
(八)無上第一義。佛の覺りを云ふ。
(九)六根相似位。煩惱を伏して六根清淨になる位。

傳教大師願文

傳教大師

悠々たる(一)三界、純ら苦にして安きことなく、擾々たる(二)四生、唯だ患のみありて樂しからず。(三)牟尼の日久しく隱れて、(四)慈尊の月未だ照らさず、(五)三災の厄に近くして、(六)五濁の深きに沒む。しかのみならず、(七)風命保ち難く、(八)露體消え易し、(九)艸堂樂しみなしと雖ども、然も老少白骨を散らし曝らす、(一〇)土室闇く迫しと雖ども、而も貴賤魂魄を爭ひ宿す。彼れを瞻て己れを省みるに、この理必定せり、(一一)仙丸未だ服せざれば、遊魂留め難く、(一二)命通未だ得ざれば、死する辰何つとか定めん。生ける時善を作さずんば、死する日獄の薪とならん。得難くして移り易きは、それ人身なり、發し難くして忘れ易きは、これ善心なり。是を以て(一三)法皇の牟尼は、大海の針、妙高の線を假りて、人身の得難きを喩況し、古賢の(一四)禹王は一寸の陰、半寸の暇を惜みて、一生の空しく過ぐることを歎け

(一)三界。欲界、色界、無色界。
(二)四生。胎生。卵生、濕生、化生。
(三)牟尼。釋迦牟尼佛の略。
(四)慈尊。當來の彌勒佛。
(五)三災。火災、水災、兵災。
(六)五濁。劫濁、衆生濁、見濁、煩惱濁、命濁。
(七)(八)風命露體 吾人の生命身體の無常なるを云ふ。
(九)(一〇)草堂土室。吾人社會の苦しきを云ふ。
(一一)仙丸。長壽の藥。
(一二)命通。三命六通。
(一三)法皇。佛のこと。
(一四)禹王。支那夏の時代の王。

(一)六度。布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧。
(二)自然。涅槃のさとりをいふ。
(三)稽首。稽は至で、頭を地につけて禮拜すること。
(四)天中天。天中の天。佛のこと。
(五)歸命。勅命に歸順する。佛のみことに順ふこと。
(六)六情。眼、耳、鼻、舌、身、意のおもひ。
(七)三世。過去、現在、未來。
(八)八難。地獄、畜生、餓鬼、長壽天、北鬱單越州に生るゝこと、及び盲聾、瘖瘂、世智辯聰、生佛前佛後のものは、佛法を聞信する能はざる難あるをいふ。

慈みて衆邪に墜ち　深淵に流沒するを傷み
勉進して(一)六度を以て　修行して(二)自然に致りたまへり
是の故に(三)稽首し禮して　(四)天中天に(五)歸命したてまつる
人身すでに得がたし　人を得てまた欲を嗜み
意識を貪婬し　痛想厭足なければ
豫め後世の栽を種ゑ　歡喜して地獄に詣でん
(六)六情幸に完具せば　何ぞ爲めに自ら困辱せん
一切よく正心ならば　(七)三世の神吉祥に
(八)八難の貧に與からず　行に隨うて十方に生まれ
所生すなはち精進に　六度を橋梁となし
廣く勸む無極の慧　一切神光を蒙らん

佛說尸迦羅越六方禮經　終

(一)過度。過ぎわたる。
(二)解脱。迷を解き苦を脱れることさとること。
(三)三惡道。地獄、餓鬼、畜生。
(四)三界。欲界、色界、無色界とて迷界の總稱なり。
(五)宿命。前世より定められたる壽命。
(六)十二因。無明、行、識、名色、六處、觸、受、愛、取、有、生、老死の稱。迷の生涯の一周。

諸の生死を(一)過度し　(二)解脱せざるもの無からしめん
戒徳は恃怙すべく　福の應常に己に隨はん
法を現じて人の長となり　終に(三)三惡道を遠ざかり
愼み戒みて恐畏を除き　福徳(四)三界の尊たり
鬼神邪毒の害は　有戒の人を犯さず
俗に墮ちて世に生るゝは苦なり　命速なること電光の如し
老病死時に至り　對ひ來らば豪强なし
親しく恃怙すべきなし　處として隱藏すべきなし
天福尚ほ盡くるあり　人命豈に久長ならんや
父母家室の居るは　譬へば寄客の人の如し
(五)宿命の壽以て盡くれば　故を捨てゝ當に新を受くべし
各所作の行を追ひ　際なきこと車輪の如し
起滅罪福に從ふ　生死(六)十二因
身を現して遊んで亂を免れ　一切の人を濟育したまふ

(一)叉手。左手にて右手を把り、胸とやゝ離れしめて乳の高さに擧ぐる印度の禮法。

(二)泥犁。奈落とも書く。地獄と譯する梵語なり。

澡漱して心を淨からしめ　兩手に花香を奉ぜよ
佛尊は諸天に過ぎ　鬼神も當る能はず
頭を低げて塔寺を遶り　(一)叉手して十方を禮せよ
賢者の精進ならざるは　譬へば樹の根なきが如し
根斷だば枝葉落つ　何の時か當にまた連らん
華を採り日の中に著けば　能く幾の時か鮮ならんや
心を放にし自ら意を縱にすれば　命過また何ぞ言はんや
人當に非常を慮るべし　對ひ來るに期あることなし
過を犯して自ら覺らざれば　命過自ら欺くとなす
今當に(二)泥犁に入るべし　何時の時か出づる期あらん
賢者、佛語を受け　戒を持ち愼みて疑ふこと勿れ
佛は好き華の樹の如し　愛樂せざるもの無けん
處々の人民聞きて　一切みな歡喜ぶ
我をして佛を得しめんとき　願はくは法王の如くならしめよ

(一)度世。迷の世をわたり超えること。
(二)布施。ほどこし。
(三)持戒。戒律をまもること。
(四)忍辱。たへしのび。
(五)精進。勉強。
(六)黠慧。黠も慧も共に智慧のこと
(七)唄偈。唄も偈も梵語にて、頌と譯す。讃歌のこと。

一には善心をもつて之に向へ。二には好言を擇びて與に語れ。三には身をもつて之を敬へ。四には當に之を戀慕すべし。五には沙門道士は人中の雄なり、當に恭敬承事して(一)度世の事を問ふべし。沙門道士も當に六意をもつて凡民を視るべし。一にはこれに(二)布施を教へて自ら慳貪なるを得ざらしめよ。二にはこれに(三)持戒を教へて自ら色を犯すを得ざらしめよ。三には人に(四)忍辱を教へて自ら恚怒を得ざらしめよ。四にはこれに(五)精進を教へて自ら懈慢なるを得ざらしめよ。五には人に一心を教へて自ら意を放にするを得ざらしめよ。六には人に(六)黠慧を教へて自ら愚痴を得ざらしめよ。沙門道士は、人に惡を去り善を爲すを教へて正道を開示す、恩、父母よりも大なり。」

「是の如く之を行ふをば、汝が父のゐます時の六向拜の教を知るとなすなり。何ぞ富まざるを憂へんや。」

尸迦羅越、即ち五戒を受け、禮をなして去きぬ。

佛、(七)唄偈を說きたまはく、

鷄鳴に當に早く起き　衣を被りて來て牀を下り

「北向拜とは、謂く、人、親屬朋友を視るに當に五事あるべし。一には之が罪惡を作すを見ば、私に(一)屏處に往いて諫め曉めて之を呵止すべし。二には小も急あらば、當に奔り趣いてこれを救護すべし。三には私語あらば他人の爲めに說くを得ず。四には當に相敬歎すべし。五にはあらゆる好物、當に多少も分つてこれを與ふべし。」

「地に向うて拜するとは、謂く、大夫の奴客婢使を視るにまた五事あり。一には當に時をもつて飯食と衣被とを與ふべし。二には病瘦すれば當に爲めに醫を呼びて之を治すべし。三には忘りに之を撾捶するを得ず。四には私の財物あらば之を奪ふを得ず。五には分付のもの、當に平等に使はしむべし。奴客婢使の大夫に事ふるにもまた五事あり。一には當に早く起きて大夫をして呼ばしむること勿れ 二には作すべきところは自ら心を用ひてこれを爲せ。三には當に大夫の物を愛惜して、乞匃の人にも棄捐するを得ず。四には大夫の出入には當にこれを送迎すべし。五には當に大夫の善を稱譽して、その惡を說くを得ず。」

「天に向うて拜するとは、謂く、人、(二)沙門(三)道士に事ふるに當に五事を用ふべし

(一)屏處。人に見えぬところ。

(二)沙門。桑門とも書く。梵語、勤息と譯す。善を勤め惡を息むるの意。出家僧のこと。

(三)道士。佛道修行の人。

「南向拜とは、謂く、弟子の師に事ふるに當に五事あるべし。一には當にこれを敬歎すべし。二には當にその恩を念ずべし。三には敎ふるところ之に隨ふ。四には思念厭はず、五には當に後に從うてこれを稱譽すべし。師の弟子に敎ふるにまた五事あり。一には當に疾く知らしむべし。二には當に他人の弟子に勝らしむべし。三には知りて忘れざらしめんと欲へ。四には諸の疑難こと〳〵くこれを解說すべし。五には弟子の智慧をして師に勝らしめんと欲へ。」

「西向拜とは、謂く、婦の夫に事ふるに五事あり、一には夫外より來らば當に起ちてこれを迎ふべし。二には夫出でゝ在らざれば當に當に炊蒸掃除してこれを待つべし。三には外に婬心あるを得ず、夫罵言せば還つて罵りて色を作すを得ず。四には當に夫の敎誡を用ふべし、あらゆる(一)什物を藏匿するを得ず、五には夫休息せば、蓋藏して乃ち臥するを得。夫の婦を視るにまた五事あり、一には出入婦を敬ふべし。二には之に飯食せしむるに時節をもつてし衣被を與へよ。三には當に金銀珠璣を給與すべし。四には家中の所有、多少も悉く用ひて之を付けよ。五には外に於いて邪に(二)傳御を蓄ふるを得ず。」

(一)什物。什はうつはもの。器物をいふ。

(二)傳御。妾使のこと。

東向物の意。

(二)經戒。御經と戒律。

る。二には人の前において言語を好くし、背後に說いて惡を言ふ。三には急あるとき人の前において愁苦し、背後に歡喜す。四には外に親厚の如くして內に怨謀を興す。」

「善知識にまた四輩あり。一には外に怨家の如くして內に厚意あり。二には人の前において直諫し、外において人の善を說く。三には病瘦して縣官し其れがために征總を憂へてこれを解く。四には人の貧賤をみて棄捐せず、當に方便を求めてこれを富ましめんと欲することを念ずべし。」

「惡知識にまた四輩あり。一には諫曉し難く、之に敎へて善を作さしむるが故に惡者と相隨ふ。二には之に酒を喜ぶ人と伴となるなかれと敎ふるが故に、酒を嗜む人と相隨ふ。三にはこれに自ら守るを敎へて益〻更に多事ならしむ。四には之に賢者と友たれと敎ふるが故に、博掩の子と厚をなす。」

「父母の子を視るにまた五事あり。一には當に念じて惡を去り善に就かしむべし。二には當に書疏を敎計すべし。三には當に(二)經戒を持つを敎ふべし。四には當に早く與に婦を娶るべし。五には家中の所有、當にこれを給與すべし。」

解きたまへ。」

佛のたまはく「これを聽き心の中に著けよ。それ長者⑴黠人ありて、能く四戒を持ち、犯さゞる者は、今世に人の敬ふところとなり、後世に天上に生まれん。一には諸の⑵群生を殺さず、二には盜まず、三には他人の婦女を愛せず、四には妄言兩舌せず、心に貪婬、恚怒、愚痴を欲はゞ自ら制して聽すなかれ。この四意を制する能はざる者は、惡名日に聞こゆること、月盡くるとき光明稍冥きが如し。能く自ら惡意を制すれば、月初めて生ずるに其の光稍明にして、十五日盛滿の時に至るが如き也。」

佛のたまはく「また六事ありて錢財日に耗減せん。一には飲酒を喜ぶ。二には⑶博掩を喜ぶ。三には早く臥し晩く起くを喜ぶ。四には客を請ずるを喜ぶ、また人をして之を請ぜしめんと欲す。五には惡知識と相隨ふを喜ぶ。六には憍慢して人を輕んじ、上頭の⑷四惡を犯す。この六事を行ひ、その善行を妨げ、また治世を憂ふるを得ずんば錢財日に耗減せん。六向拜すとも何の益すべきや。」

佛のたまはく、「惡知識に四輩あり、一には内に怨心ありて外に强いて知識とな

(一)黠人。黠は慧にて、智慧ある人のこと。

(二)群生。群がり生れるもの。衆生、有情に同じ。

(三)博掩。ばくち。

(四)四惡。本文の殺生等をいふ。

佛說尸迦羅越六方禮經

後漢安息國三藏安世高譯

佛、(一)王舍國(二)鷄山の中にましましき。時に(三)長者の子あり、尸迦羅越と名く。早く起きて頭を嚴り、洗浴して文衣を著け、東に向ひて四拜し、南に向ひて四拜し、西に向ひて四拜し、北に向ひて四拜し、天に向ひて四拜し、地に向ひて四拜す。佛、國に入りて(四)分衞し、遙にこれを見たまひ、往いてその家に到り、これに問ひたまはく、「何ぞ六向拜をなすや、これ何の法に應ずるや」と。

尸迦羅越言さく、「父いますとき、我に六向拜を敎へたまへり。何の應なるを知らず、いま父喪亡せり、敢へて後においてこれに違はざらんや」と。

佛のたまはく、「父、汝に敎へて六向拜せしむるは、身をもつて拜するにはあらざるなり。」

尸迦羅越、便ち(五)長跪して言さく、「願はくば佛、我がためにこの六向拜の意を

(一)王舍國。中印度摩迦陀國の都城。釋尊のころ頻婆娑羅王の築くところ。今のラージェギルの地に當る。
(二)鷄山。詳しく鷄足山といふ。摩迦陀國にありし山の名。今のクルキカルの北に當る。
(三)長者。富豪のこと。
(四)分衞。梵語なり。乞食と譯す。托鉢すること。
(五)長跪。跪いて敬禮すること。

り。原と漢文なれども讀者の便をはかりて和文とせり。覺鑁上人は肥前藤津の莊の出生にて、平將門の末葉なりと云ふ。累代武略を以つて聞え、父また勇名あり。母は橘氏にして四子あり、皆僧となる。上人は第三子なり。十四歳にて出家し、顯密二教を極め、鳥羽上皇の叡信を受く。紀州高野山に傳法院を建て、弘法大師の祖業を紹き法幢年と共に彌々高し。後、紀州根來山に移り、衆徒雲集す。世壽四十九にて寂す。元祿三年十二月興敎大師の謚號を賜ふ。

女人往生鈔　一卷

（日蓮上人撰）末法今時の女人、『法華經』の力に依らずんば、往生成佛の遂げ難きを明し、法相淨土等に寄せて、爾前敎の無得道を破し、法華の娑婆即寂光、本時同居土の往生を勸めたるもの。檀越の女性に書き贈りたるものならんか。著述の年次明かならず。一說に從へば建長五年の作なりと云へり。首尾缺くる處あり、完本に非ざるに似たり。

本願寺第三世覺如上人の輯錄とせり。

栂尾山明慧上人遺訓　一卷　（高信上人撰）本書は栂尾山高山寺、本願明慧房高辨上人平生の垂示を、文暦二年の夏、其の第三周忌に際し、上足神尾寺高信上人の、親しく同學の遺弟に正して纂集せるものにて、一に『阿留邊幾夜宇和』と云ふ。蓋し上人遺弟の恩師追懷錄とも云ふべきなり。上人諱は成辨、後に高辨と改む。性は平氏、紀伊の人なり。八歲にして父母を失ひ、高尾の文覺上人に依りて出家す。文覺常に人に語りて云はく、「身子目蓮、智慧神通は固に然り。その高潔なることはわが明慧に如かず」と。以つて其の人と成りを知るべきなり。後、南都に遊び、東大寺聖詮に從ふ。十九歲にして栂尾山に歸り、苦修練行して具さに身心を鍛ふ。後鳥羽上皇深く師を愛し、北條泰時また崇敬甚だ渥し。貞永元年壬辰正月十九日、世壽六十歲にて示寂す。遺著頗る多く、門弟に喜海、高信等數十人を出せり。

一期大要秘密集　一卷　（覺鑁上人撰）新義眞言宗の開祖覺鑁上人歲四十九、康治二年癸亥七月廿八日、俄かに風疾に染みて氣色勝れず、弟子長嚴房聖應深く之を憂ひて病氣平癒のために一七日間尊勝陀羅尼を修す。上人乃ち牀に坐して諸弟子に向ひ、生死無常の道理を說き、速疾成佛の證果を勸め、臨終正念密嚴往生の秘要を明す。是れ本集の來意にして又其の內容とする所な

に入り本書の作あり。天福元年、深草に興聖寺を開きて始めて佛祖正傳の禪風を擧揚す。寛元二年、檀越波多野義重の請に應じて、越前に傘松峯大佛寺を創し、四年六月永平寺と改稱す。後嵯峨上皇、深く其の德を欽し、勅使を遣はし、紫衣幷に佛法禪師の徽號を賜ふ。建長五年、最後の教訓を撰し、法席を上足孤雲に讓り、八月京都に入り、俗弟子覺念の家に投じ、同廿八日沐浴衣を整へて示寂す。世壽五十有四。孝明天皇佛性傳東國師の號を賜ひ、明治天皇重ねて承陽大師と追謚し給へり。

末燈鈔　一卷

（從覺上人編）本書は眞宗の開祖親鸞上人の法語消息十九章を編纂し、之に慶信房の問書を添附せるなり。上人歸洛の後は、邊州の門侶に對し、屢々筆を染めて垂教せり。玆に收むるものは即ち當時の消息文にして、編者從覺上人は本願寺の第三世覺如上人の次子にして、正慶二年の編纂なり。

御消息集　一卷

（覺如上人編）此の書は親鸞上人の消息文を纂集せるものにて、一本、十九章を編す。而も其の中の八章は『末燈鈔』に載するものと同一にして、其の文句に多少の相違を見るのみ。故に今日流布の一本には、彼の八章を沒して、餘の十一章を出せり。蓋し是れ後人の、『末燈鈔』との重複を避けんがために略去せるものと想はる。編者未詳なれども古人の傳ふる所、

臨濟禪宗の達人にして、諱は一圓、字は道曉、無住はその號なり。相州鎌倉の人。幼にして父を喪ひ、十九歳にて出家す。長樂寺、三井寺、奈良等に遊びて諸宗の奥旨を究め、後、洛東東福寺の聖一國師を禮して心印を授かる。文永の初め尾州木賀崎に長母寺を開きて敎禪兼ね弘む。藤相國、再三東福寺を董せんことを懇請すれども固辭して受けず。正和元年十月十日桑名蓮華寺に於いて遷化す。壽八十七。遺偈にいはく「一漚海に浮ぶ、八十七年、風林波靜かに、舊に依つて坦然」と。本書の他に『雜談集』五卷、『聖財集』三卷、『妻鏡』一卷、『念佛諸經要集』一卷の著あり。天文十五年、大圓國師と勅謚せらる。

普勸坐禪儀　一卷（道元禪師撰）

本書は、日本曹洞宗の高祖、永平寺道元禪師弘敎傳道最初の垂訓にして、宋より歸朝の年即ち安貞二年三十歳の製作に係る。全篇漢文七百五十有六字の小篇に過ぎずと雖も、禪師一代言敎の標榜綱維にして、又我が國佛祖正傳の坐禪を傳へたる唯一最初の撰述たり。

禪師諱は道元、法號希元、父は内大臣久我通親、正治二年正月二日京都に生る、八歳世の無常を觀じ、十三歳遁れて台宗の徒となり、後、建仁寺に千光國師に謁し、光の滅後上足明全に師事し、貞應二年入宋、天童に長翁如淨禪師を拜し其の法を得たり。在宋五年、歸朝して京都建仁寺

り。蓋し此の願文は大師の一生を貫徹せる信念の結晶にして熱烈眞摯の情言外に溢溢し、千歳の下なほ懦夫を起たしむるに足る。本書もと漢文に作れるも、一般に讀み易からしめんがために假名混り文に書き換へたり。

傳教大師臨終遺告　一卷（傳教大師撰）傳教大師、春秋五十六にして比叡山上の中道院に於いて入寂す。時に弘仁十三年六月四日なり。入寂に先だつこと月餘、自ら餘命の久しからざるを知り、諸弟子を集めて親しく遺誡せるが即ち今の一卷なり。遺誡十條の中、後の六條は諸子末弟の禪庵に住する法規を提唱せるものなるをもつて、殊に稱して禪庵式と云ふ。「我れ生れしより以上、口に麤言なく、手に笞罰せず、今我が同法、童子を打たざれば我れ大恩とせん」等の言、慈悲仁讓にして而も細心周到なりし大師の一面を知るに足るべし。大師が日本天台の大旆を樹て、南都諸宗の舊思想を拆き、新佛教の鴻基を樹立したる英雄的半面に、實に這箇精緻なる用意の存せりしなり。前の願文と對照して妙趣の轉た竭きざるを覺ゆ。

沙石集　八卷（無住禪師撰）本書はその自序に示せる如く「狂言綺語のあだなる戯を縁として、佛乘の妙なる道に入れ、世間淺近の賤しきことを譬として、勝義の深き理を知らしめん」がために、通俗平易の筆致をもつて、佛教の通義を物語風に記述せるものなり。著者無住禪師は、

解題

佛說尸迦羅越六方禮經　一卷

畧して『六方禮經』と云ふ。佛陀在世の昔、王舍城の一富豪の子、尸迦羅越のために六方禮の精神的意義を說けるものにて、六方とは東西南北上下のこと、即ち初めに善知識と惡知識とを擧げて擇友の利害を示し、更に父子、師弟、夫婦、朋友、主從、僧俗の遵守すべき條目を、次第の如く東西南北下上の六方に配當して明せり。義趣必ずしも高遠ならずと雖も、所說飽まで實踐躬行的にして、直に日常生活の指南とするに足る。本經のほかに支法度譯の『佛說善生子經』、瞿曇僧伽提婆譯の『中阿含經』卷第三十三大品善生經、佛陀耶舍、竺念佛共譯の『長阿含經』第十一善生經ありて文意大同小異なり。猶、巴利語の原本も現存し、英譯も二部まであり。以つて本經が如何に弘く後代の人心を利潤せるかを知るべし。

傳敎大師願文　一卷

（傳敎大師撰）日本天台の祖師傳敎大師最澄、延曆四年七月、生年十九にして單身比叡山に分け陟り、始めて、荊棘を拓いて自ら草菴を結び、禪觀の床に坐して靜かに思念を凝らす。幾千尺の山巓遠く人煙を絕し、萬籟聲を沒して獨り圓月の孤燈を揭ぐるあるのみ。大師の心念果して奈何なりしぞ。筆おのづから動いて一篇の文字を成せるが卽ち今の願文な

大日本風教叢書

第二輯